

行方春名社遺跡

北陸新幹線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1994

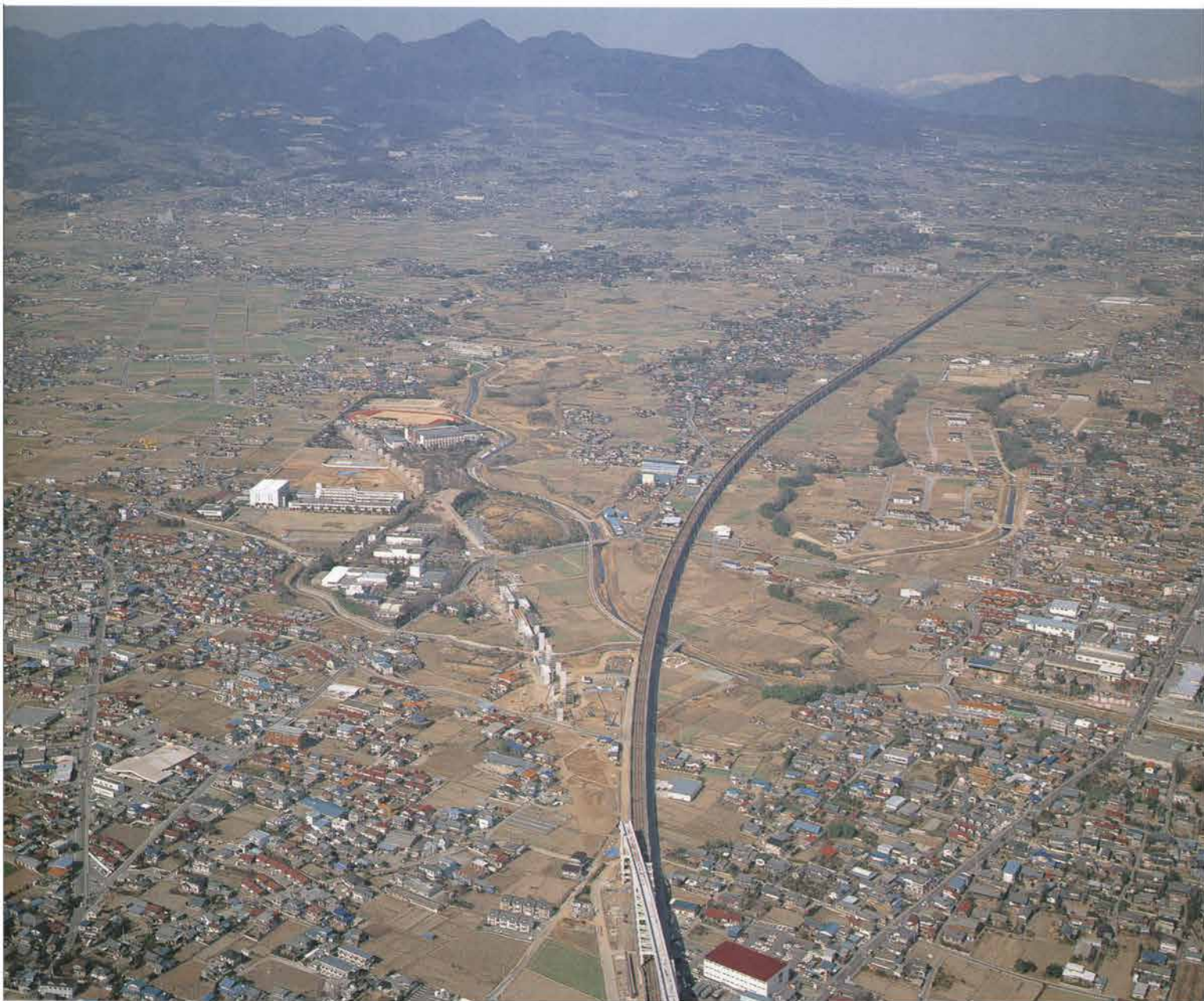
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

行方春名社遺跡

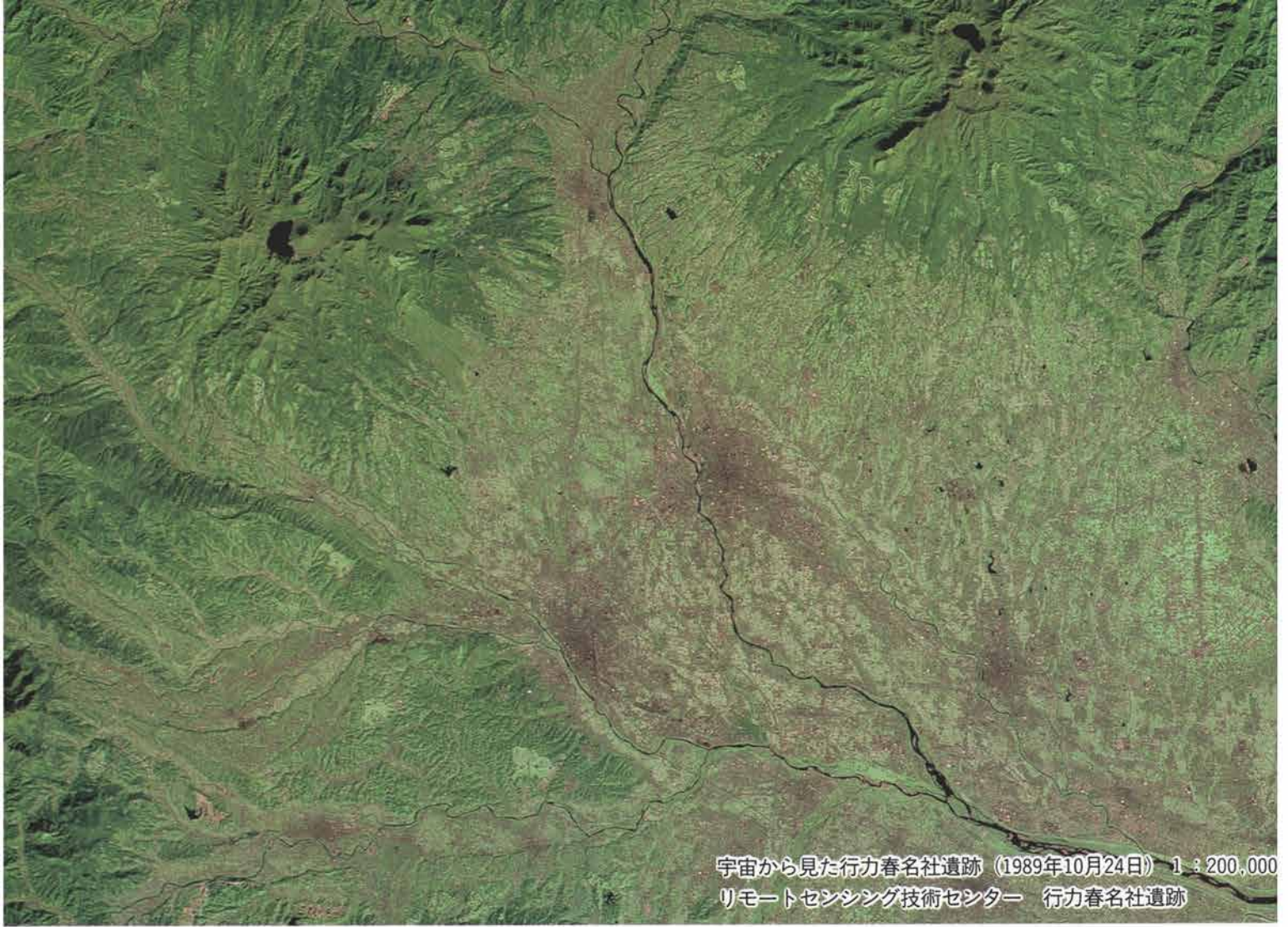
北陸新幹線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1994

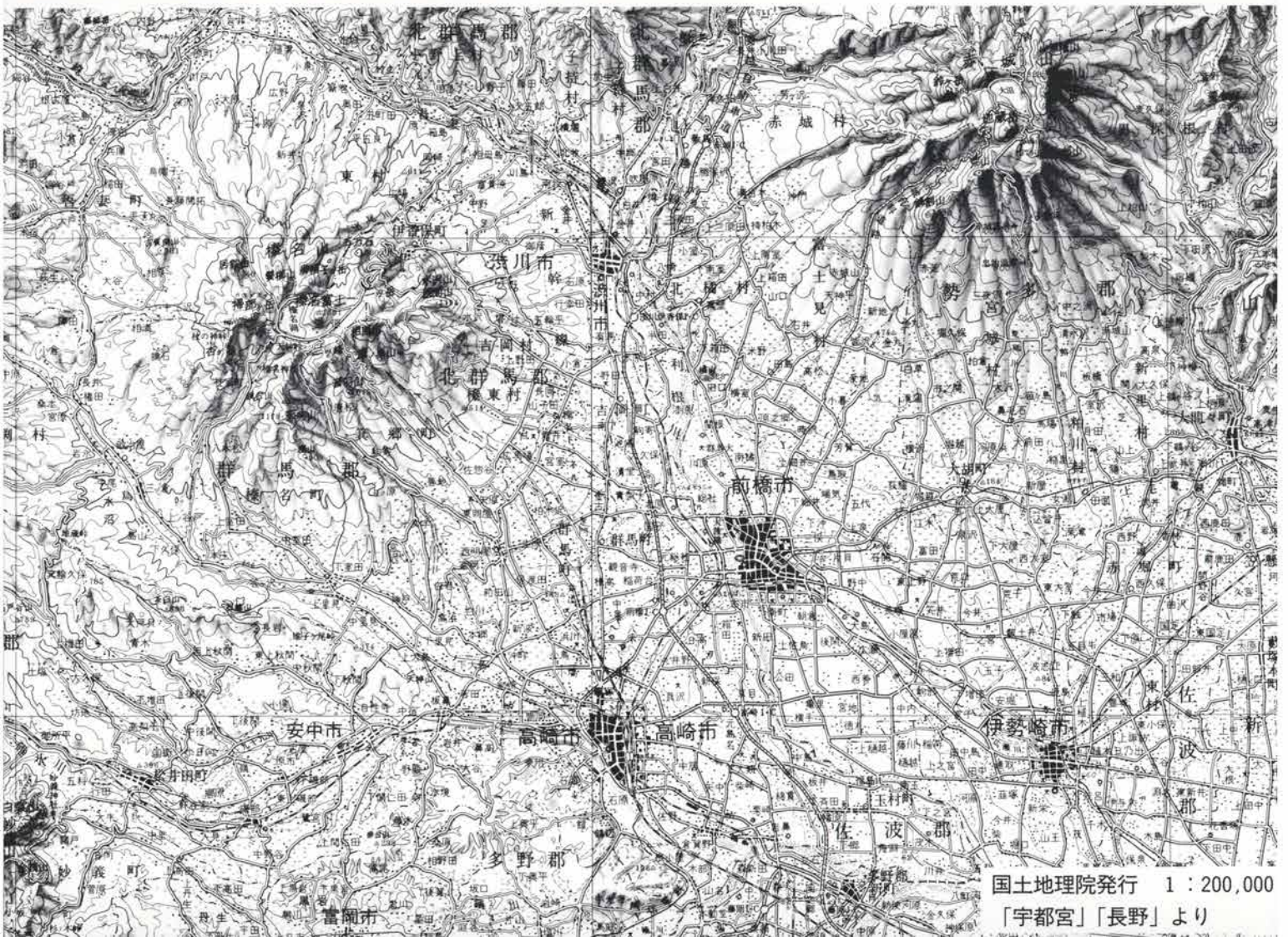
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団



開通から13年目を迎えた上越新幹線(右)と
現在建設中の北陸新幹線(左)



宇宙から見た行力春名社遺跡 (1989年10月24日) 1 : 200,000
リモートセンシング技術センター 行力春名社遺跡



国土地理院発行 1 : 200,000
「宇都宮」「長野」より



空から見た白川扇状地（北から）



泥流層下より検出された古墳時代中期の玉作工房址（北西から）



滑石台石 (1住-69・70)



紡錘車 (1住-97)



剣形未製品 (1住-104・106・105)



白玉 (3住-92・93)
左滑石・右ガラス

序

北陸新幹線は、上越新幹線の高崎駅より分岐して長野県長野市に至る延長117.4kmの新幹線で、平成7年の完成を目指して建設を進めています。群馬県は、高崎市、箕郷町、榛名町、安中市、倉渕村、松井田町の6市町村を通過します。高崎市、箕郷町の一部を除いては、丘陵地帯、山間地帯であり、ほとんどがトンネル通過となっています。トンネル以外の平地、丘陵地帯では、新幹線建設地内に埋蔵文化財包蔵地32箇所が確認されたため、工事着工前にこれら埋蔵文化財の記録保存を行うこととなり、群馬県教育委員会を経て当事業団に発掘調査が委託されました。

当事業団では、平成3年の2月より発掘調査が可能となった高崎市行力町に所在する行力春名社遺跡を嚆矢に、今年度まで精力的に調査を進めてまいりました。また、発掘調査と並行して、調査報告書刊行のために行力春名社遺跡ほか7遺跡の整理作業を今年度より行っています。このうち、行力春名社遺跡については整理作業が完了しましたので、北陸新幹線の埋蔵文化財発掘調査としては初めて発掘調査報告書を刊行することになりました。

行力春名社遺跡は、榛名山二ツ岳の爆発により生じた泥流により埋もれた地表下4m前後に、西暦6世紀頃の集落跡の存在が予想されたため、いかにして調査を行うかが大きな課題となりました。深所調査の安全対策、水対策、遺構確認等試行錯誤を繰り返しながら調査を行い、古墳時代中期の住居跡3軒をはじめ奈良時代、中世の各種遺構、遺物等、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。また、この遺跡の調査で得た資料は、高崎市浜川町、箕郷町下芝地区の泥流下の発掘調査に大いに役立ちました。

発掘調査から報告書刊行まで日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、箕郷町教育委員会、地元関係者の皆様にはご協力、ご指導を賜りました。また、発掘調査担当の職員には、泥流下の調査で難渋、切歯扼腕の思いをさせました。この度、行力春名社遺跡の発掘調査報告書を刊行するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史並びに火山災害の解明のために大いに活用されることを願い序とします。

平成7年3月

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、北陸新幹線建設に伴う事前調査として、平成2年度から平成3年度にかけて実施した「行力春名社遺跡」の発掘調査報告書である。報告書名は遺跡所在の町名と字名をとり、併せたものである。
2. 遺跡の所在地は、群馬県高崎市行力町字石田・春名社・春名社西にまたがる。
3. 発掘調査は北陸新幹線建設に伴う事前調査として、平成2年度に群馬県教育委員会を通じ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が日本鉄道建設公団の委託を受けて、平成2年度から平成3年度にかけて実施した。
4. 発掘調査期間は、平成3年2月4日～平成3年11月30日である。
5. 発掘調査組織は下記の通りである。

事務担当職員 常務理事 邊見長雄 事務局長 松本浩一 管理部長 田口紀雄(平2) 佐藤勉(平3)
調査研究部長 神保佑史 庶務課長 岩丸大作 調査研究第2課長 能登健(平2) 調査研究第1課長 真下高幸(平3) 庶務課主任 国定均 笠原秀樹 主事 小林昌嗣(平2) 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津茂(平3)

発掘担当職員 専門員 中束耕志 石塚久則(平3) 主任調査研究員 女屋和志雄(平3) 関根慎二(平2) 斉藤利明(平3) 調査研究員 小林徹(平3) 深澤敦仁(平3)

6. 整理事業は、平成6年度に群馬県教育委員会を通じ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、日本鉄道建設公団の委託を受けて実施した。
7. 整理期間は平成6年4月1日～平成6年9月30日である。
8. 整理事業組織は下記の通りである。

事務担当職員 常務理事 中村英一 事務局長 近藤功 管理部長 蜂巢実 調査研究部長 神保佑史 総務課長 斉藤俊一 調査研究第3課長 巾隆之 総務課係長代理 国定均 笠原秀樹 主任 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 主事 高橋定義

整理担当職員 調査研究員 深澤敦仁

嘱託員 鈴木幹子

補助員 手塚ふみ江 新平美津子 小淵トモ子 新井雅子 金子弘子 高野明美






9. 写真撮影は、遺構は各調査担当、遺物は佐藤元彦(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師)が行った。
10. 石材鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会所属)にお願いした。
11. 獣骨鑑定は宮崎重雄氏(群馬県立大間々高等学校教諭)にお願いした。
12. 金属・木製品の保存処理は関邦一(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師)・土橋まり子(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託)・小材浩一・小沼恵子(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)が行った。
13. 発掘調査及び本書作成にあたっては、次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。(敬称略)

石川正之助 石塚久則 岩崎泰一 小木宏 大江正行 大西雅弘 女屋和志雄 鬼形芳夫 金子智一 加部二生 唐澤至朗 神戸聖語 菊池実 黒沢照弘 小島敦子 斉藤利明 坂口一 清水豊 志村哲 下城正 杉山秀宏 関晴彦 関根慎二 早田勉 高島英之 田口一郎 田村孝 津島秀章 徳江秀夫 友廣哲也 中沢悟 中束耕志 中村明 中村俊司 新倉明彦 平野進一 松村和男 横倉興一 若狭徹 綿貫邦男 群馬土器観会 日本鉄道建設公団高崎建設局 株式会社地崎工業東京支店 原澤ポーリング株式会社

株式会社地下開発コンサルタント 東京電力株式会社高崎工務所 高崎土木事務所 高崎市建設部 箕
郷町教育委員会 群馬町建設課

14. 本遺跡の出土遺物・図面・写真等の全資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
15. 本書の執筆は下記の執筆者によって分担した。執筆箇所は目次に記した。(下記は本文掲載順)
佐藤明人(群馬県教育委員会文化財保護課主幹兼専門員) 真下高幸(財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究第1課長) 大竹正隆(財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員) 早田勉(株式会社古環境研究所) 藤根久・鈴木茂・菱田量(以上、株式会社パレオ・ラボ) 宮崎重雄(群馬県立大間々高等学校教諭) 深澤敦仁(財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員)
16. 本書の編集は深澤が行った。

凡 例

1. 遺構・遺物番号は発掘時と報告時では異なる。理由は、発掘時の番号が混乱し理解困難であることと、報告時には時代性を重視して理解し易くする意図を編者が抱いたためである。
2. 遺構図中の方位は磁北を示す。なお、掘立柱建物・井戸・土坑の遺構個別図は磁北を全てページの天とし、全体図及び住居・溝・耕作痕の個別図は磁北はそれぞれに示した。
3. 遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記の通りとし、各図にスケールを入れた。
【遺構】 竪穴住居 1:60 掘立柱建物 1:80 井戸・土坑 1:40 溝 1:100、1:150 水田 1:150
その他遺構については逐一縮尺率を示した。
【遺物】 土器 1:3 滑石 1:1、1:2、1:3 滑石以外石 1:3、1:4、1:5 木器 1:3 古銭 1:1 鉄器 1:3
また、同一実測図版中に縮尺率の異なる図を併載した場合は、図右下に各々縮尺率を記載した。
4. 写真図版の縮尺率は、原則として下記の通りである。
【遺構】 不統一
【遺物】 土器 1:3、1:4 滑石 1:1、1:2 滑石以外石 1:3、1:4、1:5、1:6 木・鉄器 1:3 古銭 1:1
5. 本書の図版に使用したスクリーンパターンは次のことを示す。また、下記以外のものについては各図版毎に凡例を掲げた。なおかつ、それ以外のものについては特段意味を持たないものとする。
(遺構図) (遺物図)
攪乱範囲…  須恵器断面…  陶磁器断面… 
石の摩滅箇所…  滑石の節理面または未加工面… 
6. 各出土遺物の観察記録は、各観察表にまとめた。表の各項目の基準・留意点は以下の通りである。
第IV章第3節～第5節(歴史時代)の場合 「歴史時代遺物の観察表について」(p.38) 参照
第IV章第6節～第7節(古墳時代)の場合 「古墳時代遺物の観察表について」(pp.108～115) 参照
7. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
巻頭図版2…建設省国土地理院発行 200,000分の1「宇都宮」「長野」 本文 p.24…建設省国土地理院発行 25,000分の1「前橋」「下室田」 本文 p.29…建設省国土地理院発行 25,000分の1「下室田」
本文 p.32…群馬町発行 2,500分の1「群馬都市計画区域図10」「群馬都市計画区域図14」

目 次

巻頭図版

序 文

例言・凡例

第I章 北陸新幹線地域埋蔵文化財調査 に至る経過

- 第1節 発掘調査に至る経過……(佐藤明人)…2
- 第2節 調査着手にあたって……………7
 - 〔1〕 遺跡名称及びその略号について……………(深澤敦仁)…7
 - 〔2〕 調査区画の設置……………(深澤)…10

第II章 行力春名社遺跡調査の経過

- 第1節 泥流下の調査について…(真下高幸)…14
- 第2節 発掘調査の経過……………16
 - 〔1〕 調査の経過(日誌抄) ……(深澤)…16
 - 〔2〕 調査の方法……………(深澤)…18
 - 〔3〕 泥流層下の遺構確認調査……(深澤)…19
- 第3節 整理事業の経過……………(深澤)…22

第III章 遺跡の立地と環境

- 第1節 地理・地勢的環境……………(深澤・大竹正隆)…24
- 第2節 歴史的環境……………(深澤)…27
- 第3節 テフラの呼称について……………(大竹)…33

第IV章 検出遺構と出土遺物

- 第1節 調査概要報告の前に……………35
 - 〔1〕 調査区・調査面の呼称……………(深澤)…35
 - 〔2〕 基本層序……………(深澤)…36
- 第2節 歴史時代遺物の観察表について……………(深澤)…38
- 第3節 I面の検出遺構と出土遺物……………39
 - 〔1〕 I面の調査概要……………(深澤)…40
 - 〔2〕 各遺構・遺物の概要……………(深澤)…40
 - 井 戸
 - 土 坑
 - 溝
 - 耕作痕
- 第4節 II面の検出遺構と出土遺物……………73
 - 〔1〕 II面の調査概要……………(深澤)…74
 - 〔2〕 各遺構・遺物の概要……………(深澤)…74
 - 水 田
- 第5節 III面の検出遺構と出土遺物……………81
 - 〔1〕 III面の調査概要……………(深澤)…82
 - 〔2〕 各遺構・遺物の概要……………(深澤)…83
 - 掘立柱建物
 - 井 戸
 - 土 坑
 - 溝

第6節	IV面の検出遺構と出土遺物……………99		
〔1〕	IV面の調査概要……………(深澤)…100		
第7節	V面の検出遺構と出土遺物……………103		
〔1〕	V面の調査概要……………(深澤)…104		
〔2〕	各遺構・遺物の概要……………(深澤)…104		
	竪穴住居		
〔3〕	古墳時代遺物の観察表について ……………(深澤)…108		
〔4〕	「遺構確認調査」の概要……………(深澤)…153		
 第V章 自然科学的検討			
第1節	自然科学分析の概要……………(深澤)…158		
第2節	行力春名社遺跡の火山灰同定 ……………(早田勉)…160		
第3節	行力春名社遺跡住居跡出土炭化物 について……………(藤根久・鈴木茂)…164		
第4節	行力春名社遺跡出土の 粘土質物質について……………(菱田量)…171		
第5節	行力春名社遺跡出土の赤色顔料に ついて……………(菱田)…173		
第6節	行力春名社遺跡出土の馬歯・馬骨 ……………(宮崎重雄)…175		
 第VI章 調査・整理の成果と問題点			
第1節	検出遺構に関連して……………182		
〔1〕	竪穴住居の上屋材について ……………(深澤)…182		
第2節	出土遺物に関連して……………184		
〔1〕	古墳時代土師器について……………(深澤)…184		
〔2〕	滑石製模造品の製作について ……………(深澤)…186		
第3節	遺跡に関連して……………190		
〔1〕	発掘調査データによるFA直下の 地形状況……………(深澤)…190		
〔2〕	旧地表面の調査について ……………(深澤)…192		
〔3〕	ボーリングデータによる古墳時代 後期の地形復元の試み……………(大竹)…193		
〔4〕	FA泥流・FP泥流についての覚書 ……………(大竹)…200		
 抄 録……………(深澤)…202			
 写真図版			
 別添資料			
付図1	行力春名社遺跡周辺遺跡調査トレンチ 位置図 (S=1/10,000)		
付図2	行力春名社遺跡周辺遺跡 As-B下水 田址位置図 (S=1/2,500)		

挿 図 目 次

第 1 図	北陸新幹線（高崎・軽井沢間）線路平面略図 及び線路縦断面略図	1	第 56 図	IV面検出遺構概略図及び土層模式図	99
第 2 図	調査区画設置図	10	第 57 図	IV面出土遺物図	100
第 3 図	北陸新幹線全線大区画（地区）設置及び遺跡 略号位置図	折込	第 58 図	IV面全体図	折込
第 4 図	白川扇状地・相馬ヶ原扇状地概略図	13	第 59 図	V面検出遺構概略図及び土層模式図	103
第 5 図	泥流層中の調査模式図	18	第 60 図	1号竪穴住居平・断面図	106
第 6 図	古墳時代集落調査工程図	20	第 61 図	2・3号竪穴住居平・断面図	107
第 7 図	凝固剤による不透水層の形成と調査区状況図	21	第 62 図	行力春名社遺跡出土古墳時代土師器 器種一覧（上半）及び細部名称一覧（下半）	109
第 8 図	白川扇状地概略図	23	第 63 図	行力春名社遺跡出土古墳時代土師器部位別 形態分類図	111
第 9 図	行力春名社遺跡位置図	24	第 64 図	土師器手法表現図	112
第 10 図	榛名山東南麓地形断面図	25	第 65 図	1号竪穴住居出土遺物図（1）	132
第 11 図	周辺遺跡分布図	29	第 66 図	1号竪穴住居出土遺物図（2）	133
第 12 図	遺跡周辺字境図	32	第 67 図	1号竪穴住居出土遺物図（3）	134
第 13 図	本書と早田（1989）におけるテフラ呼称対応図	34	第 68 図	1号竪穴住居出土遺物図（4）	135
第 14 図	遺跡調査区位置図（上）調査面関係図（下）	35	第 69 図	1号竪穴住居出土遺物図（5）	136
第 15 図	標準土層図	36	第 70 図	1号竪穴住居出土遺物図（6）	137
第 16 図	遺跡内土層対照図	37	第 71 図	1号竪穴住居出土遺物図（7）	138
第 17 図	I面検出遺構概略図及び土層模式図	39	第 72 図	1号竪穴住居出土遺物図（8）	139
第 18 図	1・2・3号井戸平・断面図	41	第 73 図	1号竪穴住居出土遺物図（9）	140
第 19 図	2号井戸出土遺物図	42	第 74 図	1号竪穴住居出土遺物図（10）	141
第 20 図	1～16号土坑平・断面図	46	第 75 図	1号竪穴住居出土遺物図（11）	142
第 21 図	17～26号土坑平・断面図	47	第 76 図	2号竪穴住居出土遺物図（1）	143
第 22 図	27～32号土坑平・断面図	48	第 77 図	2号竪穴住居出土遺物図（2）	144
第 23 図	33～47号土坑平・断面図	49	第 78 図	2号竪穴住居出土遺物図（3）	145
第 24 図	48～60号土坑平・断面図	50	第 79 図	2号竪穴住居出土遺物図（4）	146
第 25 図	61・62号土坑平・断面図	51	第 80 図	3号竪穴住居出土遺物図（1）	147
第 26 図	23号土坑出土遺物図	52	第 81 図	3号竪穴住居出土遺物図（2）	148
第 27 図	24・46・54・59・61号土坑出土遺物図	53	第 82 図	3号竪穴住居出土遺物図（3）	149
第 28 図	1～7号溝平・断面図	58	第 83 図	3号竪穴住居出土遺物図（4）	150
第 29 図	8～12号溝平・断面図	59	第 84 図	3号竪穴住居出土遺物図（5）	151
第 30 図	13～15・20・21号溝平・断面図	60	第 85 図	3号竪穴住居出土遺物図（6）	152
第 31 図	16～19・22・25～28号溝平・断面図	61	第 86 図	泥流層下遺構確認調査時出土遺物図	154
第 32 図	23・24号溝平・断面図及び 36号溝馬歯・馬骨出土状況図	62	第 87 図	V面全体図	折込
第 33 図	29～55号溝平・断面図	折込	第 88 図	行力春名社遺跡の地質断面	161
第 34 図	7号溝出土遺物図	66	第 89 図	行力春名社遺跡の遺構土層断面	162
第 35 図	25～28・31・51号溝出土遺物図	67	第 90 図	材組織とその名称	164
第 36 図	52号溝出土遺物図	68	第 91 図	1・2号住居の炭化材出土状況とその樹種	169
第 37 図	中世以降耕作痕平・断面図	折込	第 92 図	3号住居の炭化材出土状況とその樹種	170
第 38 図	I面全体図	折込	第 93 図	試料No 1（粘土質物質）の蛍光X線スペクトル図	172
第 39 図	II面検出遺構概略図及び土層模式図	73	第 94 図	試料No 2（原石）の蛍光X線スペクトル図	172
第 40 図	II面出土遺物図	76	第 95 図	試料No 3（周辺部土壌）の蛍光X線スペクトル図	173
第 41 図	II面平・断面図（1）	折込	第 96 図	試料A（赤色部分）の蛍光X線スペクトル図	174
第 42 図	II面平・断面図（2）	折込	第 97 図	試料B（周辺土壌）の蛍光X線スペクトル図	174
第 43 図	III面検出遺構概略図及び土層模式図	81	第 98 図	咬合の変化図	177
第 44 図	1号掘立柱建物平・断面図	85	第 99 図	馬歯計測ポイント図	179
第 45 図	2～4号掘立柱建物平・断面図	86	第100図	行力春名社遺跡出土遺物図（1）	184
第 46 図	5・6号掘立柱建物平・断面図	87	第101図	行力春名社遺跡出土遺物図（2）	185
第 47 図	4・5号井戸平・断面図	88	第102図	熊野堂遺跡・引間遺跡・八幡中原遺跡出土遺物図	185
第 48 図	4号井戸出土遺物図	88	第103図	1号竪穴住居における管玉の製作工程試案	189
第 49 図	63～68号土坑平・断面図	90	第104図	1号竪穴住居における白玉の製作工程試案	189
第 50 図	69～76号土坑平・断面図	91	第105図	データ地点と各地点のFA直下面標高図	191
第 51 図	64号土坑出土遺物図	91	第106図	旧地表面と調査確認面の相違模式図	192
第 52 図	57・63～66号溝平・断面図	93	第107図	ポーリング地点とA・Bライン	196
第 53 図	58～62号溝平・断面図	94	第108図	火山泥流堆積物基底部の地形断面想定図	196～197
第 54 図	57・59・60・63号溝出土遺物図	96	第109図	洪水堆積物の範囲想定図	198
第 55 図	III面全体図	折込	第110図	旧地形の等高線図	198

表 目 次

第1表	北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表（1） （県教育委員会作成：一部修正）	5	第16表	3号竪穴住居出土土師器破片（未実測）集計表	131
第2表	北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表（2） （県教育委員会作成：一部修正）	6	第17表	行力春名社遺跡のテフラ検出分析結果	161
第3表	北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財 調査遺跡略号一覧（事業団作成）	8～9	第18表	出土材樹種一覧	168
第4表	周辺遺跡一覧（1）	30	第19表	遺構別出土材樹種一覧	168
第5表	周辺遺跡一覧（2）	31	第20表	歯の発生時期一覧表	177
第6表	F A ・ F P の呼称の変遷	34	第21表	3号土坑馬歯（上顎）計測値表	179
第7表	1号掘立柱建物ビット・データー一覧	84	第22表	3号土坑馬歯（下顎）計測値表	179
第8表	2号掘立柱建物ビット・データー一覧	84	第23表	27号土坑馬歯（上顎）計測値表	180
第9表	3号掘立柱建物ビット・データー一覧	84	第24表	27号土坑馬歯（下顎）計測値表	180
第10表	4号掘立柱建物ビット・データー一覧	84	第25表	4号溝馬歯（上顎）計測値表	180
第11表	5号掘立柱建物ビット・データー一覧	85	第26表	36号溝馬歯（下顎）計測表	180
第12表	6号掘立柱建物ビット・データー一覧	85	第27表	古墳時代焼失家屋における建築部材鑑定樹種一覧	183
第13表	1号竪穴住居出土土師器破片（未実測）集計表	124	第28表	古墳時代出土材樹種の傾向	183
第14表	1号竪穴住居出土滑石剥片（未実測）集計表	124	第29表	1号・3号竪穴住居出土滑石片法量一覧	189
第15表	2号竪穴住居出土土師器破片（未実測）集計表	126	第30表	1号竪穴住居出土白玉未製品法量一覧	189
			第31表	各地点データー一覧表	190
			第32表	テフラの移動様式とその分類	201

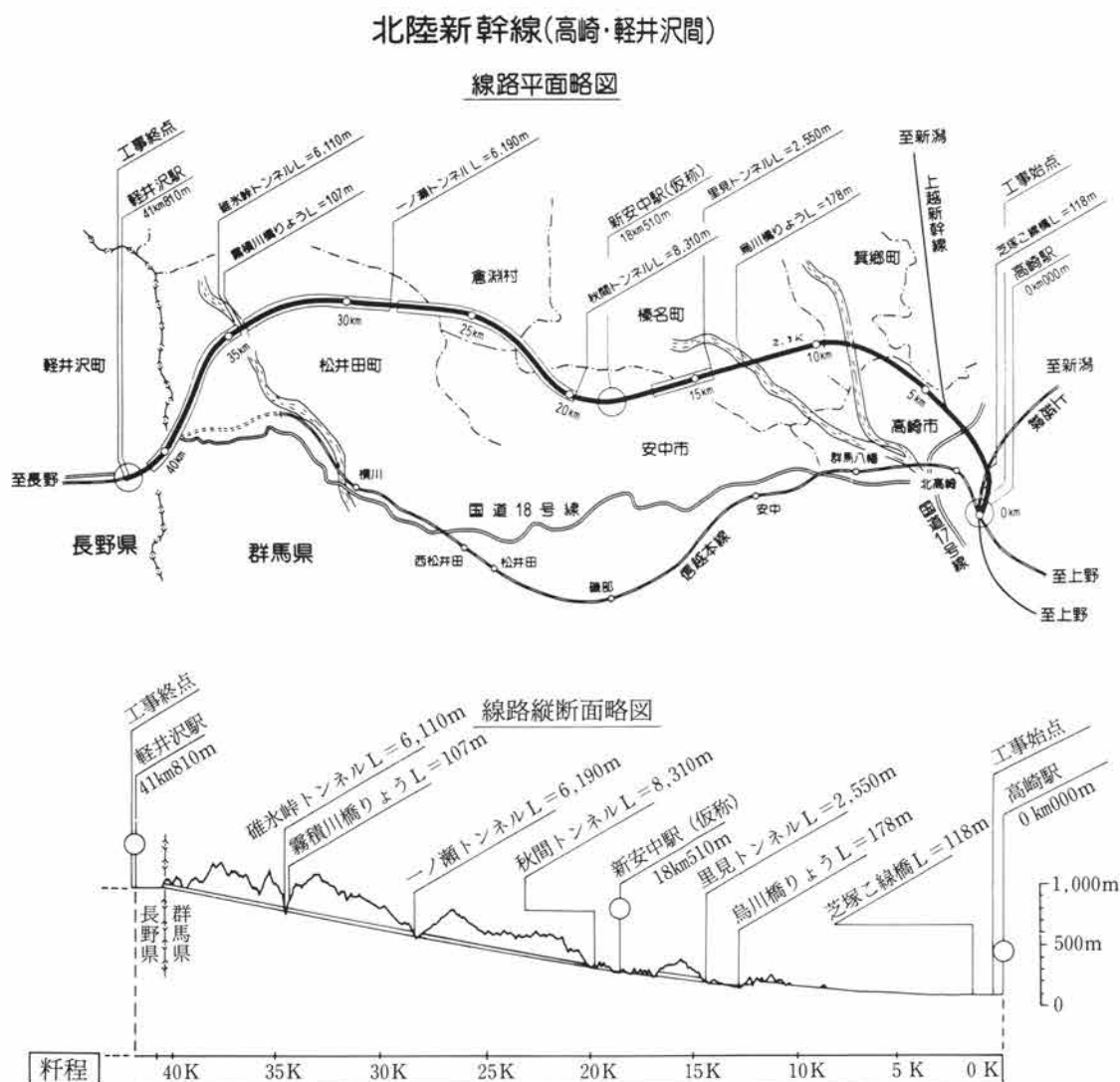
※なお、遺構・遺物観察表の表番号は省略した。

写真図版目次

P L 1	遺跡周辺航空写真	4. 59号土坑全景（北西から）	
		5. 61号土坑全景（南から）	
P L 2	1. 1号井戸全景（南から）	P L 7	1. 1～6号溝全景（西から）
	2. 1号井戸断面（北から）		2. 1～5号溝全景（南から）
	3. 2号井戸全景（西から）	P L 8	1. 7号溝全景（北から）
	4. 2号井戸断面（北東から）		2. 8～10号溝全景（南西から）
	5. 3号井戸全景（東から）		3. 8・11号溝全景（東から）
	6. 3号井戸断面（西から）		4. 12号溝全景（西から）
	7. 3号土坑全景（西から）		5. 13～15号溝全景（南東から）
	8. 3号土坑馬歯出土状況（西から）		6. 16～21号溝全景（西から）
P L 3	1. 1号土坑全景（西から）	P L 9	1. 22・25～28号溝全景（南西から）
	2. 15・16号土坑全景（南から）		2. 27号溝内集石（南東から）
	3. 4～13号土坑全景（北東から）		3. 27号溝内集石（南西から）
	4. 14・17～22号土坑全景（北東から）		4. 23・24号溝全景（西から）
	5. 23号土坑遺物出土状況（西から）	P L 10	1. 30・47号溝全景（北東から）
	6. 23・24号土坑全景（南から）		2. 31・32号溝全景（北から）
P L 4	1. 25号土坑全景（西から）		3. 33～35号溝全景（東から）
	2. 26号土坑全景・断面（南西から）		4. 36・37号溝・44号土坑全景（北西から）
	3. 27号土坑全景（南から）		5. 36号溝内馬骨出土状況（北東から）
	4. 28・29号土坑全景（東から）	P L 11	1. 29・38～40・50号溝全景（西から）
	5. 30・58号土坑全景（東から）		2. 40号溝全景（東から）
P L 5	1. 31号土坑全景（南から）		3. 41・42号溝全景（北から）
	2. 32号土坑全景（北から）		4. 44～46号溝全景（東から）
	3. 36号土坑全景（南西から）		5. 47号溝全景（西から）
	4. 52号土坑全景（北から）	P L 12	1. 51～53号溝全景（北東から）
	5. 33～35・48～51号土坑全景（南東から）		2. 51号溝石列検出状況（北東から）
P L 6	1. 37～40・42・53号土坑全景（南東から）		3. 51号溝杭列検出状況（北西から）
	2. 54号土坑全景（南から）		
	3. 56・60号土坑・43号溝全景（北から）		

4. 51～53号溝調査風景（南東から）
5. 54・55号溝全景（東から）
- P L 13 1. 中世以降耕作痕検出状況（北西から）
2. 耕作痕検出状況（西から）
3. 中世以降耕作痕断面（西から）
4. 中世以降耕作痕断面（南から）
- P L 14 1. 西区全景（南東から）
2. 西区調査風景（南東から）
3. 西区畦畔検出状況（南から）
4. 鋤跡（第1地点）検出状況（南から）
5. 西区鋤跡（第2地点）検出状況（南西から）
6. 東区西畦畔検出状況（南から）
7. 56号溝全景（南から）
- P L 15 1. 東区西鋤跡（第3地点）検出状況（南から）
2. 東区西As-B層堆積状況（南西から）
3. 東区中央畦畔検出状況（北西から）
4. 東区東畦畔検出状況（北西から）
5. 東区東畦畔検出状況（西から）
6. 東区東遠景（他遺構と同一面）（南東から）
- P L 16 1. 1号掘立柱建物（南から）
2. 2号掘立柱建物（北から）
3. 3号掘立柱建物（北西から）
4. 4号掘立柱建物（南から）
5. 5・6号掘立柱建物全景（南から）
6. 4号井戸全景（南から）
7. 5号井戸全景（南西から）
8. 5号井戸断面（南から）
- P L 17 1. 66～71号土坑全景（南東から）
2. 73～76号土坑全景（南東から）
- P L 18 1. 57号溝全景（南から）
2. 61号溝全景（西から）
3. 58・61号溝全景（南から）
4. 59号溝全景（南から）
5. 60号溝全景（南から）
- P L 19 1. 60号溝内井戸（5号井戸）全景（南西から）
2. 62号溝全景（南東から）
3. 63～66号溝全景（南東から）
4. 64・65号溝内礫出土状況（西から）
5. 東区中央泥流層上面全景（南東から）
- P L 20 1. 西区全景（南東から）
2. 西区断面（南西から）
3. 東区西全景（南東から）
4. 東区東全景（北西から）
5. 東区東断面（南西から）
6. 下段 出土遺物
- P L 21 1. 全景：拡張前（北西から）
2. 全景：拡張後（北西から）
3. 土器出土状況：拡張後（北西から）
- P L 22 1. 炭化材・滑石出土状況：拡張後（東から）
2. 紡錘車出土状況：拡張前（南東から）
3. 滑石チップ集中散布地点：拡張後（南西から）
- P L 23 1. 全景：拡張前（北西から）
2. 全景：拡張後（北西から）
3. 覆土断面：拡張前（北東から）
- P L 24 1. 炭化材・石出土状況：拡張後（北東から）
2. 炭化材・石出土状況：拡張後（南東から）
3. 炭化材・石出土状況：拡張後（北西から）
- P L 25 1. 全景：拡張前（南東から）
2. 全景：拡張後（南東から）
3. 土器出土状況：拡張前（南西から）
- P L 26 1. 土器出土状況：拡張前（南東から）
2. 炭化材・滑石出土状況：拡張後（南東から）
3. 炭化材・土器・滑石・ガラス出土状況：拡張後（南東から）
- P L 27 1. 東区西断面（北東から）
2. 東区西断面近接（南西から）
3. 東区中央Na1調査風景（南から）
4. 東区中央Na1溝状断面（南から）
5. 東区中央Na2調査風景（南西から）
6. 東区中央Na2断面：旧地表凹凸（南西から）
7. 東区東調査風景（南東から）
8. 東区東断面（南西から）
- P L 28 I・III面：井戸・土坑出土遺物
- P L 29 I・III面：溝出土遺物
- P L 30 I面：馬歯・馬骨 III面：溝出土遺物
- P L 31 V面：1号竪穴住居出土遺物
- P L 32 V面：1号竪穴住居出土遺物
- P L 33 V面：1号竪穴住居出土遺物
- P L 34 V面：1号竪穴住居出土遺物
- P L 35 V面：1号竪穴住居出土遺物
- P L 36 V面：1・2号竪穴住居出土遺物
- P L 37 V面：2号竪穴住居出土遺物
- P L 38 V面：2・3号竪穴住居出土遺物
- P L 39 V面：3号竪穴住居出土遺物
- P L 40 V面：3号竪穴住居出土遺物
- P L 41 V面：3号竪穴住居出土遺物
- P L 42 炭化材の電子顕微鏡写真 1～3
- P L 43 炭化材の電子顕微鏡写真 4～6
- P L 44 炭化材の電子顕微鏡写真 7～9
- P L 45 炭化材の電子顕微鏡写真 10・11

第1章 北陸新幹線地域 埋蔵文化財調査に至る経過



第1図 北陸新幹線(高崎・軽井沢間)線路平面略図及び線路縦断面略図
(「北陸新幹線(高崎・軽井沢間)パンフレット」日本鉄道建設公団高崎建設局より)

第 1 節 発掘調査に至る経過

北陸新幹線建設は、全国新幹線鉄道整備法（昭和45年）に基づき、昭和47年6月に基本計画が決定され、昭和48年11月に整備計画決定と同時に運輸大臣から建設の指示を受けている。厳しい気象条件のもとで高速交通整備がたち遅れてきた北信・北陸方面と首都圏との間の政治文化及び経済の各面で強いつながりを持たせることを目的とし、高速交通整備の優先区間とされた。

昭和53年には「整備五新幹線の具体的実施計画について」が新幹線整備関係閣僚会議において了承され、ルート概要は昭和57年3月に公表された。

北陸新幹線の全体計画は高崎市から石川県小松市間、総延長373kmを結ぶもので、群馬県内は、高崎駅一軽井沢間42.1km。高崎駅で上越新幹線から分岐し、高崎市一箕郷町一榛名町一倉渕村一安中市一松井田町の2市3町1村を通過する。路線延長のうち24.7km（59%）がトンネルであり、倉渕村、松井田町は全区間がトンネル通過となっている。

本県における北陸新幹線地域にかかる文化財調査は、昭和55年10月の日本鉄道建設公団東京支社長から県教育委員会教育長あて、北陸新幹線計画地域環境調査の一環としての文化財調査の依頼が端緒となる。県教育委員会はこの依頼を受け、日本鉄道建設公団東京支社長との間で環境調査の実施に関する業務委託契約を結び、文献調査、現地調査を実施した。

この調査の結果、調査対象地である群馬県西部平野部から丘陵部にかかる地域において、360カ所の文化財が確認された。縄文時代から平安時代の包蔵地、墳墓、窯跡、中・近世の城館跡・神社仏閣・道祖神等からなるものであった。昭和56年2月、調査結果は、「北陸新幹線地域環境調査報告書（文化財）」としてまとめられ日本鉄道建設公団に提出された。

昭和57年3月に路線駅発表があり、昭和57年12月北陸新幹線環境影響評価報告書案が群馬県知事に送付された。この縦覧・地元説明が昭和57年12月10日から58年1月10日の間に実施され、昭和58年2月知事から意見が提出された。

ルート発表直後から沿線市町より新駅設置への強い要望が上がり、これが知事、議会の一致した要望となつて、議会で新駅設置が趣旨採択される等の経緯があり、昭和61年5月、新安中駅設置とルートの微調整に伴う修正環境評価報告書案が提出された。報告書では、沿線地域の文化財交差カ所を11カ所あげ、文化財の保護保存については関係機関と協議して措置する等の事項が示された。この報告書案に対する知事意見書は同年8月に提出される。意見書は、文化財の保護保存について、トンネル掘削の土捨場、工事用道路並びに工事用施設についても、詳細な分布調査の実施等、路線と同様の措置を講じるよう求めた。

平成元年に入って日本鉄道建設公団と県教育委員会との間で文化財の扱いに関する協議が始まった。7月14日の公団高崎建設局と文化財保護課との調整会議では、(1) 発掘に関しては、日本鉄道建設公団と文化財保護委員会が昭和41年に取り交わした覚書に基づくこと、(2) 埋蔵文化財の重要度、規模等に応じた調査体制を確保すること、(3) 今後、沿線の分布調査を実施すること、(4) 発掘調査は公団と県教育委員会が委託契約を結び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団と再委託して実施すること、(5) 公団と県教育委員会との協定書は発掘調査と整理事業について各々別途に結ぶこと、等の事項についての協議が行われた。

平成2年2月、県教育委員会は北陸新幹線建設予定地域内の埋蔵文化財現地調査を、関連市町の協力を得て実施した。この調査結果は、同年4月、公団高崎建設局長あてに「北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化

財一覧表(付地図)」として回答したが、遺跡数32カ所でその市町内訳は高崎市7カ所、箕郷町4カ所、榛名町11カ所、安中市10カ所となった。

平成2年11月26日、日本鉄道建設公団高崎建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の実施に関する協定書」が締結となる。協定では、24遺跡を発掘調査の対象とし、発掘調査期間、整理事業、委託契約方法、調査経費等について取り決めを行った。

平成3年2月、高崎市行方遺跡を皮切りに(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が開始され、平成3年度になって用地の買収が進んだ安中地区を中心に調査は本格化した。同年6月には、1998年冬季オリンピックの開催地が長野市に決定し、これに照準をあわせた北陸新幹線工事とこれに先立つ発掘調査の完遂に拍車がかかったが、しかしその一方では、用地買収が難航し、発掘調査計画にも大きく影響することになる。本県屈指の大型発掘調査事業である北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査はそうした様々な困難な条件を抱えながら推進されることになった。

北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地
発掘調査の実施に関する協定書

北陸新幹線建設工事事業地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査(以下「発掘調査」という)の実施について、日本鉄道建設公団高崎建設局長(以下「甲」という)と群馬県教育委員会教育長(以下「乙」という)とは、次の通り協定書を締結する。

なお、発掘調査終了後の整理事業については、発掘調査終了時までの間に別途協議し、協定書を締結する。

(目的)

第1条 この協定書は甲が施行する事業地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査方法及びその取扱い借置等について定めることを目的とする。

(発掘調査の場所及び範囲)

第2条 この協定書が対象とする発掘調査の実施場所及び範囲等は別途図に示すとおりとする。

(調査期間)

第3条 乙は、この協定に基づく発掘調査を、平成2年12月1日から開始し、平成5年3月31日までに完了させるものとする。

2 前項の発掘調査の着手順序及び範囲は、甲・乙協議して定めるものとする。

(実施場所及び対象面積)

第4条 発掘調査の実施場所及び対象面積は別表のとおりとする。

2 前項に予定する発掘調査の実施場所及び面積に変動ある場合は、乙はあらかじめ甲に協議するものとする。

(調査費用)

第5条 この調査に要する費用は、昭和41年4月1日付け文化財保護委員会と日本鉄道建設公団との覚書に基づき、次の各号に掲げる費用とし別途のとおり概算総額1,503,949,000円(内消費税 43,805,

第 I 章 北陸新幹線地域埋蔵文化財調査に至る経過

000円) を甲が負担するものとする。

(1) 発掘作業費 調査員及び補助員並びに作業員の日当、旅費、機械器具損料、立入補償費

(2) 調査雑費

2 前項の費用は、工事区域内で新たに埋蔵文化財を発見した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲・乙協議して変更するものとする。

(発掘調査の契約及び経費の支払い方法)

第 6 条 発掘調査は、甲と乙が受委託契約を年度毎に締結のうえ実施するものとする。

2 前条第 1 項の費用は、前項の契約に基づき各年度毎に、四半期に分けて支払うものとする。

(機器材、備品等の処置)

第 7 条 発掘調査のため、乙が必要とする機器材及び備品等の手当については、甲・乙別途協議するものとする。

(調査経費の精算及び調査報告書の提出)

第 8 条 乙は、各年度の発掘調査が完了したときは、調査経費の精算書及び実績報告書を甲に提出するものとする。

(協定の変更)

第 9 条 この協定を変更する必要があるときは、甲・乙協議して定めるものとする。

(協定の有効期間)

第 10 条 この協定の有効期間は、協定締結の日から第 2 条に基づく遺跡の発掘調査が終了するまでとする。

(その他)

第 11 条 この協定に定めない事項または疑義を生じた事項については、その都度甲・乙協議して処理するものとする。

この協定の証として本書 2 通を作成し、甲・乙記名押印のうえ各自 1 通を保有するものとする。

平成 2 年 11 月 26 日

甲 日本鉄道建設公団高崎建設局
局長 北井良吉 (公印)

乙 群馬県教育委員会
教育長 坂西輝雄 (公印)

第1表 北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表（1）（県教育委員会作成：一部修正）

番号	遺跡名称(仮称) 所在地	ST No 調査対象面積	文化財の時代 文化財の種類	遺跡の概要	備考
1	融通寺遺跡 高崎市下小島町	4 km+60m ～4 km+280m	平安時代集落 水田	◇弥生時代後期から古墳時代前期住居3軒◇歴史時代住居300軒以上 ◇瓦塔・瓦・銅碗が出土 *参考『融通寺遺跡』群埋文 1990	
2	融通寺遺跡 (茂木屋敷) 高崎市大八木町	4 km+300m ～4 km+420m	弥生～平安・ 中世集落・水 田・館址	◇大八木屋敷(茂木屋敷) 高崎市大八木町の西部、井野川と早瀬川合流点の東側に、館址と 推定される中世環濠遺構がある。昭和52年、上越新幹線敷地発掘調 査に濠址が検出されている。北面は早瀬川の高さ5.6mの河岸、東面 南面は濠を巡らし、方120m。東面・南面に虎口跡があったと推定さ れる。 *参考『群馬県古城址の研究 補遺編上』山崎一 1979	
3	芦田貝戸遺跡 高崎市浜川町	5 km+80m ～5 km+680m	古墳～奈良・ 中世水田・中 世遺構	◇水田・水路 古墳時代～平安時代水田◇集落 平安時代5軒・中 世掘立柱建物跡11軒◇墓地 中世火葬墓・土坑墓 *参考『芦田貝戸遺跡』高崎市教委第9集 1979 『御布呂遺跡』高崎市教委第18集 1980 『芦田貝戸遺跡II』高崎市教委第19集 1980	
4	高田屋敷遺跡 高崎市浜川町	6 km+460m ～6 km+490m	平安・中世水 田址・館址	◇高田屋敷(道場遺跡群内に位置する) 高崎市浜川町の浜川の砦と、矢島の砦との間に一つの二重構え中 世屋敷跡が認められる。地籍図に明らかなように、字高田(甲)とい う東西両側より1～2m高い微高地を占め、方150mの区域で、北と 東の濠跡は明かである。入り口は南面中央の一方であった可能性が ある。 濠 確認上幅6.1m・規模116m(東西)、土塁 幅6.0m、 掘立 18基、柵 10、土坑 47基、井戸 1基 他に幅20cm深さ20cmの溝があり、濠へ水を導入する水量調節施設 などを検出。 平安時代の水田址のある可能性がある。 また、この周辺には地籍図と現地踏査の結果、他に中世館址の存 在する可能性がある(高崎市史編纂室による)。	
5	高崎市浜川町	5 km+940m ～7 km+100m 7 km+170m ～7 km+230m	弥生・古墳 水田	◇水田 平安時代(畦道検出)◇古墳 2基 埴輪をもつ(1号墳… 前方後円墳 5C末 2号墳…円墳 5C後)◇住居 4軒(平安) ◇集石遺構 平安(墨書土器・土師器環などが重なって出土したこと から祭祀の可能性が指摘されている)。 *参考『道場遺跡群』高崎市教委第96集 1989 ※現在、おさえている泥流の南限がこの地点の井野寄りで検出され ている。地形等から西へ泥流層が分布する可能性があること(高崎 市教委)。	
6	浜川北遺跡群 谷津・道場遺跡 高崎市浜川町	7 km+100m ～7 km+600m	古墳・平安集 落・水田	◇水田 平安時代水田◇住居跡 平安14軒◇掘立 中世10基(内1 基御堂)◇土坑 147基◇館址 竪穴遺構(内耳埴土出土)◇濠 大型水 路状遺構 上幅7～8m・深さ2m◇溝 13条◇墓址 4基(古瀬 戸瓶子出土や火葬墓)◇井戸 6基◇他に古墳時代の集落の可能 性があるが、それより下層は現時点では不明。 *参考『道場遺跡群』高崎市教委第96集 1989	
7	行力遺跡 高崎市行力町	7 km+230m ～7 km+640m	平安集落	◇行力遺跡群として調査。隣接地行力工業団地造成に伴う調査『榛 名社遺跡』105集(高崎市教委 1990)に報告がある。 ◇平安時代住居跡1・水田址・溝2・土坑1◇中世掘立柱建物址3 ・集石遺構・井戸・溝(館址)・土坑 ◇他にまとめてかえての中で北陸新幹線地域に、平安・中世遺構の 存在が確実にあるとし、他に古墳時代以前の遺跡の存在性を示唆し、 調査の必要性を指摘している。	
8	群馬郡箕郷町 下芝	7 km+700m ～8 km+660m	古墳～平安 水田	◇古墳時代及び平安時代水田	変電所 5,000㎡ の調査が ある。
9	和田山古墳群 群馬郡箕郷町和 田山	8 km+780m ～9 km+160m	古墳 古墳群	◇路線は古墳群の中央を通る。◇現存する古墳は約10基である。現 地踏査で石室の一部や埴輪片の散布が認められる。◇縄文時代の遺 構(土坑)や旧石器の存在する可能性が高い。	
10	群馬郡箕郷町白 川	9 km+570m ～9 km+780m	縄文～平安 包蔵地	◇地形的に見て、縄文時代から平安時代の遺構の他に、旧石器の存 在する可能性が高い。	

第1章 北陸新幹線地域埋蔵文化財調査に至る経過

第2表 北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表（2）（県教育委員会作成：一部修正）

番号	遺跡名称(仮称) 所在地	ST No 調査対象面積	文化財の時代 文化財の種類	遺跡の概要	備考
11	群馬郡箕郷町白川 群馬郡榛名町白岩	9km+930m ～10km+40m	縄文～平安 包蔵地	◇縄文土器の散布が多く、相当量の遺構・遺物が見込まれる。◇旧石器の試掘を要す。	
12	群馬郡榛名町白岩	10km+140m ～10km+360m	縄文～平安 包蔵地	◇台地の西側には発達した沖積地が存在。地形的にみて、相当量の遺構・遺物の出土が見込まれる。◇旧石器の試掘を要す。	
13	群馬郡榛名町白岩・高浜	10km+520m ～10km+810m	縄文～平安 包蔵地	◇やや広い丘陵性台地。地形的には遺跡の立地条件は良好で、縄文時代の遺構が存在する可能性が高い。◇旧石器の試掘を要す。	
14	群馬郡榛名町高浜	10km+970m ～11km+320m	縄文～平安 包蔵地	◇平坦な丘陵性台地。付近で縄文時代の敷石住居址を確認しており広範囲に遺物の展開が考えられる。◇旧石器の試掘を要す。	
15	群馬郡榛名町高浜・宮沢	11km+420m ～11km+670m	縄文～平安 包蔵地	◇ローム層上面まで1mを計る。黒色土の発達が著しく、縄文時代の遺物包含層の調査を要す。◇台地上にも浅間B軽石を確認しており、多面調査の可能性もある。 ※この地域では黒色土の発達が著しい。周辺台地でもこの遺跡と同様な多面調査が必要であろう。	
16	群馬郡榛名町三ツ子沢	11km+780m ～11km+950m	縄文～平安 古墳・包蔵地	◇丘陵性台地。台地西側には発達した沖積地が広がる。遺跡としての立地条件は良好である。◇15と同様に縄文時代の遺構が存在する可能性が高い他、遺跡の南側には古墳が存在している。このことから古墳の存在も想定される。	
17	群馬郡榛名町	12km+140m ～12km+340m	縄文～平安 包蔵地	◇山岳トンネルのため調査なし。	
18	泉福寺古墳群 群馬郡榛名町中里見	13km+560m ～13km+680m	古墳 古墳群	◇遺跡は泉福寺古墳群の中に位置する。現在も付近には古墳2基が存在する。◇このほか、平安時代の集落が存在する可能性が高い。	
19	群馬郡榛名町中里見	13km+770m ～13km+940m	縄文～平安 包蔵地	◇平坦な丘陵性台地。縄文時代から平安時代の遺構・遺物の存在が想定され、立地条件も良い。◇このほか、旧石器時代石器群の存在も予想され、試掘調査を要す。	
20	群馬郡榛名町上里見	14km+160m ～14km+220m	縄文～平安 包蔵地	◇道路部分から工事中に土器が出土している。	
21	群馬郡榛名町	14km+380m ～14km+560m	縄文～平安 包蔵地	◇トンネルのため調査なし。	
22	群馬郡榛名町	14km+640m ～14km+870m	縄文～平安 包蔵地	◇トンネルのため調査なし。	
23	安中市下秋間 茨ヶ谷津	16km+480m ～16km+510m	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が高い。8C後半の須恵器が多く散布している。◇23～32の参考文献資料「秋間古窯跡群分布調査仮成果」(秋間古窯跡群分布調査会) 1989	
24	安中市下秋間 熊野谷津	16km+520m ～16km+550m	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が高い。8C後半の須恵器が多く分布している。	
25	安中市中秋間 三角谷津	16km+650m ～16km+720m	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が高い。8C後半の須恵器。付近の道際で窯を2基確認している(7C～8C後半)。	
26	安中市中秋間 甲木ノ巢谷津	16km+840m ～17km+00mの 南側	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が高い(8C～9C)。沢の北側で、窯を3基確認した。	
27	安中市中秋間 甲木ノ巢谷津	16km+980m ～17km+20m	古墳～平安 包蔵地	◇土師器(9C)の遺物散布。◇上流には鉄滓が多量に散布。このほか、美濃皿(17C)を採集している。	
28	安中市中秋間 中島	17km+160m ～17km+170m	古墳～平安 包蔵地	◇8C～9Cの須恵器・土師器の散布がある。	
29	安中市東上秋間 神水	18km+480m ～18km+570m	古墳～平安 包蔵地	◇土師器散布地。	
30	安中市東上秋間 稲貝戸	18km+200m 付近の南	中世～近世 寺院跡	◇須恵器の散布がある。	
31	安中市東上秋間 笹田	18km+300m 付近の南	縄文～平安 包蔵地	◇土師器散布地。	
32	安中市東上秋間 神水	18km+640m 付近の南	古墳～平安 古墳・包蔵地	◇古墳。◇付近に土師器の散布がある。	

第2節 調査着手にあたって

〔1〕 遺跡名称及びその略号について

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘事業ではこれに関連する遺跡調査について遺跡名称及びその略号の付け方の統一を図った。

【遺跡名称の付け方】

遺跡名称については、原則では、「市の場合は遺跡所在の町名と字名、町村の場合は遺跡所在の大字名と小字名をとって、遺跡名称とする」とした。なお、遺跡地内に字名が複数ある時は、任意に選び出し、遺跡名とした。例えば、行力春名社遺跡の場合、遺跡は高崎市行力町字春名社・春名社西・石田に所在が跨るため、字名の一つをとり、「行力春名社」とした。但し、これはあくまでも原則で、例外として、①既調査の遺跡が接近する場合（高崎市・融通寺遺跡など）、②字名が異なっても明らかに面的に同一性が認められる場合（箕郷町・下芝五反田Ⅰ～Ⅳ遺跡など）、③調査以前からその遺跡地の性格が判明している場合（高崎市・大八木屋敷遺跡など）についてはこれに従わず、その遺跡地に適切な名称をつけた。

【遺跡略号の付け方】

遺跡略号は、その採用の目的として、名称簡略化によって調査の能率化を図るとともに、同一事業における各遺跡の位置関係の理解を容易にする事があげられる。

遺跡略号については、原則では、「HS（HOKURIKU－SINKANSENの頭文字）と三桁の数字による表記」を採用した。3桁の数字についてはそれぞれ次のような意味をもたせた。

3桁目の数字…「遺跡」の所在市町村（0…高崎市 1…箕郷町 2…榛名町 3…安中市）
 2桁目の数字…「遺跡」の同一市町村内における建設工事高崎起点の距離程の短い順に1、2、3～とした。
 1桁目の数字…「遺跡」の調査範囲が調査着手以前と調査時において同一の場合は0、調査着手以前は1つの「遺跡」のものが、調査時において分割された場合は着手順に0、1、2～とした。
 ※なお、調査の都合上、上記の原則通りにならない例外もある。

例えば、行力春名社遺跡の場合は遺跡略号は「HS070」となる。

内訳は

- HS →（北陸新幹線）
- 0 →（高崎市所在）
- 7 →（「遺跡」として高崎市では建設工事高崎起点で近い順で7番目）
- 0 →（「遺跡」の調査範囲が調査着手以前と調査時において同一）

である。

第3表 北陸新幹線(群馬県内)地域

遺跡略号	遺跡名称	遺跡所在地(字名は1つのみ掲載)	遺跡
HS010	融通寺	高崎市下小鳥町字神戸	古墳時代水田 奈良時
HS020	大八木屋敷	高崎市大八木町字融通寺	古墳時代水田 奈良・
HS021	芦田貝戸	高崎市浜川町字芦田貝戸	古墳時代水田 平安時
HS030	御布呂	高崎市浜川町字御布呂	古墳時代水田 平安時
	芦田貝戸	高崎市浜川町字芦田貝戸	古墳時代水田 奈良・
	西下井出	群馬郡群馬町大字井出字西下井出	古墳時代水田 中世道
HS031	餅井貝戸	高崎市浜川町字餅井貝戸	古墳時代水田・溝 平
HS040	浜川館	高崎市浜川町字館	古墳時代水田 平安時
HS050	高田屋敷	高崎市浜川町字高田	古墳時代水田 平安時
HS060	浜川長町	高崎市浜川町字長町	古墳時代住居・水田
HS070	行力春名社	高崎市行力町字春名社	古墳時代住居・工房
HS101	下芝清水	群馬郡箕郷町大字下芝字清水	古墳時代住居・平地建
HS110	下芝五反田I	群馬郡箕郷町大字下芝字五反田	古墳時代住居・畠 平
HS111	下芝五反田II	群馬郡箕郷町大字下芝字天神	古墳時代住居・畠・祭
HS112	下芝五反田III	群馬郡箕郷町大字下芝字天神	平安時代溝 中世耕作
HS113	下芝五反田IV	群馬郡箕郷町大字下芝字上田屋	奈良・平安時代水田・
HS120	和田山古墳群	群馬郡箕郷町大字和田山字地藏堂	旧石器時代 縄文時代
HS130	白川傘松	群馬郡箕郷町大字白川字傘松	旧石器時代 縄文時代
HS140	白川笹塚	群馬郡箕郷町大字白川字笹塚	縄文時代住居・土坑
HS210	白岩浦久保	群馬郡榛名町大字白岩字浦久保	縄文時代土坑 奈良・
HS220	白岩民部	群馬郡榛名町大字白岩字大久保	旧石器時代 縄文時代
HS230	高浜広神	群馬郡榛名町大字高浜字広神	縄文時代土坑 古墳時
HS240	高浜向原	群馬郡榛名町大字高浜字向原	縄文時代土坑 古墳時
HS250	三ツ子沢中	群馬郡榛名町大字三ツ子沢字中西	旧石器時代 縄文時代
HS253	神戸宮山	群馬郡榛名町大字神戸字宮山	平安時代住居・土坑
HS252	神戸岩下	群馬郡榛名町大字神戸字岩下	古墳時代水田 平安時
HS251	中里見中川	群馬郡榛名町大字中里見字中川	縄文時代土坑 弥生時
HS260	泉福寺古墳群	群馬郡榛名町大字中里見字根岸	縄文時代包含層 平安
HS270	中里見原	群馬郡榛名町大字中里見字原	古墳時代墳墓 奈良・
HS280	中里見井ノ下	群馬郡榛名町大字中里見字井ノ下	縄文時代埋甕 平安時
HS310	中秋間三角谷津	安中市大字中秋間字三角谷津	なし
HS320	中秋間甲木ノ巢谷津I	安中市大字中秋間字甲木ノ巢谷津	近世炭窯
HS330	中秋間甲木ノ巢谷津II	安中市大字中秋間字甲木ノ巢谷津	なし
HS340	中秋間中島	安中市大字中秋間字中島	平安時代水田
HS350	東上秋間稲貝戸	安中市大字東上秋間字稲貝戸	時期不明土坑・ピット
HS360	東上秋間笹田	安中市大字東上秋間字笹田	近世炭窯・道・水田・
HS370	東上秋間神水	安中市大字東上秋間字神水	平安時代須恵窯

埋蔵文化財調査遺跡略号一覧（事業団作成）

の 主 な 内 容	公団遺跡番号	起点距離程
代溝 平安時代水田 中世掘立柱建物・柵列・井戸・土坑	1	4,050m～4,280m
平安時代住居・掘立柱建物（館）・水田 中世堀・土坑	2	4,290m～4,450m
代住居	3	5,050m～5,500m
代水田 中世掘立柱建物・堀・井戸・土坑 近世土坑	3	5,500m～5,700m
平安時代溝		東京電力鉄塔建設関連
		東京電力鉄塔建設関連
安時代水田	3	5,700m～6,000m
代住居・水田 中近世溝・土坑	5	6,084m～6,360m
代水田 中世掘立柱建物・井戸・墓・土坑	4	6,366m～6,830m
平安時代水田 中世溝・土坑	6	6,840m～7,250m
奈良時代溝 平安時代掘立柱建物・水田 中世溝・土坑	7	7,230m～7,640m
物・畠 奈良・平安時代溝	試掘2	7,640m～7,700m
安時代住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田	8	起電区分所建設関連
祀場 平安時代住居・水田	8	7,700m～8,162m
痕	8	8,162m～8,380m
畠 中近世溝・土坑・耕作痕	8	8,380m～8,670m
住居 古墳時代墳墓 平安時代住居 中世掘立柱建物・堀	9・試掘3	8,780m～9,370m
竪穴住居・土坑・配石遺構 近世溝	10	9,530m～9,790m
古墳時代墳墓 中世掘立柱建物・溝 近世墓墳・道	11・試掘4・5	9,850m～10,120m
平安時代竪穴住居 中近世土坑・道	12	10,120m～10,370m
土坑 平安時代水田 近世道・土坑	13・試掘6	10,390m～10,825m
代住居 奈良・平安時代住居・水田・土坑 中近世溝	14	10,860m～11,285m
代水田 平安時代水田・溝・土坑	15	11,345m～11,675m
住居 弥生時代土坑 古墳時代竪穴住居 平安時代竪穴住居	16	11,720m～11,950m
	試掘7	12,320m～12,382m
代水田 近代畠	試掘7	12,430m～12,670m
代水田 古墳時代水田 平安時代水田・住居 中世土坑墓	試掘8	13,260m～13,565m
時代住居・水田・土坑	17	13,565m～13,677m
平安時代基壇建物・掘立柱建物・製鉄遺構 近代道・墓墳	18	13,773m～13,950m
代住居・掘立柱建物・炭窯 江戸時代屋敷	19	13,950m～14,220m
	20	16,700m
	21	16,800m～16,880m
	22	
	23・試掘9	17,130m～17,170m
	試掘10	18,080m～18,120m
畠	試掘11	18,240m～18,340m
	24・試掘12	18,480m～18,520m

〔2〕 調査区画の設置

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘事業ではこれに関連する遺跡調査について調査区画を統一している。

区画設置においては「国土座標」を基本として、「地区」(大区画)、「区」(中区画)、「グリッド」(小区画)に分け、最小5mの区画まで設置し、遺構・遺物の検出位置を明らかにしている。

なお、区画起点については、北陸新幹線建設工事の起点が高崎駅であることから、それに準拠する形で、高崎駅南東、「国土座標」での(X=+35,000.0M、Y=-73,000.0M)を起点とした。

「地区」は一辺1km四方の区画であり北陸新幹線路線部の調査対象地域に沿って25地区の設定をした(第2(上)図・3図)。

「区」は一辺100m四方の区画であり、「地区」内を100等分している(第2図(中))。

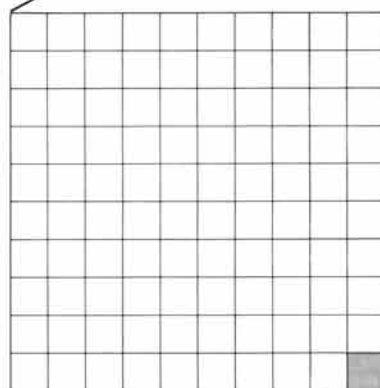
「グリッド」は一辺5m四方の区画であり、「区」内を400等分している(第2図(下))。

呼称については、「地区」「区」「グリッド」をそのまま用いて表し、南東隅区画名をもって、その区画の名称とした。

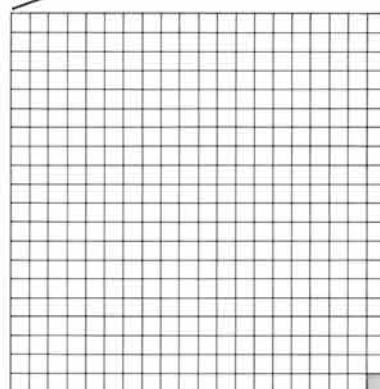
各区画の番号順は、「地区」では本事業全域の高崎寄りから安中方面に向けて順次1~24(但し、13地区南は13-1地区)まで(第3図)、「区」では南東隅を起点に、東→西を優先し、南→北の順に1~100区まで(第2図(中))、「グリッド」では南東隅を起点に、東→西の順にA~T、南→北の順に1~20とし、その交点によって、A-1~T-20まで(第2図(下))、とした。



大区画(地区)

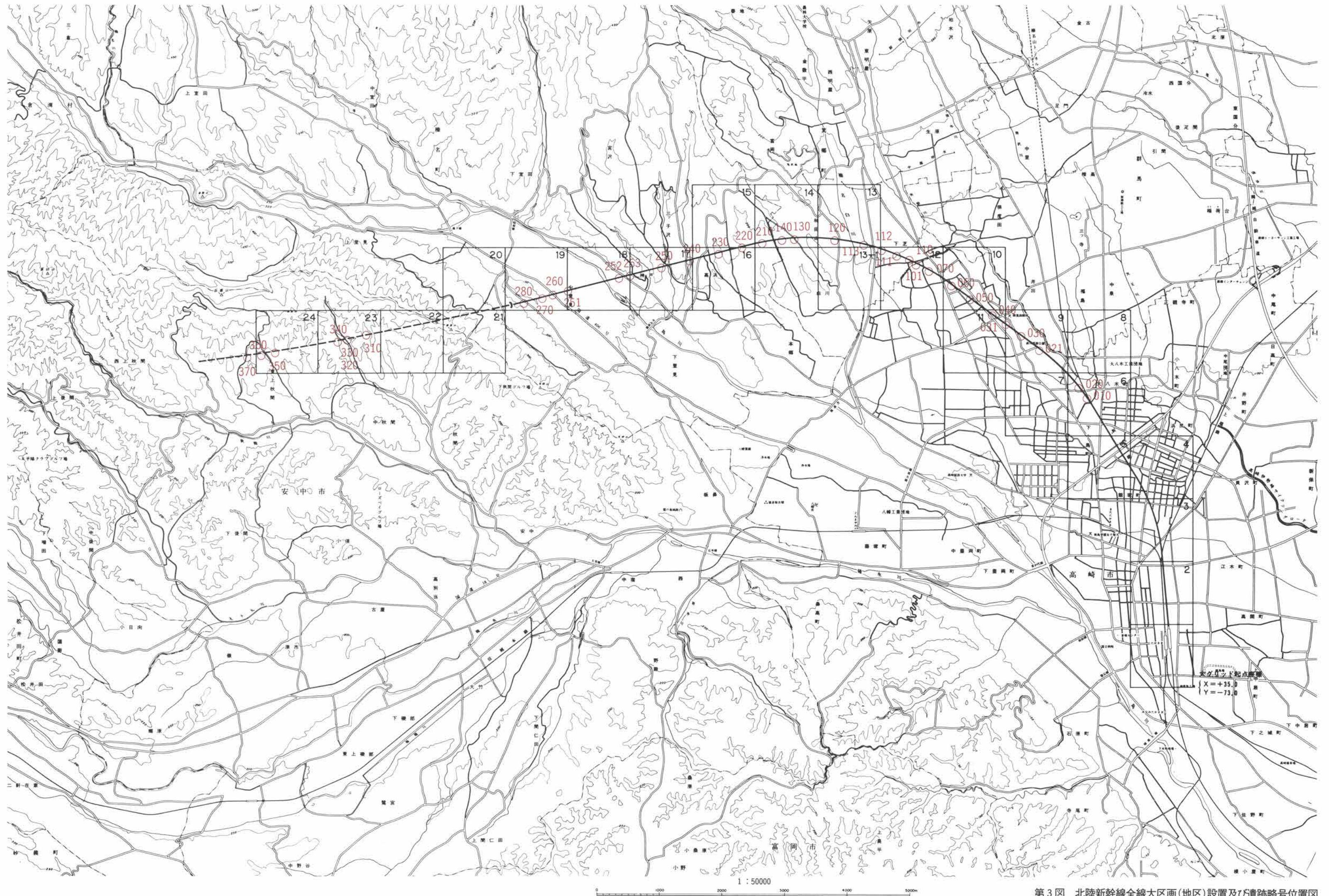


中区画(区)



小区画(グリッド)

第2図 調査区画設置図

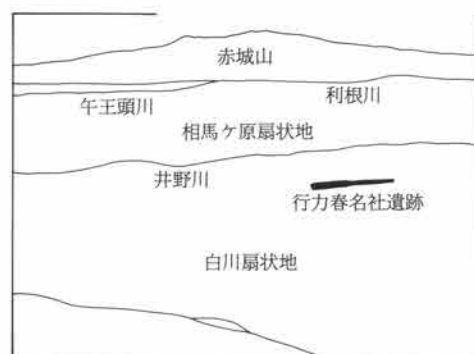


第3図 北陸新幹線全線大区画(地区)設置及び遺跡略号位置図

第II章 行力春名社遺跡調査の経過



白川扇状地と相馬ヶ原扇状地（西から）



第4図 白川扇状地・相馬ヶ原扇状地概略図

第1節 泥流下の調査について

北陸新幹線の発掘調査は、用地買収の済んだ高崎市行力町の行力春名社遺跡に群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査に入った事で開始された。耕作土の下は、榛名山からの噴出物が泥流となって約5mほど堆積していた。泥流は、水を多く含み、崩落もあった。その下は浅間山から噴出された軽石を混在する黒色土層であり、この層中から遺物が検出された。しかし、危険が伴い、遺構を確認するには至らなかった。

このような泥流は、西は榛名白川、東は井野川、北は箕郷町西明屋付近、南は高崎市大八木町付近の範囲内で、約4～5mほど堆積し、この地域の多くは水田地帯となっている。

この試掘により、今後どのように調査を進めていくかという点が大きな懸案となった。

行力春名社遺跡は、この懸案を抱えながら、平成3年2月4日に文化財保護課が試掘した地区（西区）より調査を開始した。季節的にも乾期であり、湧水量も少ないことから、法面掘削調査となった。調査幅は、法面掘削のため、深さ3.5mの地点で幅約3.1mが確保され、この範囲内で古墳時代の住居跡3軒が確認された。住居跡の大半は法面の中に入っているため、その一部を調査するにとどまり、平成2年度調査は終了した。

調査を進める中で、①湧水時期をはずしての調査が可能か？、②新幹線幅は約12mであり、かつ遺構面までは深く、法面掘削時に安全勾配を確保すると調査幅は狭くなるが、調査幅を広げる方法はないか？、③湧水と崩落の激しい中で遺跡の有無を確認する試掘方法は何か？、などについて検討がなされた。

平成3年3月 建設技術コンサルタントを招き、湧水と崩落、土質と法面の角度、安全対策の方法と技術等について基礎的な講義を受けた。これを機会に随時、コンサルタントを招き指導を受けることになった。

平成3年4月 行力春名社遺跡の調査実績を参考にし、文化財保護課と協議し、「北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査仕様書」を作成し、基本方針をだした。主な内容は下記の通り、泥流地帯の調査が盛り込まれた内容になった。

「北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査仕様書」(抜粋)

2. 方針

調査対象となる遺跡の発掘調査は全面調査を原則とする。但し、調査上安全が確保できない遺跡については、関係機関にて安全対策工法等を十分協議のうえ調査の扱い方法をきめ実施する。なお、調査が不可能な遺跡については必要最大限の記録が残せるような努力する。

7. 調査方法

(1) 試掘調査

泥流地帯の試掘調査

- ・泥流地帯については、試掘調査に先行してボーリング調査を行い地層を確認の上、試掘調査を行う。

(2) 発掘調査

泥流地帯の調査

- ・防護壁等安全対策が可能な遺跡は、極力路線幅すべてを調査する。
- ・防護壁等の安全対策が不可能な遺跡は下記のいずれかの方法にて調査する。

第1段階 路線外に法面掘削に必要な土地を借地して調査可能な範囲を調査する。

第2段階 路線内において、法面掘削にて調査可能な範囲を調査する。

その他

・遺跡内で地下水が出る予想遺跡については、予め付近の地下水の利用状況を事前に把握しておく。

8. 安全対策

(2) 水田地帯の調査については、6月から9月の間は原則として調査を実施しない。

(9) 調査における安全対策を速やかに進めるため、安全対策に関するコンサルタントを必要に応じ入れ対策を考える。

平成3年4月当初から泥流下の調査方法について、コンサルタントと検討が行われ、行力春名社遺跡では、試行的調査になった。

東区中央試掘調査を法面掘削で実施したが湧水と崩落が激しく、担当者が掘削内に入り、平面と断面による遺構確認は危険が伴った。このことにより、東区東では、湧水を遮断する鋼矢板山留め法(シートパイル)で、平面観察のみで遺構の有無を確認することにした。打設の事前準備として、打設予定地でボーリング調査と透水試験を行った。その結果、「①被圧水が高く、場合によってはボイリング現象が伴う危険性がある。②地質は岩石が多く直接鋼矢板を打設することは難しい」、の2点が判明し、安全対策の方法については暗礁に乗り上げた。

一方、用地買収の状況と開通時期との関係から、泥流下の水田地帯も通年で調査を実施して欲しい旨、日本鉄道建設公団から要請が出された。

これを受けて、さまざまな検討の結果、下記の方針が出された。

1 事前準備

- ① 泥流地帯の安全対策と文化財のデータを兼ねたボーリング調査を行う。
- ② 地形、地質等の資料収集に努める。
- ③ ボーリング調査は、日本鉄道建設公団が実施した資料に補足する。
- ④ 調査期間を少しでも短縮するため、また必要に応じて、速やかに安全対策が打設できるように、直ちに資料収集と安全対策の設計に入る。

2 不湧水の場合

- ① 法面掘削で試掘及び発掘調査を行う。
- ② 湧水が少量の場合は、可能な限り排水を行い試掘及び発掘調査を行う。

3 多量の湧水の場合

- ① 試掘調査はボイリング現象を防ぎ、遺構確認最少範囲の面積として5m×5mの親杭横矢板工法で実施する。
- ② 発掘調査は、湧水量に応じて親杭横矢板または鋼矢板山留め法を使用する。
- ③ 安全対策工法は、遺構の性格により、深さが一定でなく、最深度も不明瞭なため、かつ最大限の調査面積を確保する工法としてアイランド方式とする。

これにより、泥流下の地質状況に応じた調査方法の方向性が出された。

平成5年6月 「北幹関連発掘調査・安全防護施設決定方法」を作成した。内容は次の通りである。

①発掘調査の掘削法の提案 ②発掘調査時の掘削と安全管理 ③発掘調査における環境管理

これは、安全対策の基本的な方法をまとめたものである。

第2節 発掘調査の経過

〔1〕 調査の経過（日誌抄）

平成2年度

2月4日 調査に先立ち事務所設営及び発掘機材整備の実施。

2月5日～15日 西区 表土掘削。中近世遺構・As-B下水田の調査。

2月18日～25日 西区 中近世遺構・As-B下水田の調査。

2月26日～27日 西区 FP泥流上面遺構の調査。後、FP泥流層掘削。

2月28日～3月5日 西区 FP泥流層掘削。FP直下黒色土面の調査。

3月6日 西区 FA泥流層掘削。FA下黒色土層より古墳時代中期の土師器片出土。後、遺構確認。住居址か？

3月7日 西区 FA泥流層掘削。西区調査区域の周辺整備。事業団内安全衛生委員会（10名）視察。

3月8日～14日 西区 FA下黒色土面の遺構（住居3軒）確認。（13日 事業団と文化財保護課とで泥流下の調査方法について協議）。

3月15日～27日 FA泥流層掘削。1・2・3号竪穴住居調査。FA下黒色土面一部埋め戻し。

3月28日 1号竪穴住居調査。周辺整備。自然科学分析試料採取。

3月29日 周辺整備。自然科学分析試料採取。本日にて平成2年度の発掘調査終了。



バックホーによる表土掘削（西区：東から）

平成3年度

4月16日 平成3年度調査開始。拡張区掘削準備。

4月17日～27日 拡張区調査掘削。1・2・3号竪穴住居調査。

4月30日～5月6日 西区埋め戻し。遺物洗浄。

5月7日～6月18日 東区中央表土掘削。中近世遺構・As-B下水田調査。

6月19日～24日 東区中央 As-B下水田耕土の掘削。FP泥流上面の調査。

6月25日 一部FP泥流層・FA泥流層（＝泥流層下の遺構確認調査1）の掘削。FA下黒色土層中より土師器片出土。

6月26日～7月1日 東区中央 FP泥流層掘削。泥流下黒色土面の調査。

〈1日夜～2日未明まで豪雨：前橋で35mm〉

7月2日 未明までの豪雨のため、排水作業。東区中央 一部FA泥流層掘削。FA下黒色土中の遺構確認。土師器片出土、溝1条検出（＝同上2）。調査研究部長・調査研究第1課長視察・調査立会。

7月3日～8日 調査地周辺整備。遺物基礎整理。

7月9日～10日 東区中央 一部FA泥流層掘削。FA下黒色土中の遺構確認（＝同上3）。泥流下の調査方法を協議。（9日 事務局長・調査研究部長・調査研究第1・2課長立会）。

7月11日～22日 東区東 表土掘削。中近世遺構・As-B下水田の確認・調査。

〈11日 担当2名と作業員37名増員（＝行力B班）〉



調査区埋め戻し風景（西区：北西から）

7月23日 東区東 中近世遺構、As-B下水田の調査。東区中央 FP泥流層試掘。(事務局長・調査研究部長・第1課長他、文化財保護課、地質コンサルタント立会)。

7月24日～8月2日 東区東 中近世遺構・As-B下水田調査。

8月5日～6日 東区東 As-B下水田耕土掘削。
《6日夜～7日未明 集中豪雨：前橋37mm》

8月7日 豪雨のため調査区冠水。排水作業。

8月8日～28日 東区東 FP泥流上面の調査。
《25日 台風12号通過》
(26日 透水試験についての協議)。(27日 長野埋蔵文化財調査センター9名視察)。

8月29日～9月5日 ボーリングによる透水試験実施。

《8月31日未明 台風14号通過》

9月6日～18日 遺物基礎整理。調査区周辺整備。

《9日 台風15号接近》

(10日 ボーリング透水試験結果を基に泥流下調査について協議)。(13日 行力B班は大八木屋敷遺跡へ移動)。

《18日夜 台風18号通過》

9月19日～26日 調査区内排水作業・法面の保護。遺物・図面基礎整理。

9月27日～10月15日 東区西 表土掘削。中近世遺構・As-B下水田の調査。

《10月11日深夜 台風21号通過》

10月16日～24日 東区西 As-B下水田耕土掘削。



中近世遺構調査風景（東区中央：南東から）

FP泥流上面調査。

10月27日～11月7日 遺物・図面基礎整理。調査区周辺整備。

11月8日～12日 東区東 FP泥流下調査準備。遺跡調査区周辺整備。

11月13日～14日 東区東 FP泥流層掘削後、遺構確認・調査。

11月15日 東区東 FP泥流下黒色土面調査。東区西 FP泥流層掘削。

11月18日 東区西 FP泥流下黒色土面調査。

11月19日 東区西 FP泥流下黒色土面調査。

東区中央 FP泥流下黒色土層中の溝断面図実測。

11月20日～21日 東区中央 FP泥流・FA泥流層掘削。FA下黒色土面調査(=同上3)。断面でFA下黒色土面の段差確認。

11月22日 東区東 FP泥流・FA泥流層掘削(クラムシェル使用)。FA下黒色土面調査(=同上4)。事業団内事務局長ほか職員14名視察。

11月25日 東区西 旧中村家墓地跡地調査。

11月26日 東区西 FP泥流・FA泥流層掘削。FA下黒色土面調査(=同上5)。断面にて落ち込み(遺構性格不明)確認。文化財保護課・鉄建公団・事業団の3者にて協議。

試掘結果を文化財保護課に提出。

11月27日～28日 試掘箇所を除き、周辺資材・器材撤去。

11月29日 東区西の埋め戻し決定。

11月30日 調査区埋め戻し完了。調査終了。



F A層下試掘調査風景（東区中央：北から）

〔2〕 調査の方法

本遺跡の調査は『北陸新幹線地域埋蔵文化財調査仕様書』及び『同発掘調査方法について』に準拠し、下記の3工程により実施した。

「第1の方法」は従来通りの調査である。バックホーで表土を除去し、人力で遺構確認のための精査を行い、確認された遺構を発掘し、記録保存するといった方法である。

「第2の方法」は法面養生を施してのオープンカットによる調査である。調査の手順は第1の方法と大差はないが、路線区幅の両端より法を最低でも45°勾配をつけて堆積土を除去する。

「第3の方法」は、「遺構確認調査（深掘り）」と称された調査である。バックホーで堆積土を除去し、断面観察によって遺構の確認を行い、記録するといった方法である。

この3つの調査方法を使い分けた要因は、本遺跡が榛名山東南麓の一部に広がる泥流地帯（最大厚さは5m以上：本遺跡内では厚さは2～4m）の中に立地するためである。この泥流層を境に層上は「第1の方法」、層中は「第2の方法」、層下は「第2・第3の方法」をそれぞれ採った。

以下、その調査工程について概略を記す。

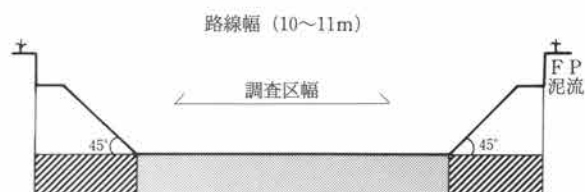
【泥流層上の調査】

ここでいう「泥流層上の調査」とは、FP泥流層の上に存在する遺構面（後述のI・II・III面に相当）の調査をさす。本遺跡内における現地表面からFP泥流層上までの深さは0.4～0.9mである。

調査は、「第1の方法」で行った。

【泥流層中の調査】

ここでいう「泥流層中の調査」とは、FP泥流層とFA泥流層との間に存在する黒色土面（後述のIV面に相当）の調査をさす。本遺跡内におけるFP泥流層の堆積は厚さが1.0～2.0mであり、遺構面の深さは現地表面より1.5～2.5mである。



第5図 泥流層中の調査模式図



泥流層上の調査（東区中央：南東から）



泥流層中の調査（東区西：北西から）

調査は「第2の方法」で行った。

前述のとおり、FP泥流層が調査区両壁面に露出しているため、法面の養生には細心の注意をはかり、最低でも45°勾配の法面を確保した（第5図）。

【泥流層下の調査】

ここでいう「泥流層下の調査」とは、FA層（或いはFA泥流層）の直下に存在する黒色土面及び黒色土中（後述するV面）の調査をさす。本遺跡内におけるFA泥流層+FA層の堆積は厚さが1.1～2.0mであり、遺構面の深さは現地表より3.6～4.3mである。

調査は一部（後述の西区）を「第2の方法」で行い、その他を「第3の方法」で行った。

北陸新幹線地域埋蔵文化財調査の中での重大な検討事項の一つに「泥流地帯の調査」があげられるが、本遺跡でいう「泥流層下の調査」はそれに該当する。

「泥流地帯の調査」については行力春名社遺跡の調査時（平成2・3年度）とその後の遺跡の調査時（平成4年度以降）では、その方法にかなりの違いがある。前者は主に明かり掘削による調査、後者は土止め支保工を用いての調査である。以下、行力春名社遺跡の調査において「泥流層下の調査」が「第2・第3の方法」で調査されるに至った経過を簡単に述べる。

〔3〕 泥流層下の遺構確認調査

西区については平成3年3月6日に実施された「遺構確認調査」によってその存在が確認でき、法面養生を施すことによって竪穴住居3軒の調査を実施した。この地点でのFA泥流はFP泥流に比べて湧水が激しく、法面も45°勾配以上で養生したため、路線幅11.0mに対し調査幅は3.1mにとどまった。この時点で明らかに未調査部分（法面部分）に3軒の竪穴住居が続いていることが判明したため、調査区南に接する道路を高崎土地改良区より借地し、道路部分から掘削することによって路線内の遺構調査を実施した（第6図）。

東区西については平成3年11月26日に実施された「遺構確認調査」によって明らかにAs-C堆積層が何らかの作用で中断する状況が断面観察で確認できた。出土遺物は土師器小片1であった。

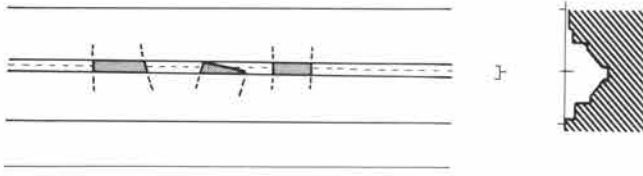


泥流層下遺構確認調査（東区東：東から）



クラムシェルによる確認調査（東区東：東から）

第II章 行力春名社遺跡調査の経過



1. 遺構確認調査

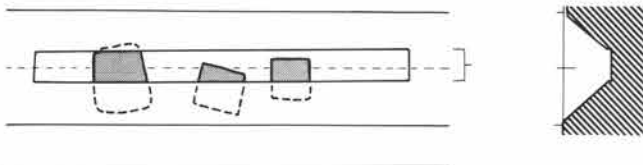
【協議事項】①泥流下層の黒色土は法面カットでバックホーのバケット幅にて遺構を確認する。②遺構が検出されたならば、その調査方法について検討する。

【調査方法】①バケット幅(1.2m)のトレンチを設定する。②泥流下部からは法面カットにより遺構を確認する。

【成果・課題】①3箇所(3箇所)の落込みを確認する。②中央部の落込みのプランでは住居のコーナーを確認する。又、西側落込み部では、古墳時代(5世紀)の高坏が出土する。③古墳時代の集落であることが判明する。



1 試掘(南東から)



2. 本調査I段階

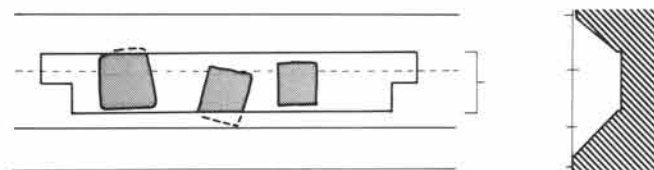
【協議事項】①地山掘削について、シートパイル等の安全対策は無理と判断される。②45°角の法面カット方法により、住居を発掘する。

【調査方法】①現地表面から再掘削し、住居のプランを確認して、床面まで発掘する。

【成果・課題】①1号住居は石製模造品の工房址である。②2号住居は炭化材の保存状況が極めて良好である。③3号住居は完形の土器が多出した。④各住居の特徴より借地することにより、路線幅の完掘を目指す。



2 本調査I段階(北西から)



3. 本調査II段階

【協議事項】①路線幅の南側に付く道路より掘削し、住居全体を完掘する。②道路部分を土地改良区より借地して発掘する。

【調査方法】①本調査I段階の南壁法面を、南側に4.3m拡張する。

【成果・課題】①1号住居では屋根材・貯蔵穴で良好な土器多出。②3号住居も工房址であることが判明する。③出水がひどく、遺構内の調査が困難であり、今後の調査について検討課題を残す。



3 本調査II段階(北西から)

第6図 古墳時代集落調査工程図

東区中央については平成3年6月25日・7月2日・11月19～21日に2地点を2回づつ実施された「遺構確認調査」により、遺構らしきものは溝状落込み1箇所と地表面の段差1箇所が断面観察で確認でき、遺物は黒色土中から木片とFA泥流層の最下層（黒色土に接する箇所）から加工痕(?)を有する木片が確認された。遺物は僅かながら確認できたものの、明確な遺構の確認がとれず、さらには、明かり掘削に伴う土砂崩落の危険性も高まり、安全管理上、これ以上の調査は不可能と判断した。

東区東については平成3年11月22日に実施された「遺構確認調査」によって遺構の存在は確認できなかった。なお、本区の調査にあたりシートパイル等の打設を検討した。しかし、当地のN値(註₁)が高く、打設が不可能であった。そのため次策として、クラムシェルを一部導入したが、泥流という軟弱地盤であるため、効果は思わしくなかった。したがって、結局は従来通りの方法(遺構確認調査)を実施することとなった。

さらに、「遺構確認調査」の実施以前に、ボーリング調査による透水試験を平成3年8月29日～9月5日に実施した。その結果をもとに平成3年9月10日に文化財保護課・事業団と地質コンサルタントで調査方法の協議を行った。まず、透水試験結果からは、

- ①データから見ると、掘削時には相当量の出水が予想される。
- ②FA下黒色土層下の層は透水性の高い土壌である。
- ③行力春名社遺跡は榛名山東南麓の扇状地の急斜面から緩斜面に変化する地域なので水量の多いことは当然予測できる。

の3点が予想された。さらに上記の問題を解決する方法を検討した。

①遺跡調査区全域の調査可能方法？

→現時点で考えられる方法はシートパイルの打設養生がある。

②しかし、この方法の問題点は？

→被圧が高く、ヒーピング現象(註₂)やボイリング現象(註₃)の危険性がある。

③それらの防止策は？

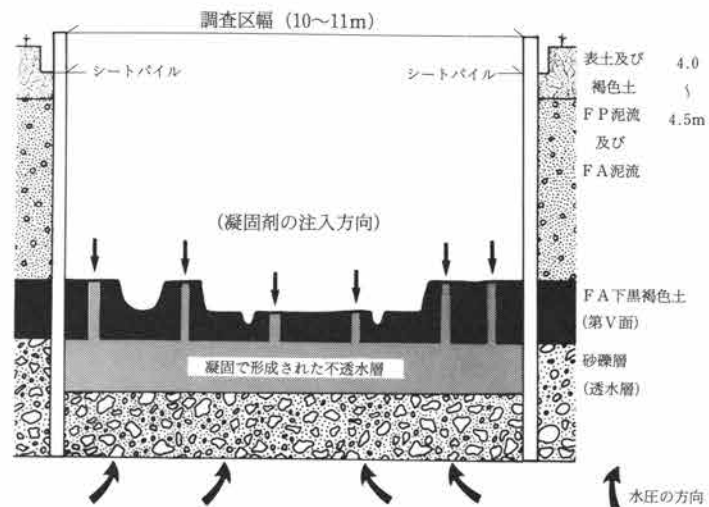
→シートパイルを打設する際に安定した不透水層が必要である。本遺跡範囲ではそれに相当する層がないため、凝固剤の注入により人工的に安定した不透水層を作る必要がある(第7図)。

④この防止策の問題点は？

→《不透水層の形成について》

◇この凝固剤が注入後どの程度の厚さの不透水層を形成し、さらにその不透水層が下層からの水圧にどの程度耐えられるかは判断し難い。

また、この凝固剤を広範囲に使用することはその範囲の水質汚染につながる可能性がある。従って、仮に凝固剤注入が決まった際には事前に上・



第7図 凝固剤による不透水層の形成と調査区状況図

第II章 行力春名社遺跡調査の経過

下流域の水質・環境調査を実施する事が必要である。さらに、凝固剤を調査終了後に如何にして処分するかも検討しなければならない。

《発掘調査への影響について》

◇凝固剤を注入しての調査では、剤による硬化の影響が注入箇所以外の黒色土部分までも及ぶ可能性があり、調査自体が困難になりかねない。

◇凝固剤を注入する場合、50cm間隔での注入が必要である。仮に10m×10mの面積の調査ならば、400箇所の凝固剤注入孔が必要とされる。これは、調査前に相当面積の遺構破壊になる可能性がある。

以上の検討結果から、泥流層下の「遺構確認調査」は「第3の方法」である、オープンカットによる掘方による掘削方法で実施された。

(註1) N値…地層の締めり具合や硬軟の状態を知るための抵抗値のこと。N値を求める試験を標準貫入試験といい、その内容は重さ63.5kgのおもりを高さ75cmの高さから落下させて30cm沈下させるものであり、それにかかった打撃の回数がN値となる。従って、N値が小さいほど地層は軟らかく、逆に大きいほど地層は硬いことが推し量れる。

(註2) ヒービング現象…粘土地盤などで深い掘削が行われるとき、周囲の土止め支保工がしっかり組まれていても、掘削底がふくれ上がってくることもある。

これは、ヒービングあるいは盤ぶくれと呼ばれる現象で、持ち上がった土で支保工が破壊されたり、持ち上がってくる土と支保工の間にはさまれたりすることがあり、大変危険である。この現象は掘削周囲の土の重さによって掘削底部の土が破壊されるために起こる。

(註3) ボイリング現象…地下水位の高い砂地盤での掘削の場合、掘削が深くなると掘削底部の土(砂)は、水圧のため押し上げられ、流動化してくることがある。このような現象をボイリング(クイックサンド)と呼んでいる。

ボイリングが起こればシートパイルの根入れ部分の支持力がなくなるので、土止め支保工は全面的に崩壊することになる。砂質土の地下水位の高いところでの掘削では、このボイリング現象に注意しなければならない。

※引用・参考文献 群馬労働基準局監修・建設業労働災害防止協会群馬県支部編「建設業 安全衛生手帳」平成6年1月

第3節 整理事業の経過

北陸新幹線地域埋蔵文化財整理事業は、平成6年4月より北橋村大字下箱田にある(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団分室で開始された。

行力春名社遺跡の整理事業は平成6年4月から同年9月までの6カ月の期間をもって実施された。

整理事業の主な流れは以下の通りである。

- | | | |
|----|----------------------------|----------------------------|
| 4月 | 【遺構】全体図・第2原図作成 | 【遺物】土器接合・復元 |
| 5月 | 【遺構】写真台帳作成 | 【遺物】土器・石写真撮影、実測 |
| 6月 | 【遺構】トレースおよび原稿執筆 | 【遺物】土器・石拓本、トレース
および原稿執筆 |
| 7月 | 【遺構】版下作成および原稿執筆 | 【遺物】版下作成および原稿執筆 |
| 8月 | 【遺構】【遺物】ともに版下完成
・原稿執筆終了 | |
| 9月 | 遺物および資料一括の収納作業 | |



整理風景(版下作成時)

第三章 遺跡の立地と環境



榛名山東南麓に形成された白川扇状地



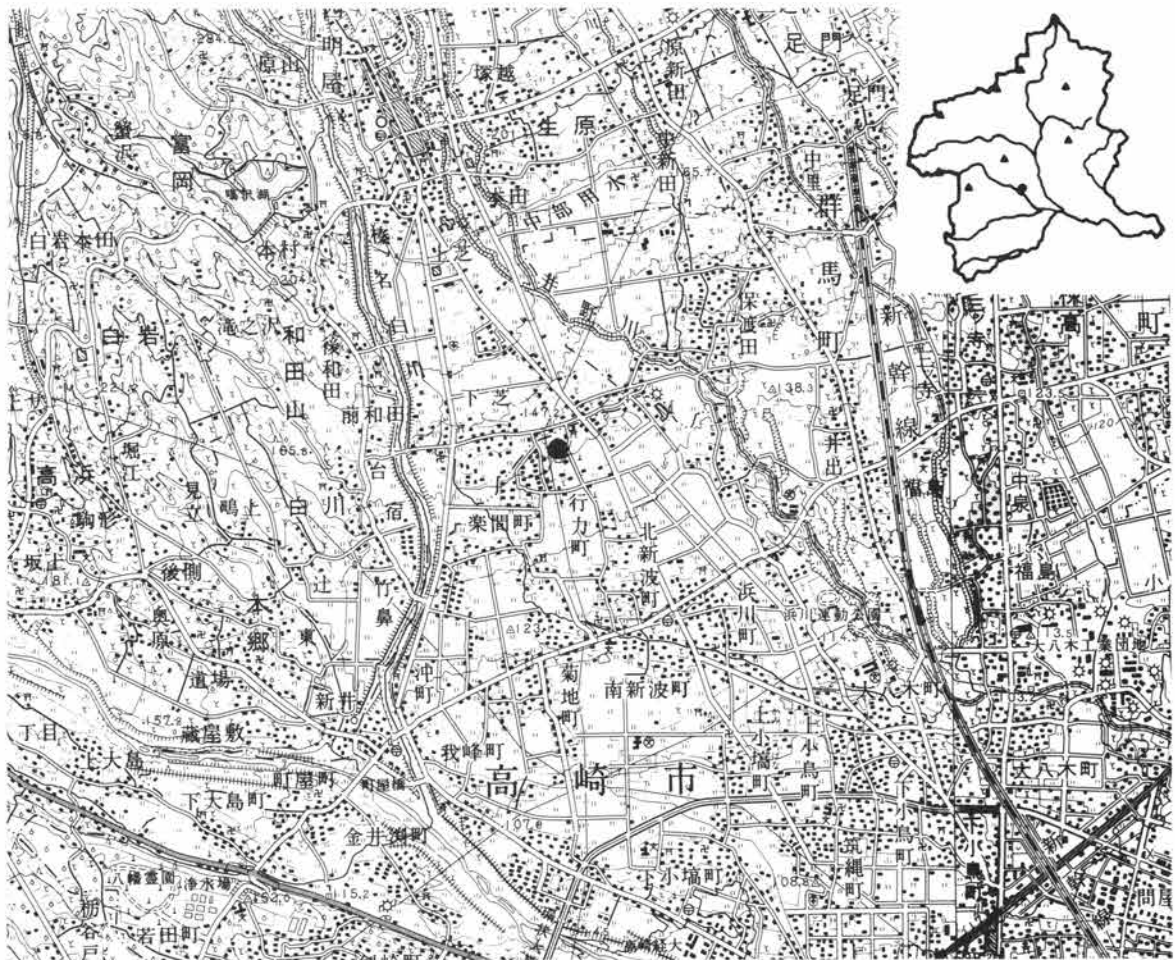
第8図 白川扇状地概略図

第1節 地理・地勢的環境

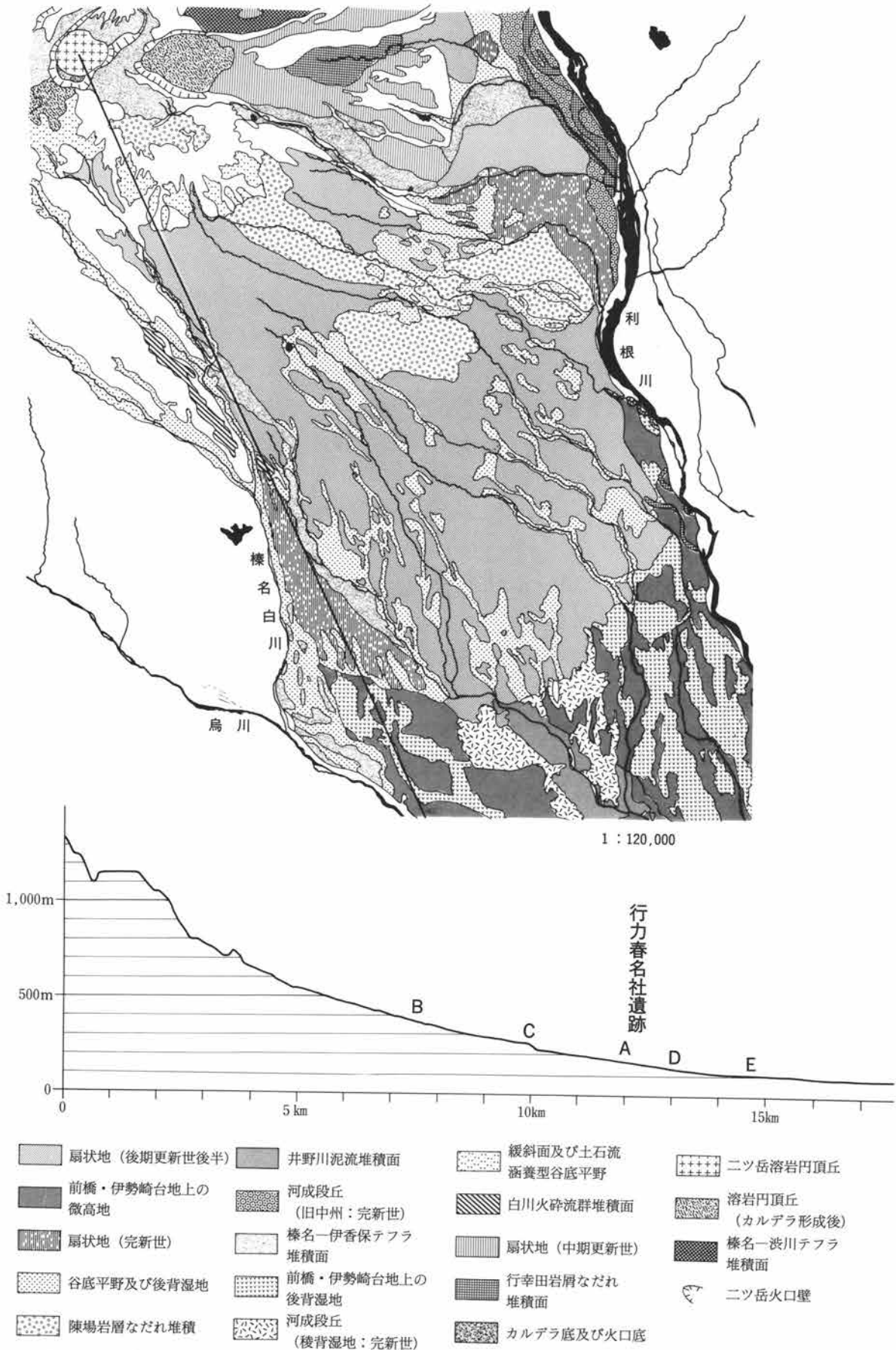
行力春名社遺跡は、地理的には群馬県高崎市行力町字春名社・春名社西・石田にまたがって所在する。高崎市は群馬県の西部に位置し、本県のほぼ中央をほぼ北から南へと流れる利根川の右岸にあり、その大半を関東平野が占める。行力町はその高崎市の北西部、ほぼ南北方向に走行する主要地方道高崎・榛名・吾妻線の西側に近接し、さらに、箕郷町との行政境の南側に近接している。西方1.2kmには榛名白川、東方1.0kmには井野川が流れている。現標高では、140～145m付近である。

また、行力春名社遺跡は、地勢的には榛名山（最高峰掃部ヶ岳標高1448m）東南麓の一部に小規模に発達する「白川扇状地」に位置する。榛名山東南麓は現在では広範囲を「相馬ヶ原扇状地」が占め、その範囲内に端を発する河川が多数存在し、さらに「白川扇状地」が小規模に展開している状況にある。

遺跡の位置する「白川扇状地」は、東を相馬ヶ原扇状地、西を開析谷の発達した台地に挟まれた地域を示し⁽¹⁾、その形成の主たる要因は、北から南へと流れる榛名白川と北西から南東へと流れる井野川に挟まれた地帯への、古墳時代後期の榛名山二ツ岳の噴火に伴う二次的洪水堆積物の流入である。この洪水堆積物は古墳時代の2度にわたる火山活動に伴うものである⁽²⁾。本報告書では1度目の火山活動に伴って噴出したテフラをFAと呼び、これに伴う洪水堆積物をFA泥流と呼ぶ。2度目の火山活動に伴って噴出したテフラをFPと呼



第9図 行力春名社遺跡位置図



第10図 標名山東南麓地形断面図

第III章 遺跡の立地と環境

び、これに伴う洪水堆積物をFP泥流と呼ぶ。

遺跡の西方を流れる榛名白川は、榛名山鷹ノ巣山付近に端を発しており、高崎市金井渕町付近で烏川に合流する。この川は、相馬ヶ原扇状地の形成以前から流れており、白川扇状地形成の一因を担う川として、この地域の地形発達を考える上では見逃せない。一方、遺跡の東方を流れる井野川は、相馬ヶ原扇状地の扇中部に端を発し、高崎市若宮町付近で烏川に合流する。この川は、相馬ヶ原扇状地の形成以後、流れだしたものと考えられる⁽³⁾。

ところで、「白川扇状地」に関連して、不明瞭な点がある。その1つは「扇状地の範囲」である。従来は、漠然と榛名白川と井野川に挟まれた範囲で、扇頂部は箕郷町西明屋付近であり、扇端部は不明であるとの見解⁽⁴⁾があったが、地形的・地理的分析を踏まえた上での正確な範囲は明示されていない。こうした分析を躊躇させた大きな障害は、この扇状地を形成している厚さ2～7m（或いはそれ以上）に及ぶ洪水堆積物であると考えられる。もう1つは「白川扇状地」形成以前の、この地帯の地形の状況である。この点に付いても障害は洪水堆積物である。洪水堆積物層下の地形状況把握の手段の1つとして「遺跡の発掘調査」が挙げられる。その状況とはいえば、これまでは扇状地の範囲内に位置する遺跡の場合、そのほとんどがこの厚い泥流堆積物によって、その下面の調査を拒まれており、有効なデータは多く得られていない。しかし、幸いにして、調査の手の及んだ遺跡の成果によれば、泥流下にはいくつもの微高地が舌状に発達していることが予想されている⁽⁵⁾。

なお、現在の住宅・道路等はこの泥流上に展開しており、この地域に厚い洪水堆積物が堆積していることなど想像もできないようであるが、そうした中でもいくつかの手がかりはある。第1点は130～140m付近の等高線に沿って散見できる湧水地の存在である。洪水堆積物下の地形の傾斜の変換地点を反映している可能性がある⁽⁶⁾。第2点は、現在の住宅地の分布状態である。現状においては近年の圃場整備により、古い要素はかなり失われている。それでも、これまでの数少ない洪水堆積物層下の地形状況と照合してみると、住宅密集地は微高地（居住地帯）、水田地帯は低地（生産地帯）を反映している可能性も考えられる⁽⁷⁾。

最後に、現在の榛名山二ツ岳から白川扇状地までの地形断面によって現在の地形状況をうかがってみると（第10図⁽⁸⁾）、C・D・E地点において地形的な変化が認められる。C地点は、箕輪城跡がある。B～C地点の間においては、泥流堆積物は確認されていない地点がある。C地点の付近は扇頂部と考えられ、C～D間を扇中部、E～を扇端部としてみることができる。本遺跡は、扇中部に位置する。

註 (1) 田口一郎「II・生原遺跡群周辺の環境」『海行A・B遺跡』箕郷町教育委員会 1988 を参考とした。

(2) 早田勉「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27-4 1989

新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』157 1979

を参照した。なお、テフラに関しては後出の「第3章 遺跡の基本層序 第2節 テフラの名称」にて詳細に述べる。

(3) 澤口宏「日高遺跡付近の地形」『日高遺跡』群馬県教育委員会・財団群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 を参考とした。

(4) 早田勉「群馬県の自然と風土」『群馬県史』通史編1 1990 を参考とした。

(5) この指摘に関しては、田村孝氏（高崎市教育委員会）、田口一郎氏（箕郷町教育委員会）、若狭徹氏・清水豊氏（共に群馬町教育委員会）からのご教示をいただいた。

(6) この指摘に関しては、女屋和志雄氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）からのご教示をいただいた。

(7) この指摘に関しては、多くの本地域埋蔵文化財調査担当の方々との情報交換によるものである。

(8) 「第10図 榛名山東南麓地形断面図」の作成にあたっては、早田勉作成「付図2 群馬県内主要地域の地形分類図」『群馬県史 通史編第1巻』群馬県史編さん委員会編 1990 を参考とし、一部引用した。

第2節 歴史的環境

白川扇状地内に位置する行力春名社遺跡は、その特徴として、いわゆる「泥流層下」の遺構を検出したことが挙げられる。今日までに白川扇状地内では数多くの遺跡が発掘調査されてきた(付図1)。しかし、その多くは白川扇状地を形成する厚い洪水堆積物によって、「泥流層下」の調査には至らず、僅かな調査事例のほかは、遺構が日の目を見ることはなかった。よって、行力春名社遺跡において、同種の遺構が小規模ながら検出されたことは、当地の古墳時代社会の環境を考える上でその意義は大きい。

本節では、白川扇状地内における洪水堆積物堆積前後の遺跡調査状況について述べる。なお、本遺跡周辺地域の他時代・時期の遺跡については、第11図及び、第4・5表にまとめた。詳細な解説については割愛させていただく。ご容赦願いたい。

【As-C層下の状況】

As-C層によって覆われた遺構がこれに相当する。

後述するように、白川扇状地を形成する洪水堆積物の存在によって、その下層にあるAs-C下面の調査事例は少ない。行力春名社遺跡ではAs-C層の存在は土層断面によって確認されているものの、遺構調査には及んでいない。白川扇状地内では、浜川遺跡群⁽¹⁾(畷群埋文)、御布呂遺跡(高崎市教委調査)、芦田貝戸遺跡(高崎市教委調査)、がある。いずれも調査成果から不規則方向の畦畔による中～大区画の水田が広域に展開していることが伺える。また、集落(居住域)の確認はないが、近接地区では井野川左岸の保渡田VII遺跡(第11図40)でAs-C層が覆土下層に堆積する住居群が検出されている。調査事例が極めて少ないため、遺跡の希薄さを想像してしまうが、少ない調査事例ながらも広域的に生産遺構が展開していることを踏まえると、後に訪れる古墳時代中期以降の地域展開の基盤が既にこの段階に整い始めていた可能性が伺える。

【FA及びFA泥流層下の状況⁽²⁾】

後に白川扇状地が形成される範囲内において、FA及びFA泥流層下より検出されている遺跡は少ない。特に後に扇央部となり得る高崎北部・箕郷町南部地域については洪水堆積物が大きな障害となり、調査された遺跡は数える程である。行力春名社遺跡のほかに、下芝谷ツ遺跡(箕郷町教委調査)、下芝五反田遺跡(箕郷町教委調査)、下芝遺跡群(畷群埋文調査)、道場・谷津遺跡(高崎市教委調査)、浜川遺跡群(畷群埋文調査)、御布呂遺跡(高崎市教委調査)、芦田貝戸遺跡(高崎市教委調査)、がある。

下芝谷ツ遺跡(第11図63)は、5世紀末に比定される下芝谷ツ古墳が含まれている。この古墳は一辺約20mの二段築成の方墳であり、竪穴式石室内出土の副葬品(馬具、甲冑、飾履、装飾品等)も豊富で、特徴的である。現井野川の対岸にある、保渡田3古墳や三ツ寺I遺跡とほぼ同時に存在していることから、この地域の特徴的な状況を象徴する古墳である。

下芝五反田遺跡⁽³⁾(第11図中未掲載)は行力春名社遺跡の北西約0.3kmに位置している。調査面積は少ないながら、朝鮮三国系軟質土器を伴う祭祀遺構が検出されている。下芝谷ツ古墳の出土遺物と併せて、この地域の朝鮮半島との関連性を伺わせる遺跡である。

下芝遺跡群⁽⁴⁾(第11図中未掲載・第105図8～12)は行力春名社遺跡西端から榛名白川に至るまでの約1.0kmの間の北陸新幹線建設工事に伴う遺跡群である。この遺跡群の東端の調査区からは土器集積遺構や埋没住居、畠等が多数検出されている。井野川右岸としては、はじめてのまとまった集落(居住域)として注目される。

道場・谷津遺跡(第11図23)は井野川に近接しており、古墳2基(前方後円墳・円墳?)が検出されてい

第III章 遺跡の立地と環境

る。いずれも周堀覆土下層にFAが認められる。なお、この遺跡では現地表よりFA堆積層まで僅か0.7~1.0 mの深さしかなく、洪水堆積物が覆われていないことが、当時の地形を考える上で興味深い。また、この遺跡は現状では井野川の右岸に位置するが、井野川の旧流路が西に動く可能性もあるため、そうした場合、左岸に位置していたことも考えられる。

浜川遺跡群（第11図中未掲載・第105図3~6）は行力春名社遺跡東端から井野川に至るまでの約2.0kmの間の北陸新幹線建設工事に伴う遺跡群である。調査全域が水田を主体とする生産遺構であり、広域的な生産域の存在を示している。調査区が狭いことを考慮しなければならないものの、この遺跡群内では大型水路らしき遺構が未検出であり、右岸における広域的な水田経営方法について検討の必要がある。

御布呂遺跡（第11図28）は水田を主体とした遺跡であり、水田耕作時の土地利用を伺うことができる。

芦田貝戸遺跡（第11図29）は水田を主体とした遺跡である点は御布呂遺跡と同様であるが、それに伴って大溝（上幅10m、深さ3m以上）や微高地上の住居が検出されている。大溝はこの地域の土木灌漑技術の高さを伺わせるものと言え、微高地上住居は水田耕作を取り込む集落の一側面を示している。

以上、特筆すべきは、下芝谷ツ古墳の墳形と副葬品、下芝五反田遺跡の出土土器、下芝遺跡群からの特異な遺構、行力春名社遺跡の玉作など、数少ない調査数ながらも、特徴的な遺構・遺物が高い頻度で検出されている点である。

前節でも述べたが、この地域の泥流層下は不明な点が多に多い。当該時期の遺跡分布度を現井野川左岸と比較した場合、その希薄さが際だが、これは泥流が障害となっているためであり、遺跡の実際を示していないと思われる。むしろ、少ないながらも高い頻度で遺跡・遺構が検出されている事は、濃い遺跡分布を内包している事を想像させる。

【FP泥流層⁽⁵⁾下の状況】

FP泥流層下面はFA泥流層堆積活動終了後に形成し始める土壤がそれに相当する。形成期間が短期間⁽⁶⁾であるため、土壤の厚さが10cm以上あるところから、1cm以下しかないところまで、様々である。従って、文化層を形成するに耐え得る安定した土壤を、必ずしも持ち得ておらず、泥流層下という同じ条件下でもFA泥流層下に比して、検出遺構は少ない。行力春名社遺跡では、この土壤は厚さ2~5cmであり、泥流直下の地表面以外に明確な遺構は検出されなかった。

この面の調査事例としては、浜川遺跡群（跡群埋文調査）、御布呂遺跡（高崎市教委調査）、がある。いずれも、規則的な小区画水田が検出されている。なお、芦田貝戸遺跡では相当する土壤の層厚が薄いため、水田遺構は確認されていない。下芝遺跡群等の行力春名社遺跡以北についても、同様の理由で遺構検出に至っておらず、この地表面については広域的な集落遺跡の存在の可能性は高くないことが、現状では予想できる。

註 (1) 平成3~6年にかけて調査された「御布呂遺跡」「芦田貝戸遺跡」「餅井貝戸遺跡」「浜川館遺跡」「高田屋敷遺跡」「浜川長町遺跡」の総称として、本書で便宜的に用いた名称である。

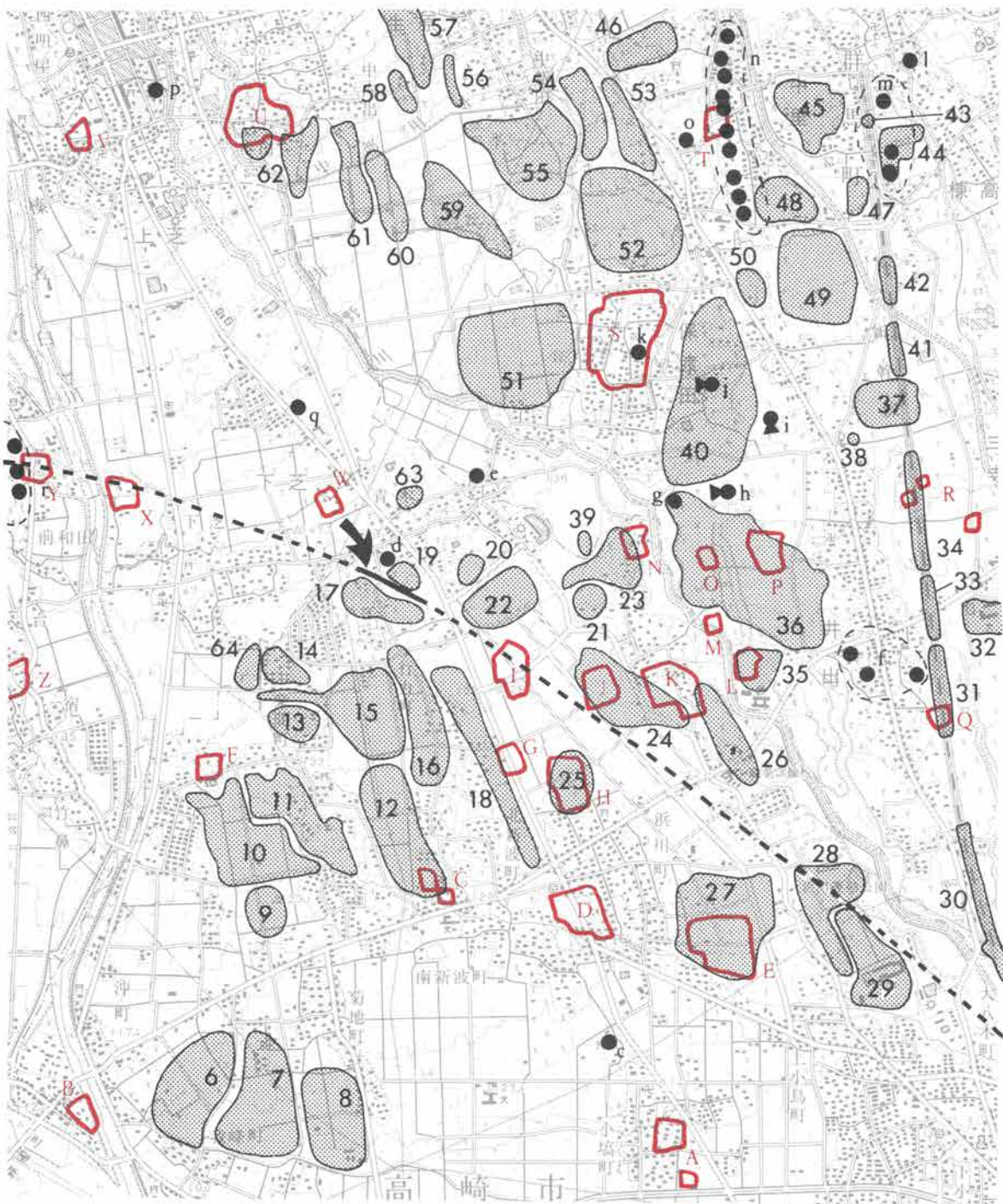
(2) FAとFA泥流には時間差がある。そのため、厳密には両者を同一視する事は適切でない。しかし、現状においてこの両者の間に遺構を伴う土壤が存在する例が公表されていないため、時間差が短いものと考え、便宜的に同一視することにした。

(3) 「下芝五反田遺跡」の名称は、跡群埋文調査の下芝遺跡群中でも「下芝五反田I~IV遺跡」として使われている。

(4) 平成5~6年にかけて調査された「下芝五反田I~IV遺跡」の総称として、本書で便宜的に用いた名称である。

(5) 本地域はFPの降下範囲ではないため、FPの堆積は見られない。また、FPとそれに伴う洪水堆積物（FP泥流）には時間差がある。そのため、厳密には両者を同一視する事は適切でない。しかし、現状においてこの両者の間に遺構を伴う土壤が存在する例が公表されていないため、時間差が短いものと考え、便宜的に同一視することにした。

(6) FA泥流堆積活動終了後、FP泥流堆積活動が開始されるまでの期間がどの位であったかは、明確でない。FAとFPの時間差は「20~30年」、「50年前後」などの実数値が提示されているが、定かでない。しかし、両泥流直下の土器相を何う限りでは、ともに古墳時代中期末~後期前半に納まるようなので実数値を大きく逸脱することはないと考えられる。従って、両泥流が各テフラ降下からさほど時間差を持たずに堆積し始めたという前提に立てば、FAとFPの時間差とほぼ同様に考えても差し支えがないと言える。



矢印.行力春神社遺跡 1.並榎北遺跡 2.上並榎下松遺跡 3.上並榎御料所遺跡 4.上並榎下松II遺跡
 5.筑縄遺跡群 6~11.菊地遺跡群 12.北新波遺跡 13~18.長野北部遺跡群 19.行力遺跡群 20・21.浜川北
 遺跡 22~24.道場遺跡群 25.矢島遺跡 26.館遺跡 27.寺の内遺跡 28.御布呂遺跡 29.芦田貝戸遺跡 30.
 熊野堂遺跡 31.井出村東遺跡 32.中林遺跡 33.三ツ寺I遺跡 34.三ツ寺II遺跡 35.同道遺跡 36・37.井
 出地区遺跡群 38.上井出遺跡 39.保渡田皿掛遺跡 40.保渡田VII遺跡 41.三ツ寺III遺跡 42.保渡田遺跡
 43.中里天神塚古墳 44~48.中里遺跡群 49.保渡田東遺跡 50.徳昌寺前遺跡 51.保渡田III遺跡 52.保渡
 田荒神前遺跡 53~62.生原遺跡群 63.下芝・谷ツ遺跡 64.下芝・原遺跡 A.八木屋敷 B.住古城 C.北新
 波の砦 D.北爪の砦 E.寺の内館 F.井野屋敷 G.長町屋敷 H.矢島の砦 I.与平屋敷 J.高田屋敷 K.浜
 川館 L.同道館 M.元井出館 N.乙薬館 O.花城寺館 P.熊野館 Q.井出東館 R.三ツ寺環濠遺跡群 S.
 保渡田城 T.中里屋敷 U.生原の内出 V.下田屋敷 W.下芝の砦 X.青柳屋敷 Y.和田山館 Z.白川の砦
 a.上並榎稻荷山古墳 b.筑縄小星山古墳 c.上小塙稻荷山古墳 d.榛名神社社古墳 e.愛宕塚古墳 f.井出
 古墳群 g.明神山古墳 h.二子山古墳 i.八幡塚古墳 j.薬師塚古墳 k.天子塚古墳 l.薬師堂古墳 m.毘沙
 門古墳群 n.屋舗古墳群 o.大塚山古墳 p.上芝古墳 q.四ツ谷古墳(推定) r.和田山古墳群



第11図 周辺遺跡分布図

第III章 遺跡の立地と環境

第4表 周辺遺跡一覧(1)

No	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	報告書等文献
1	並榎北遺跡	高崎市並榎町字才摩	弥生後期・古墳・平安時代水田	『並榎北遺跡』1988 高崎市
2	上並榎下松遺跡	高崎市上並榎町字下松	古墳・平安時代水田	『上並榎下松IIほか』1993 高崎市
3	上並榎御料所遺跡	高崎市上並榎町字御料所	古墳・平安時代水田	『上並榎御料所遺跡』1993 高崎市
4	上並榎下松II遺跡	高崎市上並榎町字下松	古墳・平安時代水田	『上並榎下松IIほか』1993 高崎市
5	筑縄遺跡群	高崎市筑縄町字妙義前	古墳時代後期円墳(小星山古墳)	『筑縄遺跡群』1985 高崎市
6	菊地遺跡群(I)	高崎市菊地町字薬師前 他	平安時代水田	『菊地遺跡群(I)』1981 高崎市
7	菊地遺跡群(II)	高崎市菊地町六反田 他	平安時代水田	『菊地遺跡群(II)』1982 高崎市
8	菊地遺跡群(III)	高崎市我峰町字当貝戸 他	平安時代水田・住居	『菊地遺跡群(III)』1983 高崎市
9	菊地遺跡群(IV)	高崎市菊地町字上野前・字大明神	平安時代水田 中世掘立柱建物	『菊地遺跡群(IV) 上野前(I)・大明神(I)遺跡』1984 高崎市
10	菊地遺跡群(V)	高崎市菊地町字上野前・字大明神(II)・五反田(II)遺跡	平安時代水田 自然流路	『菊地遺跡群(V) 上野前(II)・大明神(II)・五反田(II)遺跡』1985 高崎市
11	菊地遺跡群(VI)	高崎市桑間町字石神・字五反田	平安時代水田・住居	『菊地遺跡群(VI) 石神・五反田(II)遺跡』1986 高崎市
12	北新波遺跡	高崎市北新波町字古城・石神・字関前	平安時代水田・住居	①『北新波遺跡』1982 ②『北新波の管址—古城(II)』1985 ③『北新波の管址—古城(III)』1986 全て高崎市
13	中屋敷(I)遺跡	高崎市行力町字中屋敷	平安時代水田	『長野北部遺跡群 中屋敷(I)・舞台(III)遺跡』1985 高崎市
14	中屋敷(II)遺跡	高崎市桑間町字舞台・字清水・箕郷町下芝字原	舞台…平安時代住居・水田 清水…平安時代住居(緑釉陶器多く出土)	『長野北部遺跡群 舞台(II)・清水(II)遺跡』1984 高崎市
15	中屋敷西(I)・殿田・清水(I)・舞台(I)遺跡	高崎市行力町字中屋敷西、桑間町字殿田・字清水・字舞台	中屋敷西…平安時代水田・中世堀殿田…平安時代水田 清水…平安時代住居 舞台…平安時代水田	『長野北部遺跡群 中屋敷(I)・殿田・清水(I)・舞台(I)遺跡』1983 高崎市
16	中屋敷西(II)・上屋敷(I)・舞台(III)遺跡	高崎市北新波町字関端、行力町字中屋敷・字江原、桑間町字舞台	江原・中屋敷西・上屋敷・舞台…平安時代住居・水田	①『長野北部遺跡群 江原(I)・中屋敷西(II)・上屋敷(I)遺跡』1984 高崎市 ②『長野北部遺跡群 中屋敷(I)・舞台(III)遺跡』1985 高崎市
17	一丁田・榛名社西遺跡	高崎市行力町字一丁田・榛名社・字榛名社西・字石田	平安時代水田	『長野北部遺跡群 一丁田・榛名社西遺跡』1988 高崎市
18	六反田・中屋敷(II)遺跡	高崎市行力町字中屋敷、北新波町字六反田 他	平安時代水田	『長野北部遺跡群 六反田・中屋敷(II)遺跡』1986 高崎市
19	行力遺跡群榛名社遺跡	高崎市行力町字榛名社	平安時代集落 中世館関連遺構	『行力遺跡群榛名社遺跡』1990高崎市
20	浜川北遺跡(西区)	高崎市浜川町字踏分	平安時代水田 近世溝	『浜川北遺跡』1989 高崎市
21	浜川北遺跡(東区)	高崎市浜川町字谷乙	平安時代住居 中世館関連遺構	『浜川北遺跡』1989 高崎市
22	道場遺跡群	高崎市浜川町字長町・踏分	平安時代水田	『道場遺跡群』1989 高崎市
23	谷津・道場遺跡	高崎市浜川町字谷津・道場	後期古墳2基 平安時代住居・水田	『道場遺跡群』1989 高崎市
24	高田・館遺跡	高崎市浜川町字高田・館	平安水田 土壘・堀を有する中世館	『道場遺跡群』1989 高崎市
25	矢島遺跡	高崎市浜川町字矢島	二重の堀を有する中世館址	『矢島・御布呂遺跡』1979 高崎市
26	館遺跡	高崎市浜川町字館	緑釉陶器等を出土する平安時代集落	『寺ノ内遺跡』1979 高崎市
27	寺ノ内遺跡	高崎市浜川町字町東・殿木	三重の堀を有する中世館址	『寺ノ内遺跡』1979 高崎市
28	御布呂遺跡	高崎市浜川町字御布呂字芦田貝戸	古墳・平安時代水田址	①『矢島・御布呂遺跡』1979 高崎市 ②『御布呂遺跡』1980 高崎市
29	芦田貝戸遺跡	高崎市浜川町字芦田貝戸	古墳・平安時代水田址 古墳時代大溝・微高地上集落を伴う	①『芦田貝戸遺跡』1979 高崎市 ②『芦田貝戸遺跡II』1980 高崎市
30	熊野堂遺跡	高崎市大八木町字熊野堂、群馬町井出字東下井出、福島字熊野堂 他	縄文前期住居 弥生時代中期末～中近世集落 中世館址状遺構群 道路状遺構(推定東山道)	①『熊野堂遺跡(1)』1984 ②『熊野堂遺跡第三地区・雨壺遺跡』1984 ③『熊野堂遺跡(2)』1990 全て(鉾群埋文)
31	井出村東遺跡	群馬町井出字村東	弥生時代後期～中近世集落	『井出村東遺跡』1983 遺跡調査会
32	中林遺跡	群馬町中林字藤塚道下	古墳後期住居 平安時代水田・住居	『中林遺跡調査概報』1983 群馬町
33	三ツ寺I遺跡	群馬町三ツ寺字藤塚道上	古墳時代居館址 平安時代水田	『三ツ寺I遺跡』1988 (鉾群埋文)
34	三ツ寺II遺跡	群馬町三ツ寺字桁街道 他	縄文前期住居 弥生後期～平安集落	『三ツ寺II遺跡』1991 (鉾群埋文)
35	同道遺跡	群馬町井出字同道	古墳・平安時代水田	『同道遺跡』1983 (鉾群埋文)
36	井出地区遺跡群(A区)	群馬町井出字元井出 他	古墳・平安時代水田	『井出地区遺跡群』1992 群馬町
37	井出地区遺跡群(B区)	群馬町井出字上井出 他	遺構未検出	『井出地区遺跡群』1992 群馬町
38	上井出遺跡	群馬町井出字上井出	古墳時代中～後期の祭祀遺構	『群馬考古学手帳vol.3』1992
39	保渡田皿掛遺跡	群馬町保渡田字皿掛	平安時代水田	『保渡田荒神前皿掛遺跡』1988 群馬町
40	保渡田VII遺跡	群馬町保渡田字八幡塚、井出字二子山 他	縄文前期土坑 古墳前期集落 保渡田古墳群関連の遺構群	①『保渡田遺跡群第VII次(1)』1989 群馬町 ②『保渡田VII遺跡』1990 群馬町

第5表 周辺遺跡一覧(2)

No	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	報告書等文献			
41	三ツ寺III遺跡	群馬町三ツ寺鍛冶街道	古墳時代後期～平安時代集落	『三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』1985 榑群埋文			
42	保渡田遺跡	群馬町保渡田字鍛冶街道	古墳時代後期～平安時代集落				
43	中里天神塚古墳	群馬町中里字毘沙門	後期古墳				
44	毘沙門遺跡	群馬町中里字毘沙門	縄文前期遺物包含層 中世溝				
45	中道遺跡	群馬町中里字中道	旧河道位置確認ボーリング調査	『中里遺跡群西芝・中道・押出・薬師遺跡・毘沙門遺跡(1)』1991 群馬町			
46	西芝遺跡	群馬町中里字西芝	古墳・平安時代住居				
47	薬師遺跡	群馬町中里字薬師	近世土坑墓				
48	押出遺跡	群馬町中里字押出	テフラ堆積層のみ確認				
49	保渡田東遺跡	群馬町保渡田字中里前 他	奈良時代～平安時代集落	『保渡田東遺跡』1986 群馬町			
50	徳昌寺前遺跡	群馬町保渡田字徳昌寺前	古墳時代遺物包含地	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
51	保渡田III遺跡	群馬町保渡田字地蔵前	古墳時代水田? 平安時代水田	『保渡田III遺跡』1983 群馬町			
52	保渡田荒神前遺跡	群馬町保渡田字荒神前	弥生時代後期～古墳時代初頭集落 後期古墳 奈良・平安住居 中近世溝	『保渡田荒神前・皿掛遺跡』1988 群馬町			
53	海行A遺跡	箕郷町生原字海行 他	古墳 古墳時代後期・平安時代集落	『海行A・B遺跡』1988 箕郷町			
54	海行B遺跡	箕郷町生原字海行 他	古墳時代後期・平安時代集落				
55	善龍寺前遺跡	箕郷町生原字善龍寺前	縄文中期集落 古墳後期集落 古墳	『生原・善龍寺前遺跡』1986 箕郷町			
56	中新田遺跡	箕郷町生原字中新田	奈良～平安時代集落				
57	八反島遺跡	箕郷町生原字八反島	縄文中期住居 奈良～平安時代集落				
58	諏訪遺跡	箕郷町生原字諏訪	平安時代住居				
59	飯盛遺跡	箕郷町生原字飯盛	古墳～平安時代集落 戦国期居館				
60	佐藤遺跡	箕郷町生原字佐藤	奈良時代集落				
61	堀ノ内遺跡	箕郷町生原字堀ノ内	奈良～平安時代集落				
62	薬師遺跡	箕郷町生原字薬師	奈良～平安時代集落				
63	下芝・谷ツ遺跡	箕郷町下芝字谷ツ	FA泥流埋没の古墳(下芝谷ツ古墳含)	『日本考古学年報39』1986			
64	下芝・原遺跡	箕郷町下芝字原	平安時代水田 中近世土坑・溝	『下芝・原遺跡』1983 箕郷町			
	名称	所在地	①存続期間 ②築・在城者	名称	所在地	①存続期間 ②築・在城者	
A	八木屋敷	高崎市上小堀町村前	②八木氏	O	花城寺館	群馬町井出元井出 他	①16世紀②長野氏
B	住吉城	高崎市中町堀	①16世紀②清水文書	P	熊野堂館	高崎市大八木町熊野堂・群馬町井出	
C	北新波の砦	高崎市北新波町古城	①16世紀②新波新左衛門	Q	井出東館	群馬町井出元井出	①14世紀?
D	北爪の砦	高崎市浜川町北城	①16世紀②北爪土佐	R	三ツ寺環濠遺跡群	群馬町三ツ寺西原道・長野寺 他	
E	寺の内館	高崎市浜川町寺の越	①10世紀・16世紀	S	保渡田城	群馬町保渡田屋敷廻	①天正10年②内藤昌月
F	井野屋敷	高崎市楽間町石田	①16世紀②井野氏	T	中里屋敷	群馬町中里屋敷	
G	長町屋敷	高崎市浜川町長町		U	生原の内出	箕郷町生原中内出 他	
H	矢島の砦	高崎市浜川町矢島 他	②矢島貞勝	V	下田屋敷	箕郷町上芝内出	②下田政勝
I	与平屋敷	高崎市浜川町与平		W	下芝の砦	箕郷町下芝内出畑	
J	高田屋敷	高崎市浜川町高田		X	青柳屋敷	箕郷町下芝かさ	
K	浜川館	高崎市浜川町館 他	①16世紀②長野氏	Y	和田山館	箕郷町和田山 他	②白川満勝
L	同道館	群馬町井出同道	①16世紀	Z	白川の砦	箕郷町白川	
M	元井出館	群馬町井出元井出	①16世紀②長野氏				
N	乙業館	高崎市浜川町乙業 他	②長野乙業				
	古墳名	所在地	①墳形 ②規模 ③時期	参考文献等			
a	上並榎稲荷山古墳	高崎市上並榎町字八反田	①前方後円墳 ②120m ③5世紀末	右島和夫『東国古墳時代の研究』1994			
b	筑縄小星山古墳	高崎市筑縄町字妙義前	①円墳 ②径25m ③6世紀	『筑縄遺跡群』1985 高崎市			
c	上小堀稲荷山古墳	高崎市上小堀町字稲荷前	①円墳 ②径45m ③6世紀中	『高崎市史研究 第2号』1992 高崎市			
d	榛名社神社古墳	高崎市行力町字榛名社	①円墳 ②径25m? ③7世紀中	『高崎の散歩道 第7集』1978 高崎市			
e	愛宕塚古墳	群馬町保渡田字阿弥陀	①円墳	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
f	井出古墳群	群馬町井出字下布留 他	①円墳群	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
g	明神山古墳	群馬町井出字北畑	①円墳?	群馬町教委・清水豊氏よりご教示			
h	井出二子山古墳	群馬町井出字二子塚	①前方後円墳 ②108m ③5世紀後半	『三ツ寺I遺跡』1988 榑群埋文			
i	保渡田八幡塚古墳	群馬町保渡田字薬師塚	①前方後円墳 ②102m ③5世紀末	『三ツ寺I遺跡』1988 榑群埋文			
j	保渡田薬師塚古墳	群馬町保渡田字薬師前	①前方後円墳 ②105m ③5世紀末	『保渡田VII遺跡』1990 群馬町			
k	天子塚古墳	群馬町保渡田字屋敷廻	①円墳	『群馬都市計画区域図10』1990 群馬町			
l	薬師堂古墳	群馬町足門字稲荷台	①円墳	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
m	屋舗古墳群	群馬町中里字屋舗 他	①円墳群	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
n	毘沙門古墳群	群馬町中里字毘沙門	①円墳群	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
o	浅間塚古墳	群馬町中里字六反田	①円墳	『群馬町の遺跡』1986 群馬町			
p	上芝古墳	箕郷町上芝字本町	①帆立貝式墳 ②不明 ③6世紀中	『箕郷町誌』1975 箕郷町			
q	四ツ谷古墳(推定)	箕郷町上芝字四ツ谷	①円墳 ②径20m	『箕郷町誌』1975 箕郷町			
r	和田山古墳群	箕郷町和田山字天神前	①円墳群 ③6世紀～7世紀	『年報12』1993 榑群埋文			

※A～Zについては、『群馬県の中世城館跡』1988 群馬県教育委員会を参考・引用。



第12図 遺跡周辺字境図

第3節 テフラの呼称について

榛名山における古墳時代後期の2度の火山活動については、前述（第2章 第1節参照）した。この榛名山（現在の二ツ岳の位置）から噴出した2つのテフラの呼称については、現在のところ、さまざまな呼称法・呼称が使われており、また、誤解もある。ここでは、2つのテフラについて、

- ①本書で使用するテフラの呼称を早田（1989）による分類と対比する（第13図）。
- ②現在までに使われてきたテフラの呼称を主要な文献から取り出し、整理したい（第6表）。

(1) ①本書で使用するテフラの呼称について

a) FA・FA泥流とHr-Sについて 早田は、従来、「FA」と呼ばれてきたテフラを、12のテフラ・メンバーに分類した「Hr-S」（榛名—渋川テフラ層）の中に組み込んだ（第13図）。また、Hr-S噴出後の短期間に発生した洪水堆積物は、「S洪水堆積物」と呼び、テフラとしてHr-Sの中に位置づけている。

b) FP・FP泥流とHr-Iについて 早田は、「FP」と呼ばれてきたテフラを、14のテフラ・メンバーに分類した「Hr-I」（榛名—伊香保テフラ層）の中に組み込んだ（第13図）。また、火砕流が流走中に泥流に移行した泥流堆積物や、その後、比較的短期間のうちに発生した洪水の堆積物を総称して、「I洪水堆積物」と呼び、テフラとしてHr-Iの中に位置づけている。

c) 本書で使用するテフラの呼称について 早田による分類は、黒井峯遺跡（北群馬郡子持村）や中筋遺跡（渋川市）などの発掘調査で用いられ、多くの成果をあげている。だが、現在のところ、早田の分類は、榛名山東麓方面のみで使用されており、行方春名社遺跡の位置している榛名山東南麓方面では用いられていない。また、本遺跡で観察した火山灰が、何番のテフラ・メンバーに相当するかはわかっていない。よって、本書では、発掘調査の時に使用していたテフラ名「FA」「FP」の呼称を使用する。洪水堆積物についても同様に「FA泥流」「FP泥流」を使用する。今後、榛名山東南麓地域の発掘調査において、検出されたテフラが早田のいうテフラ・メンバーのどこに位置づけられるかがわかれば、テフラ降下後に災害復旧し、その後の泥流等によって埋没した遺構も、火山活動の時間経過の中で説明できる時がくるであろう。

(2) ②テフラの呼称の整理

古墳時代後期に榛名山が噴出した2つのテフラについて、本報告書で用いる「FA」「FP」の呼称と記号の変遷をたどった（第6表）。

新井（1971）は、新井（1962）の「二ツ岳浮石層」の呼称を改め、「二ツ岳軽石層」とし、その記号を「FP」として、初めてこれを用いた。

その後の発掘調査の成果によって「FA」が確認される。そして、「FA」「FP」の降下推定時期が、考古学的編年のもとに決定されていく。

早田（1989）は、「FA」「FP」とは呼称法が異なり、「Hr-S」（榛名—渋川テフラ層；渋川市南原にて観察）、「Hr-I」（榛名—伊香保テフラ層；伊香保温泉湯元にて観察）とし、榛名山と観察地点の名称を用いており、降下テフラや火砕流とともに、その後の泥流堆積物や洪水堆積物をも総称した。早田は、テフラの特徴である同時性や分布特性だけでなく、火山活動の時間経過を追い、新しい視点でテフラを観察した成果を示している。また、二ツ岳溶岩円頂丘は、一連の火山活動が終了した後に形成されたものであり、現二ツ岳が爆発したものでないことから、今後、早田（1989）の呼称を使用する意味あいは、さらに強まるものと考えられる。

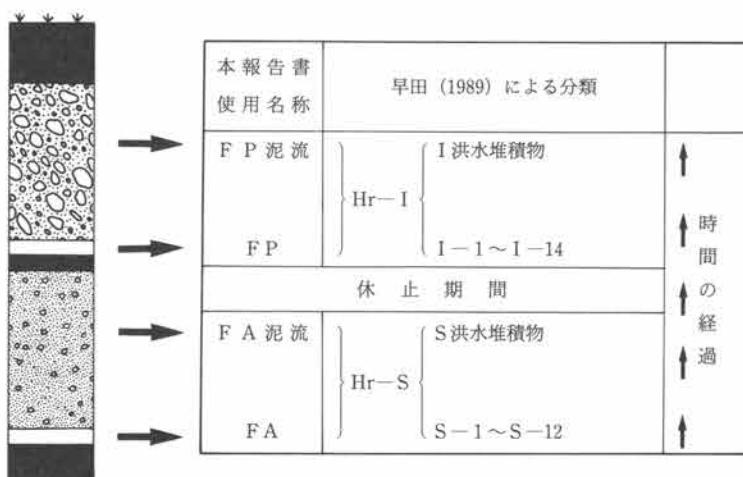
一方、能登（1989）は、Haruna Futatsudake ash の略号、頭文字から「Hr-FA」（二ツ岳火山灰）という

第III章 遺跡の立地と環境

呼称を用いる。また、同様にして、Haruna Futatsudake pumice から「Hr-FP」(二ツ岳軽石)としている。

しかし、能登(1990)は、従来どおりの「FA」「FP」を用いており、前回の呼称にこだわりを持たない。

町田・新井(1992)は、新井(1979)と早田(1989)を編集し、「Hr-FA」(榛名二ツ岳洪川テフラ)、Hr-FP(榛名二ツ岳伊香保テフラ)という呼称を用いた。これは、「テフラ名を簡略化した記号については、なるべく従来の用法に従うが、テフラ名と同様、火山名と分布地名の



第13図 本書と早田(1989)におけるテフラ呼称対応図

略号をつけることが望ましい」(下線部は筆者)という理由による。

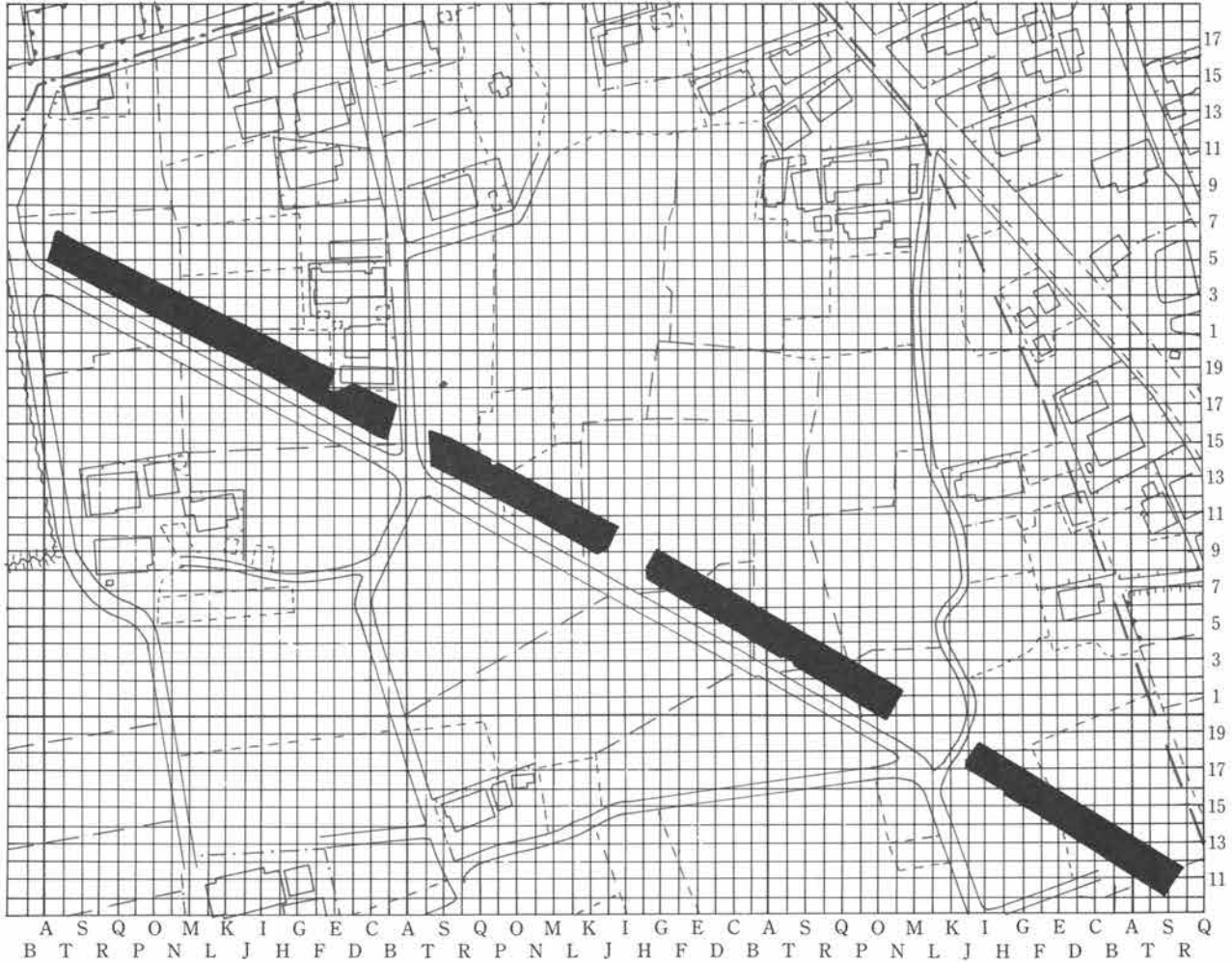
第6表 FA・FPの呼称の変遷

記号	テフラ名	降下時期	呼称者(発表年)・文献名
	二ツ岳浮石層	6世紀末期 (尾崎1961)	新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」 『群馬大学紀要自然科学編』第10巻第4号
FP	二ツ岳軽石層	6世紀末期 (尾崎1961)	新井房夫(1971)「前橋の地形・地質」『前橋市史1』
FP	榛名二ツ岳FP層	6世紀後半	石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編(1979)「特集・火山堆積物と遺跡I」『考古学ジャーナル』No157
FA	榛名二ツ岳FA層	6世紀前半	
FP	二ツ岳降下軽石層	7世紀初頭 (尾崎1966)	新井房夫(1979)「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ」『考古学ジャーナル』No157
FA	二ツ岳降下火山灰層	6世紀中～ 後期	
Hr-I	榛名一伊香保テフラ層	6世紀中葉	早田勉(1989)「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』Vol. 27 No. 4
Hr-S	榛名一洪川テフラ層	6世紀初頭 (坂口1986)	
Hr-FP	二ツ岳軽石	6世紀中頃	能登健(1989)「古墳時代の火山災害—群馬県同道遺跡の発掘調査を中心にして—」『第四紀研究』Vol. 27 No. 4
Hr-FA	二ツ岳火山灰	6世紀初頭 (坂口1986)	
Hr-FP	榛名二ツ岳伊香保テフラ	6世紀中葉	町田洋・新井房夫編(1992)『火山灰アトラス [日本列島とその周辺]』
Hr-FA	榛名二ツ岳洪川テフラ	6世紀初頭	

註) 引用・参考文献は第6表で明記した以外は、次のものがある。

尾崎喜左雄(1961)「群馬県発見の積石塚」『信濃』第13巻第1号・尾崎喜左雄(1966)『横穴式古墳の研究』・坂口一(1986)「榛名山二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』・能登健(1990)「三ツ寺I遺跡の成立とその背景—5世紀代における河川移動を伴う水田耕地の拡大について—」『古代文化』第42巻第2号

第IV章 検出遺構と出土遺物



第14図 遺跡調査区位置図（上）調査面関係図（下）

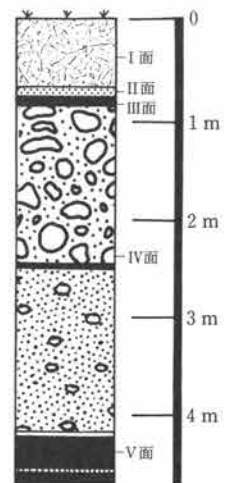
第1節 調査概要報告の前に

〔1〕 調査区・調査面の呼称

【調査区について】 総長360mの調査区を、「南北に縦断する3本の市道部分は調査なし」の前提と調査の期間のずれから、便宜的に4つに区切り、第14図（上）のように調査区の名稱を与えた。

なお、北陸新幹線調査区画との関係も第14図(上)のとおりである。これによれば、本遺跡の南東端は12地区51区R-11グリッド、北西端は12地区74区T-7グリッドである。

【調査面について】 遺跡内でのテフラの堆積が顕著なため、層位的に遺構の時間差の大まかな把握が可能と考えられた。従って、それに準じ、第14図(下)のように調査面の名稱を与え、遺構の時間差（または同時期遺構）の把握の簡便化を試みた。



〔2〕 基本層序

行力春名社遺跡は榛名山東南麓に形成される「白川扇状地」中に立地しているため、層序的にも際だった特徴を持つ。一言で表現するなら「泥流地帯の遺跡」という名がふさわしい。以下、各層の性格を述べる。

【第Ⅰ層】表土または現耕作の及んでいる攪乱層

〔厚さ〕0.1~0.4m 〔土色〕黒褐色または暗褐色 〔土質〕締まり弱い・粘性なし・粒子やや粗
〔混入物〕部分的にAs-A(?)・As-B・炭化木片粒・最近のゴミ・木屑

【第Ⅱ層】本遺跡Ⅰ面(As-B降下以降遺構)を含む層

〔厚さ〕0.2~0.4m 〔土色〕暗褐色 〔土質〕締まり弱い・粘性弱い・粒子やや密
〔混入物〕部分的にAs-A(?)・As-B・炭化木片粒

【第Ⅲ層】As-B(浅間B軽石)のプライマリーな堆積層

〔厚さ〕0.1~0.2m 〔土色〕〔土質〕〔混入物〕とも「第Ⅴ章第2節」参照

【第Ⅳ層】本遺跡Ⅱ面(As-B直下遺構)を形成する層

〔厚さ〕0.1~0.2m 〔土色〕黒褐色 〔土質〕締まりやや強い・粘性やや強い・粒子密
〔混入物〕部分的に炭化木片粒・FP(第Ⅴ層中のFPの混入)
〔備考〕第Ⅲ層との接面が本遺跡Ⅱ面に相当

【第Ⅴ層】泥流堆積物層

〔厚さ〕1.1~2.0m 〔土色〕〔土質〕〔混入物〕とも「第Ⅴ章第2節」参照 〔備考〕FPF-2(新井、1979)または、Hr-Iの一部(早田、1989)のことであり、調査時の通称では「FP泥流」と呼ばれていた層である：上端面は本遺跡Ⅲ面に相当

【第Ⅵ層】本遺跡Ⅳ面(FP或いはFPF-1直下遺構)を形成する層

〔厚さ〕0.02~0.05m 〔土色〕黒色土 〔土質〕締まり弱・粘性強い・粒子やや密 〔混入物〕炭化木片粒・植物腐植物

【第Ⅶ層】泥流堆積物層

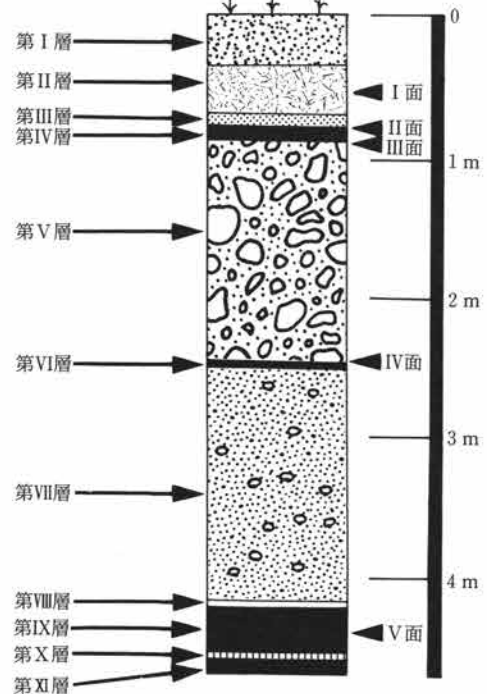
〔厚さ〕1.1~2.1m 〔土色〕〔土質〕〔混入物〕とも「第Ⅴ章第2節」参照 〔備考〕FPF-1(新井、1979)または、Hr-Sの一部(早田、1989)のことであり、調査時の通称では「FA泥流」と呼ばれていた層である：上端面は本遺跡Ⅲ面に相当

【第Ⅷ層】FAのプライマリーな堆積層

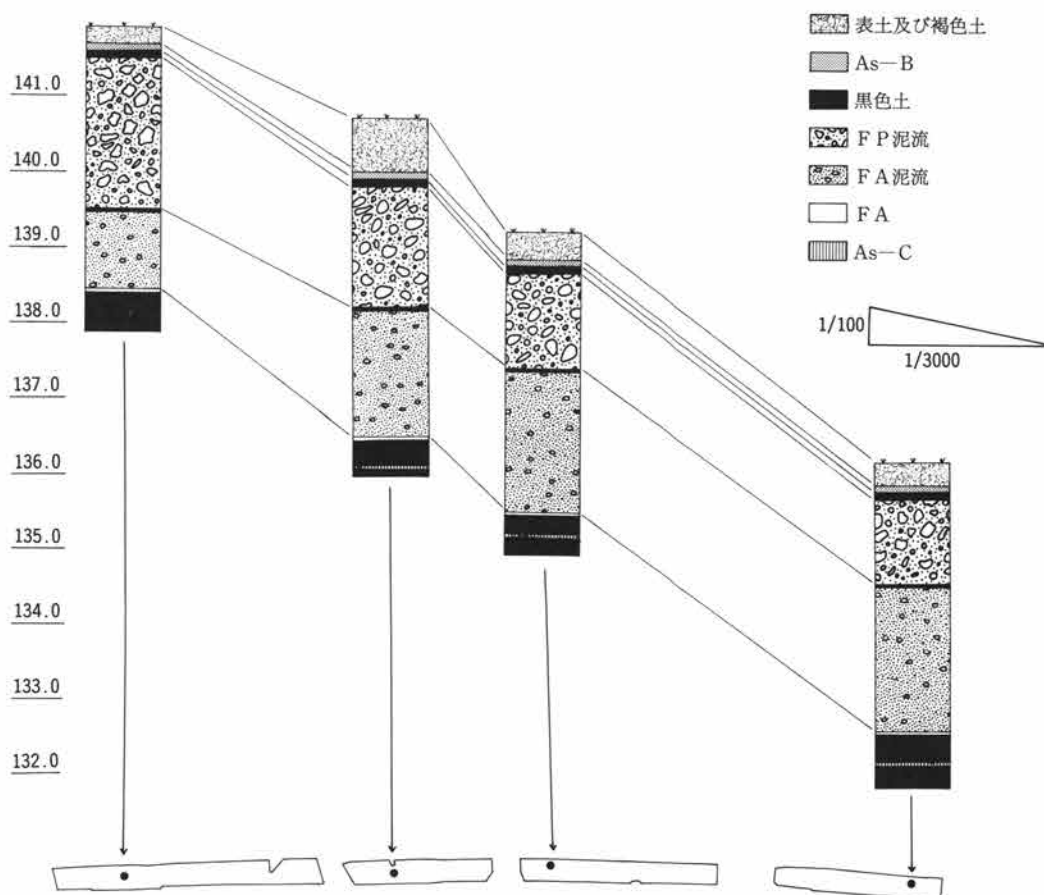
〔厚さ〕0.05~0.1m 〔土色〕〔土質〕〔混入物〕とも「第Ⅴ章第2節」参照

【第Ⅸ層】本遺跡Ⅴ面(FA降下以前遺構)を形成する層

〔厚さ〕0.2~0.5m 〔土色〕黒色土 〔土質〕締まりやや強・粘性強い・粒子密



第15図 標準土層図



第16図 遺跡内土層対照図

〔混入物〕炭化木片粒・植物腐植物・As-C

【第X層】As-C（浅間C軽石）のプライマリーな堆積層

〔厚さ〕0.05~0.1m 〔土色〕〔土質〕〔混入物〕とも「第V章第2節」参照

【第XI層】本遺跡V面下に相当する層

〔厚さ〕0.2m以上 〔土色〕黒褐色~灰褐色に漸移的变化 〔土質〕締まり強・粘性強い・粒子密
〔混入物〕炭化木片粒・植物腐植物・自然礫

なお、【第III層】【第V層】【第VII層】は色調・粒子の粗密等の差異からさらに分層が可能であるが、敢えてそれぞれを1層とみなした。その理由は、層中に文化層(黒色土等の腐植土)が形成されているか否かによって、分層を行ったからである。特に【第V層】【第VII層】においては、各泥流が時間差をもって堆積したにもかかわらず、本遺跡調査時には層中に文化層を認めることができず、やむを得ずそれぞれを1層とみなした。火山学的には既に細分層が不可欠となっている(「第V章 第2節」参照)が、今後の発掘調査により層中に文化層が検出され、考古学的にもさらなる細分層が必要となる時がやがて訪れると思われる。



行力春名社遺跡は調査区の総延長が約360mになる。この調査区内における各地表面の勾配は
①表土…1000分の15 ②As-B下面(本遺跡II面)…1000分の16 ③FPF-1下面(本遺跡IV面)…1000分の14 ④FA下面(本遺跡V面の一部)…約1000分の16 ⑤As-C下面(本遺跡V面下)…約1000分の18
である。いずれの面もほぼ同様の単調な勾配を呈していることが推測できる(第16図)。

第2節 歴史時代遺物の観察表について

1. 土器の観察表

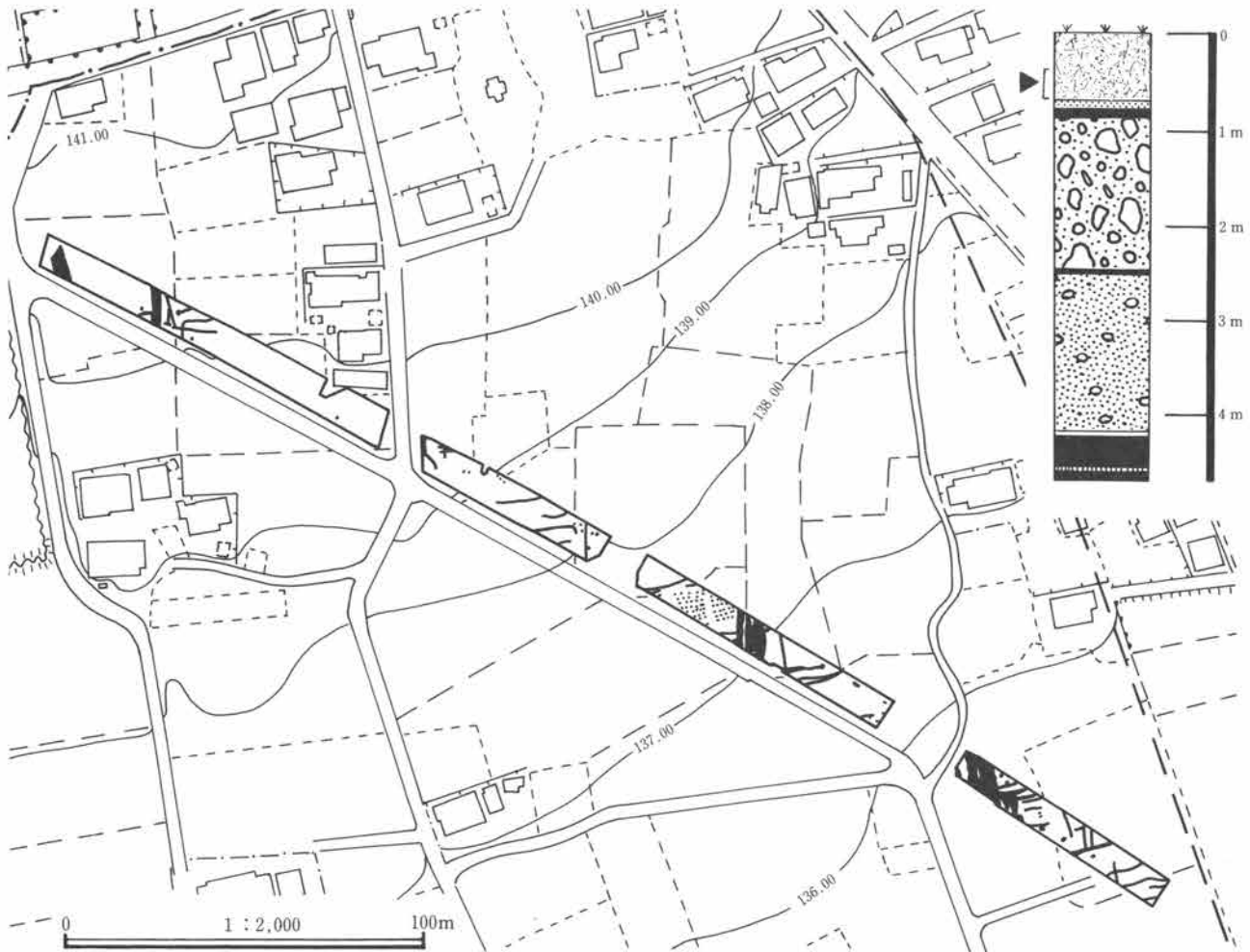
- 【遺物番号】** ◆各遺構単位での番号を記載した。但し、実測・写真図版との関係に紛らわしい点があるので、例を示す。なお、原則は1図版内に1つの遺構の出土遺物のみが掲載されている場合は、【遺物番号】は「遺構名」を省略し、「遺物番号」のみとし、1図版内に複数遺構の出土遺物が掲載されている場合は、【遺物番号】は「遺構名及び遺物番号」で示すということである。EXA：P66の「第34図 7号溝出土遺物図（実測図版）」の場合、1図版内に1遺構出土遺物しか掲載されていないため、実測図右下の【遺物番号】は「7溝-1」とせず、「1」のみの記載とした。しかし、巻末の「PL29（写真図版）」の場合、1図版内に複数遺構出土遺物が掲載されているため、写真右下の【遺物番号】は「7溝-1」とした。
- 【出土層位】** ◆遺構内での遺物の垂直位置について、各遺構底面からの距離を基準に「底面」「覆土」「覆土上層」「覆土中層」「覆土下層」の5つに分けた。数値を用いた機械的な分け方には問題もあるが、本遺跡の場合、遺構内覆土にテフラの明確な堆積層が見られず、かつV面の竪穴住居を除いては、分層した覆土差が遺物差を示す状況でもないので、便宜的な目安として分けた。「底面」…遺構底面に接し出土した場合 「覆土上層」「覆土中層」「覆土下層」…覆土の厚さを3等分し、上中下の何れかに位置が限定された場合 「覆土」…底面からの距離が不明な場合
- 【器種・種別】** ◆「器種」は、「甕」「壺」「埴」「鉢」「皿」「碗」「壘」「坏」「盃」「瓶」の10種類に分けた。
◆「種別」は、「土師器」「須恵器」「軟質陶器」「陶器」「磁器」「ガラス」の6種類に分けた。
◆その他、例外的に「円筒・埴輪」も記載した。
- 【法 量】** ◆各器種において口縁部・体部・底部・台部の存在する箇所および器高を測定した。
◆法量の測定及び記載については一定の基準を設けた。
器高以外…①最大径部分が1/2以上残存の場合、数値をそのまま記載（EXA：12.8）
②最大径部分が1/2未満残存の場合、数値の後に「復」を記載（EXA：12.8復）
器高…①遺物の上端から下端まで存在する場合、数値をそのまま記載（EXA：16.0）
②遺物の上端から下端まで存在しない場合、残存値を括弧付で記載（EXA：（16.0））
- 【残 存】** ◆各部位ごとに残存割合を%で示した。但し、数値の決定は目測のため、数値は参考程度。
- 【形態の特徴】** ◆残存する部位ごとに示した。
- 【手法の特徴】** ◆①外面 ②内面 ③底部（須恵器のみ）ごとに示した。
- 【色 調】** ◆原則として、土器外面の色調を記載した。色の識別には「農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1993年版）」を用いた。観察時は「JIS notation」に拠ったが、報告時は「土色名」のみの記載とした。
- 【備 考】** 上記以外の必要事項を記載した。

2. その他の観察表

基本的には土器の観察表項目に準拠するが、以下の1点について述べておく。

- ◆「未実測の陶磁器片の観察表」については、未実測だが出土事例の報告のため、表を設けて必要事項を記入した。なお、遺物観察は大西雅広氏（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）にお願いした。

第3節 I面の検出遺構と出土遺物



第17図 I面検出遺構概略図及び土層模式図 (▶が検出レベル)



I面調査風景 (東区東：南東から)



I面遺構検出状況 (東区東：北西から)

第IV章 検出遺構と出土遺物

〔1〕 I面の調査概要

行力春名社遺跡におけるI面とは下記の内容を持つ

遺構帰属時期：As-B降下（1108年）以降、昭和初期まで

遺構検出面：As-B層より上面

※但し、調査区の大半はAs-B層の純堆積は確認できなかった。従って、後述する第II面・第III面の遺構との識別は、主として遺構覆土に拠り、第I面に帰属するものについては遺構覆土にAs-A又はAs-Bが含まれていることを指標とした。

表土からの深さ：0.5～1.3m

検出遺構内容：井戸・土坑・溝・耕作痕

出土遺物内容：磁器・陶器・須恵器・土師器・石製品・ガラス製品・鉄製品・古銭・馬骨・馬歯

遺跡内容：I面では遺構検出量に対して遺物出土量が少ない。遺跡の性格は既調査の隣接遺跡（行力遺跡群榛名社遺跡：高崎市教委調査）が建物群を検出しているにも関わらず、本遺跡では同様の遺構が検出されておらず、本調査区は集落の縁辺にあたるように思われる。

この地域の周辺遺跡の状況を見ると、既調査遺跡（寺ノ内館・矢島館・北新波等）のいずれもが、時期的には14世紀後半から16世紀中ごろまでのものであり、それ以前の遺構は希薄である。遺跡のこうしたあり方からこれらの多くが長野氏関連のものである可能性が高く、51～53号溝の大溝は当時の環濠遺構に関連することが推測できる。

分析・鑑定等：馬骨・馬歯鑑定

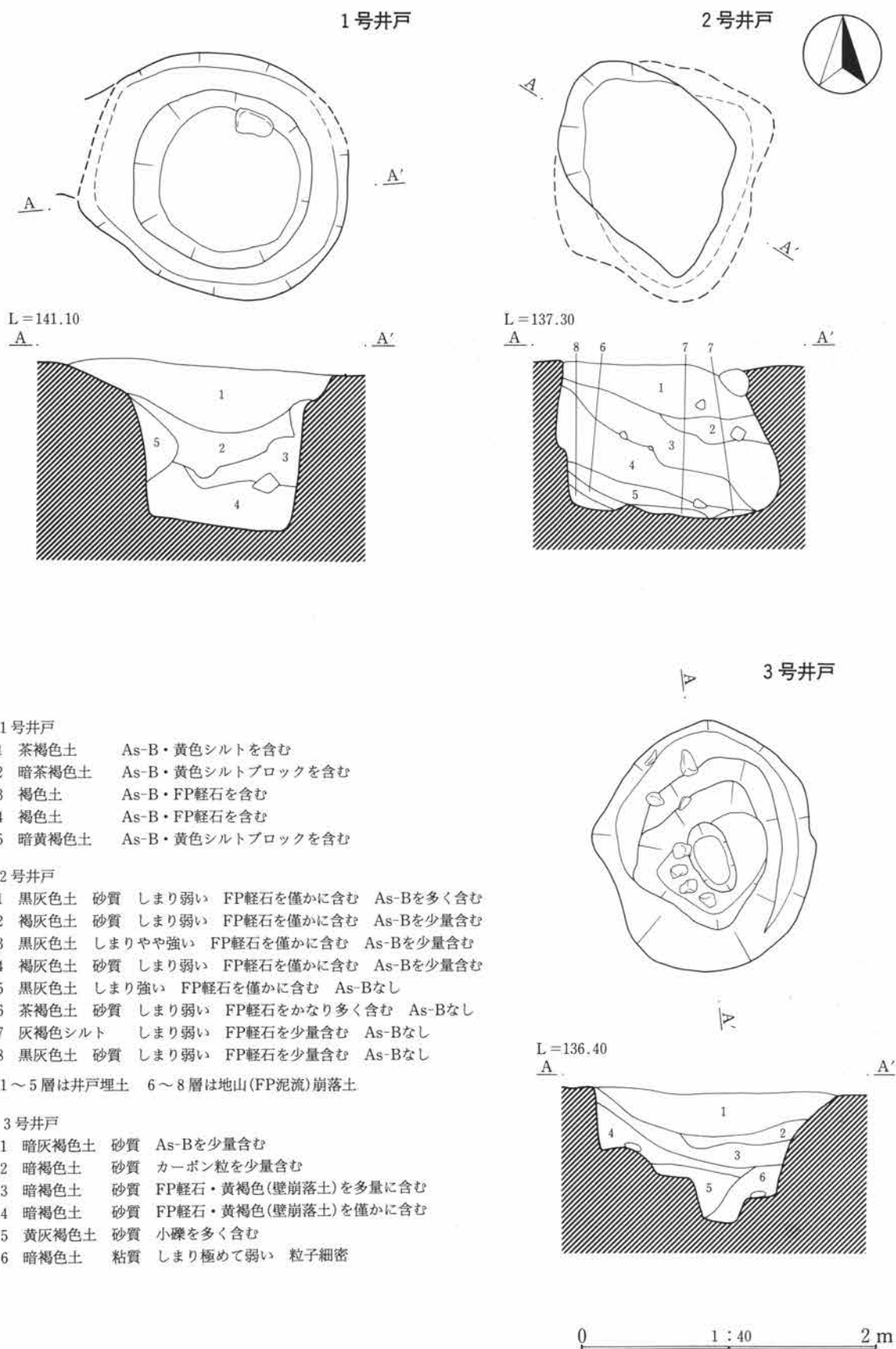
その他：なし

〔2〕 各遺構・遺物の概要

井戸（第18図・P L 2）

西区で1基、東区中央で1基、東区東で1基、計3基が検出された。いずれも深さは1m程度であり、現在の湧水はない。井戸と認定した根拠は、平面形状と堆積層の状況である。出土遺物は2号井戸より若干あるものの、貧弱である。時期認定はむずかしい。

1号井戸（第18図・P L 2）	位置…西区(12地区74区L-3・M-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-B・FP泥流を含む褐色土が主体	規模…(平面)1.80m×1.62m：円形 (断面)1.10m：円筒形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…5号溝→1号井戸	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
2号井戸（第18図・P L 2）	位置…東区中央(12地区62区Q-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-B・FP軽石を含む砂質黒灰色土が主体	規模…(平面)1.38m×1.05m：不整形 (断面)0.96m：不整形	出土遺物…覆土下層より陶器鉢片4(第19図1・他3は未図化)・土師器片1(未図化)・砥石1(第19図2)が出土	他遺構との新旧関係…19号溝→As-B下水田→2号井戸	帰属時期…出土遺物から14世紀末、またはそれ以前、と考えられる
3号井戸（第18図・P L 2）	位置…東区東(12地区52区F-16G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…FP泥流・黄褐色シルトを含む砂質暗褐色土が主体	規模…(平面)1.70m×1.50m：円形 (断面)0.70m：塊形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…39号溝→3号井戸である	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない



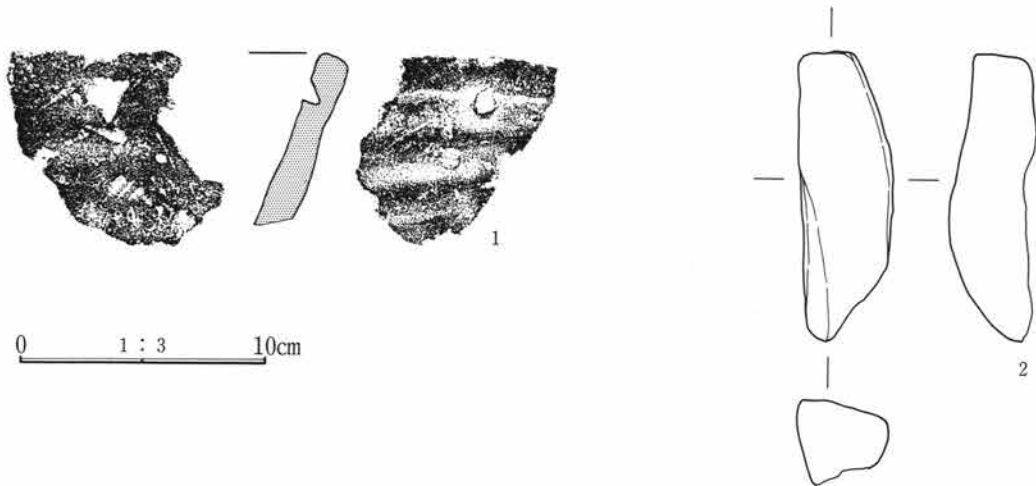
第18図 1・2・3号井戸平・断面図

第IV章 検出遺構と出土遺物

2号井戸出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第19図 P L 28	覆土 下層	火鉢 軟質陶器	口不明 台不明 底不明 高不明	口 5 体 ~5 底 0	口…直線の外斜 体…不明 底…不明	①口…ヨコナデ ②口…ヨコナデ	黄灰色	・口縁下に未貫通の孔1つあり

遺物番号	出土層位	器種別	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察	備考
2 第19図 P L 28	覆土 中層	砥石	長 11.4 厚 3.3	150	砥沢石	①平…不整長方形 断… 不整台形 ②なし	3つの側面はすべて研磨されている	



第19図 2号井戸出土遺物図

土坑 (第20~25図・P L 1~6)

西区で3基、東区西で21基、東区中央で3基、東区東で35基、計62基の土坑が検出された。平面規模0.30m×0.30mのものから2.65m×1.50mのものまで、深さでは0.10mのものから1.10mのものまで、平面形状でも、円形・方形・不整形とさまざまである。土坑中には「ピット」と呼ぶ方がふさわしいもの(43~47号土坑など)もあるが、承知の上で、「土坑」に統一した。

出土遺物は検出遺構量に比べて極めて少ない。従って、必然的に時期を明確に認定できる遺構も激減してくる。

この中で、特徴的な土坑は、23・27・61号土坑が挙げられる。

23号土坑は、出土遺物から明治時代以降(昭和時代初期の可能性大)の墓壇であることが推測される。

除隊記念の磁器盃(23号土坑-1)や形態に中国の影響を受けている磁器碗(23号土坑-3)などの出土遺物は当時を知る上で興味深い。

27号土坑は、残存が良くないものの明らかに馬1体をいれた土坑である。おそらく馬埋葬の墓壇と考えられるが、時期については共伴遺物がなく確定できない。出土馬骨・馬歯によるその馬の性格付けについては後述の鑑定(第V章 第6節)を参照されたい。

61号土坑は当初は単なる楕円形の土坑と考えていたが、底面より古銭2枚が出土したことによって、墓壇の可能性が生じた。古銭以外に出土遺物が皆無であるため、断定はできない。

第3節 I面の検出遺構と出土遺物

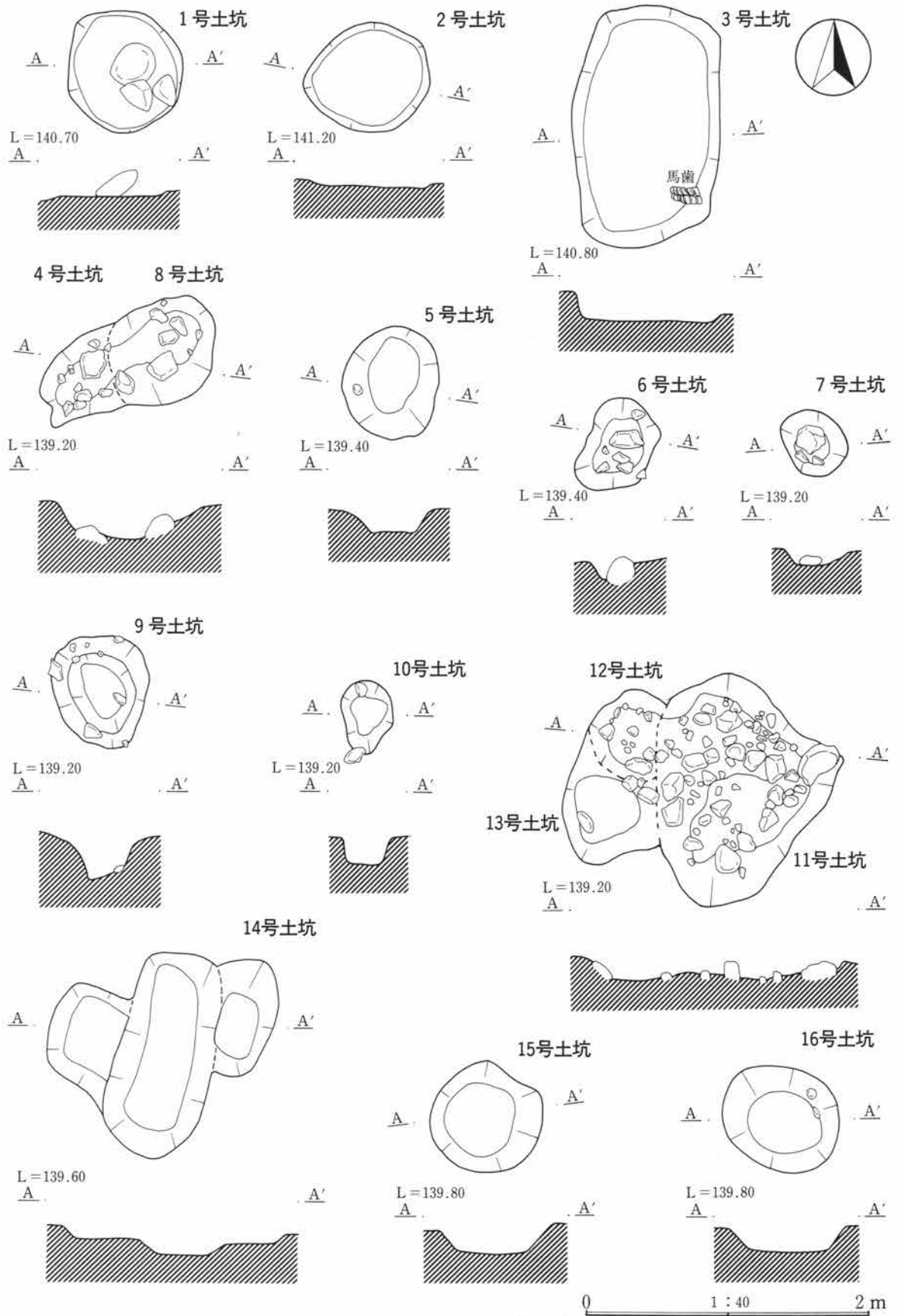
1号土坑 (第20図・P L 3)	位置…西区(12地区74区D-17G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.83m×0.82m：円形 (断面)0.15m：箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
2号土坑 (第20図・P L 無)	位置…西区(12地区74区O-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.88m×0.75m：円形 (断面)0.15m：箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
3号土坑 (第20図・P L 2)	位置…西区(12地区74区L-1G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)1.68m×1.05m：長方形 (断面)0.15m：箱形	出土遺物…底面より馬歯・馬骨が残存不良な状態で1体分検出 馬埋葬の可能性あり	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
4号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.60m×0.50m：不整形円形 (断面)0.20m：半円(?)形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…4号土坑→8号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
5号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区K-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.76m×0.50m：円形 (断面)0.12m：逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
6号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11・K-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.66m×0.46m：円形 (断面)0.11m：半円形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
7号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.83m×0.82m：円形 (断面)0.15m：箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
8号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.80m×0.69m：不整形円形 (断面)0.18m：半円(?)形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…4号土坑→8号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
9号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.58m×0.45m：円形 (断面)0.18m：不整形箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
10号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.50m×0.36m：円形 (断面)0.20m：箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
11号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区I-10・I-11・J-10・J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)1.00m×1.30m：不整形円形 (断面)0.15m：箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…13号土坑→12号土坑→11号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
12号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.70m×0.65m：不整形円形 (断面)0.12m：箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…13号土坑→12号土坑→11号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
13号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区J-11G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.60m×0.55m：不整形円形 (断面)0.20m：箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…13号土坑→12号土坑→11号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
14号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区N-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)1.45m×0.70m：長方形 (断面)0.18m：不整形箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
15号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区P-14・Q-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.81m×0.77m：不整形円形 (断面)0.22m：逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
16号土坑 (第20図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区Q-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.85m×0.72m：円形 (断面)0.19m：逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
17号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.98m×0.82m：不整形円形 (断面)0.25m：半円形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
18号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.80m×0.70m：不整形円形 (断面)0.17m：箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…18号土坑→19号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
19号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)1.15m×1.06m：不整形円形 (断面)0.24m：不整形逆台形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…18号土坑→19号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
20号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.71m×0.66m：不整形円形 (断面)0.23m：不整形(?)形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…20号土坑→21号土坑→22号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
21号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-13・O-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.61m×0.50m：不整形(?)形 (断面)0.16m：箱(?)形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…20号土坑→21号土坑→22号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
22号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区O-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)0.70m×0.45m：長方形 (断面)0.19m：不整形(?)形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…20号土坑→21号土坑→22号土坑	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない

第IV章 検出遺構と出土遺物

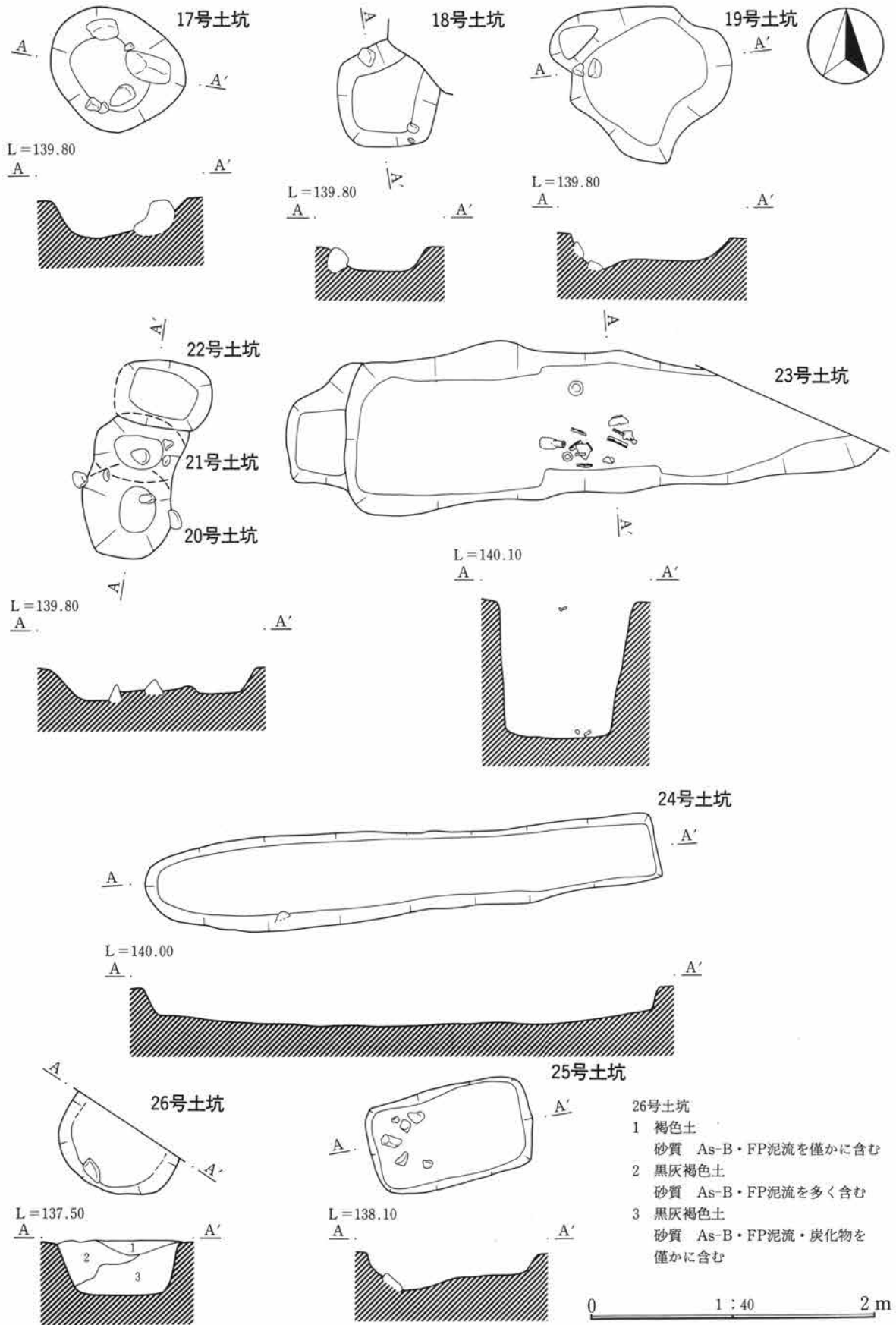
23号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区R-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…小礫を含む粘質暗褐色土 規模…(平面)4.08m×1.11m:長方形 (断面)1.08m:箱形 出土遺物…底面より磁器皿1(第26図2)・磁器盃1(第26図1)・磁器碗1(第26図3)・ガラス瓶1(第26図6)・鉄製釘1(第26図7)が出土 覆土より人骨片8以上(未図化)・磁器碗片2(第26図4・5)・鉄製釘2(第26図8・9)・須恵器鉢片1(未図化)・木片10以上(未図化)が出土 他遺構との新旧関係…24号土坑→13号溝→23号土坑 帰属時期…大正～昭和時代 備考…墓塚の可能性高い
24号土坑 (第21図・P L 3)	位置…東区西(12地区63区R-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…小礫を含む粘質暗褐色土 規模…(平面)3.60m×0.64m:長方形 (断面)0.19m:箱形 出土遺物…覆土より陶器碗片2(第27図1・未図化)・須恵器鉢片1(未図化)・鉄製火打具1(第27図2)が出土 他遺構との新旧関係…24号土坑→13号溝→23号土坑 帰属時期…明治時代以降
25号土坑 (第21図・P L 4)	位置…東区中央(12地区62区B-5・C-5G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土 規模…(平面)1.15m×0.67m:長方形 (断面)0.25m:不整半円形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
26号土坑 (第21図・P L 4)	位置…東区中央(12地区63区T-5G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP泥流を含む砂質黒褐色土が主体 規模…(平面)0.87m×0.50m:半円形 (断面)0.38m:箱形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
27号土坑 (第22図・P L 4)	位置…東区中央(12地区62区Q-3G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…FP泥流を含む粘質黒灰褐色土が主体 規模…(平面)1.75m×1.40m:不整双円形 (断面)0.13m:不整箱形 出土遺物…底面より馬歯・馬骨が残存不良の状態で1体分出土 帰属時期…FP泥流堆積以降(中世?)、としか考えられない 備考…馬埋葬の墓塚の可能性高い
28号土坑 (第22図・P L 4)	位置…東区東(12地区52区F-15・F-16・G-15・G-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…FP泥流・カーボンを含む砂質褐色土が主体 規模…(平面)2.23m×1.15m:長方形 (断面)0.38m:箱形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…29号土坑→28号土坑 帰属時期…FP泥流堆積以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
29号土坑 (第22図・P L 4)	位置…東区東(12地区52区F-15・F-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…FP軽石を含む砂質褐色土が主体 規模…(平面)1.90m×1.75m:方形 (断面)0.20m:逆台形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…29号溝→29号土坑→28号土坑 帰属時期…FP泥流堆積以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
30号土坑 (第22図・P L 4)	位置…東区東(12地区52区F-15・F-16・G-15・G-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む砂質黒褐色土が主体 規模…(平面)2.65m×1.50m:長方形 (断面)0.28m:箱形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…29号溝→58号土坑→38・39号溝→30号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
31号土坑 (第22図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区D-16G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Aを多く含む砂質褐色土 規模…(平面)1.25m×0.62m:長方形 (断面)0.47m:箱形 出土遺物…なし 帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない
32号土坑 (第22図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区D-14・D-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-B・FP泥流を含む砂質黒褐色土が主体 規模…(平面)1.73m×1.70m:円形 (断面)0.15m:逆台形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
33号土坑 (第23図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区B-13・B-14・C-13・C-14G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-B・FP泥流を含む砂質黒褐色土が主体 規模…(平面)1.17m×1.06m:円形 (断面)0.60m:逆台形 他遺構との新旧関係…As-B下水田→33号溝→33号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
34号土坑 (第23図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区B-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む砂質暗褐色土が主体 規模…(平面)1.15m×0.75m:長方形 (断面)0.30m:箱形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…31号溝→34号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
35号土坑 (第23図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区B-13・C-13G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-A・砂粒を含む灰褐色土 規模…(平面)1.10m×0.80m:不整形 (断面)0.30m:逆台形 出土遺物…覆土より陶器碗片1・須恵器坏片1(いずれも未図化)を出土 帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない
36号土坑 (第23図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区F-17G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土が主体 規模…(平面)1.20m×0.40m:半円形 (断面)0.80m:箱形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
37号土坑 (第23図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-17G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土 規模…(平面)0.25m×0.25m:円形 (断面)0.12m:半円形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
38号土坑 (第23図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-18G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土 規模…(平面)0.43m×0.35m:不整円形 (断面)0.08m:箱形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
39号土坑 (第23図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-18G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土 規模…(平面)0.20m×0.15m:円形 (断面)0.20m:箱形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…40号土坑とは不明 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
40号土坑 (第23図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-18G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土 規模…(平面)0.70m×0.45m:不整円形 (断面)0.08m:不整箱形 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…39号土坑とは不明 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
41号土坑 (第23図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区D-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む砂質黒褐色土 規模…(平面)0.37m×0.30m:円形 (断面)0.18m:逆台形 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない

第3節 I面の検出遺構と出土遺物

42号土坑 (第23図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-18G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-A・FP軽石を含む黒褐色土が主体	規模…(平面)1.40m×0.80m:不整形(断面)0.22m:箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
43号土坑 (第23図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む黄褐色土	規模…(平面)0.25m×0.20m:円形(断面)0.07m:逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
44号土坑 (第23図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)1.30m×1.20m:不整形(断面)0.30m:不整形半円形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…44号土坑・50号溝→36・37・51号溝	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
45号土坑 (第23図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流・細砂粒を含む灰褐色土	規模…(平面)0.36m×0.30m:円形(断面)0.25m:逆台形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…45号土坑→30号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
46号土坑 (第23図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区F-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B・FP泥流を含む暗褐色土がある	規模…(平面)0.40m×0.32m:円形(断面)0.16m:箱形	出土遺物…覆土より内耳筒片1(第27図3)	帰属時期…14世紀後半の可能性がある	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
47号土坑 (第23図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区F-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Aを含む褐色土	規模…(平面)0.30m×0.28m:円形(断面)0.14m:箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…47号土坑→38号溝	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
48号土坑 (第24図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区B-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土	規模…(平面)1.05m×0.80m:不整形(断面)0.25m:塊形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
49号土坑 (第24図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区C-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む褐色土	規模…(平面)1.38m×0.53m:長方形(断面)0.40m:箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…34号溝→49号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
50号土坑 (第24図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区C-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む褐色土	規模…(平面)0.38m×0.30m:円形(断面)0.09m:不整形半円形	出土遺物…なし	帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない	
51号土坑 (第24図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区B-15G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土	規模…(平面)0.80m×0.68m:不整形円形(断面)0.40m:箱形	出土遺物…覆土より土師器鉢片1(未図化)	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
52号土坑 (第24図・P L 5)	位置…東区東(12地区52区D-15G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土	規模…(平面)0.63m×0.35m:不整形(断面)0.09m:逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
53号土坑 (第24図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む褐色土が主体	規模…(平面)0.78m×0.51m:不整形(断面)0.34m:不整形逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
54号土坑 (第24図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区G-17・H-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土が主体	規模…(平面)1.40m×1.30m:不整形円形(断面)0.85m:逆台形	出土遺物…覆土より陶器鉢片1(第27図4)・石白片2(第27図5・6)	帰属時期…14世紀後半の可能性がある	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
55号土坑 (第24図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区E-16・F-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)0.33m×0.28m:楕円形(断面)0.50m:箱形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
56号土坑 (第24図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区E-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)0.55m×0.45m:不整形円形(断面)0.12m:半円形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…51号溝→56号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
57号土坑 (第24図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区F-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)0.33m×0.30m:円形(断面)0.50m:逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
58号土坑 (第24図・P L 4)	位置…東区東(12地区52区F-17・G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)1.75m×1.05m:長方形(断面)0.20m:逆台形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…29号溝・58号土坑→39号溝	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
59号土坑 (第24図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区S-12G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)0.70m×0.48m:楕円形(断面)0.12m:半円形	出土遺物…覆土より古銭1(第27図7)を出土	他遺構との新旧関係…As-B下水田→30号溝→59号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
60号土坑 (第24図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区E-15・E-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土	規模…(平面)1.75m×0.90m:楕円形(断面)0.15m:箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…43号溝→60号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
61号土坑 (第25図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区T-12G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む黒褐色土	規模…(平面)1.28m×0.88m:楕円形(断面)0.12m:不整形箱形	出土遺物…底面より古銭2(第27図8・9)が出土	他遺構との新旧関係…As-B下水田→30号溝→61号土坑	備考…土坑を縁どる様に垂角礫が出土、墓壇の可能性あり 本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない
62号土坑 (第25図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区G-17・G-18G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B・FP軽石を含む黒褐色土	規模…(平面)2.20m×1.18m:長方形(断面)0.28m:逆台形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…37号溝→62号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平のため検出されていない

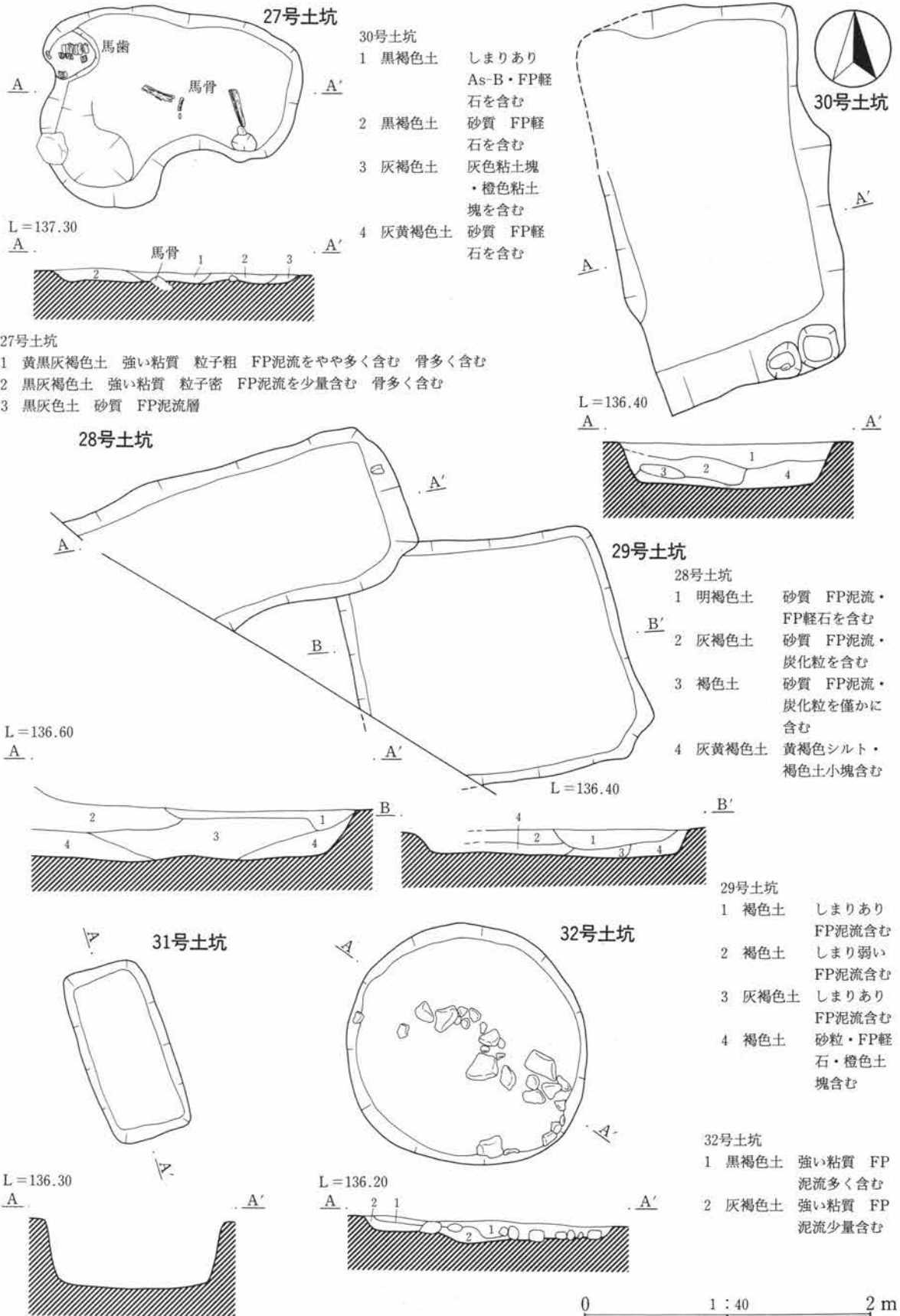


第20図 1~16号土坑平・断面図



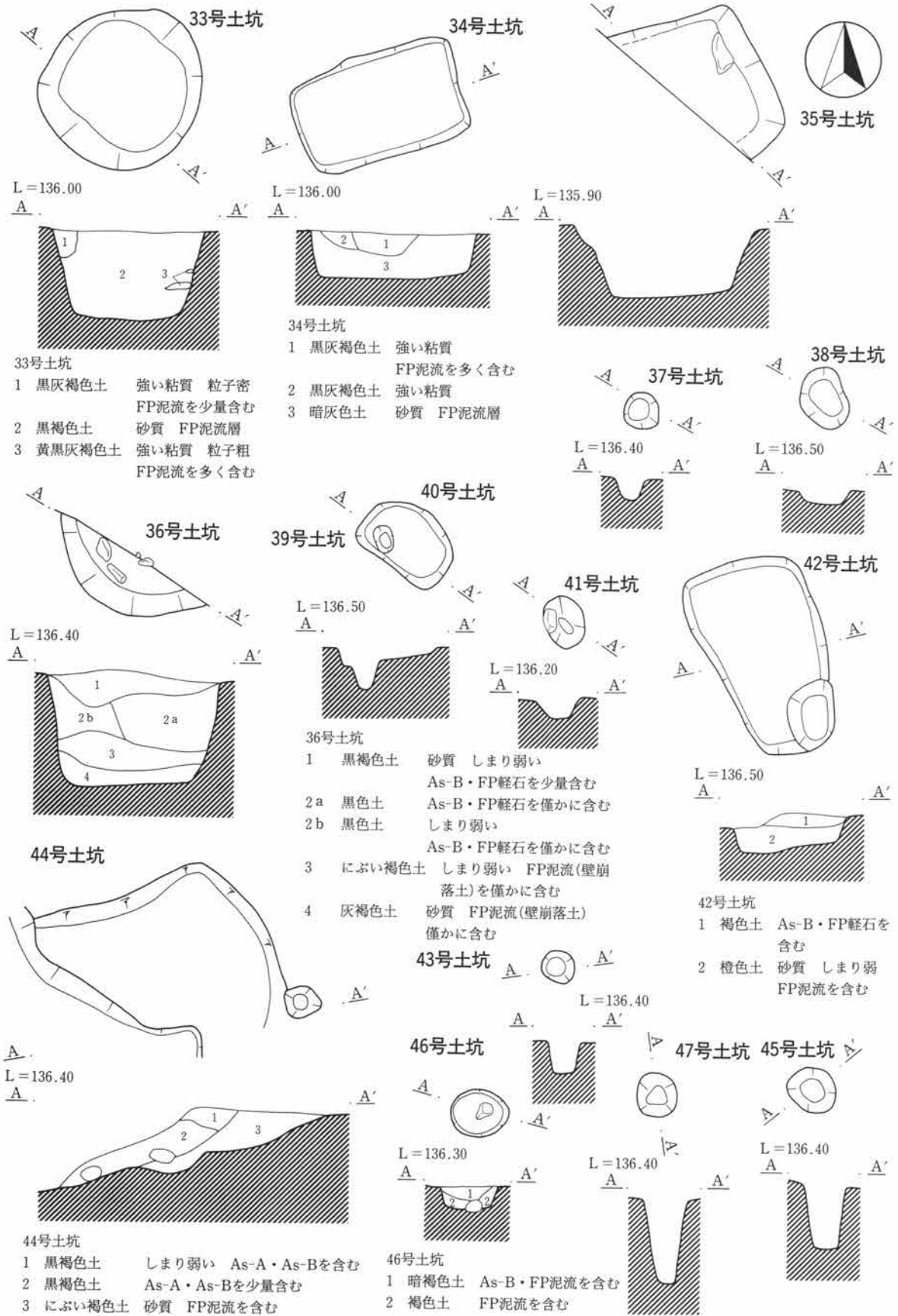
第21図 17~26号土坑平・断面図

第IV章 検出遺構と出土遺物

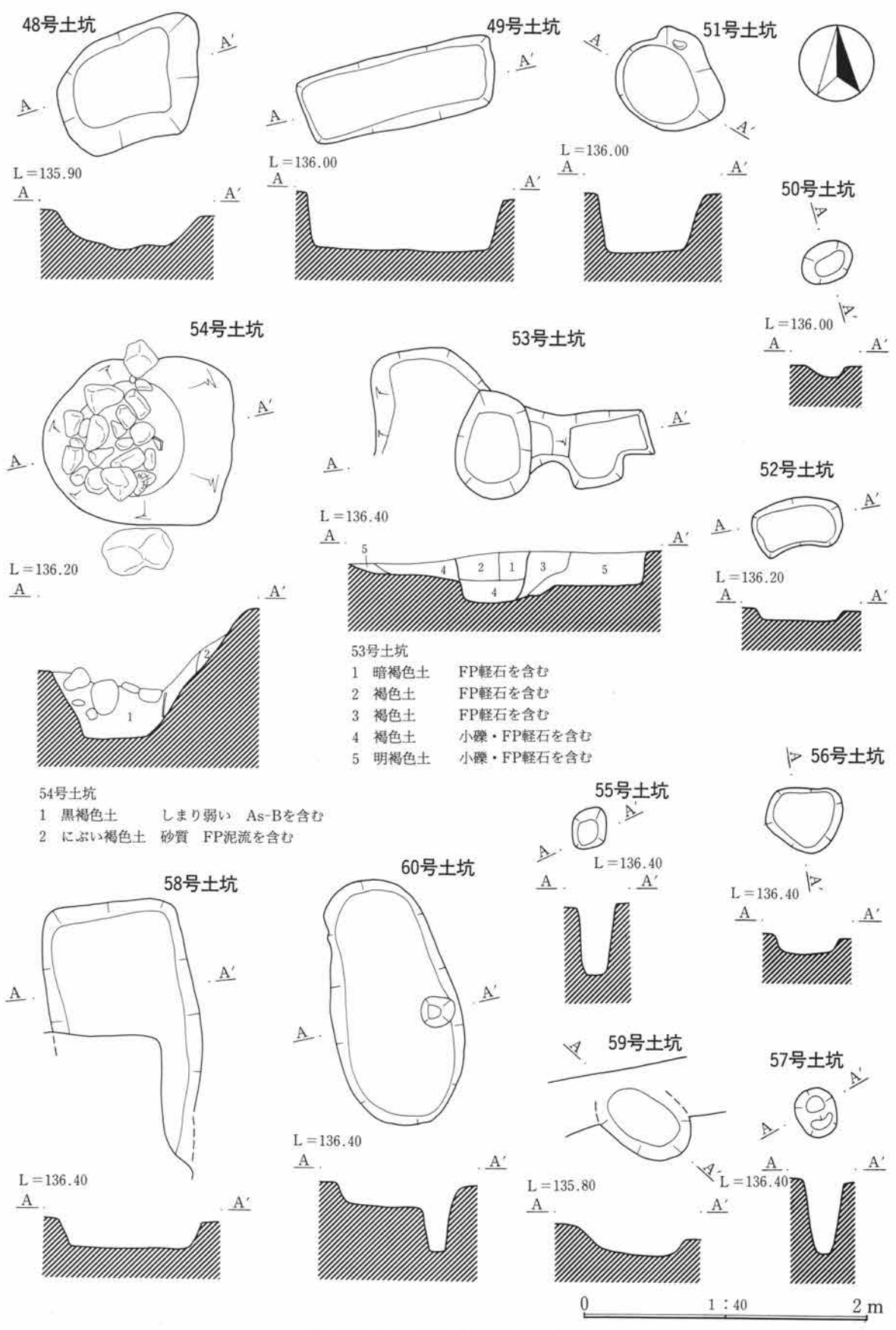


第22図 27~32号土坑平・断面図

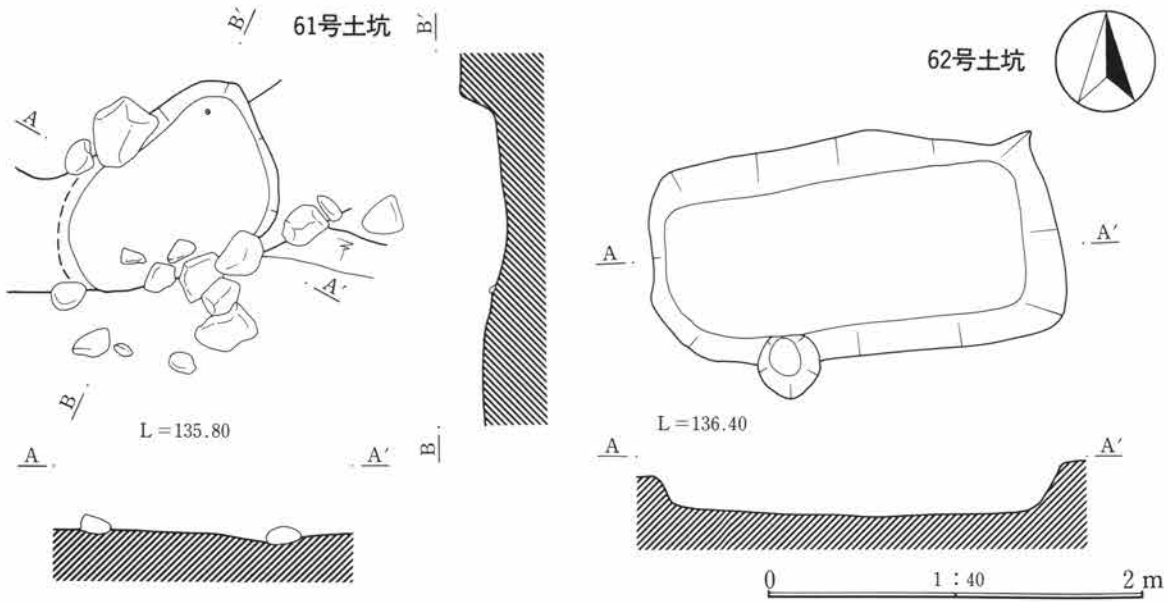
第3節 I面の検出遺構と出土遺物



第23図 33~47号土坑平・断面図



第24図 48~60号土坑平・断面図



第25図 61・62号土坑平・断面図

23号土坑出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	観察内容	色調	備考
1 第26図 P L 28	覆土	盃	口 8.2 台 3.4	完形	①色絵・花文? ②瀬戸・美濃産? ③大正~昭和時代 ④除隊記念盃	白色	
	下層	磁器	底 3.1 高 3.5				
2 第26図 P L 28	覆土	皿	口 12.1 台 6.2	完形	①染付 鶴と荒磯が印文 ②製作地不詳 ③幕末~明治時代	白色	
	下層	磁器	底 8.4 高 2.2				
3 第26図 P L 28	覆土	広東碗	口 12.4 台 7.0	完形	①染付 山水文 高台部分に中国の影響あり ②肥前産 ③18世紀末~19世紀初頭	白色	
	下層	磁器	底 7.0 高 6.9				
4 第26図 P L 28	覆土	碗	口 11.2 台 3.7	口 90 体 80 底 40 台 60	①印判染付 鹿子文 見込松竹梅文? ②瀬戸・美濃産 ③明治時代	白色	
	下層	磁器	底 3.7 高 4.9				
5 第26図 P L 無	覆土	碗	口 10.2復底 一	口 5 底 0 体 5	①口縁部外面~内面に貫入あり ②製作地不詳 ③18世紀末~19世紀	白色	
	下層	陶器	体 10.7復高 (3.9)				
6 第26図 下層	覆土	瓶	口 2.4 底 6.6	完形	①ガラス内に気泡が多い ③大正時代?	濃緑色	P L 28参照
	下層	ガラス	体 6.6 高 24.0				

遺物番号	出土位置	種別	計測値 (cm)	形態の特徴	備考
7	第26図・P L 28 覆土下層	鉄製品 釘	長 9.1 幅 0.3	「L」字状に曲折(使用時の曲折)	全体に錆付着
8	第26図・P L 28 覆土下層	鉄製品 釘	長 3.8 幅 0.2	棒状・曲折なし	全体に錆付着
9	第26図・P L 28 覆土下層	鉄製品 釘	長 4.2 幅 0.2	棒状・曲折なし	全体に錆付着

24号土坑出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	観察内容	色調	備考
1 第27図 P L 無	覆土	碗?	口 12.4復台 一	口 25 体 10 底 0	①軸種不明 ②京焼系・製作地不詳 ③昭和	茶褐色	
	下層	陶器	底 一 高 (3.0)				

遺物番号	出土位置	種別	計測値 (cm)	形態の特徴	備考
2	第27図・P L 28 覆土上層	鉄製品 火打具	長 5.6 厚 (0.4)	平...偏平の三角形 断...薄い板状	全体に錆付着

第IV章 検出遺構と出土遺物

46号土坑出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第27図 P L 28	覆土	内耳埴 軟質 陶器	口 24.2復底 一 体 22.6復高 (7.4)	口 5 体 5 底 0	口…やや内斜・端部に 平縁一耳つく 体・底…不明	①口～体…ヨコナデ→部 分的ユピオサエ ②口～体…ヨコナデ	灰褐色	

54号土坑出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第27図 P L 28	覆土 下層	鉢 軟質 陶器	口 一 底(13.8) 体 一 高(12.3)	口 0 体 20 底 5	口…不明 体…直線的外斜 底…平底	①体…ヨコナデ→部分的 ユピオサエ ②体…ヨコナデ	黄灰色	・体部内面の 器面が摩滅

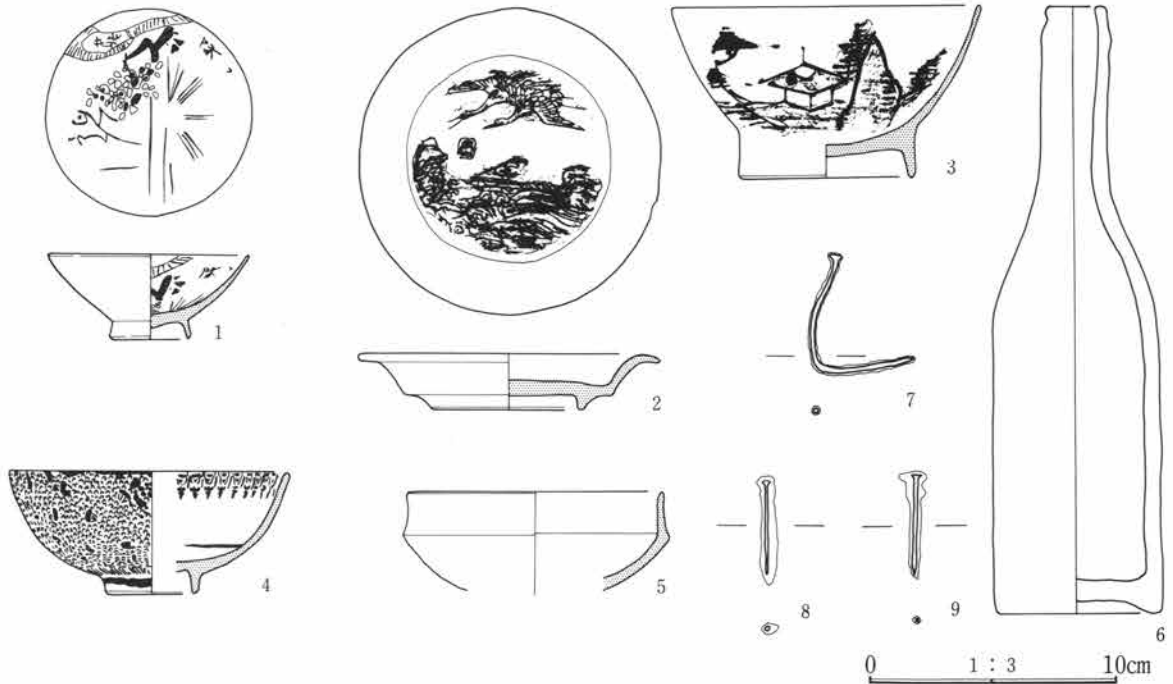
遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	重量 (g)	残存 (%)	石質	形態・調整の特徴	使用痕等の観察
2 第27図 P L 28	覆土	石白 下白	径 (30.0) 高 11.4	4,600	25	粗粒 安山岩	摺合部…6分割 石目間隔…0.7~1.8cm 側・底面…削り(工具痕あり) 芯穴…あり	型減り…少ない 石目深さ…0.2~0.5cm
3 第27図 P L 28	覆土	石白 下白	径 (29.4) 高 11.8	2,600	5	粗粒 安山岩	摺合部…8分割? 石目間隔…0.6~1.9 cm 側・底面…削り(工具痕あり) 芯穴 …不明	型減り…少ない 石目深さ…0.2~0.7cm

59号土坑出土遺物

遺物番号	出土位置	計測値 (cm)	銭名	初鑄(西暦)	鑄造地名	備考
1 第27図・P L 28	底面	直径 2.3	熙寧元宝	1078	北宋	

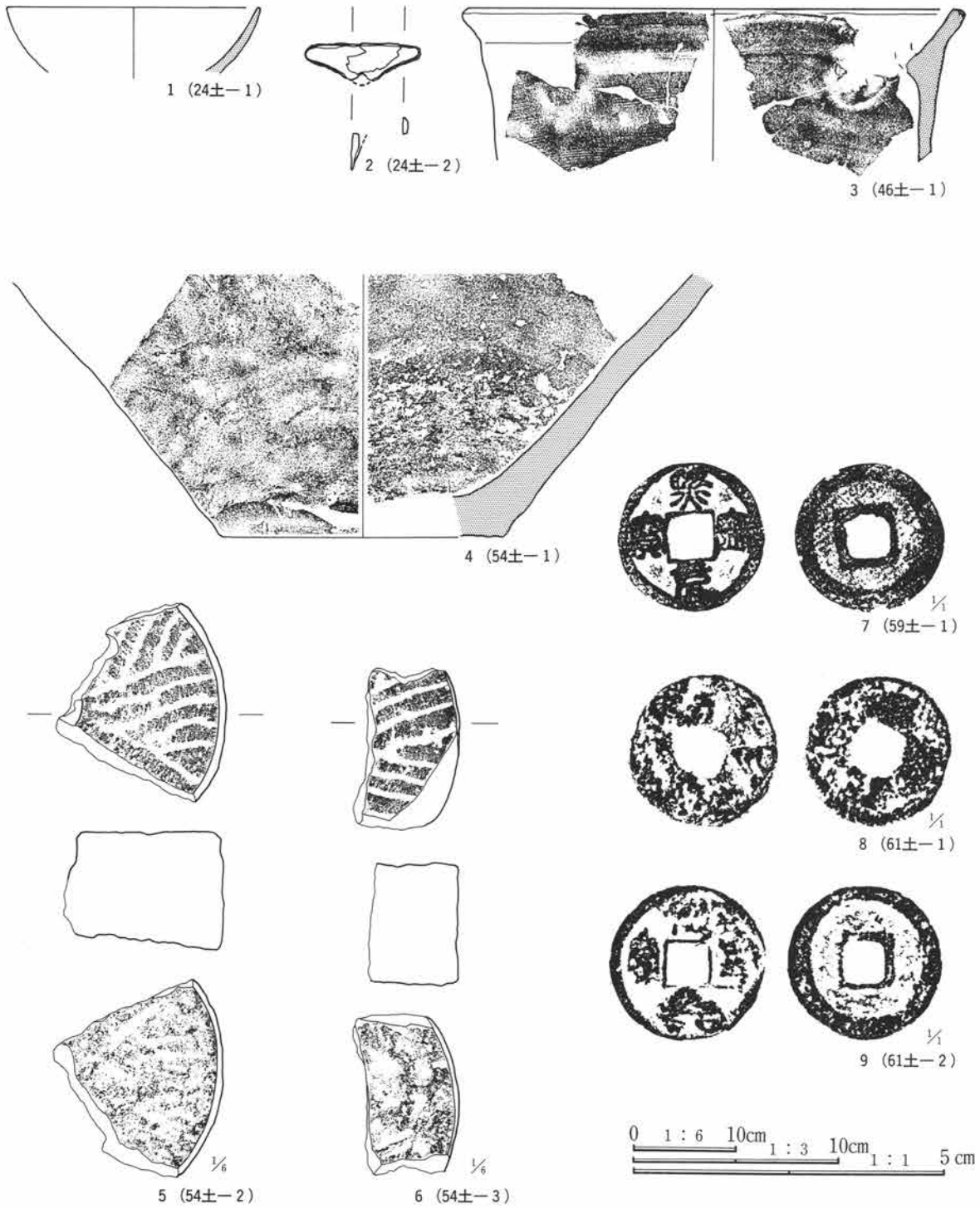
61号土坑出土遺物

遺物番号	出土位置	計測値 (cm)	銭名	初鑄(西暦)	鑄造地名	備考
1 第27図・P L 28	底面	直径 2.4			北宋	
2 第27図・P L 28	底面	直径 2.4	元豐通宝	1068	北宋	



第26図 23号土坑出土遺物図

第3節 I面の検出遺構と出土遺物



第27図 24・46・54・59・61号土坑出土遺物図

未実測の陶器片の観察表 (図・写真なし)

出土遺構	出土位置	器種別	観察内容
			①器形・手法の特徴 ②産地 ③帰属時期 ④その他
34号土坑	覆土	皿? 陶器	①口縁部外面～内面に貫入のある灰釉 ②製作地不詳(地方窯) ③19世紀中頃～明治時代

第IV章 検出遺構と出土遺物

溝 (第28～33図・P L 7～12)

西区で7条、東区西で8条、東区中央で13条、東区東で27条、計55条の溝が検出された。「溝」という名称を与えたものの、規模においては、大小さまざまである。時期差、機能差等の要因からこれらの差異が生じると考えられる。だが、大小においては、際だった差異があるものの、方向性には統一性らしきものを垣間見ることができる。それは、いずれもほぼ東西方向或いは南北方向に走行している点である。方向の同一性から同時期存在の可能性を指摘している溝群(8～10・12号溝や25～28号溝等)があるものの、数少ない出土遺物から考えてみても、これらの多くは時期差を生じているものと考えられる。時期差を生じている上で、なおもほぼ同一的な方向性を示していることは、想像を逞しくすれば、この地域の土地利用が同一(例えば、土質的制約から根菜類の栽培のみを行っていたなど)において時間的変遷がなしていったのではないかと考えられる。出土遺物は、遺構量に比して総量は極端に少ない。ちなみに、全溝において、幅0.5m以下の溝(以下、小溝)は計24条とI面検出数の44%を占めるが内遺物が出土した溝は計2条と小溝数の8%に過ぎない。一方、幅0.5mより以上の溝(以下、中大溝)は計31条とI面検出数の56%を占め、内遺物が出土した溝は計10条と中大溝数の32%になる。おそらく、この差異は溝の機能性に起因すると考えられ、前者(小溝)は畝サク等の痕跡、後者(中大溝)は水路や館址の濠など施設としての溝であるが故に生じたものといえないだろうか。

以下、周辺の既調査遺構との関わりを中心に、特徴的な溝について述べる。

東区中央検出の25～28号溝は相互に切り合つつ、同一(ほぼ南北)方向に走行していることからして、同一時期の遺構と考えられ、その帰属時期は出土遺物から13世紀～16世紀と見ることができる。この溝群は本遺跡のすぐ北に位置する高崎市教委既調査行方遺跡群榛名社遺跡(以下、榛名社遺跡)10号溝に位置的・方向的に連続すると思われる。なお、この10号溝は25～28号溝より北に約80mの地点で方向を東西方向に換え、さらに後述する同遺跡4トレンチの遺構とも関連性をもち、方形の区画溝の一部を担っていると見られる。また、東区東検出の51～53号溝は相互に切り合つつ、同一(ほぼ南北)方向に走行していることからして、同一時期の遺構と考えられ、その帰属時期は出土遺物から14世紀代と見ることができる。これらの溝群は榛名社遺跡4トレンチに見られる溝状落ち込みに、位置的・方向的に連続すると思われる。

以上のように25～28号溝と51～53号溝は近接する遺構の状況から推定で南北130m～、東西約70mの方形区画溝の一部と推定できる。さらに、この区画溝の中心的位置の榛名社遺跡5トレンチからは集石遺構が検出され、多数の石造物が検出していることは興味深い。

1号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区M-3～O-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む茶褐色土
規模…(平面)長7.6m・幅0.6～0.7m；ほぼ東西方向に直行 (断面)0.1m；浅い塊形	底面…ほぼ平坦	他遺構との新旧関係…3号溝→1号溝 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
2号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区J-2～M-2～M-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…最下層にAs-B
ブロックを含む 規模…(平面)長22.1m・幅0.5～0.8m；東西から南北方向へと「L」字状に走行 (断面)0.4m；「V」字形を呈す	底面…北から南へ、西から東への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…2号溝→4号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
3号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区N-2～N-4G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…最下層にAs-Bの再堆積層がある
規模…(平面)長11.2m・幅2.3～2.8m；南北方向に直行 (断面)0.5m；塊形	底面…北から南への下り勾配	他遺構との新旧関係…3号溝→1号溝 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
4号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区M-2～M-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土が主体
規模…(平面)長9.8m・幅0.95～1.1m；南北方向に直行 (断面)0.7m；不整逆台形	底面…ほぼ平坦	他遺構との新旧関係…2・3号溝→4号溝 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	
5号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区L-3～M-3G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長7.7m・幅0.3～0.5m；ほぼ東西方向に直行 (断面)0.2m；箱形	底面…東から西への下り勾配	出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…5号溝→1号井戸 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	

第3節 I面の検出遺構と出土遺物

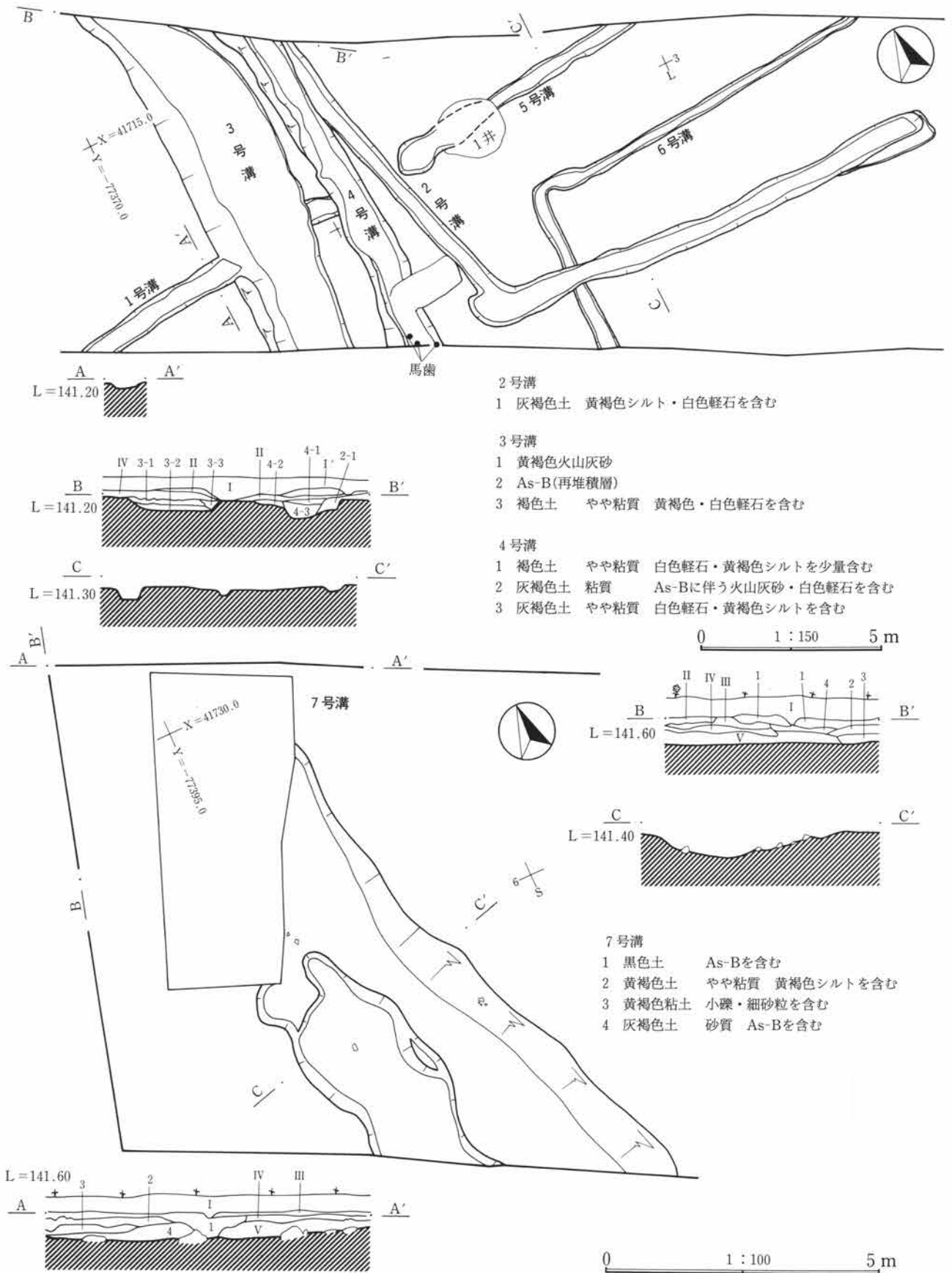
6号溝 (第28図・P L 7)	位置…西区(12地区74区K-2~L-2~L-1G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土 規模…(平面)長14.5m・幅0.3~0.4m:東西から南北方向に「L」字状に直行 (断面)0.1m:箱形 底面…南北方向はほぼ平坦で、西から東への下り勾配 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
7号溝 (第28図・P L 8)	位置…西区(12地区74区R-4~S-6G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…上層にAs-Bを含む黒色土がある 規模…(平面)長10.5m・幅3.6~3.8m:北西から南東方向に直行 (断面)0.4m:半円形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…底面より須恵器環1(第34図1)・覆土より須恵器環片2(第34図2・5)・須恵器碗片1(第34図3)・須恵器壺1(第34図4)・土師器環片1(第34図7)・磁器碗片1(未図化)・須恵器環片転用砥石(第34図6)が出土 その他覆土より須恵器破片490.0g・土師器破片127.1gが出土(未図化) 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
8号溝 (第29図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区K-10~L-10G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒色土 規模…(平面)長4.5m・幅0.22~0.26m:東西方向に走行 (断面)0.16m:逆台形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
9号溝 (第29図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区K-11~M-11G) 検出状況…一部As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒色土 規模…(平面)長13.1m・幅0.32~0.4m:東西から南北方向「L」字状に直行 (断面)0.1m:逆台形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…As-B下水田・56号溝→9号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
10号溝 (第29図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区K-12~M-11G) 検出状況…一部As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒色土 規模…(平面)長8.0m・幅0.3~0.5m:東西方向に走行 (断面)0.15m:逆台形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…8・9・10号溝は、東が高く、西への下り勾配をもつ 3本は平行し、4mの間隔をもち、同時存在の可能性が高い
11号溝 (第29図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区J-9~J-11G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒色土 規模…(平面)長10.3m・幅0.65m:南北方向に直行 (断面)0.22m:箱形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…覆土より須恵器環破片36.0g(未図化)を出土 他遺構との新旧関係…11号溝→4号土坑→8号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
12号溝 (第29図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区L-12~O-12G) 検出状況…As-B層を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土 規模…(平面)長13.0m・幅0.9m:東西方向に直行 (断面)0.16m:箱形 底面…西から東への下り勾配 出土遺物…なし 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
13号溝 (第30図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区R-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…粘質の黒褐色土 規模…(平面)長2.6m・幅0.25m:南北方向に直行 (断面)0.2m:箱形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…24号土坑→13号溝→23号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
14号溝 (第30図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区R-14~S-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む粘質暗褐色土 規模…(平面)長6.0m・幅0.35~0.62m:北西から南東方向にやや弧状に走行 (断面)0.05m:箱形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…14号溝→15号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
15号溝 (第30図・P L 8)	位置…東区西(12地区63区S-16~R-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む粘質暗褐色土 規模…(平面)長6.4m・幅2.0m:南北方向に蛇行 (断面)0.5m:逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…14号溝→15号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…西側の立上りは調査区外のため未掘
16号溝 (第31図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区P-3~R-2G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・小礫を含む黒褐色土 規模…(平面)長12.5m・幅0.45m:ほぼ東西方向に蛇行 (断面)0.18m:箱形 底面…西から東への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…17・18・19号溝→16号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
17号溝 (第31図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区P-3~R-3G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・小礫を含む黒褐色土 規模…(平面)長13.0m・幅0.5m:東西方向にやや蛇行 (断面)0.10m:浅い塊形 底面…西から東への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…17・18・19号溝→16号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
18号溝 (第31図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区Q-2~R-2G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・小礫を含む黒褐色土 規模…(平面)長3.2m・幅0.25m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.10m:浅い塊形 勾配方向は不明 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…17・18・19号溝→16号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
19号溝 (第31図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区P-3~Q-2G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・小礫を含む黒褐色土 規模…(平面)長7.5m・幅0.4m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.1m:箱形 底面…西から東への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…17・18・19号溝→16号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
20号溝 (第30図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区Q-3~S-3G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒褐色土が主体 規模…(平面)長11.0m・幅0.2~1.15m:東西方向にやや蛇行 (断面)0.12m:浅い塊形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…21号溝→20号溝→2号井戸 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
21号溝 (第30図・P L 8)	位置…東区中央(12地区62区S-3~S-5G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒褐色土 規模…(平面)長9.5m・幅0.35m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.20m:箱形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…21号溝→20号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
22号溝 (第31図・P L 9)	位置…東区中央(12地区62区T-5G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土 規模…(平面)長14.5m・幅0.4m:東西方向に直行 (断面)0.1m:箱形 底面…西から東への下り勾配 出土遺物…なし 他遺構との新旧関係…25~28号溝→22号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない 備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない

第IV章 検出遺構と出土遺物

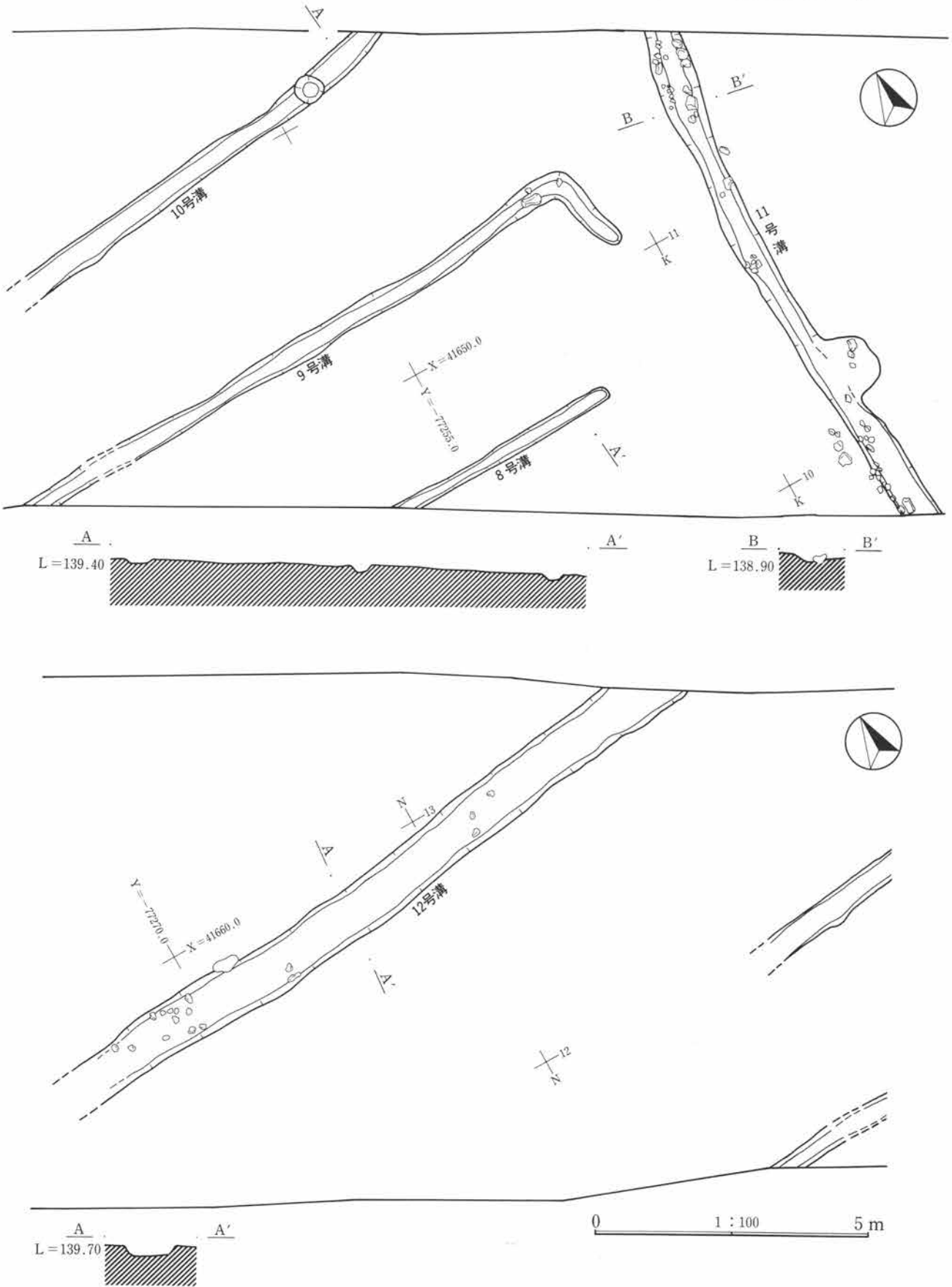
23号溝 (第32図・P L 9)	位置…東区中央(12地区63区D-8~G-7G)	検出状況…As-B層を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土が主体	規模…(平面)長12.7m・幅0.5m:東西方向に直行 (断面)0.15m:半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
24号溝 (第32図・P L 9)	位置…東区中央(12地区63区D-8~G-7G)	検出状況…As-B層を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土が主体	規模…(平面)長13.0m・幅0.8m:東西方向に走行 (断面)0.3m:半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
25号溝 (第31図・P L 9)	位置…東区中央(12地区63区A-6~B-4G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土と川砂との互層	規模…(平面)長11.6m・幅2.0m:南北方向に直行 (断面)0.18~0.3m:不整形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より鉢片1(第35図1)が出土	他遺構との新旧関係…25号溝→22号溝 帰属時期…出土遺物から18世紀、または、それ以前と考えられる
26号溝 (第31図・P L 9)	位置…東区中央(12地区63区A-4~A-6G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む褐色土と川砂との互層	規模…(平面)長2.5m・幅0.5m:南北方向に直行 (断面)0.1m:半円形	底面…南から北への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器鉢片1(第35図3)・緑釉陶器片1(第35図2)が出土	他遺構との新旧関係…26号溝→22号溝 帰属時期…出土遺物から18世紀、または、それ以前と考えられる
27号溝 (第31図・P L 9)	位置…東区中央(12地区62区T-4G~63区A-6G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む粘質黒色土と川砂との互層	規模…(平面)長11.5m・幅2.0~3.0m:南北方向にやや蛇行 (断面)0.4m:塊形	底面…傾斜方向が不明瞭	出土遺物…覆土より陶器鉢片5(第35図6、他4点未図化)が出土	その他覆土より須恵器破片3.1g、土師器破片37.1gが出土(未図化)
28号溝 (第31図・P L 9)	位置…東区中央(12地区63区A-5~A-6G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Bを含む粘質黒色土と川砂との互層	規模…(平面)長10.2m・幅0.6m:南北方向に走行(中央部分で長3.2mの範囲で土橋状に切れる) (断面)0.2~0.5m:不整半円形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器鉢片1(第35図5)・土師器破片1(未図化)が出土	他遺構との新旧関係…28号溝→22号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
29号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区F-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流・As-Bを含む暗褐色土	規模…(平面)長2.1m・幅0.55~0.65m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.16m:箱形	底面…ほぼ平坦	出土遺物…覆土より磁器皿片1(未図化)が出土	他遺構との新旧関係…29号溝→28・30号土坑 帰属時期…出土遺物から18世紀末、または、それ以前と考えられる
30号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区51区R-12~T-12G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土	規模…(平面)長13.5m・幅0.5~0.8m:ほぼ東西方向に蛇行 (断面)0.1m:不整半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器破片1(未図化)が出土	他遺構との新旧関係…As-B下水田→30号溝→59・61号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
31号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区B-14~B-15G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土	規模…(平面)長4.8m・幅0.4~0.5m:南北方向に直行 (断面)0.06m:浅い皿形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より陶器鉢片1(第35図4)が出土	他遺構との新旧関係…31号溝→34号土坑 帰属時期…出土遺物から14世紀末から15世紀前半の可能性はある
32号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区B-14~C-15G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-Bを含む暗褐色土	規模…(平面)長6.0m・幅0.5m:南北方向に直行 (断面)0.04m:浅い皿形	底面…ほぼ平坦	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…42号溝→32号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
33号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区A-14~C-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む砂質灰褐色土	規模…(平面)長11.8m・幅0.45~0.55m:やや北東から南西方向に直行 (断面)0.1m:浅い箱形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…As-B下水田→33号溝→33号土坑 帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない
34号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区A-14~C-13G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む砂質灰褐色土	規模…(平面)長12.0m・幅0.5~0.6m:やや北東から南西方向に直行 (断面)0.07m:浅い箱形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…34号溝→49号土坑 帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない
35号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区A-14~B-14G)	検出状況…As-B下水田を掘り込む	覆土…As-A・As-Bを含む砂質灰褐色土	規模…(平面)長2.2m・幅0.5m:ほぼ北東から南西方向に直行 (断面)0.12m:箱形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	帰属時期…As-A降下以降、としか考えられない
36号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区F-17~G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B・FP泥流を含む褐色土	規模…(平面)長8.1m・幅0.55~0.7m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.12m:半円形	底面…東から西への下り勾配	出土遺物…覆土より馬歯・馬骨が残存不良の状態(第32図)出土	他遺構との新旧関係…44号土坑・50号溝→36・51号溝 また、50号溝に付随するものと思われる
37号溝 (第33図・P L 10)	位置…東区東(12地区52区F-17~G-17G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B・FP泥流を含む褐色土	規模…(平面)長5.3m・幅1.25m:やや北東から南西方向に直行 (断面)0.05m:皿形	底面…東から西への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…44号土坑→37号溝→62号土坑 また、51号溝に付随するものと思われる
38号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区E-17~G-16G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…As-Aを含む褐色土が主体	規模…(平面)長10.0m・幅0.35m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.14m:半円形	底面…東から西への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…38号溝→30・47号土坑 また、50号溝に付随するものと思われる

第3節 I面の検出遺構と出土遺物

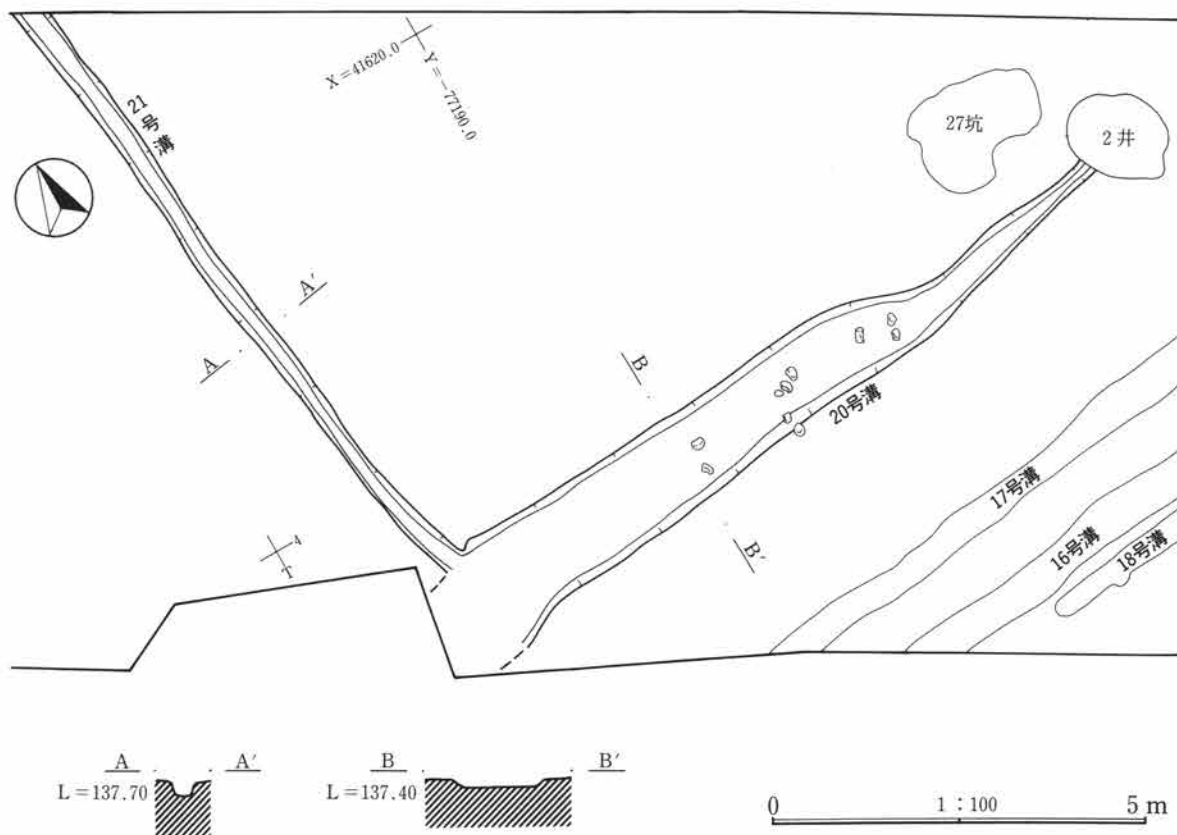
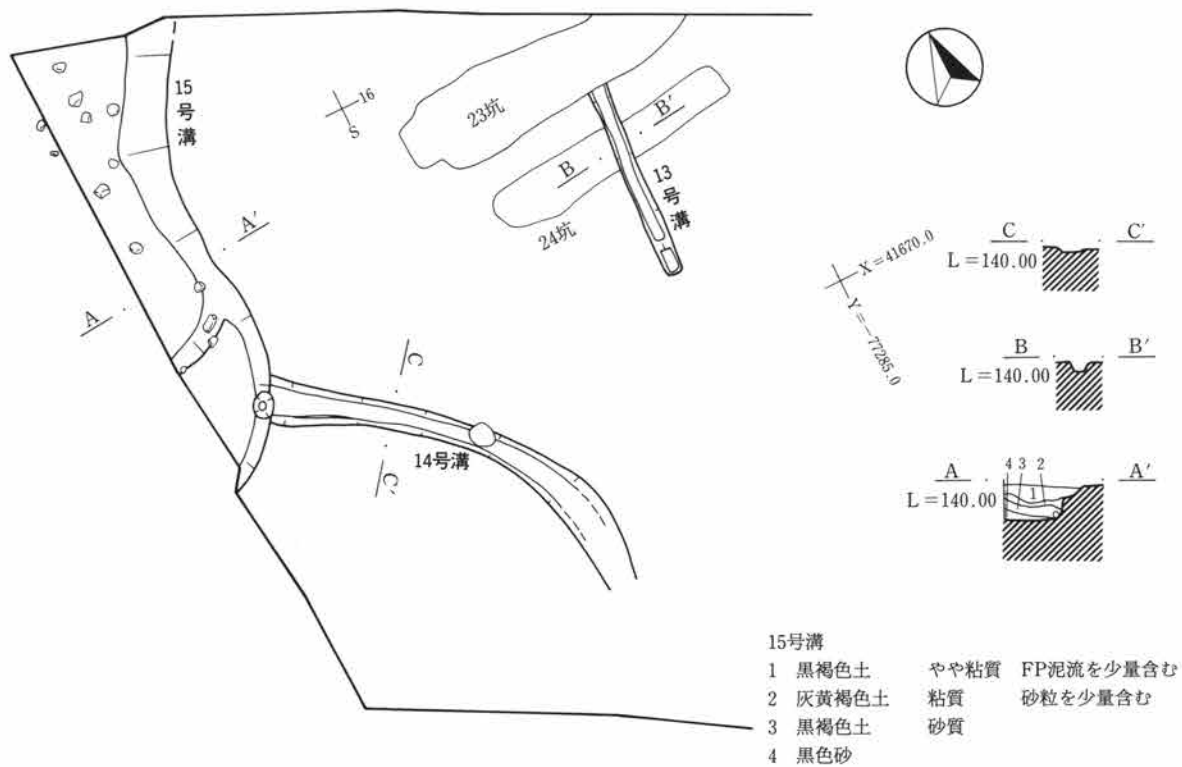
39号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区E-17~F-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長11.1m・幅0.4~0.6m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.20m:半円形 底面…東から西への下り勾配 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…39号溝→30号土坑・3号井戸 なお、29号溝との新旧関係は不明 また、50号溝に付随するものと思われる
帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
40号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区E-16~F-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長5.3m・幅0.7m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.05m:箱形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない	
41号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区C-14~D-16G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長8.0m・幅0.3~0.6m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.1m:逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
42号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区C-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長3.5m・幅0.4m:北東から南西方向に直行 (断面)0.1m:半円形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…42号溝→32号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
43号溝 (第33図・P L 6)	位置…東区東(12地区52区E-16G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長1.2m・幅0.3m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.1m:半円形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…43号溝→60号土坑 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない	
44号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区D-15~F-15G) 検出状況…一部As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長7.0m・幅0.55~0.7m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.15m:半円形 底面…東から西への下り勾配 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
45号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区D-15~E-15G) 検出状況…一部As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長5.6m・幅0.5m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.06m:浅い皿形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
46号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区D-15~E-15G) 検出状況…一部As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む暗褐色土
規模…(平面)長5.5m・幅0.65m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.25m:不整半円形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
47号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区51区R-11~S-11G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む黒褐色土
規模…(平面)長5.5m・幅0.25~0.4m:ほぼ東西方向に直行 (断面)0.5m:逆台形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
48号溝 (第33図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区D-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長1.9m・幅0.3m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.05m:半円形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
49号溝 (第33図・P L 無)	位置…東区東(12地区52区D-14~D-15G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長2.2m・幅0.3m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.05m:半円形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
50号溝 (第33図・P L 11)	位置…東区東(12地区52区G-16~G-17G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…FP軽石・As-Bを含む砂質暗褐色土
規模…(平面)長6.2m・幅0.5m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.3m:逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…50号溝→36号溝 その他の新旧関係は不明 また、51号溝に付随するものと思われる
帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
51号溝 (第33図・P L 12)	位置…東区東(12地区52区G-16~H-18G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・FP軽石を含む砂質褐色土が主体
規模…(平面)長14.2m・幅1.7~3.0m:ほぼ南北方向に直行 (断面)1.3m:不整逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…底面より陶器鉢片2(第35図7・8)・テラス部覆土より磁器碗片1(第35図9)・陶器徳利片1(未図化)が出土	他遺構との新旧関係…44号土坑・50号溝→51号溝→56号土坑 帰属時期…14世紀代の可能性がある
備考…東側に幅1.8~2.2mのテラスをもつ テラス内では、杭列や集石が検出され、本溝に付随するものと考えられる	本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
52号溝 (第33図・P L 12)	位置…東区東(12地区52区H-17~I-19G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…FP軽石・灰色シルトを含む砂礫層が主体
規模…(平面)長10.0m・幅2.3~2.7m:ほぼ南北方向に直行 (断面)2.2m:逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…底面より陶器鉢片4(第36図1・他3点未図化)・砥石1(未図化)・覆土より陶器火鉢片1(第36図2)・石臼片1(第36図3)・スラグ1(未図化)が出土	他遺構との新旧関係…51・52・53号溝は切合関係が不明瞭であるが、同時存在の可能性が考えられる
帰属時期…14世紀代の可能性がある	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
53号溝 (第33図・P L 12)	位置…東区東(12地区52区I-18~J-18G) 検出状況…FP泥流層を掘り込む 覆土…As-B・灰色シルトを含む砂礫層が主体
規模…(平面)長3.4m・幅1.2m:ほぼ南北方向に直行 (断面)2.4m:逆台形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…51・52・53号溝は切合関係が不明瞭であるが、同時存在の可能性が考えられる
帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない	備考…西側の立ち上がりは調査区外のため、未掘 本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
54号溝 (第33図・P L 12)	位置…東区東(12地区51区S-13~52区A-12G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長11.3m・幅0.2~0.3m:やや北東から南西方向に弧状に走行 (断面)0.16m:逆台形 底面…ほぼ平坦 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…55号溝→54号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない
55号溝 (第33図・P L 12)	位置…東区東(12地区52区A-12~A-13G) 検出状況…As-B下水田を掘り込む 覆土…As-Bを含む褐色土
規模…(平面)長6.2m・幅0.25~0.35m:ほぼ南北方向に直行 (断面)0.05m:箱形 底面…北から南への下り勾配 出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…55号溝→54号溝 帰属時期…As-B降下以降、としか考えられない



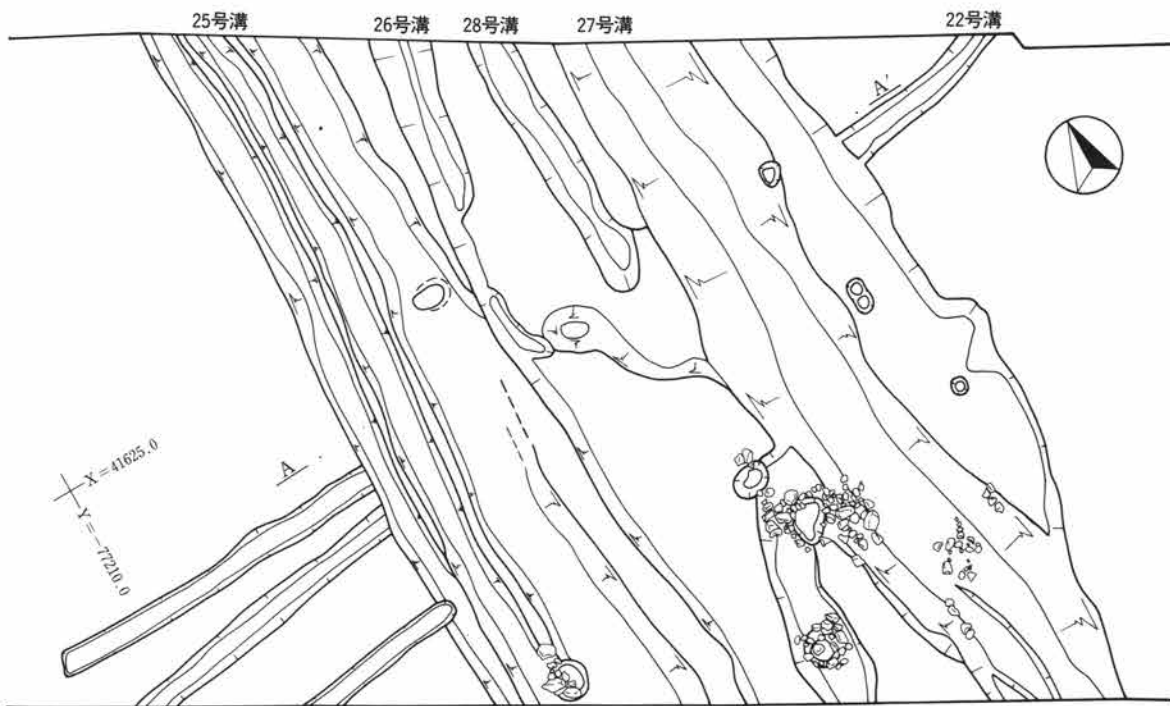
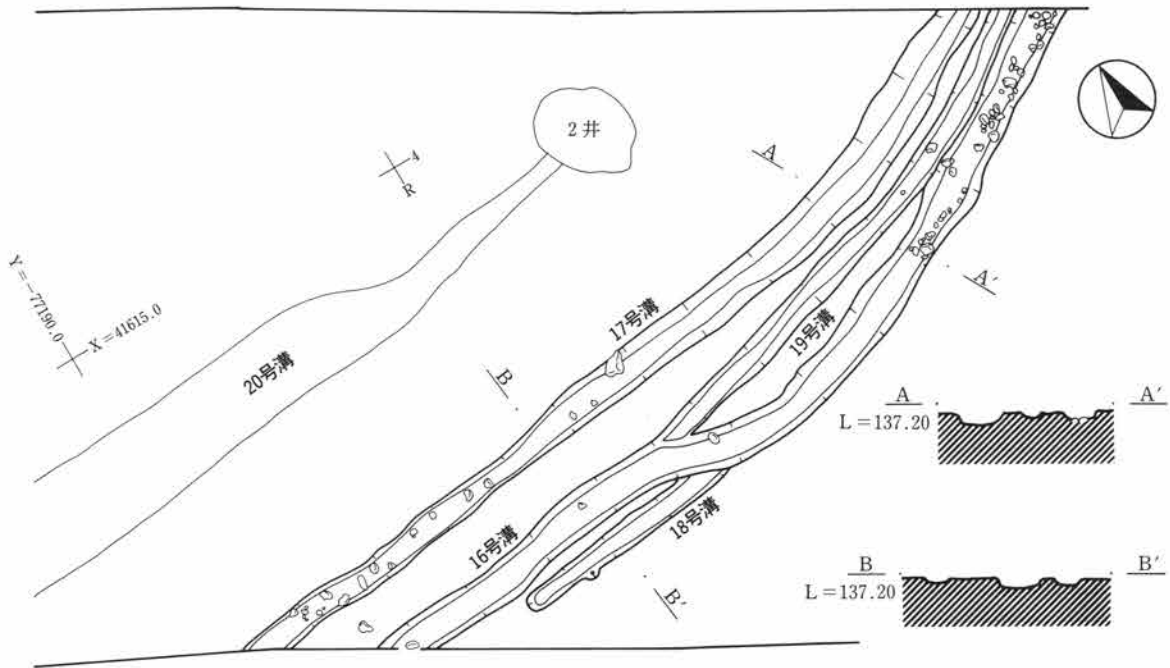
第28図 1～7号溝平・断面図



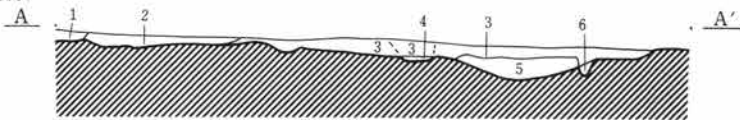
第29図 8～12号溝平・断面図



第30図 13~15・20・21号溝平・断面図



L=138.00

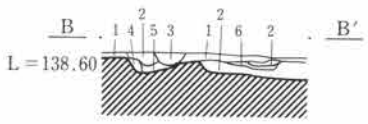
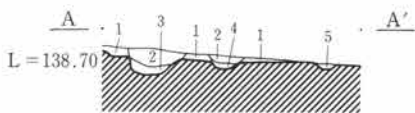
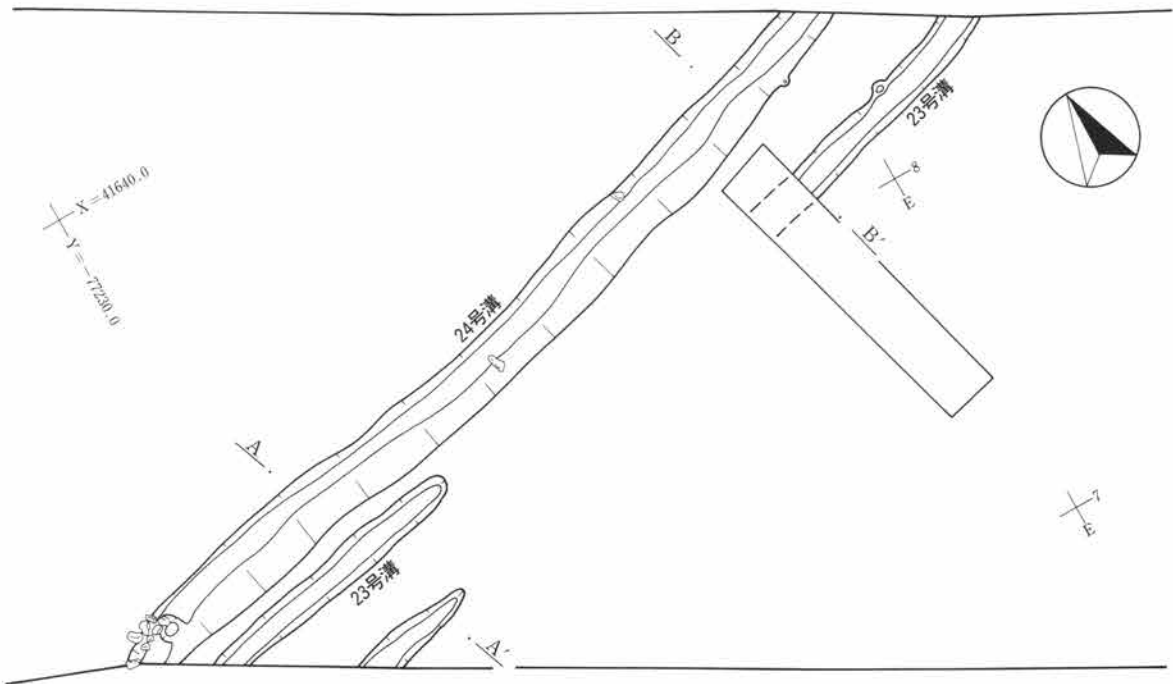


25・26・27・28号溝

- 1 褐色土 砂質 (埋土ではない)
- 2 褐色土 砂質 As-B・細砂を含む
- 3 黒褐色土 しまり強い As-B・FP軽石・細砂を含む
- 4 褐色砂 小礫と川砂の互層
- 5 黒褐色土 黒褐色土と川砂の互層
- 6 暗褐色土 FP泥流の混入土 26溝に伴うピットの埋土

0 1 : 100 5 m

第31図 16~19・22・25~28号溝平・断面図

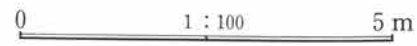


23・24号溝(A~A')

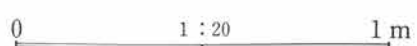
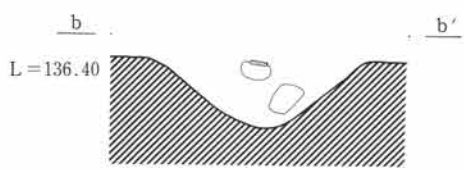
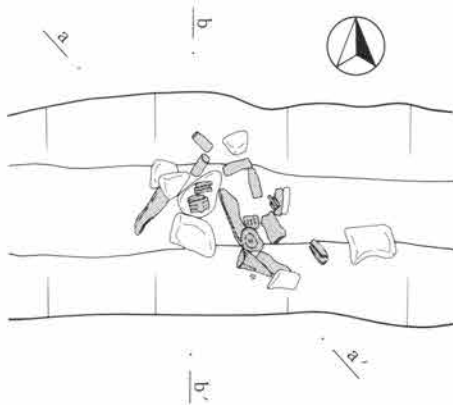
- 1 As-B
- 2 暗褐色土 しまりあり FP軽石(φ1~5mm)・As-Bを含む
- 3 淡黒褐色土 しまり弱い FP泥流を少量含む
- 4 黒色砂 FP泥流を少量含む
- 5 褐色土 粘質 しまりあり FP軽石(φ1~5mm)・As-Bを少量含む

23・24号溝(B~B')

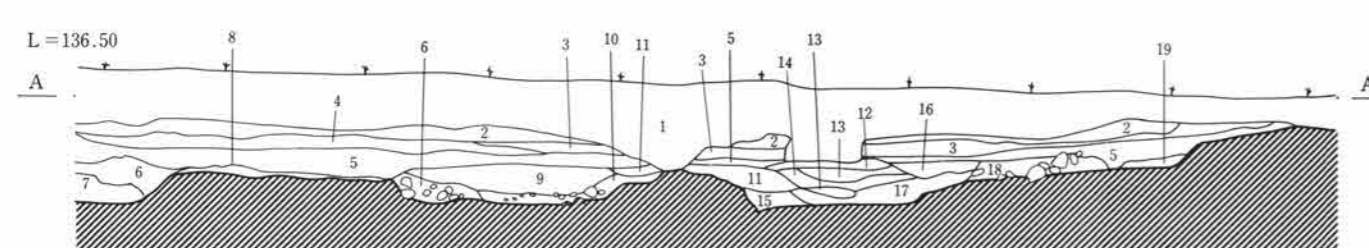
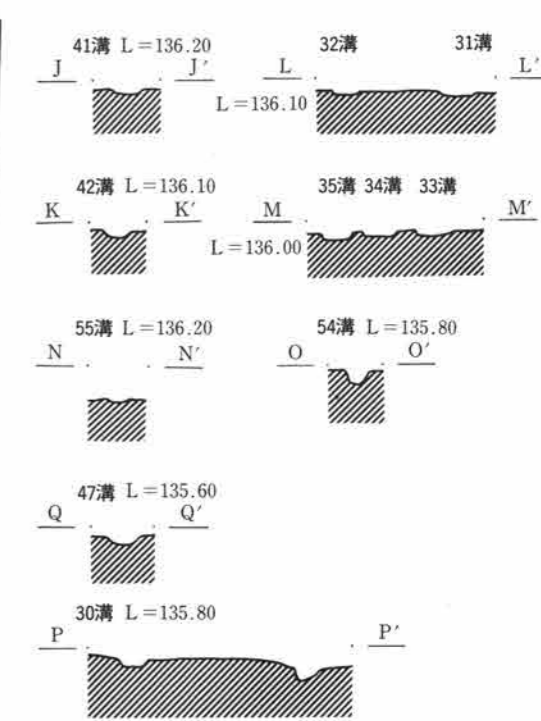
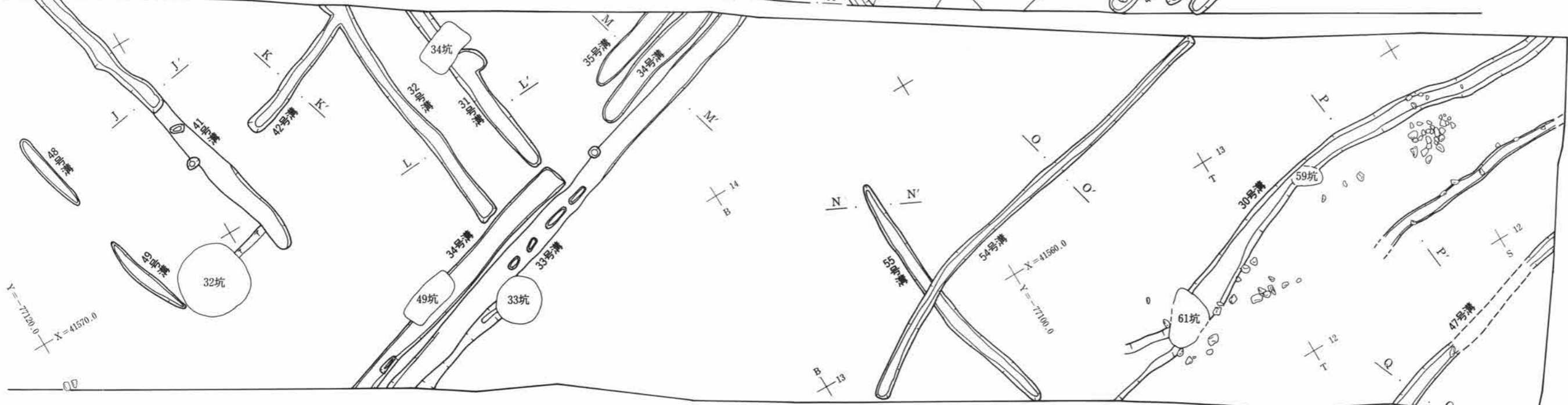
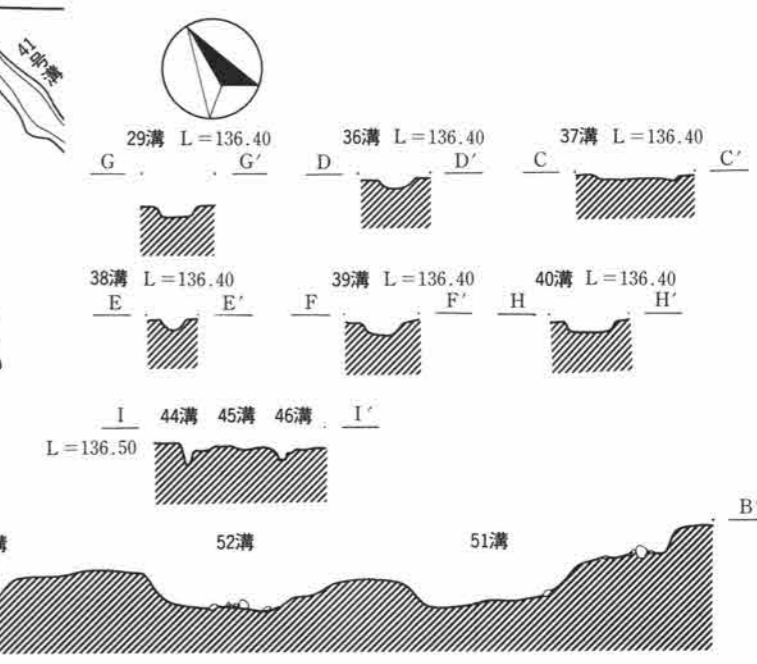
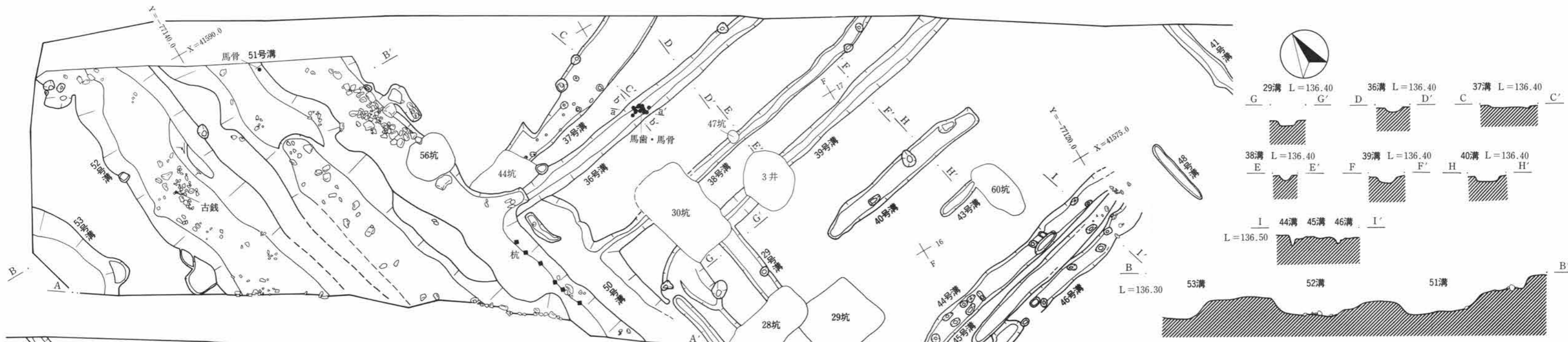
- 1 褐色土 砂質 しまり弱い FP軽石(φ1~5mm)・As-Bを少量含む
- 2 暗褐色土 しまりあり FP軽石(φ1~5mm)・As-Bを含む
- 3 褐色土 砂質 しまり弱い FP軽石(φ1~5mm)・As-Bを少量含む
- 4 暗褐色土 しまり弱い FP軽石(φ2~3mm)やや多く含む
- 5 淡黒褐色土 しまり弱い FP泥流を少量含む
- 6 黒色砂 FP泥流を少量含む



36号溝



第32図 23・24号溝平・断面図及び36号溝馬歯・馬骨出土状況図



- 56・57・58・59号溝
- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 攪乱層 | 10 灰色シルトと小礫の互層 |
| 2 黒褐色土 As-A・FP軽石を含む | 11 灰色砂礫 |
| 3 褐灰色土 砂質 As-A・斑鉄を含む | 12 灰褐色土 砂質 灰色シルト塊・FP軽石を含む |
| 4 褐色土 砂質 FP軽石・小礫を含む | 13 灰褐色細砂 FP泥流塊を含む |
| 5 褐色土 砂質 As-A・小礫・FP軽石・斑鉄を多く含む | 14 灰色シルト |
| 6 灰褐色砂礫 | 15 茶褐色砂礫 |
| 7 黒褐色土 砂質 小礫・粗砂を多く含む しまり弱い | 16 褐灰色シルト・粗砂・細砂の互層 |
| 8 褐色砂 | 17 灰色土 粘質 小礫を多く含む |
| 9 褐色砂礫 | 18 黒褐色土 As-B・FP軽石を多く含む |
| | 19 黒色土 砂質 細砂を多く含む しまり弱い |

第33図 29～55号溝平・断面図

第3節 I面の検出遺構と出土遺物

7号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第34図 P L 29	底面	坏 須恵器	口 14.3 台 7.8 体 13.0 高 5.4 底 7.5	口 100 台 95 体 100 底 100	口…端部外反 体…やや丸味もち外斜 底…短い高台付き	①②口～底…轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	暗青灰色	
2 第34図 P L 29	覆土	坏 須恵器	口 — 台 7.0 体 — 高 (2.8) 底 6.7	口 0 台 50 体 30 底 50	口…不明 体…直線的外斜 底…短い高台付き	①②口～底…轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	暗青灰色	
3 第34図 P L 29	覆土	埴 須恵器	口 15.0復 高 3.8 体 14.0復 底 8.2復	口 5 体 10 底 20	口…直線的外斜 体…直線的外斜 底…平底	①②口～底…轆轤成形 ③回転糸切り	暗青灰色	
4 第34図 P L 29	覆土	壺 須恵器	口 — 高 (3.0) 体 — 底 9.0	口 0 体 10 底 40	口…不明 体…不明 底…平底	①②体…轆轤成形 ③回転糸切り	暗青灰色	
5 第34図 P L 29	覆土	坏 須恵器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 5 体 ~5 底 0	口…不明 体…不明 底…不明	①②口～体…轆轤成形 ③不明	暗青灰色	
6 第34図 P L 29	覆土	坏 須恵器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 ~5 体 ~5 底 0	口…不明 体…不明 底…不明	①②口～体…轆轤成形 ③不明	暗青灰色	・破片断面が 砥がれ平坦化 している
7 第34図 P L 無	覆土	坏 土師器	口 15.0復 底 — 体 13.8復 高 (5.6)	口 20 体 10 底 0	口…短く内湾気味外斜 体…丸味もち外斜 底…不明	①口…ヨコナデ 体…斜 ケズリ ②口…ヨコナデ 体…斜ヘラナデ	にぶい 赤褐色	・古墳時代遺 物のため、帰 属時期無関係

25号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第35図 P L 29	覆土	鉢 軟質 陶器	口 32.6復 高 12.5 体 29.4復 底 16.8復	口 5 体 10 底 10	口…わずかに外屈 体…直線的外斜 底…平底	①口～体…ヨコナデ→ (体のみ)ユビオサエ ②口～体…ヨコナデ	暗灰色	・底部回転糸 切・体部内面 の器面が摩滅

26号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第35図 P L 29	覆土	甕 須恵器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 ~10 体 0 底 0	口…外斜・外面稜あり 体…不明 底…不明	①口…轆轤成形→波状文 を施す ②口…轆轤成形	暗青灰色	
2 第35図 P L 29	覆土	鉢 ? 陶器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 ~5 体 ~5 底 0	①(器形・手法の特徴)口縁部外面～内面に貫入あり ②(製作地)不詳		淡黄色	・陶器のため、 観察内容を変 更

27号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第35図 P L 無	覆土	鉢 軟質 陶器	口 — 高 (5.0) 体 — 底 11.7復	口 0 体 5 底 10	口…不明 体…直線的外斜? 底…平底	①体…ヨコナデ→ユビオ サエ ②体…ヨコナデ	灰褐色	・体部内面の 器面が摩滅

28号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第35図 P L 無	覆土	埴 須恵器	口 — 高 (1.5) 体 — 底 7.3復	口 0 体 ~5 底 50	口…不明 体…内湾気味外斜? 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	暗青灰色	

31号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第35図 P L 29	覆土	鉢 軟質 陶器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 5 体 ~5 底 0	口…直線的外斜 体…直線的外斜 底…不明	①口～体…ヨコナデ ②口～体…ヨコナデ	灰黄褐色	・体部内面の 器面が摩滅

第IV章 検出遺構と出土遺物

51号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面	色調	備考
1 第35図 P L 29	底面	鉢 軟質陶器	口 — 高 (7.4) 体 — 底 13.4復	口 0 体 10 底 ~5	口…不明 体…やや外反気味外斜 底…平底?	①口~体…ヨコナデ→ (体のみ)ユビオサエ ②口~体…ヨコナデ	暗灰色	・体部内面の器面が摩滅
2 第35図 P L 29	底面	鉢 軟質陶器	口 — 高 (7.8) 体 — 底 13.0復	口 0 体 10 底 ~5	口…不明 体…直線的な外斜 底…平底	①口~体…ヨコナデ ②口~体…ヨコナデ	暗褐色	・体部内面の器面が摩滅
3 第35図 P L 29	覆土	丸碗 磁器	口 — 台 3.3 体 7.3復 高 (3.8) 底 3.6	口 0 体 25 底 40	①(器形・手法の特徴)染付 ②(産地)肥前 ③(帰属時期)18世紀後~19世紀初		灰白色	・磁器のため、観察内容を変更

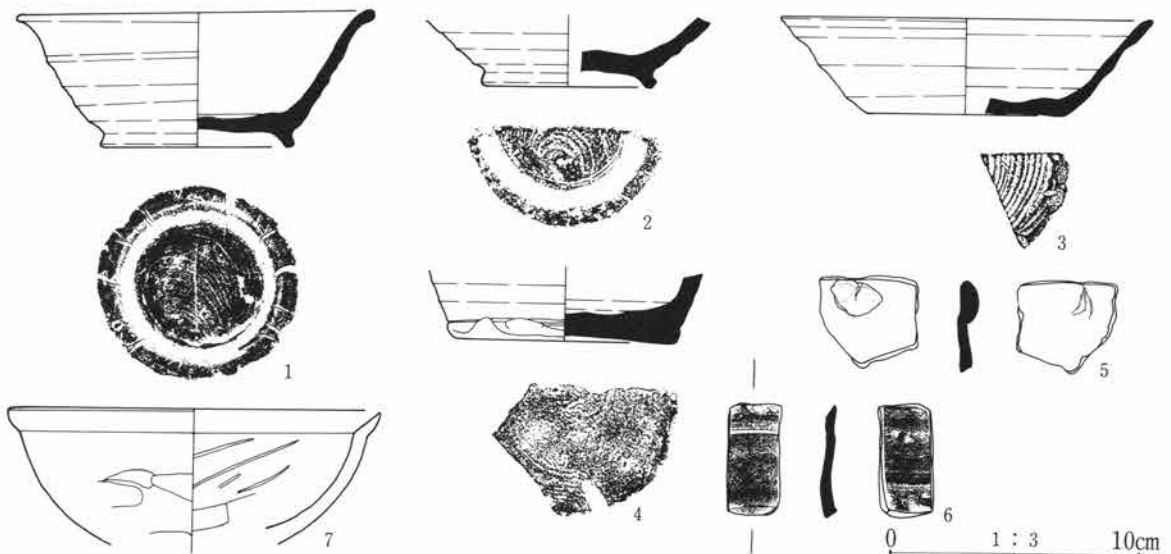
52号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第36図 P L 29	底面	鉢 軟質陶器	口 33.8 高 (14.5) 体 31.5復 底 16.3復	口 30 体 30 底 ~5	口…外斜・外面稜あり 体…やや外反気味外斜 底…わずかに丸底?	①②口~体…ヨコナデ→ ユビナデ ③不明	暗青灰色	
2 第36図 P L 29	底面	火鉢 軟質陶器	口 — 高 — 体 — 底 —	口 ~5 体 ~5 底 0	口…外斜・内面稜あり 体…不明 底…不明	①②口~体ヨコナデ ③不明	暗青灰色	・内耳の差し込み部が顕著

遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	重量 (g)	残存 (%)	石質	形態・調整の特徴	使用痕等の観察
3 第36図 P L 29	覆土	石臼 下臼	径 30.0 高 11.4	6,100	50	粗粒 安山岩	摺合部…8分割 石目間隔…0.9~1.5cm 側・底面…削り 芯穴…あり	型減り…少ない 石目深さ…0.1~0.4cm

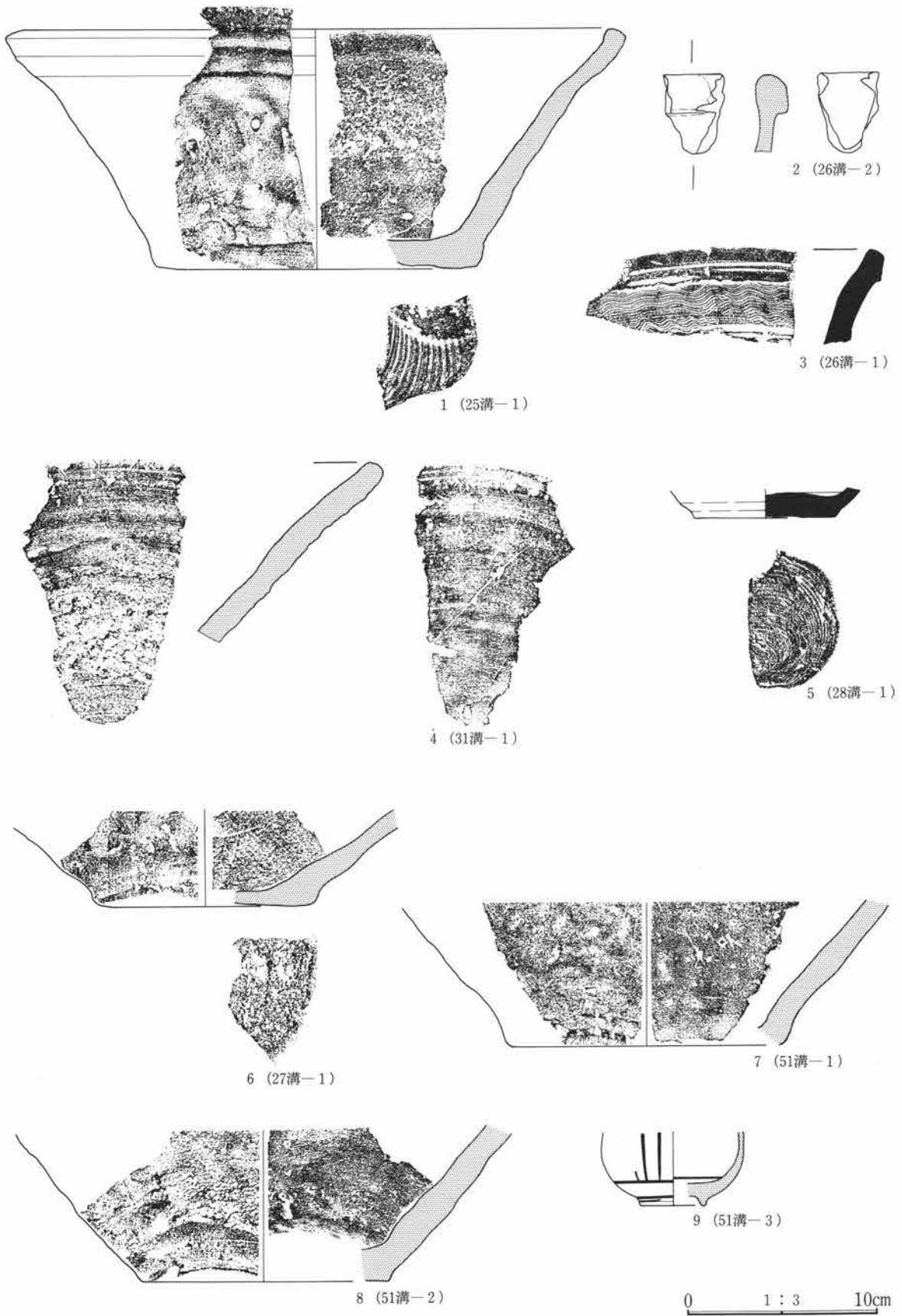
未実測の陶器片の観察表 (図・写真なし)

出土遺構	出土位置	器種別	観察内容 ①器形・手法の特徴 ②産地 ③帰属時期 ④その他
7号溝	覆土	腰鉢碗 陶器	①内面~口縁部 外面釉・体部外面鉄釉・口縁部外面下位に凹線 ②瀬戸・美濃産 ③18C後~19C前
29号溝	覆土	皿 磁器	②肥前産 ③江戸時代 18C後~19C前
31号溝	覆土	碗? 磁器	①内面と体部下位を除き鉄釉・体部下位以下は鉄化粧を施す ②瀬戸・美濃産? ③江戸時代
51号溝	覆土	德利 陶器	①口縁部~頸部胎釉・それ以下、灰釉 ②製作地不詳(地方窯) ③19C前~中

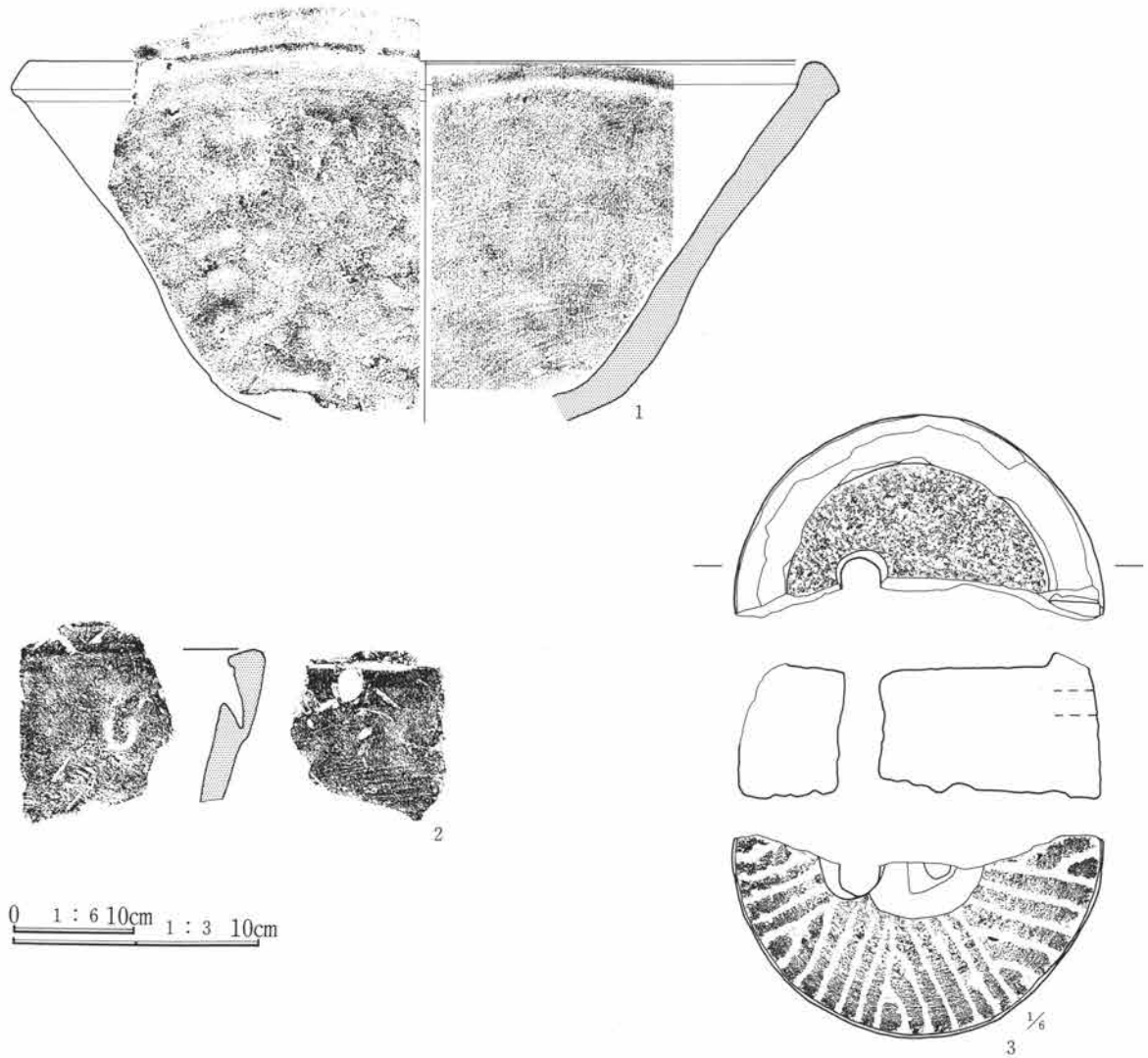


第34図 7号溝出土遺物図

第3節 I面の検出遺構と出土遺物



第35図 25~28・31・51号溝出土遺物図

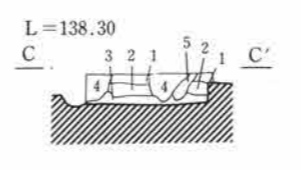
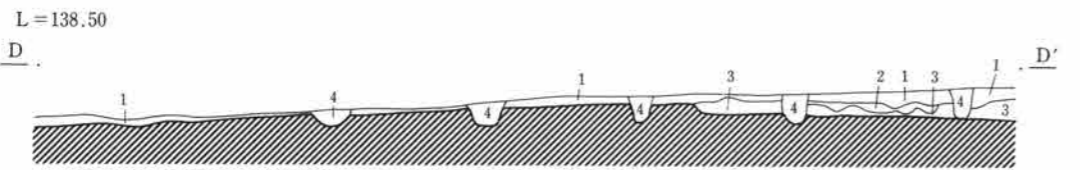
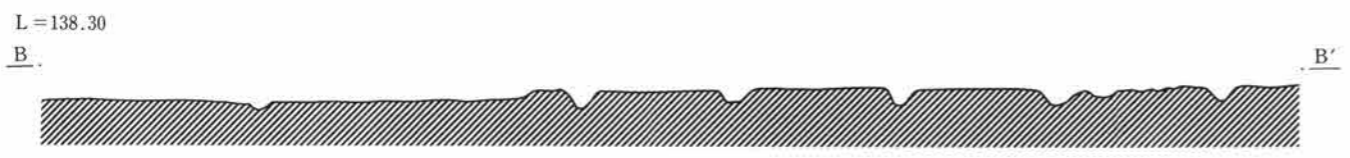
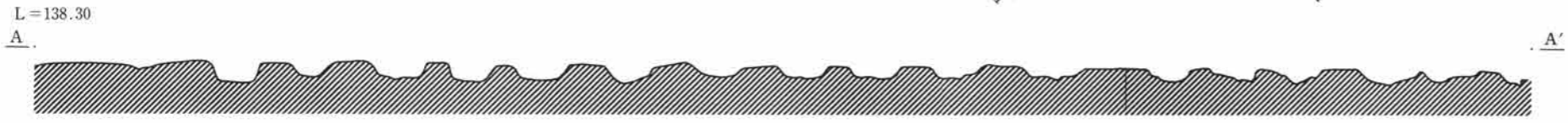
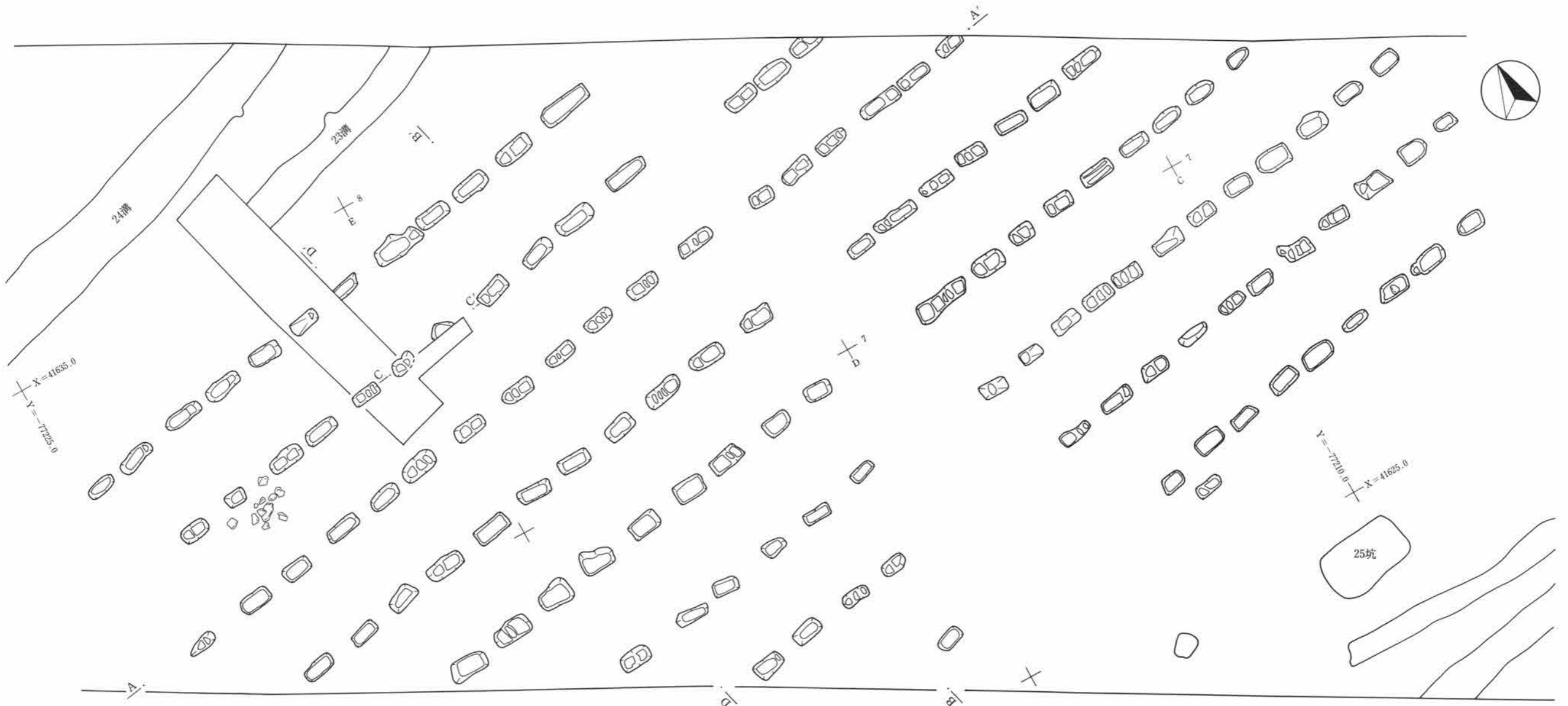


第36図 52号溝出土遺物図

耕作痕 (第37図・P L 13)

東区中央 (12地区63区B-6～E-7) で検出された。検出された遺構は、平面では長方形を呈し、その規模は最小0.30m×0.18m、最大0.72m×0.30mであるが、0.50m×0.25m程度のもので主体を占めている。深さは0.12～0.25m (As-B堆積層上面より) であり、断面は箱形を呈している。これらの箱形の遺構は東西方向に連続性がみられ、0.15～0.38mの間隔をもって、規則的に残存している。またこれらの遺構の南北方向の間隔0.9～1.2mの範囲でおさまり、規則的である。各遺構の覆土断面を観察すると、遺構一つあたり2つの平鍬の刃先らしき痕跡が見られる。また、その痕跡の方向からこれらの遺構が東から西へ移動する動作の中で土に刻まれたことが伺える。平面形状と断面の深さから、これらは根菜類の耕作痕と考えられる。

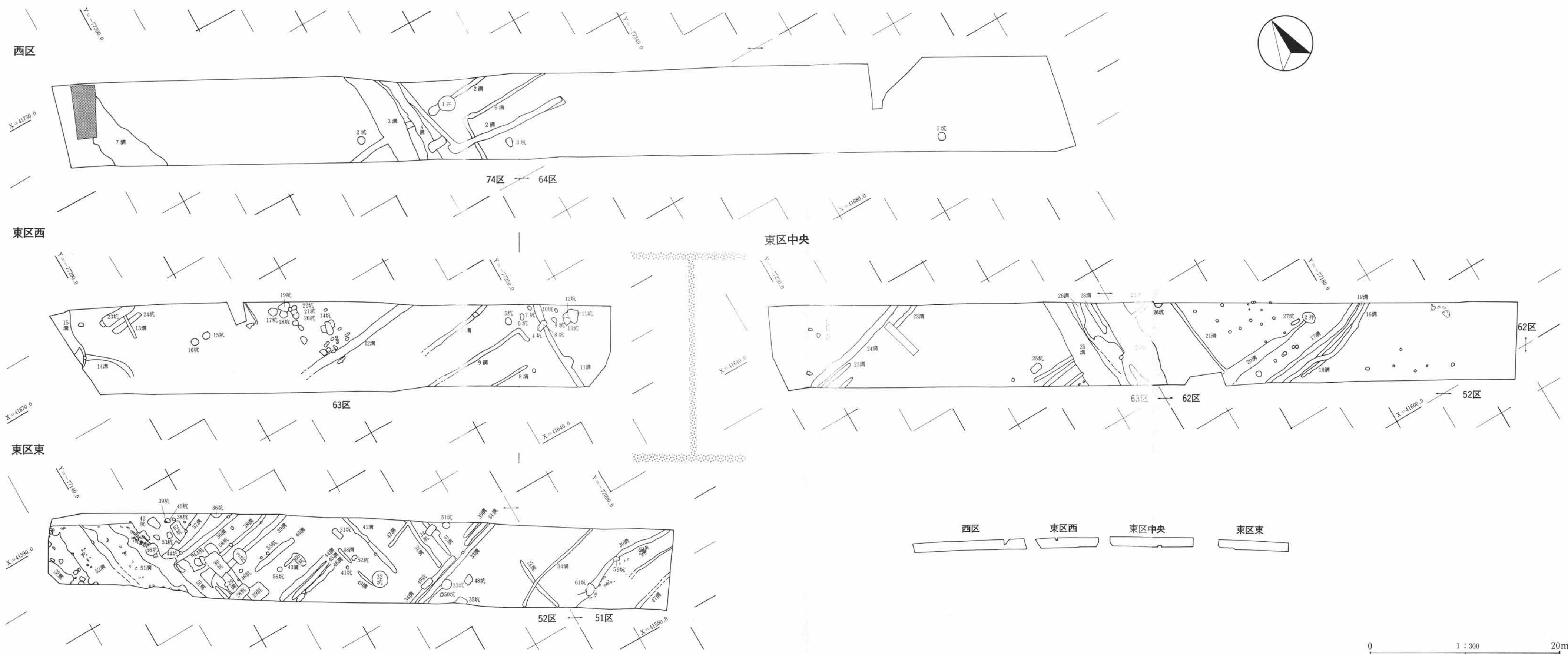
なお、帰属時期については、①調査区内土層断面の観察において第I層 (基本土層) には掘り込みの痕跡はなく、第II層 (基本土層) からの掘り込みが確認できること、②As-B層を掘り込んでいることの2点から、As-B降下以降であることは間違えないが、出土遺物がないため明確な時期は不明である。



- 1 褐色土 砂質 As-B・FP軽石を含む
- 2 暗褐色土 しまりあり As-B・FP軽石を含む
- 3 暗灰色土 しまり強い As-B・FP軽石を多く含む
- 4 褐色土 やや粘質 As-B・FP軽石を少し含む
- 5 黒褐色土 やや粘質 FP泥流を含む

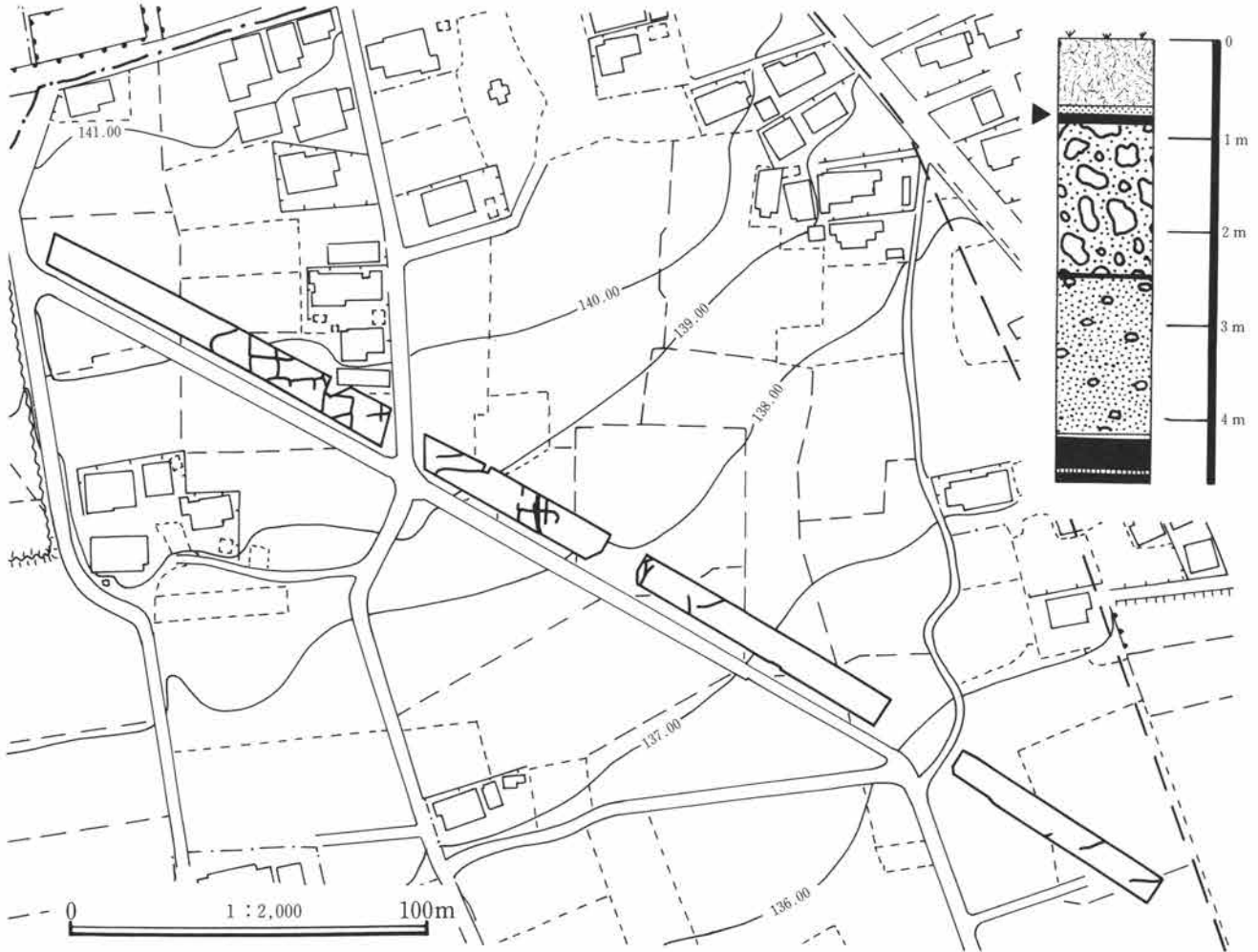


第37図 中世以降耕作痕平・断面図



第38图 1面全体图

第4節 II面の検出遺構と出土遺物



第39図 II面検出遺構概略図及び土層模式図 (▶が検出レベル)



II面調査風景 (西区：北から)



II面遺構検出状況 (西区：南東から)

第IV章 検出遺構と出土遺物

〔1〕 II面の調査概要

行力春名社遺跡におけるII面とは下記の内容をもつ

遺構帰属時期：As-B降下（1108年）直前

遺構検出面：As-B層直下

※但し、As-B層のプライマリーな堆積が確認できた箇所のみ検出対象地区とした。

表土からの深さ：0.3～0.8m

検出遺構内容：水田・溝（水田に伴う）

出土遺物内容：陶器・須恵器・埴輪（いずれも遺構に伴わない）

遺跡内容：この面の検出遺構は水田面であり、通称「B下水田」とされる遺構である。4つの調査

区とも部分的に水田は検出された。検出方法が直上に覆われたAs-B層を除去することに拠っているため、As-B層が調査時に検出されない箇所は必然的に調査対象外となった（As-B層が検出されないことは、そこにAs-B層が存在しなかったのではなく降下時（1108年）以降、今日までの間の削平によって堆積層が失われたことに因る）。

この水田面はAs-B層に覆われている特性から他遺跡の同様の遺構とのAs-B降下時の同時性を把握することが可能である。行力春名社遺跡周辺の既調査遺跡においても同様の遺構が多数検出されており、それらとの対比が可能である（付図2参照）。

なお、II面検出の水田はAs-B層埋没遺構のため、検出遺構はAs-B降下直前の状況のみを示している。よって、この水田が1108年に存在したことは明確に示しているものの、この水田の開田時期を1108年と決定する十分条件にはならず、さらには平安時代とすることも、この検出状況からでは推測の域を過ぎない。

分析・鑑定等：プラント・オパール分析

その他：なし

〔2〕 各遺構・遺物の概要

水田（第41・42図・P L 14・15）

水田は部分的ではあるものの全調査区で検出された。全域にわたり水田面はほぼ平坦であるが、巨視的にみれば北から南への約1000分の16の下り勾配である。以下、調査区ごとに概要を述べる。

西区（第41図上・P L 14）

水田は調査区の東半分で検出された。本遺跡検出中、残存状況が最も良好な水田である。水田の形状は東西方向に長い長方形が多い。畦畔は幅20～37cm、高さ5～15cmであり、いずれもほぼ同規模である。他と規模を異にするような大畦畔は認められない。畦畔の方向はほぼ東西、南北方向である。水口は明確なものは3箇所で見出されたが、どれも南北方向の畦畔中に存在している。南北方向の畦畔にはない。この要因は地形の傾斜に因るものと考えられ、水田への給排水作用に関係するものと思われる。水田1枚あたりの面積に

ついては、調査区が幅10mと狭いため、明確に数値を示せるものは数少ない。しかし、水田の形状を方形とする前提に立てば、その面積は6.0～12.0㎡と推定できる。

また、水田面には夥しい数の凹凸があり、これらはその状況から、水田耕作時に生じた痕跡と考えられる。さらにこの痕跡は緩斜面を上下に区画する東西方向の畦畔の下方際にとりわけ多く存在し、密集具合によって全体的に溝状に窪地化している。この状況は注目でき、畦畔形成時の痕跡の残存か、或いは水田の水回しのための窪地（上方から流れてきた水をプールさせるための窪地）の可能性がある。

出土遺物はない。

東区西（第41図下・P L 14・15）

水田は調査区の全域にわたり部分的に検出された。本調査区ではI面（上層）遺構による削平が著しいため、As-B層の堆積層の存在箇所が少ない。よって、水田も散在的である。水田の形状は東西方向に長い長方形であることが推測できる。畦畔は幅23～34cm、高さ3～12cmであり、いずれもほぼ同規模である。他と規模を異にするような大畦畔は認められない。畦畔の方向はほぼ東西、南北方向である。水口は明確なものは1箇所で見出され、東西方向の畦畔中に存在している。このことは地形の傾斜に因るものと考えられ、水田への給排水作用に関係するものと思われる。水田1枚あたりの面積については、調査区が幅10mと狭く、かつ部分的にしか検出されていないため、明確に数値を示せるものはない。だが、検出部分の状況から他調査区の水田と同規模であることが見込まれる。さらに、調査区の中央付近では溝1条（56号溝）が検出された。この溝は、As-B降下時には溝状に窪んでいたことは明白ではあるものの、一方で東西方向の畦畔を分断して存在している。このことは、少なくとも溝とそれにより分断された畦畔とのそれぞれの遺構の一次機能が作用した上での共存関係がないことを示唆している。この状況の解釈とすれば、①畦畔が溝によって分断されているためAs-B降下時はこの水田は稲作耕地としての機能がない、②As-B降下時には水田耕地としての機能はあったものの、分断された畦畔が部分的に機能していない、の2つが考えられる。この場合は畦畔の残存具合や周囲の状況を考慮すると、後者の可能性の方が高い。

また、水田面には夥しい数の凹凸があり、これらはその状況から、水田耕作時に生じた痕跡と考えられる。さらにこの痕跡は緩斜面を上下に区画する東西方向の畦畔の下方際にとりわけ多く存在し、密集具合によって全体的に溝状に窪地化している。この状況は注目でき、畦畔形成時の痕跡の残存か、或いは水田の水回しのための窪地（上方から流れてきた水をプールさせるための窪地）の可能性がある。

出土遺物は水田耕土（基本土層第IV層）中から須恵器坏片2（第40図1）・陶器碗片1（第40図2）及び埴輪片（第40図5）が出土した。出土状況から考えて、水田に関連するものとは思えない。

56号溝（第41図下・P L 14）	位置…東区西(12地区63区L-10～M-13G)	覆土…As-B層	規模…(平面)長10.8m・幅0.80～1.80m
	断面)0.15m：逆台形	北から南への下り勾配	出土遺物…なし
	他遺構との新旧関係…56号溝→12号溝	帰属時期…As-B降下直前、または、それ以前と考えられる	備考…本溝が畦畔1条を分断している

東区中央（第42図上・P L 15）

水田は調査区の西側5分の1の範囲で部分的に検出された。本調査区ではI面（上層）遺構による削平が著しいため、As-B層の堆積層の存在箇所が少ない。よって、水田も散在的である。水田の形状は方形であることが推測できる。畦畔は幅18～26cm、高さ6～16cmであり、いずれもほぼ同規模である。他と規模を異にするような大畦畔は認められない。畦畔の方向はほぼ東西、南北方向である。水口は明確なものはない。水田1枚あたりの面積については、調査区が幅10mと狭く、かつ部分的にしか検出されていないため、明確に数

第IV章 検出遺構と出土遺物

値を示せるものはない。だが、検出部分の状況から他調査区の水田と同規模であることが見込まれる。

また、水田面には夥しい数の凹凸があり、これらはその状況から、水田耕作時に生じた痕跡と考えられる。さらにこの痕跡は緩斜面を上下に区画する東西方向の畦畔の下方際にとりわけ多く存在し、密集具合によって全体的に溝状に窪地化している。この状況は注目でき、畦畔形成時の痕跡の残存か、或いは水田の水回しのための窪地（上方から流れてきた水をプールさせるための窪地）の可能性はある。

出土遺物は水田耕土（基本土層第IV層）中から須恵器碗片1（第40図3）及び陶器碗片（第40図4）が出土した。出土状況から考えて、水田に関連するものとは思えない。

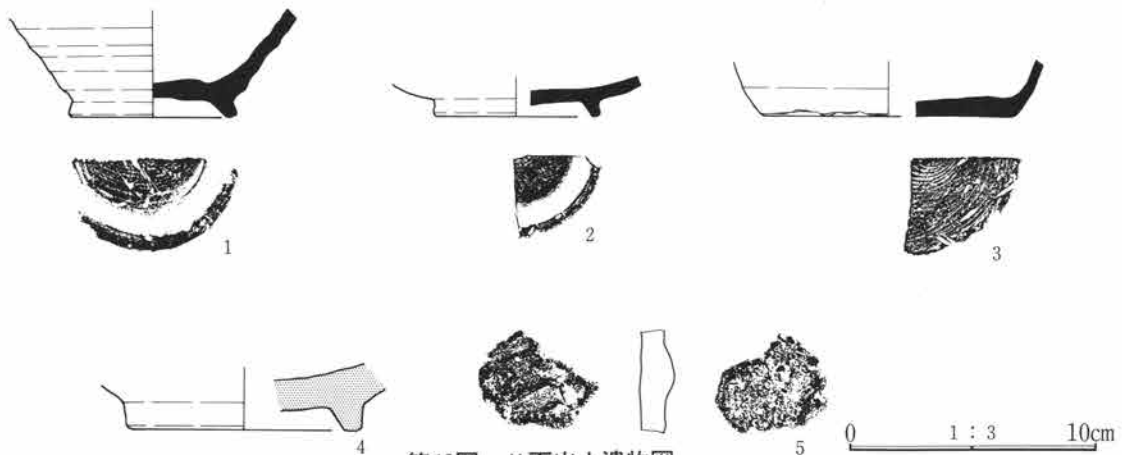
東区東（第42図下・P L 15）

水田は調査区の東半分の範囲で部分的に検出された。本調査区ではI面（上層）遺構による削平が著しいため、As-B層の堆積層の存在箇所が少なく、本遺跡検出中、残存状況が最も不良な水田である。水田の形状は方形であることが推測できる。畦畔は幅20～37cm、高さ3～13cmであり、いずれもほぼ同規模である。他と規模を異にするような大畦畔は認められない。畦畔の方向はほぼ東西、南北方向のほか、僅かに弧状を呈するものもある。水口は明確なものはない。水田1枚あたりの面積については、調査区が幅10mと狭く、かつ部分的にしか検出されていないため、明確に数値を示せるものはない。

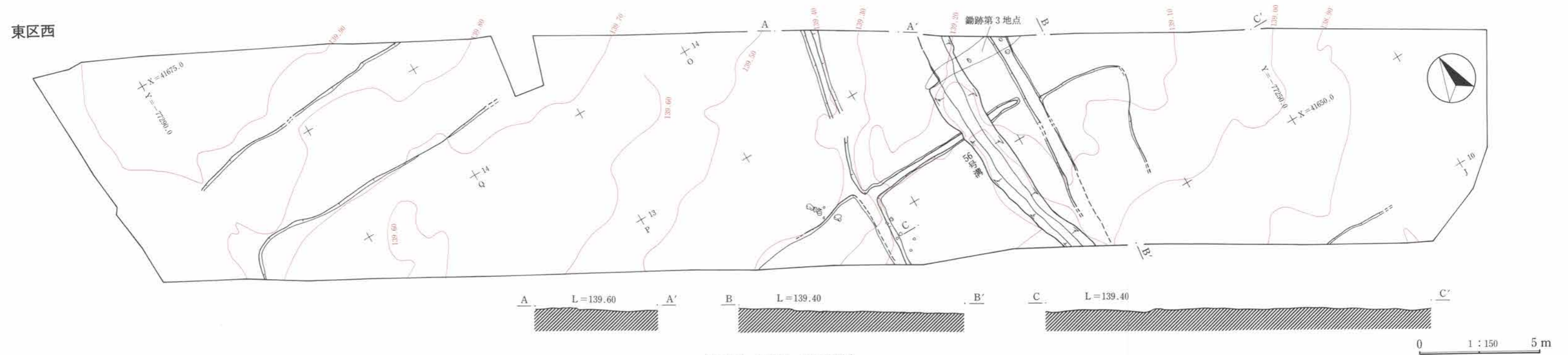
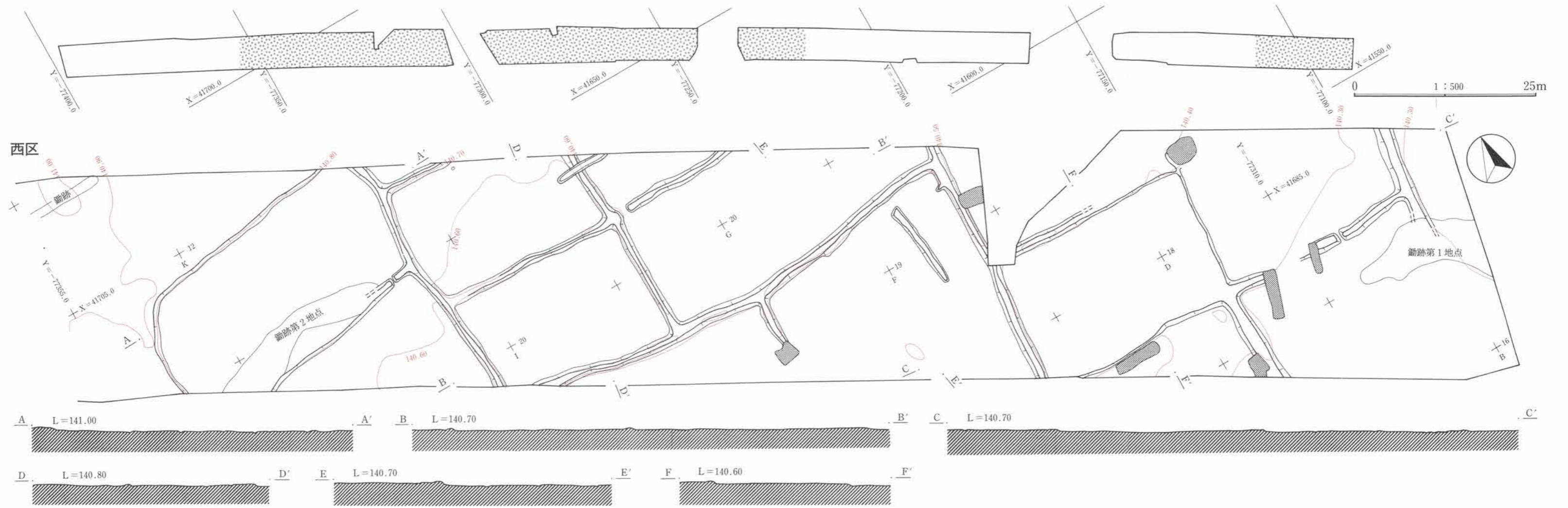
出土遺物はない。

II面出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴			色調	備考
						①外面	②内面	③底部		
1 第40図 P L無	第IV 層中	坏 須恵器	口 — 台 6.8 体 — 高 (4.3) 底 6.5	口 0 台 40 体 30 底 40	口…不明 体…直線的な外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け		灰黄色		
2 第40図 P L無	第IV 層中	碗 陶器	口 — 台 6.8復 体 — 高 (1.5) 底 6.6復	口 0 台 25 体 ~5 底 25	口…不明 体…丸味もち外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り		灰白色	・体部内外面に に灰釉	
3 第40図 P L無	第IV 層中	碗 須恵器	口 — 高 (2.2) 体 — 底 10.2復	口 0 体 5 底 25	口…不明 体…やや内湾気味外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り		青灰色		
4 第40図 P L無	第IV 層中	碗 ? 陶器	口 — 台 9.4復 体 — 高 (2.6) 底 9.6復	口 0 台 20 体 ~5 底 20	口…不明 体…不明 底…短い高台付き	①②体…不明 ③不明		にぶい 橙色	・体~底部内 外面に施釉	
5 第40図 P L無	第IV 層中	円筒 埴輪	口 — 高 (3.1) 体 — 底 —	口 0 体 ~5 底 0	口…不明 体…突帯あり 底…不明	①体…タテハケ ②体…不定ユビナデ		橙色	・古墳時代遺 物の流入品の ため、帰属時 期無関係	

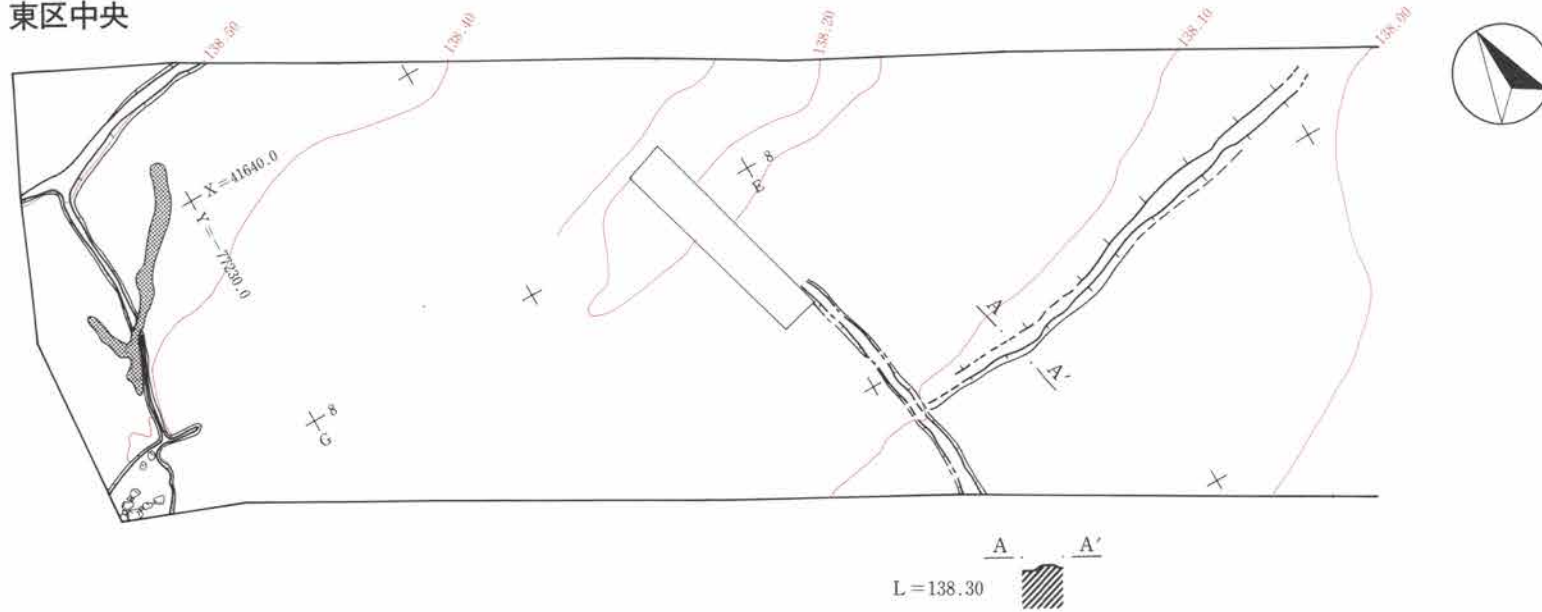


第40図 II面出土遺物図

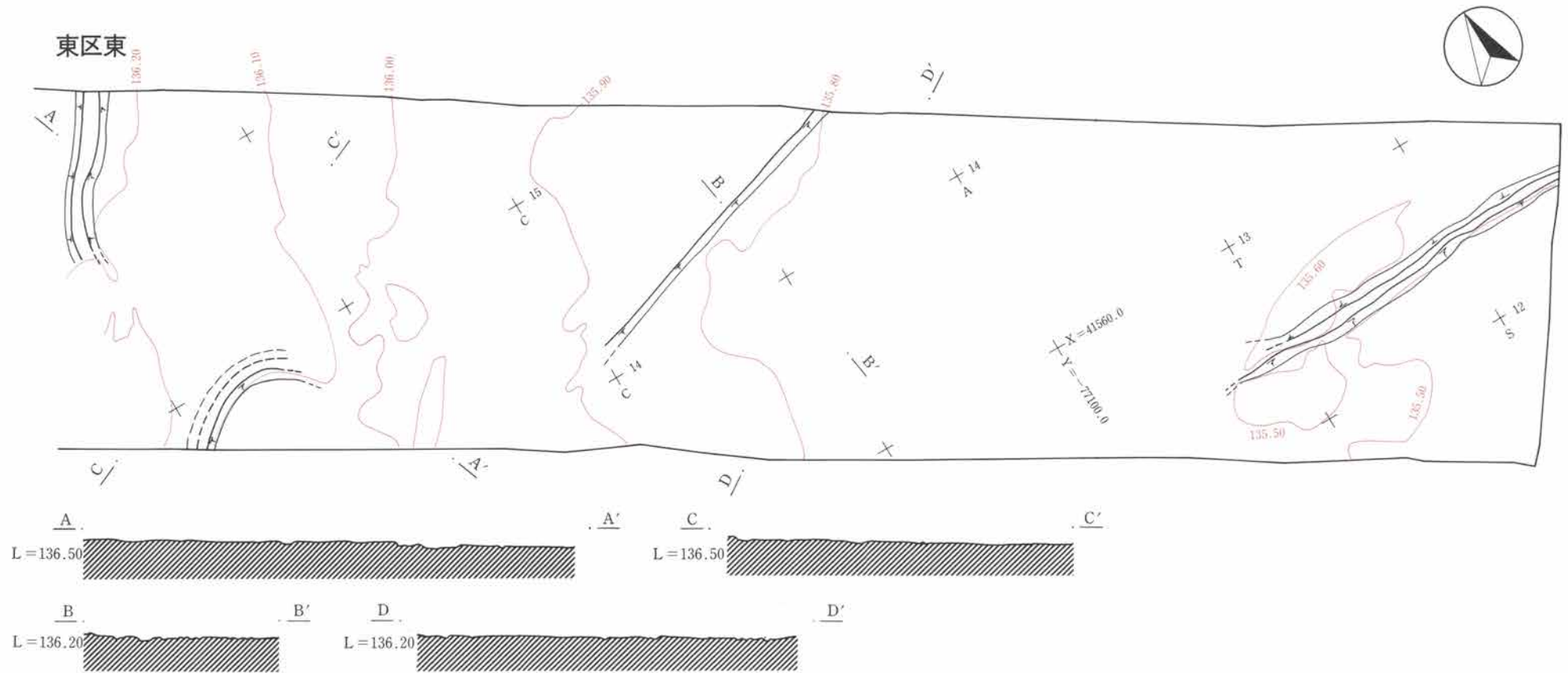


第41图 II面平·断面图(1)

東区中央



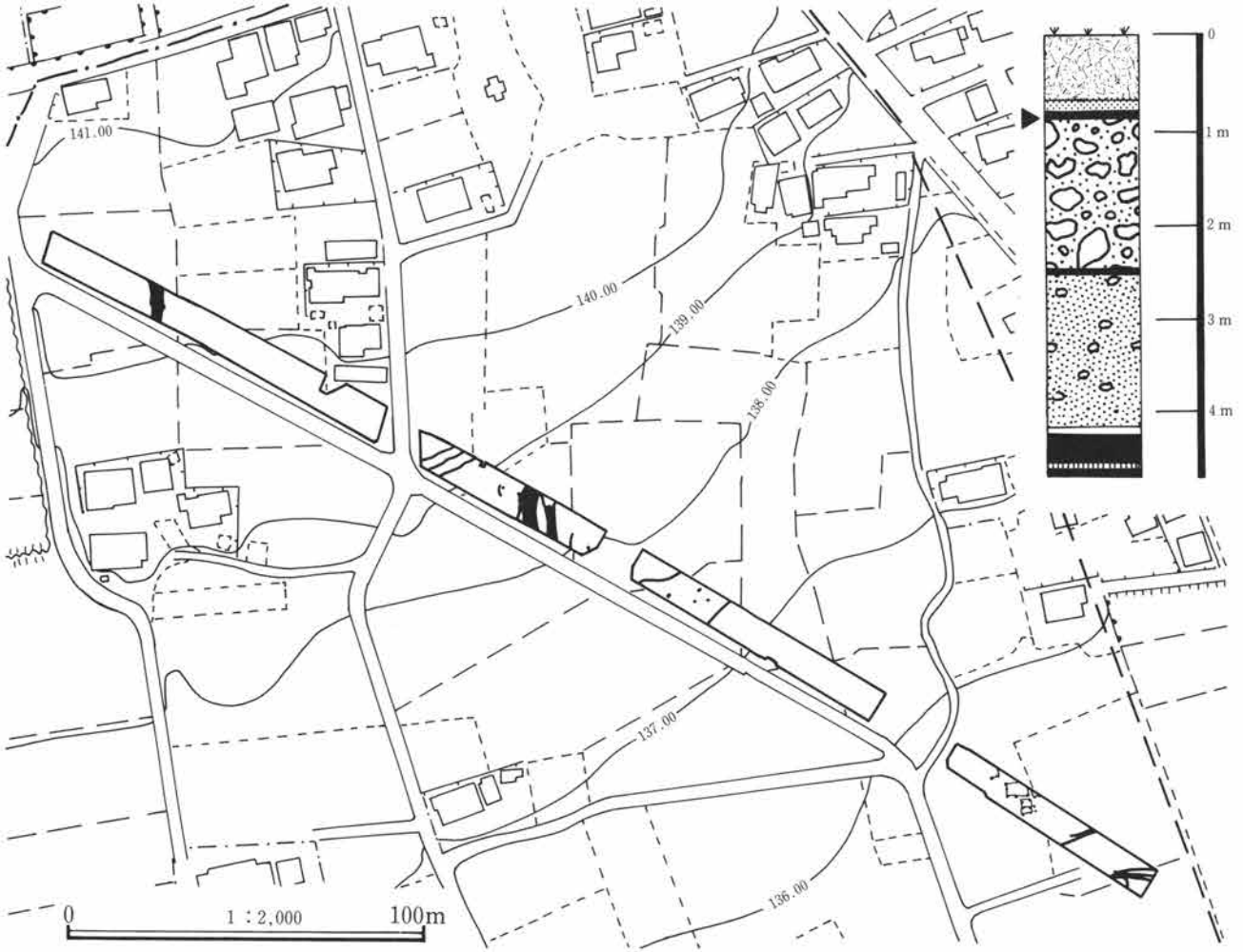
東区東



0 1 : 150 5 m

第42図 II面平・断面図(2)

第5節 III面の検出遺構と出土遺物



第43図 III面検出遺構概略図及び土層模式図 (▶が検出レベル)



III面調査風景 (東区中央：北西から)



III面遺構検出状況 (東区東：南から)

第IV章 検出遺構と出土遺物

〔1〕 III面の調査概要

行力春名社遺跡におけるIII面とは下記の内容を持つ

遺構帰属時期：FP泥流堆積終了以降、As-B下水田（II面）形成以前

※FP泥流の堆積活動の終了がいつなのか？また、As-B下水田の形成がいつから開始されるのか？、これらの時代・時期観の変化があれば、III面の遺構帰属時期は左右される。しかし、数少ない出土品から時代・時期を推し量るなら、平安時代前期～中期の範疇でとらえられる。

遺構検出面：As-B下水田耕土（黒色粘質土）下の、FP泥流最上面

※但し、明らかにAs-B下水田以前の遺構であることを把握するため、As-B下水田面では痕跡が全く認められない遺構に限って、III面帰属遺構とした。

※調査区の大半はAs-B下水田耕土部分まで後世の削平が及んでいるおり、I面とIII面の遺構が同一面にて検出されることが生じた。この場合、I面の遺構との識別は主として遺構覆土に抛り、III面に帰属するものについては遺構覆土にAs-A及びAs-Bが含まれないことを指標とした。

表土からの深さ：0.8～1.4m

検出遺構内容：掘立柱建物・井戸・土坑・溝

出土遺物内容：須恵器・土師器・陶器・埴輪片（流入）

遺跡内容：本調査はI～V面までであるがその中で第III面が調査面積あたりの検出遺構数が最も少ない。このことは、直上に形成されるAs-B下水田（II面）耕土によって大半を削平されていることに起因すると考えられる。しかし、検出されている遺構の残存状況から推測すると、遺構量が他面（特にI面）程度存在していたとすれば、もっと多くの遺構が残存していても良いように思われる。従って、III面はもともと遺構量が他面に比して少なかったと考える。

遺構は調査区内において数カ所にまとまる傾向が伺える。東区西の溝群や東区東の掘立柱建物群はそれに相当する。掘立柱建物の検出はI面には見当たらず、III面のみに検出されていることは興味深い。

なお、このIII面としている面を調査する事は、この地域開発史を考えるうえで重要な意味を持つ。それは、前述のことだがこの地域一帯に展開するAs-B下水田（II面）がいつ形成され始めたか、その上限をIII面（As-B下水田耕土を除去する事によって検出される面のこと）検出の遺構によって把握する事が可能だからである。この地域のAs-B下水田の成立時期を、直接的な遺構関係によっておさえることが必要であり、そのためにも今後の調査においては、調査条件の許す限りこの面の調査は実施することが必要であると考えられる。

分析・鑑定等：なし

その他：なし

〔2〕 各遺構・遺物の概要

掘立柱建物（第44～46図・第7～12表・P L 16）

東区中央で1軒、東区東で5軒、計6軒検出された。

調査区が狭いため、全貌の分かるものは5・6号掘立柱建物のみである。他の4軒についてはいずれも調査区外に連続すると考えられるため、全体の規模や構造については、推測に拠るところが他に比して一層大きい。

検出された範囲で見る限り、全掘立柱建物が側柱構造である。柱穴間隔は建物によって差をもつが、1つの建物内では梁間・桁間はその距離に大ききばらつきはない。建物の軸は若干振れはするもののほぼ4方位におさまる。なお、柱穴内からの土器等の出土遺物はない。

1号掘立柱建物では柱穴の位置的關係から棟持柱構造を想定できる。1・3・4号掘立柱建物では柱痕を持つ柱穴が検出されている。また4号掘立柱建物では底面より偏平な自然石が出土した柱穴が検出された。

検出の掘立柱建物は東区東の1箇所に5軒が集中している。明瞭な切り合いは5・6号掘立柱建物の2軒のみであり、土器等の出土遺物も皆無のため、新旧関係を把握することはできない。しかし、切り合いをもたないとしても遺構相互の距離を考慮すると、これら全てが同時に存在していたとは考え難い。

本遺跡検出の掘立柱建物はIII面のみである。この掘立柱建物がどのような機能を持っていたかは不明であるが、この建物域（III面）がやがて水田化（II面）し、再び屋敷関連域（I面）となる変遷を把握する事ができる。

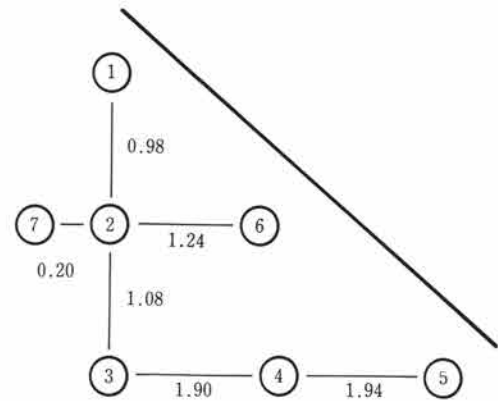
1号掘立柱建物（第44図・P L 16）	位置…東区中央(12地区63区S-5・T-5G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(西辺)1.75m～(南辺)3.00m～；2間×2間～(遺構が調査区外に広がるため、正確な規模は不明)	棟方向…東西	平面形状…東西にやや長い長方形・西辺中央のP-2がやや張り出している	P-7はP-2との位置的關係から、棟持柱の可能性あり	柱穴規模…(直径)15～28cm(但し、P-4は2基重複のため不明)	(深さ)8～26cm	柱痕…P-2・P-4・P-7で確認	柱穴覆土…いずれもFP軽石を含み、As-Bを含まない黒色土或いは褐色土	柱穴個別データ…第7表参照	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	
2号掘立柱建物（第45図・P L 16）	位置…東区東(12地区52区G-17・G-18G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(東辺)1.25m～(南辺)1.38m～；1間×1間～(遺構が調査区外に広がり、また、他遺構に切られているため、正確な規模は不明)	棟方向…不明	平面形状…全体は不明	南辺のP-3・P-4の新旧関係は不明(同時存在の可能性あり)	柱穴規模…(直径)26～40cm	(深さ)35～45cm	柱痕…なし	柱穴覆土…いずれも、FP軽石を含み、As-Bを含まない褐色土	柱穴個別データ…第8表参照	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	
3号掘立柱建物（第45図・P L 16）	位置…東区東(12地区52区D-16・E-16・E-17G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(南東辺)1.75m～(北西辺)2.63m～；1間×1間～(遺構が調査区外に広がるため、正確な規模は不明)	棟方向…不明	柱穴規模…(直径)20～23cm	(深さ)13～23cm	柱痕…P-1で確認	柱穴覆土…いずれも、FP軽石を含み、As-Bを含まない暗褐色土	柱穴個別データ…第9表参照	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない			
4号掘立柱建物（第45図・P L 16）	位置…東区東(12地区52区E-16・E-17・F-16・F-17G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(西辺)2.45m(南辺)3.75m；2間×2間(見込み)	棟方向…N-74°-E	平面形状…西辺に比して東辺が長くなる、やや歪んだプラン(見込み)	柱穴規模…(直径)18～53cm	(深さ)15～67cm	柱痕…P-1・P-3・P-4・P-7で確認	柱穴覆土…いずれもFP軽石を含み、As-Bを含まない暗褐色土	柱穴個別データ…第10表参照	出土遺物…P-6・P-8の底面より偏平な自然石が各1点ずつ出土(未図化)	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…P-2・P-5は本建物に伴うか否か不明	
5号掘立柱建物（第46図・P L 16）	位置…東区東(12地区52区E-15・E-16・F-16G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(東辺)2.05m(南辺)2.35m；2間×1間	棟方向…N-76°-E	平面形状…ほぼ正方形・P-3が僅かに張り出す	柱穴規模…(直径)17～29cm	(深さ)20～56cm	柱痕…なし	柱穴覆土…いずれも、FP軽石を含み、As-Bを含まない褐色土	柱穴個別データ…第11表参照	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…6号掘立柱建物との新旧は不明	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…P-4は本建物に伴うか否か不明
6号掘立柱建物（第46図・P L 16）	位置…東区東(12地区52区E-15・E-16G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	平面規模…(東辺)1.45m(南辺)1.95m；1間×1間	棟方向…N-77°-E	平面形状…ほぼ正方形・P-4が僅かに張り出す	柱穴規模…(直径)20～34cm	(深さ)15～39cm	柱痕…なし	柱穴覆土…いずれも、FP軽石を含み、As-Bを含まない褐色土	柱穴個別データ…第12表参照	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…5号掘立柱建物との新旧は不明	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…P-3・P-5は隣接するが新旧不明、例えば、P-5を主柱穴、P-3を主柱抑え(?)の支柱と考えれば、同時存在も考えられる

第IV章 検出遺構と出土遺物

第7表 1号掘立柱建物ピット・データ一覧

	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	円形	32×26×13	無	
P-2	円形	32×26×20	有 φ12	
P-3	円形	30×26×20	無	
P-4	円形	50×30×10・22	有 φ16・16	柱痕2箇所あり
P-5	円形	23×23×16	無	
P-6	円形	21×18×8	無	
P-7	長円形	36×28×26	有φ12	棟持柱?

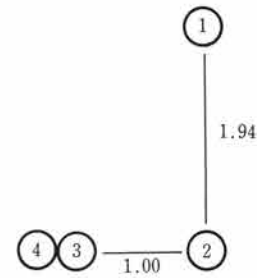
(表内の数値単位: cm)



第8表 2号掘立柱建物ピット・データ一覧

	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	長円形	40×32×30	無 30	40×32×24
P-2	長円形	40×28×22	無 22	40×28×22
P-3	円形	33×38×28	無 28	33×38×28
P-4	円形	35×35×24	無 24	35×35×24

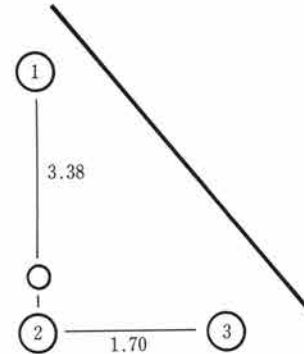
(表内の数値単位: cm)



第9表 3号掘立柱建物ピット・データ一覧

	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	円形	32×33×24	有 φ7	32×33×24
P-2	円形	28×28×22	無 22	28×28×22
P-3	円形	35×33×12	無 28	35×33×12

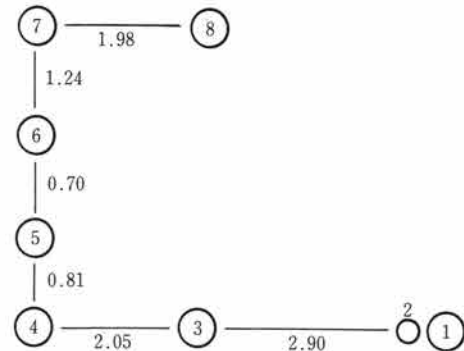
(表内の数値単位: cm)



第10表 4号掘立柱建物ピット・データ一覧

	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	長円形	42×32×48	有 φ11	42×32×48
P-2	円形	25×22×16	無	25×22×16
P-3	円形	42×42×49	有 φ12	42×42×49
P-4	長円形	50×48×49	有 φ16	50×48×49
P-5	円形	34×32×18	無	34×32×18
P-6	円形	40×40×18	無	40×40×18
P-7	長円形	46×40×60	有 φ9	46×40×60
P-8	長円形	50×42×38	無	底面に石あり

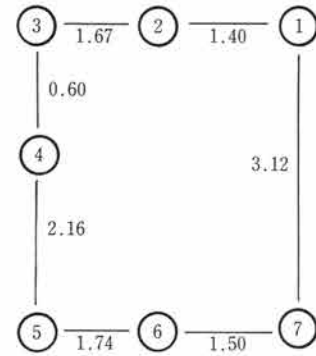
(表内の数値単位: cm)



第11表 5号掘立柱建物ピット・データ一覧

	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	長円形	25×21×33	無	
P-2	長円形	30×28×20	無	
P-3	円形	28×26×18	無	
P-4	円形	30×24×28	無	柱穴?
P-5	円形	30×30×27	無	
P-6	長円形	28×18×44	無	
P-7	長円形	29×25×21	無	

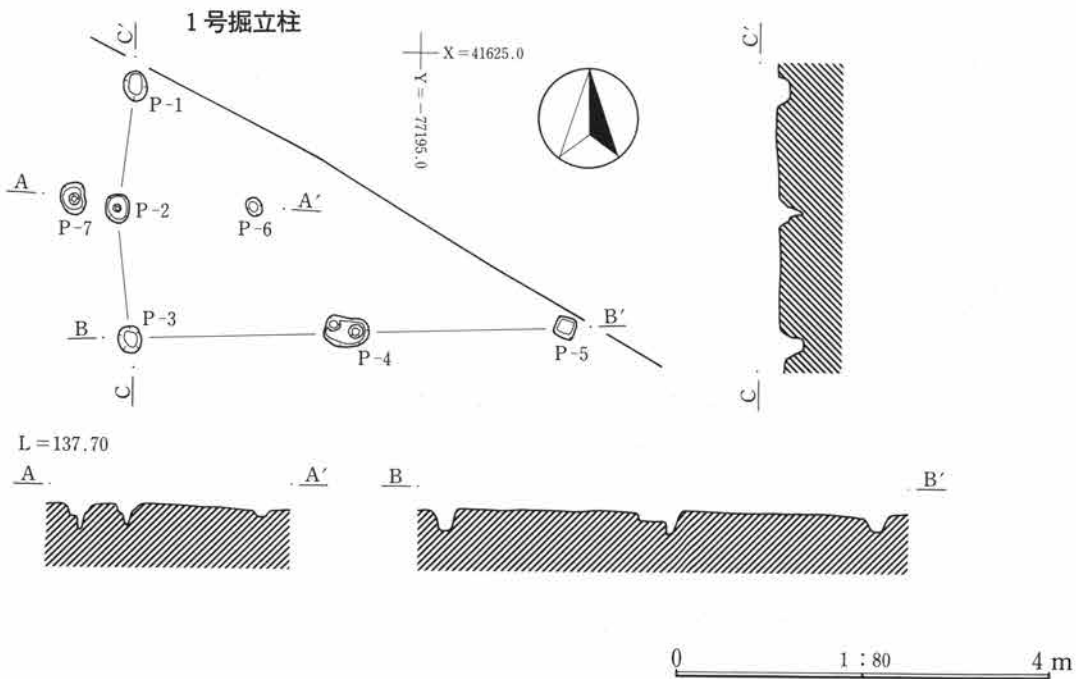
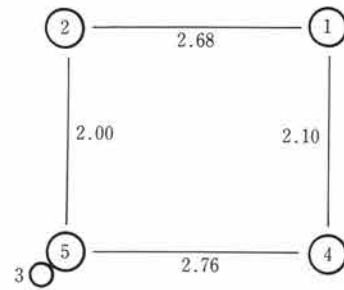
(表内の数単位:cm)



第12表 6号掘立柱建物ピット・データ一覧

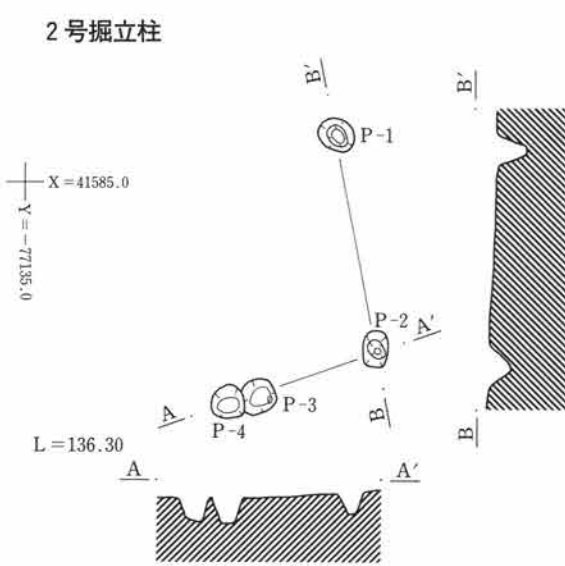
	形状	長径×短径×深さ	柱痕有無	備考
P-1	長円形	34×26×32	無	
P-2	円形	38×22×28	無	
P-3	円形	28×26×15	無	
P-4	長円形	28×23×20	無	
P-5	円形	32×32×18	無	

(表内の数単位:cm)

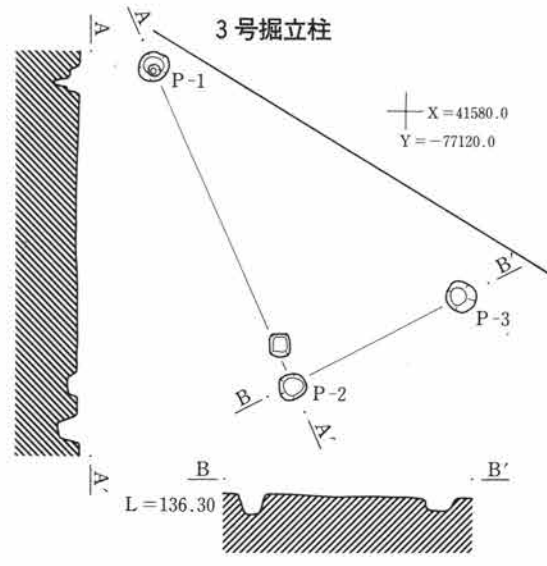


第44図 1号掘立柱建物平・断面図

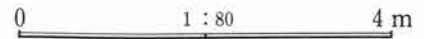
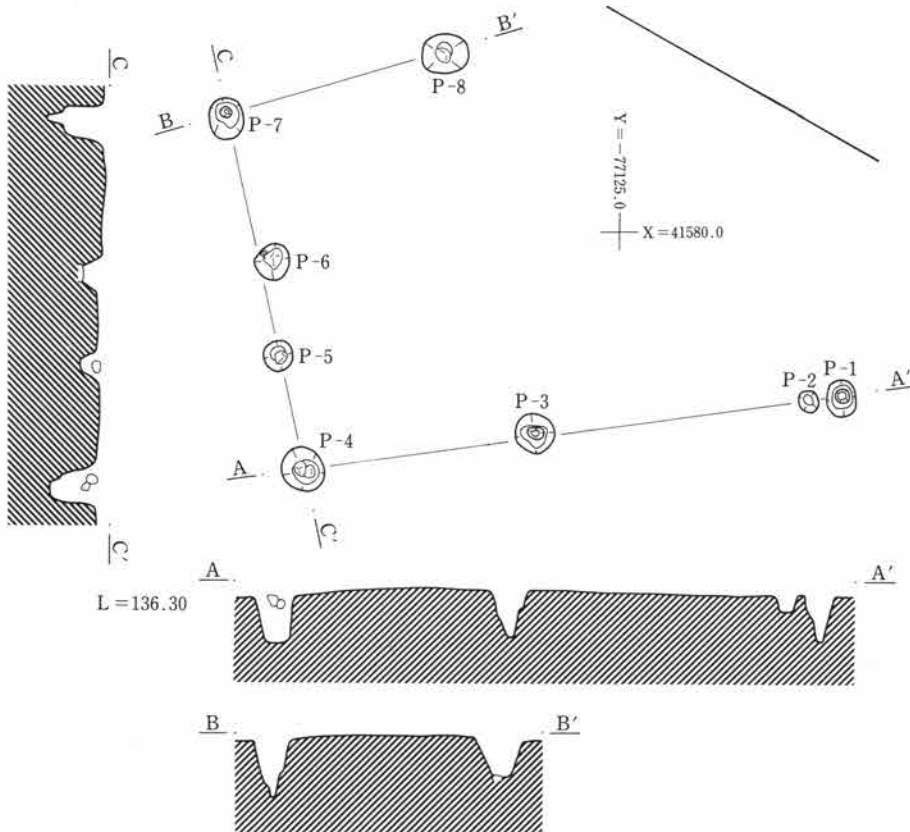
2号掘立柱



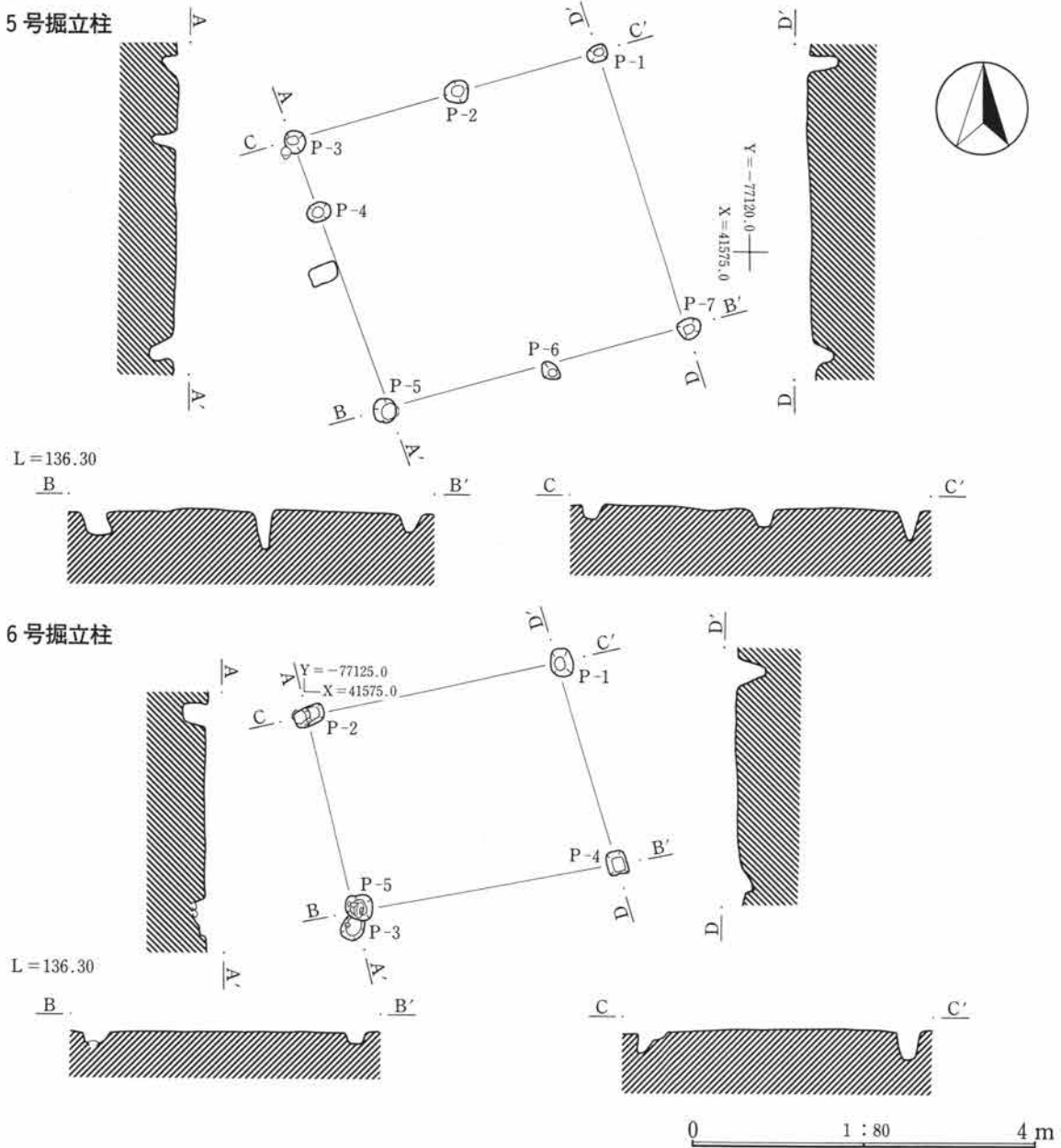
3号掘立柱



4号掘立柱



第45図 2～4号掘立柱建物平・断面図



第46図 5・6号掘立柱建物平・断面図

井戸 (第47~48図・P L 16)

西区で1基、東区西で1基、計2基が検出された。いずれも深さが約1m前後であり、底面はFP泥流層中にある。現在の湧水はない。井戸と認定した根拠は、平面形状と堆積層の状況である。出土遺物は若干はあるものの、極めて貧弱である(4号井戸出土の埴輪片(第48図2)は時期を異にする混入品であるが、周辺の古墳時代環境を考える上での必要遺物と考え、掲載した)。

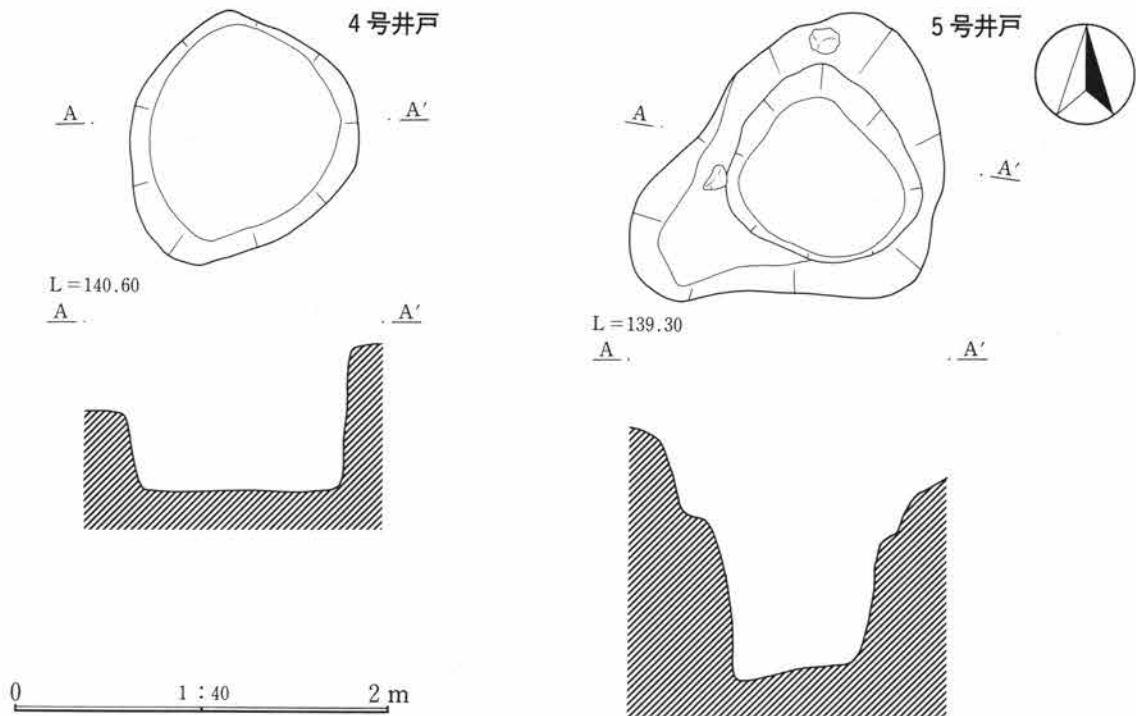
井戸の帰属時期の認定については、出土遺物を手がかりに判断することは難しい。だが、他遺構との新旧関係によって、上限と下限とをおさえることは可能である。ともに下限はAs-B下水田形成時である。

4号井戸は57号溝との単純な切り合い関係にある。だが、5号井戸に関しては、60号溝との切り合い関係

第IV章 検出遺構と出土遺物

は必ずしも前後関係を捉えられない。むしろ、覆土の状況からすれば、5号井戸と60号溝は共存している可能性が高い。そのことは、機能性を重視した上での60号溝との平面位置関係からも伺える。60号溝が2本から1本に集結する地点に5号井戸が位置すること、また60号溝が北から南へ下る傾斜面と同一方向にあり、下方に連続していることから、5号溝は60号溝に付設する集水用の井戸と考えられる。

4号井戸 (第47図・P L 16)	位置…西区(12地区74区M-3・N-3G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	覆土…FP泥流・灰色シルトを含む砂礫層	規模…(平面)1.32m×1.26m：不整形円形 (断面)0.98m：円筒形	出土遺物…覆土より須恵器坏片1 (第48図1)・埴輪小片1 (第48図2)が出土・また、覆土より須恵器片6・土師器片1 (いずれも未図化)が出土	他遺構との新旧関係…57号溝→4号井戸→2号溝	帰属時期…出土遺物の年代から10世紀代、またはそれ以前と考えられる
5号井戸 (第47図・P L 16)	位置…東区西(12地区63区L-11G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質褐色土と黒灰色砂礫の互層	規模…(平面)1.86m×1.46m：楕円形 (断面)1.30m：円筒形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…60号溝に付設する井戸と考えられる	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、と考えられる



第47図 4・5号井戸平・断面図

4号井戸出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第48図 P L無	覆土 下層	坏 須恵器	口 — 台 5.5復 体 — 高 (2.9) 底 5.6復	口 0 台 40 体 30 底 40	口…不明 体…丸味もち外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り・台部作り だし	灰白色	
2 第40図 P L無	覆土 下層	円筒 埴輪	口 — 高 (2.6) 体 — 底 —	口 0 体~5 底 0	口…不明 体…突帯あり 底…不明	①体…タテハケ ②体…不定ユビナデ	にぶい 橙色	・古墳時代遺物の流入品のため、帰属時期無関係



第48図 4号井戸出土遺物図

土 坑 (第49～51図・P L 17)

東区西で3基、東区中央で11基、計14基が検出された。

本来、III面の遺構はAs-B下水田耕土(II面)下で検出されるべきであるが、3基以外(64・65・73号土坑)以外は、厳密に言えば、As-B下水田耕土下より検出されていない。それは、それら遺構検出地点において、As-B下水田耕土が後世の削平により取り除かれている状況にあるからである。よって、多くの場合、検出時の確認面レベルはI面のそれとほぼ同じであるが、覆土にAs-Bが含まれる(I面)か含まれない(III面)かによって区別した。

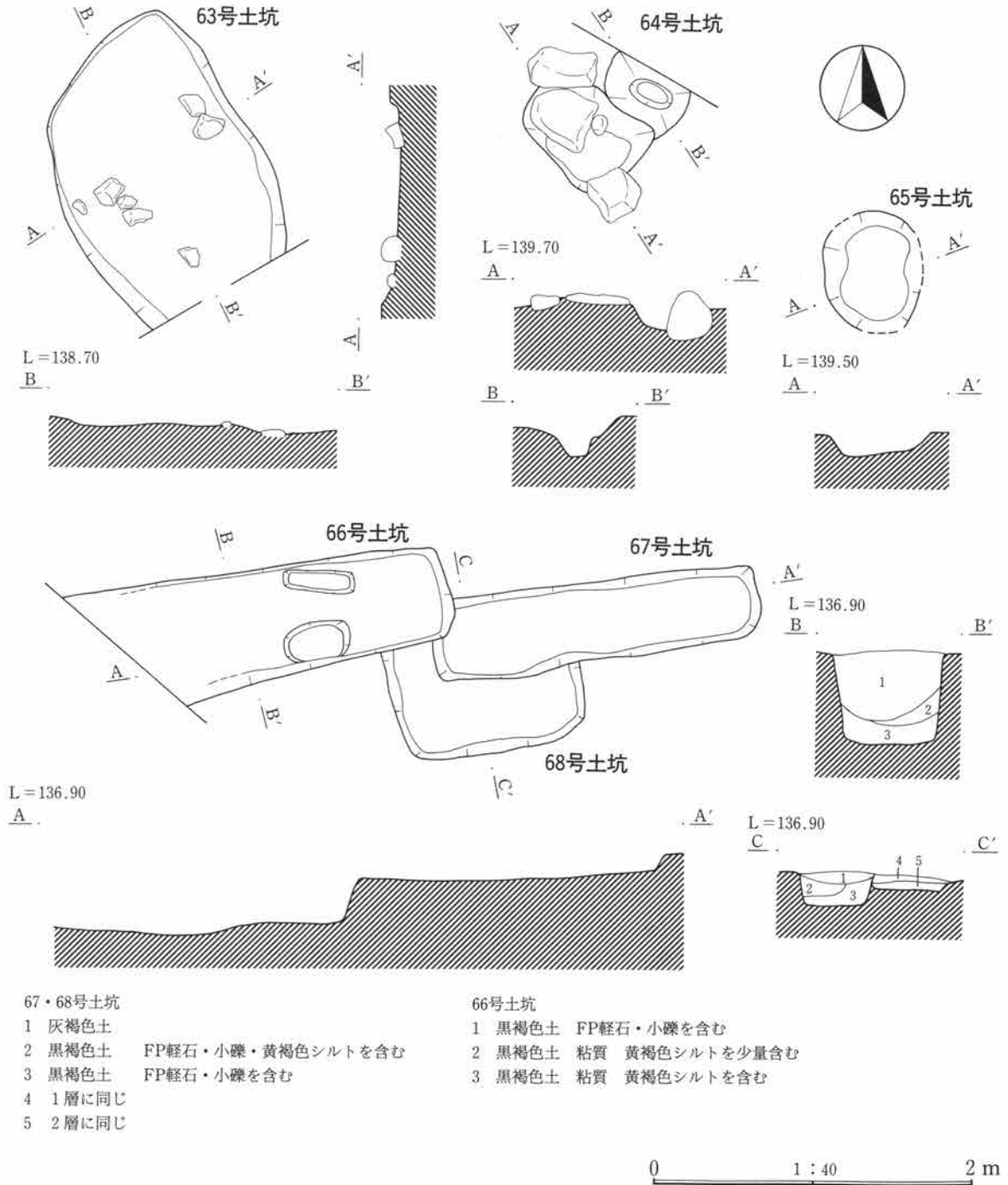
平面規模は0.70×0.67mのものから2.00×0.90mのものまで、さまざまであるが、深さについてはほとんど(66・67・69号土坑を除く)が0.05～0.10m程度の規模しかもたない。このことは、As-B下水田(II面)形成時に上面を削平されたことに起因する。

出土遺物は遺構量に比して極めて少ない。帰属時期及び性格の検討は出土遺物によっては判断ができない。

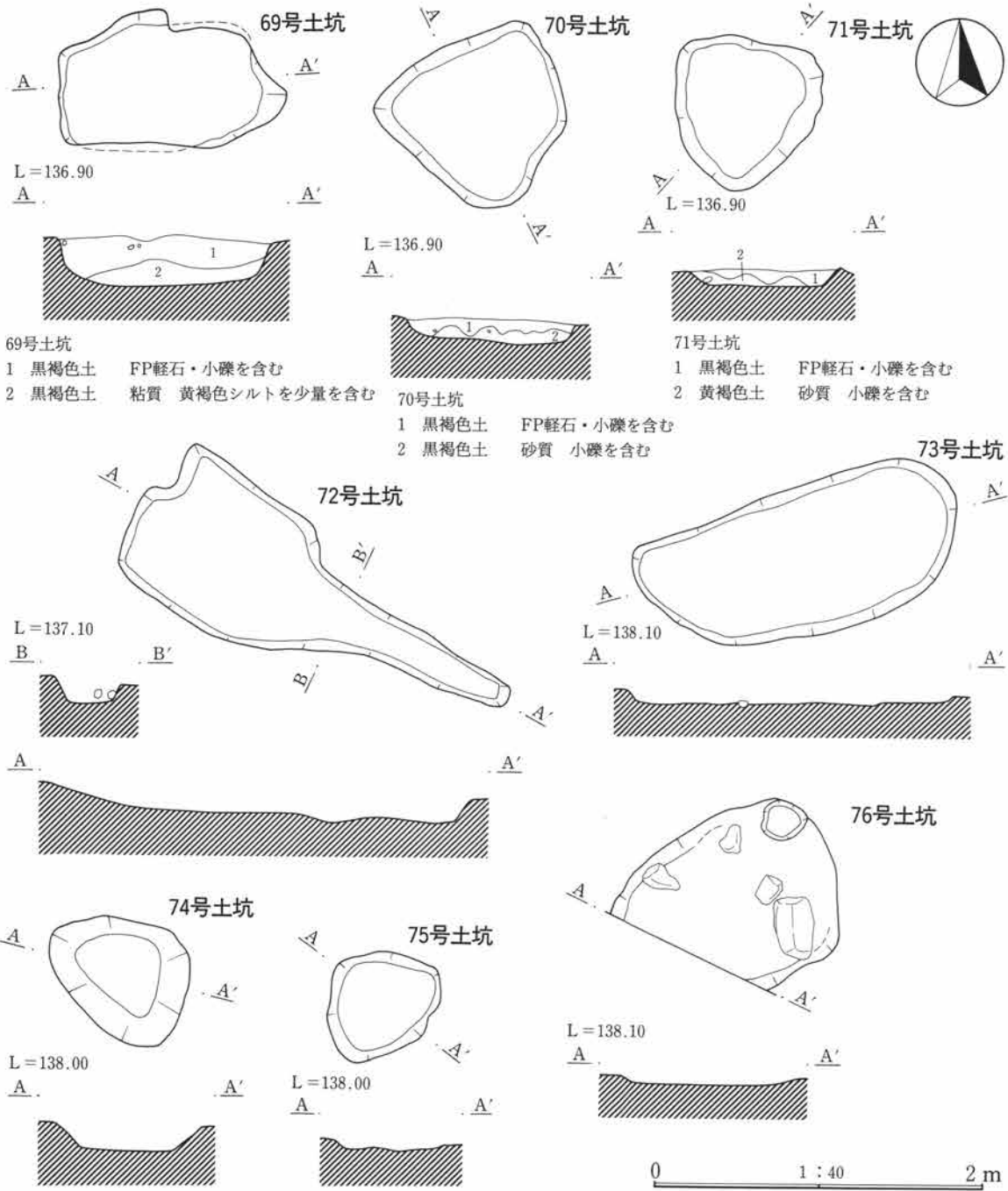
63号土坑 (第49図・P L 無)	位置…東区西(12地区63区I-9・J-9・J-10G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む黒褐色土	規模…(平面)1.73m×1.24m:長円形(断面)0.09m:不整箱形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
64号土坑 (第49図・P L 無)	位置…東区西(12地区63区O-14G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石を含む暗褐色土	規模…(平面)0.85m×0.75m:双楯円形(断面)0.25m:塊形	出土遺物…覆土より陶器碗片1(第51図1)を出土	帰属時期…出土遺物から10世紀代、または、それ以前と考えられる	
65号土坑 (第49図・P L 無)	位置…東区西(12地区63区N-13・O-13G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石を含む暗褐色土	規模…(平面)0.81m×0.62m:円形(断面)0.15m:浅い塊形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	
66号土坑 (第49図・P L 17)	位置…東区中央(12地区62区N-1・O-1G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・黄色シルトを含む粘質黒褐色土が主体	規模…(平面)2.40m×0.70m:長方形(断面)0.58m:箱形	出土遺物…覆土より灰軸陶器碗片1(未図化)出土	他遺構との新旧関係…68号土坑→67号土坑→66号土坑	備考…床面中央付近の両壁際には不整形のピット(深さ5～7cm)が1箇所ずつ検出
67号土坑 (第49図・P L 17)	位置…東区中央(12地区62区N-1G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・黄褐色シルトを含む粘質黒褐色土が主体	規模…(平面)2.00m×0.50m:長方形(断面)0.12m:箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…68号土坑→67号土坑→66号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
68号土坑 (第49図・P L 17)	位置…東区中央(12地区52区N-20・O-20G・62区N-1・O-1G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・黄褐色シルトを含む粘質黒褐色土が主体	規模…(平面)1.20m×0.75m:方形(断面)0.20m:箱形	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…68号土坑→67号土坑→66号土坑	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
69号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区52区N-20G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・黄褐色シルトを含む粘質黒褐色土が主体	規模…(平面)1.35m×0.70m:不整形長方形(断面)0.28m:箱形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
70号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区62区M-1・N-1G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む砂質黒褐色土が主体	規模…(平面)1.10m×1.10m:不整形長方形(断面)0.13m:箱形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
71号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区62区M-1・N-1G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む砂質黒褐色土が主体	規模…(平面)0.90m×0.88m:不整形円形(断面)0.10m:逆台形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
72号土坑 (第50図・P L 無)	位置…東区中央(12地区62区O-2・O-3G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む黒褐色土	規模…(平面)2.55m×0.90m:不整前方後方形(断面)0.15m:不整半円形	出土遺物…覆土より須恵器坏片1(未図化)が出土	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	備考…本地点ではAs-B下水田は後世の削平により検出されていない
73号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区63区C-7・D-7G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む砂質茶褐色土	規模…(平面)2.00m×0.90m:楕円形(断面)0.05m:不整箱形	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、としか考えられない	

第IV章 検出遺構と出土遺物

74号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区63区D-6G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石を含む砂質褐色土
75号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区63区C-6G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む砂質の茶褐色土
76号土坑 (第50図・P L 17)	位置…東区中央(12地区63区E-6・E-7G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・小礫を含む砂質の茶褐色土



第49図 63～68号土坑平・断面図



第50図 69～76号土坑平・断面図

64号土坑出土遺物

遺物番号	出土層位	器種 種類	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第50図 PL28	覆土 下層	碗 陶器	口 一 台 7.0復 体 一 高 (2.8) 底 7.4復	口 0 台 20 体 10 底 20	口…不明 体…丸味もち外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	灰白色	・灰釉陶器



第51図 64号土坑出土遺物図

第IV章 検出遺構と出土遺物

溝 (第52～54図・P L 18・19・29・30)

西区で1条、東区西で4条、東区中央で1条、東区東で4条、計10条が検出された。

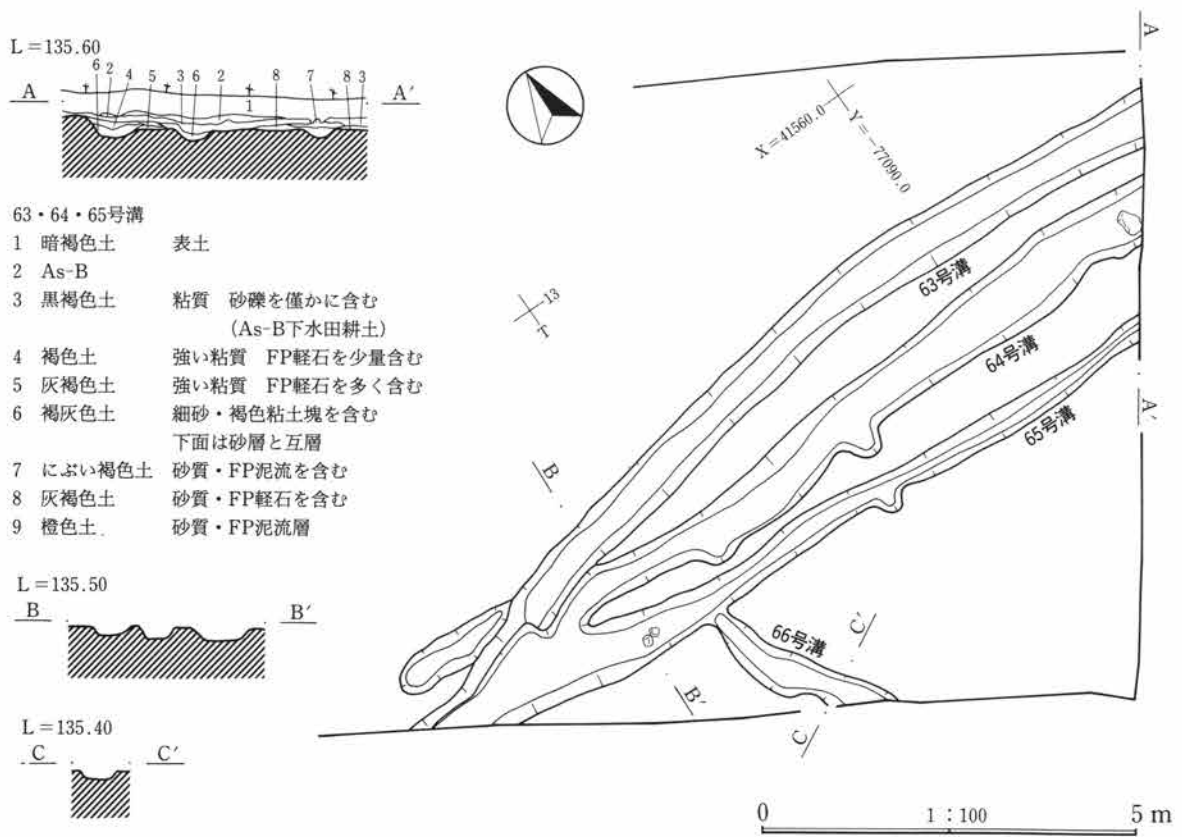
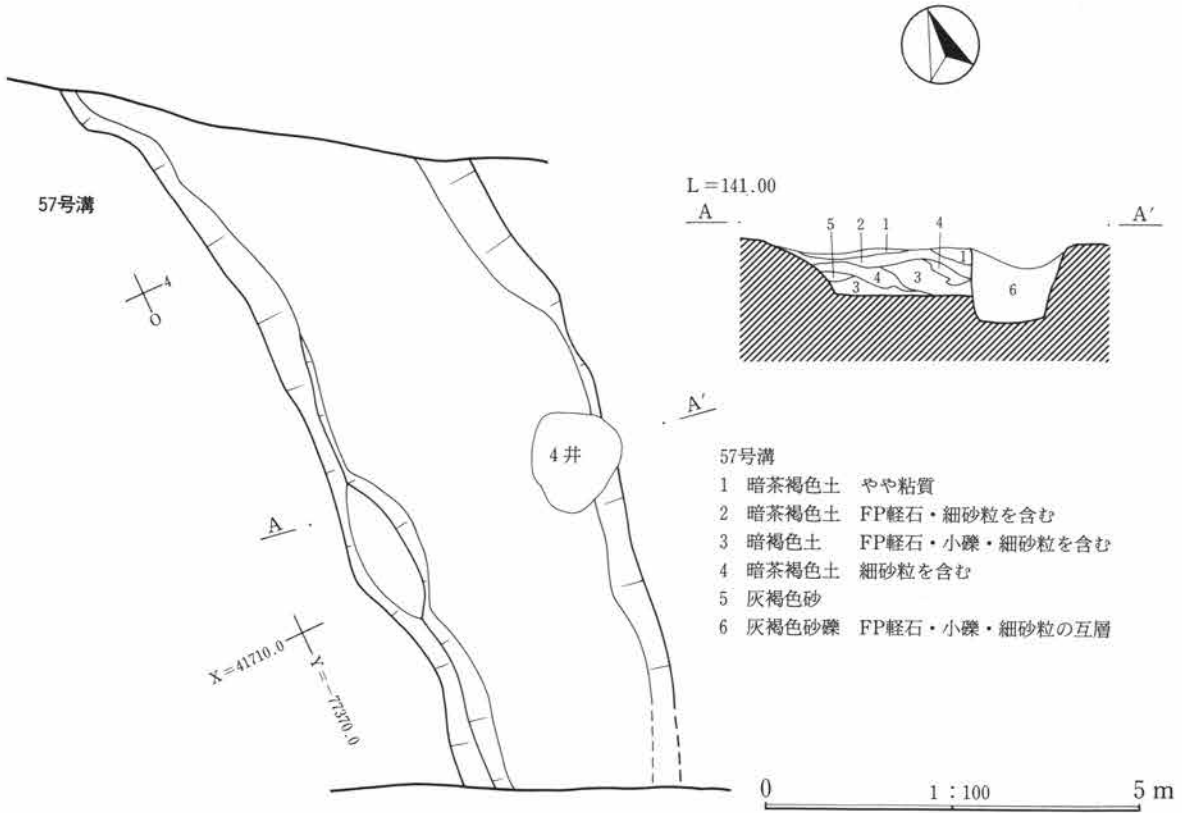
平面規模は幅0.8～3.8mである。遺構数は少ないながら、それらが数箇所集中している状況は興味深い。走行方向はほとんどがほぼ東西(63～65号溝)、或いはほぼ南北(57～61・66号溝)であり、例外が1条(62号溝)ある。

出土遺物は、57・60号溝に集中して出土しているが、総量としては少ない。特に60号溝は、本遺跡中では帰属時期を判断する上での比較的良好な資料が出土している。

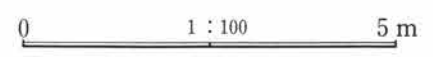
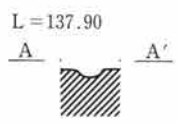
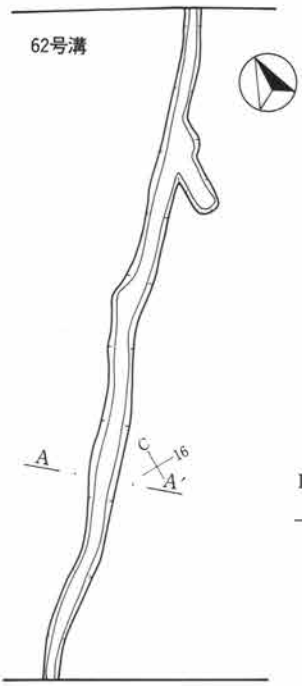
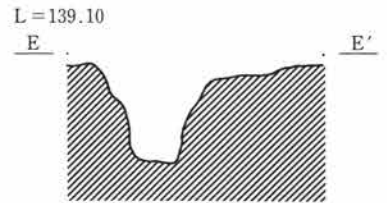
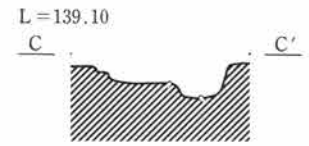
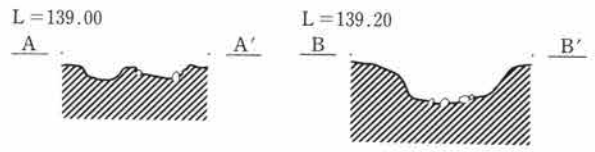
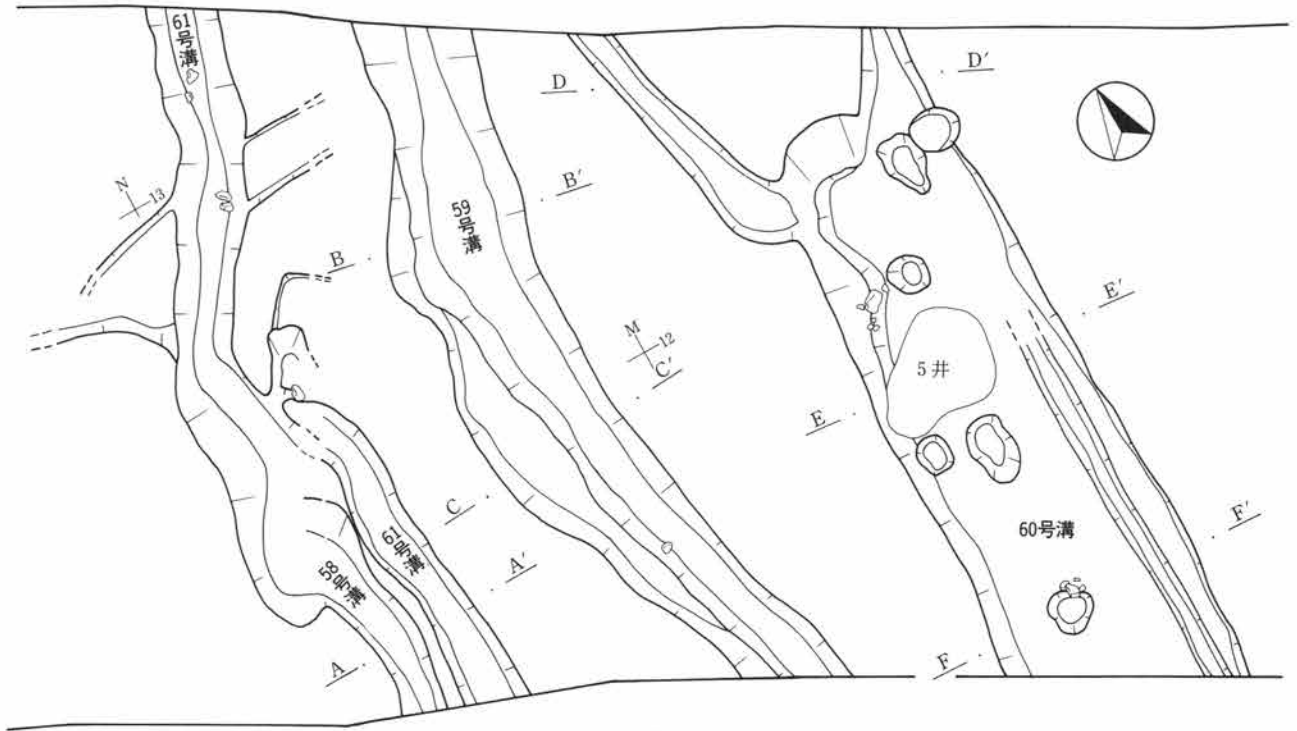
58～60号溝は方向をほぼ同一にして併走しているが、新旧関係はつかめない(61号溝は58～60号溝より古い)。いずれも、覆土下層に砂・シルトの水性堆積層があることから、水路としての機能が想定できる。特に60号溝は調査区上端で2条に分岐していたものが1条の溝に取り込まれる形状を呈している。さらにその合流点付近から5号井戸が検出された。遺構覆土等の状況証拠からこの両者は時間差をもたないことが考えられるので、5号井戸は60号溝内に付設していることが想定でき(5号井戸についてはpp.89～90参照)、60号溝の集水的機能を担う箇所であることが伺える。58号溝においても、61号溝との交点付近でやや溝幅が広がっている状況が見え、井戸は未検出であるものの、60号溝同様集水的機能を備えている可能性が伺える。

57号溝 (第52図・P L 18)	位置…西区(12地区74区N-2～N-4G)	検出状況…FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・シルト・砂粒を含む粘質暗褐色土が主体	規模…(平面)長11.8m・幅3.0～3.8m：ほぼ南北方向に走行(断面)0.8m：逆台形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より土師器甕片1(第54図1)が出土	その他覆土より須恵器片45.8g・土師器片5.2gが出土(未図化)	他遺構との新旧関係…57号溝→4号井戸→2号溝	帰属時期…出土遺物から、10世紀代、または、それ以前と考えられる
58号溝 (第53図・P L 18)	位置…東区西(12地区63区M-11～N-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…As-B及びAs-B下水田耕土がある	規模…(平面)長3.5m・幅0.6～1.5m：南北方向にやや蛇行(断面)0.2m：逆台形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…61号溝→58・59・60号溝→As-B下水田	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、と考えられる	
59号溝 (第53図・P L 18)	位置…東区西(12地区63区L-10～M-13G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質の褐色土が主体	規模…(平面)長11.2m・幅0.9～1.3m：南北方向にやや弧状に走行(断面)0.58m：不整逆台形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器破片1(第54図2)が出土	その他覆土より土師器片8.6gが出土(未図化)	他遺構との新旧関係…59号溝→56号溝→12号溝	帰属時期…出土遺物から、10世紀代、または、それ以前と考えられる
60号溝 (第53図・P L 18)	位置…東区西(12地区63区K-10～L-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・FP泥流を含む粘質灰褐色土が主体	規模…(平面)長11.6m・幅0.5～2.65m：南北方向に直行(断面)0.1～0.6m：半円形または箱型	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器破片3(第54図3～5)・須恵器塊片6(第54図7～12)・須恵器皿片1(54図6)が出土	その他覆土より須恵器破片234.0g・土師器破片128.3gが出土	他遺構との新旧関係…5号井戸と同時期	帰属時期…出土遺物から9～10世紀、または、それ以前と考えられる
61号溝 (第53図・P L 18)	位置…東区西(12地区63区M-11～M-13G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質の褐色土が主体	規模…(平面)長11.5m・幅0.7～1.1m：ほぼ南北方向に蛇行(断面)0.3～0.7m：不整半円形あるいは逆台形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…61号溝→58・59・60号溝→As-B下水田	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、と考えられる	
62号溝 (第53図・P L 19)	位置…東区中央(12地区63区B-6～C-5G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石・FP泥流を含む砂質暗褐色土	規模…(平面)長9.1m・幅0.3m：北東から南西方向にやや蛇行(断面)0.1m：半円形	底面…ほぼ平坦	出土遺物…なし	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前、と考えられる		
63号溝 (第52図・P L 19)	位置…東区東(12地区51区R-12～T-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP軽石を含む粘質の灰褐色土が主体	規模…(平面)長13.1m・幅0.7～0.9m：東西方向にやや弧状に走行(断面)0.3m：半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…覆土より須恵器破片1(未図化)・土師器破片1(第54図13)が出土	他遺構との新旧関係…64・65号溝→63号溝	帰属時期…出土遺物から、10世紀代、または、それ以前、と考えられる	
64号溝 (第52図・P L 19)	位置…東区東(12地区51区R-12～T-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質褐色土が主体	規模…(平面)長12.1m・幅0.7～0.8m：東西方向に蛇行(断面)0.3m：半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…64・65号溝→63号溝	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前	
65号溝 (第52図・P L 19)	位置…東区東(12地区51区R-12～T-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質褐色土が主体	規模…(平面)長11.0m・幅0.3～0.6m：東西方向に蛇行(断面)0.1m：半円形	底面…西から東への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…66号溝→64・65号溝	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前	
66号溝 (第52図・P L 19)	位置…東区東(12地区51区S-11～T-12G)	検出状況…As-B下水田下、FP泥流層を掘り込む	覆土…FP泥流を含む砂質褐色土が主体	規模…(平面)長2.6m・幅0.4m：北西から南東方向に蛇行(断面)0.1m：逆台形	底面…北から南への下り勾配	出土遺物…なし	他遺構との新旧関係…66号溝→65号溝	帰属時期…FP泥流堆積以降、As-B下水田形成以前	

第5節 III面の検出遺構と出土遺物



第52図 57・63～66号溝平・断面図



第53图 58~62号沟平·断面图

第5節 III面の検出遺構と出土遺物

57号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第54図 P L無	覆土 下層	甕 土師器	口 — 高 (1.5) 体 — 底 6.6復	口 0 体 5 底 20	口…不明 体…外斜 底…平底	①体…斜ケズリ 底… 一定ケズリ ②体…底…ヨコナデ	赤褐色	

59号溝出土遺物

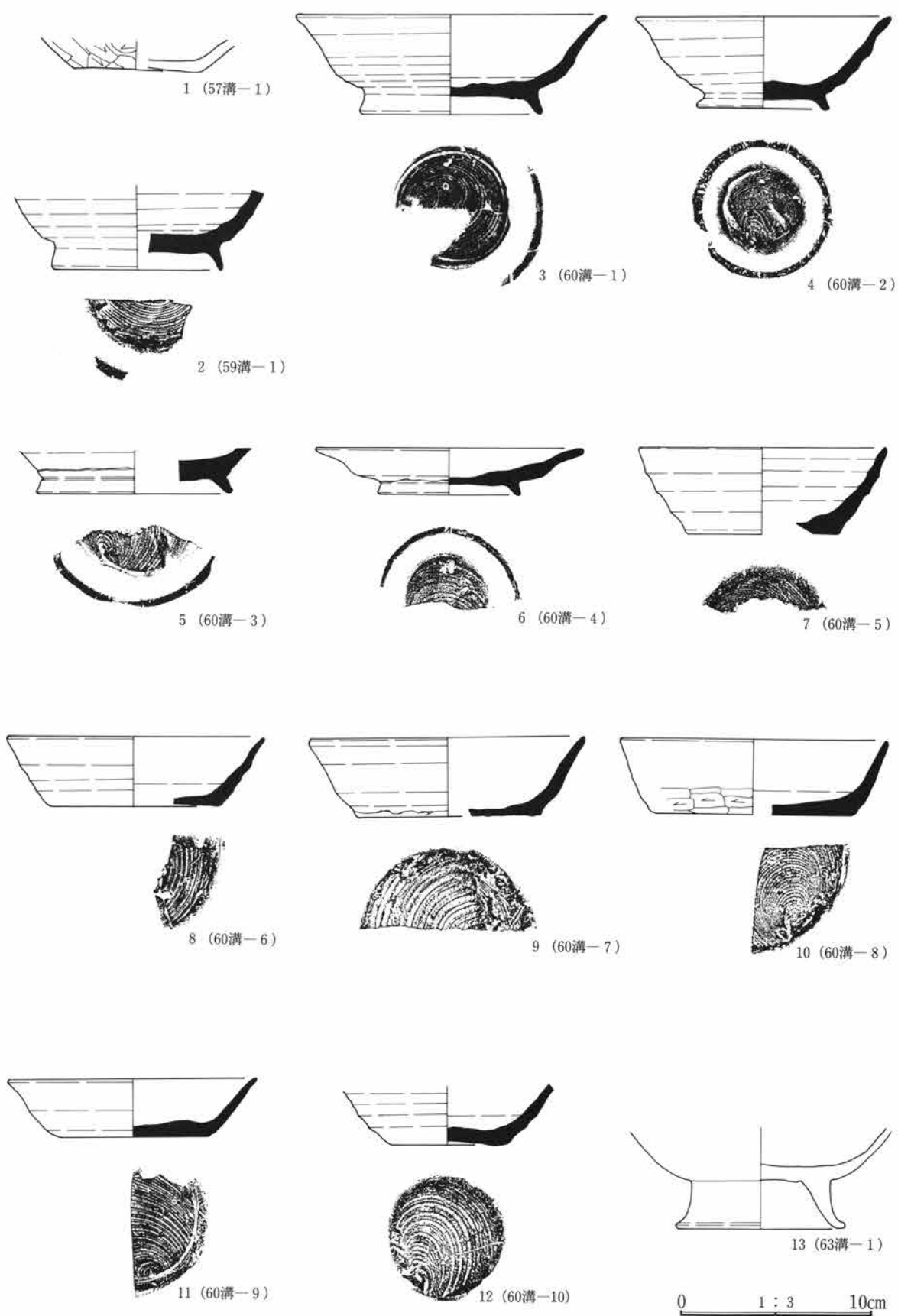
遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第54図 P L 29	覆土 下層	坏 須恵器	口 — 台 8.9復 体 — 高 (4.4) 底 8.6復	口 0 台 40 体 10 底 40	口…不明 体…丸味もち外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	淡黄色	・内外面黒色 処理

60号溝出土遺物

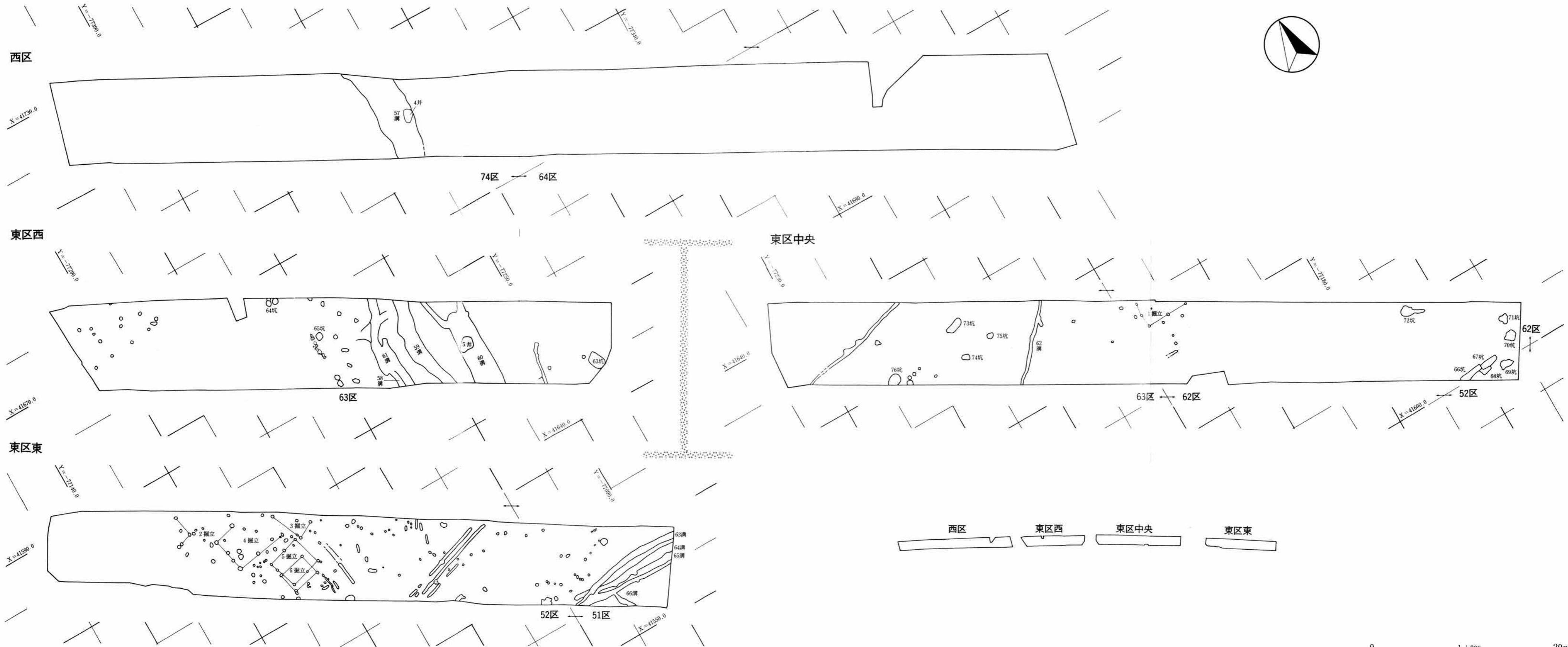
遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第54図 P L 30	覆土 下層	坏 須恵器	口 16.3復 高 5.2 底 9.0復 台 9.6復	口~体 50 底 70 台 70	口…外反気味外斜 体…外反気味外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	灰色	
2 第54図 P L 29	覆土 下層	坏 須恵器	口 13.4 高 4.8 底 6.5 台 7.0	口~体 90 底 100 台 100	口…外反気味外斜 体…やや丸味もち外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	灰白色	・器面に吸炭 処理を施す
3 第54図 P L 29	覆土 下層	坏 須恵器	口 — 高 (2.4) 底 9.6復 台 10.3復	口~体 ~5 底 30 台 30	口…不明 体…外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	灰白色	
4 第54図 P L 29	覆土 下層	皿 須恵器	口 14.2 高 2.5 底 7.4 台 7.6	口~体 50 底 60 台 50	口…外反し、外斜 体…外斜 底…短い高台付き	①②轆轤成形 ③回転糸切り・高台貼り 付け	暗青灰色	
5 第54図 P L 29	覆土 下層	埴 須恵器	口 12.9復 底 7.9復 高 4.5	口~体 20 底 10	口…外斜 体…やや内湾気味外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	灰白色	
6 第54図 P L 29	覆土 下層	埴 須恵器	口 13.5復 底 9.0復 高 3.6	口~体 20 底 20	口…外斜 体…直線的な外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	淡黄色	・口~体部外 面スス付着
7 第54図 P L 30	覆土 下層	埴 須恵器	口 14.5復 底 9.6復 高 4.1	口~体 30 底 50	口…やや外反気味外斜 体…やや丸味もち外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	灰色	・体部外面一 部に自然釉付 着
8 第54図 P L 29	覆土 上層	埴 須恵器	口 14.0復 底 10.6復 高 3.9	口~体 5 底 20	口…外斜 体…直線的な外斜 底…平底	①轆轤成形→(下半のみ) 横ケズリ ②轆轤成形 ③回転糸切り	灰白色	
9 第54図 P L 29	覆土 上層	埴 須恵器	口 13.0復 底 7.8復 高 3.0	口~体 30 底 60	口…外半気味外斜 体…直線的な外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	青灰色	
10 第54図 P L 29	覆土 上層	埴 須恵器	口 — 高 (3.1) 体 — 底 6.4	口~体 30 底 100	口…不明 体…直線的な外斜 底…平底	①②轆轤成形 ③回転糸切り	灰白色	

63号溝出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態の特徴	手法の特徴 ①外面 ②内面 ③底部	色調	備考
1 第54図 P L 30	覆土 下層	坏 土師器	口 — 高 (5.2) 底 7.3 台 8.9	口~体 ~10 底 90 台 40	口…不明 体…やや丸味もち外斜 底…長い高台付き	①体…不定ケズリ ②体…不定ナデ ③高台貼り付け	褐灰色	

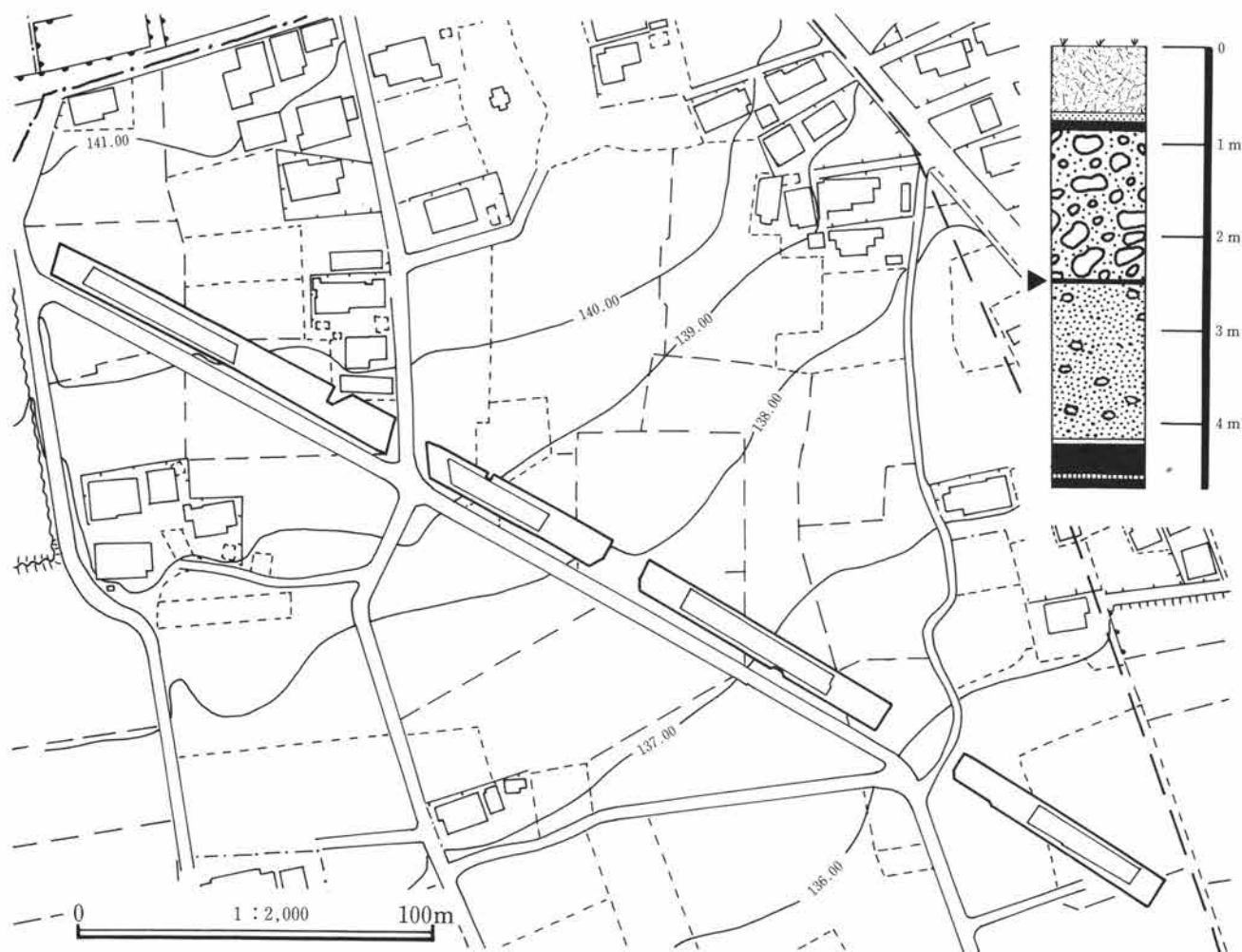


第54図 57・59・60・63号溝出土遺物図



第55図 III面全体図

第6節 IV面の検出遺構と出土遺物



第56図 IV面検出遺構概略図及び土層模式図 (▶が検出レベル)



IV面調査風景 (東区西：北西から)



IV面地表面検出状況 (東区西：南東から)

第IV章 検出遺構と出土遺物

〔1〕 IV面の調査概要

行力春名社遺跡におけるIV面とは下記の内容を持つ。

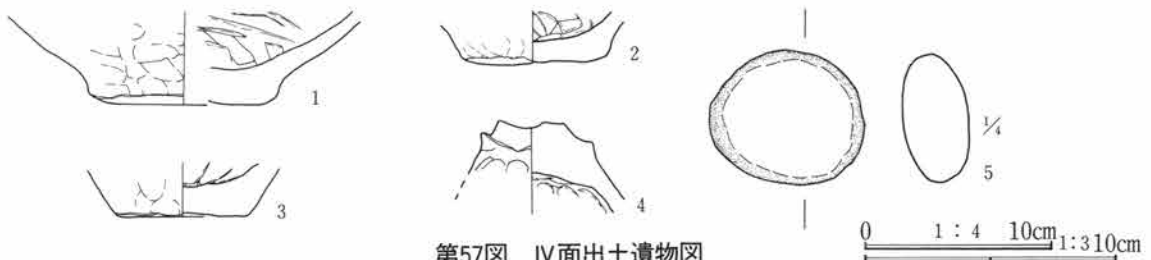
遺構帰属時期：FP降下時
遺構検出面：FP直下地表面
表土からの深さ：1.8～2.5m
検出遺構内容：FA直下旧地表面
出土遺物内容：土師器・自然礫
遺跡内容：IV面は表土からの深度が調査区幅に対して深いため、調査対象面積の全体を調査するに至らなかった（その経過については「第II章第2節〔2〕〔3〕」参照）。調査可能な範囲においては、住居等の個別遺構は検出されなかった。しかし、FPに直接覆われた黒色土面をFP降下直前当時の地面（生活地面＝生活痕跡＝遺構）と考え、地面の起伏の状況を等高線実測により把握した。 出土遺物である土師器・石は地面上に落ちていたものである。 なお、東区西で南北方向に走行する溝状落ち込みが検出されたが、これはIV面の遺構ではなく、その後のFP泥流が流れる際にIV面を抉った痕跡であり、遺構としなかった。
分析・鑑定等：火山灰同定・花粉分析・植物珪酸体分析
その他：なし

IV面出土土師器観察表

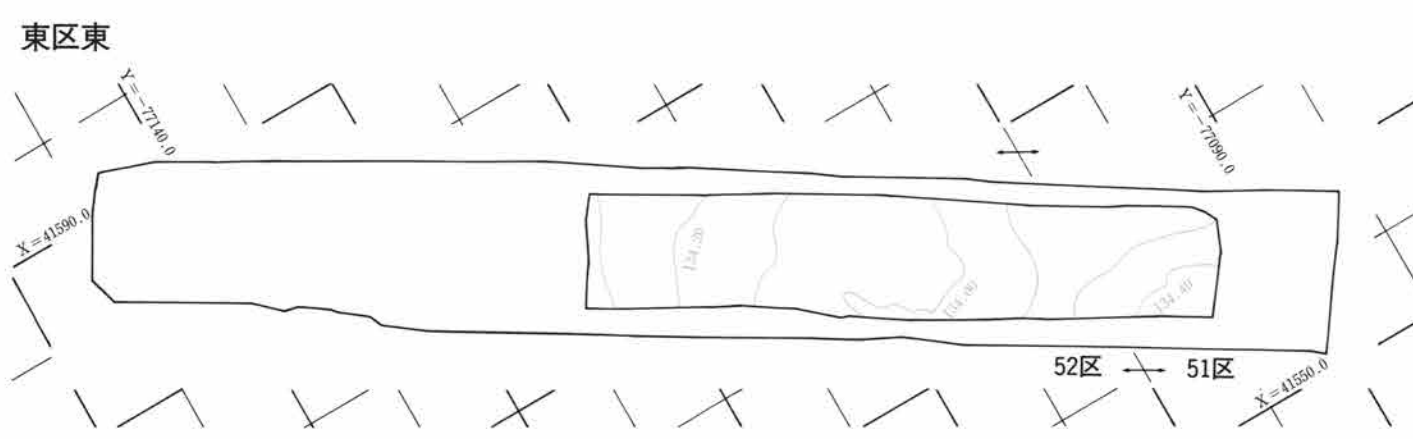
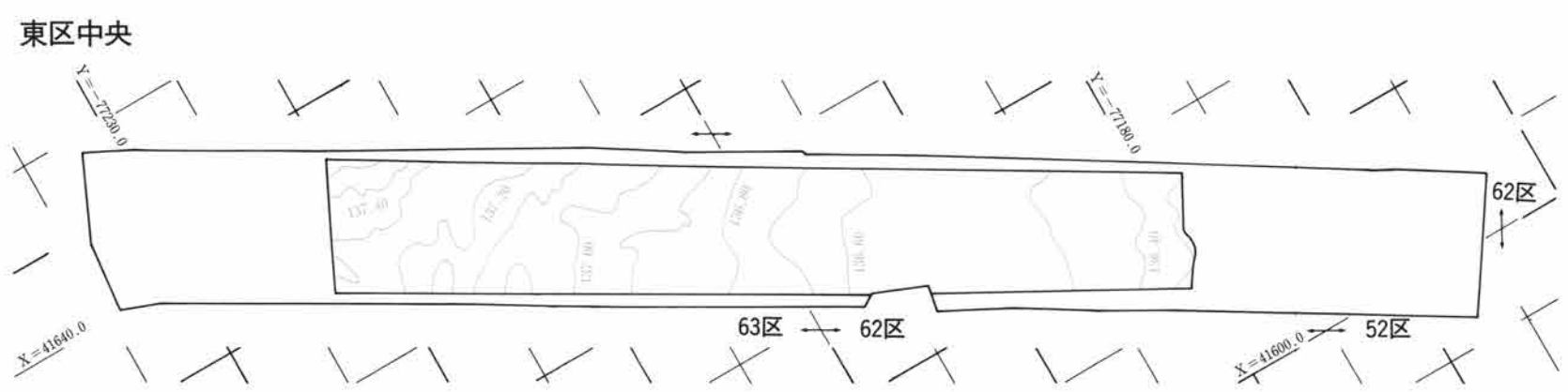
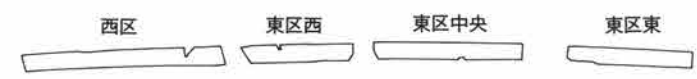
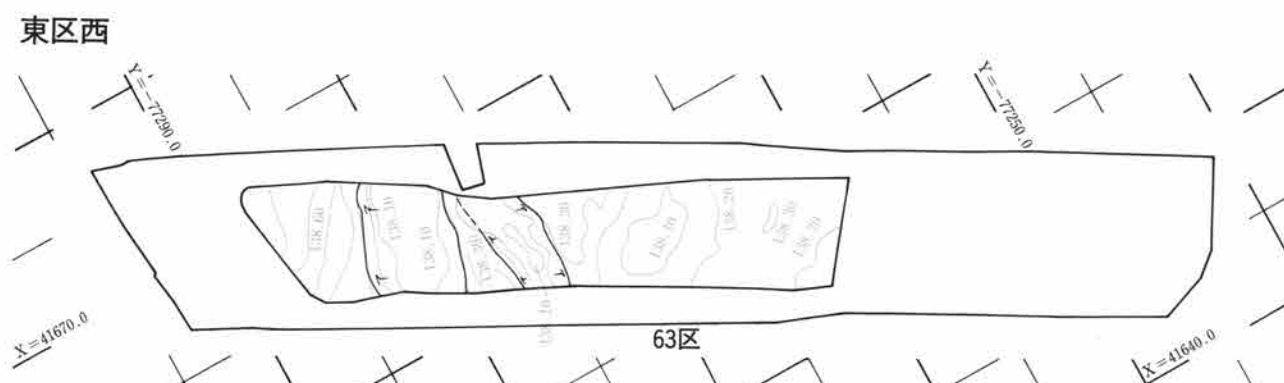
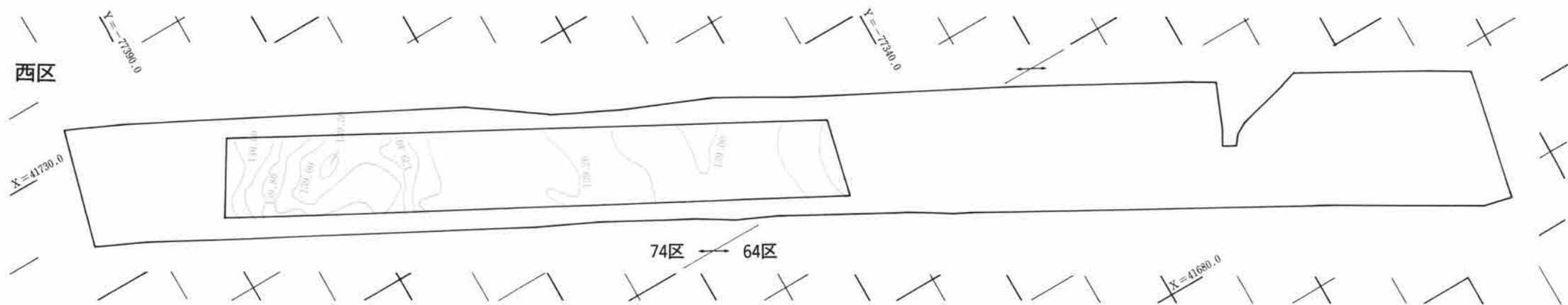
遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調	備考
1 第57図 P L 20	第VI層上	甕土師器	口体 ー 底 7.6復 高 (3.8)	口体 0 体 ～5 底 20	(形態)体…①a? 底…①a②a (手法)①体…不定ナデ 底…摩滅して不明 ②体～底…不定ヘラナデ	に お い い 赤褐色	・体部外面に スス付着
2 第57図 P L 20	第VI層上	甕土師器	口体 ー 底 5.6 高 (2.0)	口体 0 体 ～5 底 40	(形態)体…不明 底…①a②a (手法)①体…斜横位ユビナデ 底…不定ナデ ②体～底…斜横位ヘラナデ	赤褐色	・体～底部外 面にスス付着
3 第57図 P L 20	第VI層上	甕土師器	口体 ー 底 5.0復 高 (2.1)	口体 0 体 ～5 底 60	(形態)体…不明 底…①a②b (手法)①体…不定ナデ 底…不定ナデ ②体～底…不定ユビナデ	に お い い 赤褐色	
4 第57図 P L 20	第VI層上	甕土師器	口体 ー 底 ー 高 (3.2)	口体 0 底 0 台 30	(形態)底…①c (手法)①台…不定ナデ ②台…斜縦位ユビナデ	に お い い 赤褐色	・台部内外 面にスス付着

IV面出土石観察表

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面	備考
5 57・20	第VI層上	?	長 6.3 厚 2.6	332	粗粒 安山岩	①平…円形 断…細長い楕円形 ②なし	①②観察できず ③観察できず	・自然礫の様だが、地 表面上出土の為、掲載

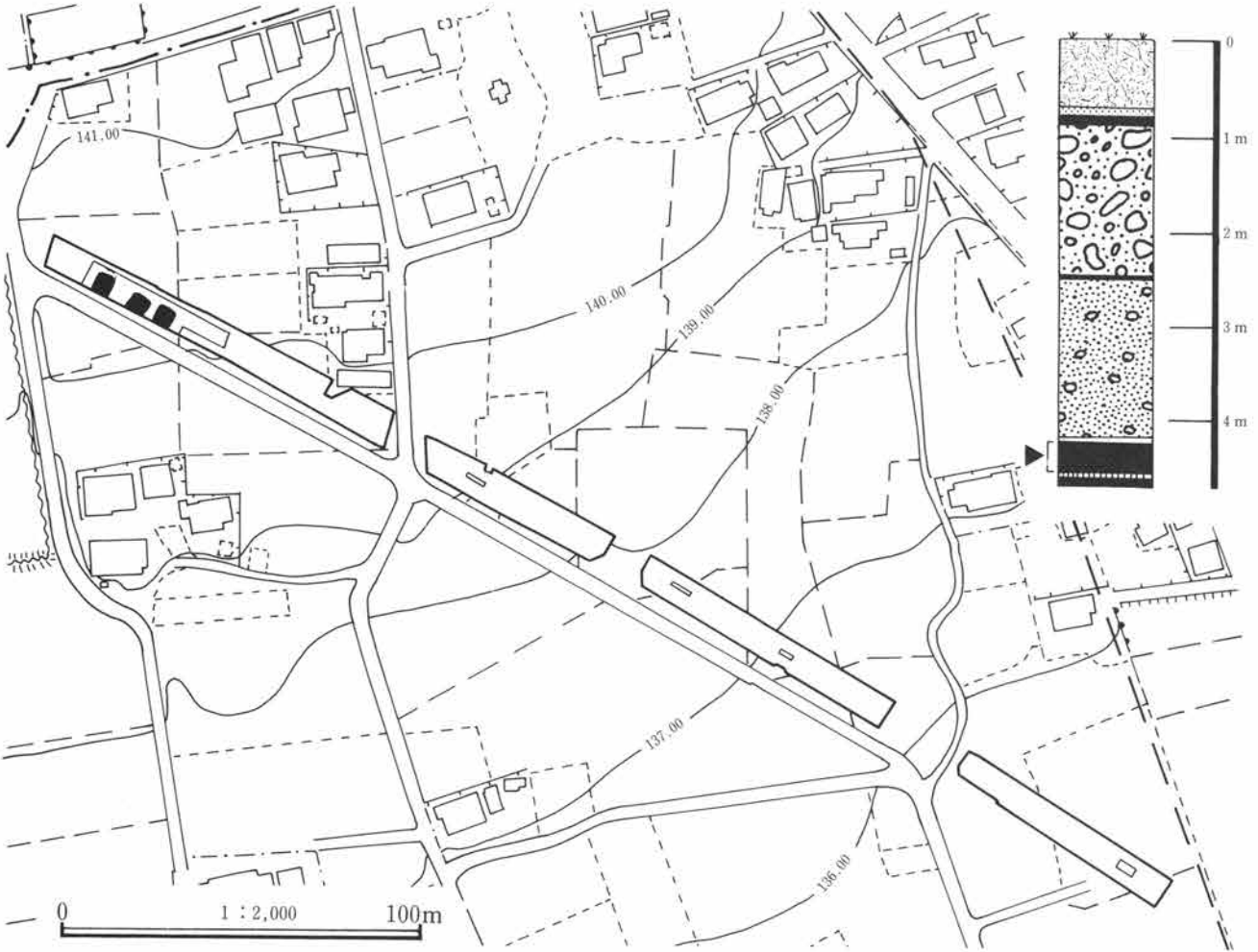


第57図 IV面出土遺物図



第58図 IV面全体図

第7節 V面の検出遺構と出土遺物



第59図 V面検出遺構概略図及び土層模式図 (▶が検出レベル)



V面調査風景 (西区：東から)



V面遺構検出状況 (西区：北西から)

第IV章 検出遺構と出土遺物

〔1〕 V面の調査概要

行力春名社遺跡における第V面とは下記の内容を持つ。

遺構帰属時期：古墳時代中期以降、FA降下以前

遺構検出面：①FA直下地表面 ②その地表面を深さ5～15cm程スライスしての確認面

表土からの深さ：3.5～4.5m

検出遺構内容：竪穴住居3軒

出土遺物内容：土師器・自然礫・滑石製模造品（製品＋未製品）・柱材・鹿骨

遺跡内容：V面は表土からの深度が調査区幅に対して著しく深いため、調査対象面積の全体を調査するに至らなかった（その経過については「第II章第2節〔2〕〔3〕」参照）。調査の可能な範囲においては、竪穴住居が3軒検出された。これらの住居の帰属時期は、出土した土師器から、古墳時代中期前半と考えられる。さらに、内2軒（1・3号竪穴住居）では滑石（原石・剝片・未製品・製品）や自然礫（工具の可能性あり）が数多く出土し滑石製模造品工房址（玉作工房址）と考えられる。

また、V面では「遺構確認調査」を実施した。その目的は遺構・遺物の有無の確認であるが、その断面観察によって溝状落ち込みを確認し、土中より土師器片・加工材？、FA泥流最下層（V面直上）より加工材？が出土した。

分析：火山灰同定・木材樹種同定・花粉分析・植物珪酸体分析・プラント・オパール分析

その他：常時湧水状態の泥流層下面の為、遺構確認に始まる一連の調査が十分でなかった点是否めない。

〔2〕 各遺構・遺物の概要

竪穴住居（第60～61図・P L 21～26）

西区で3軒の竪穴住居を検出した。なお、調査時の環境は最悪であり、昼夜を問わず周辺からの地下水が湧き続け、遺構確認段階から調査の精度を欠かざるを得ない状態になった。その結果、特に床構造・床面施設の調査は著しく劣化した。辛うじて、柱穴の確認はしたものの（3号では不可）、ピット・溝・炉等の施設の有無は確認すらできなかった。この点は以下の概要説明にも関連する事なので予め断っておく。

3軒はいずれもFA直下では、5～15cmの僅かな窪みを残すのみでほぼ完全埋没しており、FA降下時には本来の機能を停止していたことになる。

平面プランは3軒とも方形であり、規模も一辺4～5mである。古墳時代の竪穴住居規模からすれば、中型であり、ごく平均的な規模と考えられる。深さは0.4～0.8mである。この深さについては、①旧地表面からのもの、②確認面からのもの、の2種類があるが、この3軒の場合は後者である。従って、本来の深さは検出時の深さ+ α とみなすべきであろうが、直上にFAが介在しているため、当時の深さも検出時と大差はなかったであろう事が推測できる。

周堤帯については、3軒とも断面において竪穴部分両脇に僅かな高まりが存在するものの、明確には確認できなかった。但し、遺構自体がその機能を停止している為、埋没過程の中で周堤帯も平坦化した可能性が

高く、存在は否定できない。むしろ近年の調査状況を踏まえると、存在したと考える方が妥当と思える。

屋内施設については、3軒とも明確なものは検出されていない。このことは調査時と悪状況をも踏まえると、存在しなかったことを意味するのではなく、単に検出不可能であったと言うことである。ピット・溝等は存在した可能性が高い。なお、竈については再三の確認を実施したが検出されず、無いものと断言できる。

3軒とも床面及び覆土から多量の炭化材・炭化物が出土している事から焼失したものと考えられる。

1・3号からは土師器の他、滑石の原石・未製品・剥片・製品が出土した。また、大小の礫（使用痕のあるものと無いものあり）も出土した。さらに1号の床面の一部には多量の白色粘土質物質が存在し、分析の結果から、これらは滑石類の粉末化したものの可能性が指摘された。こうした状況を踏まえるとこれらの遺構は滑石製模造品製作址（玉作工房址）と考えられる。なお、床面に工房関連ピット・溝が存在していた可能性もあるが、さきにも述べた調査状況により検出はできなかった。2号は出土遺物に大小の礫（使用痕のあるものと無いものあり）はあるが、滑石類がほとんど無いことから1・3号同様の性格を持つ可能性は低い。

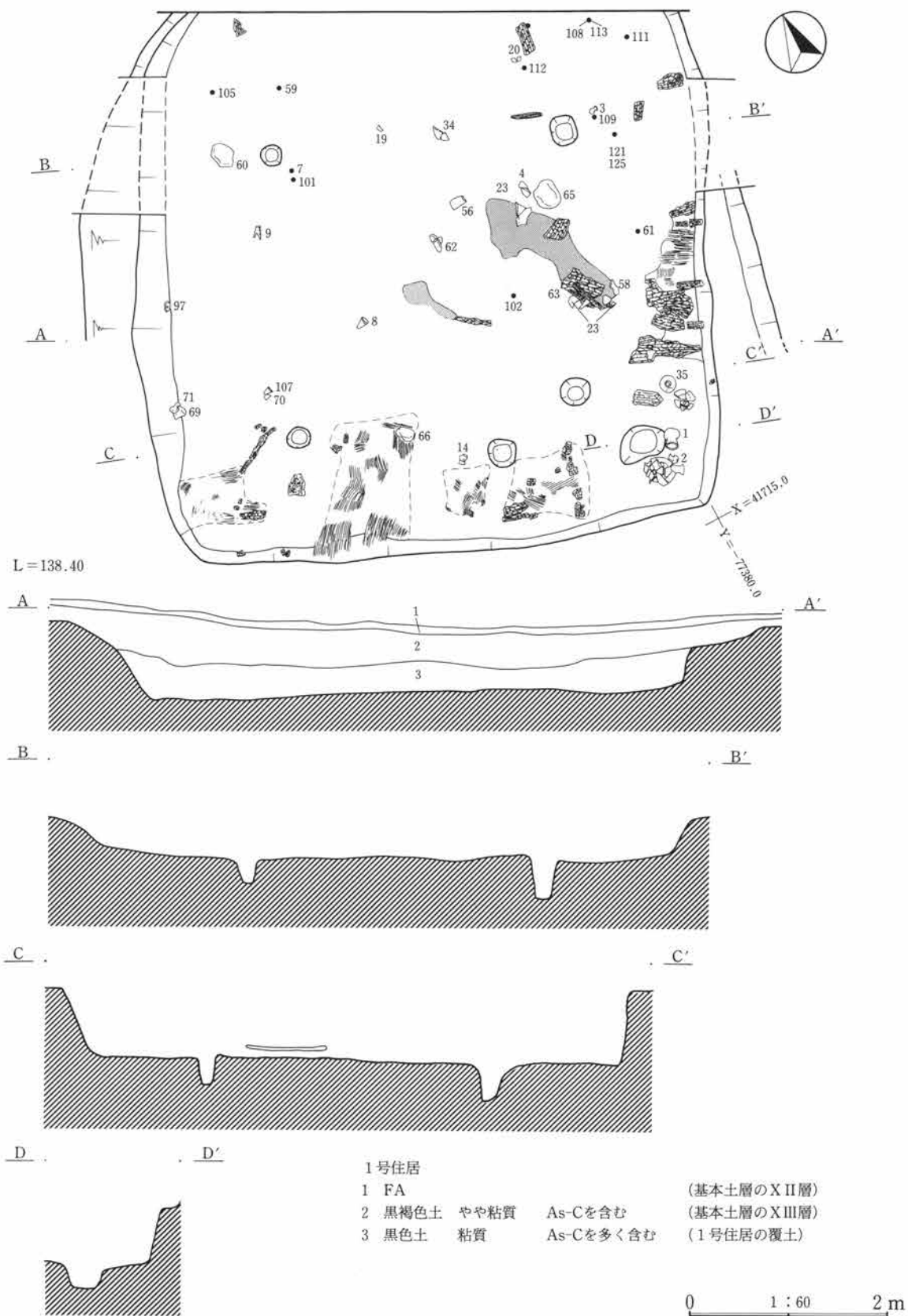
また、1号覆土からは鹿骨小片（鑑定の結果、焼けたニホンシカの前肢・手根骨）が出土している。3号の滑石類の集中出土箇所の覆土からは赤色顔料（分析結果から、ベンガラ）も出土した。

3軒が新旧関係は切り合いが無く、さらにそれぞれの出土遺物がほぼ同時期であることから判断できない。

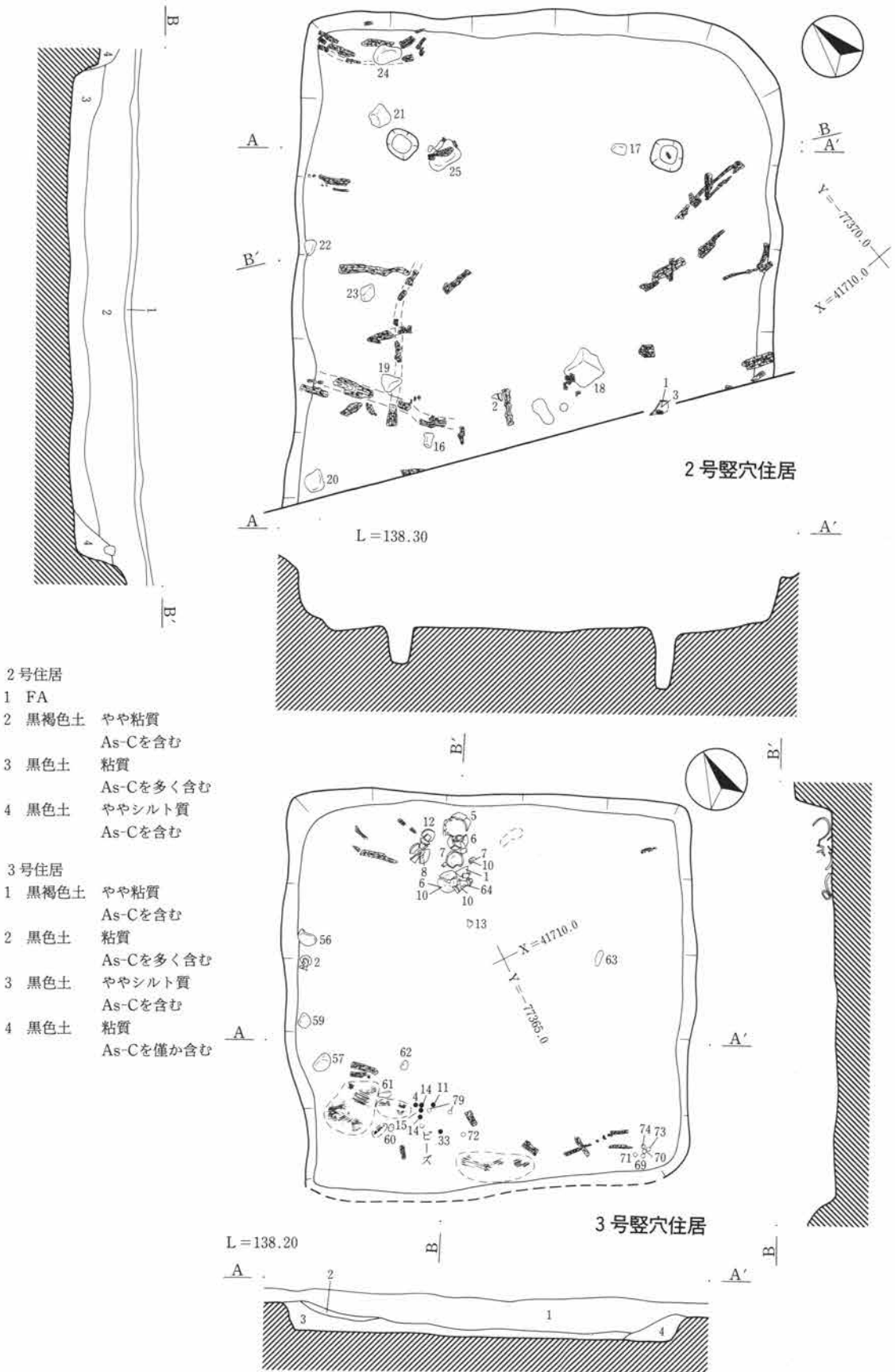
また、この3軒には共通する差異がある。①遺構の性格差…1・3号が玉作工房の可能性が高いのに対し、2号はその可能性が低い。②出土遺物量差…1・3号が土師器を多量に出土するのに対し、2号は少量である。③住居軸差…1・3号がほぼ同方向を示すのに対し、2号は異なる。④屋根材の樹種差…炭化材樹種鑑定の結果、1・3号の炭化材がヤナギ属をはじめとする多種の材によるもの（但し、クリは僅少）に対し、2号はほとんどクリのみ（但し、ヤマグワ1種含む）によるものである。いずれも、1・3号と2号との差異を示す点で共通する事は興味深い。但し、このことが遺構の時期差まで示すかについては明らかにできない。

なお、本遺跡では便宜的に「住居」という言葉を使ったが、これは同様の遺構が従来「住居」と呼ばれているためそれに準拠したまでである。こと1・3号のごとく「工房」の色彩が強いものについては、「住居」より「建物」といった名称が適当かと思われる。今後検討の必要があると思われる。

1号竪穴住居（第60図・P L 21・22）	位置…西区(12地区74区P-4・Q-4・R-4・P-5・Q-5・R-5G)	検出状況…FA層直下では深さ15cmの窪みを残すのみで、ほぼ完全埋没	覆土…As-Cを含む粘質黒色土が主体	規模…(平面)5.9m×5.6m～：方形(断面)0.8m	周堤帯…未確認	屋根構造関連施設…未検出	柱穴…4箇所検出(直径20～30cm：深さ25～40cm)	壁溝…無(未検出?)	床面状況…貼床か否かは不明(周辺からの湧水が激しいため)	貯蔵穴…有：(平面)0.45m×0.35m(深さ)0.24m	竈…無	炉…無(未検出?)	その他床面施設…不明	壁構造…板壁・網代壁状の痕跡なし	出土遺物…床面・覆土より土師器(第65～68図)・自然礫(第69～70図)・滑石製品、未製品及び剥片(第71～75図)・鹿骨片が出土	床面中央付近より白色粘土質物質、床全体より多くの炭化材を出土	帰属時期…古墳時代中期前半	備考…本遺構は滑石等の出土状況から滑石製模造品製作工房址(=玉作工房址)・炭化材のあり方から焼失建物(住居)と考えられる	
2号竪穴住居（第61図・P L 23・24）	位置…西区(12地区74区N-3・O-3・P-3・O-4G)	検出状況…FA層直下では深さ15cmの窪みを残すのみで、ほぼ完全埋没	覆土…As-Cを含む粘質黒色土が主体	規模…(平面)5.0m×4.9m～：方形(深さ)0.7m	周堤帯…未確認	屋根構造関連施設…未検出	柱穴…2箇所検出(直径25～30cm：深さ35～55cm)なお、本来は4箇所存在、2箇所は調査区外に存在すると推測できる	壁溝…無(未検出?)	床面状況…貼床か否かは不明(周辺からの湧水が激しいため)	貯蔵穴…無(未検出?)	竈…無	炉…無(未検出?)	その他床面施設…不明	壁構造…板壁・網代壁状の痕跡なし	出土遺物…床面・覆土より土師器(第76図)・自然礫(第77～79図)・滑石製品(第79図)が出土	柱穴内より柱材(第79図)を出土	床全体より多くの炭化材を出土	帰属時期…古墳時代中期前半	備考…本遺構は土師器の出土量は僅かで、自然礫の出土量が多い・炭化材のあり方から焼失建物(住居)と考えられる
3号竪穴住居（第61図・P L 25・26）	位置…西区(12地区74区M-2・N-2・M-3・N-3G)	検出状況…FA層直下では深さ5cmの窪みを残すのみで、ほぼ完全埋没	覆土…As-Cを含む粘質黒色土が主体	規模…(平面)4.1m×4.1m：方形(深さ)0.4m	周堤帯…未確認	屋根構造関連施設…未検出	柱穴…4箇所検出(直径20～30cm：深さ25～40cm)	壁溝…無(未検出?)	床面状況…貼床か否かは不明(周辺からの湧水が激しいため)	貯蔵穴…無(未検出?)	竈…無	炉…無(未検出?)	その他床面施設…不明	壁構造…板壁・網代壁状の痕跡なし	出土遺物…床面・覆土より土師器(第80～83図)・自然礫(第83～84図)・滑石製品、未製品及び剥片(第85図)・ガラス製白玉(第85図)が出土	覆土より赤色顔料(分析の結果、ベンガラ)が出土	床全体より炭化材を出土	帰属時期…古墳時代中期前半	備考…本遺構は滑石等の出土状況から滑石製模造品製作の工房址(=玉作工房址)・炭化材のあり方から焼失建物(住居)と考えられる



第60図 1号竪穴住居平・断面図



第61図 2・3号竖穴住居平・断面図

〔3〕 古墳時代遺物の観察表について

1. 土器の観察表

第V面では竪穴住居3軒が検出され、多くの古墳時代中期の土師器が出土している。その数は2,000点以上(完形と破片の合計)になる。ここでは、実測した遺物の観察についてその方法と目安とを説明する。

《方法と目安の明示の必要性》

報告書での遺物の表現方法は、「文・図・写真」の3つがあり、これらの手段により遺物に含まれた情報は伝わるべきである。だが、詳細な情報については、それが十分なされていないことがある。

本遺跡の古墳時代土師器については、それらの内包情報の不十分な伝達を、少しでも回避するよう、観察の方法と目安とを提示する。それは、土器の持つ情報が観察者のみに理解されるものでなく、少なくともこの時期の土師器に関心を寄せる方に理解してもらいたいためであり、さらに、こうした方法・目安を明らかにする事によって観察者(本遺跡の場合は編集者)の観察力・認識力を認知してもらい、誤認等があった場合にはそれを訂正できるようにした。特に、「器種の名称」「手法の識別・名称」については、整理期間中に名称の与え方に整合性のある見解がでず、まことに遺憾ではあるが、後述する名称は便宜的なものである。

《遺物選出と実測方法》

遺物の残存状況と遺物の性格とによって実測の可否を決めた。

- ①遺物の残存による指標…残存状況が1/2以上である場合は直接実測、1/4以上1/2未満である場合は反転実測、1/4未満については実測不可と考えた。
- ②遺物の性格による指標…残存状況が1/4以上である場合はその性格を問わず直接・反転実測、1/4未満である場合は本遺跡の出土土師器中で希少な遺物(EXA:有段高坏片・坏片・ハケを施した甕片etc.)に限って実測を試みた(半径を求めることが可能なものは反転実測、不可能なものは断面及び内外面の平面実測とした)。

以下、観察表の各項目について記載方法を述べる。

【遺物番号】 ◆住居ごとに1から順につけた。実測図版および写真図版に共通の番号である。

【出土層位】 ◆遺構内での遺物の垂直位置について、各住居覆土の差異を基準に分けた。「床面」「覆土下層」「覆土上層」に分けて記載した。

「床 面」…遺物が床に密着している、或いは一部が床に接している場合

「覆土下層」…1・2・3号住居覆土のそれぞれ「3層」から出土した場合

「覆土上層」…1・2号住居覆土の「2層」、3号住居覆土の「1層」から出土した場合

【器種・種別】 ◆「器種」については古墳時代土師器全般において統一した名称が与えられていない状況であるので本遺跡では便宜的に「壺」「甕」「甗」「鉢」「埴」「坏」「高坏」「甗」の名称をつけた(第62図)。

◆「種別」については①土師器 ②須恵器の区分をした(②は未出土)。

【法 量】 ◆器種別に部位名称を便宜的につけ(第62図)、法量測定位置は下記のようにした。

壺・甕・甗・鉢・坏・埴・甗…口縁部直径・体部直径・底部直径・器高

高坏…口縁部直径・体部直径・裾部直径・器高

◆法量の測定及びその記載にあたっては下記の方法に拠る。

直 径…①最大径部分が1/2以上残存の場合は数値をそのまま記載した(EXA:口12.8)。

(各部位) ②最大径部分が1/2未満残存の場合は反転復元実測図を手がかりに数値を求め、

掲載に際しては数値の後に「復」をつけた（EXA：口 12.8復）。

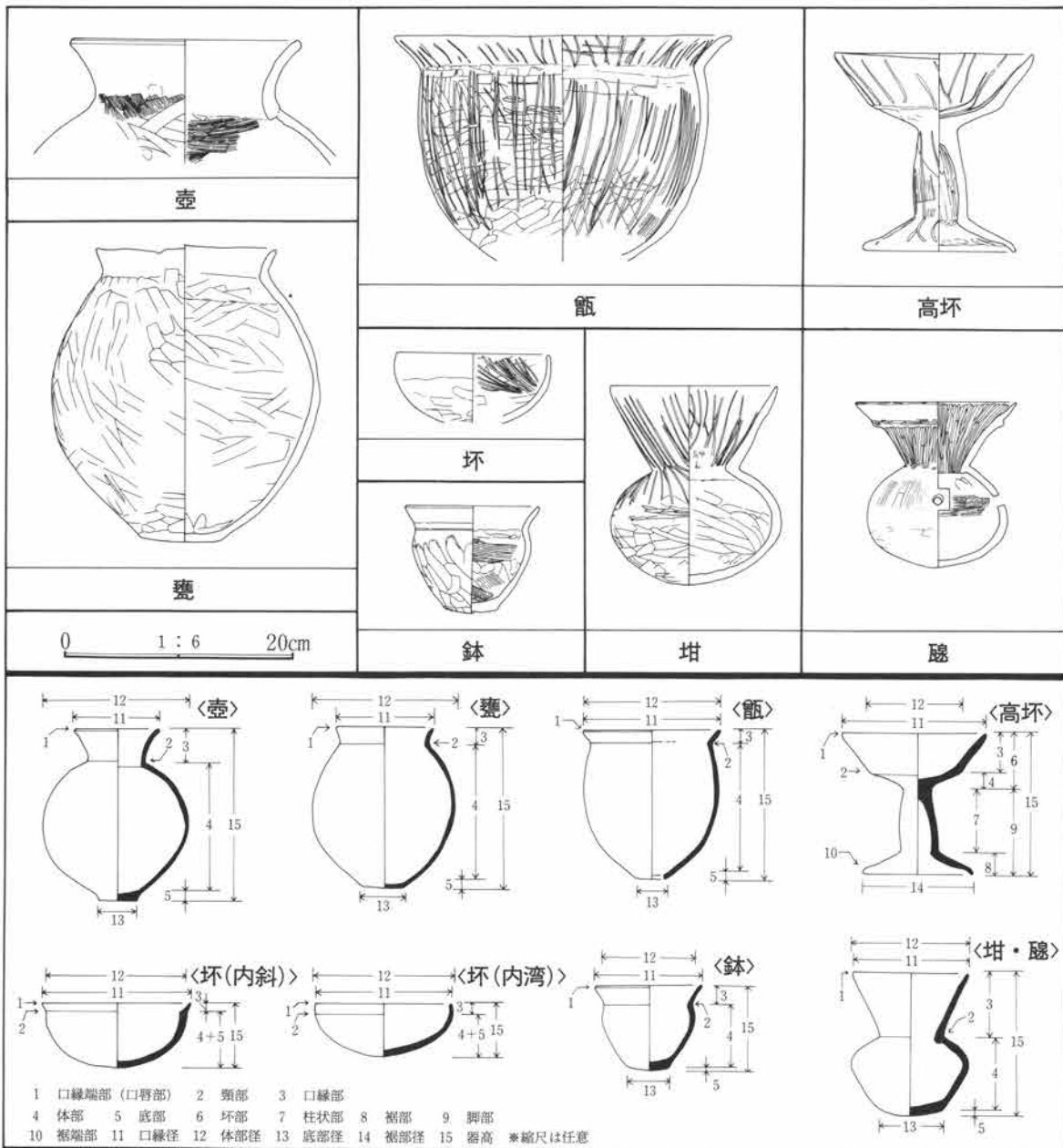
器 高…①完形品の場合や接合・復元によって器形の上端から下端までが残存の場合はその両端の長さをもって器高とし、数値をそのまま記載した（EXA：高 16.0）。

②接合・復元によっても器形の上端から下端まで復元できない場合には残存部分のみの高さを残存器高とし、数値に括弧をつけ記載した（EXA：高（16.0））。

【残存】 ◆各部位ごとに残存割合を%で示した。数値の決定は観察者の目測のため、大まかな数値である。参考程度と考えてもらいたい。なお、各器種とも完形品については「完形」と記載し、接合・復元によって完全復元されたものは各部位とも「100」の記載をし、両者の区別をした。

壺・甕・甑・鉢・坏・埴・甗…口（口縁部）・体（体部）・底（底部）

高坏…坏（口縁部+体部）・脚（脚部）・裾（裾部）

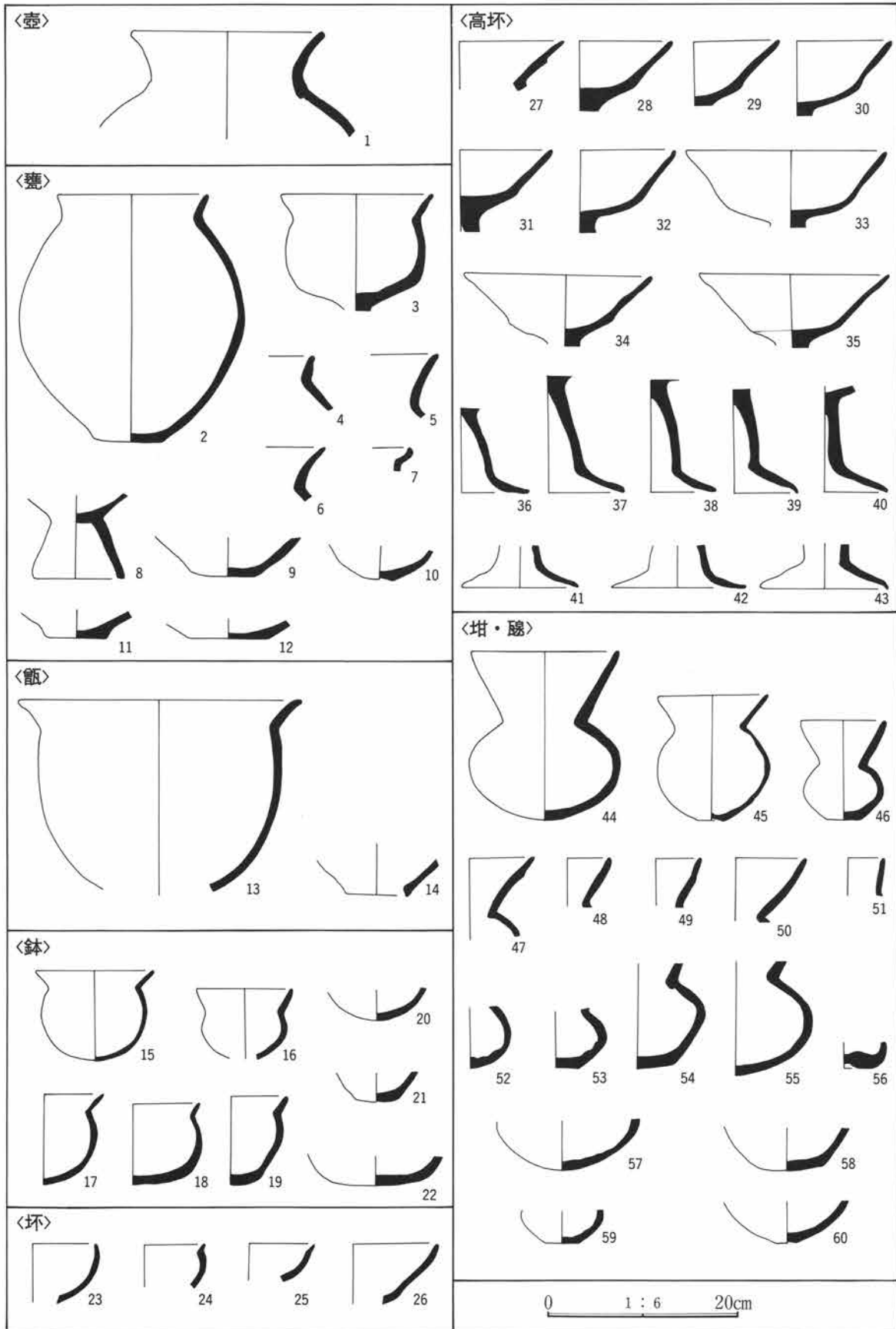


第62図 行力春名社遺跡出土古墳時代土師器器種一覧（上半）及び細部名称一覧（下半）

【形態・手法の特徴】 ◆本遺跡出土古墳時代土師器の量は少ないが、その中でも各器種・部位や製作手法の点で差異が認められる。

(形態) 各器種の各部位ごとに分類できる。なお、遺物総量が多くないため、項目によっては比較分類不可能のものもあった。観察表への記載は下記の数字及びアルファベットによった。

- 《壺》(第63図-1)
口縁部…①a 単口縁(1)
※明確な遺物が破片1点のため、比較分類不可
- 《甕》(第63図-2~12)
大きさ…①a 大型(2) b 小型(3)
口縁部…①a 単口縁(4)
②a 長い(5) b 短い(4)
③a 直線の外斜(5) b ほぼ直立(4)
c 外湾気味外斜(6) d 受口状(7)
体部…①a 球形(2)
②a 中位最大径(2)
底部…①a 平底(9) b 上げ底(10) c 台付(8)
②a 作出し有(11) b 作出し無(12)
- 《甑》(第63図-13・14)
大きさ…比較分類不可
口縁部…①a 単口縁(13)
体部…①a 球形(13)
底部…①a 単孔広口(14)
- 《鉢》(第63図-15~22)
大きさ…①a 中型(15) b 小型(16)
口縁部…①a 単口縁(15)
体部…①a 正球形(17) b 縦詰まり球形(18)
②a 上位最大径(19) b 中位最大径(17)
底部…①a 丸底(20) b 平底(22)
c 平底を意識した丸底(21)
- 《坏》(第63図-23~26)
大きさ…比較分類不可
口縁部…①a 内湾口縁(23) b 内斜口縁(24)
c 内湾気味内斜口縁(25)
体部…①a 上位最大径(25) b 中位最大径(24)
②a 稜意識(26) b 稜無(23)
③a 深い(23) b 浅い(25)
底部…①a 丸底(未出土だが、可能性高い)
- 《高坏》(第63図-27~43)
大きさ…比較分類不可
口縁部…①a 単口縁(28) b 有段口縁(27)
②a 直線の外斜(28) b 外湾気味外斜(29)
c 中位でやや外屈(30)
③a 端部外斜(31) b 端部やや直立(32)
体部…①a 直線の外斜(31) b やや丸み有(32)
②a 稜有(35) b 稜意識(34) c 稜無(33)
脚部…①a 短い(36) b 長い(37)
②a 直線の下開き(37)
b 直線の下開きで、中位が膨らむ(38)
c エンタシス柱形(39) d 細い筒形(40)
裾部…①a 直線的開く(41) b やや外反し開く(42)
②a 端部外斜(41) b 端部やや内屈(43)
③a 脚部との境は明瞭(43)
b 脚部との境は不明瞭(41)
- 《埴・甕》(第63図-44~60)
大きさ…①a 大型(44) b 中型(45) c 小型(46)
口縁部…①a 単口縁(48) b 有段口縁(47)
②a 長い(44) b 短い(45)
③a 端部外斜(50) b 端部やや直立(44)
④a 直線の外斜(48)
b 外斜するが中位でやや内屈(49)
c 内湾気味外斜(50) d ほぼ直立(51)
体部…①a 正球形(52) b 縦詰まり球形(53)
②a 上位最大径(54) b 中位最大径(55)
c 下位最大径(56)
③a 焼成前穿孔 b 焼成後穿孔
※甕のみ：形態図は未掲載
底部…①a 丸底(57) b 平底を意識した丸底(58)
c 平底(59) d 上げ底(60)



第63図 行力春名社遺跡出土古墳時代土師器部位別形態分類図

第IV章 検出遺構と出土遺物

(手法)土器製作の際の痕跡はその特徴によって、①【ケズリ系】②【ナデ系】③【オサエ系】④【ハケ系】⑤【ミガキ系】⑥【シボリ系】に6大別できる。各手法には(a)方向 (b)同系内細別名 (c)系名の順で名称を与えた(但し、③は(b)(c)のみ)。

なお、実測図では手法ごとに表現を分けた(第64図)。

①【ケズリ系】(写真A)…胎土中の砂粒の移動痕跡が観察できるもの。

(a)方向…「縦」「横」「斜」「斜縦」「斜横」「不定」「一定」に区別した。「不定」は方向が観察不可のものを意味する。「一定」は各器種底部の痕跡に多い。方向は一定だが、「縦・横・斜」の判断不可のものをさす。

なお、方向認定は、遺物を正位置にして行った。「斜縦」は斜めだが縦方向に近いもの、「斜横」は斜めだが横方向に近いもの、をさす。

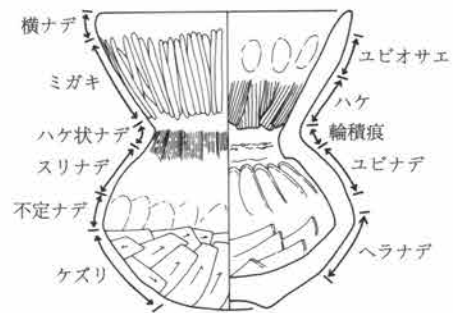
(b)細別…「ケズリ」の場合、痕跡としての工具の差異が確認できなかったので細分はない。

幅1～1.5cmの板状工具を用いていたと思われる。製作途中、器面が半乾き状態時に施したものと考えられ、それ故に粘土中の砂粒が陥没せず器面表面を横滑りすると思われる。各器種外面に多く施されている。

②【ナデ系】(写真B～G)…胎土中の砂粒の移動痕跡はみられないが、「ハケ」とは異なる工具等の痕跡が観察できるもの。

(a)方向…①【ケズリ系】と同様

(b)細別…「ヘラナデ」「ユビナデ」「横ナデ」「ハケ状ナデ」「不定ナデ」「スリナデ」に区別できる。なお、この名称の付け方は規則性に欠ける。それは、前2者が撫でる原体による命名であるのに対し、後4者は痕跡状況による命名だからである。この点については承知の上でやむを得ず名称を与え、分類した。それは、これら6者の痕跡が各器種の一定部位や他と明らかに異なる痕跡であり、分化の必要性を感じたからである。これらの名称はあくまで、適切な名称が考えつかなかったための便宜的な用語である。故に、本遺跡内での名称であり、他遺跡出土の同時期土師器観察表との用語上での手法の比較においては必ずしも整合性をもたない。混乱を招く言葉を使用せ



第64図 土師器手法表現図



写真A ケズリ



写真B ヘラナデ



写真C ユビナデ

ざるを得なかった点については、観察者の浅学に起因するものである。ご容赦願いたい。

「ヘラナデ」(写真B) …実際に篋を使用したか否かは定かでないが、器面に工具の痕跡を残すものや器面が比較的シャープなものについて、その手法を示す用語として用いた。各器種内面に多く施されている。

「ユビナデ」(写真C) …幅1～2cm、端部の一方が半円の形状でまとまることが多い。1単位内に布? 圧痕が付くものと付かないものがある。前者は指を何かに当てて、後者は直接指で成整形した痕跡と考えられる。各器種体部以下の内外面に多く施されている。

「ヨコナデ」(写真D) …幅1～3cm、幅内に多くの条線に似た痕跡をもつ(ハケの条線とは明らかに異なる)。土器を回転させながらの痕跡のようで、1単位の終始が不明瞭で、かつ、一定横方向に、ブレの少ない正確な痕跡を残している。各器種口縁～頸部の内外面や高坏裾部の内外面に多く施されている。

「ハケ状ナデ」(写真E) …幅1cm程の単位で、幅内に上記「横ナデ」以上に細かく、かつ、多くの条線に似た痕跡をもつ。土器を回転させた痕跡は見られない。原体は不明だが、他と明らかに異なるので、1分類とした。甔・甕・埴体部外面に施されている。

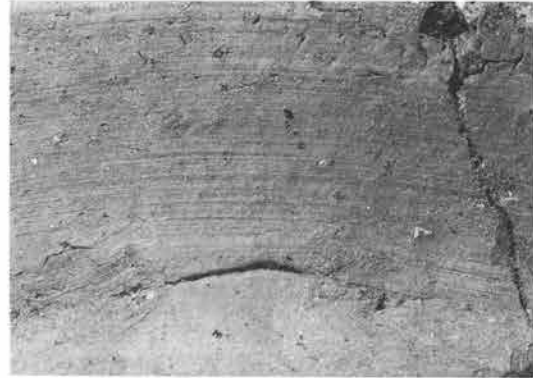
「不定ナデ」(写真F) …痕跡の単位・方向は極めて不明瞭である。だが、「ユビナデ」端部に似た痕跡が無数にある。各器種の外面に多く施されている。「不定」という方向を示す言葉を用いた理由は、他に適当な修飾句が考えられなかったからである。

「スリナデ」(写真G) …痕跡は不明である。器面の痕跡を丁寧に消すような痕跡である。整形段階の痕跡と考えられる。整形としてきめ細かい粘土を器面に撫でつけた様にもみられる。高坏脚部・埴体部の外面に多く施されている。装飾的要素が強いようにも考えられる。

③【オサエ系】(写真H) 指や工具により器面を擦る痕跡ではなく、器面を押しつける痕跡が観察できるもの。

(a)方向…押しつける行為のため、方向はない。

(b)細別…「オサエ」の場合、痕跡としての工具の差異が確認できないので細分はない。本遺跡出土土師器では全て「ユビオサエ」である。



写真D ヨコナデ



写真E ハケ状ナデ



写真F 不定ナデ



写真G スリナデ

「ユビオサエ」…直径1～1.5cm、不整円の圧痕をさす。他でいう「指頭圧痕」と同義である。各器種口縁～頸部の内外面や体部の輪積み痕部分に多く施されている。

④【ハケ系】(写真I) 所謂「刷毛原体」による痕跡が観察できるもの。

(a)方向…①【ケズリ系】と同様

(b)細別…痕跡箇所数が遺物総量に比して極少のため、細分はない。

いずれも幅1～2cm、幅内には刷毛原体の痕跡である条線が多数ある。痕跡の状況から、刷毛原体にはいくつかの種類があると考えられるが、基本的に施され方は同じである。痕跡のほとんどが、ケズリやナデを覆うようにあるので、仕上げとしての装飾的痕跡の可能性が高い。埴や甕や高坏の外面に多く施されている。

⑤【ミガキ系】(写真J) 器面に光沢を残す痕跡が観察できるもの。

(a)方向…①【ケズリ系】と同様

(b)細別…「ミガキ」の場合、痕跡における微妙な差異は確認できるものの、工具の差異が明確に確認できないので細分はない。

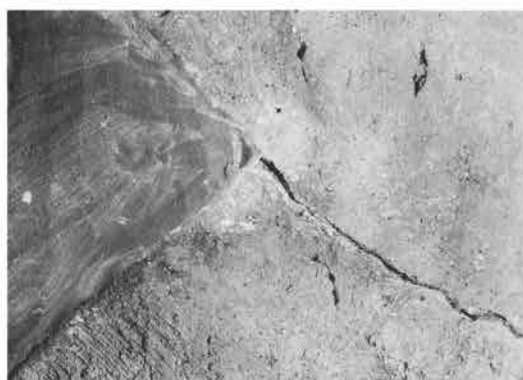
いずれも、幅0.1～0.5cm、細長い線状の痕跡であり、痕跡自体に光沢をもつ。原体は、痕跡自体が器面を深く窪めていなかったり、端部がやや丸くおさまっていることから、篋や刷毛の板状工具(木口の角の曲面を持った箇所)や棒状の枝(先端部)が予想される。いずれにせよ、痕跡のほとんどが、ケズリやナデを覆うようにあるので、仕上げとしての、装飾的痕跡の可能性が高い。各器種に非常に多用されているが、ほとんどが視覚的に目立つ部位や面に施されている。

⑥【シボリ系】(写真K) 器面に縦方向のシワ状痕跡が観察できるもの。

(a)方向…方向はない。

(b)細別…「シボリ」の場合、細別はない。

粘土帯を筒形にし、それを絞りこむ様にしてできた痕跡と考えられる。高坏脚部内面のみに見られる手法である。



写真H オサエ



写真I ハケ



写真J ミガキ



写真K シボリ

【色調・胎土】◆それぞれ、以下の要領で観察した。

A 色調 出土土師器は器面の色調を「橙色」「にぶい橙色」「赤灰色」「明赤褐色」「にぶい赤褐色」「灰黄色」「黄褐色」「にぶい黄褐色」「明黄褐色」「灰黄褐色」「にぶい黄褐色」「灰褐色」「にぶい褐色」「暗褐色」に14分別した。識別には、「農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1993年版）」を用いた。観察時は「JIS notation」に拠ったが、観察表記載時は「土色名」のみの記載とした。

色調の判断は各土師器の外面で行った。なお、色調に斑がある場合は目測において最も広い部分を占めるものを記載の色調にした。

B 胎土 出土土師器の内外面の観察により、砂粒含有量から、「砂粒多」「砂粒含」「砂粒少」に3分別した。なお、砂粒含有量の判断は観察者の目測に拠る。

【備考】◆各項目で取り上げることがなかった特徴的な要素について記載した。主に、器面へのススの付着・器面の摩滅具合や高坏の坏部と脚部の接合痕跡の状況（写真L）等についてである。



写真L 脚部粘土塊充填

2. その他の観察表

土器の観察表のように各項目についての解説は省略するが、いくつかの留意点について述べておく。

◆各観察表の【使用痕等の観察】或いは【加工痕等の観察】での「A面」とは遺物の表面（実測図では左側の平面図：1面のみの実測図の場合は掲載面）、「B面」とは遺物の裏面（実測図では右側の平面図：1面のみの実測図の場合は未掲載面）、「C面」とは遺物の側面全般をさす。

◆剥片観察表の【石質】は観察者の主観により、便宜的に「滑石質蛇紋岩」「片岩質滑石」の2種類に分類した。観察点は①色調②硬軟の程度であり、前者は①暗青灰色②やや硬質、後者は①青灰色②やや軟質である。【条痕有無】は滑石表面に残る条痕（工具痕？擦痕？）の有無を示す。【折断有無】は滑石節理方向に対し直交方向の割痕の有無を示す。

1号竪穴住居出土土師器観察表

遺物番号	出土層位	器種別	法量(cm)	残存(%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調胎土	備考
1 第65図 P L 31	床面	埴土師器	口 13.6 体 13.8 底 6.7 高 16.4	完形	(形態)口…①a②a③b④a 体…①a②b 底…①b (手法)①口縁→頸…横ナデ→縦ミガキ 体…(上)不定ケズリ→スリナデ→縦ミガキ (下)斜ケズリ→不定ミガキ 底…不定ケズリ→スリナデ→一定ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ→ユビオサエ 体…(上)不定(中)斜ユビナデ(下)縦ヘラナデ 底…不定ユビナデ→(部分的)斜ユビナデ	橙色 砂粒含	・体部外面上半にスス付着 ・器面の摩滅少なく、使用頻度は低いことが伺える
2 第65図 P L 31	床面	埴土師器	口 8.3 体 8.6 底 3.4 高 10.0	完形	(形態)口…①a②a③a④c 体…①a②b 底…①c (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上～中)斜横ケズリ→スリナデ (下)斜横ケズリ 底…一定ケズリ→不定ユビナデ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)斜ユビナデ(中～下)斜横ユビナデ 底…斜横ユビナデ	にぶい橙色 砂粒少	・口縁部外面に部分的にスス付着 ・体部外面下半は摩滅が激しい
3 第65図 P L 31	床面	埴土師器	口 9.1 体 8.0 底 2.5 高 10.4	完形	(形態)口…①a②a③b④a 体…①a②b 底…①c (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ→ユビオサエ 体…(上)不定ナデ(中～下)斜横ケズリ 底…一定ケズリ ②口縁→頸…横ナデ 体…(上)斜縦ユビナデ→ユビオサエ(中～下)斜縦ユビナデ 底…不定ユビナデ	橙色 砂粒多	・体部外面下半に1箇所黒斑あり ・器面全体が摩滅している

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調胎土	備考
4 第65図 P L 31	床面	甕 土師器	口 22.0復 体 ー 底 ー 高 (10.8)	口 20 体 5 底 0	(形態)口…①a②a③c (手法)①口縁…斜縦ハケ→横ナデ 頸…縦ハケ 体…(上)縦ハケ→斜ヘラナデ ②口縁…頸…横ナデ 体…斜ハケ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・体部内外面に部分的にススが付着
5 第65図 P L 31	床面	台付甕 土師器	口 15.6 体 23.4 底 9.6 高 32.9	口 95 体 90 底 95 台 100	(形態)口…①a②b③c 体…①a②a 底…①c (手法)①口縁…横ナデ 体…(上～中)斜ケズリ (下)不定ケズリ 台…スリナデ ②口縁…横ナデ 体…(上～中)斜ヘラナデ (下)斜ヘラナデ→斜ユビナデ 台…(上)不定ユビナデ (下)スリナデ	赤灰色 砂粒多	・外面全体にススが付着
6 第65図 P L 31	床面	甕 土師器	口 17.8復 体 ー 底 ー 高 (3.7)	口 5 体 ～5 底 0	(形態)口…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ 頸…斜縦ケズリ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ 頸…体…不定ナデ	赤灰色 砂粒多	・外面全体にススが付着
7 第65図 P L 31	床面	高坏 土師器	口 17.6復 体 9.5復 裾 ー 高 (5.3)	口 40 体 0 脚 0 裾 0	(形態)口…①b②a③b (手法)①口唇…沈線を1条めぐり 口縁…横ナデ→縦ミガキ 突帯…粘土帯付、上端ナデ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…不定ミガキ→斜縦ミガキ	明赤褐色 砂粒含	
8 第65図 P L 31	床面	高坏 土師器	口 ー 体 ー 裾 ー 高 (8.8)	口 0 体 0 脚 100 裾 20	(形態)脚…②a (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ 裾…横ナデ ②脚…縦ユビナデ (下端)横ユビナデ 裾…(上)横ヘラナデ (中)横ナデ	にぶい 橙色 砂粒少	・脚部内面はしぼり痕が明瞭
9 第65図 P L 31	床面	高坏 土師器	口 ー 体 ー 裾 ー 高 (9.6)	口 0 体 0 脚 70 裾 5	(形態)脚…②a (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ (下)ユビオサエ 裾…横ナデ ②脚…縦ユビナデ 裾…横ナデ	明黄褐色 砂粒少	・脚部内面はしぼり痕が明瞭
10 第66図 P L 32	覆土 下層	埴 土師器	口 14.9 体 14.8 底 ー 高 17.3	口 90 体 90 底 90	(形態)口…①a②a③b④a 体…①a②b 底…①a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)横ナデ→斜縦ミガキ (中)横ケズリ(ハケ?)→横ミガキ (下)斜ケズリ 底…斜横ケズリ ②口縁…(上)横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…斜ユビナデ 底…不定ユビナデ→部分的にユビオサエ	橙色 砂粒含	・器面全体がやや摩滅している
11 第66図 P L 32	覆土 下層	埴 土師器	口 14.6 体 13.3 底 2.0 高 16.4	口 90 体 80 底 50	(形態)口…①a②a③a④c 体…①a②b 底…①d (手法)①口縁…(上)横ナデ (下)不定ナデ・斜ハケ→横ナデ 頸…横ナデ 体…(上)不定ケズリ→スリナデ→斜縦ミガキ (下)斜横ケズリ→ミガキ(不明) 底…一定ケズリ ②口縁…(上)横ナデ→縦ミガキ (下)不定ナデ(ハケ?)→横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)不明(中～下)スリナデ 底…スリナデ又は斜ヘラナデ(工具の痕跡あり)	橙色 砂粒多	
12 第66図 P L 32	覆土 下層	甕 土師器	口 14.0 体 12.3 底 ー 高 14.5	口 90 体 70 底 10	(形態)口…①b②a③a④b 体…①a②b③a 底…①a (手法)①口唇…横ミガキ 口縁…(段上)縦ケズリ→横ナデ(段部)横ミガキ(段下)縦ミガキ 体…(上)縦ケズリ→縦ミガキ→横ナデ (中)縦ケズリ→縦ミガキ (下)斜ケズリ ②口縁…縦ミガキ 体…(上)スリナデ→部分的にユビオサエ (中)横ハケ(ナデ?) (下)スリナデ	にぶい 橙色 砂粒含	・焼成前穿孔 ・体部外面中に黒斑あり
13 第66図 P L 32	覆土 下層	甕 土師器	口 12.3 体 11.1 底 ー 高 (7.2)	口 90 体 80 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b 底…①a? (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)縦ケズリ(中～下)斜横ケズリ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)横ケズリ(中)スリナデ→部分的にユビオサエ (下)斜横ユビナデ→縦ミガキ	にぶい 褐色 砂粒含	・口唇部の一部と体部の外面中位以下と体部の内面一部に黒斑あり
14 第66図 P L 32	覆土 下層	埴 土師器	口 8.6復 体 8.4 底 3.0 高 10.1	口 40 体 100 底 100	(形態)口…①a②a③b④b 体…①b②b 底…①d (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ユビナデ 体…(上)スリナデ(中～下)斜横ケズリ 底…不定ケズリ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)縦ユビナデ(中)横ユビナデ(下)斜横ユビナデ 底…斜横ユビナデ	にぶい 褐色 砂粒含	・体部外面下位の1箇所に黒斑あり

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
15 第66図 P L 32	覆土 下層	埴 土師器	口 7.8 体 7.2 底 4.5復 高 8.2	口 70 体 90 底 50	(形態)口…①a②?③a④b 体…①b②b 底…①b (手法)①口縁…(上)縦ハケ→横ナデ (下)縦ハケ 頸…縦ハケ 体…(上~中)縦ハケ→スリナデ (下)斜横ケズリ→不定ナデ 底…不定ケズリ→一定ナデ ②口縁…横ナデ→ユビオサエ (下)ハケ跡あり 頸…ユビオ サエ 体~底…不定ユビナデ	橙色 砂粒少	
16 第66図 P L 32	覆土 下層	埴 土師器	口 8.4復 体 8.3復 底 — 高 (7.2)	口 60 体 30 底 0	(形態)口…①a②?③a④b 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…(上)縦ハケ→スリ ナデ (中)斜ケズリ ②口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…斜ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
17 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 6.3 体 8.0 底 — 高 (5.8)	口 90 体 70 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b (手法)①口縁…横ユビナデ 頸…縦ハケ 体…(上)斜縦ハケ→ス リナデ ②口縁…横ユビナデ 頸…横ユビナデ(部分的にハケ痕有) 体…斜縦ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・体部外面中 位に1箇所、 内面中位に1 箇所黒斑あり
18 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 11.1 体 9.2 底 — 高 (4.0)	口 90 体 70 底 0	(形態)口…①a 体…①a (手法)①口縁…横ユビナデ 頸…縦ハケ 体…不定ナデ ②口縁…斜横ユビナデ→部分的にユビオサエ 体…不定ユビナデ	橙色 砂粒多	・体部外面中 位に1箇所黒 斑あり
19 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 12.1復 体 10.9復 底 6.1復 高 9.0復	口 30 体 20 底 5	(形態)口…①a 体…①?②a 底…①c (手法)①口縁…横ナデ 頸…横ナデ 体…(上)スリナデ (中~下) 斜ケズリ→不定ナデ 底…不定ケズリ ②口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…(上)斜ユビナデ→ ハケ状斜ナデ (中~下)斜ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
20 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 11.8復 体 10.4復 底 4.8 高 9.3	口 40 体 40 底 70	(形態)口…①a 体…①?②a 底…①c (手法)①口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…(上)スリナデ(中 ~下)縦ケズリ→斜縦ユビナデ 底…不定ケズリ→不定ナデ ②口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…(上)ハケ状横ナデ (中~下)ハケ状斜ナデ 底…斜縦ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・口唇部全体 にスス付着
21 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 9.0復 体 9.2復 底 — 高 (7.5)	口 40 体 30 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 頸…ハケ状横ナデ 体…(上~中)斜縦ケ ズリ→スリナデ (下)縦ケズリ ②口縁…横ナデ 頸…横ナデ 体…(上)ハケ状横ナデ→部 分的にユビオサエ (中~下)ハケ状横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
22 第66図 P L 32	覆土 下層	鉢 土師器	口 10.0復 体 8.9復 底 — 高 (7.3)	口 20 体 40 底 20	(形態)口…①a 体…①b②b 底…①a? (手法)①口縁…横ナデ 頸…不定ナデ 体…(上)不定ナデ(中 ~下)斜横ケズリ 底…一定ケズリ ②口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ 体…不定ユビナデ 底…不定ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒多	・口縁部外面 一部に黒斑あ り
23 第66図 P L 33	覆土 下層	甗 土師器	口 30.0復 体 26.0復 底 — 高 (18.7)	口 50 体 50 底 0	(形態)口…①a 体…①a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…ハケ状横ナデ 体…(上) 斜ケズリ→縦ハケ(単位細かい)→縦ミガキ・横ミガキ (下) 斜ケズリ→縦ミガキ ②口縁…頸…横ナデ→縦ミガキ・横ミガキ 体…(上)斜ケ ズリ→スリナデ→縦ミガキ (下)斜ケズリ→縦ミガキ	褐色 砂粒含	
24 第66図 P L 33	覆土 下層	甗 土師器	口 — 体 — 底 5.0復 高 (2.7)	口 0 体 5 底 20	(形態)体…? 底…①a②a (手法)①体…斜ハケ→斜横ユビナデ 底…不定ナデ(摩滅している) ②体…不定ヘラナデ 底…不明	にぶい 橙色 砂粒含	・内面かなり 摩滅
25 第66図 P L 33	覆土 下層	甗 土師器	口 15.4 体 14.5 底 — 高 (11.9)	口 95 体 90 底 95	(形態)口…①a②b③c 体…①a②a 底…①c (手法)①口縁…縦ハケ→横ナデ 頸…縦ハケ 体…(上)縦ハケ→ 横ナデ (中)不定ナデ (下)斜ケズリ(ユビナデ?) 底…横 ハケ→不定ナデ ②口縁…頸…横ナデ 体…(上)斜横ユビナデ (中~下)斜 ヘラナデ 底…横ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・口縁部~底 部にかけて外 面に部分的に スス付着

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調土	備考
26 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 17.5 体 11.4 裾 13.4 高 17.1	坏 100 脚 100 裾 100	(形態)口…①a②a③b 体…①a②a 脚…①b②c 裾…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…不定ケズリ→不定ナデ 接…横ユビナデ 脚…縦ハケ→不定ナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ→斜横ミガキ 体…横ヘラナデ 接…不明 脚…斜縦ユビナデ 裾…横ナデ→部分的ユビオサエ	明赤褐色 砂粒少	・体部外面に 黒斑あり ・脚部外面、 裾部の内外面 にスス付着
27 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 19.8 体 11.1 裾 13.9 高 15.0	坏 70 脚 90 裾 60	(形態)口…①a②b③a 体…①b②a 脚…①a②b 裾…①b②a③a (手法)①口縁…横ナデ 体…斜縦ケズリ→横ヘラ(スリ?)ナデ 接…縦ケズリ 脚…縦ケズリ→スリナデ 裾…横ナデ ②口縁…横ナデ 体…不定ハケ状ナデ 脚…縦ユビナデ 裾…横ナデ	黄橙色 砂粒含	・坏と脚の接 合は粘土塊充 填+しぼり込 み?
28 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 18.4 体 9.9 裾 12.3 高 16.0復	坏 80 脚 30 裾 80	(形態)口…①a②a③a 体…①b②b 脚…①b②a 裾…①a②a③b (手法)①口縁…(上)横ナデ→縦ミガキ (下)横ケズリ→縦ミガキ 体…斜横ケズリ 脚…スリナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ→ 縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…スリナデ→縦ミガキ 脚 …(中)横ユビナデ (下)横ナデ→ユビオサエ 裾…横ナデ	にぶい 橙色 砂粒含	・口縁から体 部の内外面の 一部にスス付 着 ・坏と脚の接 合部は復元
29 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 19.4 体 11.2 裾 — 高 (14.5)	坏 80 脚 50 裾 0	(形態)口…①a②a③a 体…①b②b 脚…①b②c (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ 接…縦ケズリ 脚…縦 ケズリ→スリナデ ②口縁…横ナデ 体…不定(スリ?)ナデ 脚…縦ユビナデ	にぶい 橙色 砂粒含	・坏と脚の接 合は粘土塊充 填+しぼり込 み
30 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 18.2 体 11.1復 裾 — 高 (5.7)	坏 50 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ 接…横ケズリ ②口縁…横ナデ 体…斜横ハケ状ヘラナデ	赤灰色 砂粒多	・坏と脚の接 合は粘土塊充 填(明瞭)
31 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 12.0 裾 — 高 (6.3)	坏 40 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②b 体…①a②a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…(上)横ケズリ→斜ミガ キ (下)不定ハケ→スリナデ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不明	橙色 砂粒多	・坏部と脚と の接合面が明 瞭に観察可
32 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 16.0復 体 8.5復 裾 — 高 (6.3)	坏 20 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③b 体…①a②a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ナデ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…スリナデ	橙色 砂粒含	
33 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 19.0 体 10.4 裾 — 高 (5.4)	坏 90 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②b③a 体…②a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…斜横ケズリ→斜縦ミガ キ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…不明	灰黄褐 色 砂粒多	・口縁部の外 面 2箇所(対 位置)にスス 付着
34 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 17.9 体 — 裾 — 高 (5.0)	坏 60 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a (手法)①口縁…(上)横ナデ→縦ミガキ(下)斜横ナデ→縦ミガキ ②口縁…(上)横ナデ→縦ミガキ(下)斜横ヘラナデ→縦ミガ キ	明赤褐 色 砂粒少	
35 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (7.6)	坏 0 脚 30 裾 10	(形態)脚…①b②a (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ 裾…斜横ケズリ ②脚…不定ユビナデ 裾…横ナデ(上端のみ、後ユビオサエ)	明赤褐 色 砂粒少	
36 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (7.4)	坏 0 脚 30 裾 0	(形態)脚…①b②b (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ ②脚…粘土帯しぼり込み(下端のみ、斜ユビナデ)	明赤褐 色 砂粒少	
37 第67図 P L 33	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (5.4)	坏 0 脚 30 裾 0	(形態)脚…①b②b (手法)①脚…スリナデ→縦ミガキ ②脚…斜横ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
38 第68図 P L 33	覆土 上層	埴 土師器	口 9.9 体 9.1 底 2.6 高 11.5	口 80 体 60 底 100	(形態)口…①b②a③a④b 体…①a②b 底…①d (手法)①口縁…頸…横ナデ 体…(上~中)スリナデ (下)斜横ケ ズリ 底…不定ケズリ 頸…横ナデ ②口縁…横ナデ(中にユビオサエ) 体…斜縦ユビナデ 底…不定ユビナデ	にぶい 褐色 砂粒含	・口縁部~体 部外面にスス 付着

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
39 第68図 P L 33	覆土 上層	埴 土師器	口 10.5 体 10.0 底 3.8 高 10.6	口 90 体 70 底 10	(形態)口…①a②?③b④a 体…①b②b 底…①c (手法)①口縁…頸…横ナデ 体…(上)スリナデ (下)斜横ケズリ 底…不定ナデ ②口縁…横ナデ→部分的にユビオサエ 頸…横ナデ 体…(上)スリナデ (下)斜縦ユビナデ 底…不明	にぶい 赤褐色 砂粒含	・器面全体が やや摩滅して いる
40 第68図 P L 無	覆土 上層	埴 土師器	口 9.5復 体 — 底 — 高 (4.5)	口 30 体 0 底 0	(形態)口…①a②?③b④a (手法)①口縁…(上)横ナデ (中～下)縦ハケ→部分的不定ナデ ②口縁…(上)横ハケ (中～下)斜横ハケ	にぶい 黄褐色 砂粒少	・口縁部外面 部分にスス付 着
41 第68図 P L 33	覆土 上層	埴 土師器	口 7.3復 体 7.6復 底 — 高 (7.5)	口 30 体 30 底 0	(形態)口…①a②b③b④c 体…①a②b (手法)①口縁…頸…横ナデ 体…(上)スリナデ (中)不定ナデ(下) 斜横ケズリ ②口縁…頸…横ナデ→部分的ユビオサエ 体…(上)粘土シ ポリ→ユビオサエ (中)横ユビナデ (下)斜ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
42 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 18.6復 体 — 底 — 高 (4.9)	口 15 体 0 底 0	(形態)口…①a②c (手法)①口縁…(上)横ナデ (下)スリナデ 頸…横ユビナデ ②口縁…(上)横ナデ (下)不明	灰褐色 砂粒含	
43 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 18.6復 体 — 底 — 高 (5.2)	口 ~5 体 0 底 0	(形態)口…①a②c (手法)①口縁…(上)横ナデ (中～下)スリナデ ②口縁…(上)横ナデ (中～下)斜横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・口縁部内外 面にスス付着
44 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 18.4復 体 — 底 — 高 (2.2)	口 10 体 0 底 1	(形態)口…①a②b③d (手法)①口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ ②口縁…横ナデ 頸…斜横ユビナデ	灰褐色 砂粒少	・口縁部外面 にスス付着
45 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 8.2復 高 (3.5)	口 0 体 ~5 底 ~5	(形態)体…①a? 底…①a②a (手法)①体…底…不定ナデ ②体…不定ナデ 底…一定ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
46 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.0復 高 (4.2)	口 0 体 10 底 30	(形態)体…①a? 底…①a②a (手法)①体…斜横ケズリ 底…横ケズリ ②体…斜横ヘラナデ→斜縦ミガキ 底…不定ユビナデ→不 定ミガキ	灰褐色 砂粒含	
47 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.0 高 (3.1)	口 0 体 5 底 70	(形態)体…①a? 底…①a②b (手法)①体…斜横ケズリ→部分的に不定ナデ 底…不定ナデ ②体…斜横ヘラナデ 底…不定ユビナデ	灰黄色 砂粒含	・体部内面に スス付着
48 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 8.1復 高 (2.0)	口 0 体 5 底 40	(形態)体…①a? 底…①a②b (手法)①体…斜横ケズリ 底…不定ナデ ②体…斜横ヘラナデ 底…不定ユビナデ	灰黄色 砂粒多	・体部の内面 にスス付着
49 第68図 P L 33	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.0復 高 (2.1)	口 0 体 ~5 底 5	(形態)体…①a? 底…①a②b (手法)①体…斜横ケズリ 底…ケズリ(不明) ②体…斜横ヘラナデ 底…不定ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・体部～底部 の内面にスス 付着
50 第68図 P L 34	覆土 上層	高 坏 土師器	口 22.0復 体 13.6復 裾 — 高 (5.0)	坏 10 脚 0 裾 0	(形態)口…①b②b③a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ (段部上端…横ナデ) ②口縁…横ナデ→斜横ミガキ	橙色 砂粒少	
51 第68図 P L 34	覆土 上層	高 坏 土師器	口 20.0復 体 — 裾 — 高 (3.8)	坏 5 脚 0 裾 0	(形態)口…①b②b③a (手法)①口縁…(段上)横ナデ→縦ミガキ (段下)斜縦ケズリ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
52 第68図 P L 34	覆土 上層	高 坏 土師器	口 15.3 体 9.7 裾 — 高 (7.2)	坏 50 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a 体…①b②b (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ナデ 接…不定ユビ ナデ	にぶい 黄褐色 砂粒多	・脚部との接 合面が明瞭に 観察可

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
53 第68図 P L 34	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 10.3 裾 — 高 (11.1)	坏 40 脚 60 裾 0	(形態)口…①a 体…①b②a 脚…①a②b (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…(上)横ナデ (中～下)不定ケズリ→不定ナデ→縦ミガキ 接…スリナデ 脚…スリナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…斜横ヘラナデ→縦ミガキ 脚…斜縦ユビナデ	橙色 砂粒少	・坏部と脚の 接合は粘土塊 充填(痕が明瞭)
54 第68図 P L 34	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (8.7)	坏 0 脚 20 裾 0	(形態)脚…①b②a (手法)①脚…スリナデ ②脚…(上)粘土帯しぼり込み (中～下)斜縦ユビナデ	にぶい 橙色 砂粒少	
55 第68図 P L 34	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (7.2)	坏 0 脚 30 裾 0	(形態)脚…①b②c (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ ②脚…不定ヘラナデ(棒状工具を使用)	にぶい 赤褐色 砂粒少	

1号竪穴住居出土石(滑石・蛇紋岩以外)

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面	備考
56 第69図 P L 34	床面	砥石?	長 15.3 幅 9.9 厚 4.3	940	粗粒 安山岩	①平…隅丸長方形 断…若干凹凸あるが、ほぼ細長い長方形 ②なし	①②打痕らしき痕跡?あり ③数箇所が摩滅	・人の手に丁 度納まるサイ ズ
57 第69図 P L 34	床面	叩石	長 9.0 幅 3.6 厚 3.0	160	粗粒 安山岩	①平…楕長円形 断…楕長円形 ②なし	①②ほぼ全面が摩滅 ③上下端面に明瞭な打痕あり	
58 第69図 P L 34	床面	?	長 6.0 幅 7.2 厚 4.8	260	粗粒 安山岩	①平…半円形 断…不整形 ②なし	①②観察できず ③観察できず	・円礫が割れ たもの、割口 古い
59 第69図 P L 34	床面	砥石?	長 12.3 幅 12.3 厚 3.0	780	粗粒 安山岩	①平…不整形三角形 断…若干凹凸あるが、ほぼ細長い長方形 ②なし	①②打痕らしき痕跡?あり ③数箇所が摩滅	・人の手に丁 度納まるサイ ズ
60 第69図 P L 34	床面	台石	長 27.0 幅 24.8 厚 12.0	12,650	粗粒 安山岩	①平…不整形五角形 断…若干凹凸あるが、ほぼ台形 ②なし	①②両面ともに中央に打痕の 集中した箇所あり ③観察できず	・アンピルス トーン
61 第69図 P L 34	床面	?	長 6.3 幅 4.2 厚 2.4	70	粗粒 安山岩	①平…楕円形 断…楕円形 ②なし	①②観察できず ③観察できず	
62 第70図 P L 34	床面	台石?	長 19.2 幅 8.4 厚 6.6	1,460	粗粒 安山岩	①平…楕長円形 断…不整形 ②なし	①②打痕らしき痕跡?あり ③観察できず	
63 第70図 P L 34	床面	?	長 9.3 幅 8.6 厚 7.5	280	軽石	①平…円形 断…円形 ②なし	①②観察できず ③観察できず	
64 第70図 P L 34	覆土 下層	台石?	長 26.8 幅 22.8 厚 7.6	5,060	粗粒 安山岩	①平…半円形 断…不整形長円形 ②なし	①②両面とも偏平で、摩滅し ている様だが、不明瞭 ③観察できず	
65 第70図 P L 34	覆土 下層	台石?	長 28.0 幅 23.8 厚 9.4	7,560	粗粒 安山岩	①平…不整形円形 断…不整形長円形 ②なし	①②両面とも偏平で、摩滅し ている様だが、不明瞭 ③観察できず	
66 第70図 P L 34	覆土 上層	台石?	長 15.0 幅 19.8 厚 8.8	3,600	粗粒 安山岩	①平…不整形円形 断…不整形 ②なし	①②両面とも、部分的に摩滅 ③各面とも摩滅している様だ が、不明瞭	
67 第70図 P L 34	覆土 上層	叩石?	長 12.9 幅 7.8 厚 2.9	260	粗粒 安山岩	①平…楕円形 断…三角形 ②なし	①②各面とも摩滅 ③観察できず	
68 第70図 P L 34	覆土 上層	砥石?	長 5.4 幅 11.3 厚 3.9	450	粗粒 安山岩	①平…不整形長方形 断…やや湾曲気 味の細長い長方形 ②縁の部分に割り、成形している?	①②打痕らしき痕跡?が数箇 所あり ③観察できず	・人の手に丁 度納まるサイ ズ

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

1号竪穴住居出土石製模造品(原石)観察表

遺物番号	出土層位	種類	計測値(cm)	重量(g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察			備考
							①A面	②B面	③C面	
69 第71図 P L 36	床面	台石兼 原石	長 12.3 幅 11.3 厚 4.8	952.5	滑石質 蛇紋岩	①平…不整多角形 断…不整台形 ②自然面(特に角ばった部分)を縁辺から割り落としている 調整・使用痕の状況から「割る→擦る」行為の連続である	①長～3.0cm、幅～0.15cm、深～0.1cmの条痕が不定方向に無数にある。幅広く、彫込みの深い条痕は工具(鉄製)痕跡と、また幅狭く彫込みの浅い条痕は滑石製品成形時痕跡か工具(鉄製?)痕跡と考えられる ②A面同様の条痕が中央付近に集中しており、また、径～0.4mmの打痕が点在する ③A面同様の痕跡が角の部分に多くある	・本石からの割り落としと思える剥片が他で確認できる ・光沢を持つ自然面が各面に残る		
70 第71図 P L 36	床面	台石兼 原石	長 12.5 幅 7.8 厚 6.6	612.3	滑石質 蛇紋岩	①平…不整多角形 断…不整三角形 ②自然面(特に角ばった部分)を縁辺から割り落としている 調整・使用痕の状況から「割る→擦る」行為の連続である	①長～3.0cm、幅～0.5cm、深～0.5cmの擦痕が点在し、また、径～0.8mmの打痕が点在する ②径～0.5mmの打痕が僅かにある ③A面と同様の擦痕が点在し、特に縁辺は全て使用されている・幅広く、彫り込みの深い擦痕は工具(鉄製?)と考えられる	・本石からの割り落としと思える剥片が他で確認できる ・光沢を持つ自然面が各面に残る		
71 第71図 P L 36	覆土下層	原石	長 13.6 幅 9.7 厚 3.4	331.0	滑石質 蛇紋岩	①平…不整多角形 断…偏平な多角形 ②自然面を、節理を利用して割り落としている	①長～4.0cm、幅～1.5cm、深～0.4cmの打痕が節理面に沿う形で1箇所集中している・細長い擦痕とは明確に異なり、工具(鉄製?)の打痕と考えられる ②なし ③細かい打痕が角ばった縁辺に点在する	・他の原石に比較して節理が発達している		
72 第72図 P L 36	床面	原石	長 11.6 幅 6.7 厚 4.8	374.1	滑石質 蛇紋岩	①平…不整三角形 断…不整長方形 ②自然面(特に角ばった部分)を縁辺から割り落としている 調整・使用痕の状況から「割る→擦る」行為の連続である	①径～0.5cmの打痕が点在する ②なし ③長～2.5cm、幅～0.1cm、深～0.1cmの擦痕が不定方向にあり、径～0.8cmの打痕が側面全体と縁辺に無数に点在し、また、長～1.0cm、幅～0.8cm、深～0.2cmの打痕が点在する・細長い擦痕とは明確に異なり工具(鉄製?)の打痕と考えられる	・本石からの割り落としと思える剥片が他で確認できる ・光沢を持つ自然面が各面に残る		

1号竪穴住居出土石製模造品(製品・未製品)観察表

遺物番号	出土層位	種類	計測値(cm)	重量(g)	石質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察				備考
							①A面	②B面	③側面	④穿孔	
73 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.0 短 1.1 厚 0.3	0.5	滑石質 蛇紋岩	①角ばった円形 ②偏平な長方形	①②平坦に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
74 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.9 短 0.8 厚 0.25	0.4	滑石質 蛇紋岩	①不整多角形 ②偏平な台形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
75 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.1 短 0.6 厚 0.4	0.4	片岩質 滑石	①不整多角形 ②やや厚い台形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔			・研磨後の剥片の可能性あり	
76 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.2 短 0.5 厚 0.2	0.13	滑石質 蛇紋岩	①細長い台形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔			・研磨後の剥片の可能性あり	
77 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.95 短 1.05 厚 0.3	0.4	滑石質 蛇紋岩	①角ばった円形 ②偏平な台形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
78 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.8 短 0.6 厚 0.3	0.2	片岩質 滑石	①細長い多角形 ②やや厚い台形	①偏平に研磨・縁辺が割れ、研磨面が狭い ②偏平に研磨 ③研磨らしき加工痕?あり ④未穿孔			・研磨後の剥片の可能性あり	
79 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.0 短 0.9 厚 0.2	0.2	滑石質 蛇紋岩	①不整多角形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
80 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.75 短 0.6 厚 0.25	0.16	片岩質 滑石	①不整楕円形 ②偏平な台形	①偏平に研磨・中央に穿孔意識(?)の凹あり ②偏平に研磨 ③研磨らしき加工痕?あり ④未穿孔だが、A面で穿孔痕跡?あり				

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物 番号	出土 層位	種 類	計測値 (cm)	重 量 (g)	石 質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察 ①A面 ②B面 ③側面 ④穿孔				備 考
							①A面	②B面	③側面	④穿孔	
81 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.0 短 0.9 厚 0.3	0.4	滑石質 蛇紋岩	①不整六角形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③研磨らしき加工痕?あり ④未穿孔				
82 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.75 短 0.6 厚 0.4	0.3	滑石質 蛇紋岩	①長方形 ②やや厚い台形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
83 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.55 短 0.7 厚 0.2	0.15	滑石質 蛇紋岩	①不整正方形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③未研磨・1側面に白色粘土附着 ④未穿孔				
84 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.7 短 0.6 厚 0.25	0.2	滑石質 蛇紋岩	①不整多角形 ②偏平な台形	①偏平に研磨・縁辺が割り落ち、研磨面が狭い ②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
85 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.8 短 0.8 厚 0.25	0.3	滑石質 蛇紋岩	①不整長方形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③研磨らしき加工痕?あり ④未穿孔				
86 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.8 短 0.75 厚 0.25	0.2	滑石質 蛇紋岩	①角ばった円形 ②偏平な台形	①②偏平に研磨 ③研磨らしき痕跡?あり ④未穿孔				
87 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.8 短 0.75 厚 0.25	0.2	滑石質 蛇紋岩	①不整長方形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・擦痕明瞭 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔				
88 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.7 短 0.5 厚 0.2	0.1	片岩質 滑石	①不整長方形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③未研磨・割り離れたまま ④未穿孔			・研磨後の剥片の可能性あり	
89 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.95 短 0.85 厚 0.2	0.2	片岩質 滑石	①角ばった円形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・穿孔あり ③未研磨・形割り痕跡あり ④径0.15cmの穿孔済 備考参照			・B面から穿孔し始め、A面で仕上げ	
90 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 1.0 短 0.9 厚 0.2	0.2	片岩質 滑石	①菱形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・穿孔あり ③一部研磨・形割り痕跡あり ④径0.25cmの穿孔済 備考参照			・B面から穿孔し始め、A面で仕上げ	
91 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.9 短 0.85 厚 0.3	0.3	滑石質 蛇紋岩	①不整多角形 ②やや厚い台形	①②偏平に研磨・穿孔あり ③未研磨・形割り痕跡あり ④径0.2cmの穿孔済 備考参照			・A面から穿孔し始め、B面で仕上げ	
92 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.5 短 0.8 厚 0.2	0.2	滑石質 蛇紋岩	①五角形 ②不整台形	①偏平に研磨・縁辺が割り落ち(形割)研磨面が狭い・穿孔あり ②偏平に研磨・穿孔あり ③一部研磨・形割り痕跡あり ④径0.2cmと0.2cmの2つの穿孔済・中心部の孔はB面から穿孔し始め、A面で仕上げ			・縁辺の孔はA面から穿孔し始め、B面からの仕上げが未完成	
93 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.75 短 0.5 厚 0.2	0.1	滑石質 蛇紋岩	①角ばった半円形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・穿孔あり ③未研磨・形割り痕跡あり ④径0.25cmの穿孔済 備考参照			・A面から穿孔し始め、B面で仕上げ	
94 第72図 P L 35	床面	未製品 白玉	長 0.45 短 0.75 厚 0.25	0.13	滑石質 蛇紋岩	①不整五角形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・穿孔中途 ③未研磨形割り痕跡あり ④径0.3cmと0.25cmの2つとも穿孔中途段階			・穿孔中途はA面とB面に各1つあり	
95 第72図 P L 35	床面	製 品 白玉	長 0.45 短 0.15 厚 0.2	0.05	滑石質 蛇紋岩	①半円形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨・穿孔あり ③曲面を作るように研磨 ④径0.25cmの穿孔済 備考参照			・B面から穿孔し始め、A面で仕上げ	
96 第72図 P L 無	床面	未製品 剣 形	長 1.8 幅 1.3 厚 0.2	0.9	滑石質 蛇紋岩	①不整三角形 ②偏平な長方形	①②偏平に研磨 ③未研磨・形割り痕跡あり ④穿孔不明			・半分が欠損している	
97 第72図 P L 35	床面	製 品 紡錘車	長 5.3 短 5.3 厚 1.0	40.2	蛇紋岩	①やや歪んだ円形 ②偏平な台形 (斜辺が外湾)	①②偏平に研磨・丁寧な仕上げ・光沢あり ③縁辺は曲面を作るように研磨・斜辺は装飾的研磨・両辺とも丁寧な仕上げ・光沢あり 軸穴周辺幅0.3cmの範囲に軸抑えの痕跡と装飾的?彫痕が残存 ④径0.7cmの穿孔済・孔内面も研磨・孔内面に僅かに繊維の痕跡が残存			・穿孔工程は不明・軸材が一部炭化し残存	

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察 ①A面 ②B面 ③側面 ④穿孔				備考
							①A面	②B面	③側面	④穿孔	
98 第73図 P L 36	床面	未製品 剣形? 白玉?	長 4.0 幅 2.45 厚 0.75	7.8	滑石質 蛇紋岩	①細長い不整多角形 ②歪んだ細長い隅丸長方形	①多面的に研磨・縁辺が一部割れ落ちる ②凹面状に研磨・縁辺が割れ、研磨面が狭い ③部分的研磨・部分的に工具痕あり・形割りの痕跡あり ④未穿孔				
99 第73図 P L 36	床面	未製品 剣形? 白玉?	長 3.6 幅 2.0 厚 0.25	3.1	滑石質 蛇紋岩	①細長い不整多角形 ②偏平で細長い台形	①②偏平に研磨・縁辺が一部割れ落ちる ③未研磨・形割りの痕跡あり ④未穿孔			・断面の厚さから形割直前の白玉未製品の可能性高い	
100 第73図 P L 36	床面	未製品 剣形? 白玉?	長 3.45 幅 1.9 厚 0.2	3.0	滑石質 蛇紋岩	①細長い不整多角形 ②偏平で細長い長方形	①偏平な研磨・縁辺は一部割れ落ちる ②偏平に研磨 ③一部研磨らしき痕跡あり・形割り痕跡あり ④未穿孔			・断面の厚さから形割直前の白玉未製品の可能性高い	
101 第73図 P L 36	床面	未製品 管玉	長 3.0 幅 1.0 厚 0.65	4.2	滑石質 蛇紋岩	①細長い長方形 ②台形	①②未研磨・節理に沿って割り落としたまま ③未研磨・節理に沿って割り落としたまま上・下端は節理面に直交方向に断ち割る ④未穿孔			・金太郎鉋型の白玉未製品(荒割段階)の可能性あり	
102 第73図 P L 36	床面	未製品 勾玉	長 2.25 短 1.5 厚 0.65	3.9	滑石質 蛇紋岩	①不整楕円形 ②隅丸長方形	①②曲面を作るような研磨 ③縁辺の角を丸める研磨が部分的にあり ④未穿孔				
103 第73図 P L 36	床面	未製品 剣形?	長 2.85 幅 1.25 厚 0.65	2.8	滑石質 蛇紋岩	①歪んだ長方形 ②細長い不整長方形	①②未研磨・全体を細かく形割り ③未研磨・全体を細かく形割り、片面で抉りを入れる・上下端は節理に直交方向に断ち割る ④未穿孔				
104 第73図 P L 35	床面	未製品 剣形	長 5.2 幅 2.2 厚 0.4	6.0	滑石質 蛇紋岩	①細長い杏仁形 ②偏平でやや反った不整長方形	①②僅かに反るように研磨・縁辺は刃部を意識した研磨・部分的に研磨面が剝離 ③鋭い刃部を意識、A面とB面の両面研磨 ④未穿孔			・僅かだがA面が凹面、B面が凸面	
105 第73図 P L 35	床面	未製品 剣形	長 5.2 幅 2.5 厚 0.6	13.7	滑石質 蛇紋岩	①幅広い剣形 ②やや肥厚の細長い長方形	①②偏平に研磨・一部研磨面が剝離・一部縁辺割れ落ちる・刃部を意識した痕跡?あり ③平坦に研磨・一部割れ落ちる・鋭い刃部を意識した痕跡はなし ④未穿孔				
106 第73図 P L 35	床面	未製品 剣形	長 4.3 幅 2.0 厚 0.7	9.6	滑石質 蛇紋岩	①細長い五角の剣形 ②やや肥厚の細長い三角形	①②僅かに曲面を作るように研磨・一部縁辺が割れ落ちる ③部分的に平坦に研磨・刃先(下端)部はA B面の曲面により、刃部を表現・側面の刃部加工は不明 ④未穿孔			・偏平な剣形の未製品	

1号竪穴住居出土土剣片観察表 (第74・75図、P L 35)

遺物番号	出土層位	最長 (cm)	重量 (g)	石質	条痕有無	折断有無	備考
107	床面	7.62	23.7	滑蛇	×	×	管玉未製品
108	床面	7.20	24.0	滑蛇	○	×	管玉未製品?
109	床面	6.94	28.4	滑蛇	○	×	管玉? 剣形?
110	覆土	6.13	24.5	滑蛇	×	×	
111	床面	7.05	81.3	滑蛇	○	×	
112	床面	3.55	19.2	滑蛇	○	×	
113	床面	4.41	30.8	滑蛇	○	○	管玉未製品?
114	覆土	4.97	22.7	滑蛇	×	×	
115	床面	5.55	93.9	滑蛇	○	×	紡錘車未製品
116	覆土	4.10	28.2	滑蛇	○	×	
117	床面	5.85	37.0	片滑	×	×	
118	覆土	4.15	12.4	滑蛇	×	×	
119	床面	3.09	3.5	滑蛇	×	×	
120	覆土	3.50	4.4	片滑	×	×	

遺物番号	出土層位	最長 (cm)	重量 (g)	石質	条痕有無	折断有無	備考
121	床面	4.11	6.3	滑蛇	×	×	
122	床面	2.42	7.3	片滑	○	○	管玉未製品
123	床面	2.95	12.9	片滑	○	○	
124	床面	2.54	5.0	滑蛇	○	○	管玉未製品
125	床面	3.24	12.7	滑蛇	○	○	管玉未製品?
126	床面	3.84	10.5	片滑	×	×	
127	床面	2.80	7.7	滑蛇	○	○	管玉未製品
128	床面	3.10	8.8	滑蛇	×	○	管玉未製品
129	床面	2.60	6.7	滑蛇	×	○	管玉未製品
130	床面	3.15	6.6	滑蛇	×	×	
131	床面	4.00	10.0	滑蛇	○	×	管玉未製品
132	覆土	2.95	8.7	滑蛇	○	×	
133	覆土	2.53	4.6	滑蛇	×	○	

註) 石材 滑蛇…滑石質蛇紋岩 (やや硬質)
片滑…片岩質滑石 (やや軟質)

第IV章 検出遺構と出土遺物

第13表 1号竪穴住居出土土師器破片 (未実測) 集計表

器種	破片数 (大小区別なし)	破片総重量 (g)
甕	141	1,520.0
高坏	160	1,580.0
埴	37	335.4
坏	18	58.7
不明	222	539.7
合計	578	4,033.8

第14表 1号竪穴住居出土滑石削片 (未実測) 集計表

重量 最長	1g未満	1g以上 3g未満	3g以上 5g未満	5g以上 10g未満	10g以上	合計
	0.5cm未満	0	0	0	0	
0.5cm以上 1.0cm未満	48	1	0	0	0	49
1.0cm以上 2.0cm未満	90	22	1	0	0	113
2.0cm以上	11	40	15	6	1	73
合計	149	63	16	6	1	235

2号竪穴住居出土土師器観察表

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
1 第76図 P L 37	覆土 下層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.6 高 (7.4)	口 0 体 30 底 90	(形態)体…① a 底…① a (手法)①体…(中)ケズリ(不明)→不定ナデ (下)斜縦ケズリ→不定ユビナデ 底…斜横ケズリ→スリナデ ②体…(中〜下)斜横ケズリ→スリナデ 底…横ナデ	明赤褐色 砂粒少	・体部内面中位下半の器面が全周一様に荒れている
2 第76図 P L 37	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 — 底 — 高 (7.4)	坏 0 脚 100 裾 5	(形態)脚…① a ② b 裾…③ a (手法)①接…横ユビナデ(ユビオサエ?) 脚…斜横ケズリ→スリナデ 裾…横ナデ ②脚…(上)斜横ユビナデ (中)斜縦ユビナデ (下)横ユビナデ 裾…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・坏と脚の接合は凸型粘土塊の差込み(脚部側の残存良好)
3 第76図 P L 37	覆土 下層	甕 土師器	口 — 体 — 底 — 高 (15.2)	口 0 体 20 底 0	(形態)体…① a ② a (手法)①体…(中)斜ケズリ→斜横ヘラナデ→縦ミガキ (下)斜ケズリ→斜横ユビナデ→縦ミガキ ②体…(中〜下)斜横ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・体部内面下半に輪積み痕が明瞭に残存
4 第76図 P L 37	覆土 上層	埴 土師器	口 — 体 — 底 — 高 (5.1)	口 20 体 10 底 0	(形態)口…② a ④ a 体…② a (手法)①口縁…頸…横ナデ 体…(上)縦ケズリ→不定ナデ (中)斜横ケズリ ②口縁…頸…横ナデ→部分的にユビオサエ 体…(上〜中)斜横ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
5 第76図 P L 37	覆土 上層	甕 土師器	口 20.8復 体 — 底 — 高 (5.7)	口 10 体 ~5 底 0	(形態)口…① a ② b ③ c 体…① a ? (手法)①口縁…横ナデ 頸…横ナデ→部分的にユビオサエ 体…不定ナデ ②口縁…頸…横ナデ 体…斜ケズリ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
6 第76図 P L 37	覆土 上層	鉢 土師器	口 13.0復 体 — 底 — 高 (2.2)	口 10 体 0 底 0	(形態)口…① a ② b ③ a (手法)①口縁…横ナデ ②口縁…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
7 第76図 P L 37	覆土 上層	坏 土師器	口 14.0復 体 14.1復 底 — 高 (3.7)	口 5 体 10 底 0	(形態)口…① a 体…① a ② b (手法)①口縁…横ナデ 体…不定ナデ→斜横ミガキ ②口縁…横ナデ→斜ミガキ 体…不定ナデ→斜横ミガキ	灰褐色 砂粒含	・内面黒色処理
8 第76図 P L 37	覆土 上層	坏 土師器	口 14.7復 体 15.2復 底 — 高 (4.1)	口 15 体 10 底 0	(形態)口…① a 体…① a ② b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ→不定ナデ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ→斜横ミガキ	橙色 砂粒少	・口縁部の内外面にスス付着
9 第76図 P L 無	覆土 上層	坏 土師器	口 14.4復 体 13.4復 底 — 高 (2.8)	口 10 体 ~5 底 0	(形態)口…① b 体…① a ② b (手法)①口縁…体(上)…横ナデ 体…(中)不定ナデ ②口縁…横ナデ 体…(上〜中)横ナデ→斜ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・口縁〜体部の内面に部分的にスス付着
10 第76図 P L 37	覆土 上層	坏 土師器	口 13.8復 体 14.8復 底 — 高 (3.4)	口 10 体 10 底 10	(形態)口…① a 体…① a ② b (手法)①口縁…体(上)…横ナデ 体…(中)横ケズリ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ 体…横ナデ→斜横ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法)①外面 ②内面	色調胎土	備考
11 第76図 P L 37	覆土 上層	坏 土師器	口 13.7復 体 13.7復 底 — 高 (4.2)	口 10 体 ~5 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…不定ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
12 第76図 P L 37	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (3.0)	坏 0 脚 20 裾 0	(形態)脚…②a (手法)①脚…不定ナデ ②脚…斜横ユビナデ	にぶい 橙色 砂粒含	
13 第76図 P L 37	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (3.3)	坏 40 脚 0 裾 0	(形態)体…①a (手法)①体…縦ハケ(単位細かい) 接…縦ハケ→横ユビナデ ②体…不定ヘラナデ	にぶい 黄褐色 砂粒含	・坏部と脚部の 接合は坏部 側からの粘土 塊充填
14 第76図 P L 37	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 12.9 高 (3.3)	坏 0 脚 0 裾 80	(形態)裾…①a②b③b (手法)①裾…不定ナデ→縦ハケ→縦ミガキ (端部)不定ナデ→斜 ハケ→横ナデ ②裾…(上~下)不定ナデ→斜縦ハケ (端部)不定ナデ→斜 縦ハケ→横ナデ	明赤褐 色 砂粒含	
15 第76図 P L 37	覆土 上層	高坏 土師器	口 19.0復 体 11.8復 裾 — 高 (5.9)	坏 70 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③b 体…①a②a (手法)①口縁…横ナデ→斜ミガキ 接(口縁~体)…斜ユビナデ 体…斜横ケズリ→不定ナデ ②口縁…横ナデ→斜ミガキ 接(体~脚)…斜縦ケズリ→縦 ミガキ 体…不定ヘラナデ→不定ミガキ	橙色 砂粒少	・坏と脚の接 合は粘土塊充 填・体部内面 中心部に焼成 後、窪みあり

2号竈穴住居出土石(滑石・蛇紋岩以外)観察表

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)*	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面	備考
16 第77図 P L 36	床面	擦石?	長 30.7 幅 10.4 厚 8.8	4,580	粗粒 安山岩	①平…細長い隅丸長方形 断…不整 多角形 ②なし	①ほぼ全面摩滅・摩滅面は曲 面 ②③痕跡なし	
17 第77図 P L 36	床面	台石?	長 36.0 幅 29.6 厚 13.3	20,700	粗粒 安山岩	①平…歪んだ隅丸方形 断…歪んだ 長方形 ②なし	①ほぼ全面摩滅・摩滅面は平 坦 ②③痕跡なし	
18 第77図 P L 38	覆土	叩石	長 10.2 幅 8.3 厚 5.4	500	粗粒 安山岩	①平…不整楕円形 断…不整楕円形 ②なし	①②痕跡なし ③長軸方向の両側面中央に叩 き痕あり	
19 第77図 P L 37	覆土	?	長 21.5 幅 14.8 厚 11.7	5,900	粗粒 安山岩	①平…細長い多角形 断…正方形 ②なし	①打痕らしき痕跡?あり ②③痕跡なし	
20 第77図 P L 36	床面	叩石?	長 14.1 幅 12.8 厚 5.8	1,500	粗粒 安山岩	①平…不整円形 断…偏平な楕円形 ②なし	①ほぼ全面摩滅・摩滅面は平 坦 ②③痕跡なし	
21 第78図 P L 37	覆土	擦石?	長 21.0 幅 19.1 厚 11.9	5,740	粗粒 安山岩	①平…歪んだ三角形 断…不整多角 形 ②なし	①ほぼ全面摩滅・摩滅面は平 坦 ②③痕跡なし	
22 第78図 P L 38	覆土	擦石?	長 19.4 幅 18.2 厚 11.6	6,550	粗粒 安山岩	①平…不整多角形 断…不整長方形 ②なし	①中央付近摩滅・摩滅面は平 坦 ②③痕跡なし	
23 第78図 P L 37	覆土	?	長 31.2 幅 22.4 厚 11.6	12,000	粗粒 安山岩	①平…不整長方形 断…隅丸長方形 ②なし	①打痕らしき痕跡?あり ②③痕跡なし	
24 第78図 P L 38	覆土	?	長 23.5 幅 21.3 厚 16.0	7,800	粗粒 安山岩	①平…不整円形 断…円形 ②なし	①打痕らしき痕跡?あり ②③痕跡なし	
25 第79図 P L 37	覆土	台石?	長 31.9 幅 30.9 厚 19.7	27,100	粗粒 安山岩	①平…不整円形 断…隅丸長方形 ②なし	①ほぼ全面摩滅・摩滅面は平 坦・中央に打痕?が集中 ②③痕跡なし	・打痕の新古 は不明瞭
26 第79図 P L 38	覆土	?	長 20.8 幅 17.0 厚 13.0	6,000	粗粒 安山岩	①平…細長い隅丸三角形 断…不整 方形 ②なし	①中央付近に打痕らしき痕跡 あり ②③痕跡なし	

第IV章 検出遺構と出土遺物

2号竪穴住居出土石製模造品(製品・未製品)観察表

遺物番号	出土層位	種別	計測値(cm)	重量(g)	石質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察			
							①A面	②B面	③C面	④穿孔
27 第79図 P L 38	覆土	未製品 剣形	長 4.8 幅 1.6 厚 0.3	3.8	滑石	①細長い杏仁形 ②扁平で細長い槍形 やや反り上がる	①凹面状研磨・一部縁辺が割落ち、研磨面狭い・刃部意識	②凸面状研磨・一部縁辺が割落ちる	③平坦研磨・A面からの研磨のため、研磨面狭い	④未穿孔

2号竪穴住居出土木製品観察表

遺物番号	出土層位	種別 樹種	計測値(cm)	木取り	遺存状況	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察		
							①A面	②B面	③C面
28 第79図 P L 無	床下 柱穴	柱材 クリ	長(16.7) 幅(6.1) 厚(2.5)	板目	北東柱穴 内で直立	①一部欠損している が、長方形 ②細長い長方形	①割け面を部分的に調整・摩耗し年輪が浮きでている	②割け面を部分的に調整?	③部分的に調整・摩耗して端部が丸くなる
29 第79図 P L 37	床下 柱穴	柱材 クリ	長(30.8) 幅(8.8) 厚(3.5)	板目	北西柱穴 内で直立	①一部欠損している が、長方形 ②細長い長方形	①②割け面を部分的に調整	③部分的に調整・摩耗して端部が丸くなる	

第15表 2号竪穴住居出土土師器破片(未実測)集計表

器種	破片数 大小区別なし	破片総重量 (g)	埴	6	93.6
			坏	7	27.4
甕	63	942.5	不明	59	200.5
高坏	68	580.0	合計	203	1,844.0

3号竪穴住居出土土師器観察表

遺物番号	出土層位	器種 種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
1 第80図 P L 39	床面	埴 土師器	口 14.2 体 14.8 底 0.0 高 17.4	口 60 体 95 底 100	(形態)口…①a ②a ③b ④a 体…①b ②b 底…①a (手法)①口縁…横ナデ→斜横ミガキ 体…(上)スリナデ→斜ミガキ (中)不定ナデ (下)斜横ケズリ 底…不定ケズリ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)不定ナデ (中～下)斜ユビナデ 底…不定ユビナデ	橙色 砂粒含	・口縁～底部 の外面に部分的にスス付着
2 第80図 P L 39	床面	甕 土師器	口 11.4 体 11.7 底 2.8 高 13.5	口 100 体 90 底 100	(形態)口…①a ②b ③a ④a 体…①a ②b ③b 底…①b (手法)①口唇…横ナデ 口縁…斜横ケズリ→スリナデ 頸…スリナデ 体…(上～中)斜縦ケズリ→スリナデ (下)斜横ケズリ 底…不定ナデ ②口縁…横ナデ 頸…横ユビナデ→ユビオサエ 体…(上)スリナデ (中～下)斜横ヘラナデ 底…斜ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・体部に焼成 後穿孔あり
3 第80図 P L 39	床面	鉢 土師器	口 14.0復 体 14.2復 底 7.2 高 8.4	口 20 体 40 底 90	(形態)口…①a 体…①b ②b 底…①c (手法)①口縁…横ナデ→斜ミガキ 頸…横ナデ 体…(上)横ナデ (中)不定ヘラナデ (下)斜横ケズリ 底…不定ケズリ ②口縁…横ナデ→斜ミガキ 頸…横ナデ 体…斜横ヘラナデ 底…不定ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・口縁～底部 の内外面に全体的に薄くスス付着
4 第80図 P L 39	床面	埴 土師器	口 8.5 体 — 底 — 高 (4.0)	口 70 体 0 底 0	(形態)口…①a ②b ③a (手法)①口縁…(上)横ナデ (中～下)不定ナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・内外面に部分的にスス付着
5 第80図 P L 39	床面	甕 土師器	口 15.8 体 23.4 底 6.8 高 25.8	口 90 体 90 底 100	(形態)口…①a ②b ③a 体…①a ②a 底…①a ②b (手法)①口縁…横ナデ 体…(上)斜縦ケズリ (中)斜ケズリ (下)斜横ケズリ 底…不定ケズリ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ 底…不定ヘラナデ→斜縦ユビナデ	にぶい 黄褐色 砂粒多	・口縁～底部 の内外面とも全体的にスス付着
6 第80図 P L 39	床面	高坏 土師器	口 18.7 体 11.5 裾 15.8 高 18.0	坏 100 脚 100 裾 90	(形態)口…①a ②b ③b 体…①a ②b 脚…①b ②a 裾…①a ②b ③b (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ケズリ 脚…スリナデ→縦ミガキ 裾…横ユビナデ ②口縁…斜横ユビナデ→縦ミガキ 体…スリナデ→縦ミガキ 脚…縦ユビナデ 裾…(上)斜横ユビナデ (下)横ナデ	橙色 砂粒少	・体部内面は放射状ミガキ ・口縁部、裾端部の外面と体部の内面にスス付着

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調胎土	備考
7 第80図 P L 39	床面	高坏 土師器	口 19.8 体 9.7 裾 15.5復 高 18.1	坏 95 脚 100 裾 70	(形態)口…①a②b③b 体…①b②b 脚…①b②a 裾…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ナデ→部分的にユビオサエ 脚…不定ナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ 脚…縦ユビナデ 裾…横ナデ	にぶい 黄褐色 砂粒少	・体部内面に 薫束が付着
8 第80図 P L 39	床面	高坏 土師器	口 18.3 体 12.2 裾 15.0 高 18.2	坏 100 脚 100 裾 100	(形態)口…①a②b③b 体…①b②b 脚…①b②a 裾…①a②a③a (手法)①口縁…横ナデ(部分的に斜ハケ)→斜横ミガキ→部分的にユビオサエ 体…不定ケズリ 接…縦ケズリ 脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…観察不可 脚…斜縦ユビナデ 裾…横ナデ	明赤褐 色 砂粒少	・脚部内面は しぼり込み
9 第81図 P L 39	床面	高坏 土師器	口 19.8 体 11.5 脚 13.8 裾 18.6	坏 95 脚 100 裾 100	(形態)口…①a②b③a 体…①a②b 脚…①b②b 裾…①b②a③a (手法)①口縁…(上)横ナデ(下)不定ナデ 体…不定ケズリ 脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ ②口縁…横ナデ→斜ミガキ(下)不定ナデ→斜ミガキ 体…スリナデ→斜ミガキ 脚…縦ユビナデ 裾…横ナデ	灰黄褐 色 砂粒少	・口縁部内外 面、体部の内 面にスス附着
10 第81図 P L 39	床面	高坏 土師器	口 20.8 体 12.4 裾 14.0 高 18.2	坏 100 脚 100 裾 80	(形態)口…①a②b③b 体…①b②c 脚…①b②b 裾…①a②a③a (手法)①口縁…(上)横ナデ→斜縦ミガキ(下)スリナデ→斜縦ミガキ 体…斜横ケズリ 脚…縦ケズリ→スリナデ→横ミガキ 裾…(上)横ハケ状ヘラナデ→斜横ミガキ(下)横ナデ ②口縁…(上)横ナデ→斜横ミガキ(下)斜ハケ状ヘラナデ→斜横ミガキ 体…不定ナデ→斜横ミガキ 脚…縦ユビナデ 裾…横ナデ(部分的にヘラ痕あり)	明赤褐 色 砂粒多	・口縁部外面 全体と体部内 面全面にスス 附着
11 第81図 P L 39	覆土 下層	甗 土師器	口 — 体 — 底 8.8復 高 (4.9)	口 0 体 5 底 10	(形態)底…①a (手法)①体…(下)斜縦ケズリ→斜縦ハケ状ヘラナデ ②体…(下)斜縦ハケ状ヘラナデ 底…横ケズリ	灰褐色 砂粒少	・体部内外面 ともスス附着
12 第81図 P L 39	覆土 下層	? (台部) 土師器	底 11.2復 高 (2.9)	台 ?	(形態)台…直線的に開く (手法)①台…スリナデ ②台…横ハケ→横ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・器種判断で きず
13 第81図 P L 39	覆土 下層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (7.4)	坏 0 脚 30 裾 0	(形態)脚…①b②b (手法)①脚…不定ナデ→縦ミガキ ②脚…(差し込み部)ユビナデ(不明)(上)しぼり込み→ユビナデ(不明)(下)斜横ハケ状ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
14 第81図 P L 無	覆土 下層	高坏 土師器	口 16.1復 体 — 裾 — 高 (2.6)	坏 ~5 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a (手法)①口縁…横ナデ→部分的に縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ	赤褐色 砂粒含	
15 第81図 P L 39	覆土 下層	高坏 土師器	口 17.2 体 11.0 裾 — 高 (9.6)	坏 30 脚 40 裾 0	(形態)口…①a②a③b 体…①b②b (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…ケズリ(不明)→不定ナデ 脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…不定ヘラナデ→不定ミガキ	暗褐色 砂粒含	・坏部と脚部 の接合は粘土 塊差し込み脚 部の形態不明
16 第81図 P L 39	覆土 上層	甗 土師器	口 10.2復 体 11.4復 底 — 高 9.0	口 40 体 60 底 100	(形態)口…①a 体…①a②b 底…①a (手法)①口縁…頸…横ナデ 体…(上)横ナデ(中~下)不定ナデ 底…不定ナデ ②口縁…頸…横ナデ 体…斜横ヘラナデ 底…斜横ヘラナデ→部分的にユビオサエ?	にぶい 赤褐色 砂粒含	・体部外面中 位には全周、 内面には部分 的にスス附着
17 第81図 P L 39	覆土 上層	埴 土師器	口 7.7復 体 9.3復 底 — 高 (7.4)	口 40 体 20 底 0	(形態)口…①a②a③b④d 体…①a②b (手法)①口…横ナデ 頸…縦ハケ 体…(上)縦ハケ→スリナデ(中)不定ナデ→(部分的にタキ?) ②口縁…頸…横ナデ 体…(上)斜ユビナデ→ユビオサエ(中)斜横ヘラナデ	灰褐色 砂粒含	・口縁部~体 部の内外面全 体にスス附着

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種 種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法)①外面 ②内面	色調 胎土	備考
18 第81図 P L 39	覆土 上層	埴 土師器	口 10.2復 体 — 底 — 高 (4.0)	口 20 体 0 底 0	(形態)口…①a②b③b④a (手法)①口縁…(上～中)横ナデ→斜縦ミガキ (下)横ナデ ②口縁…(上)横ナデ→斜縦ミガキ (中～下)不定ナデ→斜縦ミガキ	橙色 砂粒少	・内外面部分的にスス付着
19 第81図 P L 39	覆土 上層	埴 土師器	口 — 体 8.4 底 5.2 高 (2.4)	口 0 体 5 底 95	(形態)体…①b②c 底…①d (手法)①体…斜横ケズリ 底…不定ナデ→(中心のみ)不定ケズリ ②体～底…不定ユビナデ	灰褐色 砂粒多	
20 第81図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 21.0復 体 — 底 — 高 (5.3)	口 10 体 ～5 底 0	(形態)口…①a②b③b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜縦ケズリ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ	にぶい 黄褐色 砂粒多	・内外面スス付着
21 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 18.4復 体 — 底 — 高 (3.7)	口 10 体 0 底 0	(形態)口…①a②b③c (手法)①口縁…横ナデ ②口縁…横ナデ	明赤褐色 砂粒少	・内外面スス付着
22 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 21.4復 体 18.0復 底 — 高 (4.3)	口 15 体 ～5 底 0	(形態)口…①a②a③c (手法)①口縁…体…横ナデ ②口縁…体…横ナデ	にぶい 黄褐色 砂粒含	
23 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 19.0復 体 — 底 — 高 (6.1)	口 30 体 ～5 底 0	(形態)口…①a②a③a (手法)①口縁…横ナデ 頸…体…不定ナデ ②口縁…横ナデ 頸…不定ナデ 体…斜横ユビナデ	橙色 砂粒含	・内外面スス付着
24 第82図 P L 40	覆土 上層	鉢 土師器	口 12.6復 体 — 底 — 高 (2.4)	口 20 体 0 底 0	(形態)口…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ ②口縁…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
25 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 8.1復 高 (1.6)	口 0 体 5 底 20	(形態)底…①a②b (手法)①体…斜横ケズリ 底…ケズリ(不明) ②体～底…不定ケズリ	灰黄褐色 砂粒多	・内面スス付着
26 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.8復 高 (1.9)	口 0 体 ～5 底 10	(形態)底…①a②a (手法)①体…斜縦ケズリ→不定ナデ 底…不定ナデ ②体～底…不定ヘラナデ	にぶい 黄褐色 砂粒多	・内面スス付着
27 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 3.1復 高 (3.2)	口 0 体 5 底 80	(形態)体…①a 底…①b②b (手法)①体…斜横ケズリ 底…不定ナデ ②体～底…スリナデ	にぶい 黄褐色 砂粒多	・外面スス付着
28 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 — 高 (3.3)	口 0 体 10 底 100	(形態)体…①a 底…①a②b (手法)①体～底…不定ケズリ ②体…斜横ヘラナデ 底…斜横ヘラナデ→不定ユビナデ	橙色 砂粒含	・底部の範囲は不明瞭 ・外面部分的スス付着
29 第82図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	口 — 体 — 底 6.6復 高 (2.5)	口 0 体 ～5 底 50	(形態)体…①a 底…①a②a (手法)①体…縦ハケ (底部付近)斜ユビナデ 底…一定ケズリ ②体～底…不定ハケ	灰黄褐色 砂粒多	
30 第82図 P L 無	覆土 上層	高 坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (3.7)	坏 0 脚 10 裾 ～5	(形態)脚…②b (手法)①脚…スリナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ ②脚…不定ユビナデ 裾…横ナデ	赤灰色 砂粒少	・外面部分的スス付着
31 第82図 P L 40	覆土 上層	台付甕 土師器	口 — 体 — 底 — 高 (4.7)	口 0 体 0 底 0 脚 50	(形態)脚(台?)…直線的に下方に開く (手法)①脚(台?)…縦ケズリ→不定ナデ ②脚(台?)…斜横ヘラナデ(棒状)→横ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	
32 第82図 P L 無	覆土 上層	高 坏 土師器	口 18.0復 体 11.1復 裾 — 高 (4.2)	坏 10 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ→部分的に斜横ヘラナデ 体…斜横ヘラナデ→縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調 胎土	備考
33 第82図 PL無	覆土 上層	高坏 土師器	口 18.6復 体 — 裾 — 高 (3.1)	坏 10 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ→斜ミガキ	褐色 砂粒少	・内外面部分的スス付着
34 第82図 PL無	覆土 上層	高坏 土師器	口 17.9復 体 — 裾 — 高 (3.2)	坏 20 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
35 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 19.0復 体 13.7復 裾 — 高 (5.5)	坏 20 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③a 体…②a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…斜横ヘラナデ→斜縦ミガキ	明赤褐色 砂粒含	
36 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 13.0復 高 (10.8)	坏 30 脚 95 裾 50	(形態)脚…①b②d 裾…①a②b③a (手法)①体…斜縦ケズリ→縦ミガキ 脚…縦ケズリ→スリナデ→部分的に斜ミガキ 裾…横ナデ→縦ミガキ ②体…不定ヘラナデ 脚…縦ナデ(棒状) 裾…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・内外面部分的スス付着
37 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (5.6)	坏 0 脚 90 裾 0	(形態)脚…②a (手法)①脚…スリナデ→縦ミガキ ②脚…斜縦ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
38 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (7.8)	坏 0 脚 80 裾 0	(形態)脚…②c (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ ②脚…(差込部)横ヘラナデ (上~中)縦ユビナデ (下)横ヘラナデ→縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・坏との接合部分が明瞭凸状粘土塊の差し込み
39 第82図 PL無	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (3.8)	坏 0 脚 15 裾 ~5	(形態)脚…②a (手法)①脚…不定ナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ ②脚…不定ヘラケズリ 裾…横ナデ	灰褐色 砂粒含	・内外面部分的スス付着
40 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 — 高 (5.0)	坏 0 脚 30 裾 0	(形態)脚…②b (手法)①脚…縦ケズリ→スリナデ→縦ミガキ ②脚…横ユビナデ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・内面のナデ痕が顕著
41 第82図 PL無	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 12.1復 高 (2.2)	坏 0 脚 ~5 裾 20	(形態)裾…①a②b (手法)①脚…不定ヘラナデ 裾…不定ヘラナデ→斜縦ミガキ ②脚…横ヘラナデ 裾…横ナデ	赤灰色 砂粒含	
42 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 10.8復 高 (2.1)	坏 0 脚 0 裾 40	(形態)裾…①a②a (手法)①裾…(上)不定ケズリ→不定ナデ (下)横ナデ→斜縦ミガキ→部分的にユビオサエ ②裾…不定ヘラナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・外面部分的にスス付着
43 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 12.6復 高 (2.2)	坏 0 脚 0 裾 10	(形態)裾…①a②b (手法)①裾…横ナデ→縦ミガキ ②裾…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
44 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 13.0復 高 (2.2)	坏 0 脚 ~5 裾 20	(形態)脚…①a②a (手法)①脚…斜ケズリ→不定ナデ→縦ミガキ 裾…横ナデ→斜縦ミガキ ②脚…斜横ヘラナデ 裾…横ナデ	にぶい 赤褐色 砂粒少	
45 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 — 体 — 裾 12.3 高 (2.0)	坏 0 脚 ~5 裾 60	(形態)脚…①a②b (手法)①脚…不明 裾…不定ヘラナデ ②脚…スリナデ→縦ミガキ→部分的にユビオサエ 裾…横ナデ→部分的にユビオサエ	にぶい 赤褐色 砂粒少	・内外面部分的にスス付着
46 第82図 PL40	覆土 上層	高坏 土師器	口 18.0復 体 9.9復 裾 — 高 (6.1)	坏 15 脚 0 裾 0	(形態)口…①a②a③b 体…①b②b (手法)①口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…斜横ケズリ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…摩滅し不明	にぶい 赤褐色 砂粒少	
47 第82図 PL40	覆土 上層	坏 土師器	口 13.6 体 7.5復 底 — 高 (4.3)	口 80 体 20 底 ~5	(形態)体…②a (手法)①口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…不定ケズリ 底…不明 ②口縁…横ナデ→縦ミガキ 体…スリナデ 底…スリナデ→ミガキ(不明)	橙色 砂粒少	・体部外面スス付着

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	器種別	法量 (cm)	残存 (%)	形態・手法の特徴 (手法) ①外面 ②内面	色調胎土	備考
48 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 13.2復 体 13.7復 底 — 高 (6.0)	口 30 体 40 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b③a (手法)①口縁…横ナデ 体…(上～中)ケズリ(不明)→不定ナデ (下)不定ケズリ ②口縁…斜横ヘラナデ→斜横ミガキ 体…横ヘラナデ	にぶい 橙色 砂粒含	
49 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 12.5復 体 12.8復 底 — 高 (4.5)	口 20 体 30 底 0	(形態)口…①b 体…①b②b③a (手法)①口縁…横ナデ 体…(上)横ナデ (中～下)斜横ケズリ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ	橙色 砂粒含	
50 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 14.4復 体 13.7復 底 — 高 (3.5)	口 10 体 5 底 0	(形態)口…①b 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 体…不定ナデ→縦ミガキ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ→斜縦ミガキ	にぶい 橙色 砂粒少	・スス付着
51 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 14.0復 体 13.3復 底 — 高 (3.9)	口 15 体 10 底 0	(形態)口…①c 体…①a②b③b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ→斜横ミガキ	灰黄褐 色 砂粒含	・外面スス付 着
52 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 13.0復 体 13.2復 底 — 高 (3.2)	口 10 体 5 底 0	(形態)口…①a 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ→斜縦ミガキ 体…横ナデ→斜横ミガキ	橙色 砂粒含	
53 第83図 P L 無	覆土 上層	坏 土師器	口 14.5復 体 13.9復 底 — 高 (2.6)	口 5 体 10 底 0	(形態)口…①c 体…①a②b (手法)①口縁…横ナデ→斜横ケズリ 体…斜横ケズリ ②口縁…横ナデ 体…スリナデ→縦ミガキ	にぶい 赤褐色 砂粒含	・外面スス付 着
54 第83図 P L 40	覆土 上層	坏 土師器	口 16.0復 体 16.1復 底 — 高 (3.2)	口 10 体 5 底 0	(形態)口…①b 体…①b②b (手法)①口縁…横ナデ 体…横ナデ→斜縦ミガキ ②口縁…横ナデ 体…斜横ヘラナデ→斜縦ミガキ	赤灰色 砂粒少	・内外面スス 付着
55 第83図 P L 40	覆土 上層	甕 土師器	破片のため 法量不明	口 0 体 5 底 0	(形態)体…不明 (手法)①体…縦ハケ→部分的にユビナデ ②体…横ハケ	にぶい 赤褐色 砂粒少	

3号竪穴住居出土石(滑石・蛇紋岩以外)観察表

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面	備考
56 第83図 P L 41	床面	台石?	長 19.0 幅 15.2 厚 10.0	3,730	角閃石 安山岩	①平…不整五角形 断…細長い三角 形 ②なし	①打痕等は観察できないが全 体に扁平 ②③観察できず	
57 第83図 P L 41	床面	台石?	長 20.4 幅 13.5 厚 10.5	3,620	粗粒 安山岩	①平…楕円形 断…隅丸三角形 ②なし	①②観察できず ③観察できず	
58 第83図 P L 41	床面	砥石?	長 14.1 幅 9.4 厚 4.7	910	粗粒 安山岩	①平…不整五角形 断…いびつな長 方形 ②なし	①②打痕等は観察できないが 扁平な面がいくつかある ③数箇所が摩滅	・人の手に丁 度納まるサイ ズ
59 第84図 P L 41	床面	台石?	長 17.0 幅 13.5 厚 9.2	2,230	粗粒 安山岩	①平…不整半円形 断…楕円形 ②なし	①2箇所打痕あり ②全体に摩滅している ③数箇所凹面あり	・割れ口の新 古は不明
60 第84図 P L 41	覆土 下層	叩石?	長 6.9 幅 5.2 厚 3.1	160	粗粒 安山岩	①平…不整円形 断…不整楕円形 ②なし	①縁辺寄りに打痕?あり ②③観察できず	
61 第84図 P L 41	覆土 下層	擦石?	長 11.2 幅 6.4 厚 3.4	350	粗粒 安山岩	①平…細長い不整多角形 断…扁平 な多角形 ②なし	①一部摩滅 ②③観察できず	
62 第84図 P L 41	覆土 下層	?	長 10.1 幅 6.4 厚 5.8	460	粗粒 安山岩	①平…細長い隅丸長方形 断…不整 台形 ②なし	①縁辺寄りに数箇所打痕あり ②観察できず ③数箇所摩滅	
63 第84図 P L 41	覆土 下層	擦石?	長 15.3 幅 7.2 厚 6.1	900	角閃石 安山岩	①平…細長い隅丸長方形 断…隅丸 台形 ②なし	①ほぼ全体的に摩滅 ②観察できず ③数箇所摩滅?	

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態・調整の特徴 ①形態 ②調整	使用痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面	備考
64 第84図 P L 41	覆土	?	長 9.7 幅 7.5 厚 5.5	520	粗粒 安山岩	①平…不整多角形 断…不整円形 ②なし	①縁辺寄りに打痕?あり ②③観察できず	
65 第84図 P L 41	覆土	?	長 9.4 幅 9.0 厚 6.8	660	粗粒 安山岩	①平…円形 断…不整円形 ②なし	①一部摩滅 ②③観察できず	
66 第84図 P L 41	覆土	?	長 9.9 幅 6.3 厚 4.8	350	粗粒 安山岩	①平…不整隅丸長方形 断…隅丸台形 ②なし	①全面摩滅 ②ほぼ全面摩滅 ③数箇所摩滅	
67 第84図 P L 41	覆土	擦石?	長 8.9 幅 7.2 厚 3.8	320	粗粒 安山岩	①平…円形 断…偏平な楕円形 ②なし	①②ほぼ全面摩滅 ③観察できず	
68 第84図 P L 41	覆土	擦石?	長 9.0 幅 8.2 厚 2.6	280	粗粒 安山岩	①平…不整円形 断…不整隅丸長方形 (一方にやや反る) ②なし	①凹面を呈すが、使用痕不明 ②凸面を呈すが、使用痕不明 ③観察できず	・割れ口の新古は不明

3号竪穴住居出土剥片観察表 (第85図、P L 41)

遺物番号	出土層位	最長 (cm)	重量 (g)	石質	条痕有無	折断有無	備考
69	床面	7.15	94.4	片滑	×	×	
70	床面	4.80	56.7	滑蛇	×	×	剣形未製品?
71	床面	8.71	10.5	滑蛇	×	×	剣形未製品?
72	床面	5.20	24.3	滑蛇	○	×	
73	床面	3.39	11.8	片滑	×	×	
74	床面	4.48	8.3	滑蛇	×	×	
75	床面	3.95	9.4	滑蛇	×	○	
76	覆土	4.66	9.9	滑蛇	×	○	
77	覆土	3.95	5.6	片滑	×	×	
78	床面	4.13	5.3	片滑	○	○	
79	覆土	3.80	5.2	滑蛇	×	×	
80	覆土	2.80	5.2	片滑	×	×	管玉未製品?
81	覆土	3.42	6.8	滑蛇	○	○	
82	覆土	2.35	2.4	滑蛇	○	×	
83	覆土	4.10	1.8	滑蛇	×	×	
84	覆土	2.00	1.4	滑蛇	×	×	
85	覆土	1.71	1.7	片滑	×	×	
86	床面	2.67	1.8	滑蛇	○	×	
87	覆土	2.81	1.5	滑蛇	×	○	
88	覆土	2.67	1.3	片滑	×	×	
89	覆土	2.44	2.8	片滑	○	○	
90	覆土	2.15	2.0	滑蛇	○	×	
91	覆土	3.58	11.1	頁岩	×	×	滑石系でない

第16表 3号竪穴住居出土土師器破片 (未実測) 集計表

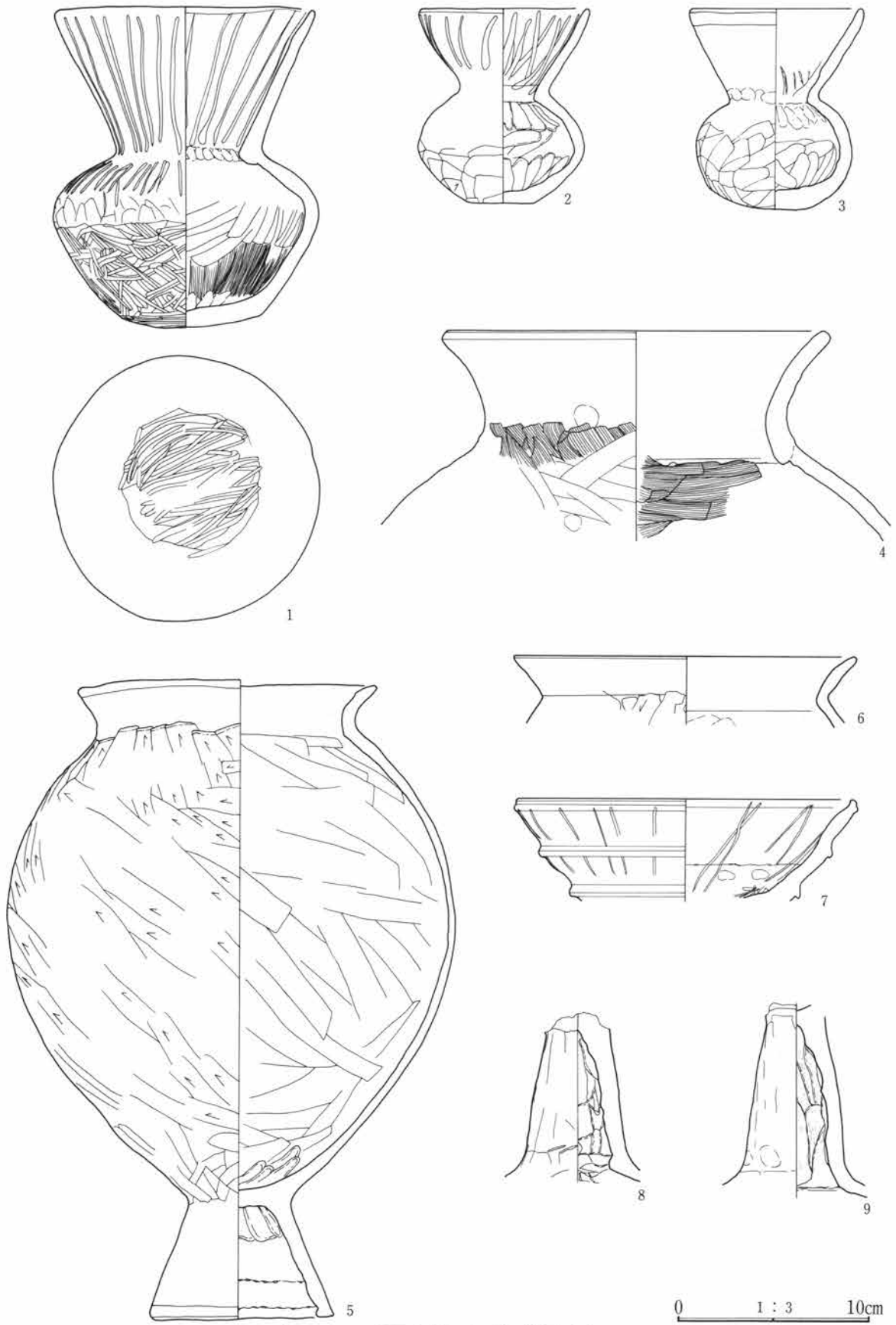
器種	破片数 (大小区別なし)	破片総重量 (g)
甕	222	2,830.0
高環	237	2,000.0
埴	32	248.9
坏	6	19.3
不明	216	670.0
合計	713	5,768.2

3号竪穴住居出土石製模造品(製品・未製品)観察表

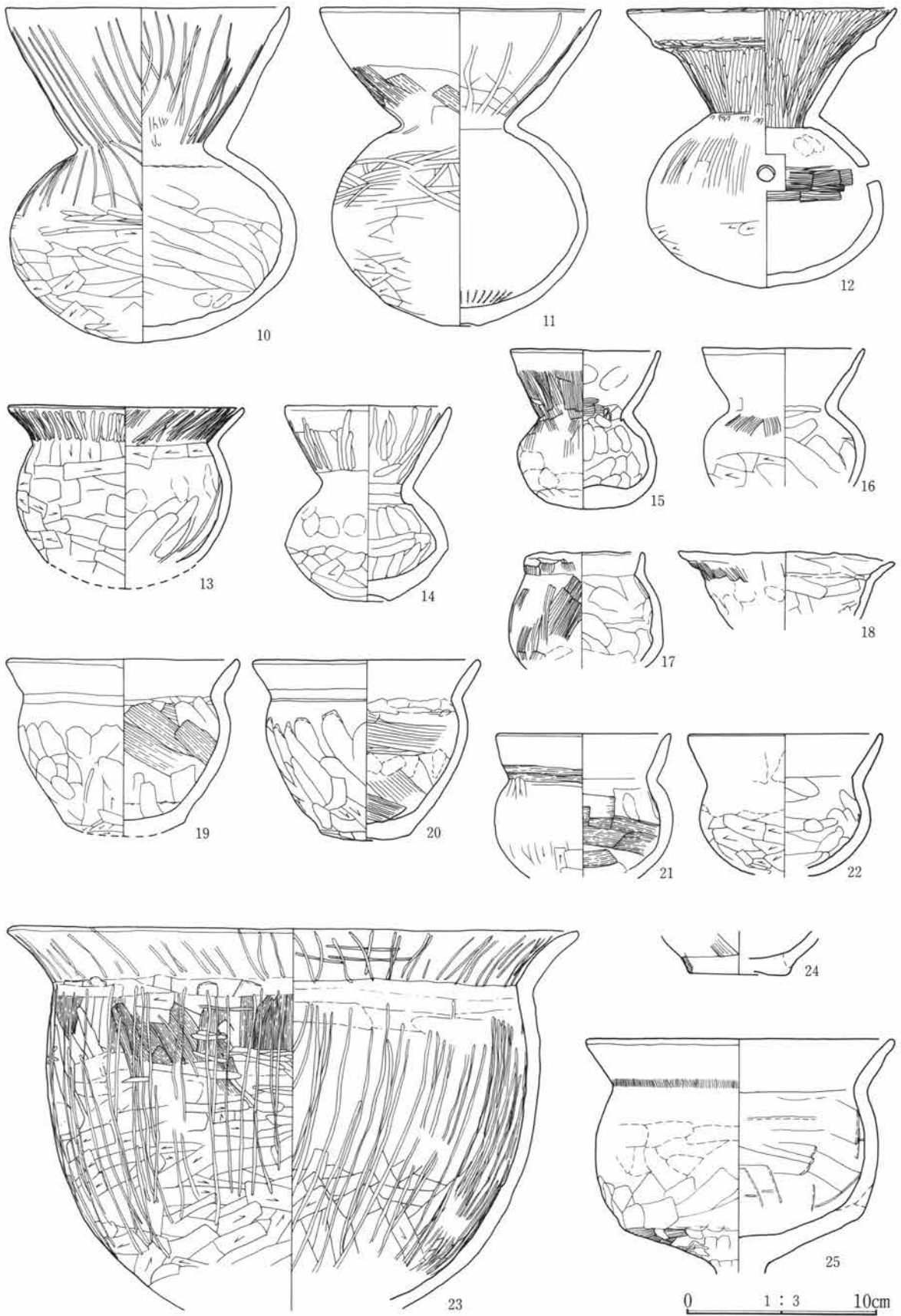
遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の特徴 ①A面 ②B面 ③側面 ④穿孔	備考
92 第85図 巻頭4	覆土 下層	製品 白玉	長 0.45 短 0.40 厚 0.32	0.09	滑石質 蛇紋岩	①円形 ②歪んだ算盤玉形	①②偏平に研磨 ③全面を2方向以上から研磨 ④径0.2cmの穿孔済 備考参照	・B面から穿孔し始め、A面で仕上げ

3号竪穴住居出土ガラス製品観察表

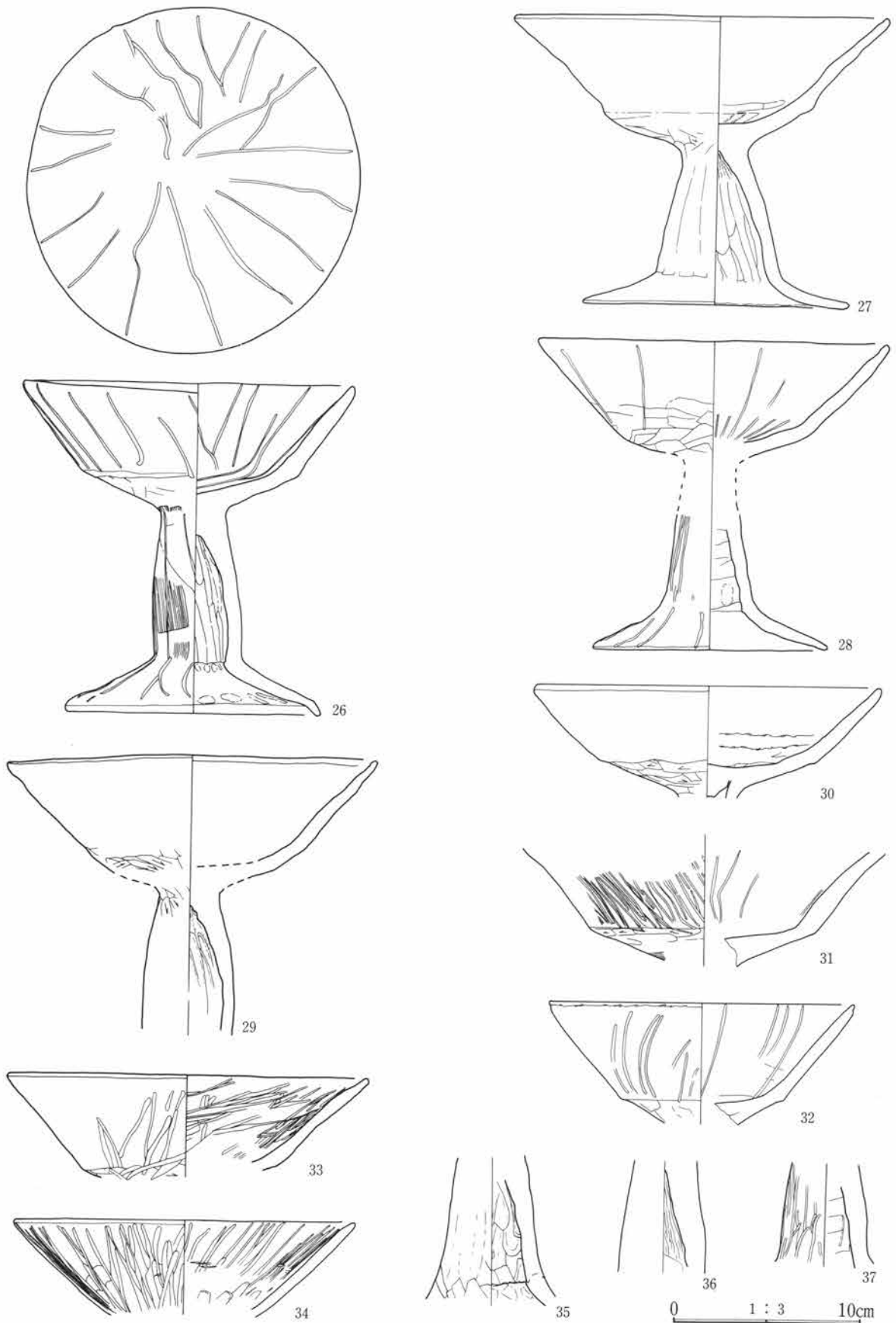
遺物番号	出土層位	種類	計測値 (cm)	重量 (g)	石質	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の特徴 ①A面 ②B面 ③側面 ④穿孔	備考
93 第85図 巻頭4	覆土 下層	製品 小玉	長 0.45 短 0.40 厚 0.30	0.07	淡緑色	①不整円形 ②潰れた球形	①②③顕著な加工痕なし ④径0.2cmの孔あり	



第65図 1号竖穴住居出土遺物図(1)

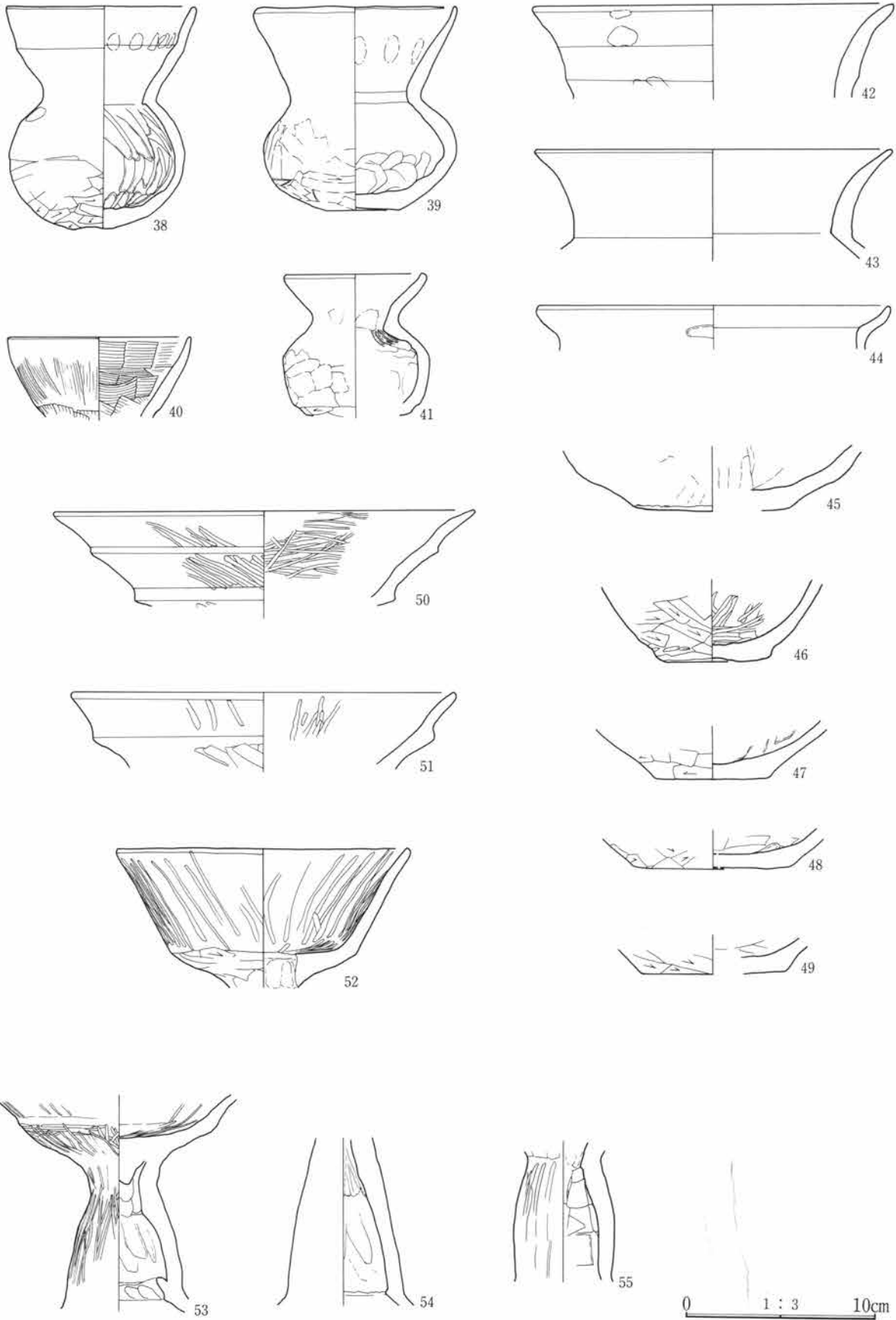


第66図 1号竪穴住居出土遺物図(2)

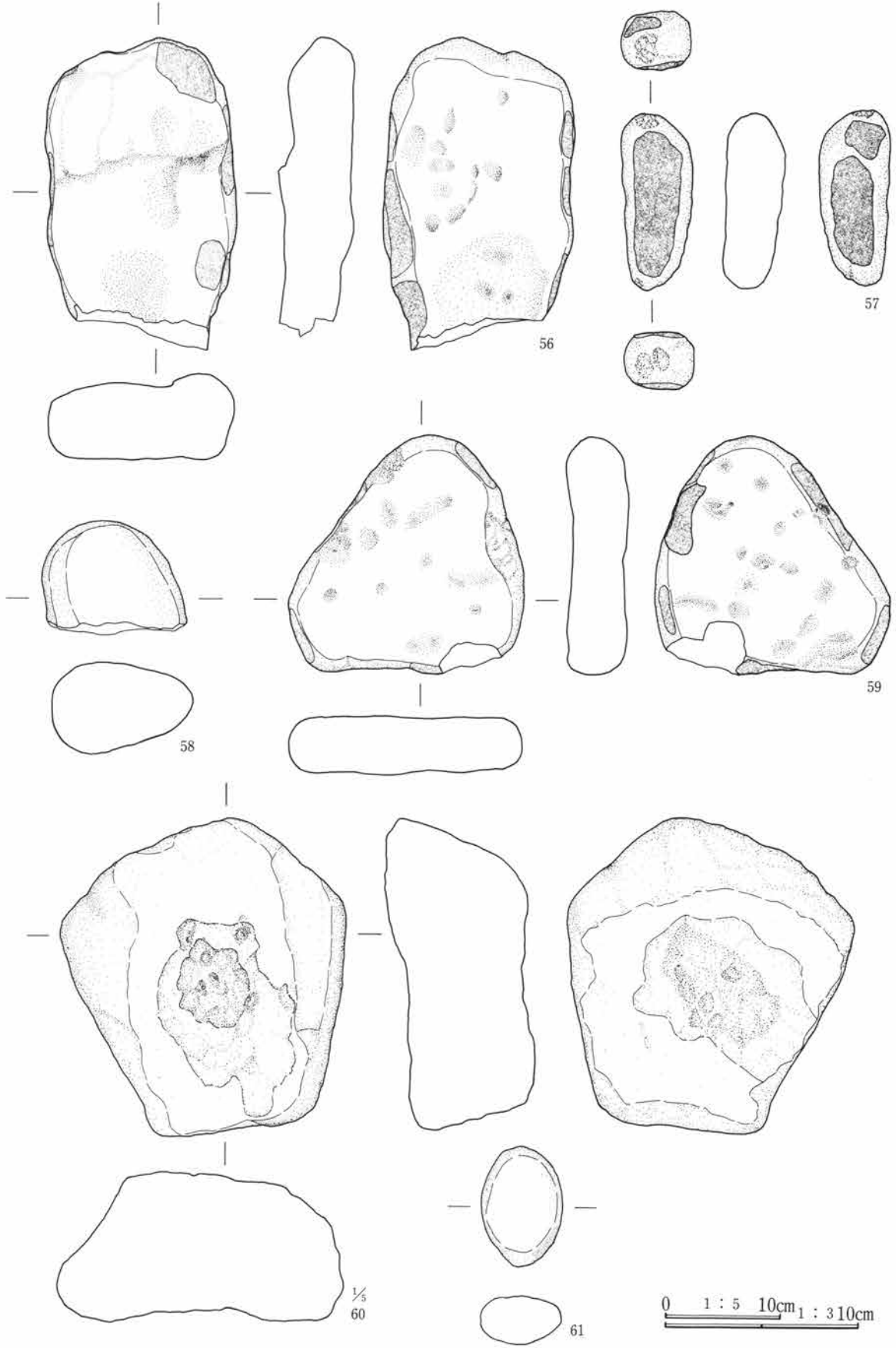


第67図 1号竪穴住居出土遺物図 (3)

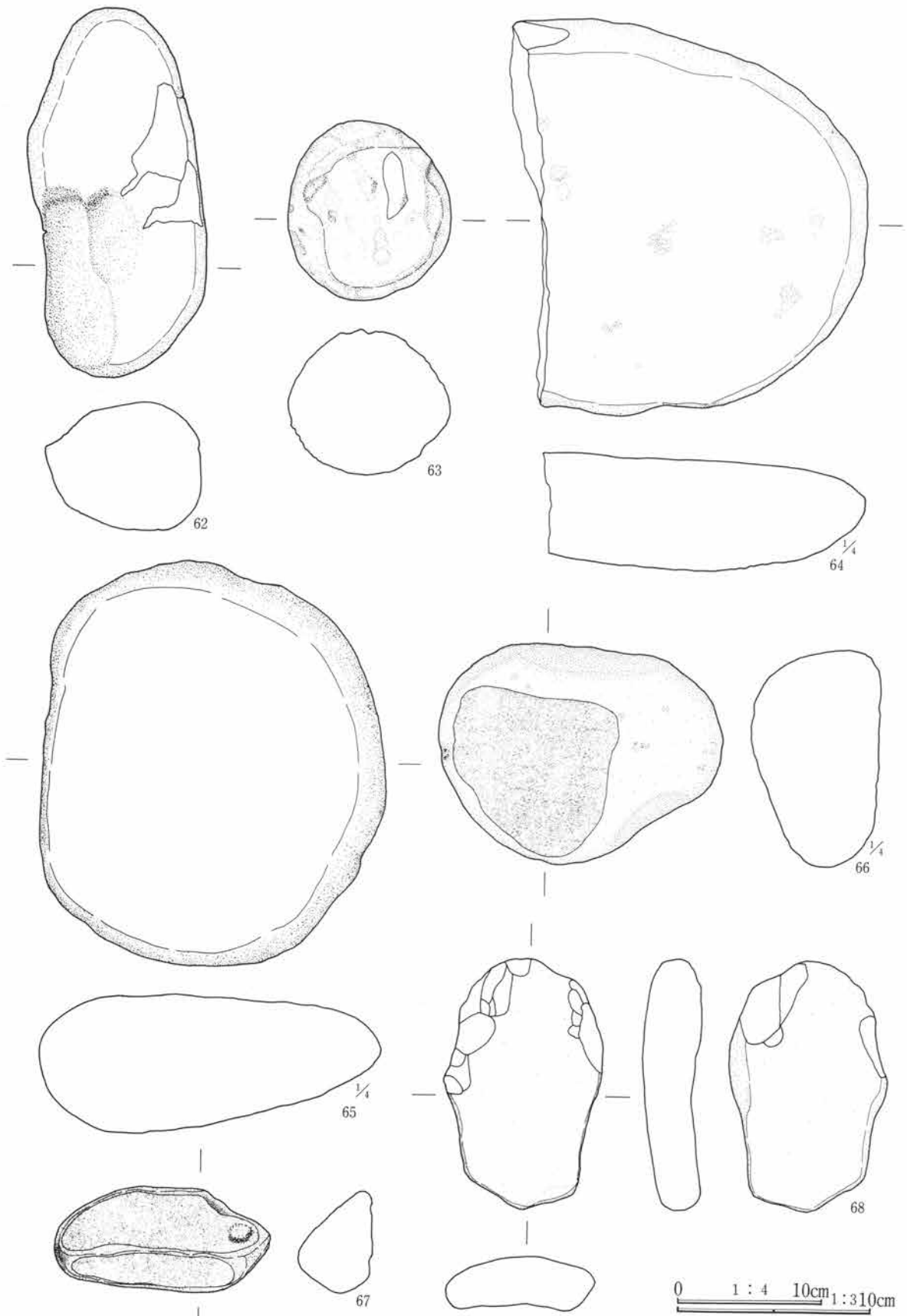
第7節 V面の検出遺構と出土遺物



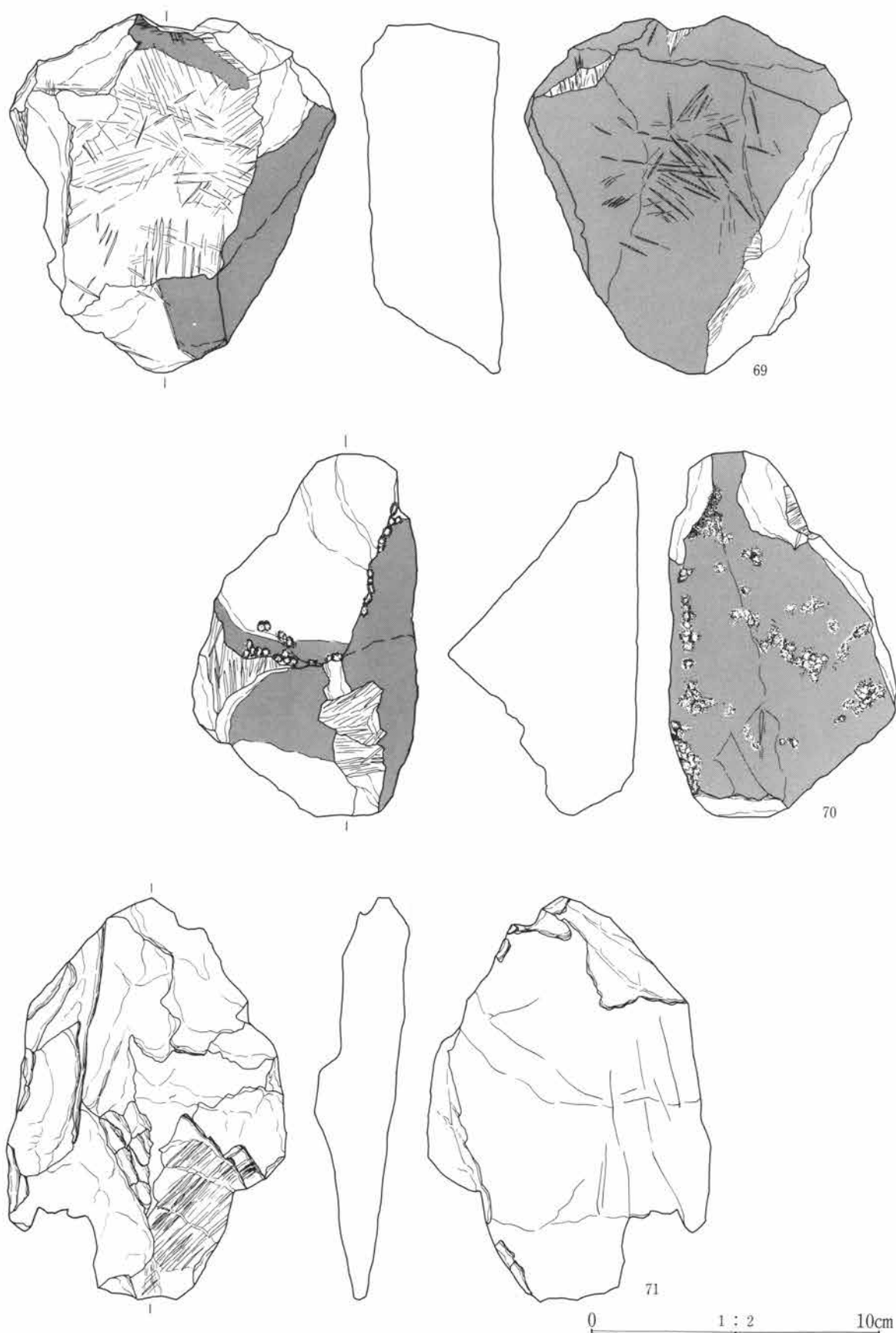
第68図 1号竖穴住居出土遺物図(4)



第69図 1号竖穴住居出土遺物図(5)

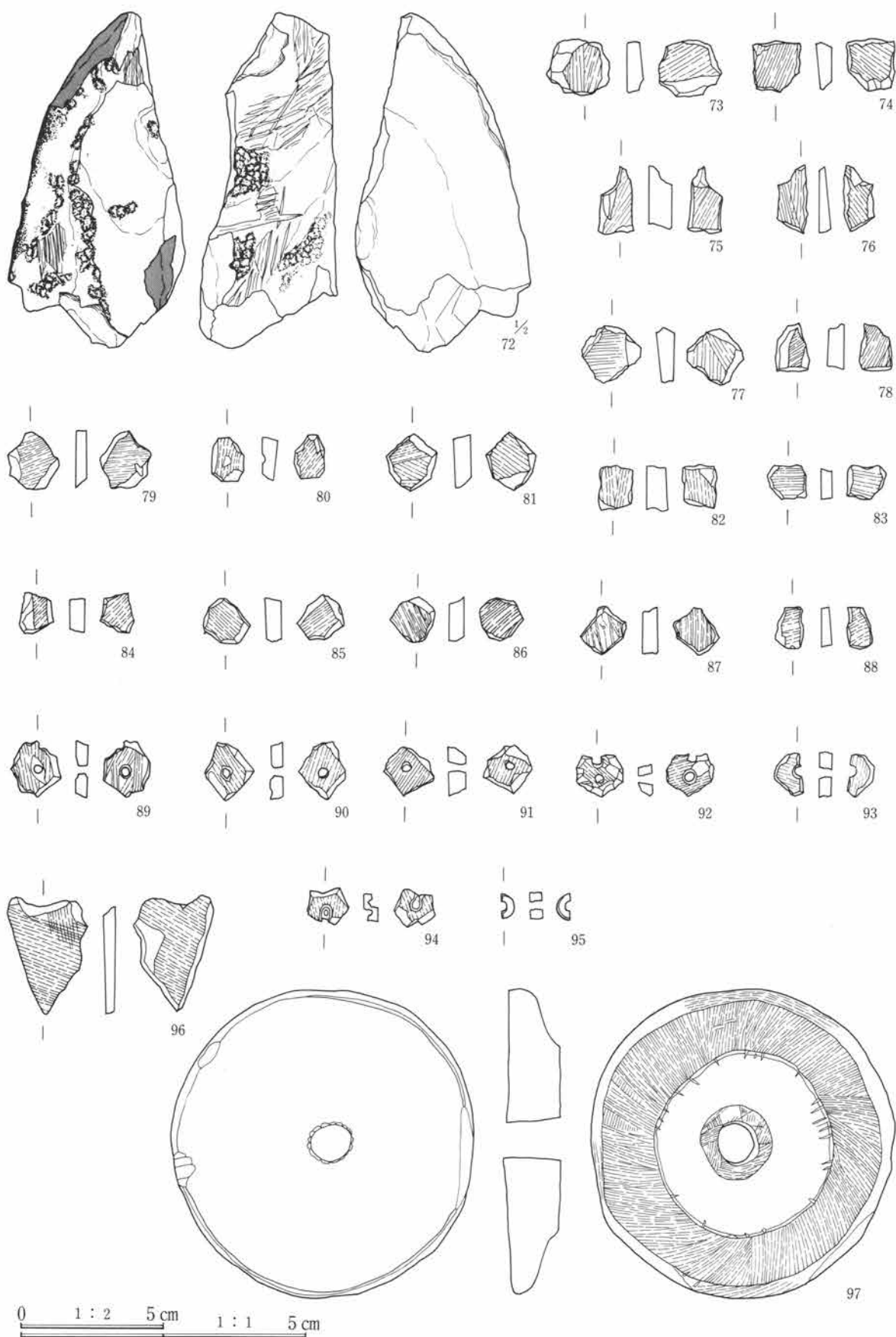


第70図 1号竖穴住居出土遺物図(6)

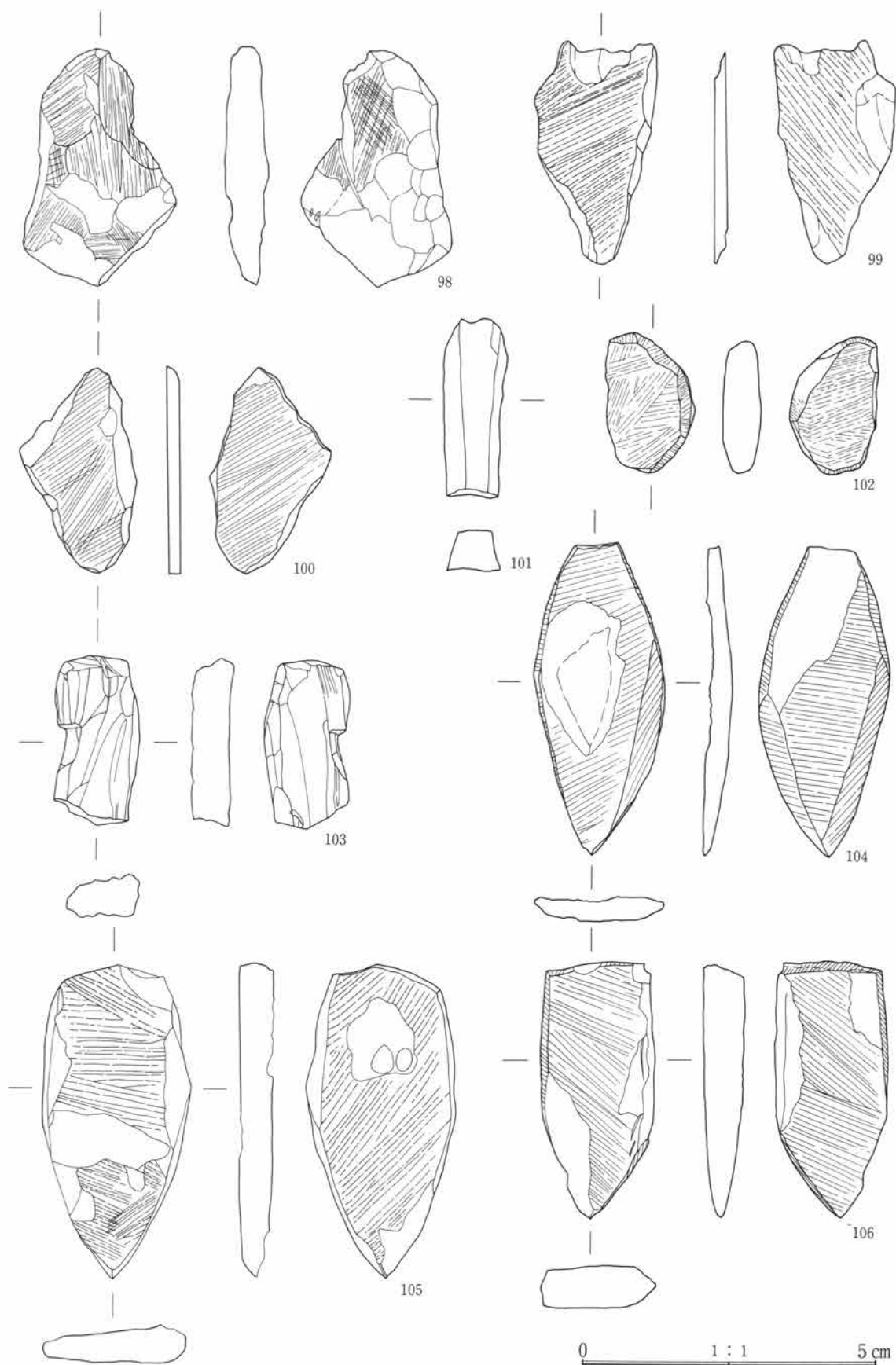


第71図 1号竪穴住居出土遺物図(7)

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

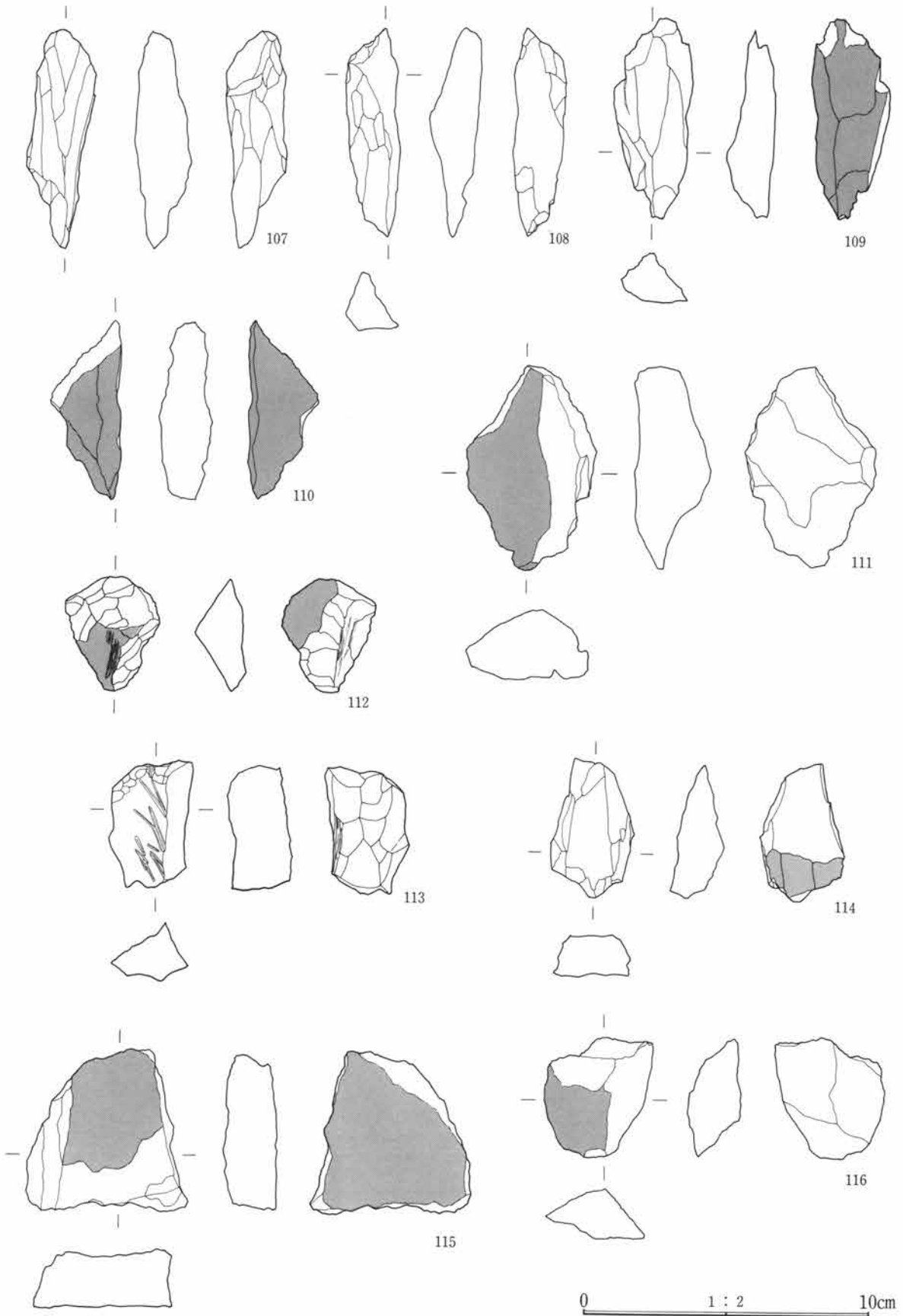


第72図 1号竖穴住居出土遺物図 (8)

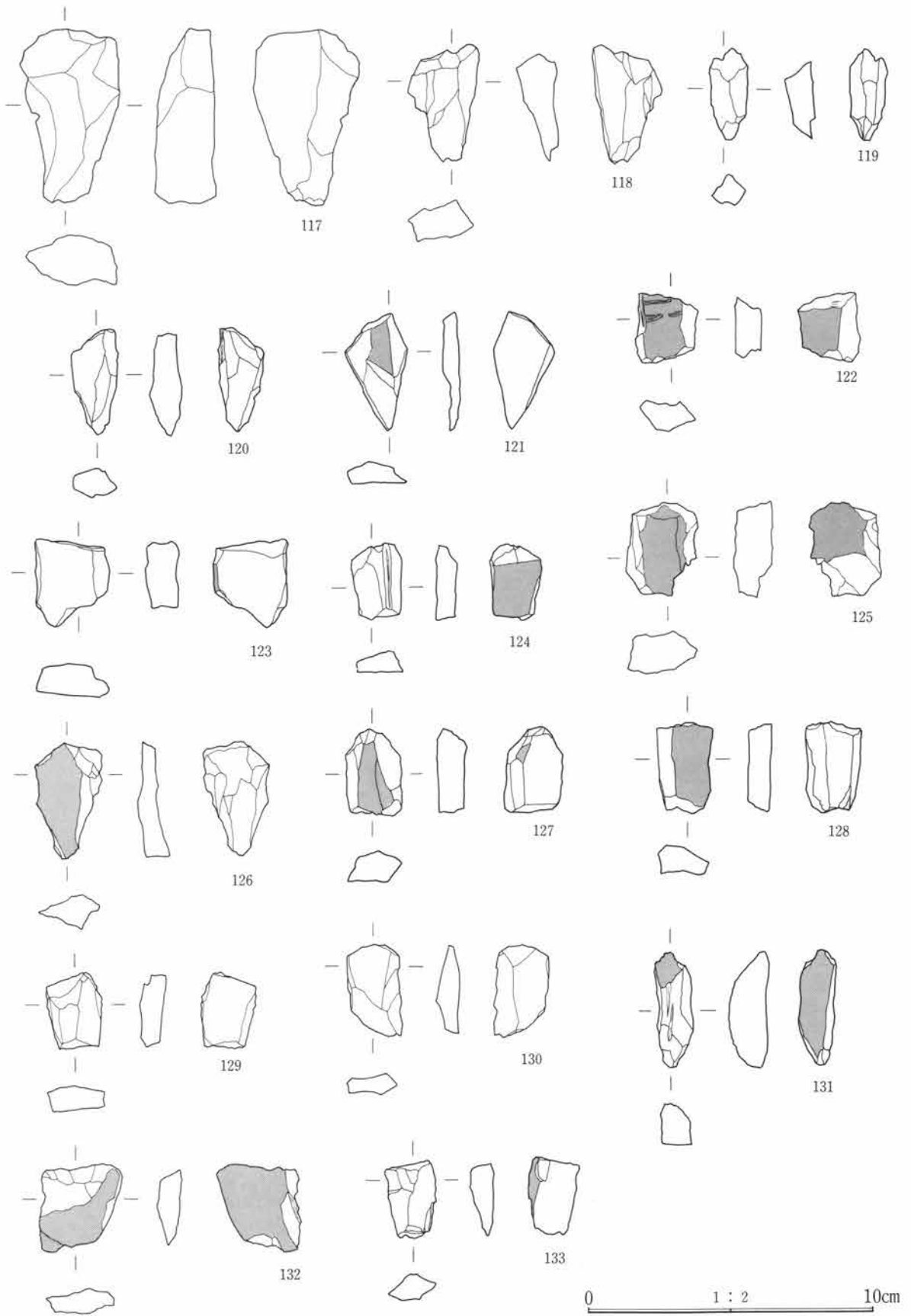


第73図 1号竖穴住居出土遺物図(9)

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

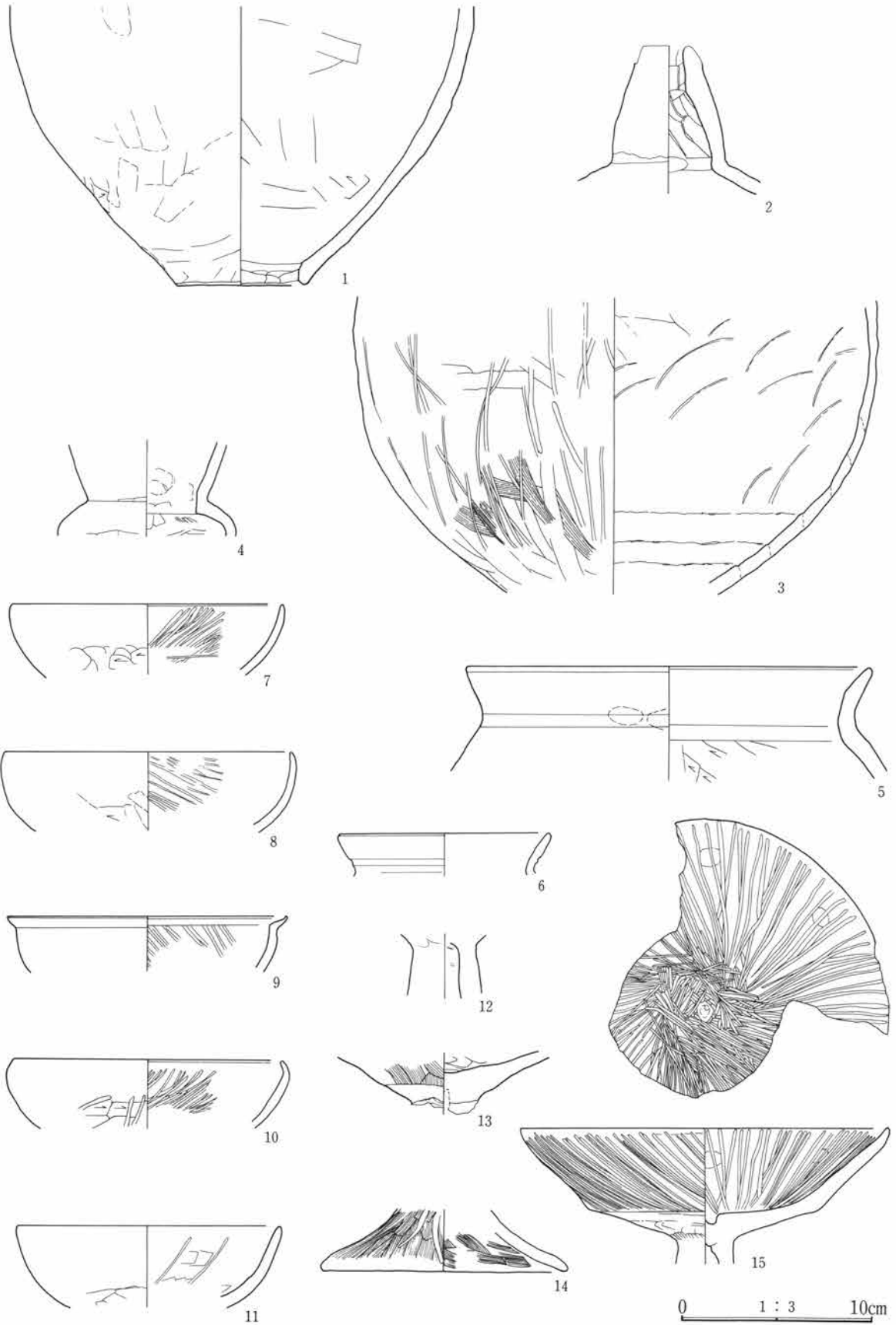


第74図 1号竖穴住居出土遺物図(10)

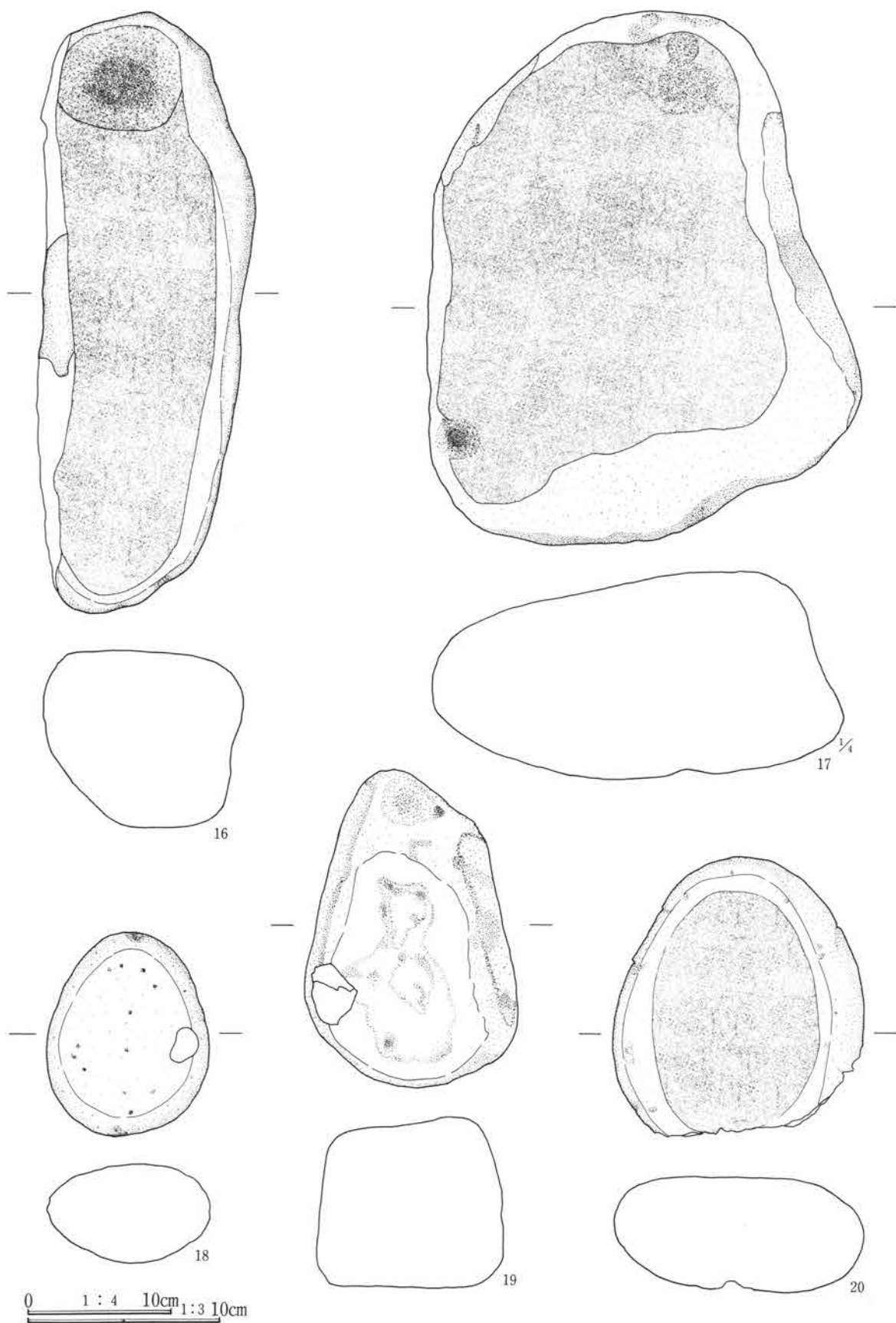


第75図 1号竪穴住居出土遺物図(11)

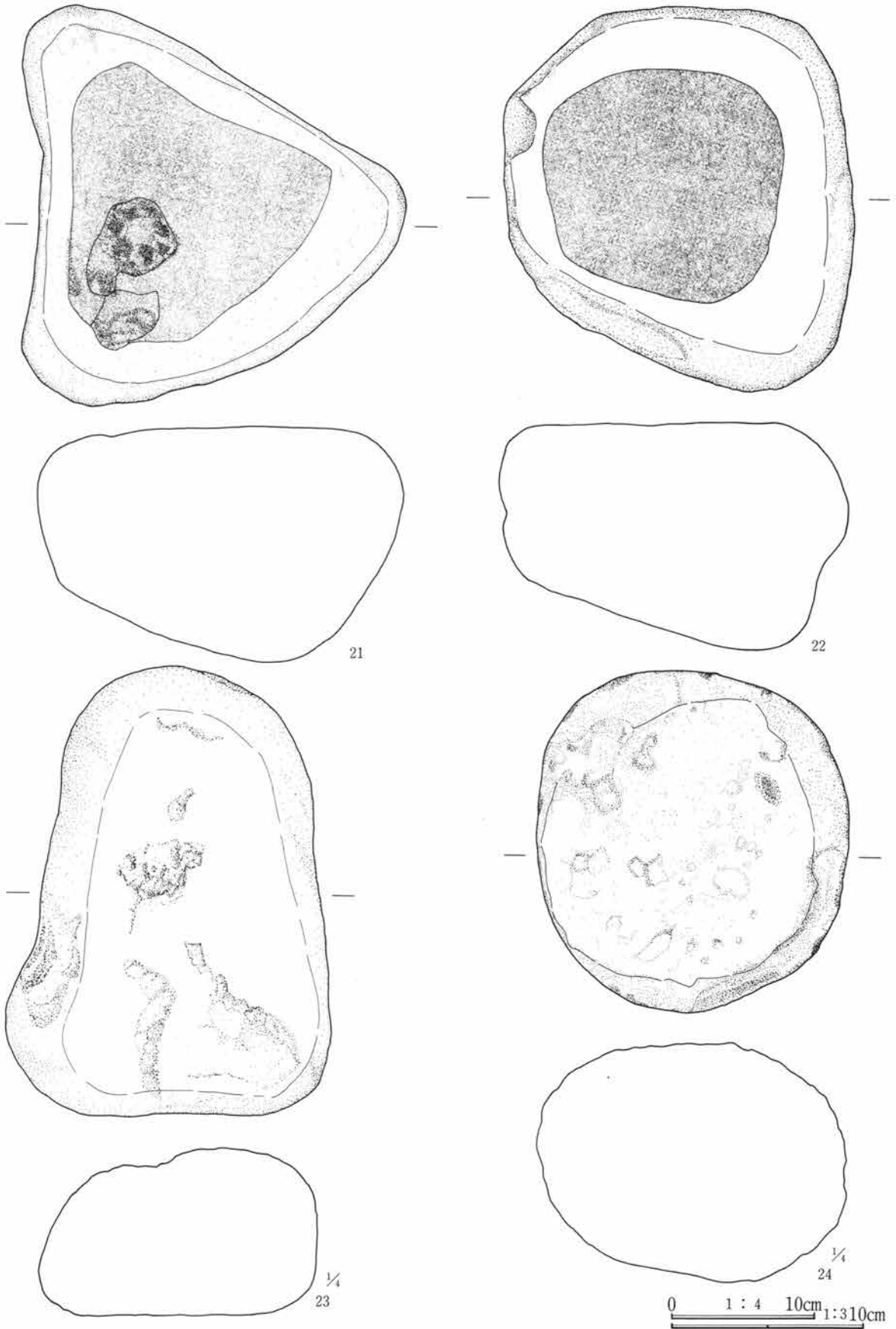
第7節 V面の検出遺構と出土遺物



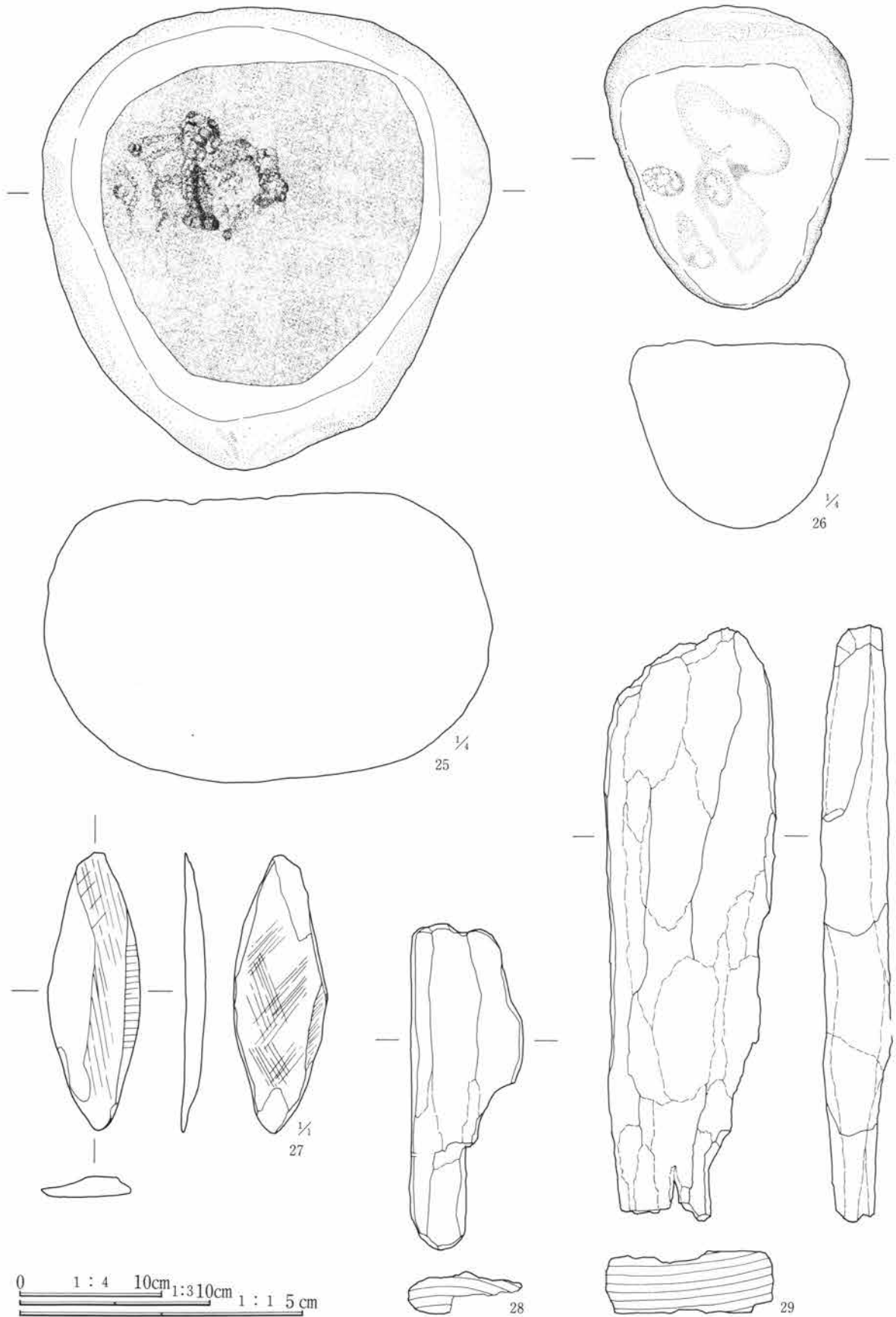
第76図 2号竖穴住居出土遺物図(1)



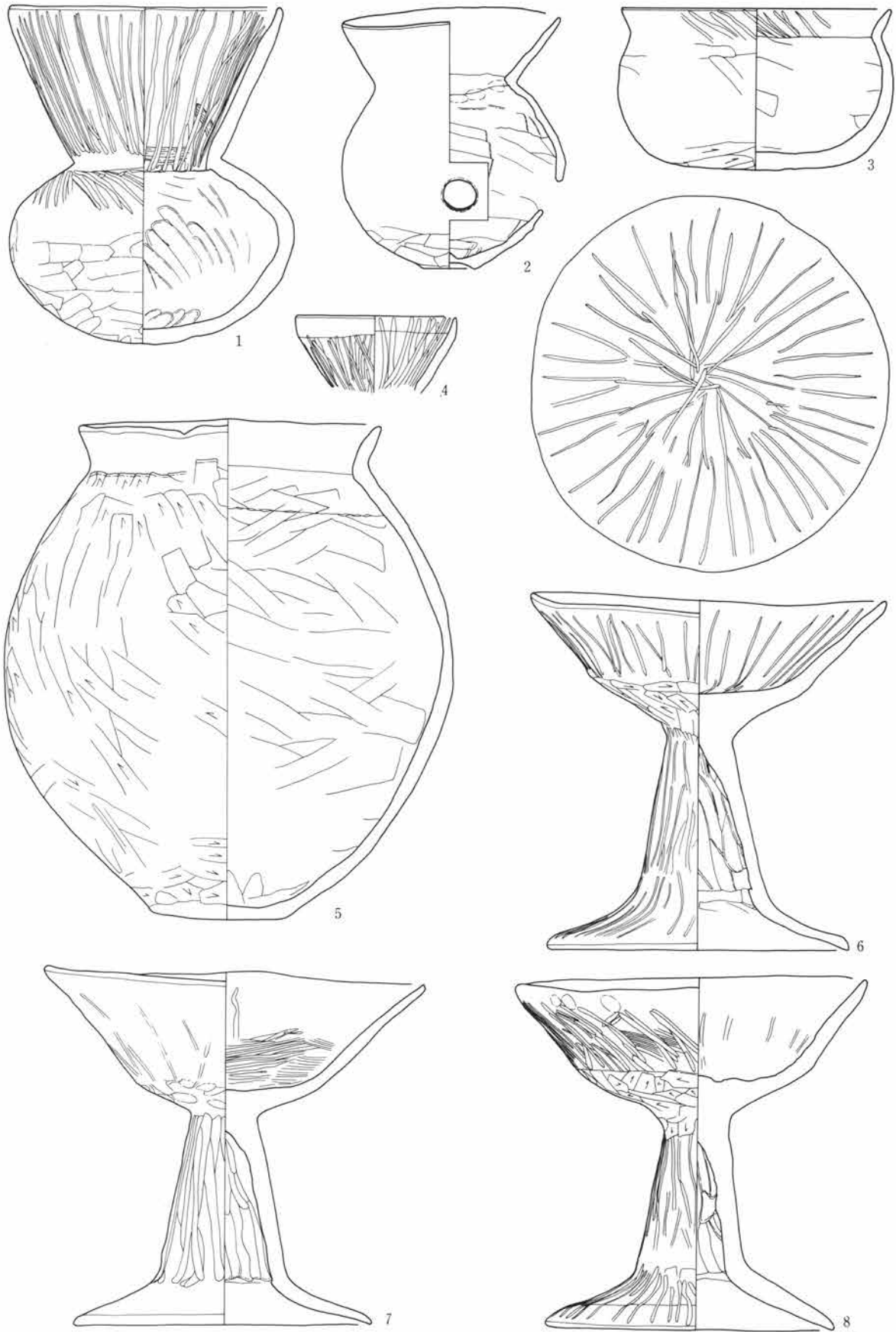
第77図 2号竪穴住居出土遺物図(2)



第78図 2号竖穴住居出土遺物図(3)



第79図 2号竖穴住居出土遺物図(4)



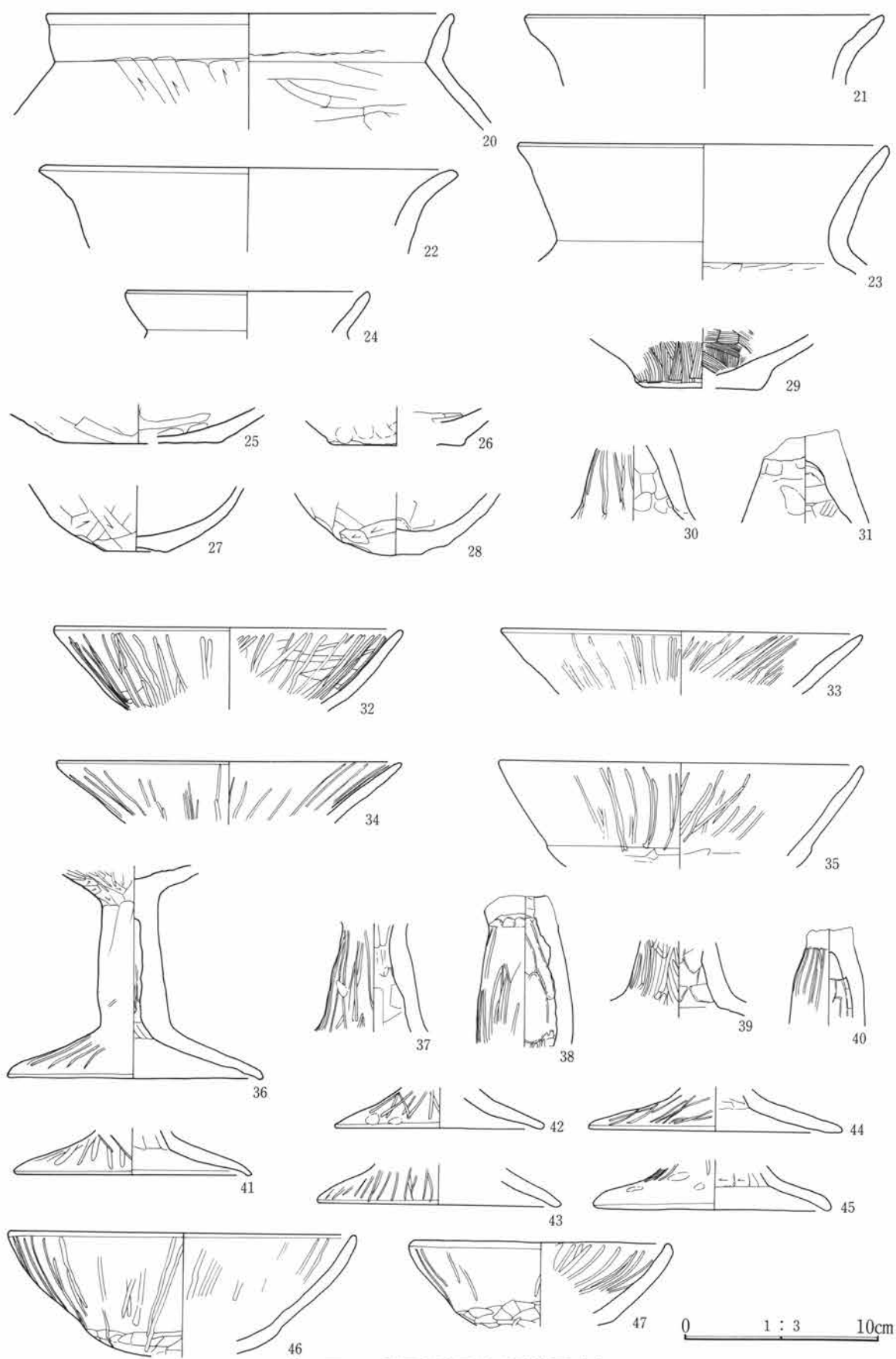
第80図 3号竪穴住居出土遺物図(1)

0 1:3 10cm



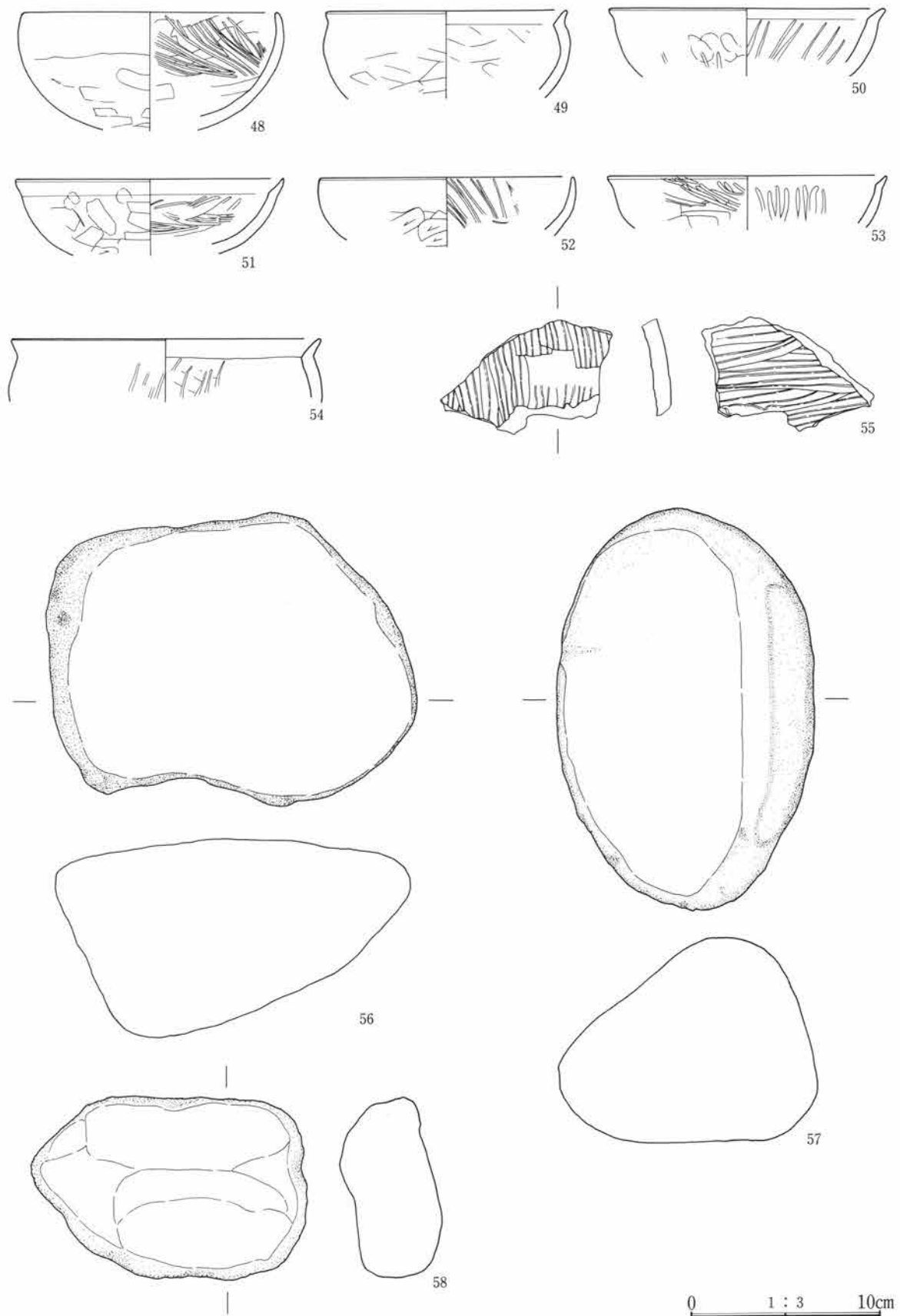
第81図 3号竖穴住居出土遺物図(2)

第7節 V面の検出遺構と出土遺物

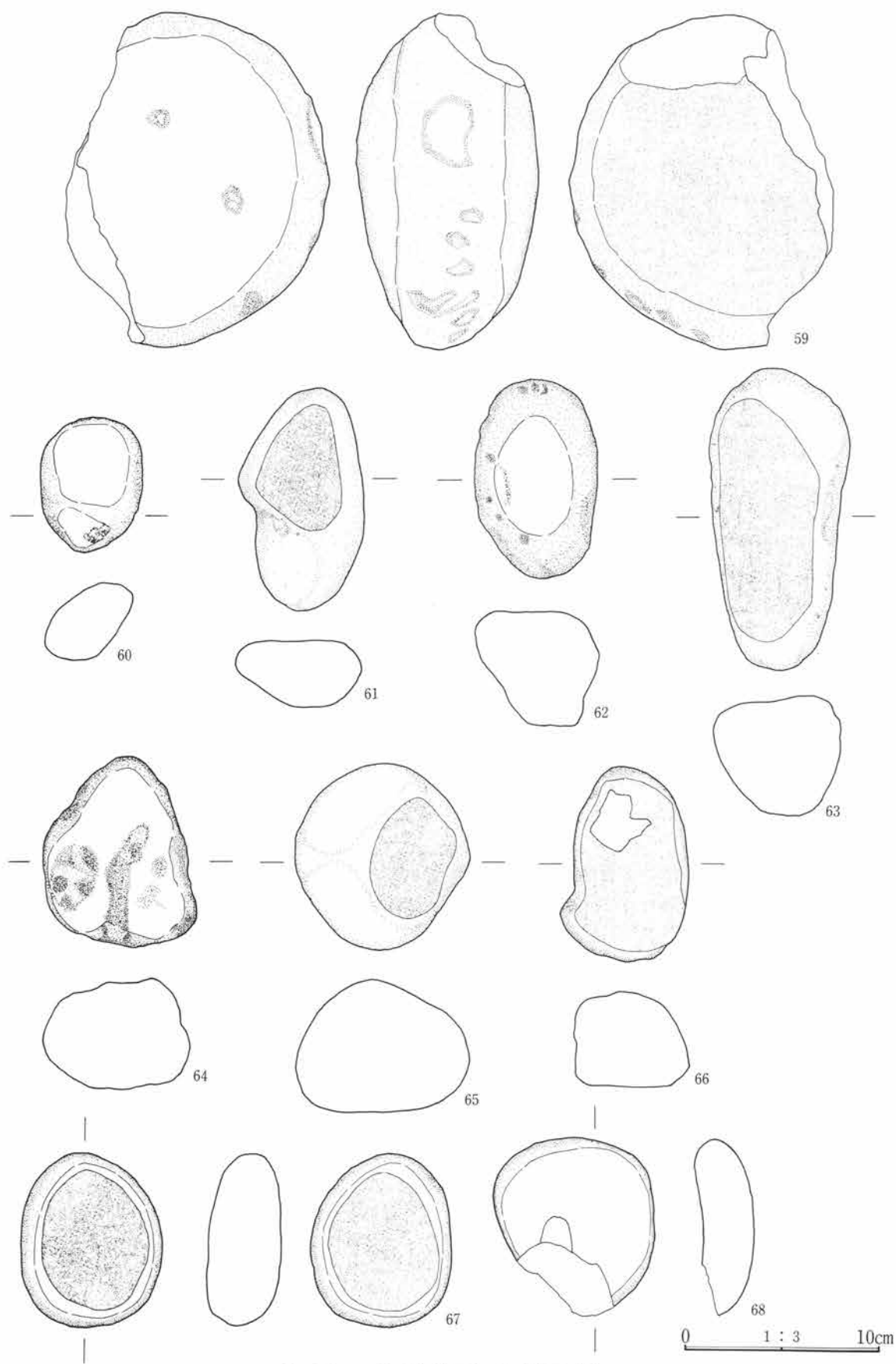


第82図 3号竪穴住居出土遺物図(3)

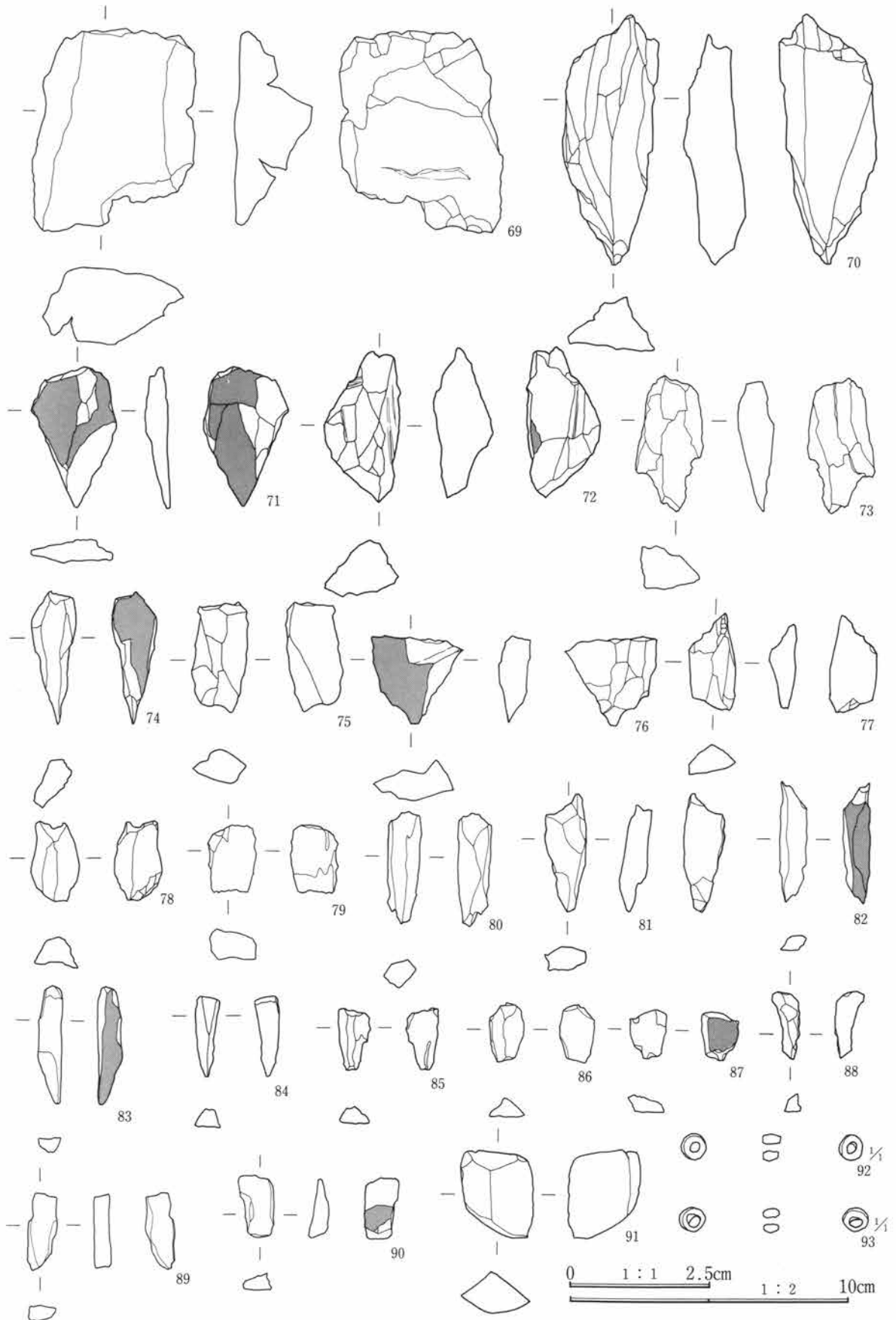
第IV章 検出遺構と出土遺物



第83図 3号竖穴住居出土遺物図(4)



第84図 3号竖穴住居出土遺物図(5)



第85図 3号竖穴住居出土遺物図 (6)

〔4〕「遺構確認調査」の概要

V面の調査にあたっては、白川扇状地を形成するふ厚い泥流層が全面を覆っているため、4つの調査区(西区・東区西・東区中央・東区東)ごとに主にバック・ホーを用いての遺構確認調査を実施した。

こうした調査にいたる経緯については、前述「第II章 第2節」を参照してもらいたい。

遺構確認調査の目的は、V面の遺構確認である。以下、遺構確認調査ごとにその内容を概観する。

【西区】(第87図・P L27) 幅1.2m×長さ70mの規模で調査を行った。

この調査において、遺構(1～3号竪穴住居)を確認したため、明かり掘削による本調査に切り替えた。

【東区西】(第87図・P L27) 12地区63区P-13・Q-13・P-14・Q-14Gにかけて幅1.0m×長さ6.1mの規模で1箇所調査を行った。

この調査では北壁断面においてAs-C堆積層が断絶している状況が3.8mにわたり確認できた。だが、その箇所に遺構の掘方は確認できず、さらに土質・土色の変化も漸的であるため、明確な遺構とは判断しなかった。出土遺物はAs-C堆積層断絶箇所の第IX層(基本土層)中より土師器甕小片(第86図1)が検出された。

【東区中央】(第87図・P L27) 12地区63区D-7・D-8・E-7・E-8・F-7Gにかけて幅1.1m×長さ7.0mの規模で1箇所(A地点)と12地区62区S-3・S-4Gにかけて幅0.8m×長さ4.5mの規模で1箇所(B地点)、計2箇所調査を行った。

A地点では北壁及び南壁断面においてAs-C堆積層が断絶している状況が0.4mにわたって確認できた。明確な掘方は確認できなかったものの、南北両壁面に同様の状況が確認できることから、これが溝状落ち込みである可能性が高い。出土遺物はAs-C堆積層が存在している箇所の第IX層(基本土層)の最下層中より加工材?(第86図2)と同箇所の第VII層(基本土層)中最下層より加工材?(第86図3)が検出された。

B地点では北壁断面においてFA直下面に約0.1mの緩やかな段差を確認した。だが、段差自体には畦畔の状況は伺えなかった。なお、ここではAs-C堆積層断絶箇所はなかった。出土遺物は第IX層(基本土層)中より加工材?(第86図4)と第VII層(基本土層)の最下層中より加工材?(第86図5・6)が検出された。

【東区東】(第87図・P L27) 12地区51区T-13G・52区A-13Gにかけて幅0.8m×長さ4.6mの規模で1箇所調査を行った。この調査区においては遺構・遺物とも確認することはできなかった。

泥流層下遺構確認調査時出土土師器観察表

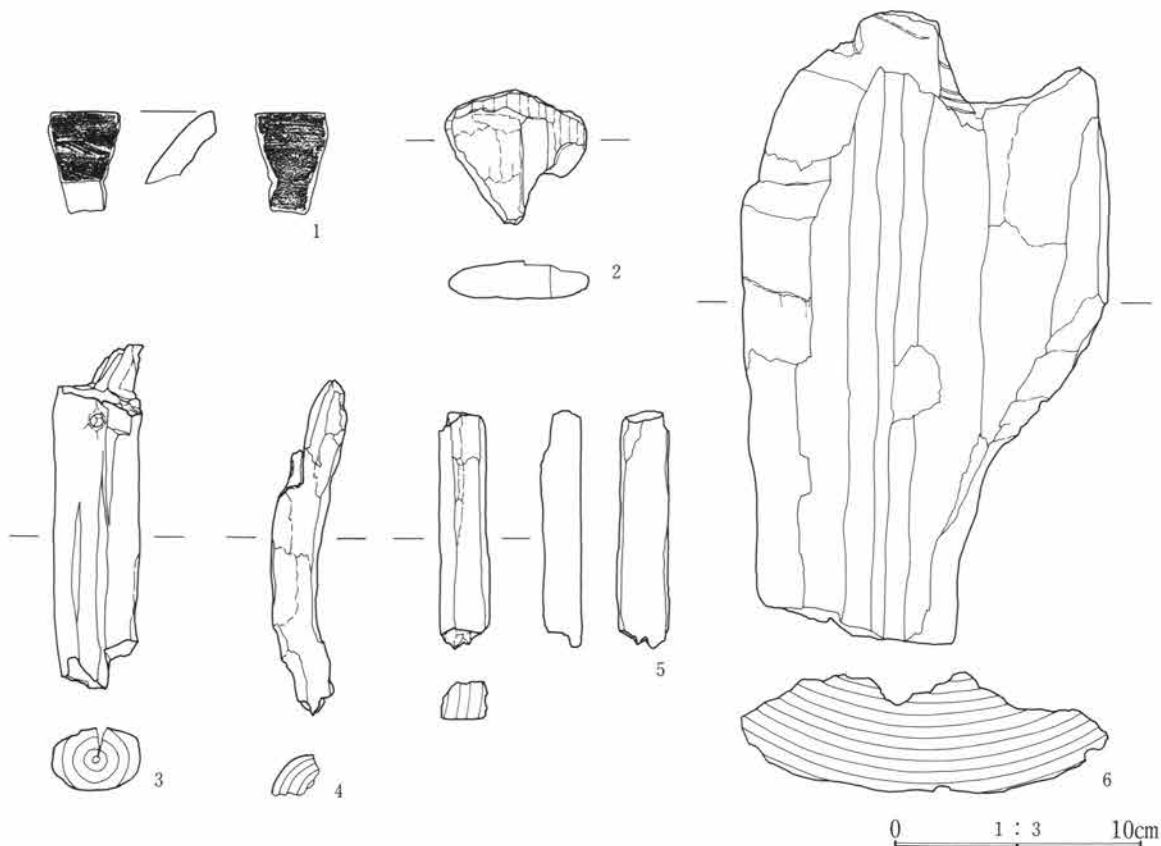
遺物番号	出土層位	器種別	法量(cm)	残存(%)	形態・手法の特徴 (手法)①外面 ②内面	色調	備考
1 第86図 P L無	第IX層中	甕 土師器	口— 体— 底— 高(3.0)	口～5 体0 底0	(形態)口…①a (手法)①口縁…(端)ヨコナデ (上)ヨコナデ ②口縁…(上)ヨコナデ	にぶい 赤褐色	

泥流層下遺構確認調査時出土木材観察表

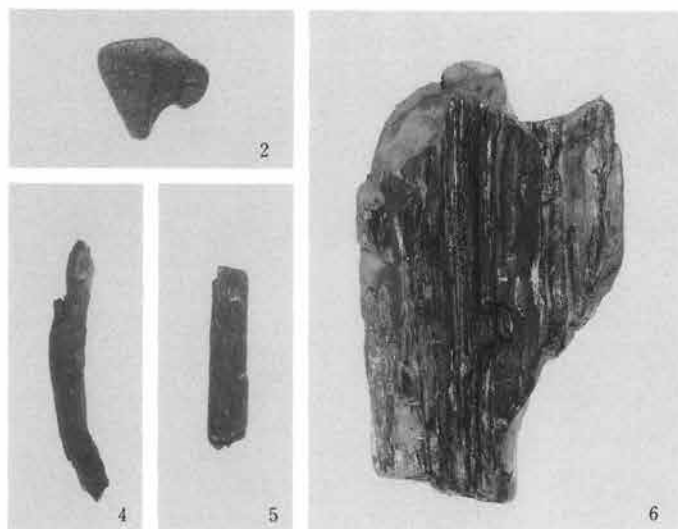
遺物番号	出土層位	種別 樹種	計測値 (cm)	木取り	遺存状況	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察 ①A面 ②B面 ③C面
2 第86図	第IX層中	加工材? コナラ節	長(5.3) 幅(4.8) 厚(1.7)	柵目	掘削土中出土の為詳細不明	①一部欠損しているが不整三角形 ②不整長方形	①割け面を部分的に調整? ②割け面を部分的に調整・上端は削り出し様に厚く残る ③部分的に調整・摩耗して端部が丸くなる
3 第86図 P L無	FA泥流最下層	加工材? カエデ属	長(13.6) 幅(3.4) 厚(2.5)	丸材	FA泥流中の流木?	①細長方形・枝 ②やや潰れた円形	①樹皮なし・全体に摩滅している ②樹皮なし・割け面を部分的に調整? ③樹皮なし・全体に摩滅している
4 第86図	第IX層中	加工材? コナラ節	長(13.3) 幅(2.0) 厚(1.6)	不明	掘削土中出土の為詳細不明	①細長い弓形 ②細長い不整長方形	①②割け面を部分的に調整? ③部分的に調整・摩耗して端部が丸くなる

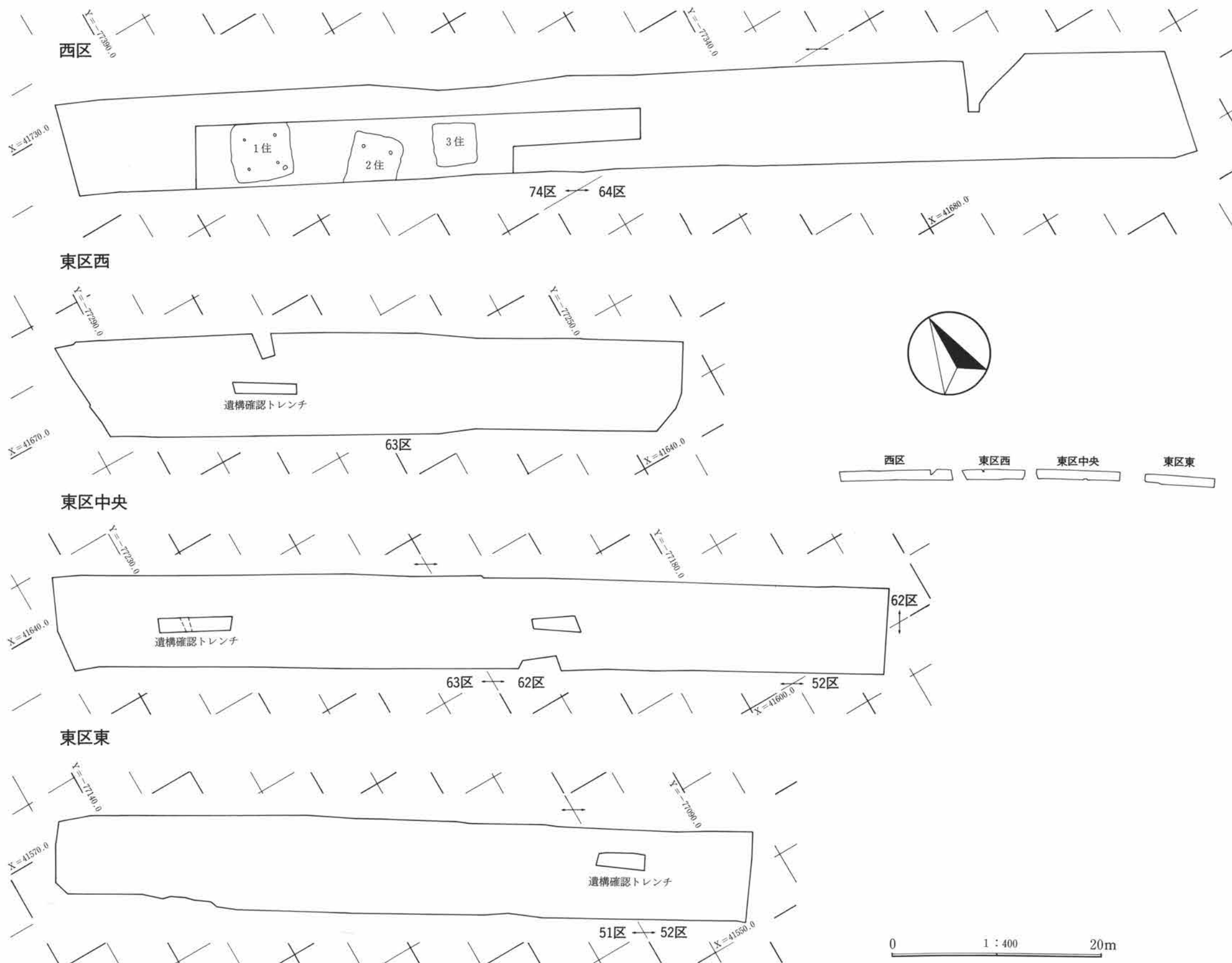
第IV章 検出遺構と出土遺物

遺物番号	出土層位	種別 樹種	計測値 (cm)	木取り	遺存状況	形態の特徴 ①平面 ②断面	加工痕等の観察		
							①A面	②B面	③C面
5 第86図	FA泥流最下層	加工材? コナラ節	長(9.3) 幅(2.0) 厚(1.4)	柾目	FA泥流中の流木?	①細長い長方形 ②細長い長方形	①②割け面を全体的に調整し、平坦化	③割け面を全体的に調整し、平坦化・摩耗して端部が丸くなる	
6 第86図	FA泥流最下層	加工材? カエデ属	長(20.5) 幅(14.6) 厚(5.0)	柾目	FA泥流中の流木?	①一部欠損しているが長方形 ②不整長方形	①割け面を部分的に調整	②部分的にハツリ痕らしいものがある	③割け面は未調整



第86図 泥流層下遺構確認調査時出土遺物図





第87図 V面全体図

第 V 章 自然科学的検討

第1節 自然科学分析の概要

行力春名社遺跡の発掘調査期間中及び整理期間中に計8種類の自然科学分析を専門業者に委託、または専門家に依頼実施した。本来ならば、全分析を報告すべきであるが、頁数の都合上、本章では5種類の分析報告書を掲載する。他3種類の報告については、やむを得ず割愛した。そこで、本節では全分析の内容について簡単に述べておく。なお、全報告書は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

①【行力春名社遺跡の火山灰同定】(第2節)

〈目的〉遺跡内における各種テフラの存否を認定する

〈方法〉専門業者に調査時の分析試料採取から試料分析・分析報告書の作成までを委託

〈委託先〉株式会社古環境研究所

〈分析結果〉第2節参照 〈備考〉試料採取年月：平成3年3月

②【行力春名社遺跡住居跡出土炭化物の樹種同定】(第3節)

〈目的〉古墳時代中期の焼失住居(1～3号竪穴住居)検出の炭化材の樹種を同定することにより、住居単位での上屋材の樹種選択が行われているか否かを認定する参考資料とする

〈方法〉調査担当が調査時に分析試料を適当量採取、その後専門業者に試料分析を委託

〈委託先〉株式会社パレオ・ラボ

〈分析結果〉第3節参照 〈備考〉3軒で150点の試料を分析

③【行力春名社遺跡出土の粘土質物質について】(第4節)

〈目的〉古墳時代中期玉作工房址(1号竪穴住居)検出の白色粘土質物質の種類・性格を認定する

〈方法〉調査担当が調査時に分析試料を適当量採取、その後専門業者に試料分析を委託

〈委託先〉株式会社パレオ・ラボ

〈分析結果〉第4節参照 〈備考〉玉作工程理解のための分析

④【行力春名社遺跡出土の赤色顔料について】(第5節)

〈目的〉古墳時代中期玉作工房址(3号竪穴住居)検出の赤色顔料の種類・性格を認定する

〈方法〉調査担当が調査時に分析試料を適当量採取、その後専門業者に試料分析を委託

〈委託先〉株式会社パレオ・ラボ

〈分析結果〉第5節参照 〈備考〉水銀朱系か酸化鉄系かの判断が主眼

⑤【行力春名社遺跡出土の馬歯・馬骨について】(第6節)

〈目的〉中近世遺構出土の馬歯・馬骨から、それらの年齢・性別・体高等を推定する

〈方法〉調査担当が調査時に鑑定資料を採取、その後専門家に資料鑑定を依頼

〈依頼者〉宮崎重雄(群馬県立大間々高等学校教諭)

〈鑑定結果〉第6節参照 〈備考〉各計測部位名称掲載

⑥【行力春名社遺跡におけるプラントオパール分析】(未掲載)

〈目的〉東区での泥流層下遺構確認調査時の泥流層直下黒色土及びAs-C下黒色土(主に遺構が確認されなかった箇所)のイネ科植生の推定を行う

〈方法〉調査時に断面から担当者が分析資料を適当量採取、その後専門業者に資料分析を委託

《委託先》株式会社古環境研究所

《分析結果》①東区西…FA直下黒色土ではイネは0であり、タケ亜科が9,900個/gと遺跡内では極めて多い数値を示したことが特徴・As-C下黒色土ではイネが0であることが特徴。

②東区中央…FA下黒色土ではイネが600～1,900個/gであり、稲作が行われていた可能性が考えられるが、その密度が2,000個/g未満と低いため、他所からの混入の危険性も否定できない。

③東区東…FA下黒色土ではイネが700個/gであり、稲作の行われていた可能性は低い。ヨシ属が5,000個/gと多いことが特徴。

④全体的には稲作の行われていた可能性は低いと考えられる。なお、キビ属は全く検出されていない。

⑦【行力春名社遺跡における植物珪酸体分析】(未掲載)

《目的》西区での各テフラ直下の黒色土(腐植層)におけるイネ科植生の推定

《方法》専門業者に調査時の分析試料採取から試料分析・分析報告書の作成までを委託

《委託先》株式会社古環境研究所

《分析結果》①As-B下水田(本遺跡II面)…イネの植物珪酸体が10,800個/gと非常に密度が高く、稲作が行われていた可能性が極めて高い。

②FP泥流直下黒色土面(本遺跡IV面)…ヨシ属の植物珪酸体が33,300～70,000個/gと極めて密度が高い。その反面、ウシクサ属やタケ亜科は極めて低密度である。このことから、この時期はヨシ原が継続していたと考えられ、当所は湿地的な環境であったことが推定できる。

③FA下黒色土(本遺跡V面の一部)…イネ・ヨシ属・ウシクサ族・タケ亜科等がいずれも少量みられた。遺跡内の一部で稲作が行われ、その周辺でヨシ属などが生育していたことが推定できる。

④As-C下黒色土(本遺跡V面下)…ヨシ属・ウシクサ族等が微量みられた。イネ科植物の生育にあまり適さない環境であったことが推定される。

⑧【行力春名社遺跡の花粉分析】(未掲載)

《目的》西区での古墳時代(FP泥流下・FA下・As-C下)の黒色土(腐植層)における植生に関する情報を得る

《方法》専門業者に調査時の分析試料採取から試料分析・分析報告書の作成までを委託

《委託先》パリノ・サーヴェイ株式会社

《分析結果》FP泥流下・FA下・As-C下のいずれの黒色土中にも花粉化石は少なく、僅かに出現する花粉化石はいずれも保存状況が悪く、植生について推定することは困難である。また、各試料からイネ科の花粉化石が検出したが、保存状況が悪く、栽培型とされるイネ科かどうか判断できなかった。

第2節 行力春名社遺跡の火山灰同定

早田 勉 (古環境研究所)

I. はじめに

行力春名社遺跡は、榛名火山南東麓白川扇状地上に位置している。遺跡の発掘調査では、良好な地質断面が作成された。そこで野外調査を行い地質層序を明らかにするとともに、テフラの検出分析を行い、噴出年代が明らかにされている示標テフラとの検出同定を試みた。野外調査は、平成3年3月29日に行われた。

II. 行力榛名社遺跡の地質層—野外調査結果

行力榛名社遺跡の発掘調査で確認された最下位の地層は、砂と腐植に富む砂の互層である(第1地点、第88図)。この地層の上部と最上部には、2枚のテフラ層が認められる。上部のテフラ層は黄白色の降下軽石層で、仮に行力春名社第1テフラ(Gh-1)と呼ぶことにする。また最上部のテフラ層はシルト質の火山灰層で、仮に行力春名社第2テフラ(Gh-2)と呼ぶことにする。

Gh-2の上位には、氾濫堆積物が認められる(第2地点および第4地点、第88図)。この氾濫堆積物は、間に薄い腐植層をはさんで合計10層にも及ぶ。ここでは、下位よりFL-1~10と呼ぶことにする。以下、各氾濫堆積物について特徴を記載する。

FL-1：不淘汰な灰色の泥流堆積物である。含まれる礫は、最大29cmである。第2地点では、下部にラミナの発達した砂層が認められる。

FL-2：レンズ状に認められる桃色シルトの薄層である。

FL-3：ラミナの発達した灰色の砂層である。下部に桃色シルトの薄層が認められる。

FL-4：ラミナの発達した灰色の砂層である。下部にラミナの発達した桃色シルトの薄層が認められる。

FL-5：灰白色の軽石に富む円礫層である。軽石の最大径は、8.1cmである。

FL-6：ラミナの発達した褐色の砂層である。

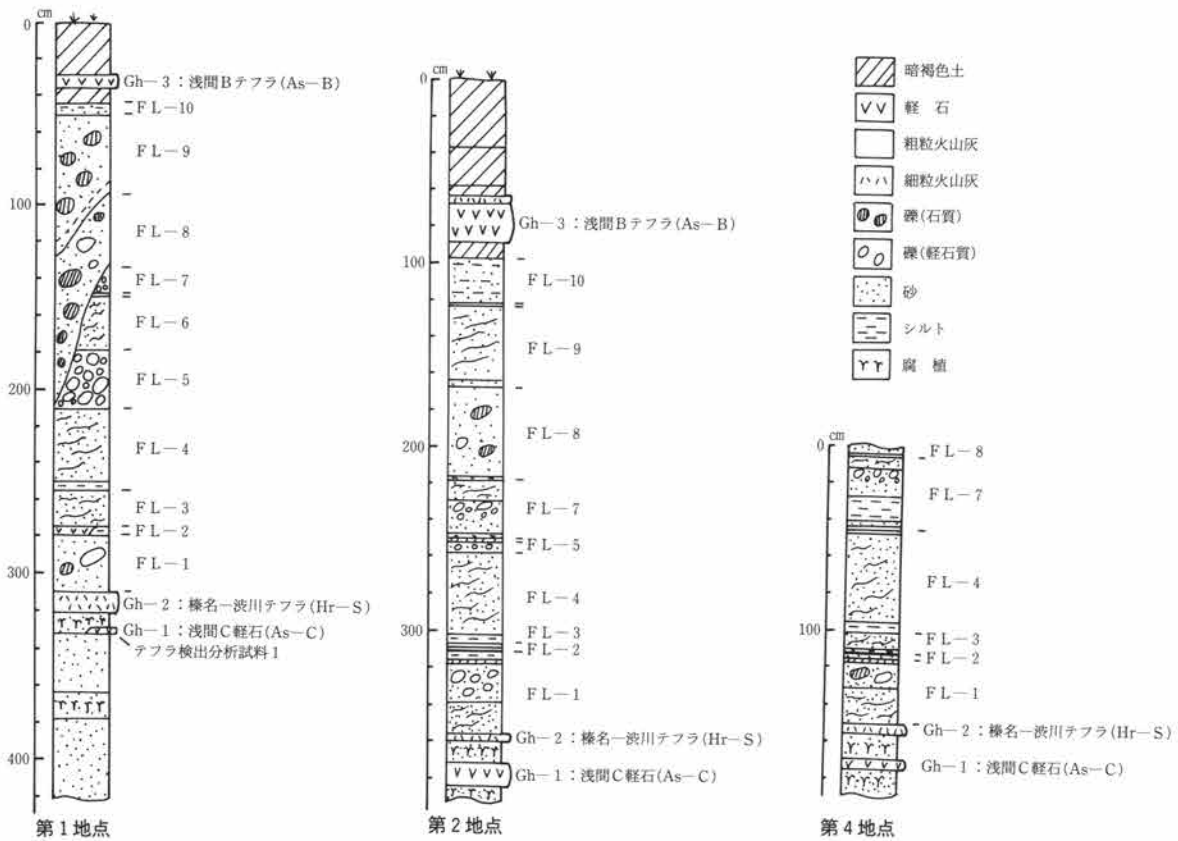
FL-7：行力春名社遺跡断面において最も顕著な腐植層を挟んで、FL-6の上位にのる氾濫堆積物である。白色の軽石に富む褐色泥流堆積物である。軽石の最大径は、6.3cmである。下部にラミナの発達した桃色シルト層が認められる地点もある。

FL-8：FL-7堆積後に形成された谷を埋めて堆積した桃灰色の砂礫層である。顕著なラミナが認められる。堆積物は、石質の礫に富む。含まれる礫は粗粒で、その最大径は、52cmにも及ぶ。

FL-9：ラミナの発達した桃灰色の砂礫層である。含まれる礫の最大は、34cmである。下部に黄色の細粒砂層が認められることがある。

FL-10：黄灰色のシルト質砂層である。

FL-10の上位の暗褐色土壌中には、降下火山灰層が認められる。このテフラを仮に行力春名社第3テフラ(Gh-3)と呼ぶことにする。



第88図 行力春名社遺跡の地質断面

III. 行力春名社遺跡のテフラ-テフラ検出分析

(1) 野外で確認されるテフラ

野外観察では、Gh-1~Gh-3の3層のテフラが認められた。以下、テフラ検出分析の結果を踏まえて、示標テフラとの対比を行う。

Gh-1: 最大層厚13cmの黄白色降下軽石層である。テフラ中には、最大径17mmの灰白色軽石が含まれている(第17表)。軽石はよく発泡している。また斑晶鉱物には、斜方輝石や普通輝石が認められる。これらの特徴から、このテフラ層は4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979、石川ほか, 1979)と考えられる。

第17表 行力春名社遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の最大径	軽石の色調	発泡の程度
2	1	+++	17mm	灰白	良
3号住居址	1	+	1mm	白	良

+++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない

Gh-2：シルト質の火山灰層である。下部はグライ化して青灰色、上部は黄褐色を呈する。含まれる白色軽石には、角閃石が斑晶鉱物としても認められる。テフラは層相などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名-渋川テフラ層(Hr-S, 早田, 1989、年代：坂口, 1986)に対比される。なおHr-Sは、二ツ岳降下火山灰層(新井, 1979)と呼ばれた降下テフラ層と、二ツ岳第1軽石流堆積物(新井, 1979)と呼ばれた火砕流堆積物の総称である。

行力春名社遺跡のHr-Sは、4層に区分することができる。最下部は厚さ0.8cmの褐色の細粒火山灰層である。層相から、保渡田VII遺跡のHt-1(パリノ・サーヴェイ, 1990)、すなわちS-1降下火山灰(早田, 1989)に対比される。その上部には、黄色細粒火山灰層が認められる。このテフラは、層相から保渡田VII遺跡のHt-2に対比される。その上位の灰色細粒火山灰層は、層相から保渡田VII遺跡のHt-3、すなわちS-5火砕流に対比される。最上位の細粒火山灰層について、詳細は不明である。

行力春名社遺跡のHr-Sの層相は、保渡田薬師塚古墳の外堀覆土に認められたHr-Sの層相によく似ている。

Gh-3：本テフラの直下からは、水田遺構が検出されている(第89図)。良好に保存されている地点では、合わせて14のユニットが確認された。ここでは、下位よりユニット1~14と呼ぶことにする。層相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に対比される。以下、各ユニットについて記載を行う。

ユニット1：層厚0.3cmの青灰色細粒降下火山灰層。

ユニット2：層厚0.5cmの粗粒な降下スコリア層。含まれるスコリアの最大径は、17mmに及ぶ。

ユニット3：層厚0.3cmの青灰色細粒降下火山灰層。

ユニット4：層厚0.8cmの黄色降下粗粒火山灰層。軽石に富む。

ユニット5：層厚0.4cmの青灰色細粒降下火山灰層。

ユニット6：層厚2.0cmの細粒降下スコリア層。含まれるスコリアの最大径は、3mm。

ユニット7：層厚1.0cmの黒灰色粗粒降下火山灰層。

ユニット8：層厚2.0cmの桃色がかかった褐色の粗粒降下火山灰層。

ユニット9：層厚1.0cmの黒灰色粗粒降下火山灰層。細粒な赤褐色岩片混じり。

ユニット10：層厚2.0cmの粗粒な黄色降下火山灰層。軽石に富む。軽石の最大径は、4mm。

ユニット11：層厚0.5cmの黒灰色粗粒降下火山灰層。

ユニット12：層厚2.5cmの粗粒な黄色降下火山灰層。軽石に富む。軽石の最大径は、4mm。

ユニット13：層厚4.0cmの褐色粗粒降下火山灰層。黒色岩片に富む。

ユニット14：層厚2.0cmの紫色細粒降下火山灰層。



第89図 行力春名社遺跡の遺構土層断面

なお3号住居覆土中には、厚さ3mmの灰白色細粒砂層が認められた(第89図)。テフラ検出分析では、最大径1mmの白色軽石粒子は認められたものの、全体として淘汰のよい特徴をもつ。このことから一次堆積のテフラよりも氾濫堆積物の可能性の方が大きいと考えられた。

IV. 考察—氾濫堆積物の起源について

Hr-Sの上位でAs-Bの下位にあるFL-1～FL-10の氾濫堆積物は、粗粒の軽石質の礫を含むことで、As-Cの下位の氾濫堆積物とは明らかに層相を異にする。ここではこれらの氾濫の起源を考えてみよう。

Hr-Sを覆う堆積物は、層相から泥流に由来すると思われる。Hr-Sを直接覆うことから、Hr-Sの堆積に伴って発生した泥流(早田, 1989)の可能性が考えられる。またその上位のFL-2～FL-6も、間に腐植層の堆積は認められたものの、As-Cの下位にある氾濫堆積物と比較して粗粒な軽石が認められることなどから、Hr-Sの堆積に関連するものと考えられる。

FL-7～FL-10には、粗粒な白色軽石が大量に含まれることで下位の氾濫堆積物と特徴が異なる。層相から、大量の白色軽石が放出された6世紀中葉の榛名—伊香保テフラ(Hr-I, 早田, 1989)の噴火に由来する氾濫堆積物(早田, 1989)と考えられる。Hr-Iは、二ツ岳降下軽石層(FP, 新井, 1962)と呼ばれた降下テフラと二ツ岳第2軽石流と呼ばれた火砕流堆積物の総称である。Hr-Sに由来する氾濫堆積物同様、Hr-Iに由来する氾濫堆積物の最下位に泥流堆積物が認められる。なおFL-7とFL-8の間には谷が形成されているが、平坦地でも両者の間に腐植層は認められず、ごく短期間のうちに形成されたものと考えられる。

FL-1～FL-10の氾濫堆積物は、いずれも古墳時代に榛名火山で発生した2回の大噴火に由来する氾濫堆積物と推定される。

V. まとめ

行力春名社遺跡では、下位よりAs-C, Hr-S, As-Bの3層のテフラが検出された。Hr-SとAs-Bの間には、Hr-Sの噴火およびHr-Iの噴火に由来する多くの氾濫堆積物が認められた。

文献

- 新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四世紀編年」『群馬大学紀要自然科学編、10』p.1-79.
 新井房夫(1979)「関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル、no. 157』p.41-52.
 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(1979)「火山堆積物と遺跡Ⅰ」『考古学ジャーナル、no. 157』p.3-40.
 パリノ・サーヴェイ株式会社(1990)「保渡田VII遺跡における土壌および火山灰の分析」『保渡田VII遺跡—保渡田古墳群に関連する遺構群』群馬町教育委員会編、p.113-115.
 坂口一(1986)「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会編、p.103-119.
 早田勉(1989)「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究、27』p.297-312.

第3節 行力春名社遺跡住居跡出土炭化物について

藤根 久・鈴木 茂 (株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

行力春名社遺跡は、高崎市行力町地内に所在する古墳時代から中世・平安時代の遺構・遺物からなる遺跡である。これら遺構・遺物を埋積する堆積物中には、榛名火山のテフラをはじめ、浅間B軽石やFA、FP軽石あるいは浅間C軽石が挟在し、層的に重要な役割を果たしている。こうした堆積状況に埋積する遺跡からは、古墳時代中期の住居跡が検出され、これに伴って焼失による炭化物（多くが炭化材）が多量に出土している。

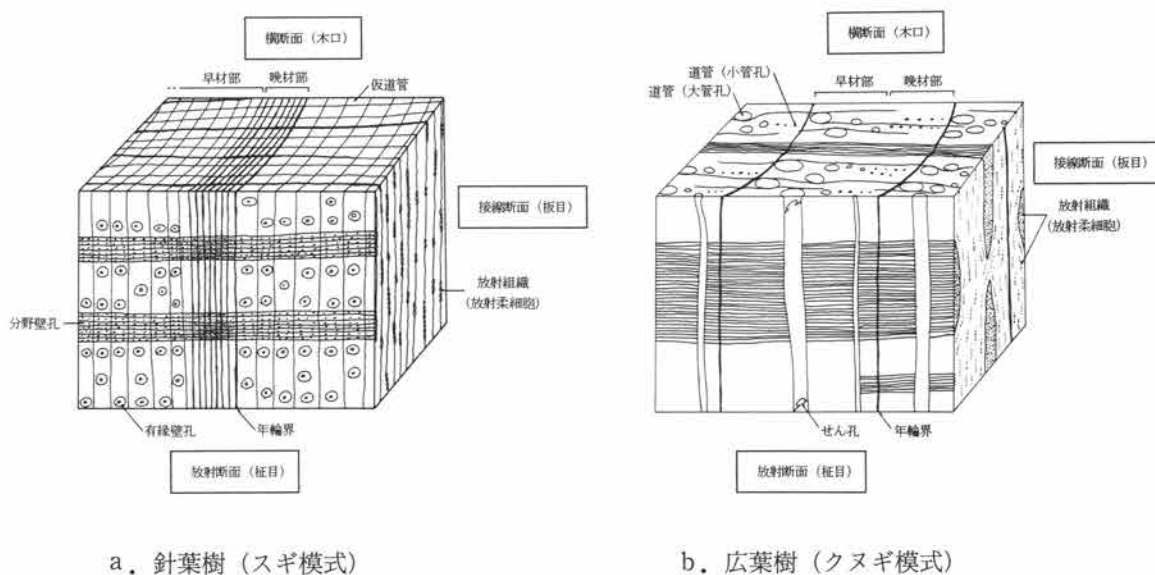
ここでは、これら炭化材（一部生材を含む）の樹種を同定し、建築部材としての樹種構成あるいは樹木選択などについて検討する。また、炭化材以外で炭化した草本類が認められるため、草本類を同定するためにプラント・オパール分析も試みた。なお、炭化材の樹種は藤根、プラント・オパール分析は鈴木がそれぞれ担当した。

2. 方法と記載および結果

a. 炭化材の樹種

試料は、炭化材と生材があり、炭化材は、1号住居跡から出土した炭化材が67点、2号住居跡が56点、3号住居跡が27点で、合計150点である。生材では、2号住居跡の柱材2点、割材1点、流木3点の合計6点である。

炭化材については、実体顕微鏡下で主に横断面（木口）を中心に組織的特徴に基づいて分類する。この段階において、同定可能なものについてはその代表的試料について、また電子顕微鏡を用いて観察しないと同定出来ない炭化材はすべての試料について、それぞれカミソリ刃などを用いて横断面（木口と同義）、接線断



第90図 材組織とその名称

面（板目と同義）、放射断面（柁目と同義）の3断面を作成する。これら試料は、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM T-100型）で観察・同定した。

生材については、群馬県埋蔵文化財調査センターにおいて、プレパラートの作成が行われた。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40～400倍の倍率で観察を行う。作成したプレパラートは、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

いずれも樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、材標本の記載と同定の根拠を示す。なお、記載中の材組織用語については、第90図にその概略を示す。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 P L 42 (1 a～1 c)

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して分布する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である。道管と放射組織との壁孔は、蜂巢状を呈している（放射断面）。放射組織は柔細胞で単列異性であり、3～16細胞高である。また、末端細胞は長く伸び平伏細胞からなる（接線断面）。

以上の形質から、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定される。ヤナギ属の樹木には、日本において約40種程度あり、高木から低木までその大きさはさまざまである。ヤナギ属の樹木は、陽光の水湿地に生育する落葉広葉樹である。

ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 P L 42 (2 a～2 c)

中型の管孔が単独あるいは2～4個複合してまばらに配列する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は11本程度の横棒からなる階段状せん孔である（放射断面）。放射組織は、単列のものと集合状のものがある（接線断面）。

以上の形質からカバノキ科のハンノキ属の材と同定される。ハンノキ属の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ (*A. japonica*)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ (*A. hirsuta*)、そして山地に生育するヤシヤブシ (*A. firma*) などが分布している。ハンノキ属の樹木は、いずれも陽のよく当たるところに生育する樹高20m、幹径50cmに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 P L 42 (3 a～3 c)

年輪のはじめに大型の管孔が1～3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、6～15細胞高である（接線断面）。

以上の形質からブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 P L 43 (4 a～4 c)

年輪のはじめに大型の管孔が1～2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ (*Q. acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 P L 43 (5 a～5 c)

第V章 自然科学的検討

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 P L 43 (6 a ~ 6 c)

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が夏材部で接線方向に数個複合して分布する環孔材で、また木部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、3~42細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

モモ *Prunus persica* Batsch. バラ科 P L 44 (7 a ~ 7 c)

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~3列ほど並び、そこから径を減じた小管孔が2~4個放射方向ないしやや斜めに複合して散在する環孔性散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には明瞭ならせん肥厚が認められる(接線断面または放射断面)。放射組織は異性で、1~8細胞幅、2~49細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のモモの材と同定される。モモは中国北部原産であるが、日本には有史以前に渡来し、鑑賞用あるいは果樹として栽培され、一部野生状態で生えている。本種が日本に自生するという考えもある。

カエデ属 *Acer* カエデ科 P L 44 (8 a ~ 8 c)

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5個複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1~9細胞幅、4~85細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く、その種類も20種以上と多い。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 P L 45 (11 a ~ 11 c)

丸い小型の管孔が単独あるいは2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、複数の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、2~28細胞高で、単列および多列端部の細胞は長く延びる(接線断面)。

以上の形質から、ミズキ科ミズキ属のミズキの材と同定される。ミズキは、温帯から暖帯にかけて分布する樹高20m程度の落葉広葉樹である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 P L 44 (9 a ~ 9 c)

小型の管孔が放射方向に2~5個複合し、夏材部ではやや径を減じて放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は24本程度の太い横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~37細胞高である。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から

暖帯に分布するエゴノキ (*S. japonica*) や全国の温帯に分布するハクウンボク (*S. obassia*) あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク (*S. shirasawana*) などがある。

タケ亜科 (ササ類) subfam. Bambusoideae イネ科 P L 45 (10 a ~ 10 c)

左右の後生木部、外側の後生木部・原生節部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘が取り巻く維管束が、多数散在する (横断面)。

以上の形質から、イネ科のタケ亜科の稈と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的には識別できない。試料は、いずれも稈の厚みが6 mm前後で、その直径も比較的小さいことからササ類と思われる。

b. 炭化草本類

炭化材とともに何点かの植物遺体が検出され、このうち4点(第18表、1号住居: No. 6, 20, 3号住居: No. 9, 16)について植物珪酸体からの検討を試みた。

検討するに当たり、現生イネ科植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体 (ここでは機動細胞珪酸体) の有無を調べた。すなわち植物遺体を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原 (1976) にほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料について一部を取り出し、水を加えて超音波ホモジナイザーにて試料の分散を行った。この残渣についてグリセリンによりプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した (600倍)。

観察の結果、1号住居のNo. 20、3号住居のNo. 9とNo. 16の3試料においてウシクサ族の機動細胞珪酸体が多数認められ、以下にそれらの記載を示す。

断面形態は楔形をしており、裏面側においてこぶ状の凸部と溝状の凹部がみられる。縦長は平均47.94 μ m (最大56.10 μ m、最小35.70 μ m)、横長の平均が31.62 μ m (最大43.35 μ m、最小25.50 μ m) である。側面形態は裏面側において片方に落ちる長方形あるいは台形状を呈しており、側長の平均は17.60 μ m (最大22.95 μ m、最小10.20 μ m) である。表面形態は細長い長方形を呈し、裏面形態は長方形をしている。

なおウシクサ族にはススキ属、チガヤ属、カモノハシ属、ウシクサ属など日本には19属ある (北村・村田・小山 1964)。また1号住居のNo. 6の試料は珪酸体がほとんど得られず、この母植物については判断できない。

3. 考 察

3件の住居跡出土炭化材の樹種の検討の結果、炭化材150点から13分類群の樹種が同定された(第19表、第91・92図)。なお、表および図は、各出土地点で検出される分類群をすべて示してある。各住居跡で見ると、1号住居跡では、ヤナギ属 (10点)、ハンノキ属 (6点)、コナラ属コナラ節 (3点)、コナラ属クヌギ節 (1点)、ヤマグワ (1点)、モモ (1点)、ミズキ (1点)、エゴノキ属 (1点)、ササ類 (16点)、草本類 (1点)、草本類茎 (2点) の11分類群で、ササ類以外ではヤナギ属やハンノキ節の樹木が比較的多い。2号住居跡では、クリ (32点)、ヤマグワ (1点)、ササ類 (11点) の3分類群で、圧倒的にクリの材が多い。また、3号住居跡では、ヤナギ属 (10点)、クリ (2点)、コナラ属クヌギ節 (3点)、コナラ属コナラ節 (2点)、モモ (1点)、カエデ属 (2点)、ササ類 (2点) そして草本類 (2点) で、ヤナギ属の樹木が比較的多い。これら3住居跡において共通する分類群は、ササ類のみで共通樹木はなく、各住居ごとに異なった樹木を利用している(第19表)。なお、草本類としたものは、プラント・オパール分析からウシクサ族の葉であることが判

第V章 自然科学的検討

第18表 出土材樹種一覧

住居	試料No.	樹種	備考
1号	1	モモ、ササ類	ササ類:φ 7 mm
〃	2	ササ類	φ 5~6 mm
〃	3	欠番	
〃	4	ササ類	φ 4 mm
〃	5	欠番	
〃	6	ヤナギ属、コナラ節、草本類茎	
〃	7	ヤナギ属、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	8	〃	ササ類:φ 5~9 mm
〃	9	〃	ササ類:φ 6 mm
〃	10	〃	
〃	11	ヤナギ属、ハンノキ節、ササ類、草本類茎	ササ類:φ 4 mm
〃	12	ハンノキ節	
〃	13	クスギ節、ヤマグワ、ササ類、ハンノキ節	ササ類:φ 3~10mm
〃	14	ササ類	φ 3~6 mm
〃	15	〃	φ 6~9 mm
〃	16	ハンノキ節	
〃	17	ミズキ、エゴノキ属、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	18	ササ類	φ 6 mm
〃	19	ヤナギ属、ササ類	ササ類:φ 9 mm
〃	20	ヤナギ属、ササ類、草本類	草本類:ウシクサ族
〃	21	欠番	
〃	22	ヤナギ属、ササ類	ササ類:φ 5~9 mm
〃	23	ヤナギ属	
〃	24	ハンノキ節	
〃	25	コナラ節	
〃	26	ハンノキ節	
〃	27	コナラ節	紡錘車軸材
2号	1	クリ	
〃	2	クリ、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	3	クリ	生材、炭化材
〃	4	〃	
〃	5	クリ、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	6	クリ	
〃	7	〃	
〃	8	〃	
〃	9	〃	
〃	10	クリ、ササ類	
〃	11	クリ	
〃	12	〃	
〃	13	〃	
〃	14	〃	

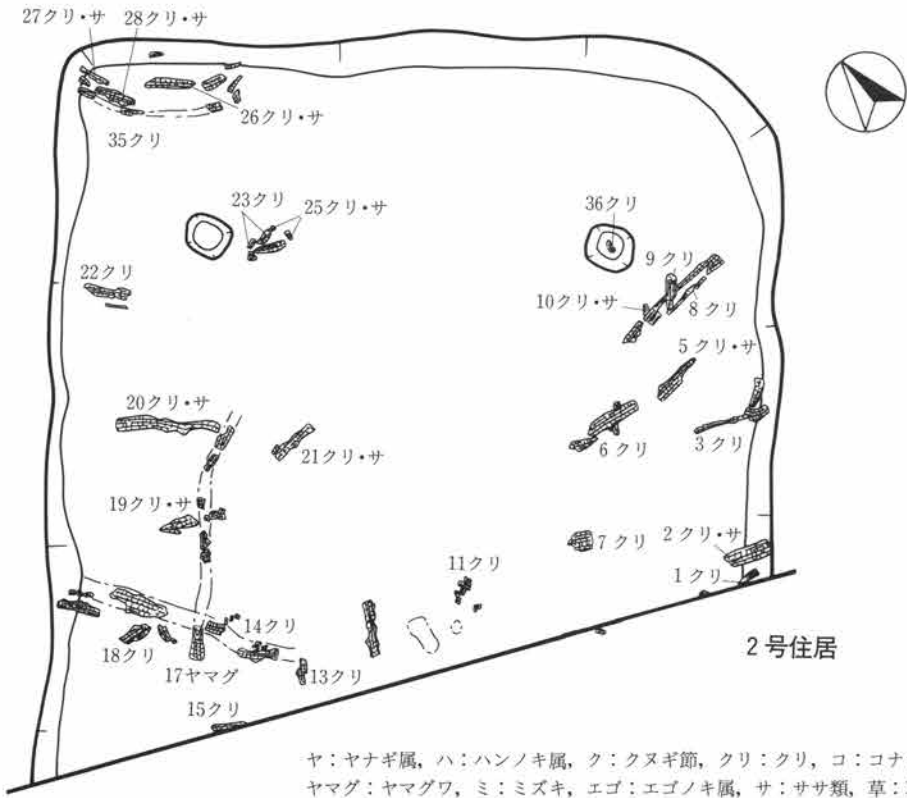
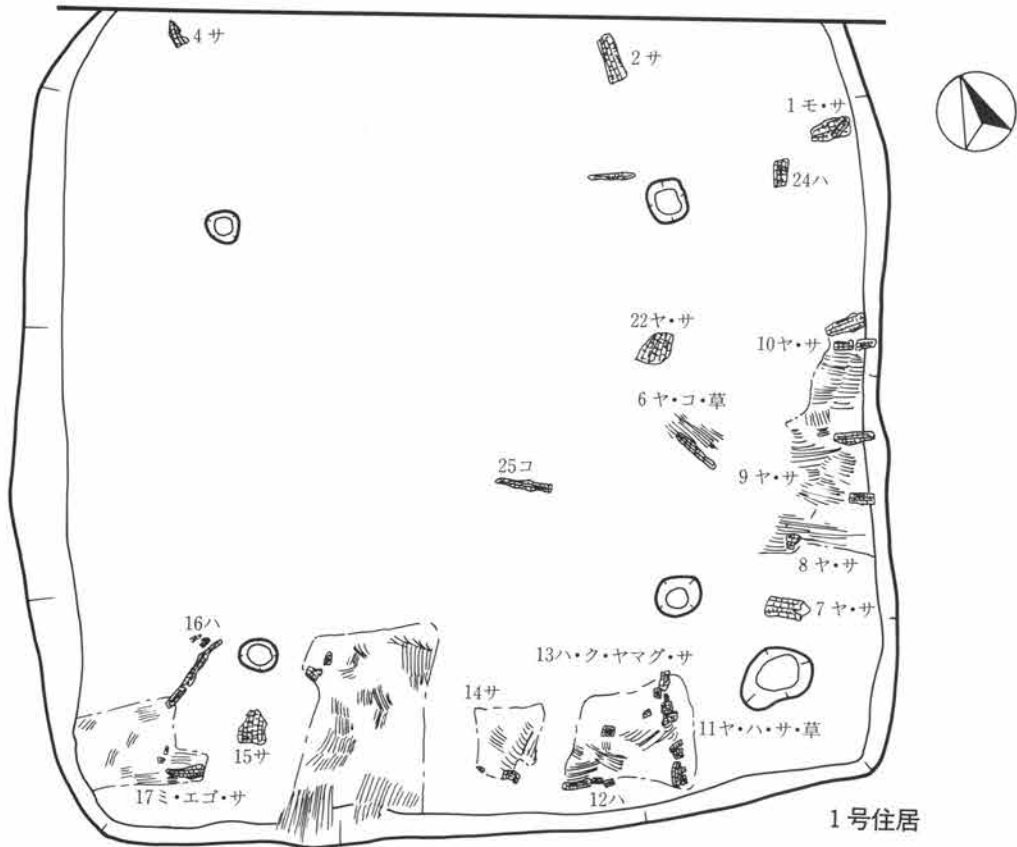
住居	試料No.	樹種	備考
2号	15	クリ	
〃	16	クリ、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	17	ヤマグワ	
〃	18	クリ	
〃	19	クリ、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	20	〃	生材、炭化材
〃	21	〃	ササ類:φ 4 mm
〃	22	クリ	
〃	23	〃	
〃	24	〃	
〃	25	クリ、ササ類	ササ類:φ 3~6 mm
〃	26	〃	ササ類:φ 5 mm
〃	27	〃	ササ類:φ 8 mm
〃	28	〃	
〃	29	欠番	
〃	30	欠番	
〃	31	欠番	
〃	32	クリ	
〃	33	〃	
〃	34	〃	
〃	35	〃	
〃	36	〃	
3号	1	クスギ節	
〃	2	モモ	
〃	3	ヤナギ属	
〃	4	コナラ節、ササ類	ササ類:φ 6 mm
〃	5	ヤナギ属	
〃	6	〃	
〃	7	カエデ属	
〃	8	ヤナギ属	
〃	9	ヤナギ属、草本類	草本類:ウシクサ族
〃	10	クリ	
〃	11	〃	
〃	12	ヤナギ属	
〃	13	カエデ属	
〃	14	コナラ節	
〃	15	ヤナギ属	
〃	16	ヤナギ属、草本類	草本類:ウシクサ族
〃	17	ササ類	φ 6 mm
〃	覆土	ヤナギ属	
〃	〃	クスギ節	
〃	〃	ヤナギ属	
〃	〃	クスギ節	

第19表 遺構別出土材樹種一覧

	ヤナギ属	ハンノキ属	クリ	クスギ属	コナラ節	ヤマグワ	モモ	カエデ属	ミズキ	エゴノキ属	ササ類	ウシクサ族	草本類茎	合計
1号住居	10	6		1	3	1	1		1	1	16	1	2	43
2号住居			32			1					11			44
3号住居	10		2	3	2		1	2			2	2		24
合計	20	6	34	4	5	2	2	2	1	1	29	3	2	111

明している。

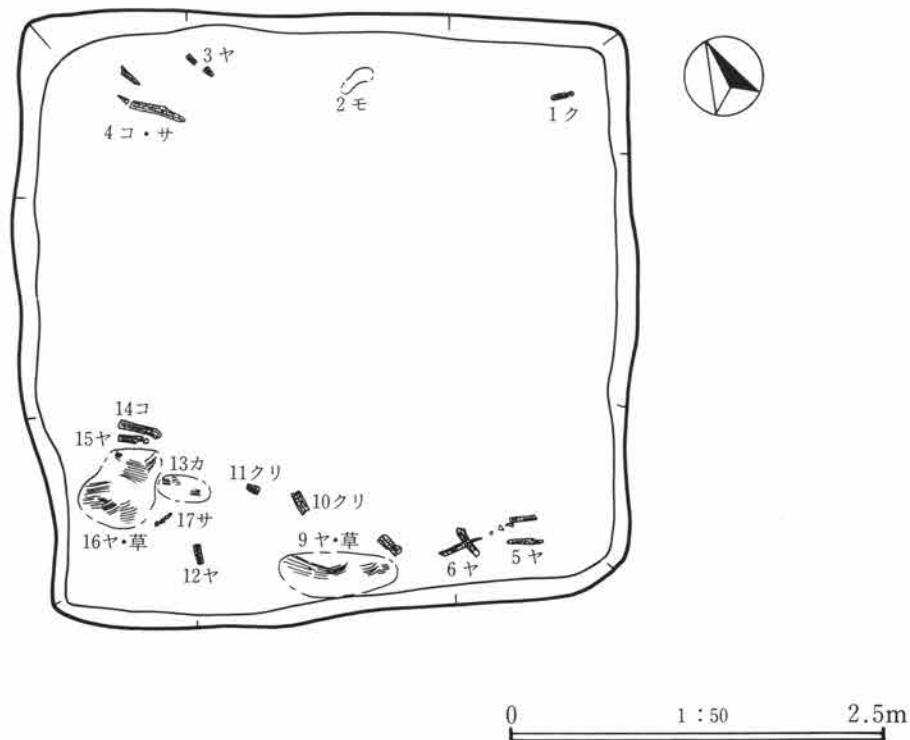
ここで樹種の検討を行った住居跡出土炭化材は、多くが建築部材（屋根材）が焼失によって炭化材として残ったものである。このようにいずれも古墳時代中期の住居跡で、互いに隣接した住居跡であるにもかかわらず、建築部材としての共通樹種がないのは興味深い。また、樹木選択について見ると、2号住居では、大



ヤ：ヤナギ属，ハ：ハンノキ属，ク：クヌギ節，クリ：クリ，コ：コナラ節，モ：モモ，ヤマグ：ヤマグワ，ミ：ミズキ，エゴ：エゴノキ属，サ：ササ類，草：草本類

第91図 1・2号住居の炭化材出土状況とその樹種

0 1:50 2.5m



第92図 3号住居の炭化材出土状況とその樹種

半がクリの材であることから、1樹木（クリ材）に対する選択度は高いと言える。

ところで、これら3住居が成立した古墳時代中期の遺跡周辺の植生は、当遺跡から西へ6kmほど離れた日高遺跡での花粉化石からある程度推定される（徳永、1982）。樹木花粉のみに注目すると、コナラ亜属（コナラ節とクヌギ節からなる）、スギ属、モミ属、ツガ属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属、アカガシ亜属、クリ属などが見られ、前時代と比べコナラ亜属を代表とする広葉樹が減少するのに対し、スギ属、モミ属、ツガ属が増加している。

行力春名社遺跡の3住居跡から出土した炭化材樹種は、大半が周辺で生育していた樹木であることが分かる。しかし、1号および3号住居ではヤナギ属の樹木が多いが、一般的には多い樹木とは言えない。こうした状況は、1号や3号住居において、ヤナギ属の樹木に対する選択度は高いと判断される。

本来、建築部材などの樹種選択については、対象とする時代で、かつ隣接した地域での自然木の樹種データや花粉データとの比較において行われるのが最良と思われる。近年、県下では自然木や木製品の樹種検討が盛んで、また花粉分析なども多く行われている状況から、今後樹木に関する資料が多く得られ、樹木選択に関する基礎的研究が可能であると思われる。

引用文献

- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体 標本と定量分析法—」『考古学と自然科学9』p.15-29.
- 北村四郎・村田 源・小山鐵夫（1964）『原色日本植物図鑑 草本編〔Ⅲ〕』保育社、465p.
- 鈴木三男・能城修一（1988）「7 鑑定、分析、(1) 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元」『新保遺跡Ⅱ、弥生・古墳時代集落編、—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集—』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、435-453.
- 徳永重元（1982）「8—1. 日高遺跡の花粉分析」『日高遺跡、—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集—』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、349-360.

第4節 行力春名社遺跡出土の粘土質物質について

菱田 量 (株式会社パレオ・ラボ)

1. 概 要

群馬県高崎市行力町に所在する行力春名社遺跡において、古墳時代中期とされる住居址（1号住居址）が見いだされた。この住居址の中央部の床面に付着するように灰色から灰白色の粘土質物質が径50～60cmの範囲で分布している状態で出土した。また、本遺跡では暗緑色を呈する滑石および蛇紋岩などの石製模造品やその原石となったと考えられる岩石も出土しており、粘土質物質中にそれらの破片が含まれる部分もみられることから、この粘土質物質は、原石を加工する際に出た粉末である可能性が考えられる。そのため、ここでは粘土質物質の構成元素からその特徴を明らかにし、原石との関係を考察するために蛍光X線分析を行った。

2. 試料および分析方法

試料は出土した粘土質物質（No.1）、比較試料として同遺跡で出土した原石と考えられる岩石（No.2）、および周辺部覆土の土壌（No.3）を用いた。なお、試料No.2の岩石は軟質であり一般に滑石あるいは滑石片岩とよばれるもので、蛇紋岩が変質して滑石化したものであるが、暗緑色で硬質な部分もあり、蛇紋岩的な部分も含まれると考えられる。また、分析試料は条件をそろえるため、すべてタングステンカーバイト製の乳鉢で粉末にしたものを使用した。分析は、エネルギー分散蛍光X線分析計(SEA-2001L：セイコー電子工業㈱製、Be薄型-X線管球)を用いて蛍光X線を計測し、スペクトルで表した。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電圧15KVで試料室内を真空にして行った。

3. 結果および考察 (第93・94・95図)

蛍光X線の測定結果をみると、いずれの試料も主な元素として、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) などのピークが検出される。さらに、粘土質物質の試料No.1と原石の試料No.2には特徴的にマグネシウム (Mg) のピークが明瞭に認められ、周辺部覆土である試料No.3ではほとんどみられない。半定量分析を行うと、酸化マグネシウム (MgO) が試料No.1で約18%、試料No.2で約26%と比較的高い値で含まれ、試料No.3では約1%と非常に低い。マグネシウムとケイ素の蛍光X線強度比 ($MgK\alpha/SiK\alpha$) においても試料No.1が0.08、試料No.2が0.17と高く、試料No.3は0.008と明らかに低い値になっている。

滑石 (滑石片岩) や蛇紋岩には主要な構成鉱物として滑石 (タルク) や蛇紋石が含まれており、それぞれ化学組成は $Mg_3Si_4O_{10}(OH)_2$ および $(Mg, Fe)_6Si_4O_{10}(OH)_8$ である (都城・久城, 1972など)。原石 (試料No.2) のMgのピークはこれらの鉱物中のMgOによるものであり、このようにMgOに富む岩石は、主としてカンラン岩などの超マフィック岩類 (超苦鉄質岩類) およびこれらの一部が変質して形成された蛇紋岩などに限られる。したがって、出土した粘土質物質 (試料No.1) においても明瞭なMgのピークが確認されることと、周辺部覆土 (試料No.3) からはごくわずかしきMgが検出されないという分析結果に加えて、粘土質物質中に原石の破片が含まれているなどの状況的な証拠をふまえて考慮すると、この粘土質物質は原石となる滑石および蛇紋岩に由来するものと推定される。

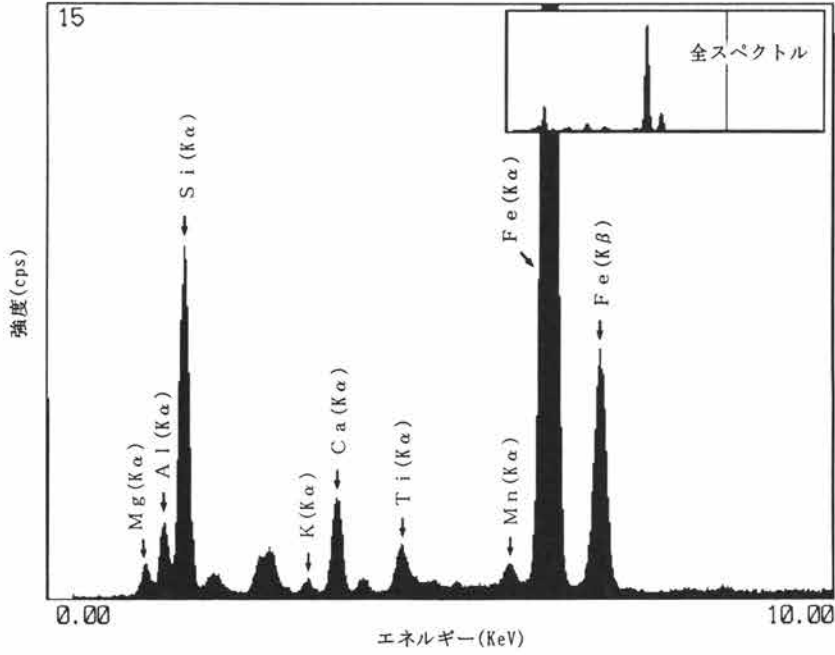
第V章 自然科学的検討

引用・参考文献

都城秋穂・久城育夫 (1972) 『岩石学I 偏光顕微鏡と造岩鉱物』 219pp.

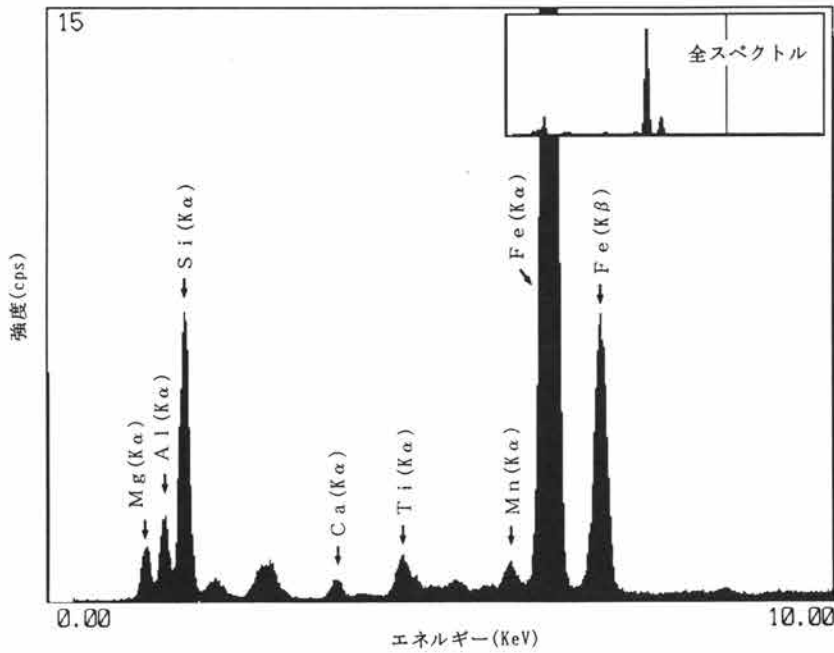
都城秋穂・久城育夫 (1975) 『岩石学II 岩石の性質と分類』 171pp.

高橋直樹 (1992) 「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」『千葉県文化財センター研究紀要13』 225-243pp.



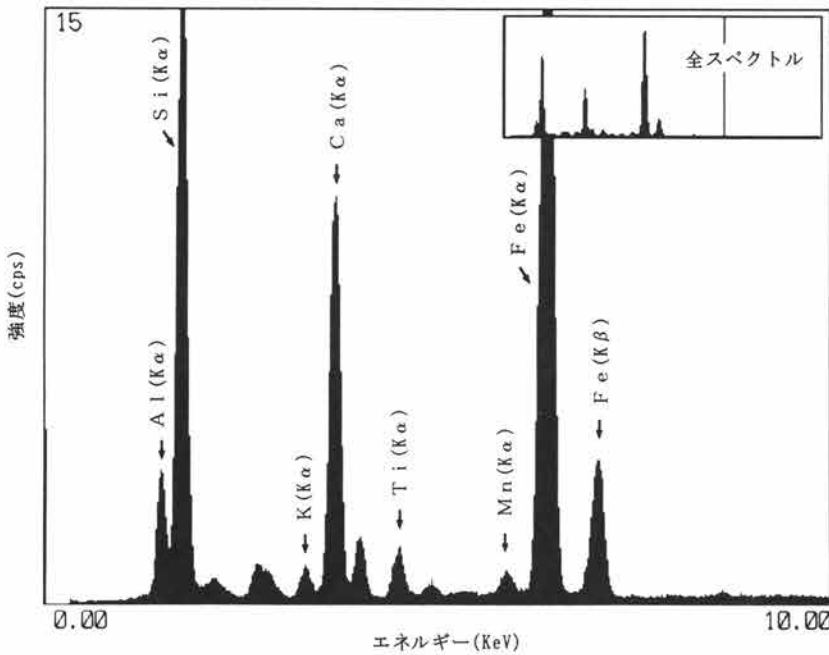
第93図 試料No.1 (粘土質物質) の蛍光X線スペクトル図

Mg: マグネシウム, Al: アルミニウム, Si: ケイ素, K: カリウム, Ca: カルシウム, Ti: チタン, Mn: マンガン, Fe: 鉄



第94図 試料No.2 (原石) の蛍光X線スペクトル図

Mg: マグネシウム, Al: アルミニウム, Si: ケイ素, Ca: カルシウム, Ti: チタン, Mn: マンガン, Fe: 鉄



第95図 試料No.3 (周辺部土壌)の蛍光X線スペクトル図

Al: アルミニウム, Si: ケイ素, K: カリウム, Ca: カルシウム, Ti: チタン, Mn: マンガン, Fe: 鉄

第5節 行力春名社遺跡出土の赤色顔料について

菱田 量 (株式会社パレオ・ラボ)

1. 概要

群馬県高崎市行力町に所在する行力春名社遺跡の3号住居址における黒褐色から褐色の土壌中に明瞭な赤色を呈する部分が出土した。この赤色な部分は土壌に付着するようにやや淡い色で産するものと、1cm四方前後の大きさである程度濃集した赤色を示すものがある。ここでは、赤色な部分の構成元素を明らかにし、どのような種類の赤色顔料であるかを判断するために蛍光X線分析を行った。

2. 分析方法および結果 (第96・97図)

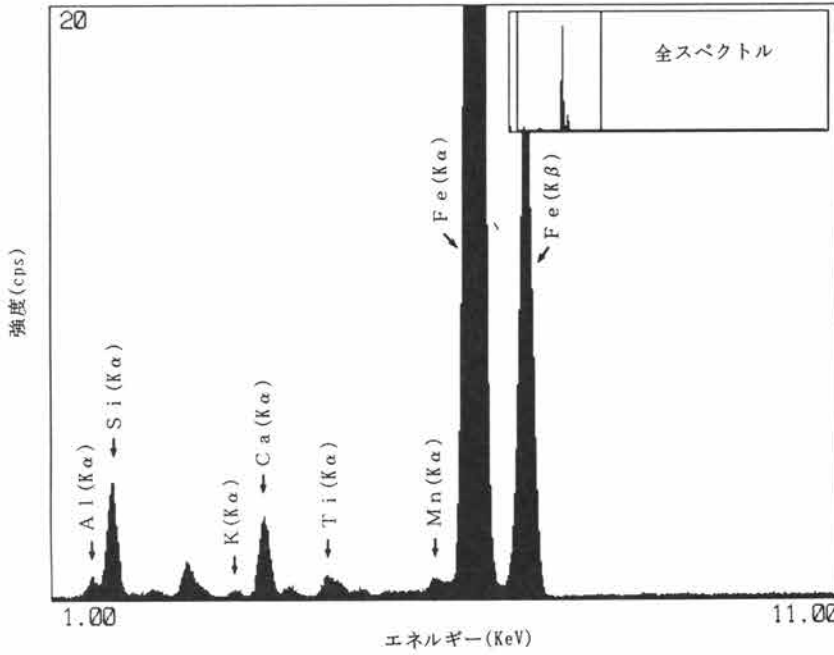
ここでの分析は試料を非破壊で扱うため、試料の表面が極力平坦で、かつ赤色な部分がある程度濃集する箇所(試料A)を選定して測定を行った。さらに、比較試料として周辺部の土壌(試料B)についても平坦部を測定した。分析はエネルギー分散型蛍光X線分析計(SEA-2001L:セイコー電子工業㈱製, Be薄型-X線管球)を用いて蛍光X線を計測し、スペクトルで表した。測定条件は、測定時間は300sec、照射径3mm、電圧50KVで試料室内を真空にして行った。なお、試料Aについては、赤色な部分が濃集する箇所を選んでいるが、面積が小さいため、土壌の部分もやや混入した測定結果が得られていると思われる。分析の結果、試料A、Bともに主な元素としてアルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) などのピークが検出され、ストロンチウム (Sr)、ジルコニウム (Zr) も認められる。水銀 (Hg)、や鉛 (Pb) は認められない。また、鉄とケイ素のX線強度比(FeKa/SiKa)は赤色部分(試料A)で40.1、周辺土壌(試料B)で6.1であり、赤色部分で明らかに鉄のX線強度が高いことを示す。したがって、赤色部分は鉄を主成分とする元素組成であると考えられる。半定量分析を行った結果においても試料Aの酸化第二鉄(Fe₂O₃)は

約32%で、試料Bでは約8%と赤色部分の方が高くなっている。なお、この結果は非破壊の分析のため試料の表面が平滑でなくかつ不均質であるため、ある程度の誤差を含むものと思われる。

赤色顔料の種類としては、水銀朱 (HgS)、ベンガラ (Fe₂O₃)、鉛丹 (Pb₃O₃) などが知られている (市毛, 1984など)。本遺跡より出土した赤色部分の試料は、蛍光X線分析から鉄を主体とし、水銀や鉛を含まないことから、ベンガラを主成分とする赤色顔料と考えられる。

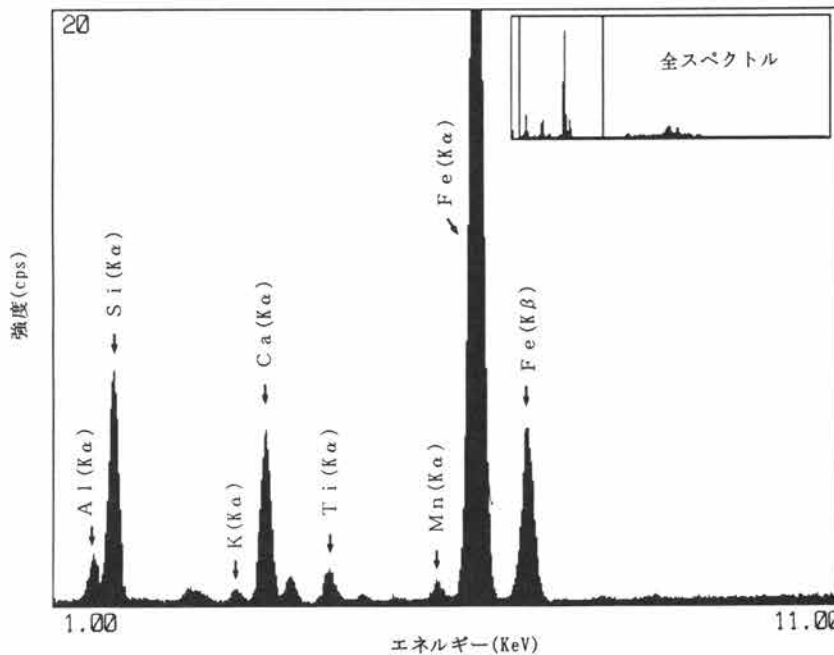
引用文献

市毛 勲 (1984) 『増補 朱の考古学 考古学選書12』, 雄山閣出版



第96図 試料A (赤色部分)の蛍光X線スペクトル図

Al: アルミニウム, Si: ケイ素, K: カリウム, Ca: カルシウム, Ti: チタン, Mn: マンガン, Fe: 鉄



第97図 試料B (周辺土壌)の蛍光X線スペクトル図

Al: アルミニウム, Si: ケイ素, K: カリウム, Ca: カルシウム, Ti: チタン, Mn: マンガン, Fe: 鉄

第6節 行力春名社遺跡出土の馬歯・馬骨

宮崎重雄（群馬県立大間々高等学校）

1. はじめに

行力春名社遺跡は、群馬県高崎市行力町に所在し、北陸新幹線建設工事に伴い発掘調査されたものである。ここに報告するのは、この遺跡内の2基の土坑および2本の溝中から出土した計4頭分の馬歯・馬骨についてである。この馬の年代は、浅間B軽石(1108年降下)・隣接遺跡の年代との関連から、14世紀後半から16世紀中頃までと考えられている。

本稿では、編集担当者の依頼により、遺跡出土の馬に関する解説的な内容も加えた。

本報告では、馬の体高区分は林田(1978)の中型馬、小型馬を、年齢をLevine(1982)による歯冠高による推定法を用いた。

2. 記 載

3号土坑馬 1個体に由来する上顎の白歯9本と下顎の白歯8本と白歯の破片および若干の四肢骨が出土した。

土坑の形状は南北方向に長軸を持つ長方形で、径は168×105cmである。馬体は頭部を南に置き、尾部を北に置いて、左側を上にし、四肢骨を東に屈曲させた横臥姿勢で埋存していた。

この馬は、歯冠高からの年齢推定法では、8～9歳である。この年齢はヒトの30歳前後すなわち壮年期に相当し、老衰による自然死の年齢ではない。犬歯が検出できず、性別は不詳である。下顎第一前白歯から第四前白歯までの前白歯列長は82.8mmで、西中川・松元(1991)の示すデータに照合すると、木曾馬の雄(81.3mm)や・御崎馬の雌(81.9mm)に最も近く、中型在来馬相当であることを示している。

27号土坑馬 上顎の白歯6本と下顎の白歯6本と白歯の破片および若干の四肢骨が検出されている。土坑の形状は東西方向に長軸を持つ不整の双円形形で、径は175×140cmである。馬体は頭部を西に置き尾部を東に置いて、左側を上にし、四肢骨を南に屈曲させた横臥姿勢で埋存していた。

年齢は8歳前後が推定される。性別は不明である。下顎の全白歯列長は171.6mmと算出され、西中川・松元(1991)の示すデータに照合すると、サラブレッドの雄(173.0mm)・雌(173.5mm)に近く、現在の中型在来馬を凌ぐ、サラブレッドやアラブに匹敵する体高を窺わせている。おそらく、当時としては際立って大きな個体で、多くの人の目を引く存在であったろう。

群馬県内で見ると、土坑内に馬が埋葬されている例は中世に多く見られ、近世になると、土坑でなく、馬骨の集合体として出土することが一般的である。このことからしても、土坑に埋存していた上記2個体の馬を中世馬とみることに矛盾はない。

4号溝馬 上顎白歯2本が検出されているが、不完全な歯で、得られる情報は少ない。歯冠高の示す年齢は6歳前後である。性別は不明である。体高推定も困難であるが、当時としては多数を占めていた中型在来馬相当の個体でないだろうか。

その他の上顎歯、下顎歯の存在しない理由については明確ではない。

36号溝No.5馬 下顎の白歯だけ6本が検出されている。歯冠高から推定される年齢は10歳前後である。前

第V章 自然科学的検討

臼歯列長は83.6mmで、(西中川・松元, 1991)の示すデータの御崎馬の雄(85.3mm)・雌(81.9mm)、木曾馬の雄(81.3mm)に比較的近く、中型在来馬相当の馬であることを示している。性別は不明である。

以上みる通り、本遺跡出土の4個体の馬は、いずれも比較的若齢で、高齢による自然死というものでなく、死因は屠殺によるか、事故死・病死が考えられるが、現状で観察する限り、歯や骨に、そのいずれであったかを示す痕跡は見あたらない。

3. 論 議

鎌倉市材木座から新田義貞の鎌倉攻めの際(1933)に戦死したとされる当時の軍馬の遺骨が少なくとも38頭分出土したことがある。四肢骨の長さによって体高推定を行ったところ、109~140cmの間に分布し、小型馬と中型馬が混在していることがわかった。平均体高は129.5cmで、在来馬の小振りの中型馬に相当している。すなわち、当時の軍馬は中型馬が多数をしめていることが判明した(林田, 1975)。

県内の例では、高崎市の融通寺遺跡の土坑内からほぼ全身骨格を保存した馬骨が出土したことがある。推定体高は鎌倉軍馬の平均体高にきわめて近い129.3cmと算出され、中型在来馬相当であることが分かっている。年齢は11歳である(宮崎, 1991)。

この例からみても、行力春名社遺跡出土の各馬は、27号土坑馬が特別大きく目立つということはあっても、残り3頭は中型在来馬相当と想定されるもので、当時(中世)としては、ごく普通の体高の個体であったといえよう。融通寺遺跡の馬の年齢が11歳で、馬の寿命の半ばのところで命を絶たれているのも本遺跡と共通していて、興味の持たれるところである。

ところで、ほぼ同時代の行力春名社遺跡の4個体の馬が、土坑内と溝内という性格の異なる2種の遺構に埋められていた理由は何なのだろうか。土坑内の2個体は、解剖学的位置を保った状態で出土していることから、遺体をそのまま埋葬したのであろう。ところが、溝出土の2個体は臼歯のみが検出されたもので、歯のみ、あるいは頭だけが投げ込まれた可能性があり、若齢個体であることを合わせ考えると祭祀との関連性が思い浮かぶ。

馬の頭骨を祭る習俗は、中世・近世にも実際に行われていた(土肥, 1983)し、馬の死後、首を大切に残し、祭って置く習慣があった(小島, 1991)また、近代まで雨乞い習俗として、馬骨を沼や溝・川に投げ込んで降雨を祈願するということが日本各地で行われていた(高谷, 1982)。これらの習俗は、本遺跡の溝中から出土した馬歯の埋存理由を考察する場合に、直接的つながりは言及できないにしろ、大いに参考して良い事例ではある。

4. 馬骨の解説

(1) 馬の年齢推定法

馬の仲間は、第三紀中新世以降森林が草原化したことで、生活の場を森林から草原へと移した。草原で堅いイネ科植物などを食べるようになると、歯の咬耗は急激に進むようになり、長い歯(高冠歯)を持つことで、適応していった。現代の在来馬では、最大長が8cmにも達する歯もある。しかし、どんな長(高)くて堅固な歯でも、長年の間には咀嚼によって、だんだん短くなり、歯根を残すのみになってしまう。要するに歯は年と共に短くなって行くもので、歯の長(高)さ(咬耗度)を調べれば、大体の馬の年齢はわかるというものである。もちろん飼料の種類とか質あるいは馬の歯質のちがいで、咬耗の程度に差が生じ、少なからず誤差を含んでしまう難点はある。しかし、遺跡においては歯の遺存度が最も高く、残存しやすい部

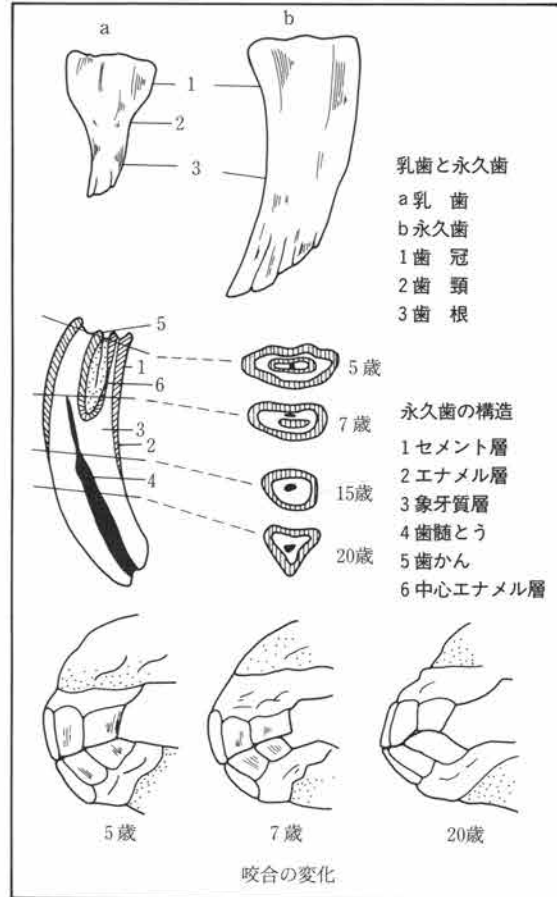
位であることから、重要な情報源であることには間違いない。

ただし、この方法は遺跡から出土する馬には適用できるが、生きている馬では不可能である。どの歯も、歯茎から顔を出している部分はごくわずかで、ほとんどが歯槽の中に埋もれていて、咬耗でどの程度短くなっているか分からないからである。生きている馬でも年齢を知るには、歯を調べることに変わりはなく、切歯の咬耗面の模様や生え替わり具合を調べるのである。ウマの歯は人と同じ様に、成長につれて萌出し、やがて生え替って咬耗していく。特に切歯は口を開けて観察しやすいところにあり、昔から馬の取り引きの際に、年齢判定の重要ポイントとされてきた。当歳から明け3歳までは乳歯の咬耗、明け4歳から明け6歳までの乳歯の脱落と永久歯の萌出、明け7歳から明け12歳までの永久歯の咬耗、明け13歳以上は咬耗面の形や歯星の大きさ、上顎・下顎切歯の咬合の角度を観察するのである。歯の生え替わりの時期も品種や栄養状態、飼育方法等で異なるため、あまり厳密なこととは言えない（野村，1986）。

まだ咬耗の始まっていない切歯（前歯）の咬合面には漏斗状のカップという凹陷部があり、セメント質が詰まっている。咬耗がある程度進んで明け6歳位になると、切歯の咬合面にはエナメル質が最外周と内側の二重の輪となって観察される。内側の輪はカップのエナメル質で、外側の輪は歯全体を被うエナメル質である。食物による汚染でカップ内のセメント質が黒色化し、これは黒窩と呼ばれている。咬耗がさらに進んだ明け10歳位になると、歯星と呼ばれる歯髄が咬合面に現れる。咬合の変化の様子は第98図に示す。

各歯の生え替わり時期は第20表に示してある。例えば、前歯の両側にある第三切歯（隅歯）が一番最後に生え替わり、4歳半の頃であるから、成獣にいたる少し前ということになる。犬歯が生えるのも大体この時期であり、年齢判定の基準になる。このように、歯の生え替わり時期にある馬の年齢推定はかなり高い精度のできるのである。

体幹・体肢骨による年齢推定法もあるが、多くの場合体幹・体肢骨は腐食していて、これを利用できる機会は限定されてしまう。（藤田，1989）によって一例を述べれば、幼齡馬は足の関節が厚い軟骨ができていて、その節々が膨らんでいるが、年を取るに



第98図 咬合の変化図 野村（1986）より引用

第20表 歯の発生時期一覧表

歯の名称	略号	発生の年、月齢(満)
A 乳歯	1	
第1切歯(門歯)	Di 1	生時または1週
第2切歯(中歯)	Di 2	4~6週
第3切歯(隅歯)	Di 3	6~9カ月
第1前白歯	Dp 2	生時または生後2週間以内
第2前白歯	Dp 3	
第3前白歯	Dp 4	
B 永久歯	1	
第1切歯(門歯)	I 1	2½年
第2切歯(中歯)	I 2	3½年
第3切歯(隅歯)	I 3	4½年
犬歯	C	4~5年
第1前白歯(狼歯)	P 1	5~6カ月
第2前白歯	P 2	2½年
第3前白歯	P 3	3年
第4前白歯	P 4	4年
第1白歯	M 1	9~12カ月
第2白歯	M 2	2年
第3白歯	M 3	3½~4年

備考 P 3、P 4は上顎歯の発生を示す。下顎歯はこれより6カ月早く発生する。野村（1986）より引用

第V章 自然科学的検討

つれて段々とかたまっていく。これを化骨といってまず蹄関節から始まって、段々上のほうにいて、最後に背骨が化骨するのが、明け6歳である。他の体幹・四肢骨も化骨（骨端癒合）時期は決まっています、年齢判定の基準として利用されている。

以上の生きている馬の年齢判定法として述べてきた歯の生え替わり時期、咬合面の模様、体幹・四肢骨の化骨時期などの利用は、遺跡出土の馬骨にも適用できることはいうまでもない。

(2) 性別の判定

馬骨の性別の判定は、寛骨の形態を調べるか、犬歯の有無を確認する方法がとられているが、寛骨で性差を確認できるほど保存良好な出土をした例を筆者は知らない。

犬歯は多くの雌ウマでは欠けていて、雄のみの切歯並の大きさのものが存在する。雌でも時に、犬歯を持ったものもいるが、せいぜいマッチ棒ほどでしかなく、雄の大きさとの違いは一目瞭然である。ところが、発掘現場においては切歯・犬歯の生えている前歯部が壊されていることが間々あり、犬歯の存在を確認できない状態になってしまっている。そうすると、それが本来無かったのか、発掘時以降に欠損・消失したのかの判断ができず、結局、性別不明とするしかない。発掘の際にこの部分の扱いを注意することによって、重要な情報源の消滅を防ぐことができる。

(3) 体高の推定

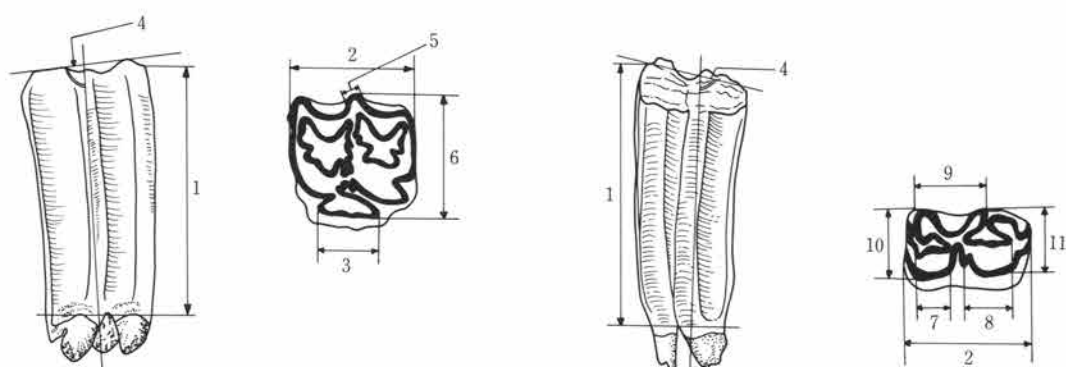
馬では前肢の部分での、背の高さを体高と呼んでいる。遺跡出土の馬の体高を知ることは、その馬の当時の使役のされ方・馬の系統を考察する上で、重要である。保存状態が良ければ、出土したすぐの時点で、馬の起立姿勢を想定し、蹄の先から肩口までを計測しておくのが最良である。これが不可能の場合は、四肢骨や頭蓋骨の計測値から体高を推定する公式（林田・山内，1957；西中川・松元，1991）が用いられるもので、多少保存の良くない馬骨でも体高を得ることはできる。特に四肢骨は骨が厚くできていて、遺跡出土の馬骨のなかでは残存度が良く、体高推定の基礎データが得やすい部位である。とりわけ最大長が大切で、この値から求められた体高がもっとも実体高に近いものとなる。発掘の際には、写真うつりの良いよう、見栄え良い発掘をしがちであるが、骨端部を壊してしまう恐れがあり、大切なデータを失ってしまうことになりかねない。あまり崩壊の進んでない時点でいくつかの部位の骨端から骨端までの正確な長さを計測しておかれるよう、要望したい。

(4) 馬歯の計測法

前述のように馬歯はエナメル質でできているため、保存が良く、馬骨のなかでは遺跡から出土する割合が最大である。このため、記録保存として馬歯の計測値を取ることも多くなり、この際に役立てるよう計測ポイントを第99図にして示しておく。

引用文献

- 土肥 孝 (1983) “いけにえ”の起源をさぐる。アニマ, No121, 22-27
藤田秀司 (1989) 『馬』秋田文化出版社, 秋田
林田重幸・山内忠平 (1957) 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部研究報告, 6』146-156
林田重幸 (1957) 「中世日本の馬について」『日本畜産学会報』28, 301-306
林田重幸 (1978) 『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬会
小島 禮 (1991) 「神々の島—日本の神信仰とヨーロッパの魔の狩人—」『人・世界・馬』東京美術, 東京, 79-98
Levine, M. A (1982) 'The use of crown measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth' In Wilson, B, Grigson, Caroline & Payne Sebastian eds., *Aging and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*. BAR British Series 109, 223-250
宮崎重雄 (1991) 「融通寺遺跡出土の馬骨について」『融通寺遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社, 721-723
西中川 駿・松元光春 (1991) 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究 古代遺跡出土骨からみたわが国牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成2年度 文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書』164-197
野村晋一 (1986) 『概説馬学』新日本教育図書, 東京
高谷重夫 (1982) 『雨乞習俗の研究』法政大学出版局



上顎白歯

下顎白歯

1 歯冠高 2 歯冠長 3 原錐幅 4 咬合面の傾斜 5 中附錐幅 6 歯冠幅 7 下後錐谷長
8 下内錐谷長 9 double knot 長 10 前葉歯冠 11 後葉歯冠

第99図 馬歯計測ポイント図

第21表 3号土坑馬歯（上顎）計測値表

上顎白歯

	歯種	第二前白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第二前白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第三後白歯
	No.	12	16	13	20-2	10	11	20-1	15	30
	左右	L	L	L	L	R	R	R	R	R
歯冠長	咬口面		27.6				28.2			30.3
	中央	29.0+	27.0	25.0+	24.0+	28.4+		25.0+	24.1+	28.4
原錐幅	咬口面			15.0						
	中央			14.6						
歯冠高	頬側	49.4	53.1	58.7	49.6	48.6	54.0	56.4	47.8	50.3
	舌側			53.6						
咬合面の傾斜		91	82	80	82	86	80	78	84	55
中附錐幅	咬口面	5.6	5.0	3.6	3.1	5.8	5.1		3.0	3.6
	中央	5.6	5.6	4.4	3.4	5.2	5.4	4.2	3.4	4.2

第22表 3号土坑馬歯（下顎）計測値表

下顎白歯

	歯種	第二前白歯	第一後白歯	第二後白歯	第三後白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第三後白歯
	No.	29	27	28	31	9	8	18	7
	左右	L	L	L	L	R	R	R	R
歯冠長	咬口面	27.0	31.4	25.4	30.3				29.1
	中央	27.7	31.4	25.4	31.4	24.4+	23.7	21.5+	30.1
歯冠幅	前葉咬口面	15.4	13.8	12.7	12.0				
	中央	14.6	13.8	12.0	12.1		13.3		11.3
歯冠高	頬側	44.5	34.5	52.8	52.3				53.5
	舌側	44.7	32.3	49.5	50.4	44.2	51.2	42.4	53.0
下後錐谷長		10.2	6.0		8.0	9.0			7.9
下内錐谷長		14.1	16.2	10.8	11.0	13.5	12.5		10.9
double knot長	咬口面	15.1	13.4	12.4	12.0	15.3			12.3
	中央	15.4	13.4	12.4	12.0	15.6	15.4	14.4	12.6
咬合面の傾斜		90		76	75	90	80		78
下内錐幅		6.6	5.7	5.2	4.3	6.3	6.2		4.7

第V章 自然科学的検討

第23表 27号土坑馬齒（上顎）計測値表

上顎白歯

	齒種	第二前白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第二後白歯	第三後白歯
	左 右	R	R	R	R	R	R
齒冠長	咬口面	15.9+	29.6+	29.1	24.3	24.4	24.0
	中 央		27.5+	29.5	25.0	24.2	27.9
原錐幅	咬口面				11.7	11.9	11.4
	中 央		12.5		11.5	12.5	12.7
齒冠高	頬側	52.5	55.3				
	舌側			60.2	52.5	61.2	56.3
中附錐幅	咬口面		5.6				
	中 央		6.6				

第24表 27号土坑馬齒（下顎）計測値表

下顎白歯

	齒種	第二前白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第二後白歯	第三後白歯
	左 右	R	R	R	R	R	R
齒冠長	咬口面	35.7	29.8+	29.8	27.0	26.7	26.6
	中 央	35.7	30.4	28.8	27.5	26.1	31.1
齒冠幅	前葉	咬口面	14.8	15.6			
		中 央	16.0	16.0			
	後葉	咬口面	16.4	16.4			
		中 央	17.2	16.2			
齒冠高	頬側	35.4	51.7	61.1			
	舌側	39.6	51.0	65.6	56.0	61.4	67.5
下後錐谷長		9.4	10.0	9.7			
下内錐谷長		17.0	15.6	13.7			
double knot長	咬口面	15.5	19.0	16.7			
	中 央		19.6	17.5			
咬合面の傾斜		92	82	80			
下内錐幅		6.2	6.8	6.4			

第25表 4号溝馬齒（上顎）計測値表

上顎白歯

	齒種	第四前白歯	第二後白歯
	No	2	3
齒冠長	左 右	L	L
	咬口面		24.1+
	中 央	26.5+	
齒冠高	頬側		76.3
咬合面の傾斜			73
中附錐幅	中 央	5.0	5.0

第26表 36号溝馬齒（下顎）計測表

下顎白歯

	齒種	第二前白歯	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第三後白歯
	No	5	5	4	2	1
	左 右	L	L	R	R	R
	咬口面	31.4	27.6	25.8	23.8	17.7+
	中 央		26.2	26.0	23.0	
齒冠幅	前葉	咬口面	13.1	13.3	11.3	
		中 央			13.4	
	後葉	咬口面	12.6	13.6	13.6	12.0
		中 央			13.2	
齒冠高	頬側			45.0		44.0
	舌側		38.3	45.1	38.8	42.3
下後錐谷長		5.8	8.0	7.5	6.8	
下内錐谷長		15.5	12.4	12.0	9.0	
double knot長	咬口面	13.8	15.4	14.0	11.9	
	中 央			14.5	12.0	
咬合面の傾斜			85	78		
下内錐幅		5.3	5.5	5.7	4.8	4.0

(※ “中央” は齒根分岐点から咬合面側に3 cmの所での計測)

第VI章 調査・整理の成果と問題点

第1節 検出遺構に関連して

〔1〕 竪穴住居の上屋材について

【鑑定結果から見た行力春名社遺跡（以下、行力遺跡）竪穴住居の特徴（第27表）】

古墳時代竪穴住居3軒の炭化材（150点）と生材（2点）の樹種鑑定を実施した（第V章第3節参照）。

鑑定結果を見ると、1号・3号竪穴住居でヤナギ・コナラ・クヌギ・ハンノキ等、多種の樹種を用いているのに対し、2号竪穴住居ではクリのみ（但し、ヤマグワ1点あり）を用いていることが分かる。遺構相互の切り合いが無く、出土土師器の比較においても差異を持たない⁽¹⁾竪穴住居が部材とした木材において、こうした差異をみせることは、建築時での樹種選択が意識的に行われていたことを伺わせる。

【他遺跡建築部材の樹種鑑定との比較（第27表）】

群馬県内の調査事例における古墳時代建築部材樹種鑑定結果を行力遺跡のそれと比較してみる。

行力遺跡との比較の視点でデータをみると、行力遺跡2号竪穴住居で多用された、クリを部材とする遺構は中筋遺跡6号平地建物と行力遺跡3号竪穴住居以外は、他遺跡では皆無である。同様に行力遺跡1号・3号竪穴住居で多用されたヤナギを部材としている遺構は皆無である。また、行力遺跡以外ではコナラ・クヌギが多用されていることも読み取れる。

【古墳時代出土木材の樹種の傾向（第28表）】

群馬県内の調査事例における古墳時代出土木材の樹種の傾向を見てみる。行力遺跡との比較の視点から、行力遺跡の出土樹種がどの程度含まれるか、を伺ってみる。時期・距離的に最も近接する三ツ寺I遺跡ではクリの使用頻度が最も高いことが分かる⁽²⁾。行力遺跡以外で多用されたクヌギは新保遺跡と元総社寺田遺跡で多いが、クヌギと同科のコナラは元総社寺田遺跡以外では極めて少ないことも分かる。

【他遺跡とのデータ比較を通して】

建築部材の樹種選択については、千田裕道氏の研究成果がある⁽³⁾。氏によれば、縄文時代にクリが多用されるのに対し、弥生時代以降ではクリの使用頻度が極端に減少し、コナラ・クヌギ（特にクヌギ）が多用されるという。集成した群馬県内の古墳時代の樹種データは、全体としては氏の研究と同様の傾向を示している。但し、行力遺跡2号竪穴住居の偏ったクリの多用が例外的といえる。材の選択・利用にあたっては「適材適所」が第一であろうが、一方で周辺植生に左右されたことも否定できない。氏の指摘する「時代による使用樹種の変化は集落立地の変化に繋がるもの」との指摘は重要な点である。古墳時代の植生を知る手がかりとして、どんな樹種が県内各地（ここでは榛名山麓に限定）の遺跡で検出されているかを調べて見ると、やはり、クヌギが卓越していることが分かった。しかし、三ツ寺I遺跡のみで、クリが卓越していることは、行力遺跡2号竪穴住居のクリの多用を考える上では注目される。三ツ寺I遺跡は木器、行力遺跡は建築材という性格の差異はあるものの、遺跡の時期、地域が近似する事を考慮すると、クリの供給源が近隣に存在したのか、或いはクリを必要とし、その入手ルートを独自にもっていたのか、ということが考えられる。

以上、集成データ上から考えられることを挙げた。筆者は木の植生・樹種について浅学であり、資料の取扱いに不適切な点があるかも知れない。だが、本稿では大まかな傾向の把握を目的としているため、細部の誤認についてはご容赦願いたい。また、大きな誤認がある時は、後日別稿にて訂正するつもりである。

第1節 検出遺構に関連して

註

- (1) 土器に差異が無いことは、同時期性であり、同時性ではない。よって、ここでは参考程度の意義しか持たない。
- (2) 三ツ寺I遺跡の出土木材は、その多くが木製品であった。
- (3) 千野裕道 1991 「縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討—」『研究論集X』東京都埋蔵文化財センター

第27表 古墳時代焼失家屋における建築部材鑑定樹種一覧

	落葉広葉樹													試料総数(上・割合(下))	文献							
	ブナ科			カバノキ科				ヤナギ科ヤナギ属	クワ科ヤマグワ	ミズキ科ミズキ属	エゴノキ科エゴノキ属	ニレ科エノキ属	ブナ科ブナ属			ミカン科コクスギ属	クルミ科クルミ属 オニグルミ	クラツツラ科 ムラサキシキブ属	バラ科 モモ	サクラ属・亜属	カエデ科カエデ属	モクセイ科トネリコ属
	クリ	クスギ節	コナラ節	イヌシデ節	ハンノキ属	アサダ	カバノキ属															
糸井宮前I遺跡38号竪穴 (前期・昭和村)		41									62									103	1	
		40									60									100		
行力春名社遺跡1号竪穴 (中期・高崎市)	1	3		6			10	1	1	1						1				24	2	
	4	13		25			42	4	4	4						4				100		
行力春名社遺跡2号竪穴 (中期・高崎市)	32							1												33	2	
	97							3												100		
行力春名社遺跡3号竪穴 (中期・高崎市)	2	3	2				10									1		2		20	2	
	10	15	10				50								5		10		100			
勝保沢中ノ山遺跡17号竪穴 (中期・赤城村)			11	1		1												1	2	16	3	
			69	6		6												6	13	100		
勝保沢中ノ山遺跡18号竪穴 (中期・赤城村)			44	3		3						1								51	3	
			86	6		6						2								100		
中筋遺跡1号竪穴 (後期・渋川市)		3	1			1								2	14	5	1			27	4	
		11	4			4								7	52	18	4			100		
中筋遺跡2号竪穴 (後期・渋川市)		2	14																	16	4	
		12	88																	100		
中筋遺跡6号平地 (後期・渋川市)	6	2	4							1				1			2	2		18	5	
	33	11	22							6				6			11	11		100		
専光寺付近遺跡86号竪穴 (後期・大泉町)		7						4									2			13	6	
		54						31									15			100		

(数値は上段が試料実数、下段が試料割合を示す)

- 《文献》 1 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985 「糸井宮前I遺跡」
 2 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1994 「行力春名社遺跡」(本報告書)
 3 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1988 「勝保沢中ノ山遺跡I」
 4 渋川市教育委員会 1988 「中筋遺跡 第2次」
 5 渋川市教育委員会 1933 「中筋遺跡 第7次」
 6 大泉町教育委員会 1989 「専光寺付近遺跡」

第28表 古墳時代出土材樹種の傾向

	クリ	クスギ節	コナラ節	ハンノキ属	ヤナギ属	ヤマグワ	ミズキ属	エゴノキ属	エノキ属	オニグルミ	モモ	その他	総数	検出樹種上位5種					文献
														①クスギ節	②カシ類	③モミ属	④クリ	⑤エノキ属	
新保遺跡 (前期・高崎市)	9	115	0	0	1	2	0	0	7	0	0	72	206	①クスギ節	②カシ類	③モミ属			1
	4	56	0	0	1	1	0	0	3	0	0	35	100	④クリ	⑤エノキ属				
元総社寺田遺跡 (中～後期・前橋市)	106	255	100	0	77	20	0	8	15	6	16	565	1186	①クスギ節	②クリ	③コナラ節	④		2
	9	21	8	15	6	2	3	1	1	1	1	47	100	ヤナギ属	⑤イヌシデ節・カバノキ属				
三ツ寺I遺跡 (中～後期・群馬町)	125	23	7	3	13	2	0	0	9	2	1	313	498	①クリ	②モミ属	③ケヤキ			3
	25	4	1	1	2	1	0	0	1	1	1	63	100	④カシ類	⑤クスギ節				
中村遺跡 (後期・渋川市)	23	2	7	10	56	34	2	5	0	0	0	81	220	①ヤナギ属	②ヤマグワ	③クリ			4
	10	1	3	5	26	15	1	2	0	0	0	37	100	④ハンノキ節	⑤ケヤキ・ヌルデ				

(数値は上段が試料実数、下段が試料割合を示す)

- 《文献》 1 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986 「新保遺跡I」
 2 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1994 「元総社寺田遺跡II」
 3 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1988 「三ツ寺I遺跡」
 4 渋川市教育委員会 1986 「中村遺跡」

第2節 出土遺物に関連して

〔1〕 古墳時代土師器について

1～3号竪穴住居から出土の古墳時代土師器群には、以下の特徴が伺える。

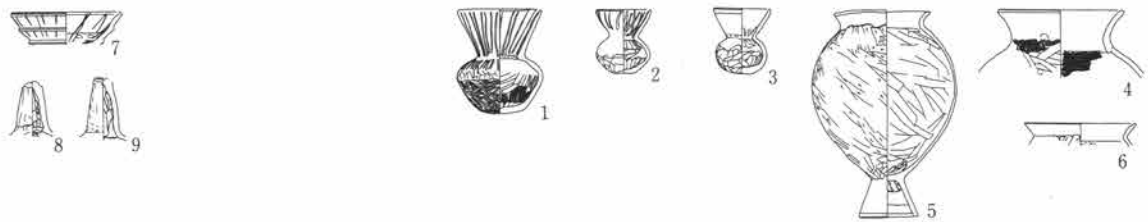
【組成の特徴】①須恵器を共伴しない ②高坏・坩の個体数が他の器種に比して著しく多い ③坏が極めて少ない ④甕を含む

【形態の特徴】①高坏…脚部が長く、柱状（一部エンタシス状）のものが多く、有段高坏を含む ②坩…大型と小型の明分化・小型坩が平底化の傾向 ③甕…台付・小型脚付を含む

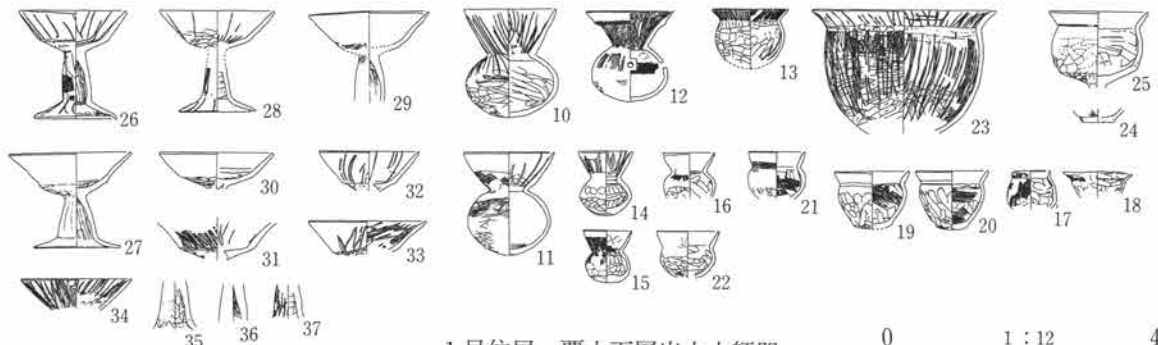
【技法の特徴】①高坏…スリナデ・ミガキの多用 ②坩…口縁部のミガキ・体部中位以下のケズリ ③甕…体部のケズリ

これらの特徴を通して、出土土師器を住居単位で比較した場合、大きな時期差は見られない。さらに、遺構相互の切り合い関係もないことを踏まえると、これらの遺物群は、土器の時期を考える上では同時期の扱いが可能といえる。そして、これらの遺物群の特徴は古墳時代中期の土師器の特徴を持っていることが伺え、いわゆる「和泉式」に併行するものと考えられる。さらに、中期の中での細分するならば、高坏および坩の特徴から考えて、中期を「前葉・中葉・後葉」と3区分するなら「前葉～中葉」、「前半・後半」と2区分するなら「前半」の範疇に位置づけられるものと考えたい。

なお、周辺遺跡において【組成】【形態】【技法】の点で比較的多くの類似点を持つ遺物群としては、①熊野堂遺跡（高崎市・群馬町）第II地区1号方形周溝墓覆土中出土土師器、②引間遺跡（高崎市）第41号住居址（竈なし？不明？）出土土師器、③八幡中原遺跡（高崎市）28号住居址（竈あり）出土土師器、が挙げられる。

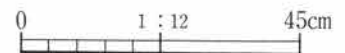


1号住居 床面出土土師器



1号住居 覆土下層出土土師器

第100図 行力春名社遺跡出土遺物図 (1)



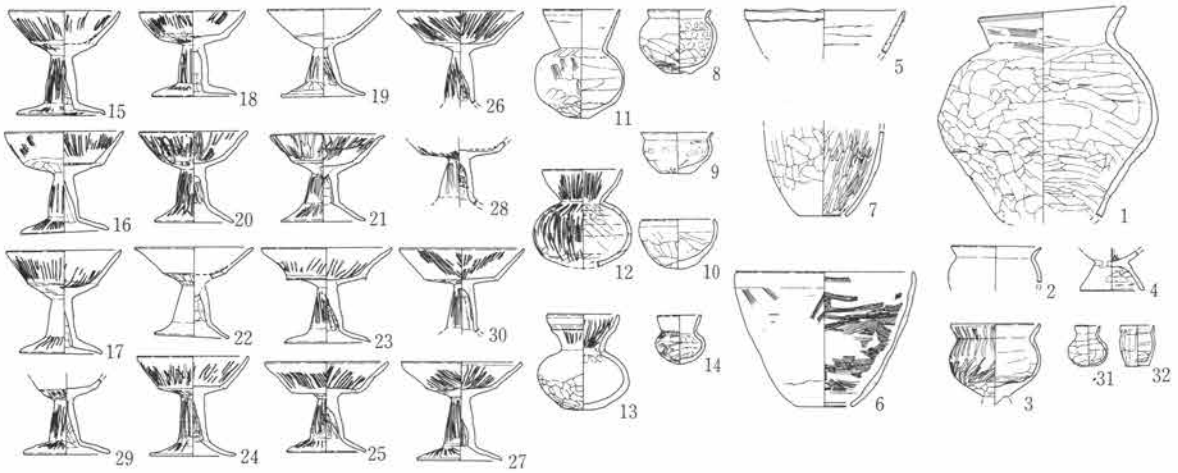


2号住居 覆土下層出土土師器

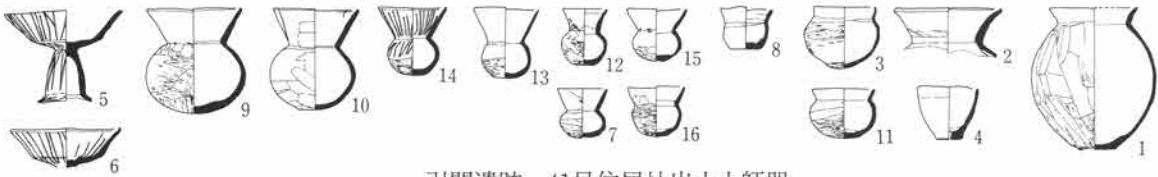


3号住居 床面出土土師器

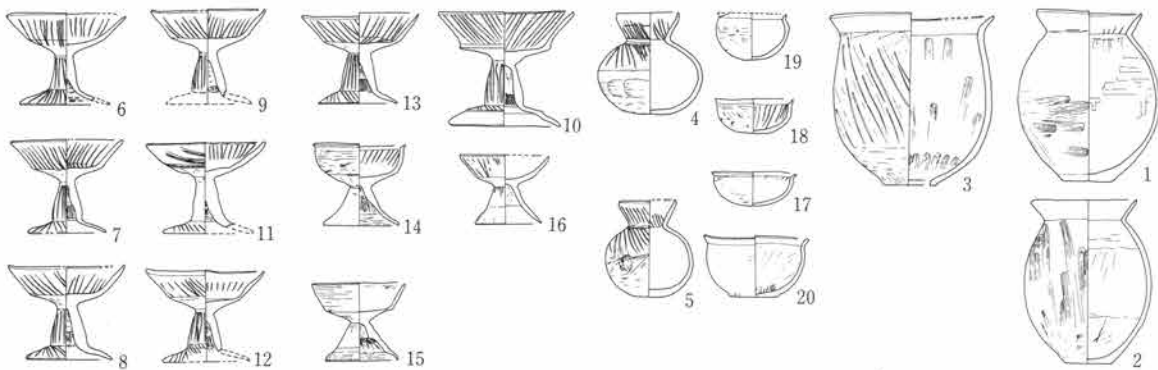
第101図 行力春名社遺跡出土遺物図 (2)



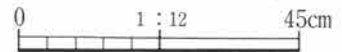
熊野堂遺跡 第II地区4区1号方形周溝墓周溝内覆土出土土師器



引間遺跡 41号住居址出土土師器



八幡中原遺跡167号住居址出土土師器



第102図 熊野堂遺跡・引間遺跡・八幡中原遺跡出土遺物図 (各報告書より転載)

〔2〕 滑石製模造品の製作について

行力春名社遺跡1号・3号竪穴住居は滑石製模造品を製作した工房と考えられる⁽¹⁾。それは、両竪穴家屋において、床面及び覆土下層を中心にやや硬質の滑石質蛇紋岩とやや軟質の片岩質滑石⁽²⁾の原石・剝片と未製品・製品が比較的多く出土していることによる。

【出土滑石の産地について】

蛇紋岩や滑石を産出する地帯は関東地方全域に視野を広げてみても、極めて限られている。その最大の産出地は藤岡・甘楽地域に広がる「三波川帯」である。行力春名社遺跡の南西25～30kmに「三波川帯」があり、かつ最も近接する産出地である。他にも片品・白沢地域でも蛇紋岩系の岩石は産出すると言う⁽³⁾が、岩質や当時の文化交流を考慮すると行力春名社遺跡出土原石は藤岡・甘楽地域産出品の可能性が高い。

【1号竪穴住居における製作工程試案】

1号竪穴住居出土の原石・未製品・剝片において、製作工程を考えるに耐え得る状況が遺物を観察することによって確認でき、管玉・白玉の製作工程が追えることが判明した。以下、それらの工程の試案を示す。

《管玉の製作工程試案》（第103図）

- 〈I〉 原石の獲得…産出地からの搬入ブロックの状態。
- 〈II〉 荒割による不定形コアの獲得1…滑石の節理方向に合わせて打撃を与え、原石を分割する。荒割によって定形コアがそのまま獲得されることもあり、その場合はこの段階は関係ない。
- 〈III〉 荒割による不定形コアの獲得2…〈II〉で得た不定形コアにさらに打撃を与え、分割する。この段階は、コアの長軸方向の大きさを定形化させる意図が働くようにも伺えるが、明確でない。
- 〈IV〉 荒割による定形コアの獲得…〈II〉〈III〉で得た不定形コアを、滑石の節理方向に合わせて打撃を与え、分割する。ここで得るコアは意図する管玉の大きさを最初に反映する段階であり、定形化の傾向を示す。
- 〈V〉 折断による形割品の獲得…定形コアの節理に対して直交方向に打撃を与え（折断）、両端を割落とす。この段階で管玉の長さが決定する。折断の痕跡のある剝片（未製品）から（第29表）、長さは2.5～4.0cmに集中する傾向が伺える。
- 〈VI〉 側面形割による未製品の獲得…長さが決定した形割品を、節理方向に合わせて打撃を与え、分割する。この段階では意図する管玉の直径に見合った未製品を得ることを目的とする。
- 〈VII〉 側面形割による未製品の側面調整1…〈VI〉で得られた未製品を、さらに節理方向に合わせて打撃を与え、断面が正方形になるように割落とす。場合によっては、研磨による側面調整の可能性も考えられる。この段階でおおよその管玉の直径が決まる。
- 〈VIII〉 側面形割による未製品の側面調整2…〈VII〉の調整に続けて、さらに節理方向に合わせて打撃を与え、断面が多角形になるように割落とす。場合によっては、研磨による側面調整の可能性も考えられる。この段階を経ること無く、〈VII〉から〈IX〉へいくことも考えられる。
- 〈IX〉 穿孔・研磨による仕上げ…おそらく、穿孔と研磨を相互に繰り返すことにより、製品化させたものと考えられる。1号・3号竪穴住居ではこの段階に相当する未製品は検出されていない。
- 〈X〉 製品…完成品。1号・3号竪穴住居では製品は検出されていない。

《白玉の製作工程試案》（第104図）

- 〈I〉 原石の獲得…産出地からの搬入ブロックの状態。白玉の場合、製作工程の都合から、比較的節理の発達した、板状に剝離しやすいコアを選ぶ可能性が高い。
- 〈II〉 荒割による板状剝片の獲得…滑石の節理方向に合わせて打撃を与え、板状に剝離させる。
- 〈III〉 研磨による板状未製品の獲得1…板状剝片の両面の研磨により、剝片の両面の凹凸をなくす。
- 〈IV〉 研磨による板状未製品の獲得2…〈III〉に引き続き、板状剝片の両面の研磨により、剝片の両面を平坦化させる。この段階で、意図する白玉の厚さがほぼ決まる。この段階以降の未製品の長軸と厚さを比較すると（第30表）、板状剝片から白玉製作が行われたことがよく分かる。
- 〈V〉 形割による未製品の獲得1…〈IV〉で得た板状剝片を一定の規模の方形、或いはそれに近い不定形に形割りする。この段階以降の未製品の出土状況からみると（第29表）、一辺が1.0cm、或いはそれ以下であることが伺える。一つの板状剝片から可能な限り、この未製品を得たものと考えられる。
- 〈VI〉 穿孔による白玉中軸の決定…〈V〉で得た未製品に両面から穿孔を行う。両面から行ったと考える理由は、孔の位置がずれてしまった未製品の存在と、孔内面の観察による両面穿孔の痕跡の存在である。この段階で孔が開くことにより白玉の中軸が決まる。
- 〈VII〉 形割による未製品の縁片調整…孔を中心として、縁辺を割落とす。研磨を容易にするための調整と考えられる。未製品の形状によってはこの段階を経ないことも考えられる。
- 〈VIII〉 研磨による仕上げ…側面を研磨し、形を整える。1号・3号竪穴住居ではこの段階に相当する未製品は割れ損じたものしか無く、良好なものは出土していない。
- 〈IX〉 完成品…製品。1号竪穴住居では製品は出土していない。3号竪穴住居では1点出土している。

《その他の製品の製作について》

勾玉・剣形の未製品や紡錘車の製品が出土していることから、それらの製作も行われていた可能性も高い。しかし、出土品からはその工程を追うことは不可能であった。

【製作に使用する工具等について】

1号・3号竪穴住居においては、滑石製模造品の製作に関わる工具は検出されていない。しかし、滑石の分割の際に使用した台石と考えられる石や研磨の際に使用した砥石と考えられる石が出土している。

先に提示した1号竪穴住居における管玉製作工程試案にそくし、工具等の変化を考えてみる（第103図）。

〈I（原石獲得）〉時の工具等…産出地での原石獲得の際には、露頭の転石を採取する可能性が高い。しかし、原石についた直径～0.8cmの円形の打痕（1号竪穴住居70・72に顕著）を見る限りでは、岩壁を先端が棒状の工具によって打撃し、割落としている可能性も考えられる。この際の工具は石か鉄が考えられるが、打痕が均一なことを踏まえると、鉄製工具の可能性を考えることができる。どんな形状の工具をもちいたか、は不明である。

〈II～IV（荒割）〉時の工具等…工具は出土していないが、石または鉄器を原石・コアに当てて、それを他の石または鉄製工具（敲打具）を用いて打撃し、分割したと考えられる。台石は安定し重い石を用いた可能性が高い（1号竪穴住居60が代表的）。出土した石を見るかぎりでは全て粗粒安山岩であり、遺跡

周辺から取り寄せたものと考えられる。台石の選定にあたっては、この段階では荒い分割のため、石質よりも、重量のあることが優先されたことと想像できる。

〈V～VIII (形制・折断・側面調整)〉時の工具等…工具は出土していないが、台石と考えられる滑石に無数についた長～3.0cmの痕跡(1号竪穴住居69に顕著)から鉄製鑿を用いた可能性が高い。台石は、先述した通り、滑石の原石を用いたことが考えられる。この段階は未製品に細かい調整を施す工程であるため、荒割段階とは打撃の与え方が異なる。おそらく、鉄製鑿でそぎ落とすように滑石を割っていったと思われる。その際に、工具の刃先が台石にぶつかる状況が生じ、その状況においても工具の刃先の欠損を少なくする意図から、台石は他に比して軟質の滑石が用いられたものと考えられる⁽⁴⁾。なお、この台石は製品の原石を兼ねている。その理由は、台石の縁辺が割れている箇所が多く、また剝片の中には台石にしかつかない工具痕(鉄製鑿痕)がみられるものがあるからである。

〈IX～X (研磨・穿孔)〉時の工具等…工具は出土していないが、穿孔には木製錐か鉄製錐を用いたと予想できる。しかし、この段階の未製品が未出土のため、遺物観察による判断はできない。台石は〈V～VIII〉同様、滑石の原石を用いていたと考えられる。研磨の際の砥石は偏平で、人の手に納まるサイズの石(1号竪穴住居56・59・68)を用いたことが考えられる。出土石を見る限り、全て粗粒安山岩であり、遺跡周辺から取り寄せたものと考えられる。砥石と考える石にはいずれにも明確な擦痕はない。しかし、滑石の軟質性を考慮すると、砥石が粗粒安山岩では擦痕がつくとは限らない。むしろ、群馬県で同時期の滑石製模造品工房とみられる甘楽町・笹遺跡第IV—II号住居址出土の砥石⁽⁵⁾の形状との類似性から砥石の可能性を考えた。

【1号竪穴住居出土の白色粘土質物質について】

1号竪穴住居の床面中央付近1.5m×0.7mの範囲で白色粘土質物質が出土した。こうした工房における粘土は、工作用ピットにともなって出土することが多いが、本遺構では白色粘土質物質は平坦な床面に張りつくように存在しており、ピットの存在は確認できなかった。さらに、白色粘土質物質の中には滑石の微細剝片が多く含まれていることが確認できたことから、この物質が滑石の削り滓であることが予想された。

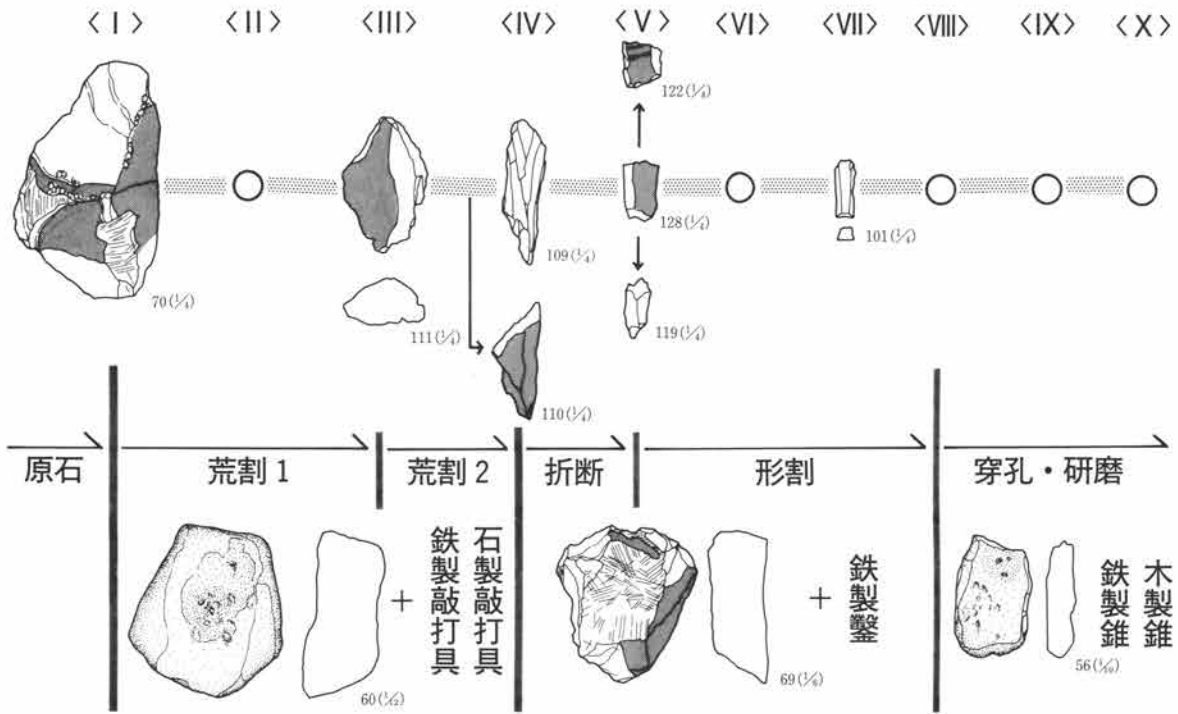
そこで、滑石剝片と白色粘土質物質とを蛍光X線分析にかけて、構成元素の特徴の比較を試みた(第V章第4節参照)。その結果、この白色粘土質物質の構成元素の特徴が滑石剝片のそれと類似することが判明し、この物質が滑石に由来することが推測された。

出土遺物の性格から工房と考えることができる限り、こうした分析結果は有効であると思われ、よって白色粘土質物質が滑石の削り滓という可能性は極めて高いと言える。

ところで、1号竪穴住居は床面精査が不十分であり、工房に関連する床面施設は見つからず、工房における「場」の問題が不明確であった。しかし、この物質の性格を知ることによって、少なくとも住居中央において製作がなされていたことが判明したことになる。

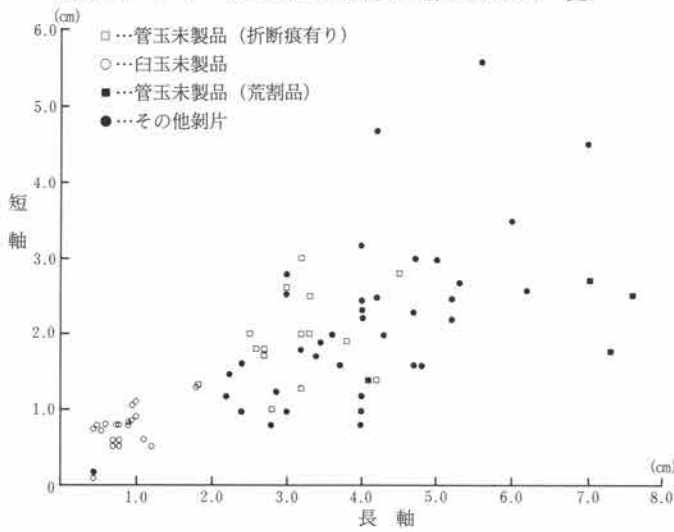
註

- (1) 「竪穴住居」という呼称が「工房」の性格をもつ遺構の呼称として適切であるとは言い難い。「竪穴工房」や「竪穴建物」などの呼称の方が適切であると思えるが、安易な用語の変更は混乱をまねくこともあるため、ここでは便宜的に従来通り「竪穴住居」の呼称を用いる。こうした用語については、改めて検討を加えることが必要と思える。
- (2) 名称については松村和男氏の御教示による。なお、両者を総称する場合は「滑石」とする。
- (3) 高橋直樹 1992 「千葉県から出土する玉類の原材の原産地についての予察」『研究紀要13』(勸千葉県埋蔵文化財センター、による)。
- (4) 松村和男氏の御教示による。
- (5) 梅澤重昭 1964・1966 『笹遺跡— 竊川流域における滑石製品出土遺跡の研究—(遺構編)』『同(遺物編)』による。

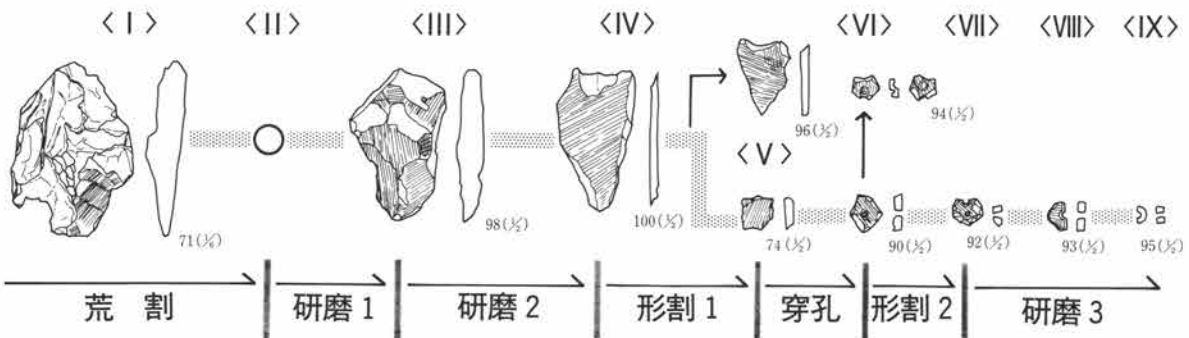
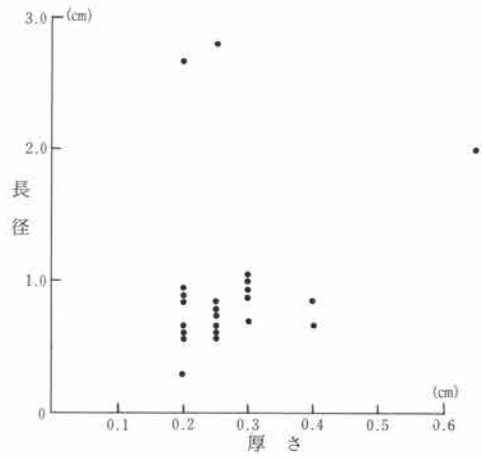


第103図 1号竪穴住居における管玉の製作工程試案

第29表 1号・3号竪穴住居出土滑石片法量一覽



第30表 1号竪穴住居出土白玉未製品法量一覽



第104図 1号竪穴住居における白玉の製作工程試案

第3節 遺跡に関連して

(1) 発掘調査データによるFA直下の地形状況

従来の調査成果に基づく限り、井野川左岸と右岸の遺跡分布状況には著しい差異が認められる。それは左岸の遺跡の充実ぶりに対する、右岸の遺跡分布の希薄さである。この事態を生みだした要因は、井野川左岸、榛名白川までの泥流堆積物による障害に他ならない。

しかし、行力春名社遺跡にはじまる北陸新幹線関連の調査は、井野川右岸の泥流地帯に大きなトレンチを入れた形となり、泥流層下の地形状況を連続してみることを可能にした。未公表資料が多い現在でも、公表可能なデータをまとめる事によって(第31表・第105図)、井野川左岸と右岸の状況を探ることは可能である。

集約したFA直下面の標高のデータから気づく点は、以下の4点である。

①標高と遺構の類似…左岸のP～U地点と右岸のD～G地点は標高120～125m付近については何れも水田遺跡であり、同じ様相を示す。

②水田域の上限の予測…右岸のC地点は浜川長町遺跡と行力春名社遺跡の調査によって、現状における、水田域の上限と考えられる。一方、左岸のN地点は水田域ではなく、P～U地点が水田域であることから、130m付近に上限があることが予測される(但し、データ不足のため憶測に過ぎない)。

③標高135m以上の様相…右岸のA地点は行力春名社遺跡の古墳時代中期住居の地点を示す(図には未掲載であるが、右岸の下芝谷ツ古墳の墳丘埴輪列は標高142m付近である)。一方、左岸のO地点は井出二子山古墳の墳頂部を示す。この両者がほぼ同一標高であることは興味深い。A地点西の下芝五反田遺跡の集落の状況を踏まえると、右岸の一大集落は保渡田古墳群をほぼ真横に見渡せる位置に有ったことが分かる。

④景観の見直し…井野川左岸と右岸の現地表からFA下面までの深度差は視覚的錯覚を起こし、右岸の泥流下遺構はかなりの低地にあるものとの想像がなされた。しかし、実際には左岸・右岸とも水田域についてはほぼ同標高での占地であることが分かった。また、高台に古墳群を構え、その下に居館・集落・水田等が展開する左岸の景観に対して、その全てを見渡すかの様に右岸の集落・墳墓が展開することがわかった。こうした状況からも、今まで闇に包まれていた泥流層下の遺構が姿を現すことによって、この地域全体の古墳時代中期後半～後期初頭までの様相に関して、見直しが必要なことは明かである。

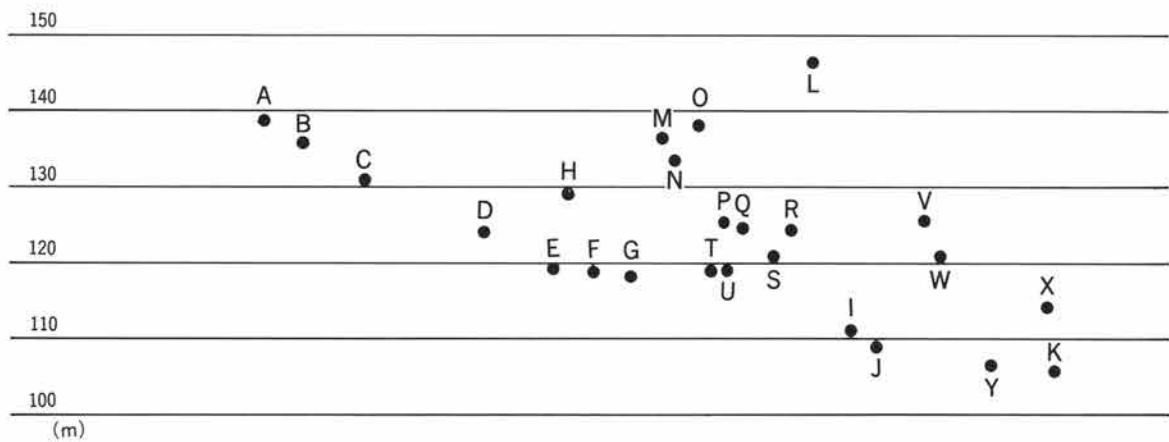
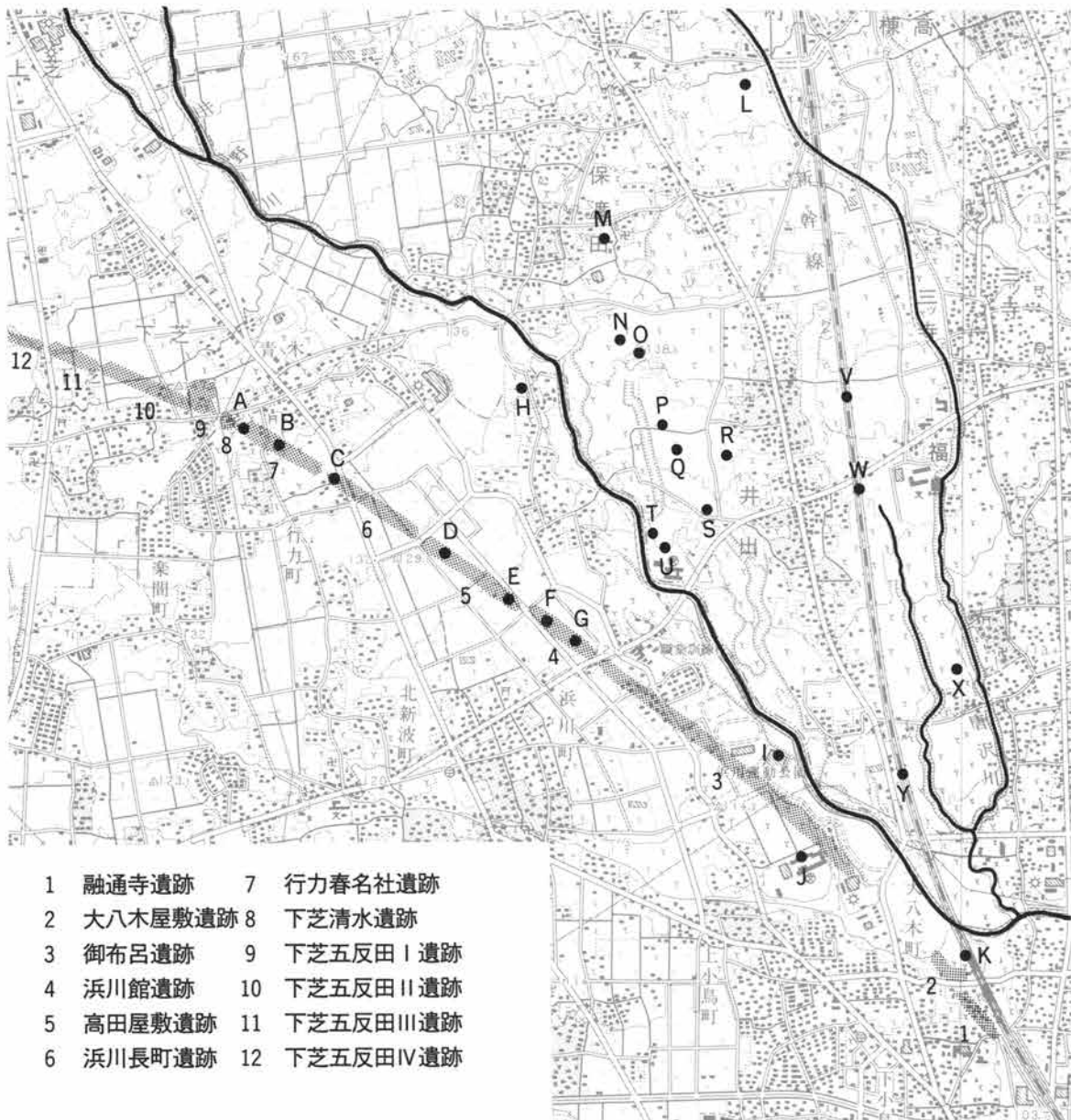
行力春名社遺跡調査以後、右岸では浜川地区・下芝地区、左岸では井出地区において、多大な調査成果が挙げられている。こうした情報が公になる時こそ、この地域が大きく見直される時であると期待している。

第31表 各地点データ一覧表

地点	現標高	FA下高	差	遺跡名	測定箇所	
井野川右岸	A	141.9	138.4	3.5	行力春名社遺跡	西区
	B	139.2	135.5	3.7	行力春名社遺跡	東区中央
	C	135.0	131.3	3.7	浜川長町遺跡	群埋文試掘No.5
	D	126.6	124.1	2.5	高田屋敷遺跡	群埋文試掘No.4
	E	122.5	119.5	3.0	高田屋敷遺跡	群埋文試掘No.3
	F	121.3	118.9	2.4	浜川館遺跡	群埋文試掘No.2
	G	120.2	117.6	2.6	浜川館遺跡	群埋文試掘No.1
	H	129.4	128.5	0.9	道場遺跡	SZ01東周堀
	I	113.0	111.3	1.7	芦田貝戸遺跡	B区
	J	111.1	109.7	1.4	御布呂遺跡	12号大畦
	K	107.0	105.9	1.1	融通寺遺跡	4区
井野川左岸	L	148.7	147.2	1.5	保渡田東遺跡	3区
	M	138.0	136.9	1.1	保渡田VII遺跡	N区
	N	134.6	133.8	0.8	保渡田VII遺跡	E-2区
	O	138.3	138.3	0.0	井出二子山古墳	後円部墳頂
	P	126.1	125.1	1.0	井出地区遺跡群	18トレンチ
	Q	125.3	124.5	0.8	井出地区遺跡群	14トレンチ
	R	125.1	124.5	0.6	井出地区遺跡群	4トレンチ
	S	121.8	120.7	1.1	井出地区遺跡群	36トレンチ
	T	120.5	119.3	1.2	同道遺跡	TP.2
	U	120.0	119.2	0.8	同道遺跡	TP.7
	V	126.1	125.5	0.6	三ツ寺II遺跡	1号溝
W	122.4	121.5	0.9	三ツ寺I遺跡	南濠	
X	115.6	114.8	0.8	西浦北遺跡	基本層序A	
Y	108.0	106.3	1.7	熊野堂II遺跡	3区	

※各数値の単位はm。

※「群埋文試掘」は、北陸新幹線地域調査に先立ち、00群埋文が実施した調査データによる。



第105図 データ地点と各地点のFA直下面標高図

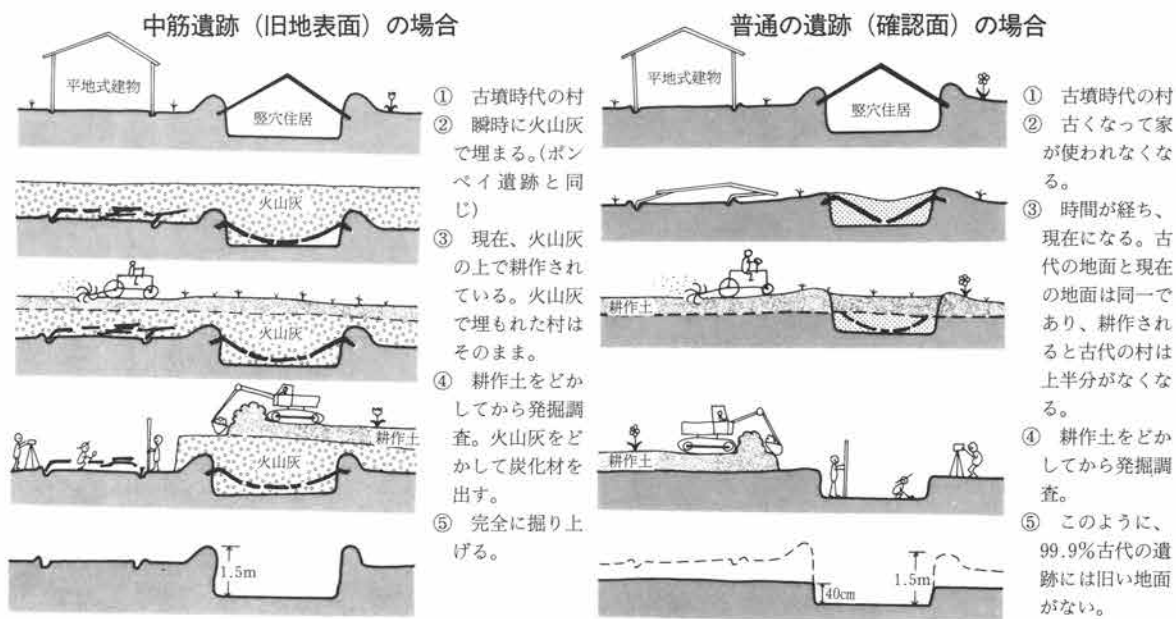
〔2〕 旧地表面の調査について

行力春名社遺跡では、FP泥流直下の黒色土 (IV面) を「旧地表面」の名称を与え、遺構として取り扱った。従来、発掘調査における遺構とは、大別すると、①『「住居」「土坑」「溝」等の地面に掘り込まれた痕跡』と、②『「墳墓」「水田」等の、掘り込みはないものの、明らかに人為的痕跡が伺えるもの』とがあり、いずれも明確な人為的痕跡が施されていることに共通項を持つものである。

「明確な人為的痕跡」を持つことが「遺構」としての定義に必要なならば、行力春名社遺跡におけるFP泥流直下の黒色土はほとんど起伏のない平坦面であるため、「遺構」とは判断できない。しかし、編者がこれを「遺構」と認識した根拠は、『白川扇状地はその成因からも分かるようにその多くを「FA泥流」「FP泥流」に覆われている。これは、逆に考えれば、泥流の除去により、泥流に覆われた直前の地面 (=旧地表面) が確実に検出されることを意味する。厳密な意味では異なるものの、このことは降下テフラで直接覆われた「火山災害遺跡」の検出状況と極めて似た性格を持つものと考えられる (第106図)』からである。

さらに、白川扇状地の場合、泥流堆積によりその前後では地形が一変している地域なので、井野川右岸を井野川左岸に展開する古墳時代中期～後期の豊富な調査データと対比させる意味でも、地形復元は必要であり、その地形復元のためにも、旧地表面の検出は必要不可欠な要素である。現に、平成4～5年度に調査された近接する浜川遺跡群 (芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・浜川館遺跡・高田屋敷遺跡・浜川長町遺跡) では行力春名社遺跡のIV面に相当する黒色土面にはほぼ全域にわたり水田跡が検出されている。このことを踏まえると、行力春名社遺跡のIV面の黒色土の厚さは2～5cmしかないものの、明らかに人為的痕跡 (=遺構) に連続するものであり、当時の生活域の一部と考えられ、遺構として取り扱えるものである。

しかしながら、本調査においては地表面の起伏を記録する目的で等高線図を測量する事のみで調査を終えてしまい、こうした旧地表面の調査方法として、「自然科学分析による植生調査の実施」や「近年検出事例が増加している、動物の足跡の調査」に着手できなかったことは惜まれる。今後こうした状況下の調査においては、「旧地表面は遺構である」との認識のもと、調査方法を模索していく必要があると思われる。



第106図 旧地表面と調査確認面の相違模式図

※ 浜川市教育委員会 1992 「中筋遺跡パンフレット」より転載

〔3〕 ボーリングデータによる古墳時代後期⁽¹⁾地形復元の試み

1 分析の目的

北陸新幹線は、高崎駅に端を発し、北上した後、井野川右岸をなめるように北西に走る（第107図）。この地域は、従来、高崎台地から白川扇状地と呼ばれてきたところに相当する。この地域では、古墳時代後期における榛名山の2回の火山活動に伴う火山泥流（ラハール）堆積物が、旧地表および旧文化面をそのままパックしている。そして、そこは旧地形復元が可能な地域でもある。しかし、第2章第1節でも触れたが、扇状地の一部を形成している火山泥流堆積物の範囲については、現在までに地形的・地理的分析を踏まえた上で示されてこなかった。

白川扇状地とその周辺地域には、古墳時代後期以降に発生した榛名山の火山活動に伴って、多量の岩屑が供給され、大規模な地形変化が発生した⁽²⁾。古墳時代後期の、遺跡の立地や土地利用の様相を把握するためには、現在の地形ではなく、当時の地形を分析する必要がある。実際に最近の発掘調査の成果では、火山泥流堆積物の下に、いくつもの微高地が舌状に発達していることが予想されている。

これらのことから、本報告書の編者と本稿の筆者は、白川扇状地における古墳時代後期の地形復元を考えるには新幹線ルート上の調査だけでは不十分であり、全体的に白川扇状地を見ていこうと考えた。そこで、既存のボーリングデータを利用しての旧地形復元を試みた。

そして本稿では、

- 1) 火山泥流堆積物は、どこまで広がるのか。[範囲]
- 2) 火山泥流堆積物下の旧地表は、どのように広がるのか。[とくに火山泥流堆積物（FA泥流）下の地形復元]

という2点についての記載を行う。しかし、後ほどにも資料活用の限界性について問題点をあげるが、今回の分析で利用するデータは、元来テフラの同定を目的とはされていない。したがって、旧地形復元の大づかみな傾向を知るにとどまる。さらに多くの資料の収集および検討をもとに詳細な地形復元を、将来、行う必要がある。

2 火山泥流（ラハール）堆積物について

「火山泥流（ラハール）」は、火山活動に直接起因するもので、火砕流が流走中に大量の水を含み、泥流に移行したものなどをいう⁽³⁾。ただし、本稿で用いる「火山泥流（ラハール）堆積物」は、火山泥流（ラハール）、火山泥流（ラハール）を契機に発生した泥流および多量の水を含んだ岩屑密度の小さい流れ（洪水）の堆積物も含むものとし、これらを総称する。また、白川扇状地には火砕流堆積物も確認されているが、ボーリング資料の観察では火砕流と火山泥流（ラハール）の区別が困難であることから、火砕流「二ツ岳第1軽石流（FPF-1）・二ツ岳第2軽石流（FPF-2：森山，1971）」も含めて考えざるを得ない。

それぞれの火山泥流（ラハール）堆積物については、各々の発生の契機となった火山活動に伴って噴出した降下テフラの略称を用い、初めの火山活動に伴うものを「FA泥流」、2度目のものを「FP泥流」と呼ぶことにする。

3 白川扇状地の分析

分析の方法⁽⁴⁾—火山泥流堆積物の判別 (第107図)

- ① 地図上に収集した資料のボーリング地点を落とし、
- ② 白川扇状地について縦断方向 (A) と横断方向 (B) のラインを設定し、
- ③ ラインの付近にある地点をピックアップし、
- ④ 資料に記載されている層相⁽⁵⁾とN値⁽⁶⁾を参考にし、火山泥流堆積物に相当する部分とそうでない部分に区別した。
- ⑤ さらに、周辺遺跡で観察されている火山泥流堆積物の厚さを参考にした。

4 分析上の問題点

a. ボーリングデータの層相⁽⁷⁾ (第108図上)

層相の問題点は、以下の2点である。

①. FA泥流とFP泥流の区別が一部のものを除いてははっきりしていないこと ②. FAが還元した状態の層相は、黒っぽく腐植質のように見える場合があるため、土層が腐植質あるいは腐植物混入といった記載からは、それが土壌なのか、火山泥流堆積物なのか、分かりにくいこと (ボーリングNo.3・4・5・7・8・14)

②については、この層を下層にある軽石や礫層⁽⁸⁾との関連から、土壌なのか否かを判断した。また、火山泥流堆積物より上位の層と考えられるものについては、地質の観察が細かいものとそうでないものがあるため、火山泥流堆積物なのか、そうでないのかという判断にとどめた。

分析を試みた当初は、ボーリングデータによって旧地形復元ができ、微高地や谷などの起伏の復元が可能ではないかと期待していた。しかし、資料を読み取る作業の段階で以下の問題点が明らかになった。

A. ボーリングデータの層相の記載は、業者およびボーリング調査担当者によってまちまちである。当然のことながら学校や鉄塔などの公共施設を建てる場合、地質そのものよりも、その地質のもつN値が重視される。したがって、地質の記載のしかたや精度が、ボーリング調査担当者によってかなり異なることは仕方あるまい。

B. Aの理由からボーリングデータの記載資料だけにたより、実際にボーリングコア (採取資料) を見ずに分析を進めることはかなり難しい。

以上、数々の問題はあがあるが、前述の分析の方法に従い、火山泥流堆積物として考えられる地層の上面と下面を結んだ (第108図上)。

b. 層厚の傾向 (現地表面から火山泥流堆積物の下面まで)

Aライン [ボーリングNo.1~12]: 箕郷町立箕輪小学校 [No.1] の位置する西明屋付近では、約7mの堆積が認められる。下芝五反田遺跡 [No.2] から [No.7] までは4.5~5mとなり、[No.8] から [No.12] にかけては約2~3mと、だんだん薄くなる。

Bライン [ボーリングNo.13~15]: [No.13] から [No.15] にかけて、約3.5~4.5mである。

5 分析をふまえて

本分析の最終的な目的は、火山泥流堆積物の基底の地形を追うことである。しかし、榛名山東南麓における地形発達史的な視点から、現日の白川扇状地は相馬ヶ原扇状地の地形発達を無視しては考えられない。この2つの扇状地における現地形の傾向をもつかみ、これと比較して旧地形を考える必要があるようである。

現在の白川扇状地の扇央部は、中央が盛り上がり凸状になっている。これは、Bラインにおける地形断面にその傾向が若干あらわれている（第108図中）。その原因として、火山泥流に覆われた後、おおよそ榛名白川の河川侵食などによって低くなったか、あるいは想定図の通りの堆積地形であれば、もとの地形が凸状であり、その地形を踏襲したにすぎないことなどが考えられる。以下、分析の結果を記載する。

1) 火山泥流堆積物の範囲

4の分析と周辺で火山泥流堆積物が確認されている遺跡をもとに、火山泥流堆積物およびその相当層のおよんだ範囲を推定した（第109図）。

この結果、火山泥流は扇端部の南において、現地形の標高（以下、現標高と記す）の100mのあたりまで達していることが考えられる。扇状地の東においては、井野川と天神川の間に位置する生原遺跡群東金沢遺跡で火山泥流堆積物が確認されているほか、井野川中流域左岸の同道遺跡でも確認されている。南東においては高崎台地が展開し、この台地上にある融通寺遺跡や並榎北遺跡では土層の観察により、堆積状況はあまり良くないものの、FP泥流に相当するものが確認されている。

2) 旧地形復元の試み—FA泥流下の地形復元—

A・Bラインと新幹線ルートにおけるボーリングデータの分析から、旧地形の標高（以下、旧標高と記す）を10mごとにラインを引いた（第110図）⁽⁹⁾。ここでは、白川扇状地のデータを全体的に網羅していないため、そのデータ数の制約から、旧標高は110mから140mの4本に限った。旧標高の130mと140mは、データが1点だけであるため、白川扇状地と相馬ヶ原扇状地の現標高を参考にした。

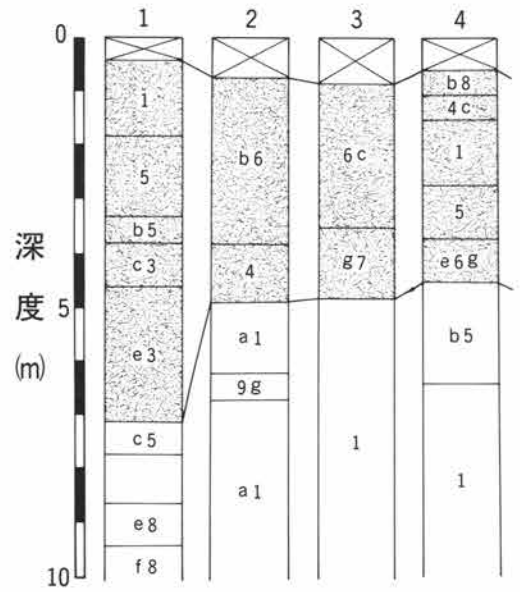
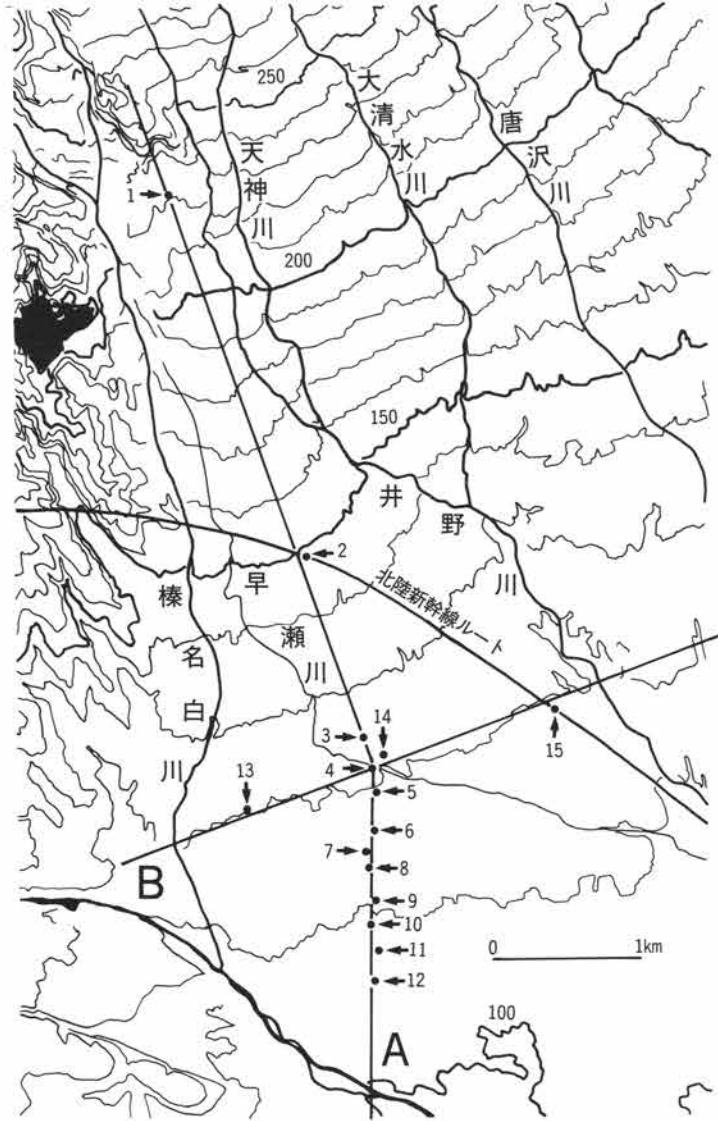
6 わかったこと

以上の分析の結果から次のことを考えた。

井野川左岸に展開する相馬ヶ原扇状地については、澤口（1982）に詳しいが、井野川右岸である白川扇状地の地域を含めた分析はなされていない。これは、「井野川の西側は、箕郷町を扇頂とする別の地形面になる」という理由による。つまり、現在まで井野川右岸は、相馬ヶ原扇状地から外されて考えられていた。しかし、澤口のいうように、井野川は相馬ヶ原扇状地形成後に流れ始めたことや、下芝・谷ツ古墳の発掘調査の成果から、この地域の火山泥流堆積物下の地形発達には相馬ヶ原扇状地の一部として考えていくことが適切と思われる。また、今回の分析からその成果として得られたことは、もともと古墳時代後期に榛名火山の活動によって供給された火山泥流などが現白川扇状地の地形を形成したのではなく、もともと扇状地が旧地形として存在し、その上部を比較的薄く覆っているということも考えられることである⁽¹⁰⁾。今後は、火山泥流堆積物下の地形の成り立ちについての分析を行う必要がある。

7 おわりに

群馬県は、榛名山や浅間山などの火山活動で噴出したテフラによって、その時代の生活環境および自然環

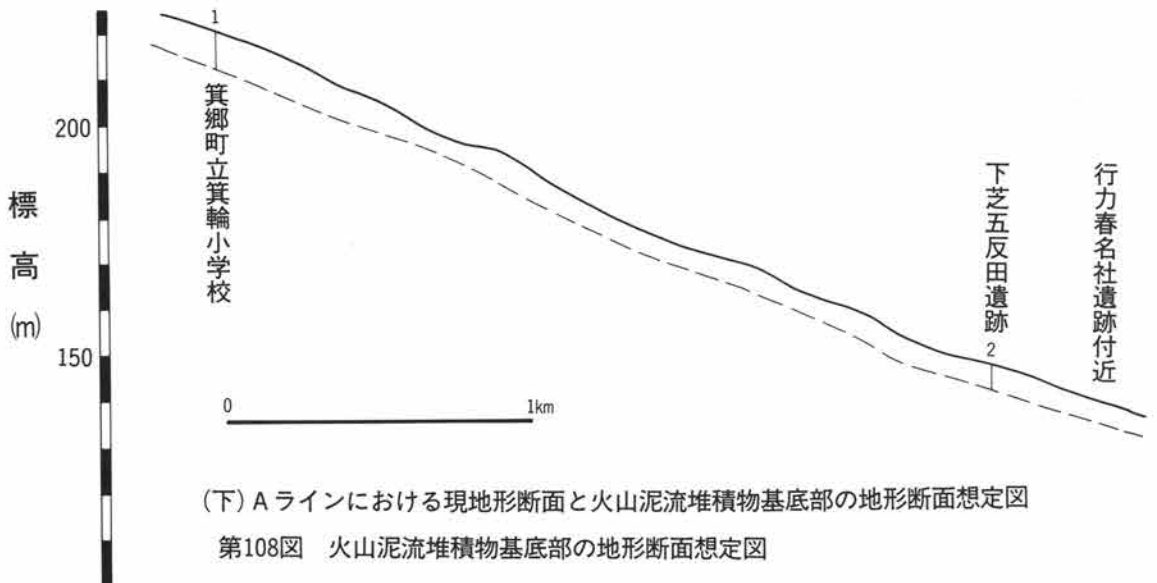


各地点の標高(m)

1	(220.5)	9	109.1
2	145.6	10	108.2
3	(124.5)	11	106.5
4	(121.5)	12	104.3
5	(119.5)	13	102.3
6	(117.0)	14	122.0
7	(114.5)	15	117.5
8	112.7		

※()内はデータに記載がないもの

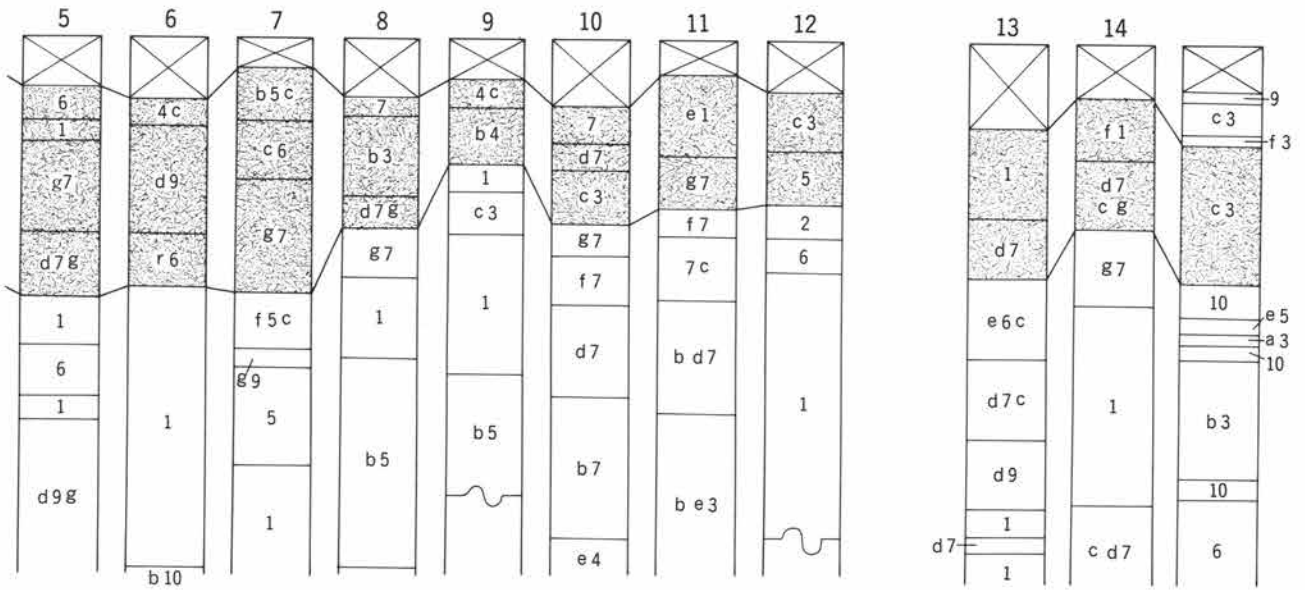
第107図 ポーリング地点とA・Bライン



(下) Aラインにおける現地形断面と火山泥流堆積物基底部の地形断面想定図

第108図 火山泥流堆積物基底部の地形断面想定図

第3節 遺跡に関連して

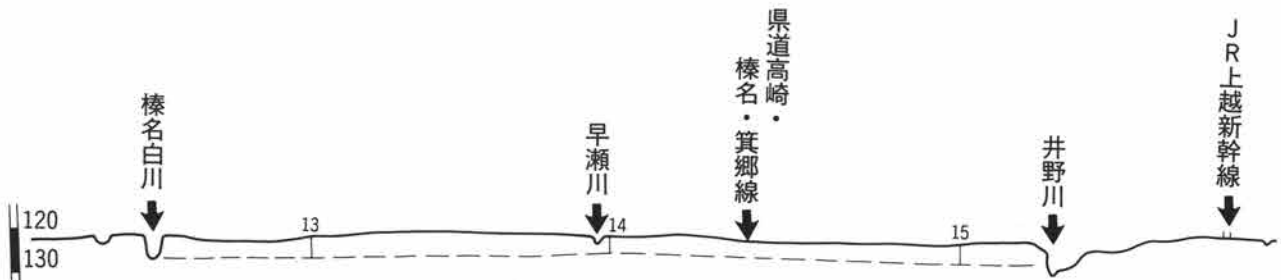


(上) 記号化したボーリングデータ柱状図

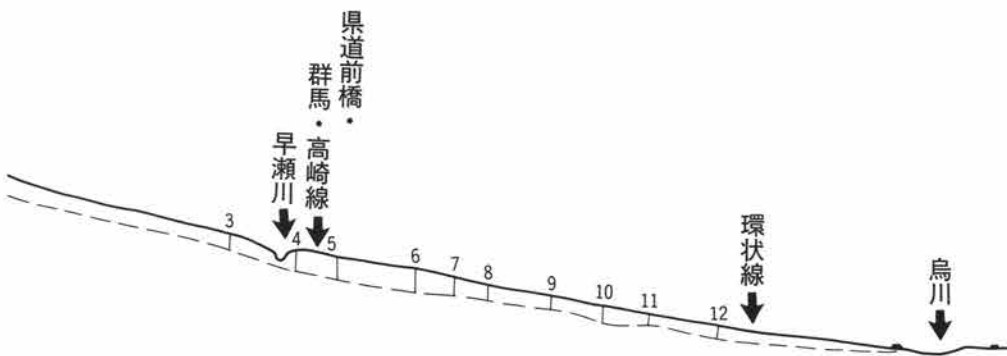
- | | | |
|--------------|-------|--------|
| a 玉石混じり | 1 砂礫 | 8 ローム |
| b 礫混じり | 2 軽石 | 9 粘土 |
| c 軽石(浮石)混じり | 3 砂 | 10 腐植土 |
| d 砂質(混じり) | 4 粗砂 | |
| e シルト質(混じり) | 5 中砂 | |
| f 粘土質(混じり) | 6 細砂 | |
| g 腐植質(性・混じり) | 7 シルト | |

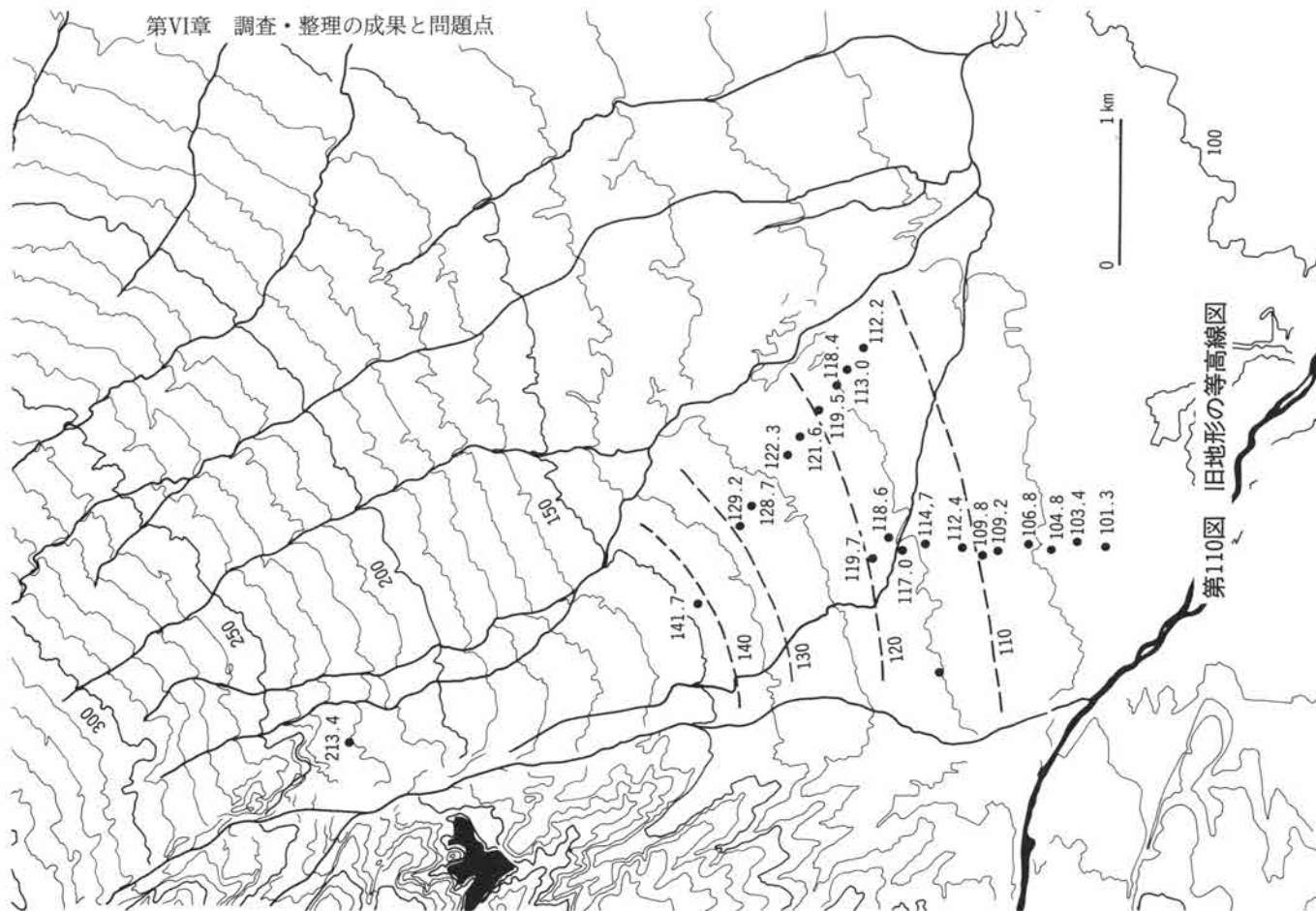


例) 砂質シルト(腐植物混入) → d7g



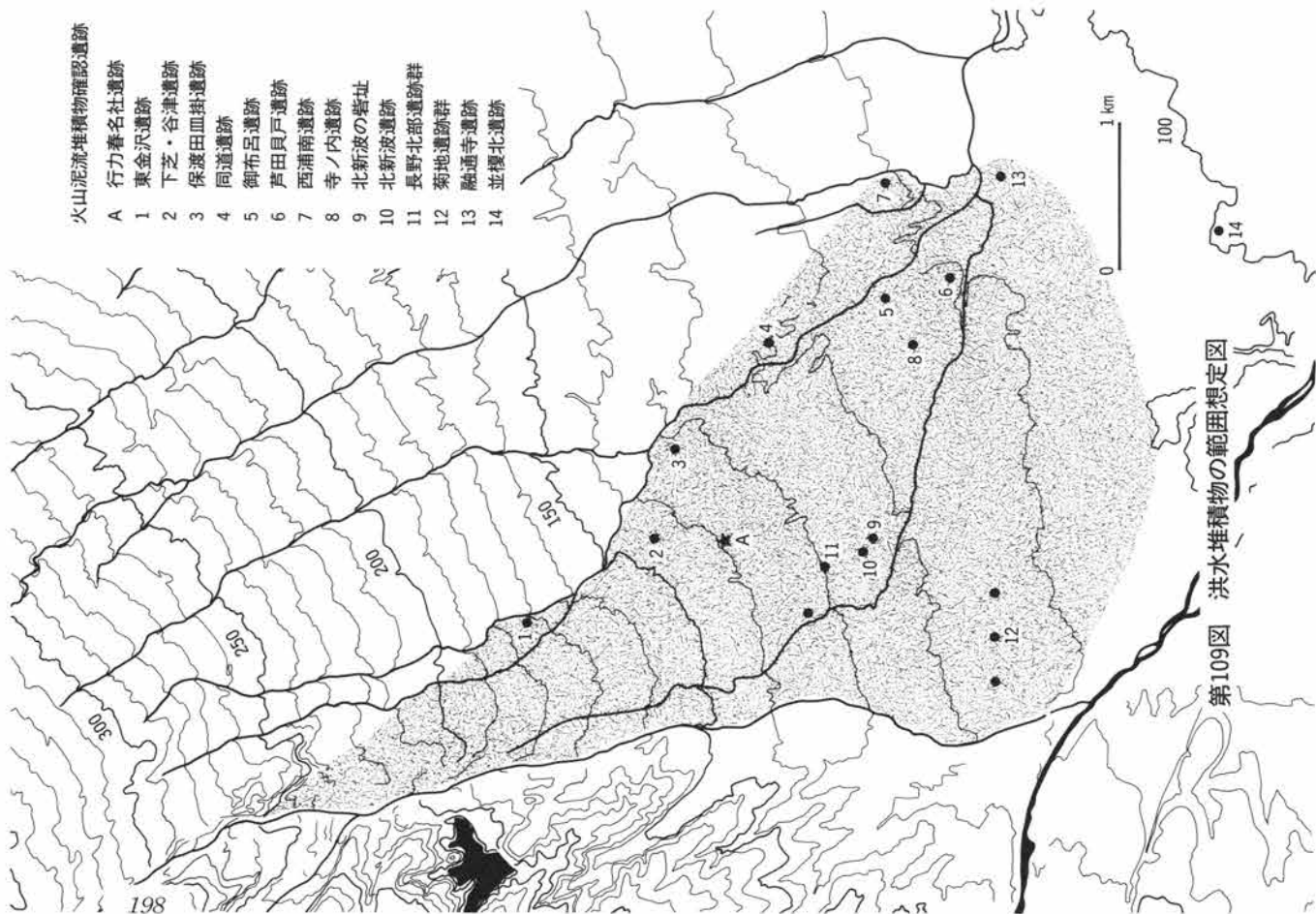
(中) Bラインにおける現地地形断面と火山泥流堆積物基底部の地形断面想定図





火山泥流堆積物確認遺跡

- A 行力春名社遺跡
- 1 東金沢遺跡
- 2 下芝・谷津遺跡
- 3 保渡田皿掛遺跡
- 4 同道遺跡
- 5 御布呂遺跡
- 6 芦田貝戸遺跡
- 7 西浦南遺跡
- 8 寺ノ内遺跡
- 9 北新波の砦址
- 10 北新波遺跡
- 11 長野北部遺跡群
- 12 菊地遺跡群
- 13 融通寺遺跡
- 14 並櫻北遺跡



境の多くが埋没している。現在まで、この同時代性を意味する示標テフラは、埋蔵文化財の発掘調査に多くの成果をもたらしてきた。テフラの存在は、テフラの同定を目的とするボーリングの方法で採取したコアから、旧地形復元がある程度のところまで可能なことを示唆している⁽¹¹⁾。また、白川扇状地の火山泥流堆積物下には、当時の集落や生産址が広がると予想されている。これらがどのような地形上に立地しているのかを調べるには、もっと細やかなデータの収集と分析が必要である。

発掘調査のおよぶ地域は、生活環境とみなされるものの一部である。生活環境は、自然環境（地形や植生など）に強く影響される。したがって、その周辺の地域構造を考え、地域の歴史を解明していく一つの手がかりとして、今後、旧地形復元の試みは必要であると考えられる。

今回の分析にあたり、早田勉氏からは御指導と助言を賜り、女屋和志雄氏・岩崎泰一氏からは多大な助言をいただいた。衷心より感謝したい。

註

- (1) 榛名火山の古墳時代後期における2回の降下テフラの年代は、考古学的編年により様々な見解がある。現在でもこの年代については流動的であるため、ここでは「古墳時代後期」と示すにとどまる。
- (2) 早田氏の御教示による。
- (3) 詳しくは、第VI章第3節〔3〕を参照。
- (4) 早田氏の御教示による。
- (5) 本稿で用いる「層相」は、ボーリングデータに記載されている土質や色調など観察されたものをいう。
- (6) 「N値」とは、地層の硬軟の状態や地層毎の締まり具合を知るのに使われる値。詳しくは、第II章第2節の註1を参照。なお、白川扇状地における火山泥流（ラハール）堆積物のN値は、軽石や礫に当たると30以上を示すが、ほとんどのものは1～10の間である。
- (7) 柱状図はボーリングデータに記載されている土質名をもとにして記号化した。なお、FP泥流の中には軽石（角閃石安山岩）が混入することや腐植物が混入する部分はある時期における地表面としての可能性があることから、これらは土質名にはないが観察や記事にある場合に図の例のとおり数字のあとに「c」や「g」をつけた。
- (8) 早田氏の御教示による。白川扇状地において、浅間C（As-C）・総社砂（礫）層相当などがFAの下層にくる。
- (9) 今回の分析では、榛名白川と井野川の流路変更などの考察はできないため、河川については現状のものを使用する。
- (10) 早田氏の指摘による。
- (11) 早田氏の指摘によると、通常行うボーリングの方法ではテフラの同定が難しいとのこと。実際には、シンウォールサンブラーというテフラ・微化石分析用試料採取（手動式と機械式がある）の装置を使う必要がある。なお、指標テフラを利用して旧地形復元を試みたものとしては、群馬町教育委員会 1991 「付編 中道遺跡群中道遺跡ボーリング調査報告」「西芝・中道・押出・薬師・毘沙門遺跡（I）」や前橋市教育委員会 1992 「付編 1）後二子古墳・小二子古墳の自然科学的分析 2）ボーリング調査による埋没地形の復元」『後二子・小二子古墳』などがある。

引用・参考文献

- 群馬県史編纂委員会 1990『群馬県史』資料編1
- 能登健 1990「三ツ寺I遺跡の成立とその背景—5世紀における河川移動を伴う水田耕地の拡大について—」『古代文化』42
- 早田勉 1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』第27巻第4号
- 田口一郎 1986『群馬県下芝・八ツ古墳』日本考古学協会『日本考古学年報39』
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ」渡辺直経編『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』
- 澤口 宏 1982「日高遺跡付近の地形」『群馬県埋蔵文化財調査事業団『日高遺跡』
- 町田 貞・井口正男他編 1981『地形学辞典』二宮書店
- 森山昭雄 1971「榛名火山東・南山麓の地形—とくに軽石流の地形について—」『地理学報告』第36・37合併号
- 新井房夫 1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』第10巻第4号
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『三ツ寺II遺跡』・1983『同道遺跡』
- 高崎市教育委員会 1988『並榎北遺跡』・1985『北新波の砦址』・1981『菊池遺跡群（I）』・1980『芦田貝戸遺跡II』・1980『御布呂遺跡』・1979『寺ノ内遺跡』・1979『矢島遺跡・御布呂遺跡』・1979『正観寺遺跡群（I）』
- 群馬町教育委員会 1991『西芝・中道・押出・薬師・毘沙門遺跡（I）』・1988『保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡』
- 箕郷町教育委員会 1988『海行A・B遺跡』・1986『生原・善龍寺前遺跡』

分析資料の収集・保管について

北陸新幹線ルートは、鉄道建設公団がボーリング調査を行っており、資料提供の協力を得た。高崎市浜川地区においては、当事業団の行ったボーリングデータがあり、これを用いた。榛名白川と井野川が挟む地域のボーリングデータの収集にあたり、以下諸機関の資料提供の協力を得た。

高崎土木事務所、高崎市役所、箕郷町役場、東京電力株式会社高崎工務所
 なお、収集した資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

〔4〕 FA泥流・FP泥流についての覚書

1. はじめに

これまで「二ツ岳第1軽石流 (FPF-1)」「二ツ岳第2軽石流 (FPF-2：森山，1971)」と「泥流」や「土石流」は、言葉とその意味において、混同して使用される例が多かった。また、現在においても誤解は多い。前節の執筆中、古墳時代後期における榛名火山の2回の降下テフラだけでなく、火砕流や火山泥流（ラハール）2次的な泥流・土石流・洪水などの言葉について、現時点で正しい意味の認識と整理が必要であると考えた。そこで本節では、2つの火砕流「二ツ岳第1軽石流 (FPF-1)」「二ツ岳第2軽石流 (FPF-2)」と「火山泥流（ラハール）」について記載していく。

2. 2つの「火砕流」について

当初、2つの火砕流は、「沼尾川 Pyroclastic flow deposit：新井，1962」と呼称され、「二ツ岳浮石層を夾んで、新旧に二区分できる」として確認された。その後、この2つの火砕流は、「二ツ岳第1軽石流 (FPF-1)・二ツ岳第2軽石流 (FPF-2：森山，1971)」と新たに呼称され、現在においてもこの呼称が使用されている。早田（1989）は、榛名山の火山活動に伴う降下テフラや火砕流が噴出した時間的経過や堆積様式およびそれらの分布を示している。これまで「二ツ岳降下火山灰層 (FA：新井，1979)」「二ツ岳第1軽石流 (FPF-1：新井，1979)」と呼称されたものを総称して、「榛名一渋川テフラ層 (Haruna-Shibukawa Tephra Formation, 略称：Hr-S)」という名称を用いた。また、「二ツ岳降下軽石層 (FP：新井，1979)」「二ツ岳第2軽石流 (FPF-2：新井，1979)」と呼称されたものを総称して、「榛名一伊香保テフラ層 (Haruna-Ikaho Tephra Formation, 略称：Hr-I)」という名称を用いた。早田による地質的観察では、降下堆積と火砕流が繰り返されていることを指摘している。

しかし、白川扇状地において、火砕流堆積物は下芝谷古墳の周堀で確認されているが、それが扇状地内でどのように広がるのかはわからない。

3. 火山泥流（ラハール）について

火山活動で火山泥流が生じる原因はいろいろあるが、榛名火山では次の二つが考えられる。

- ①. 火砕流が河川に流入し、低温の碎屑流（火山泥流）に移行した。
- ②. 噴出直後の火山灰や火砕流が山体斜面に不安定な状態で一時的定着し、その後の降雨などにより再び移動を始め、多量の水を含んだ流れが生じた。

つまり、「火山泥流」とは、「火山活動に起因する大規模な碎屑物流のうち、火砕流以外のものを総称して」いる⁽¹⁾。一方、単に「泥流」という場合は、集中豪雨などによって岩屑や火砕物などが移動することをいう。この意味において「土石流」もこれに含まれる。

第32表は、榛名山の火山活動をテフラ分類の視点から、早田（1989）によるテフラの分類と、これまでの発掘調査や本報告書の整理の過程で用いたテフラとを移動様式をふまえて対比させる⁽²⁾。

4. おわりに

これまで述べてきたことから、「FA泥流 (FPF-1)」「FP泥流 (FPF-2)」という書き方は、適切でないことがわかるであろう。火山泥流堆積物や泥流・土石流堆積物として確認されている場合でも「二ツ岳第1軽

石流 (FPF-1)」「二ツ岳第2軽石流 (FPF-2)」と混同してしまっている報告例が少ないのである。これらの事実は、活字や図による説明を読んだ者が大きな誤解をもつことを示している。

第32表 テフラの移動様式とその分類

		移動様式	これまでの分類	早田 (1989) の分類
			テフラ名	テフラ名
↑ 時 目	2 回	泥流・洪水 火山泥流 降下+火砕流	FP泥流 FP+FPF-2	I 洪水堆積物 Hr-I { I-14 ↑ I-1
	火山活動の休止期間			
↑ 間 目	1 回	泥流・洪水 火山泥流 降下+火砕流	FA泥流 FA+FPF-1	S 洪水堆積物 Hr-S { S-12 ↑ S-1

註

- (1) 町田貞・井口正男他編 1981 『地形学辞典』二宮書店 85p.1.2-3。
 (2) 第III章第3節「テフラの呼称について」では、2つの火砕流堆積物について触れなかった。それは、行力春名社遺跡の発掘調査で火砕流堆積物が確認されていないためであり、本報告書の中でも用いないからである。

参考・引用文献

- 横山泉・荒牧重雄・中村一明編 1992 『火山』岩波書店
 早田勉 1989 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』第27巻第4号
 町田貞・井口正男他編 1981 『地形学辞典』二宮書店
 森山昭雄 1971 「榛名火山東・南山麓の地形—とくに軽石流の地形について—」『地理学報告』第35・36合併号
 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀年」『群馬大学紀要自然科学編』第10巻第4号

発掘調査報告書抄録

ふりがな	ぎょうりきはるなしやいせき							
書名	行力春名社遺跡							
副書名	北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第183集							
編著者名	深澤敦仁・佐藤明人・真下高幸・大竹正隆							
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL0279(52)2511							
発行年月日	西暦1995年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぎょうりきはるなしや 行力春名社	ぐんまけんたかきまし 群馬県高崎市 ぎょうりきまち 行力町	10202	10005 00330	36度 22分 22秒	138度 58分 20秒	19910204～ 19911130	6,370	鉄道（北陸新 幹線）建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
行力春名社	集落	中世～近世	井戸・土坑・溝 耕作痕	陶磁器・軟質土器・須恵器・土 師器・鉄器・古銭・石臼・砥石・ 馬骨・馬歯		中世屋敷跡に関連す る大溝検出		
	生産	平安時代 (1108年)	水田・溝	なし		As-B軽石直下遺構		
	集落	奈良～平安 時代	掘立柱建物6棟 井戸・土坑・溝	須恵器・土師器		FP泥流堆積～As-B 下水田形成の間の遺 構		
	集落	古墳時代 後期	地表面	なし		FP直下地表面		
	集落	古墳時代 中期	竪穴住居3軒	土師器・滑石（製品・未製品・ 砥石・原石・剥片）・その他石		FA降下以前の滑石 製品工房址2軒		

写 真 图 版



○は行力春名社遺跡地点。右上の河川は井野川。
井野川左岸には保渡田3古墳が見える。
写真の縮尺は約11,000分の1（提供・国土地理院）



1 1号井戸全景（南から）



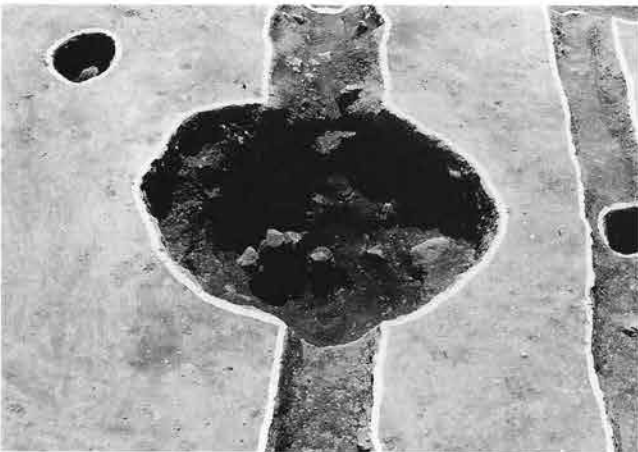
2 1号井戸断面（北から）



3 2号井戸全景（西から）



4 2号井戸断面（北東から）



5 3号井戸全景（東から）



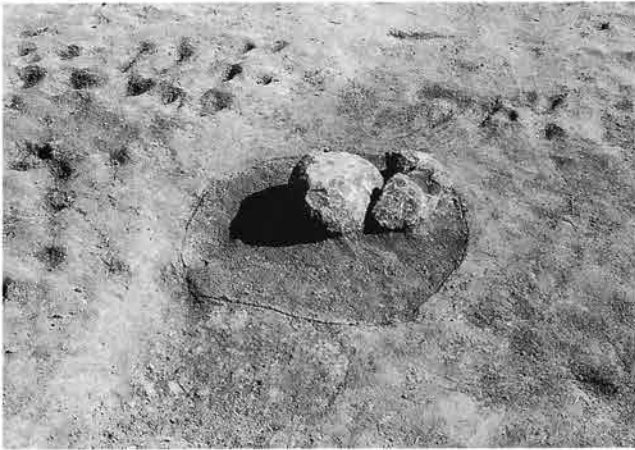
6 3号井戸断面（西から）



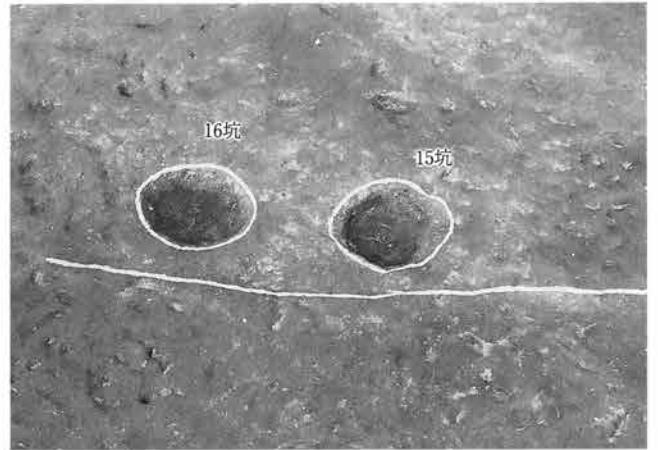
7 3号土坑全景（西から）



8 3号土坑馬歯出土状況（西から）



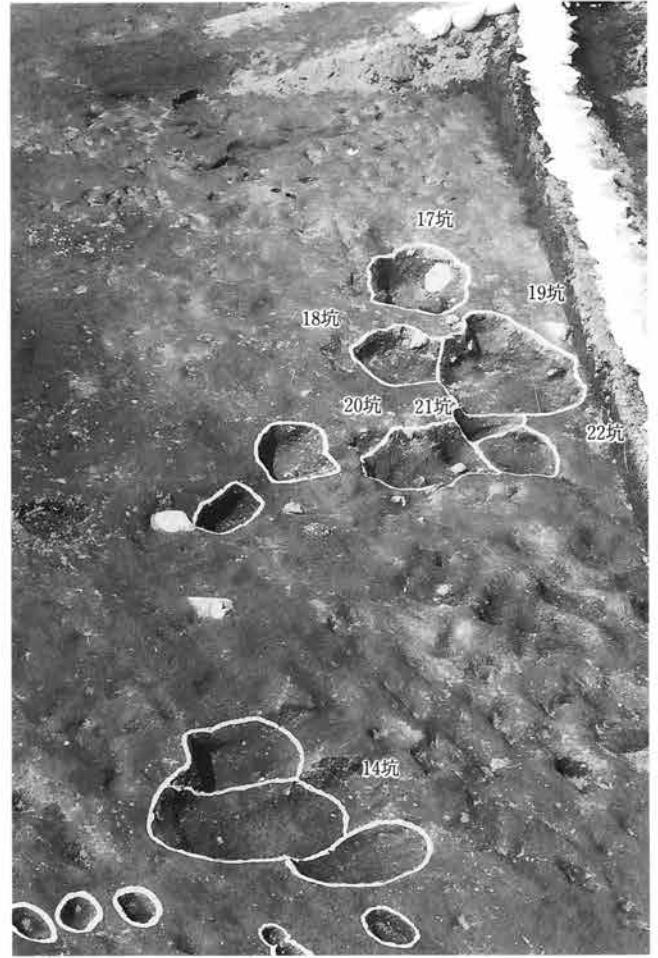
1 1号土坑全景 (西から)



2 15・16号土坑全景 (南から)



3 4～13号土坑全景 (北東から)



4 14・17～22号土坑全景 (北東から)



5 23号土坑遺物出土状況 (西から)



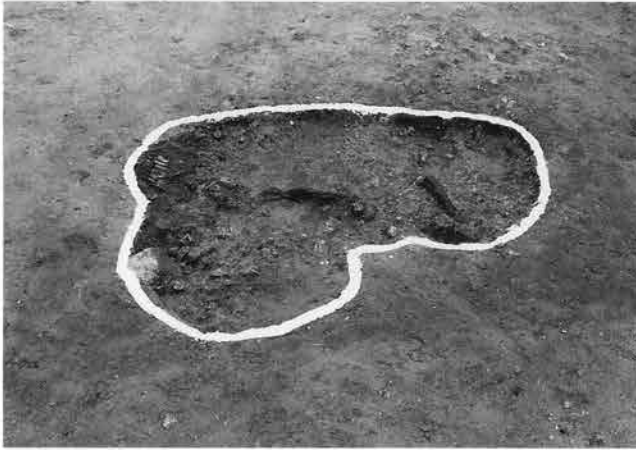
6 23・24号土坑全景 (南から)



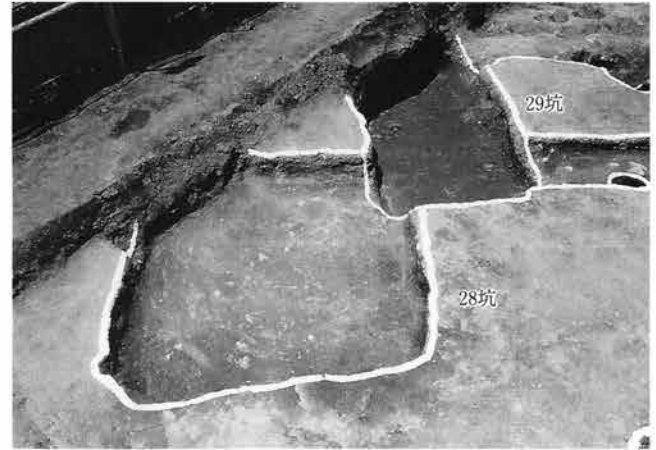
1 25号土坑全景（西から）



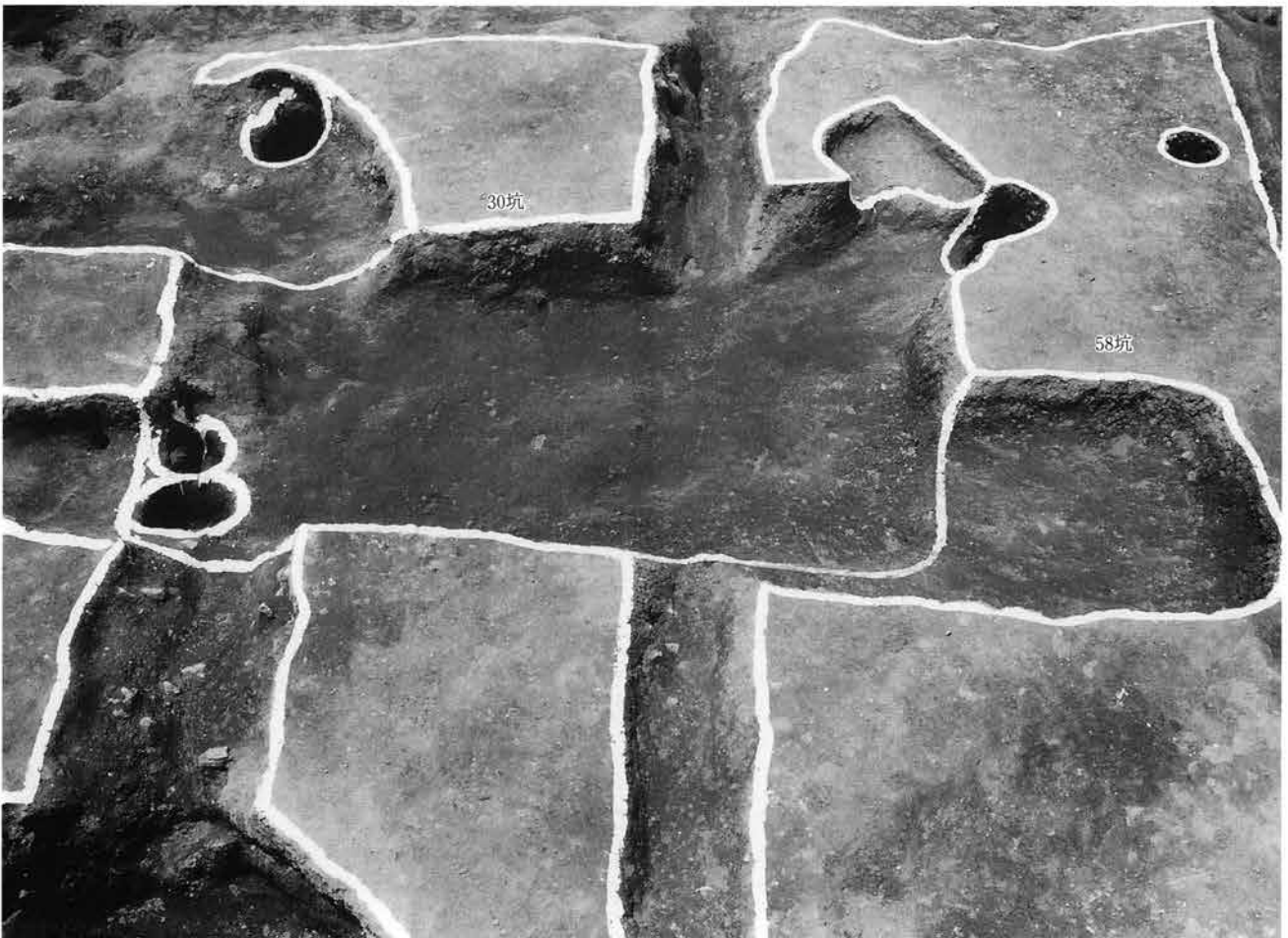
2 26号土坑全景・断面（南西から）



3 27号土坑全景（南から）



4 28・29号土坑全景（東から）



5 30・58号土坑全景（東から）



1 31号土坑全景（南から）



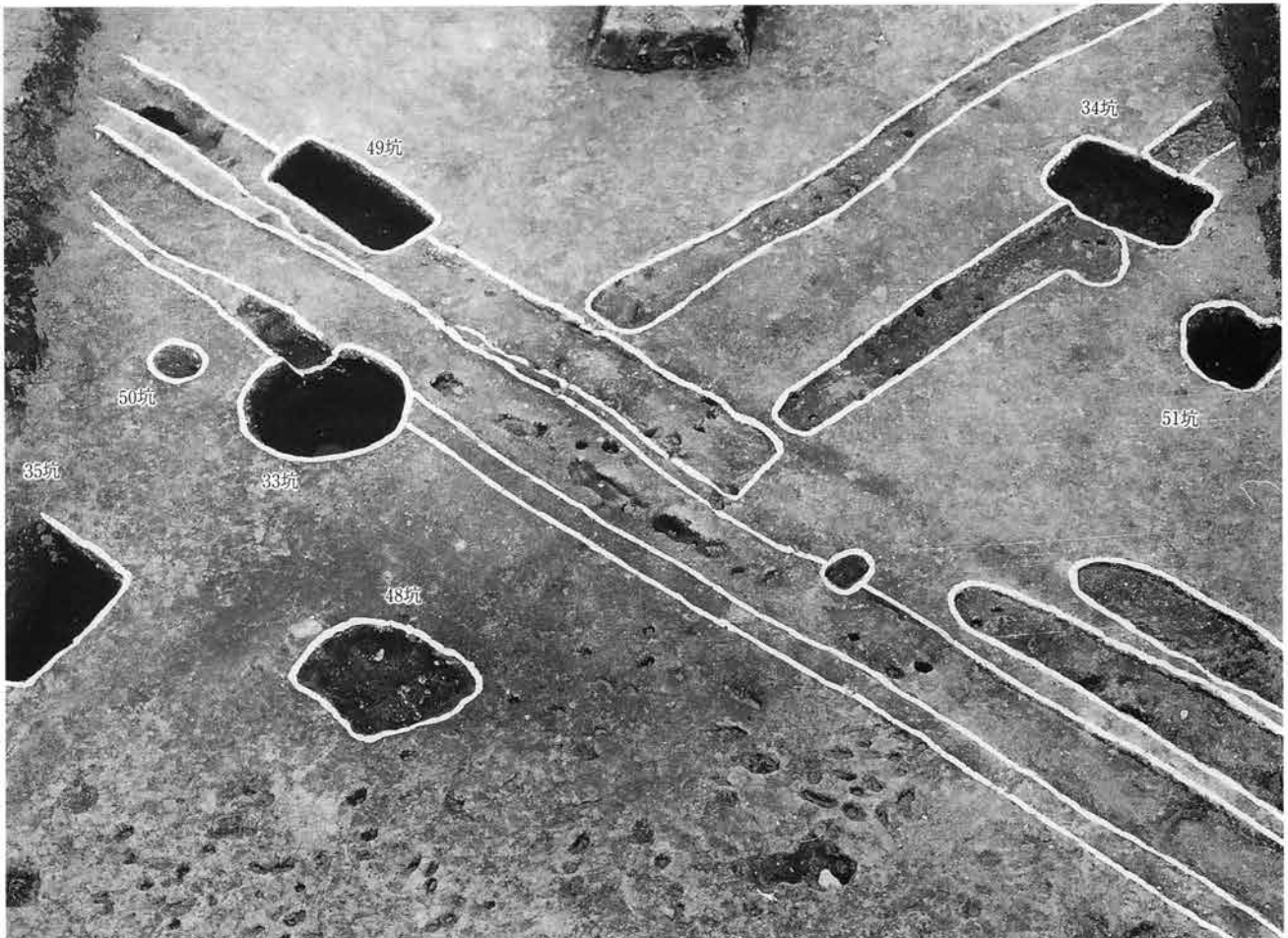
2 32号土坑全景（北から）



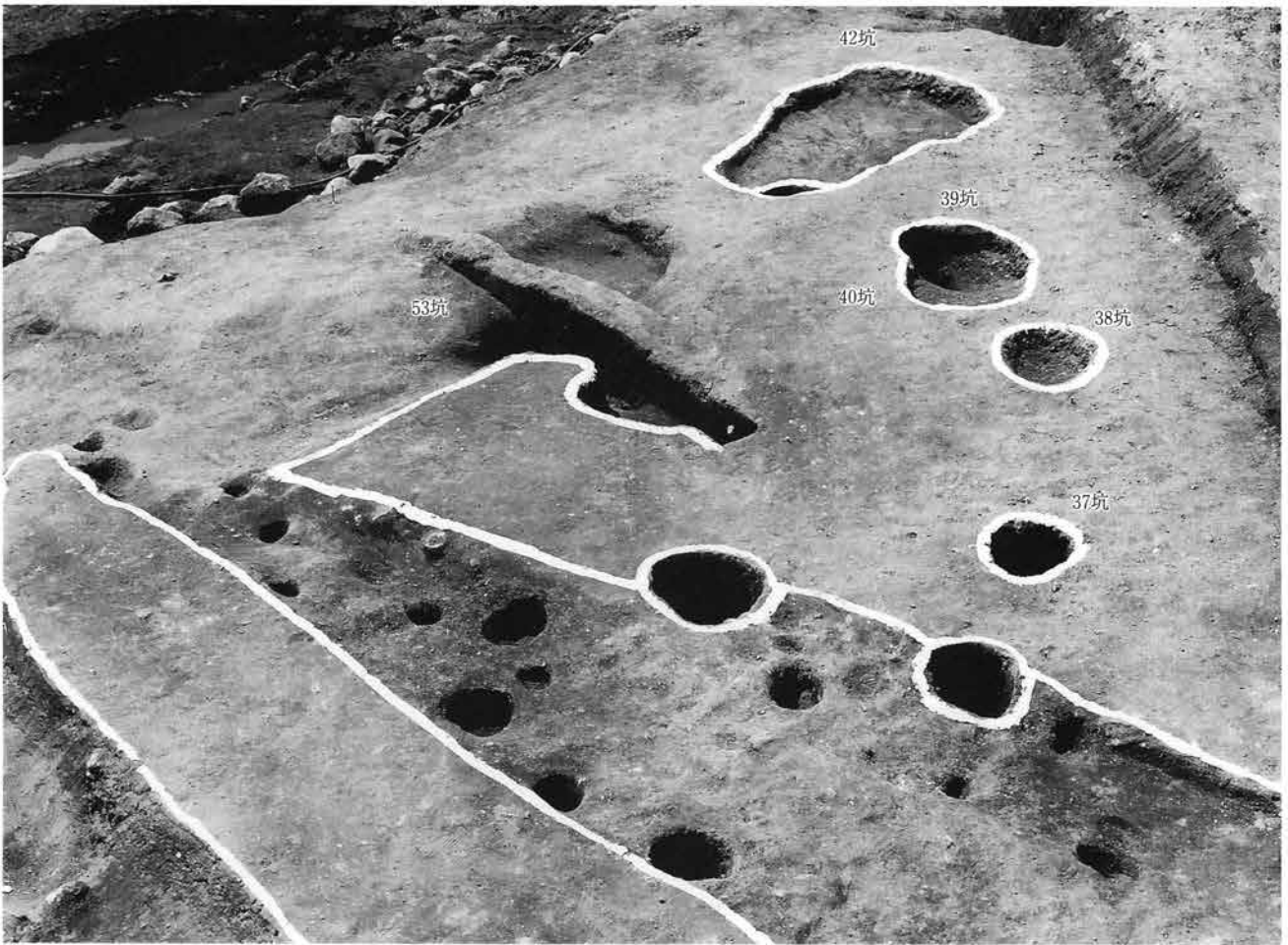
3 36号土坑全景（南西から）



4 52号土坑全景（北から）



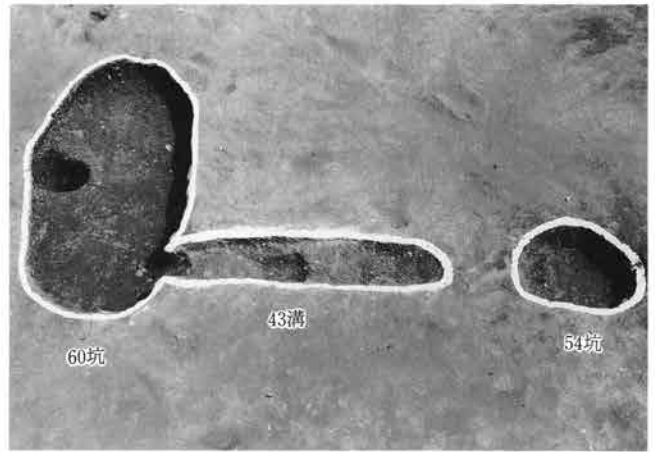
5 33~35・48~51号土坑全景（南東から）



1 37~40・42・53号土坑全景（南東から）



2 56号土坑全景（南から）



3 54・60号土坑・43号溝全景（北から）



4 59号土坑全景（北西から）



5 61号土坑全景（南から）



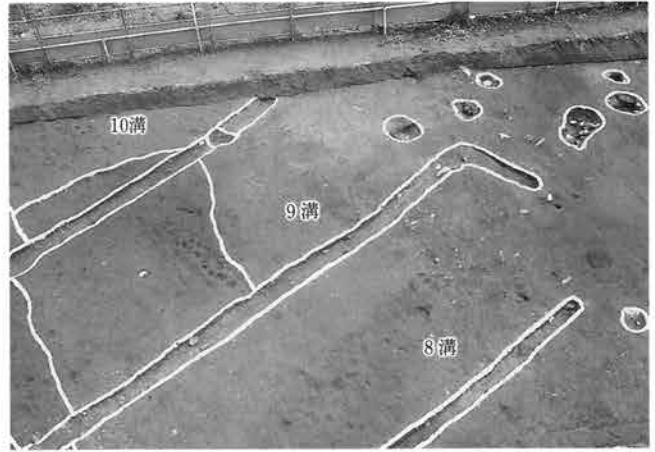
1 1～6号溝全景（西から）



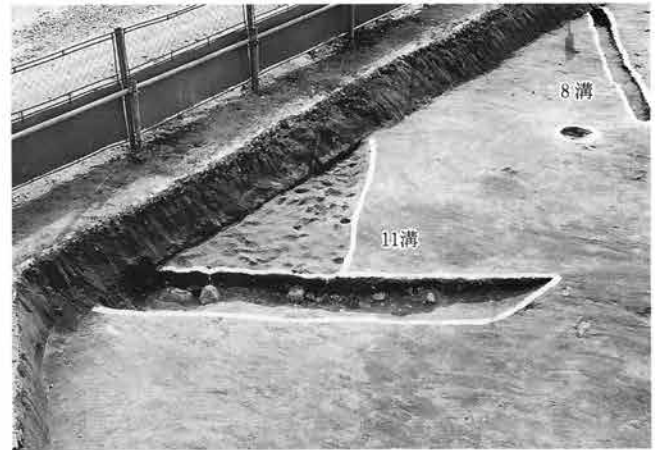
2 1～5号溝全景（南から）



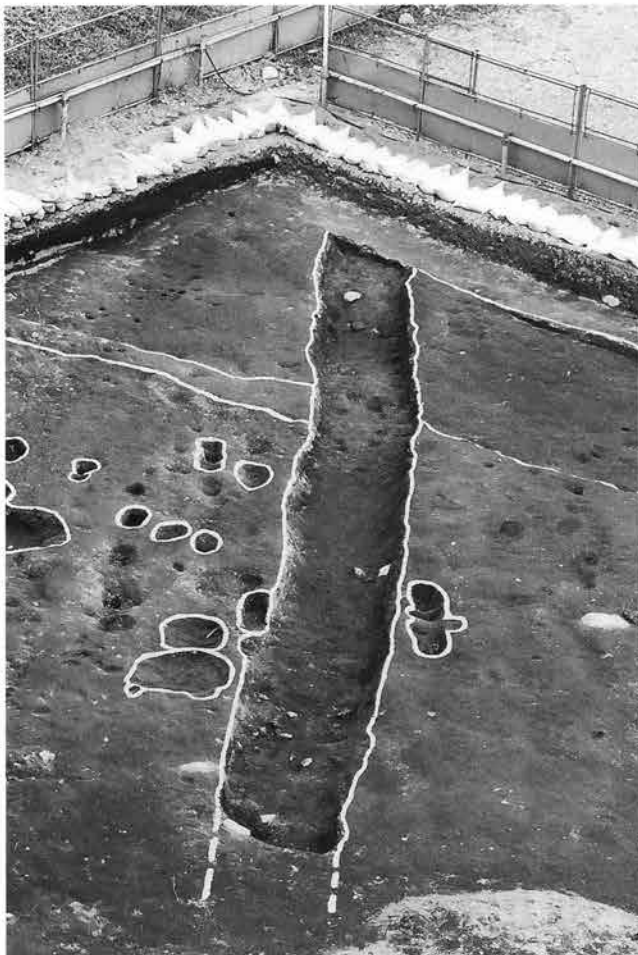
1 7号溝全景（北から）



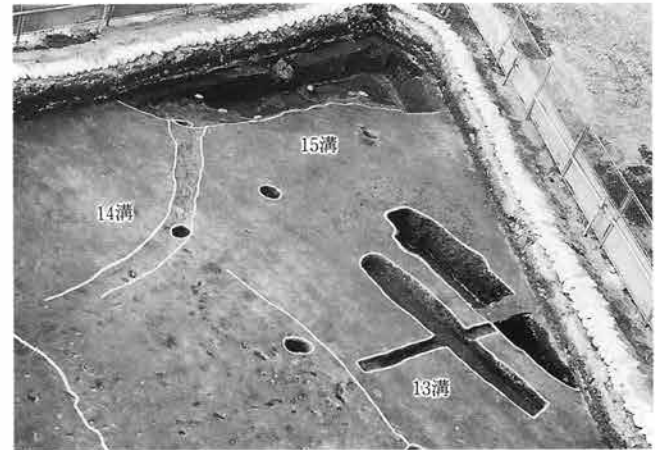
2 8～10号溝全景（南西から）



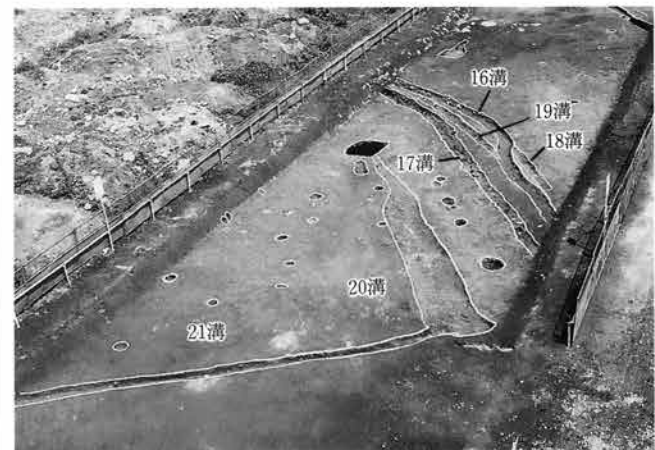
3 8・11号溝全景（東から）



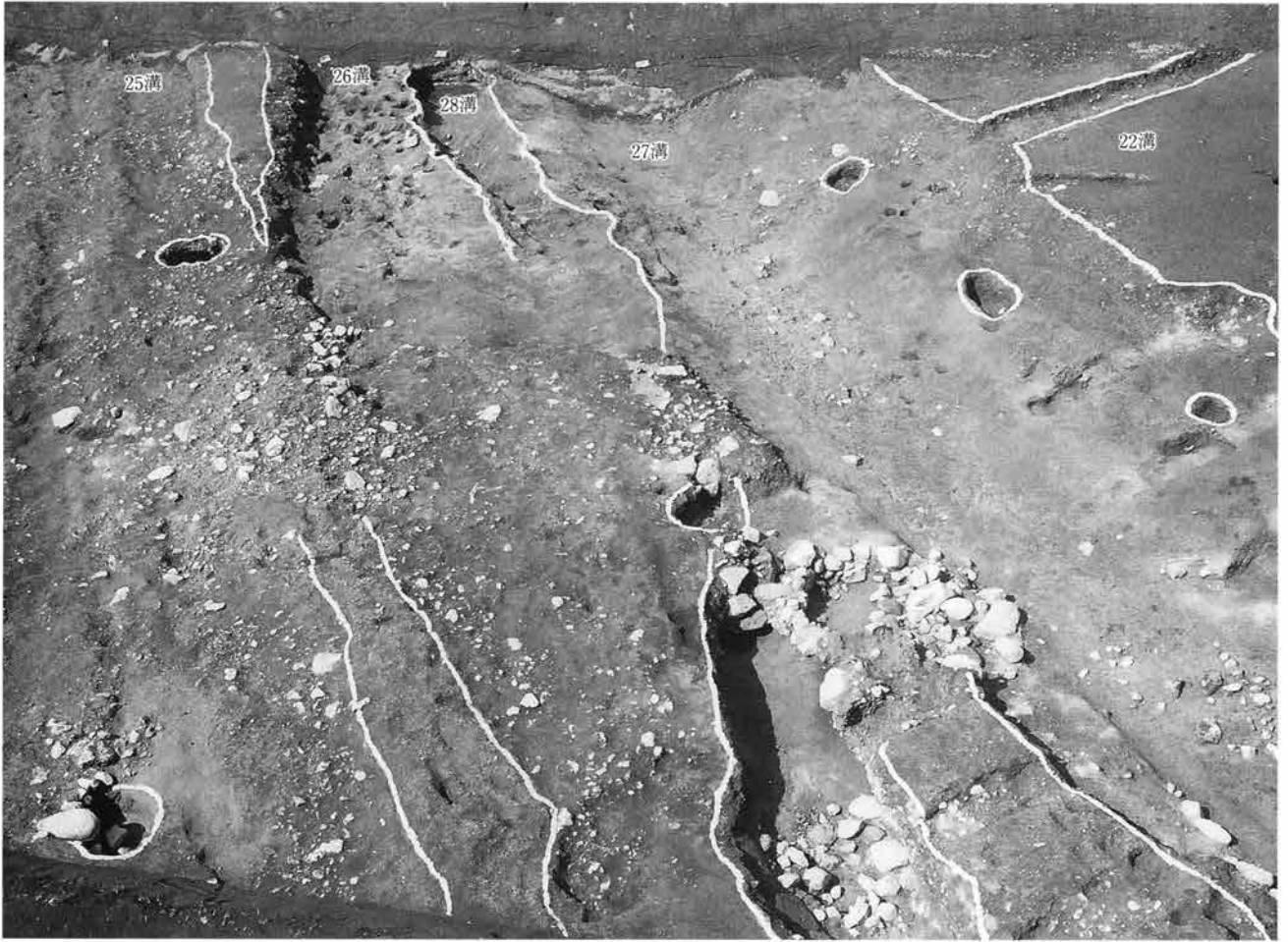
4 12号溝全景（西から）



5 13～15号溝全景（南東から）



6 16～21号溝全景（西から）



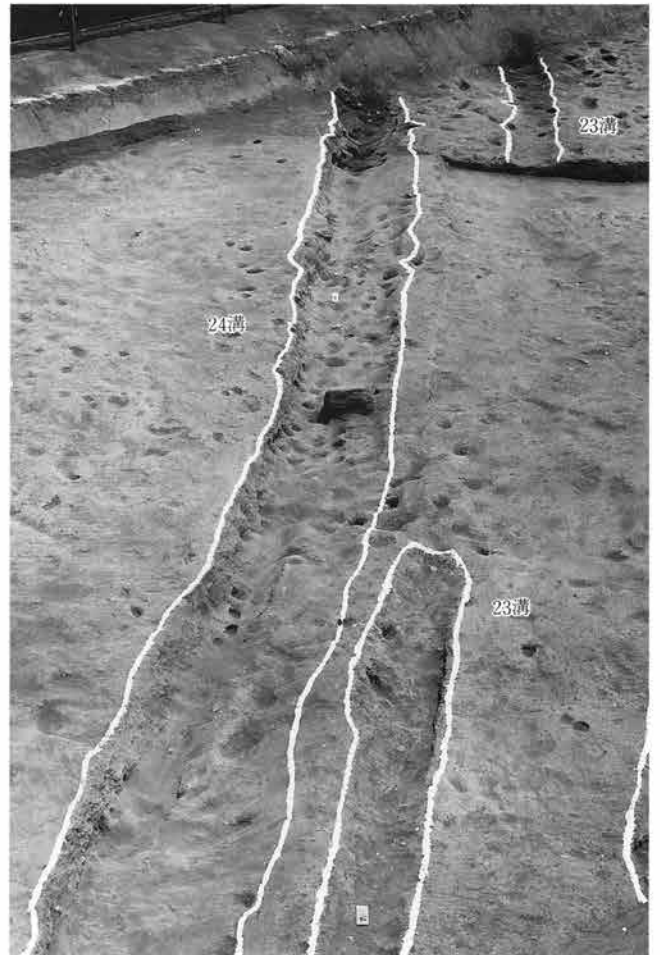
1 22・25～28号溝全景（南西から）



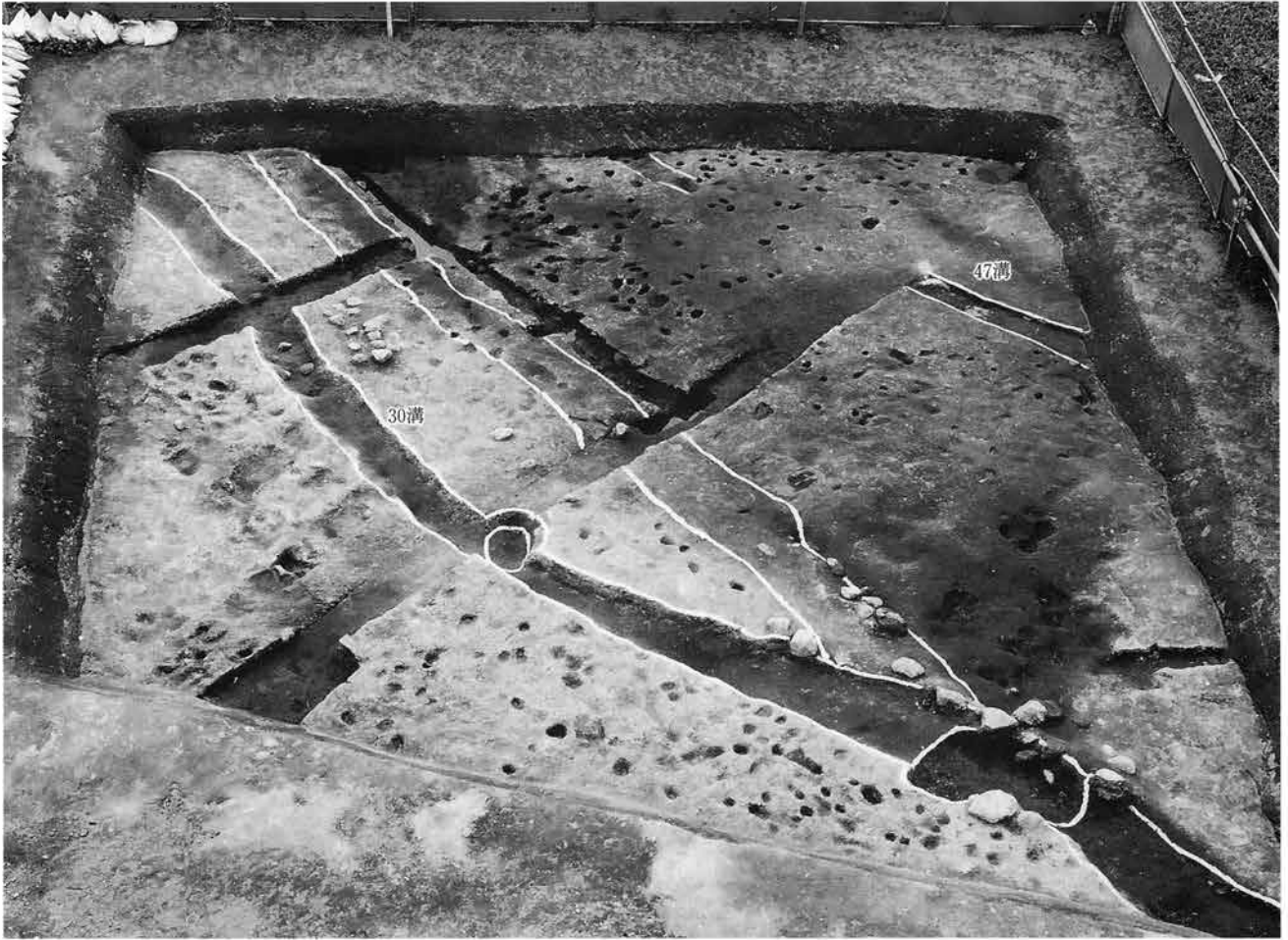
2 27号溝内集石（南東から）



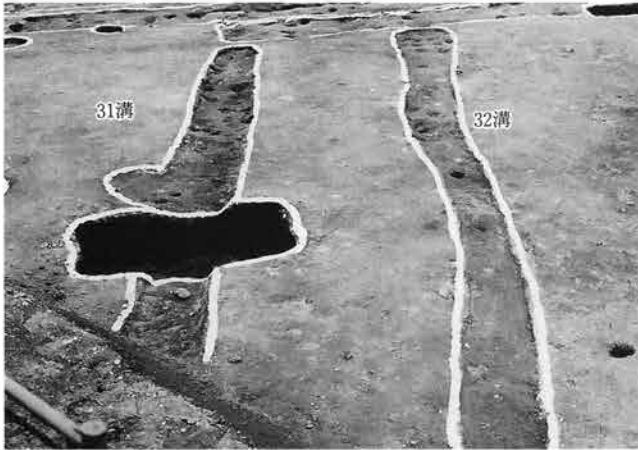
3 27号溝内集石（南西から）



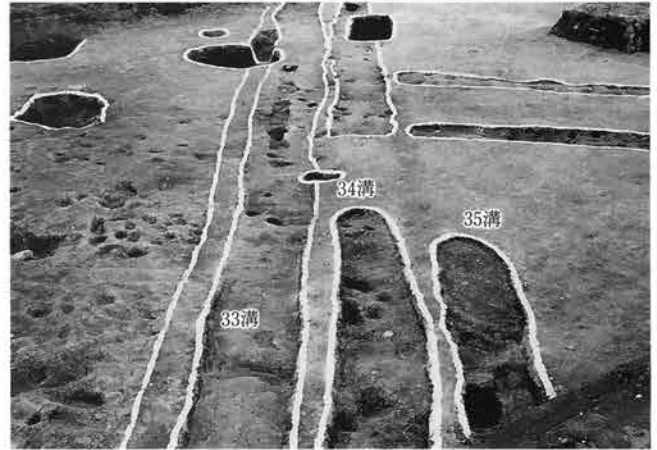
4 23・24号溝全景（西から）



1 30・47号溝全景（北西から）



2 31・32号溝全景（北から）



3 33～35号溝全景（東から）



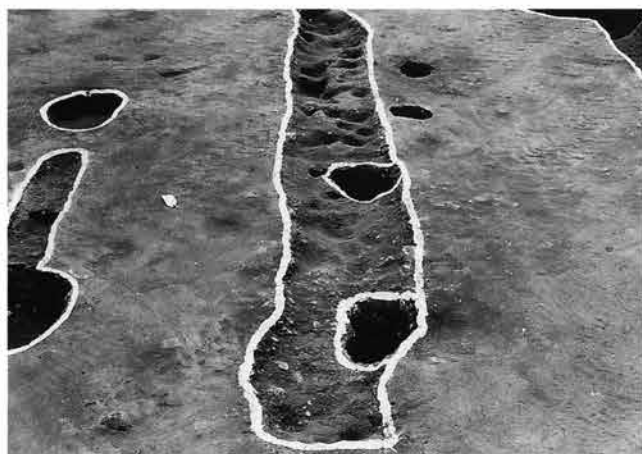
4 36・37号溝・44号土坑全景（北東から）



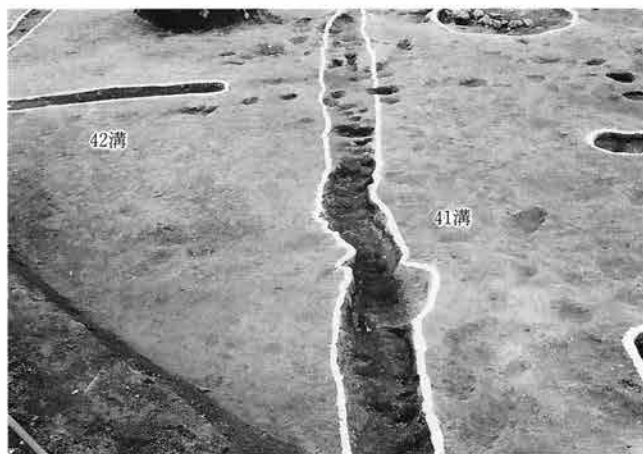
5 36号溝内馬骨出土状況（北東から）



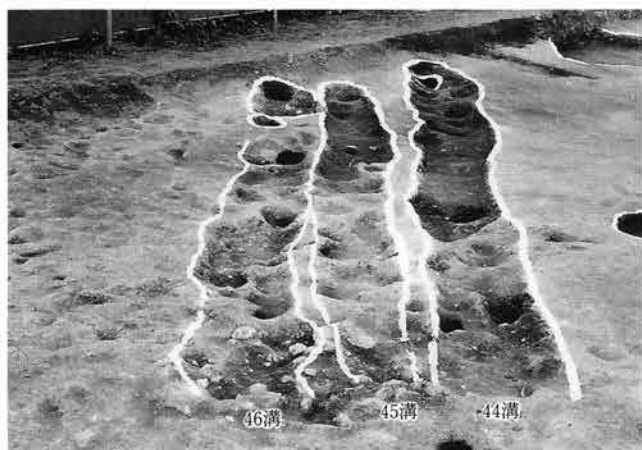
1 29・38～40・50号溝全景（西から）



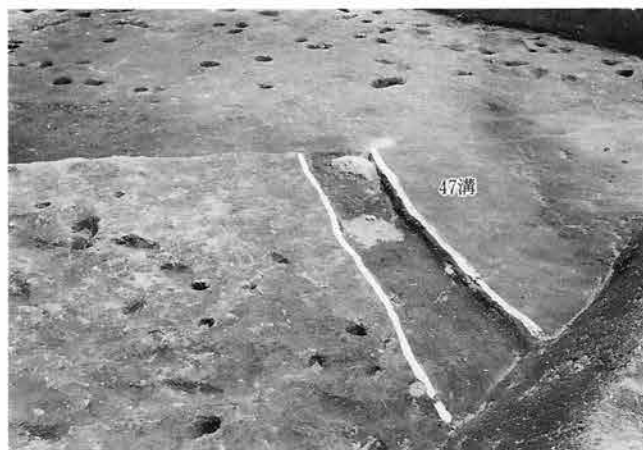
2 40号溝全景（東から）



3 41・42号溝全景（北から）



4 44～46号溝全景（東から）



5 47号溝全景（西から）



1 51～53号溝全景（北東から）



2 51号溝石列検出状況（北東から）



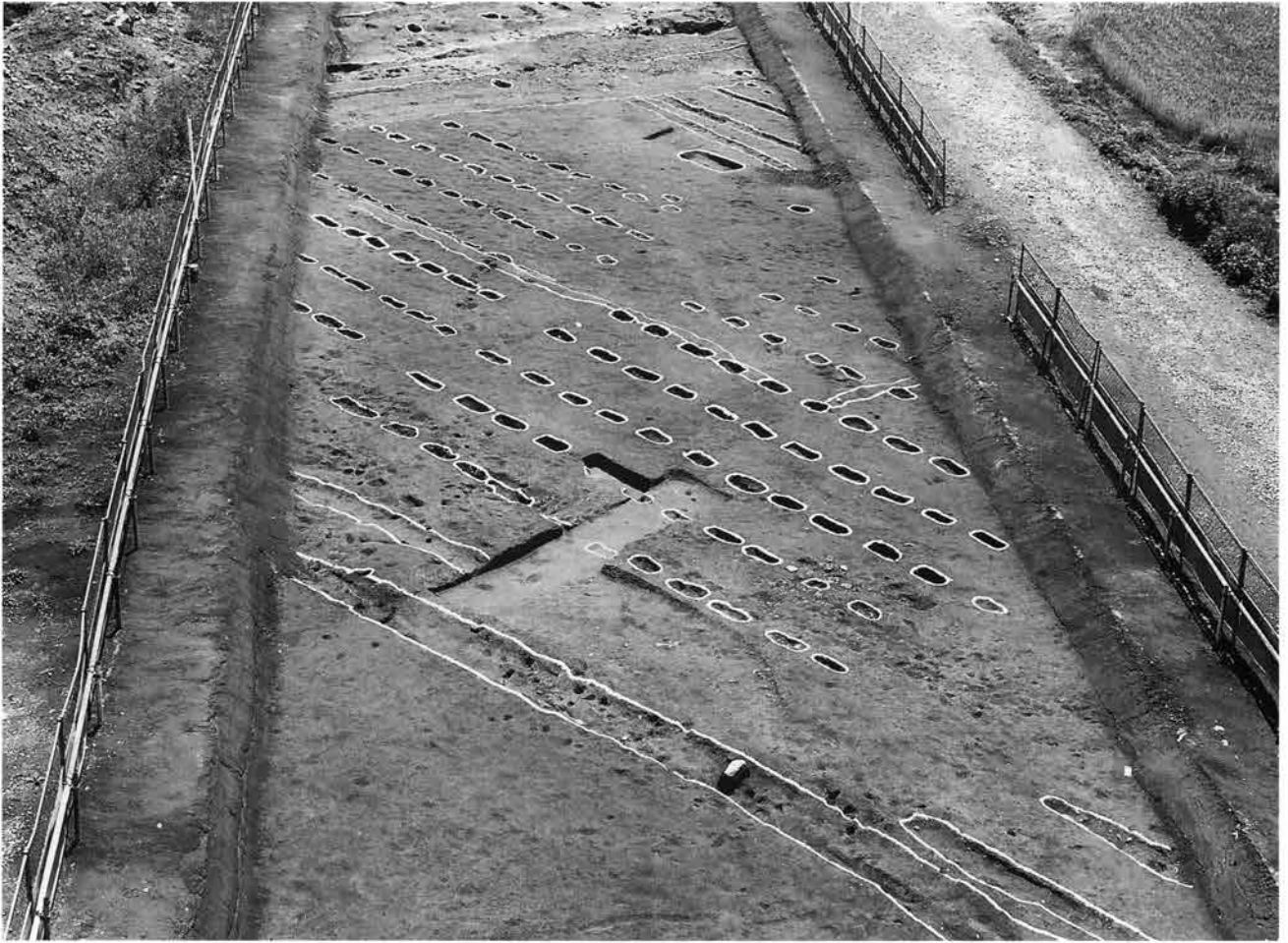
3 51号溝杭列検出状況（北西から）



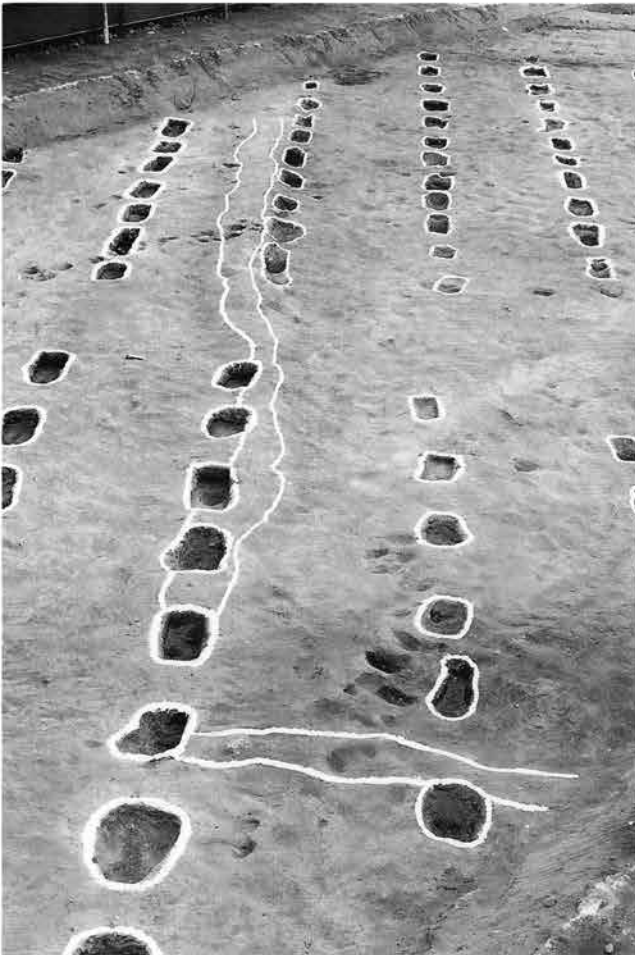
4 51～53号溝調査風景（南東から）



5 54・55号溝全景（東から）



1 中世以降耕作痕検出状況（北西から）



2 耕作痕検出状況（西から）



3 中世以降耕作痕断面（西から）



4 中世以降耕作痕断面（南から）



1 西区全景 (南東から)



2 西区調査風景 (南東から)



3 西区畦畔検出状況 (南から)



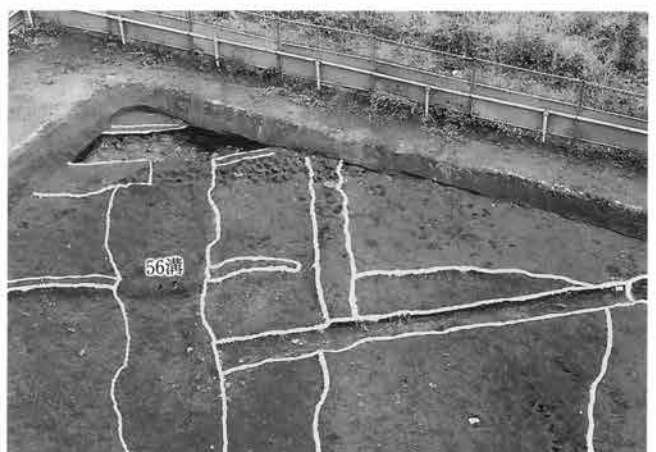
4 鋤跡 (第1地点) 検出状況 (南から)



5 西区鋤跡 (第2地点) 検出状況 (南西から)



6 東区西畦畔検出状況 (南から)



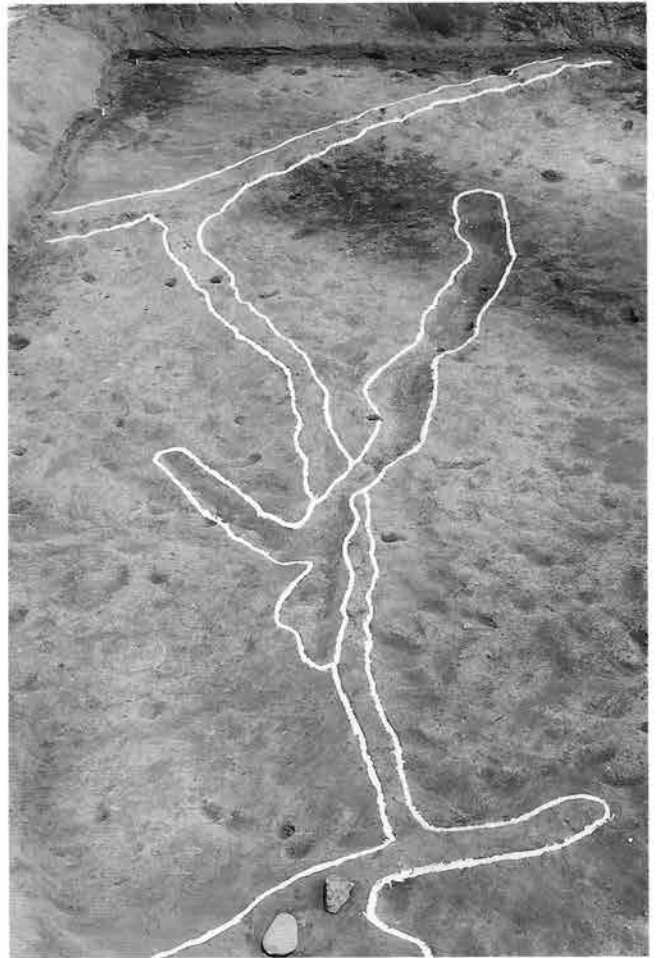
7 56号溝全景 (南から)



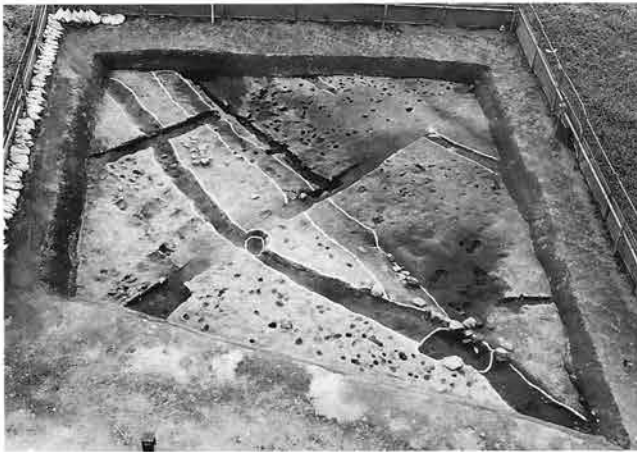
1 東区西鋤跡（第3地点）検出状況（南から）



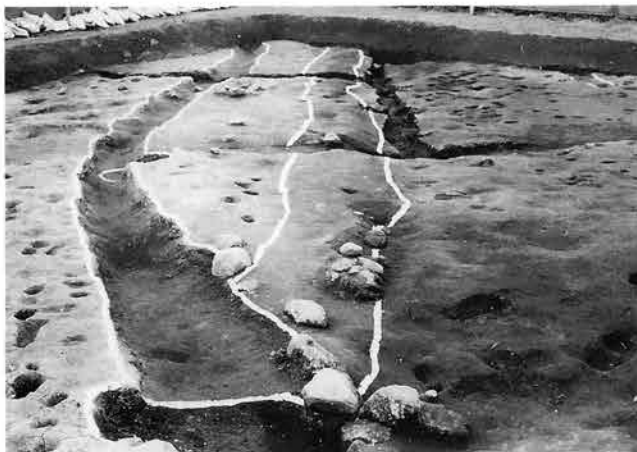
2 東区西 As-B層堆積状況（南西から）



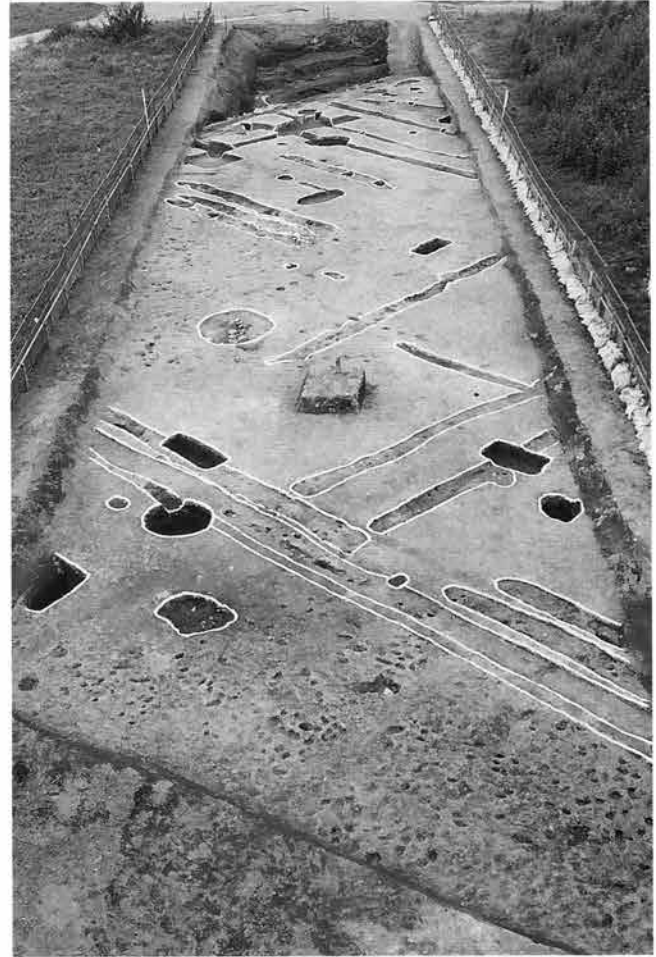
3 東区中央畦畔検出状況（南西から）



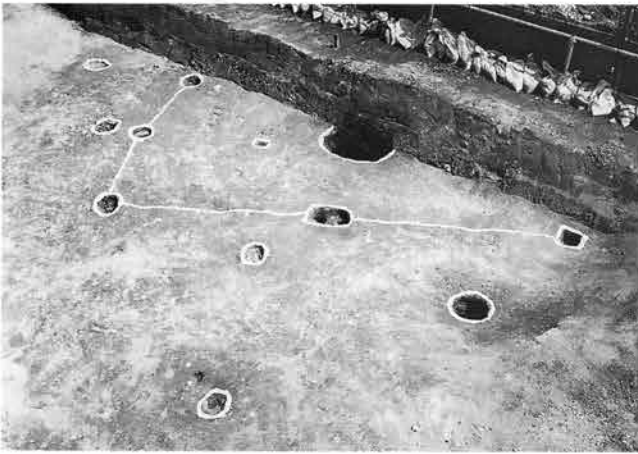
4 東区東畦畔検出状況（北西から）



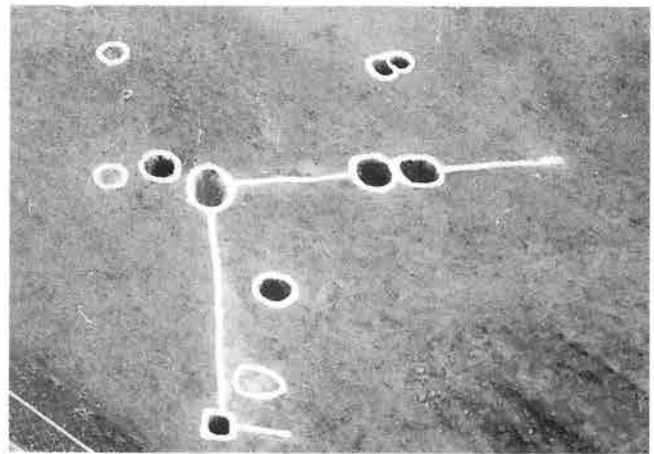
5 東区東畦畔検出状況（西から）



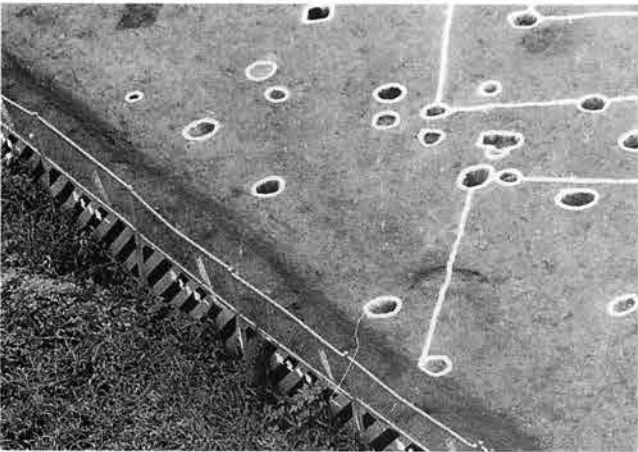
6 東区東遠景（他遺構と同一面）（南東から）



1 1号掘立柱建物（南から）



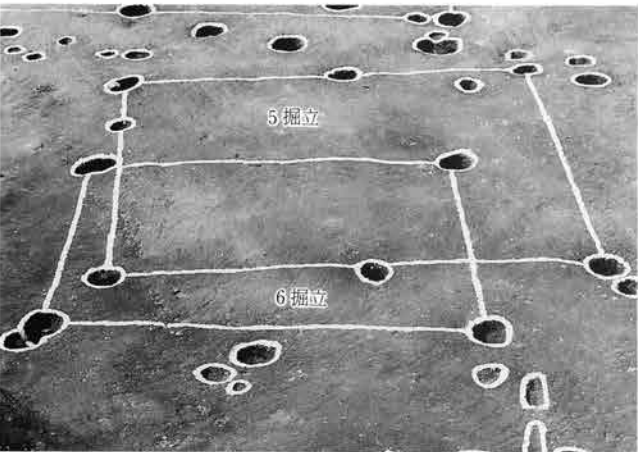
2 2号掘立柱建物（北から）



3 3号掘立柱建物（北西から）



4 4号掘立柱建物（南から）



5 5・6号掘立柱建物全景（南から）



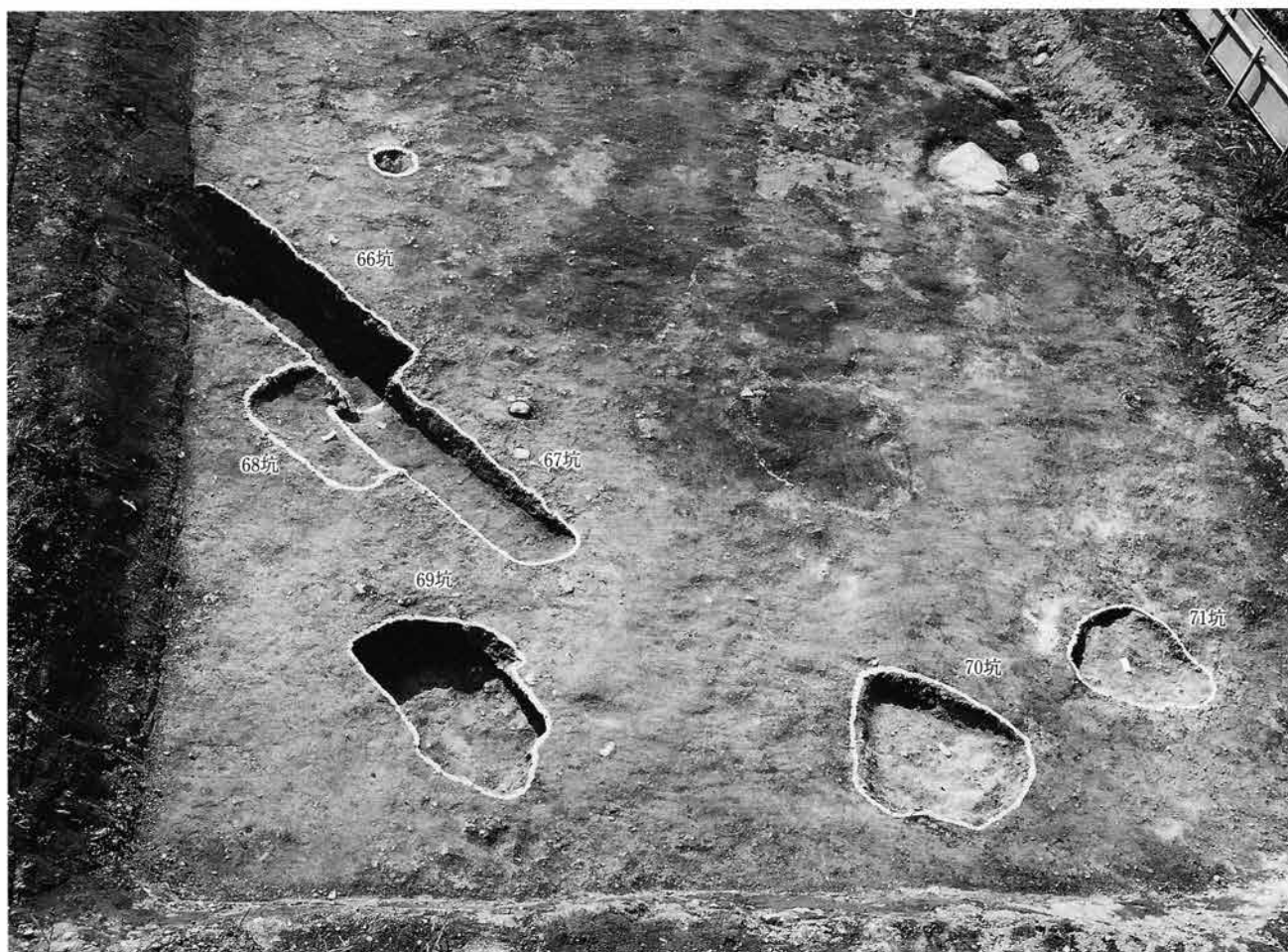
6 4号井戸全景（南から）



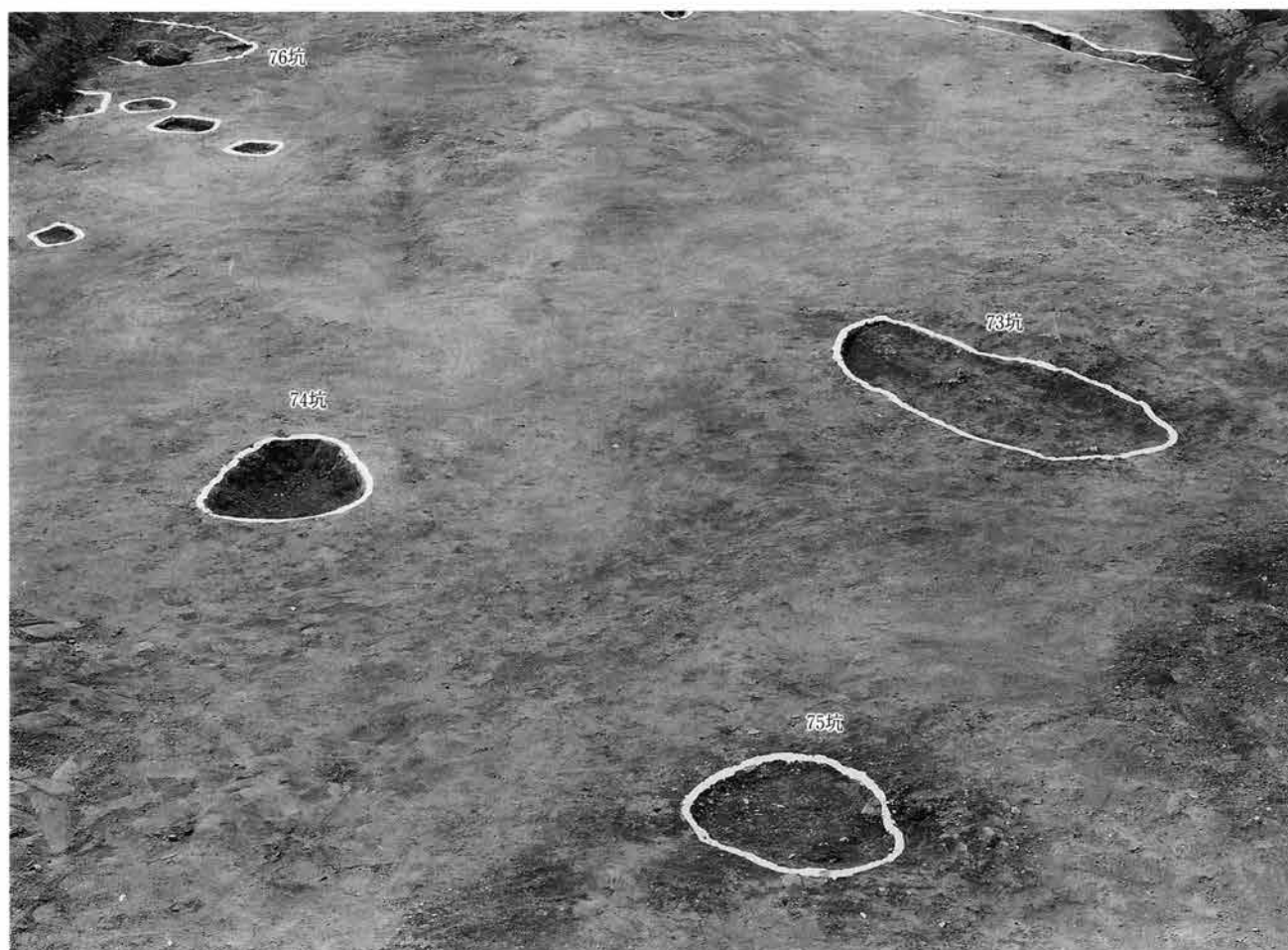
7 5号井戸全景（南西から）



8 5号井戸断面（南から）



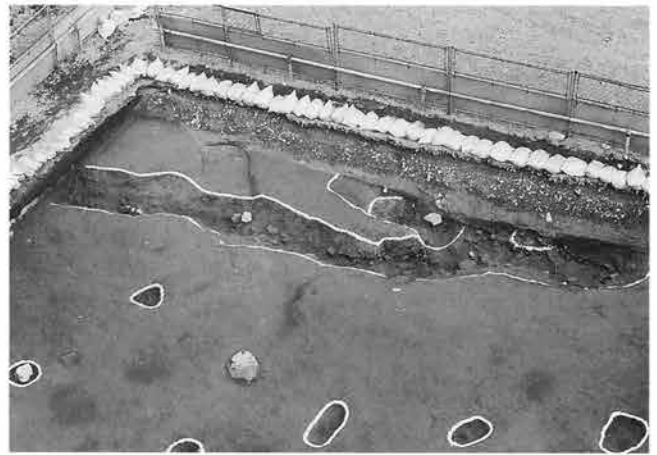
1 66～71号土坑全景（南東から）



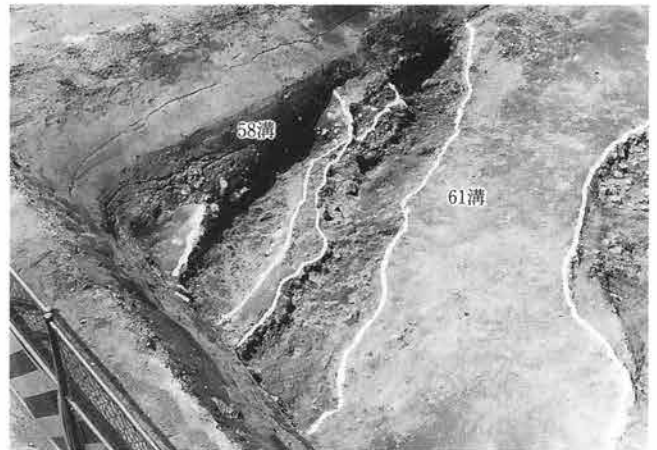
2 73～76号土坑全景（南東から）



1 57号溝全景 (南から)



2 61号溝全景 (西から)



3 58・61号溝全景 (南から)



4 59号溝全景 (南から)



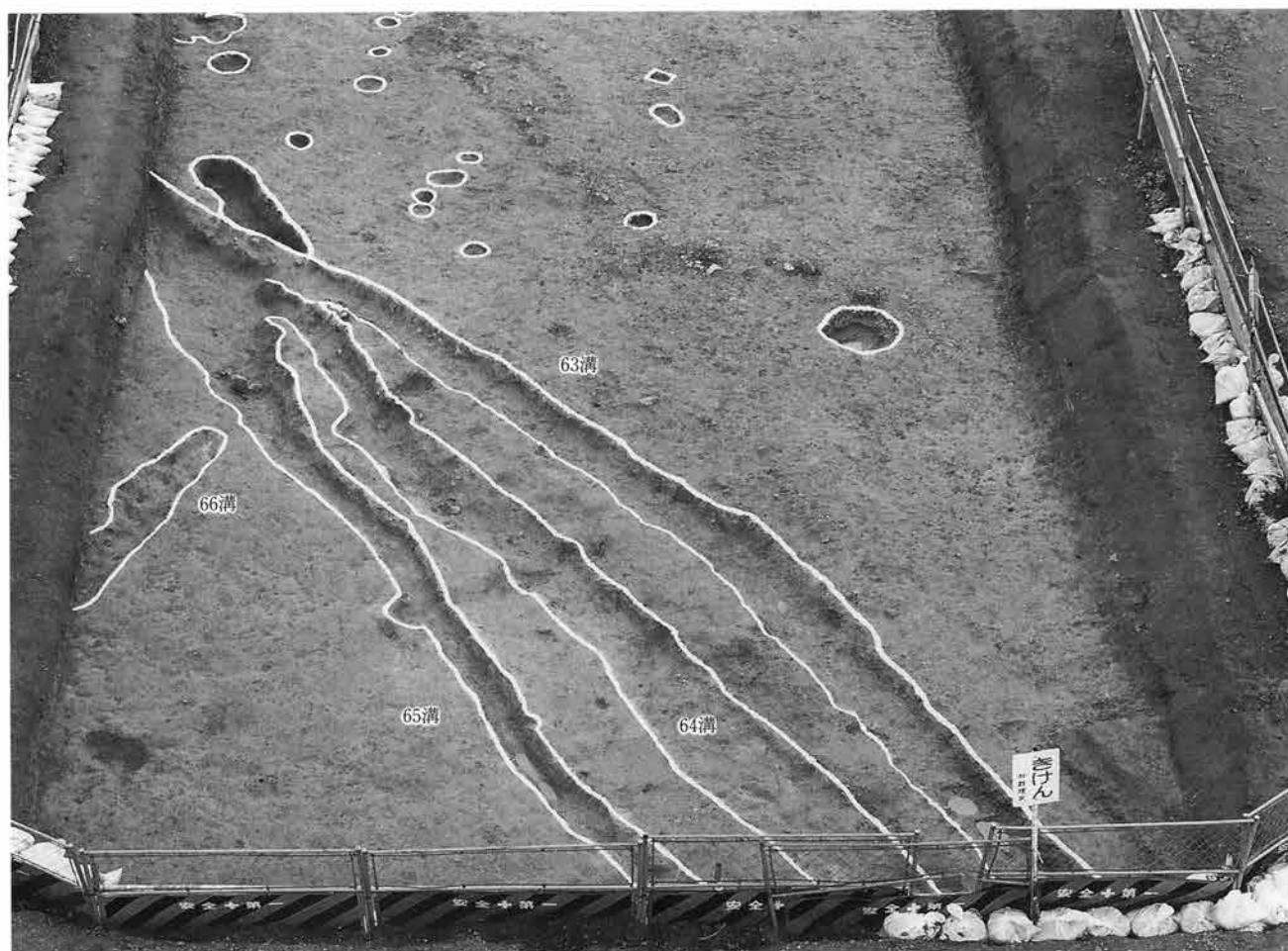
5 60号溝全景 (南から)



1 60号溝内井戸（5号井戸）全景（南西から）



2 62号溝全景（南東から）



3 63～66号溝全景（南東から）



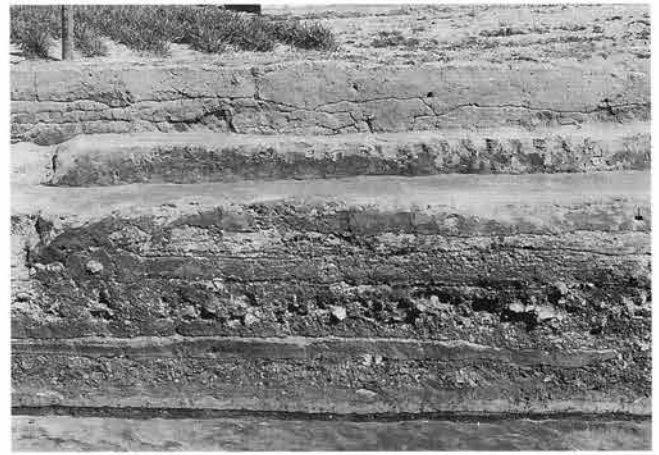
4 64・65号溝内礫出土状況（西から）



5 東区中央泥流層上面全景（南東から）



1 西区全景（南東から）



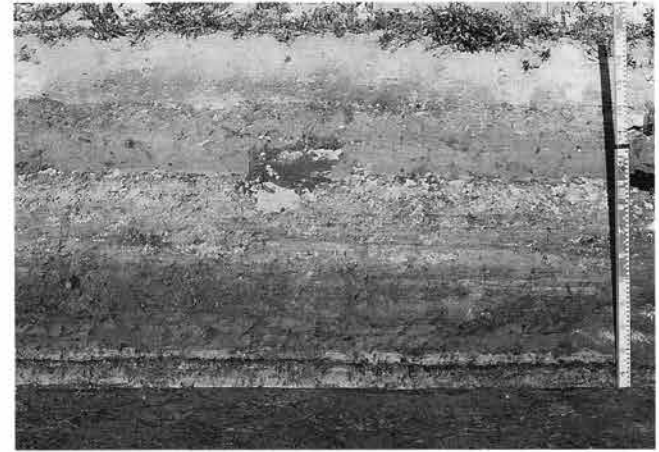
2 西区断面（南西から）



3 東区西全景（南東から）



4 東区東全景（北西から）

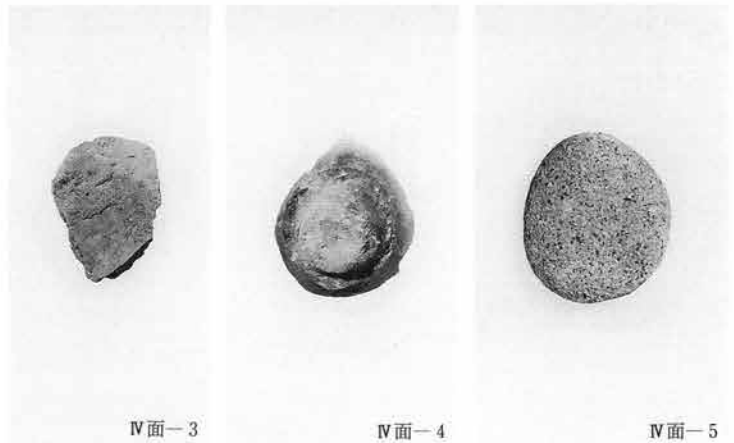


5 東区東断面（南西から）



Ⅳ面-1

Ⅳ面-2



Ⅳ面-3

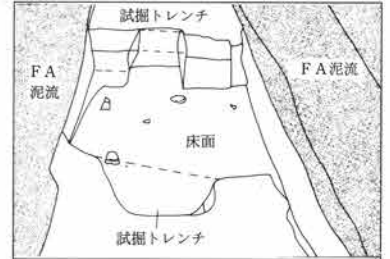
Ⅳ面-4

Ⅳ面-5

6 下段出土遺物



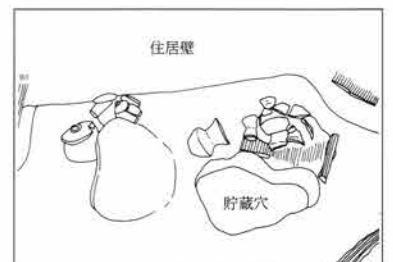
1. 全景：拡張前（北西から）
※調査区幅（11m）からの明かり掘削による検出状況。
※住居確認面は現地表より約3.5m下。
※FA泥流（堆積土）中と地下からの湧水が激しく、住居内は常時、写真の状況。



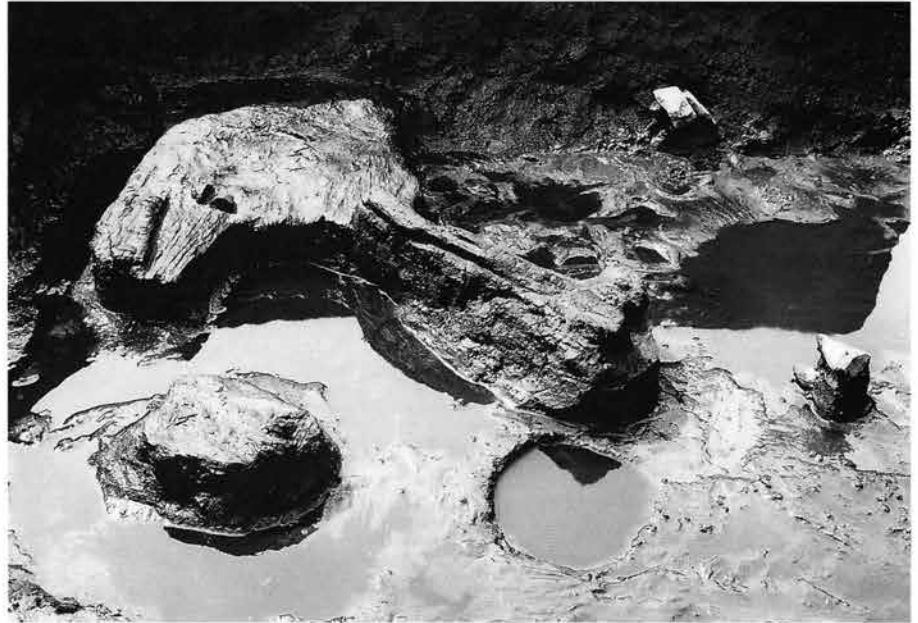
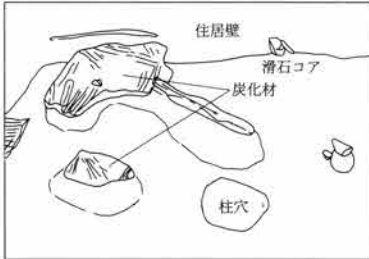
2. 全景：拡張後（北西から）
※調査区南の市道（幅4.7m）を含めての明かり掘削による検出状況。



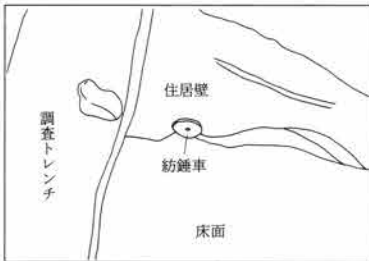
3. 土器出土状況：拡張後（北西から）
※貯蔵穴付近。
※床面確認が困難なため、床面を掘りすぎた箇所あり。



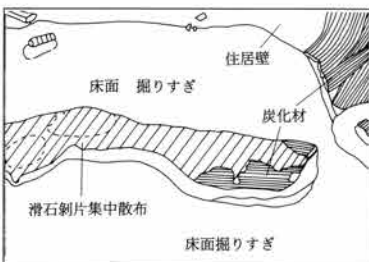
1. 炭化材・滑石出土状況
 : 拡張後(東から)
 ※東隅付近。



2. 紡錘車出土状況
 : 拡張前(南東から)
 ※北西壁際、床面より出土。



3. 滑石チップ集中散布地点
 : 拡張後(南西から)
 ※住居中央からやや東寄りにあり。
 ※湧水が激しく、周囲は床面を掘り抜いている。





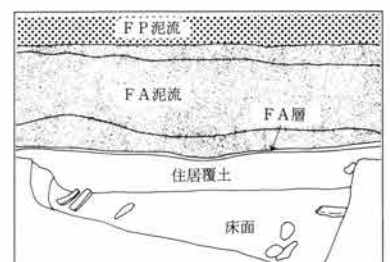
1. 全景：拡張前（北西から）
 ※調査区幅（11m）からの明かり掘削による検出状況。
 ※住居確認面は現地表より約3.5m下。
 ※FA泥流（堆積土）中と地下からの湧水が激しく、住居内は常時、写真の状態。



2. 全景：拡張後（北西から）
 ※調査区南の市道（幅4.7m）を含めての明かり掘削による検出状況。



3. 覆土断面：拡張前（北東から）
 ※FA降下時は黑色土面（旧地表面）は僅かな凹地を呈するのみ。すでに住居は埋没していたことを示す。

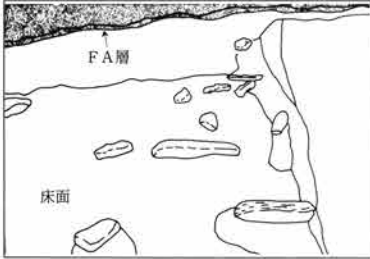


V面：2号竖穴住居 PL24

1. 炭化材・石出土状況

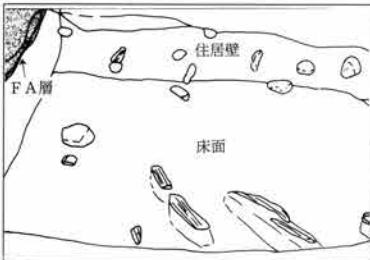
：拡張後（北東から）

※北西壁付近



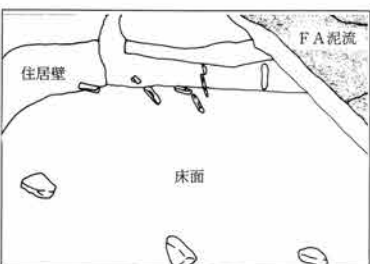
2. 炭化材・石出土状況

：拡張後（南東から）



3. 炭化材・石出土状況

：拡張後（北西から）





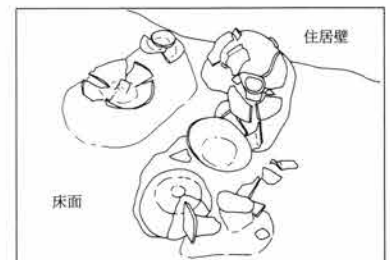
1. 全景：拡張前（南東から）
※調査区幅（11m）からの明かり掘削による検出状況。
※住居確認面は現地表より約3.5m下。
※FA泥流（堆積土）中と地下からの湧水が激しく、住居内は常時、写真の状態。
※手前の細い溝は調査時の排水溝。



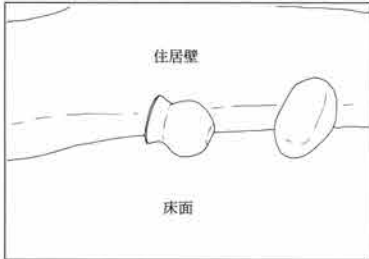
2. 全景：拡張後（南東から）
※調査区南の市道（幅4.7m）を含めての明かり掘削による検出状況。
※写真右端は住居壁を掘りすぎたため埋め戻したもの。



3. 土器出土状況：拡張前（南西から）
※住居北壁寄り。
※高坏5・甕1が集中して出土。



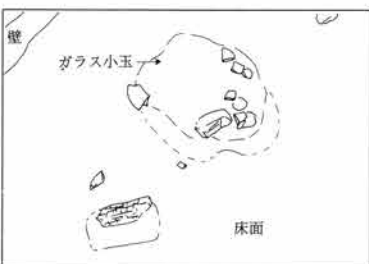
1. 土器出土状況：拡張前（南東から）
 ※土師器甕が北西壁際より出土。



2. 炭化材・滑石出土状況
 : 拡張後（南東から）
 ※南東隅。滑石は床面より出土。
 ※床面は、検出困難のため一部掘り抜いている。



3. 炭化材・土器・滑石・ガラス
 出土状況：拡張後（南東から）
 ※土器の大半は炭化材より上から出土。
 ※滑石は床面から出土。





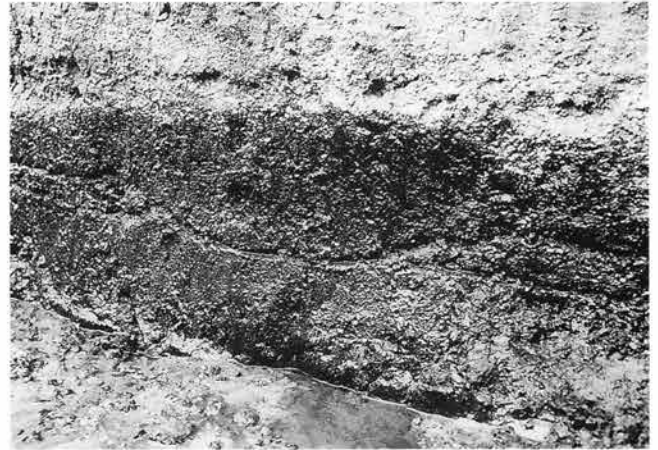
1 東区西断面（北東から）



2 東区西断面近接（南西から）



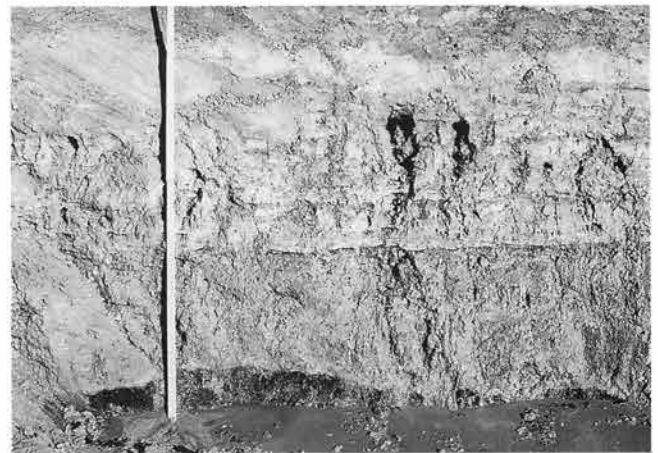
3 東区中央No.1 調査風景（南から）



4 東区中央No.1 溝状断面（南から）



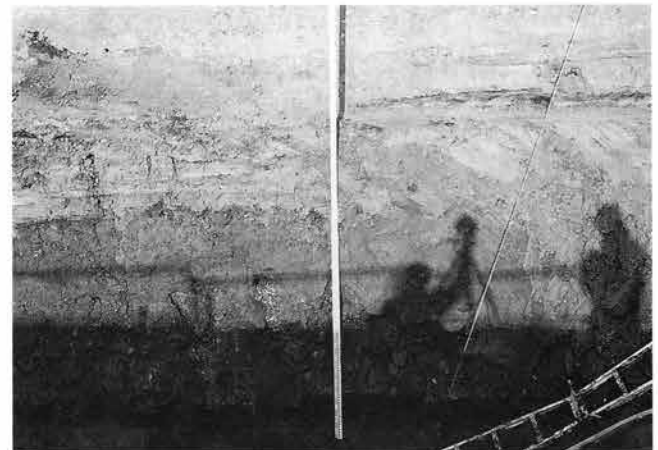
5 東区中央No.2 調査風景（南西から）



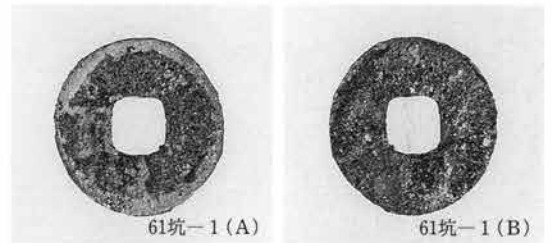
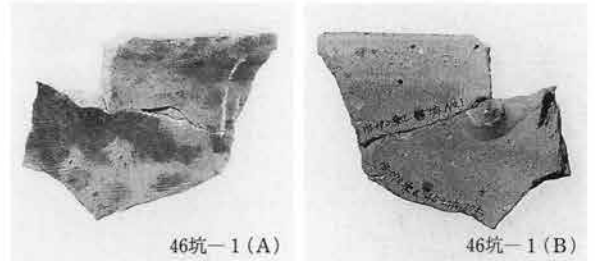
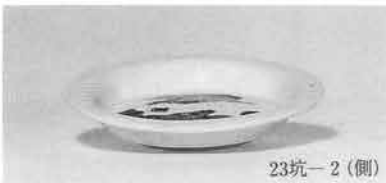
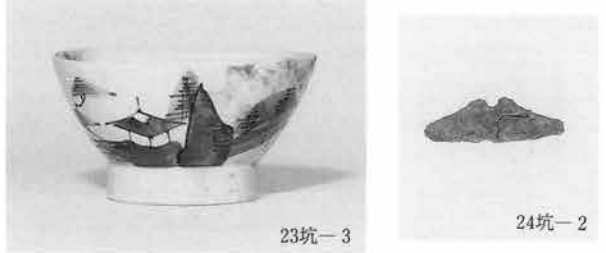
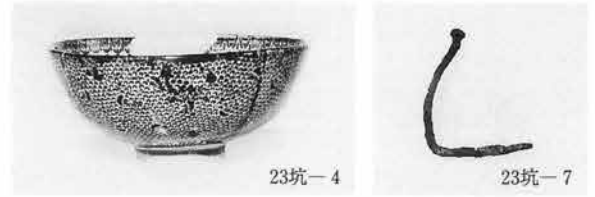
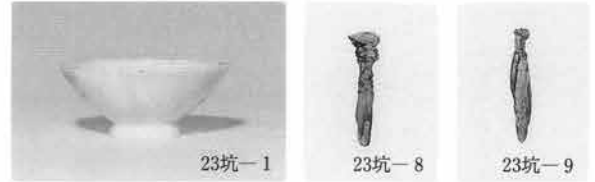
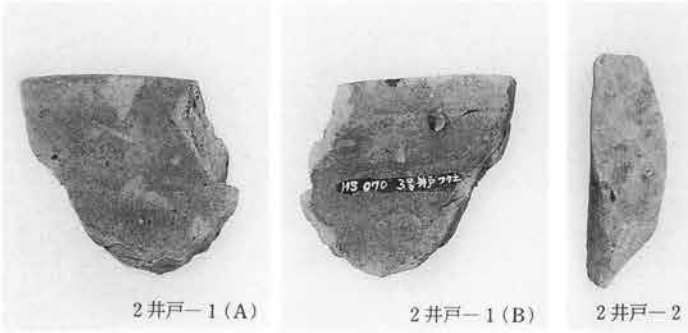
6 東区中央No.2 断面・旧地表凹凸（南西から）



7 東区東調査風景（南東から）



8 東区東断面（南西から）





7溝-1



7溝-5 (A)



7溝-5 (B)



7溝-6



25溝-1



26溝-2



7溝-3



7溝-2



7溝-4



26溝-1



31溝-1



51溝-1



51溝-2



51溝-3



59溝-1



52溝-2 (A)



52溝-2 (B)



52溝-1



60溝-6



52溝-3 (上)



52溝-3 (中)



60溝-5



60溝-10



52溝-3 (下)



60溝-2



60溝-8



60溝-4



60溝-3



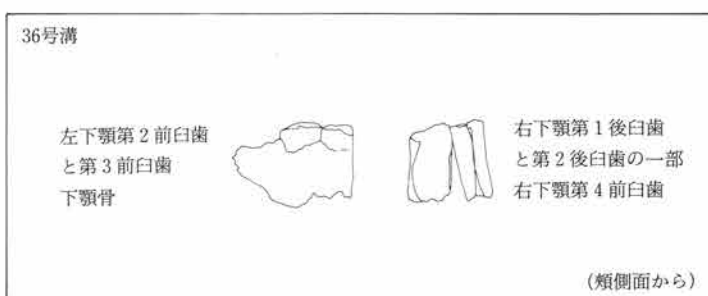
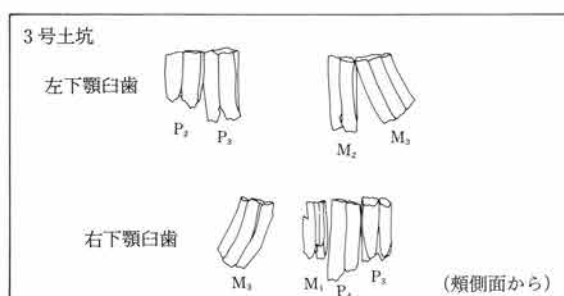
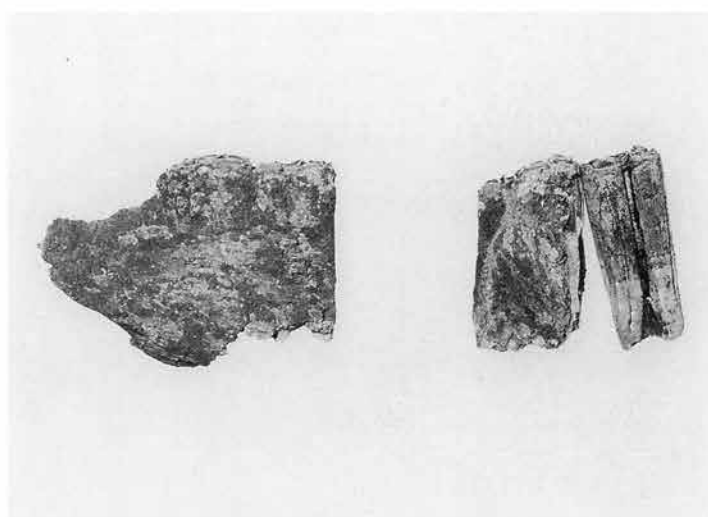
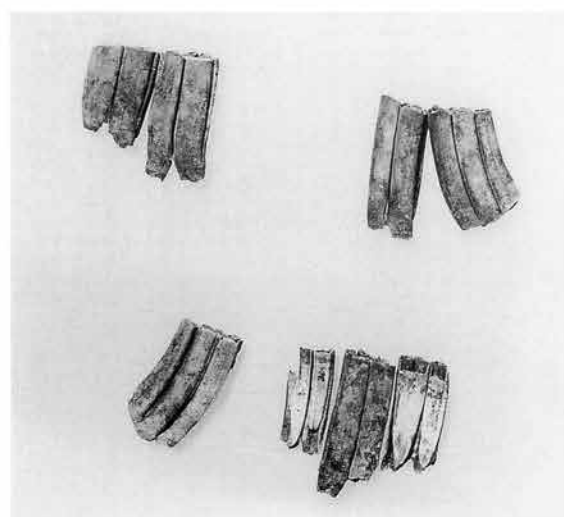
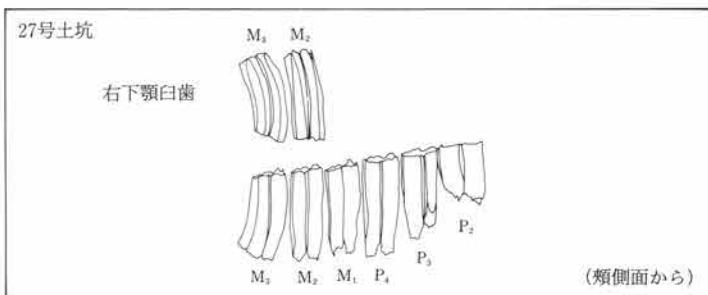
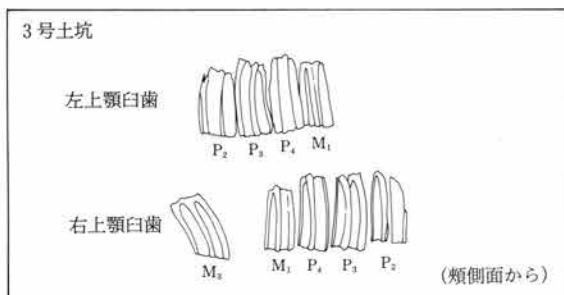
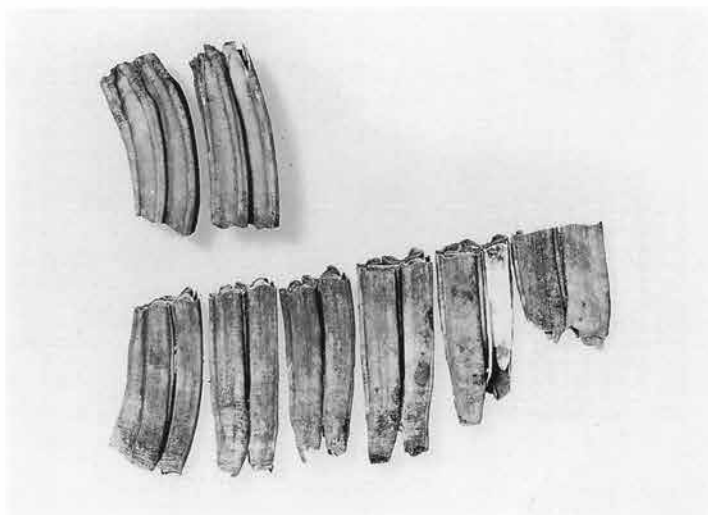
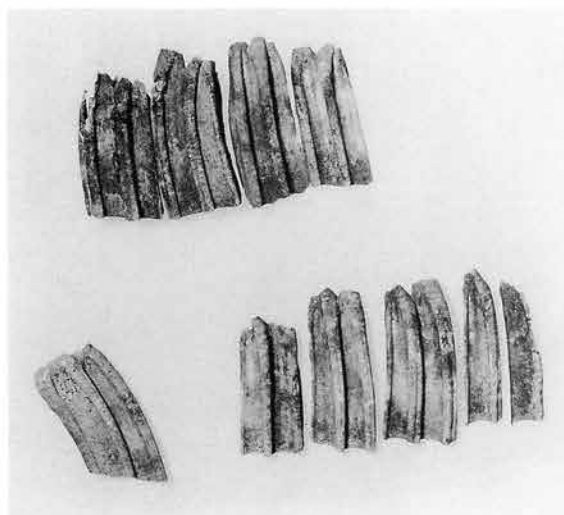
60溝-7

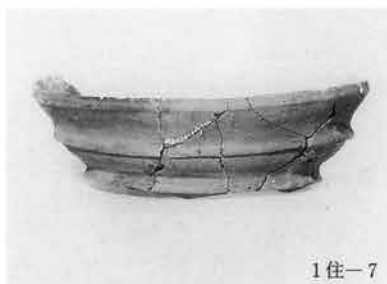


60溝-1



63溝-1







1住一覆土下層一括



1住-10



1住-12



1住-11



1住-16



1住-14



1住-15



1住-13



1住-21



1住-22



1住-20

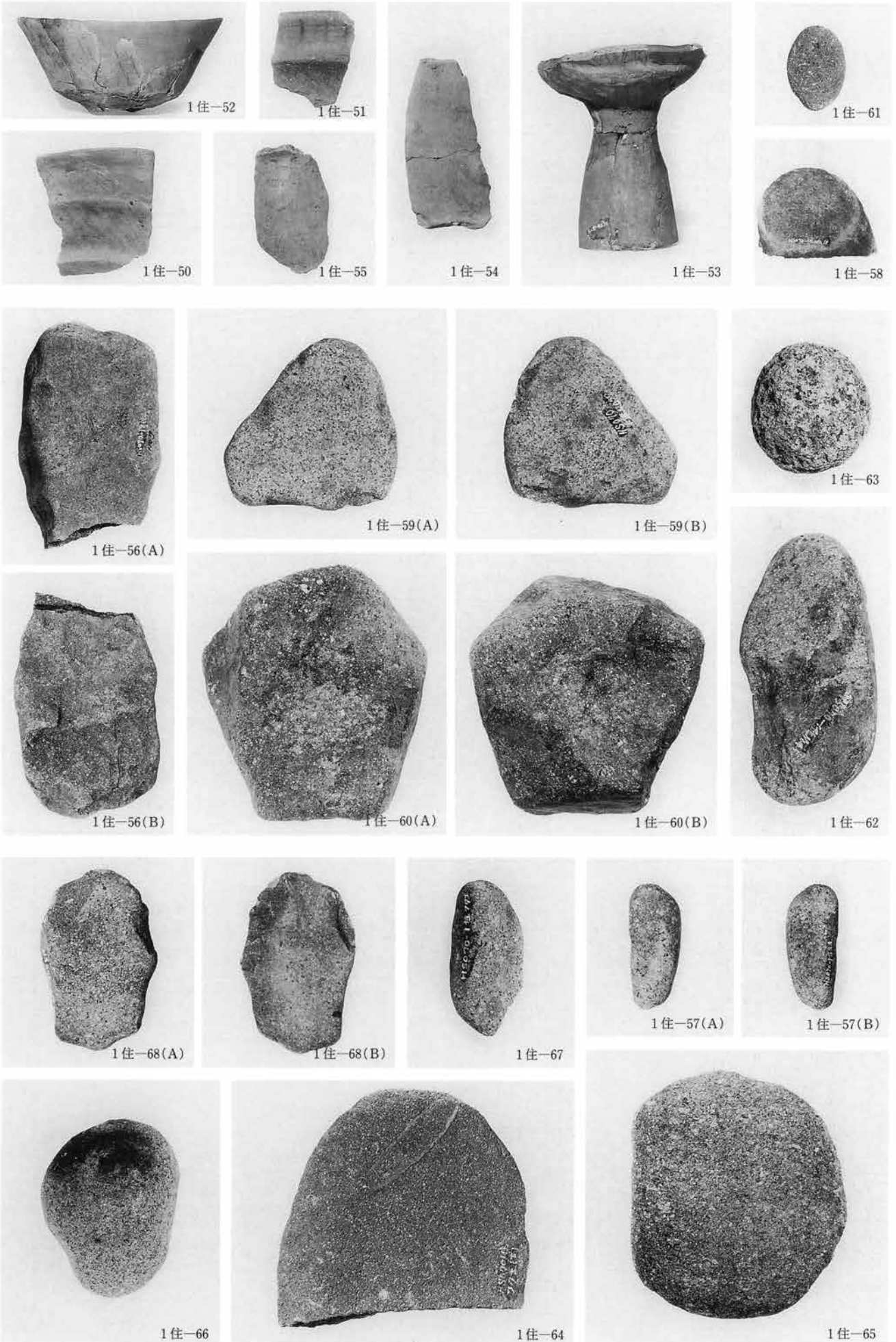


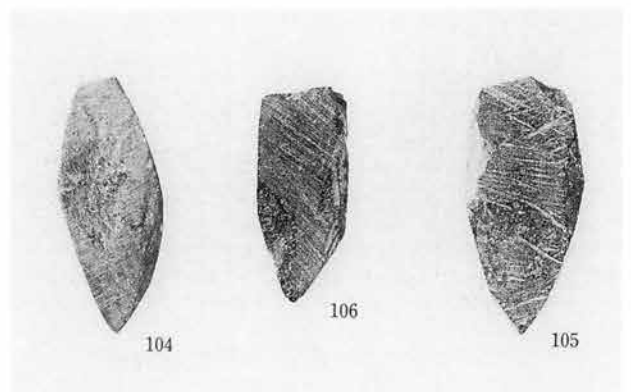
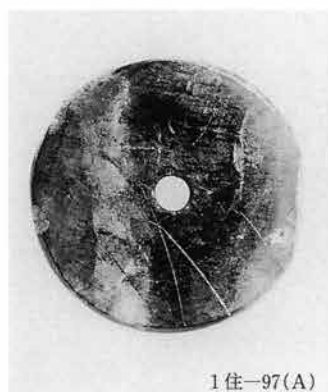
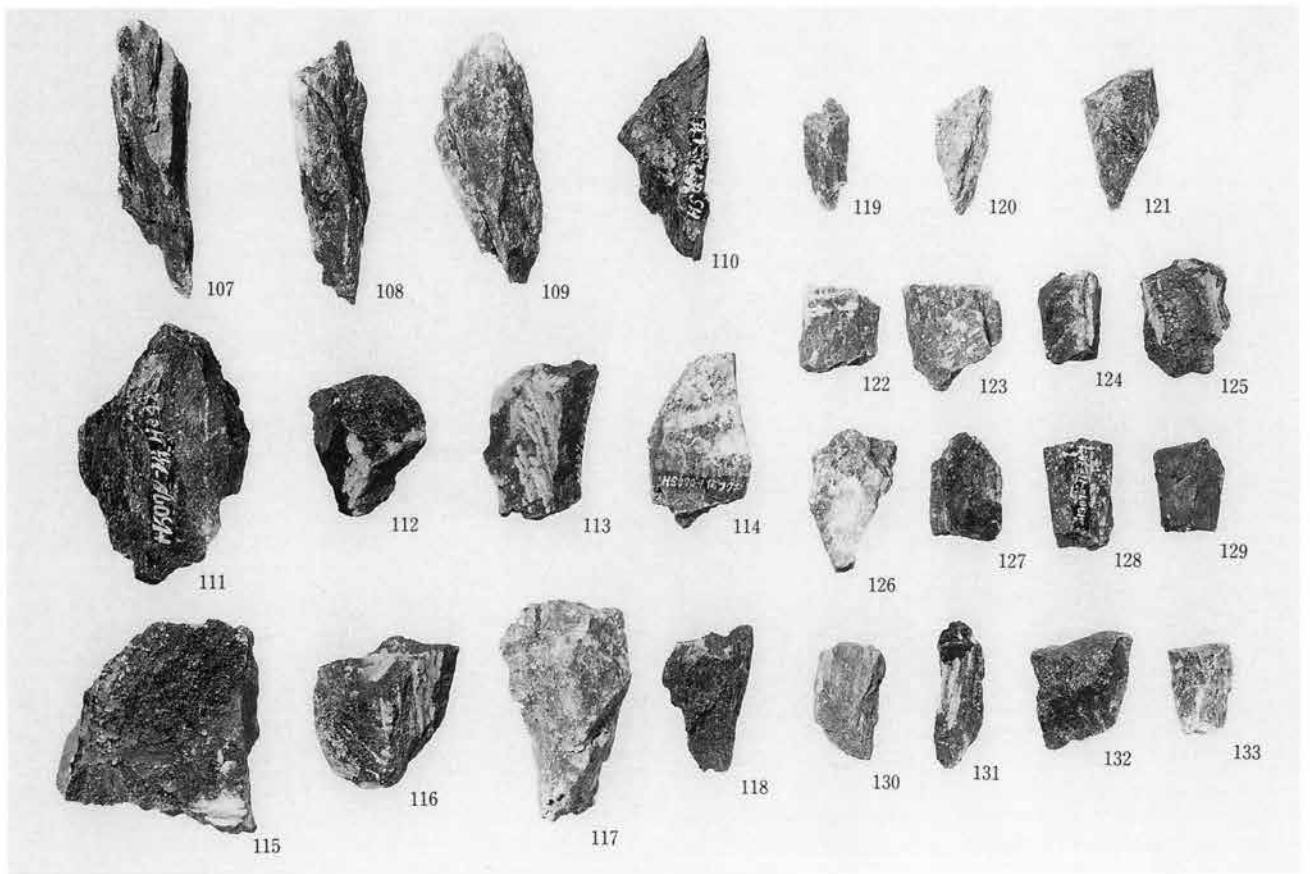
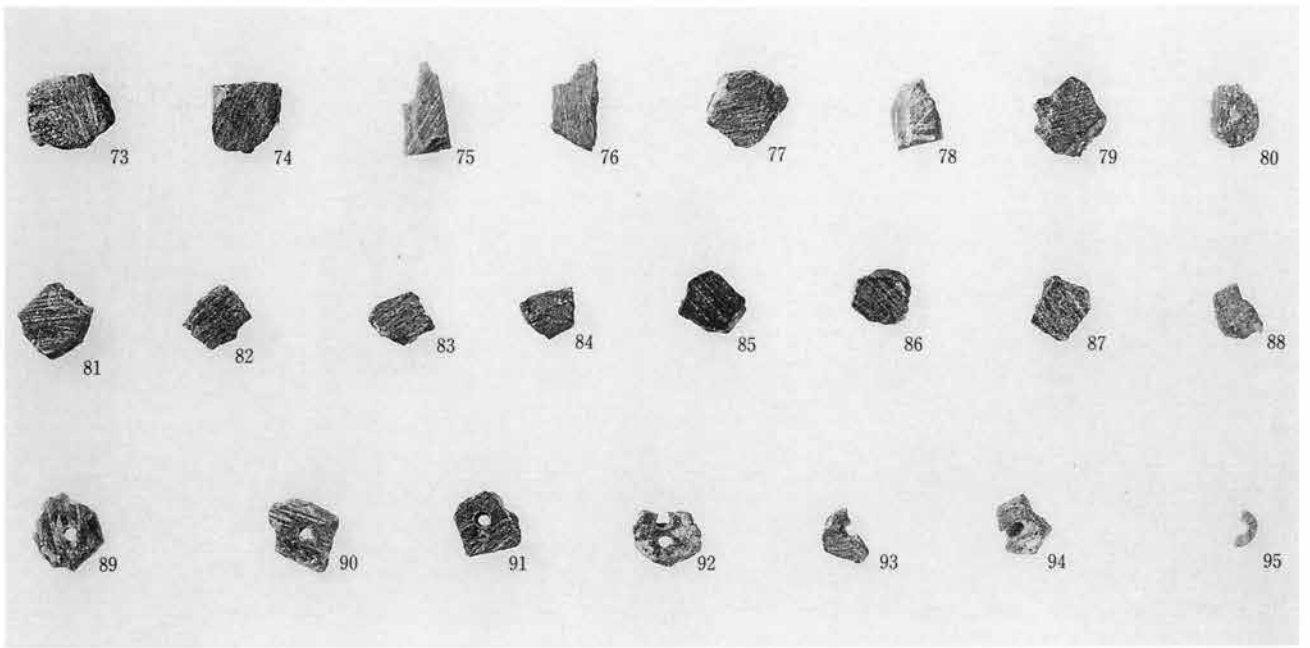
1住-19



1住-17









1住-69(A)



1住-69(B)



1住-70(A)



1住-70(B)



1住-71



1住-72



98



99



100



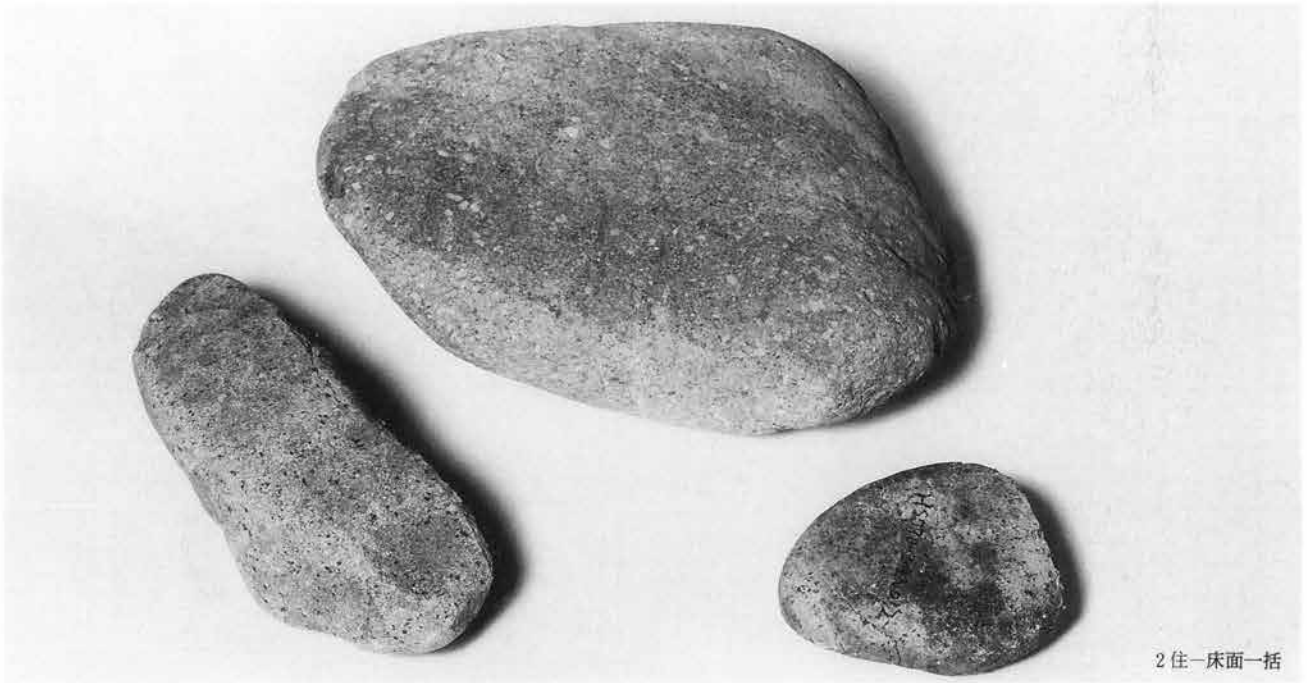
101



102



103



2住-床面一括



2住-16



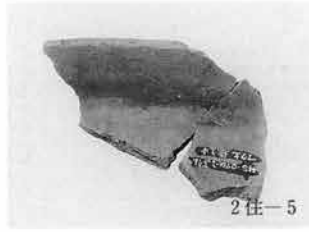
2住-20



2住-17



2住-1



2住-5



2住-4



2住-12



2住-3



2住-15



2住-14



2住-2



2住-13



2住-29



2住-6



2住-7



2住-10



2住-8



2住-11



2住-21



2住-25



2住-19(A)



2住-23(A)



2住-23(B)



2住-19(C)



2住-22(A)



2住-22(B)



2住-18(A)



2住-18(B)



2住-26(A)



2住-26(B)



2住-24



2住-27



3住-床面一括



3住-1



3住-2



3住-4



3住-3



3住-5



3住-8



3住-6



3住-10



3住-9



3住-7



3住-11



3住-12



3住-13



3住-15



3住-16



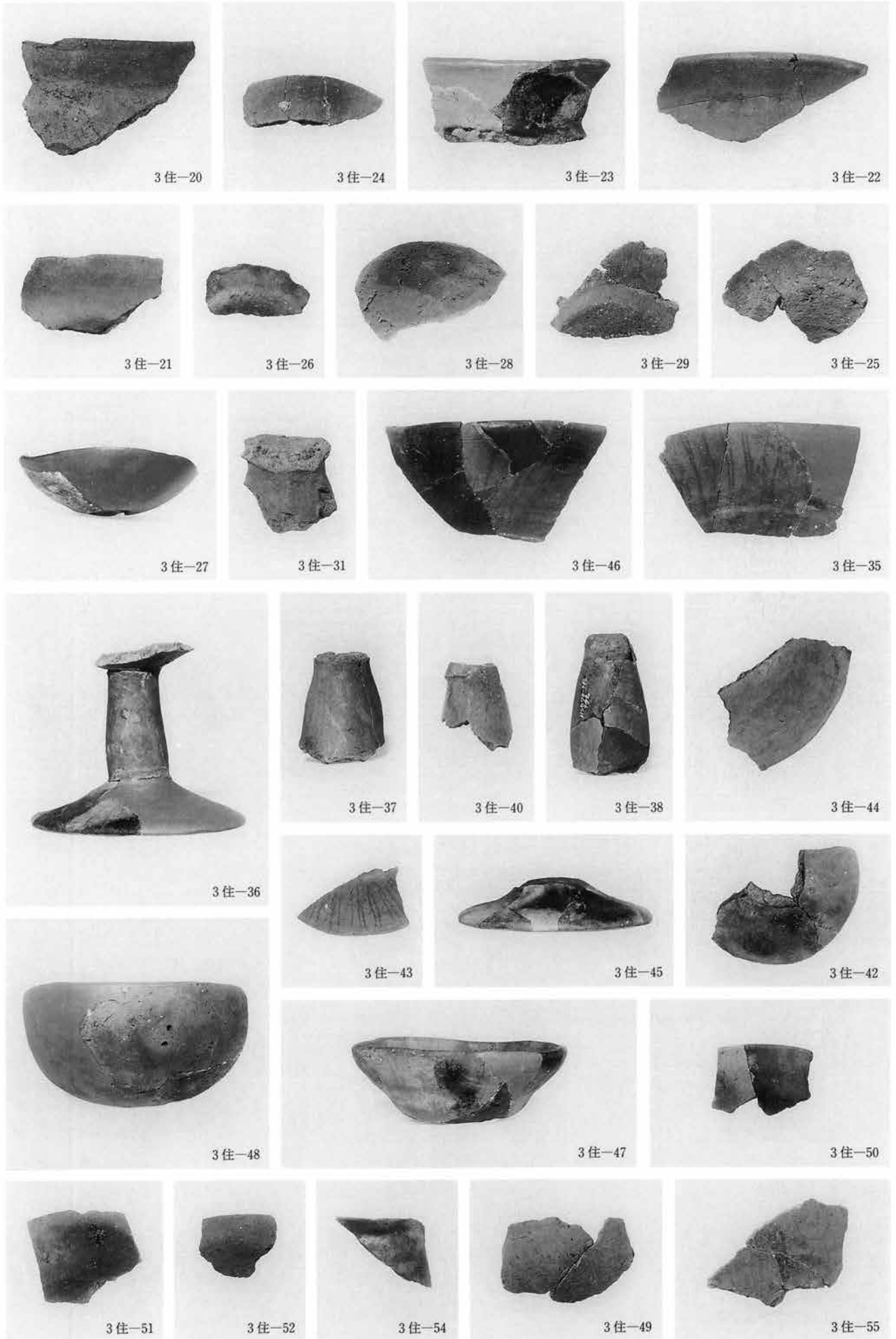
3住-17

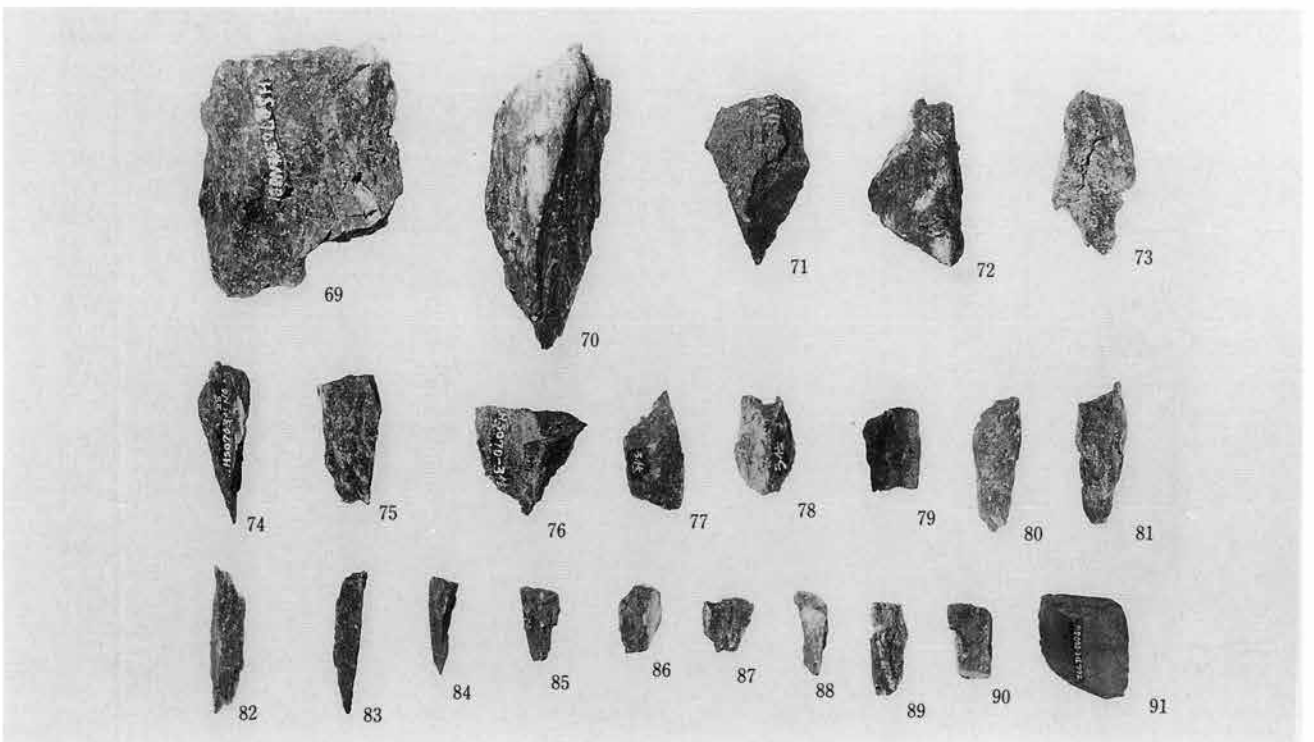
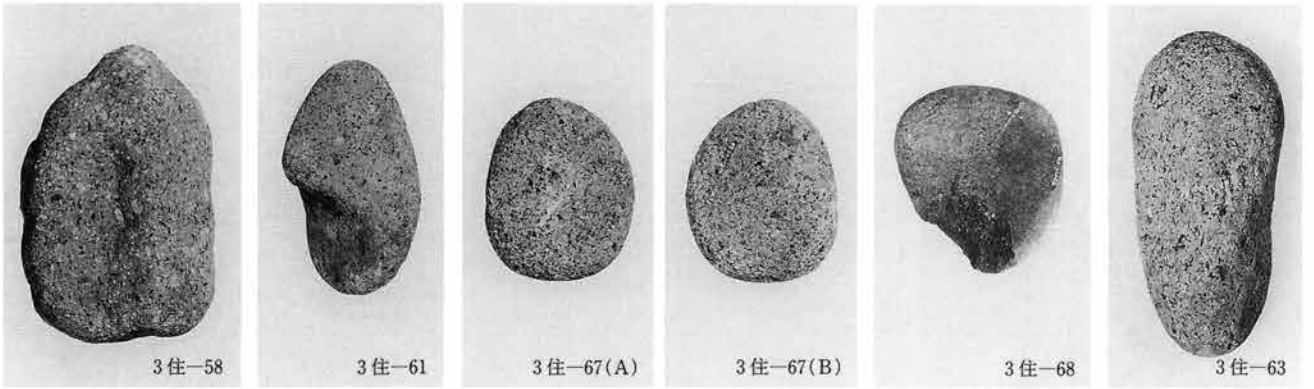
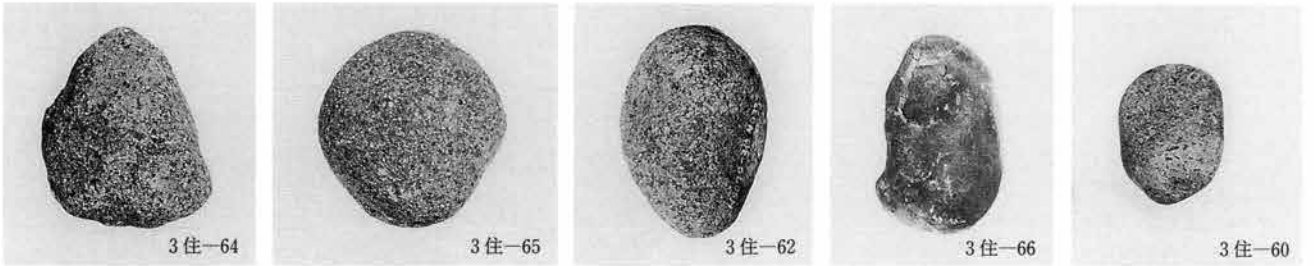
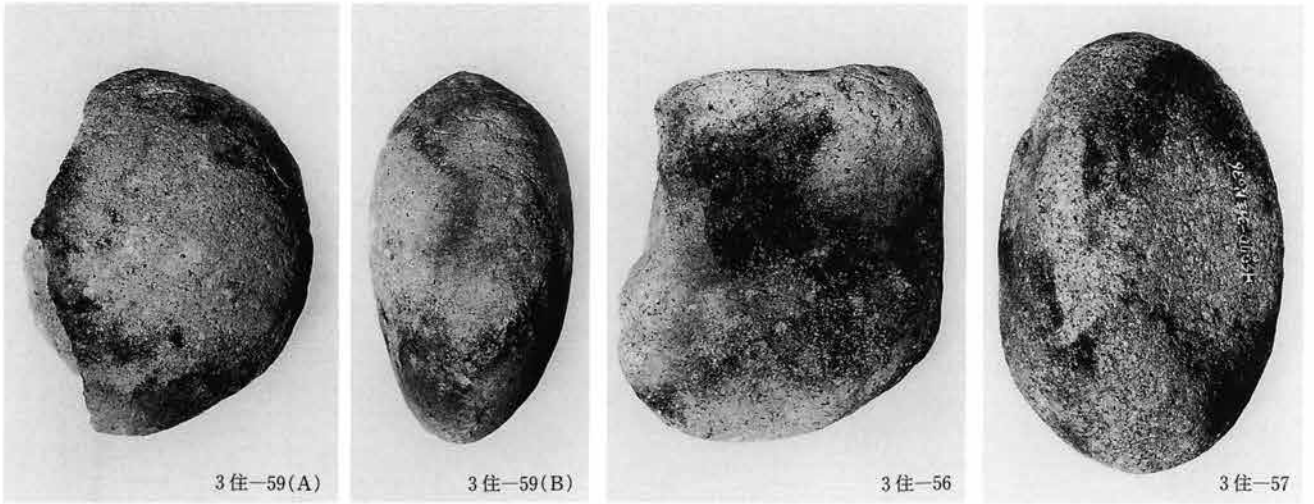


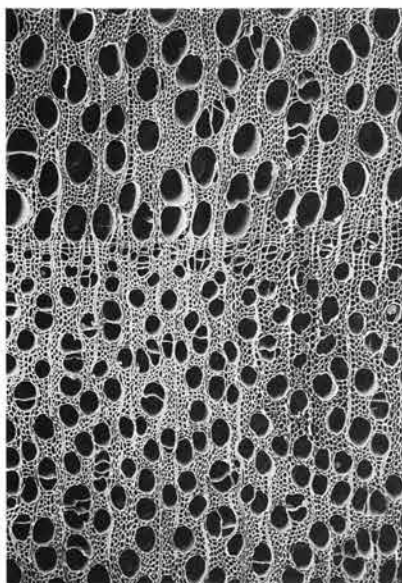
3住-18



3住-19







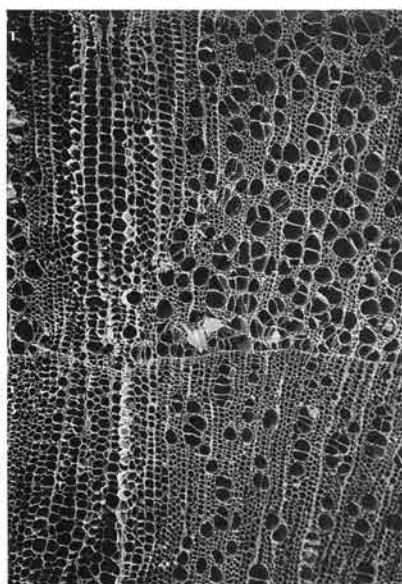
1 a. ヤナギ属 (横断面) 1号-9 bar: 0.5mm



1 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



1 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



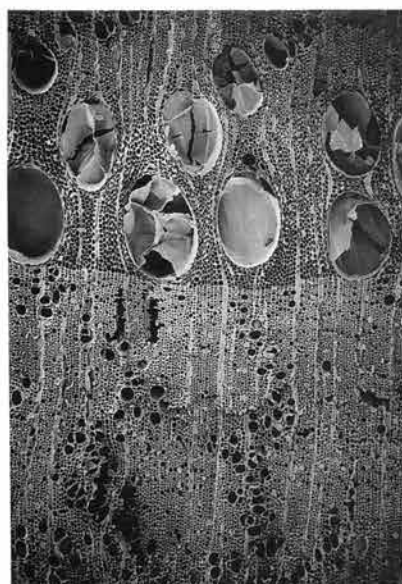
2 a. ハンノキ属 (横断面) 1号-13 bar: 0.5mm



2 b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



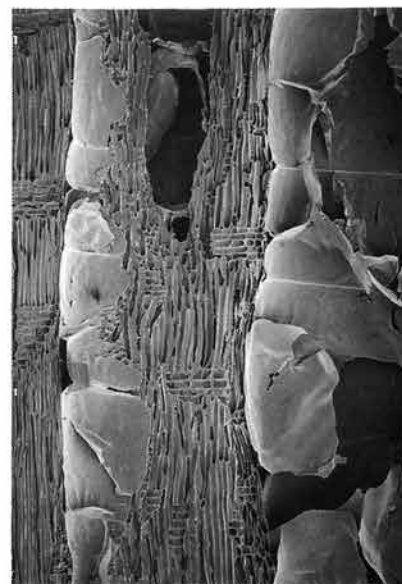
2 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



3 a. クリ (横断面) 2号-26 bar: 1mm



3 b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



3 c. 同 (放射断面) bar: 0.5mm



4 a, クモギ節 (横断面) 3号-1 bar: 0.5mm



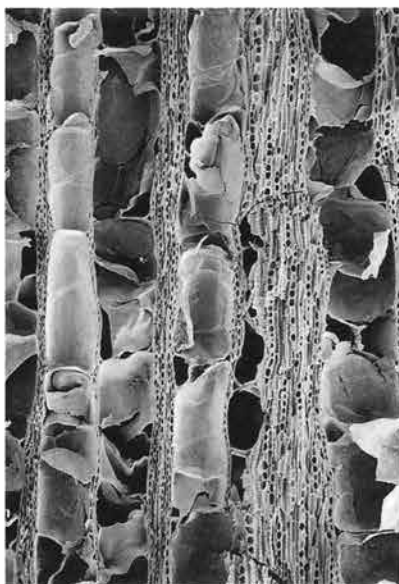
4 b, 同 (接線断面) bar: 0.5mm



4 c, 同 (放射断面) bar: 0.1mm



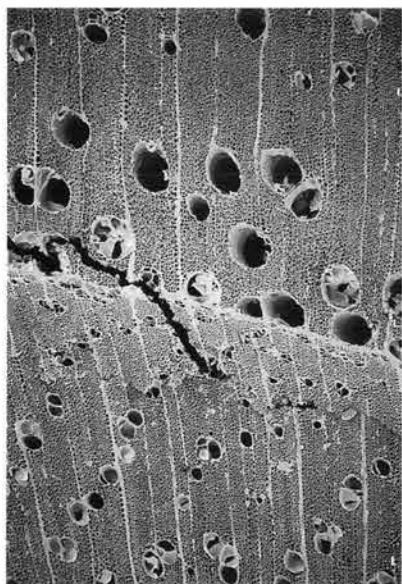
5 a, コナラ節 (横断面) 3号-4 bar: 0.5mm



5 b, 同 (接線断面) bar: 0.5mm



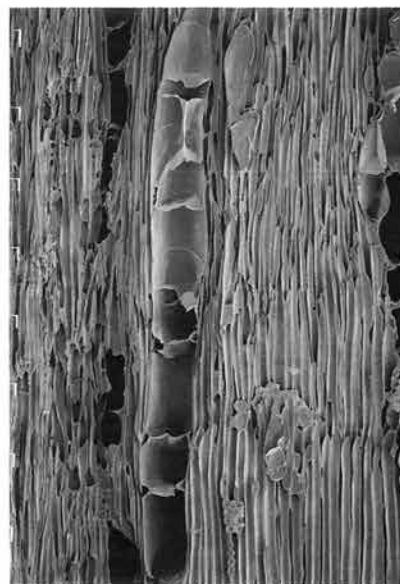
5 c, 同 (放射断面) bar: 0.5mm



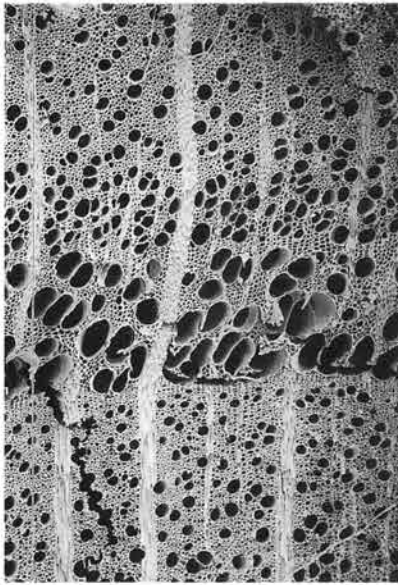
6 a, ヤマグチ (横断面) 2号-17 bar: 1mm



6 b, 同 (接線断面) bar: 0.1mm



6 c, 同 (放射断面) bar: 0.1mm



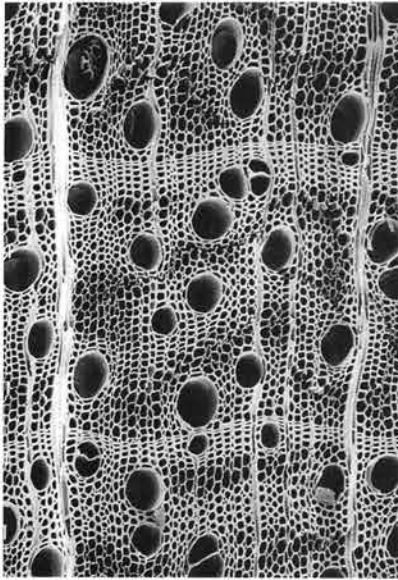
7 a. モモ (横断面) 1号-1 bar: 0.5mm



7 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



7 c. 同 (放射断面) bar: 0.05mm



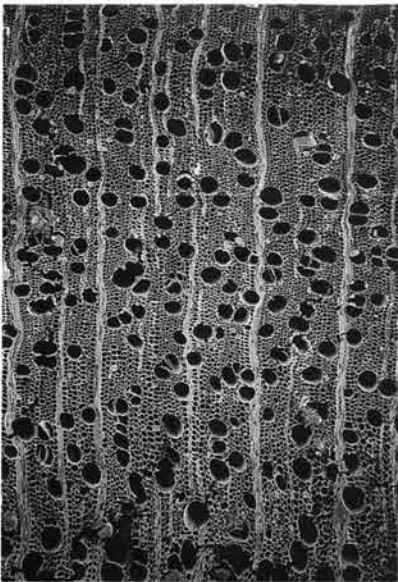
8 a. カエデ属 (横断面) 3号-13 bar: 0.1mm



8 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



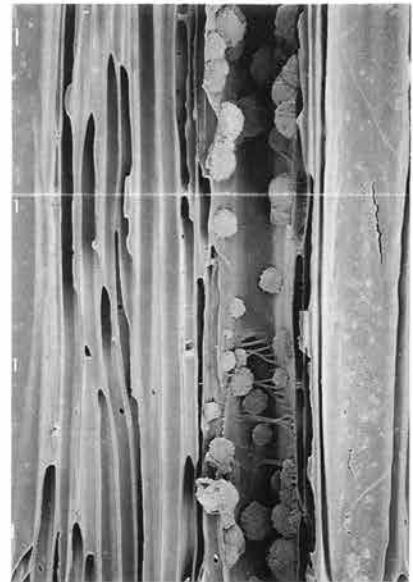
8 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



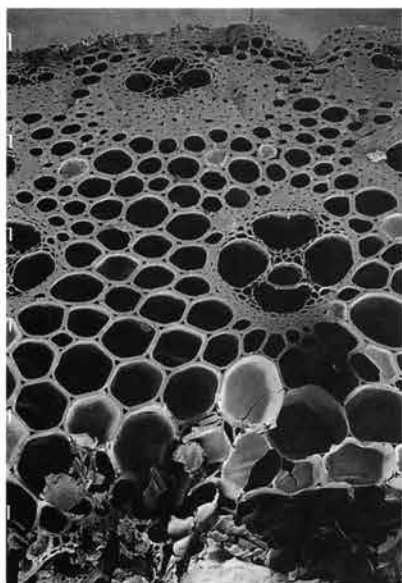
9 a. エゴノキ属 (横断面) 1号-17 bar: 1mm



9 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



9 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



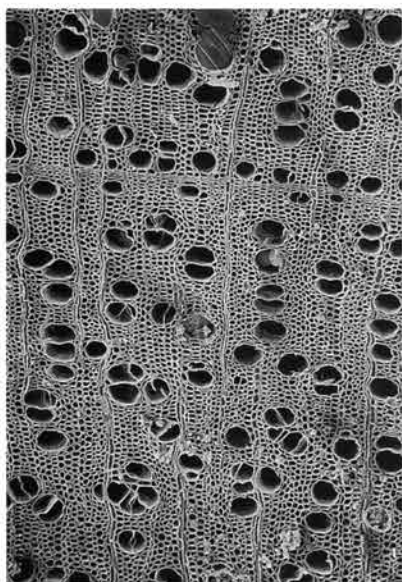
10 a. ササ類 (横断面) 1号-22 bar: 0.1mm



10 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



10 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



11 a. ミズキ (横断面) bar: 0.5mm



11 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



11 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第183集

行力春名社遺跡 北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

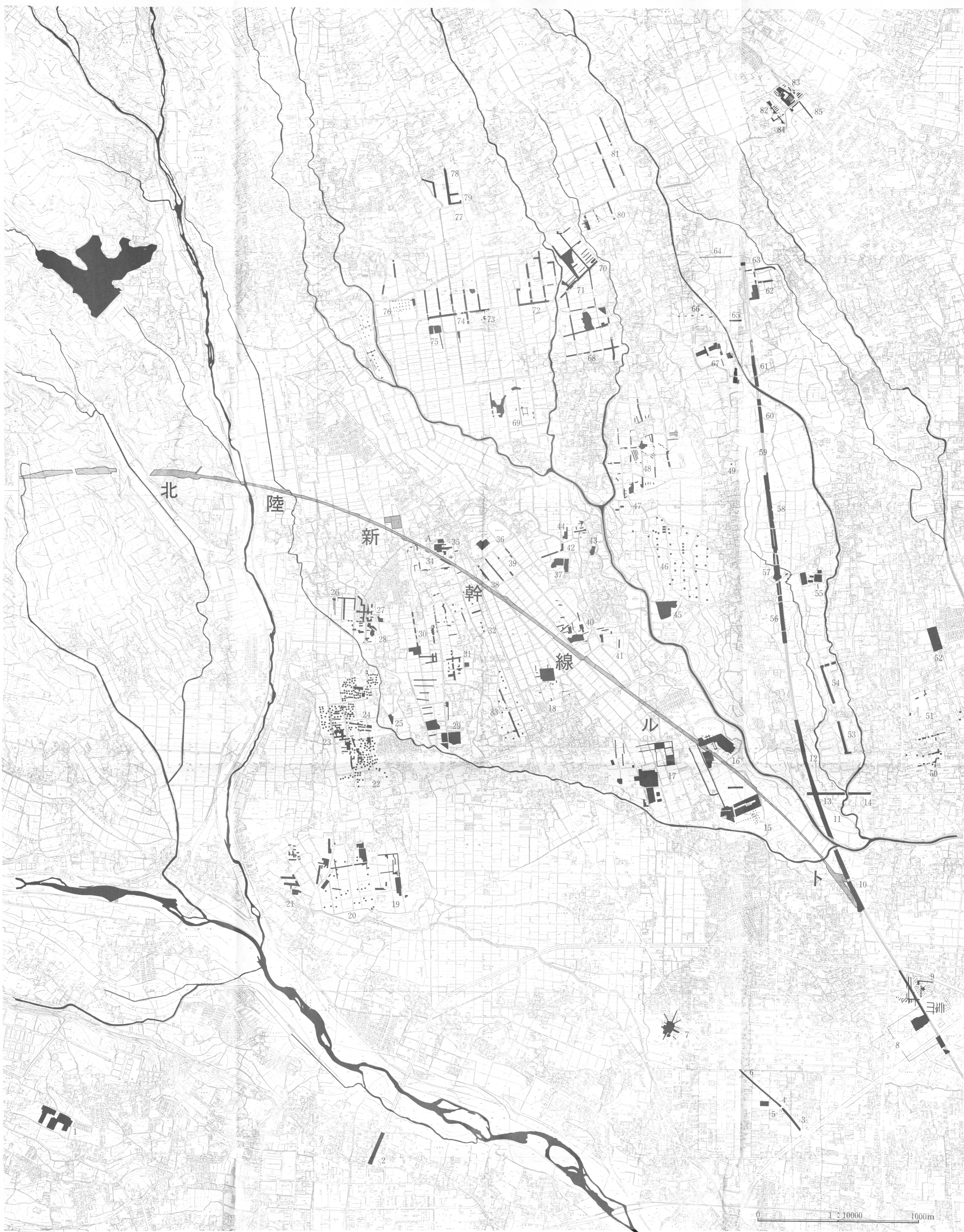
平成7年3月22日 印刷

平成7年3月27日 発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



- | | | | |
|--|--|---|---|
| <p>A 行力春名社遺跡
 1 八幡中原遺跡：「八幡中原遺跡」高崎市教委1982
 2 引間遺跡：「引間遺跡」高崎市教委1979
 3 並榎北遺跡：「並榎北遺跡」高崎市教委1988
 4 上並榎下松遺跡
 5 上並榎下松II遺跡：「上並榎下松II遺跡ほか発掘調査概要」高崎市教委1993
 6 上並榎御料所遺跡：「上並榎御料所遺跡」高崎市教委1993
 7 氣繩遺跡群：「氣繩遺跡群」高崎市教委1985
 8 下小島遺跡：「下小島遺跡」群群埋文1991
 9 大八木水田遺跡：「大八木水田遺跡」高崎市教委1979
 10 融通寺遺跡：「融通寺遺跡」群群埋文1991
 11 熊野堂I遺跡：「熊野堂遺跡(1)」群群埋文1984
 12 熊野堂II遺跡：「熊野堂遺跡(2)」群群埋文1991
 13 熊野堂III遺跡：「熊野堂遺跡 第III地区・雨壺遺跡」群群埋文1984
 14 雨壺遺跡：13に同じ
 15 芦田貝戸遺跡：a「芦田貝戸遺跡」高崎市教委1979
 : b「芦田貝戸遺跡II」高崎市教委1980
 16 御布呂遺跡：a「矢島遺跡・御布呂遺跡」高崎市教委1979
 : b「御布呂遺跡」高崎市教委1980
 17 寺ノ内遺跡：「寺ノ内遺跡」高崎市教委1979
 18 矢島遺跡：16bに同じ
 19 菊地遺跡群I：「菊地遺跡群(1)」高崎市教委1981
 20 菊地遺跡群II：「菊地遺跡群(II)」高崎市教委1982
 21 当貝戸・裏原遺跡：「菊地遺跡群(III)」高崎市教委1983
 22 大明神遺跡：a「菊地遺跡群(IV)上野前(1)・大明神(1)遺跡」高崎市教委1984</p> | <p> : b「菊地遺跡群(V)上野前(II)・大明神(II)・五反田(1)遺跡」高崎市教委1985
 23 上野前遺跡：22a・bに同じ
 24 五反田遺跡：a「菊地遺跡群(VI)石神・五反田(II)遺跡」高崎市教委1986
 : 22bに同じ
 25 石神遺跡：24aに同じ
 26 下芝・原遺跡：「下芝・原遺跡」箕郷町教委1983
 27 清水遺跡：a「長野北部遺跡群 中屋敷西(1)・殿田・清水(1)・舞台(1)遺跡」高崎市教委1983
 : b「長野北部遺跡群 舞台(II)・清水(II)遺跡」高崎市教委1984
 : c「長野北部遺跡群 中屋敷(1)・舞台(III)遺跡」高崎市教委1985
 : 27a・bに同じ
 28 舞台遺跡：a「長野北部遺跡群 北新波の磐石一古城(II)」高崎市教委1985
 : b「長野北部遺跡群 北新波の磐石一古城(III)」高崎市教委1986
 : c「長野北部遺跡群 北新波の磐石一古城(IV)」高崎市教委1986
 29 北新波遺跡：a「北新波遺跡」高崎市教委1982
 : b「北新波遺跡」北新波の磐石一古城(II)高崎市教委1985
 : c「北新波遺跡」北新波の磐石一古城(III)高崎市教委1986
 30 殿田遺跡：27aに同じ
 31 中屋敷西遺跡：a「長野北部遺跡群 江原(1)・中屋敷西(II)・上屋敷(1)遺跡」高崎市教委1984
 : 27aに同じ
 32 中屋敷東遺跡：a「長野北部遺跡群 六反田・中屋敷(II)遺跡」高崎市教委1986
 : 28aに同じ
 33 六反田遺跡：32aに同じ
 34 一丁田・株名社西遺跡：「長野北部遺跡群 一丁田・株名社西遺跡」高崎市教委1988
 35 株名社遺跡：「行力遺跡群 株名社遺跡」高崎市教委1990
 36 浜川北遺跡(西)：「浜川北遺跡」高崎市教委1989</p> | <p>37 浜川北遺跡(東)：36に同じ
 38 長町遺跡：「道場遺跡群」高崎市教委1989
 39 踏分遺跡：38に同じ
 40 高田遺跡：38に同じ
 41 船遺跡：38に同じ
 42 谷津遺跡：a「道場遺跡群(II)谷津・道場遺跡」高崎市教委1988
 : 38に同じ
 43 道場遺跡：38・42aに同じ
 44 保渡田掛遺跡：「保渡田荒神前遺跡・掛遺跡」群馬町教委1988
 45 同道遺跡：「同道遺跡」群群埋文1983
 46 井出地区遺跡群(A区)：「井出地区遺跡群」群馬町教委1992
 47 二子山古墳：「二子山古墳」群馬町教委1985
 48 保渡田VII遺跡：a「保渡田遺跡群VII(1)」群馬町教委1989
 : b「保渡田VII遺跡」群馬町教委1990
 49 上井出遺跡：「群馬考古学手帳 vol.3」群馬土器製学会1992
 50 大八木箱田池遺跡：a「大八木箱田池遺跡」高崎市教委1983
 : b「大八木箱田池遺跡II」高崎市教委1984
 51 大八木遺跡：「大八木遺跡」高崎市教委1981
 52 中泉遺跡：「中泉遺跡」群馬町教委1983
 53 西浦南遺跡：「西浦南遺跡」群馬町教委1988
 54 西浦北遺跡：「西浦北遺跡」群馬町教委1989
 55 中林遺跡：「中林遺跡」群馬町教委1983
 56 井出村東遺跡：「井出村東遺跡」群馬町井出村東遺跡調査会1983
 57 三ツ寺I遺跡：「三ツ寺I遺跡」群群埋文1988
 58 三ツ寺II遺跡：「三ツ寺II遺跡」群群埋文1991
 59 井出地区遺跡群(B区)：46に同じ</p> | <p>60 三ツ寺II遺跡：「三ツ寺II遺跡 保渡田遺跡 中里天神塚古墳」群群埋文1985
 61 保渡田遺跡：60に同じ
 62 毘沙門遺跡：「中里遺跡群 西芝・中道・押出・薬師遺跡 毘沙門遺跡(1)」群馬町教委1991
 63 中里天神塚古墳：60に同じ
 64 中道遺跡：62に同じ
 65 薬師遺跡：62に同じ
 66 押出遺跡：62に同じ
 67 保渡田東遺跡：「保渡田東遺跡」群馬町教委1986
 68 保渡田荒神前遺跡：44に同じ
 69 保渡田III遺跡：「保渡田III遺跡」群馬町教委1983
 70 海行B遺跡：「海行A・B遺跡」箕郷町教委1988
 71 海行A遺跡：70に同じ
 72 善龍寺前遺跡：「生原・善龍寺前遺跡」箕郷町教委1986
 73 飯盛遺跡：70・71に同じ
 74 佐藤遺跡：70・71に同じ
 75 堀ノ内遺跡：70・71に同じ
 76 薬師遺跡：70・71に同じ
 77 諏訪遺跡：70・71に同じ
 78 八反田遺跡：70・71に同じ
 79 中新田遺跡：70・71に同じ
 80 西芝遺跡：62に同じ
 81 保渡田II遺跡：「保渡田II遺跡」群馬町教委1982
 82 寺屋敷I遺跡：「寺屋敷I・蓋・鶴巻遺跡」群馬町教委1991
 83 寺屋敷II遺跡：「寺屋敷II遺跡」群馬町教委1991
 84 蓋遺跡：83に同じ
 85 鶴巻遺跡：83に同じ</p> |
|--|--|---|---|

付図1 行力春名社遺跡周辺遺跡調査トレンチ位置図

